

上福島中町遺跡

一級河川利根川広域一般河川改修(局改)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

群馬県土木部
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

上福島中町遺跡正誤表	
口絵4 下段写真	
誤	正
VI区3号建物跡	VI区6号建物跡

上福島中町遺跡

一級河川利根川広域一般河川改修(局改)事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

群 馬 県 土 木 部
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



II・VI区 1面全景



II区 1号建物跡 出土陶磁器



II区 4号建物跡 出土陶磁器



II区 6号建物跡 出土陶磁器



VI区 1号建物跡 出土陶磁器



VI区 2号建物跡 出土陶磁器



VI区 3号建物跡 出土陶磁器

序

上福島中町遺跡は佐波郡玉村町大字上福島に所在し、平成13年7月から平成14年11月にかけて、一級河川利根川広域一般河川改修（局改）事業に伴い発掘調査された遺跡です。

発掘調査は群馬県土木部からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施し、平成14年4月から平成15年3月にかけて整理事業を実施しました。今回の調査により縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されましたが、このうち近世面の調査では天明3年（1783）に浅間山の大噴火に伴って発生した泥流によって埋没した当時の家・屋敷がほぼ当時の様子そのままに発見されました。

発見された8軒の家からは、多くの陶磁器類や石製品をはじめ鉄製品・銅製品などが出土し、江戸時代後期の暮らしを知る上で重要な発見となりました。また、家の廻りに作られた便所や井戸さらには道や畑などは、村落の景観を窺い知る貴重な資料として注目されます。

本報告書が考古学の研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様、さらには学校教育における郷土学習にも、大いに役立つものと確信しております。

最後に、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県土木部河川課、同伊勢崎土木事務所、玉村町教育委員会、同町都市施設課、および地元関係者の皆様には発掘調査から報告書刊行まで終始御協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成15年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本報告書は一級河川利根川広域一般河川改修（局改）事業に伴い事前調査された上福島中町遺跡の発掘調査報告である。
2. 上福島中町遺跡は群馬県佐波郡玉村町大字上福島字中町992、993-2、1006、1007-3、1007-5、1014-1、1014-3、1021-1、1021-3、1021-4、1021-5、1021-7、1021-8、1021-9、1022、1028-2、1028-3、1028-4、1028-5、1028-6、1029-1、1029-2、1042-3 に所在する。
3. 事業主体 群馬県土木部（伊勢崎土木事務所）
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 平成13年度 平成13年6月1日～平成14年3月31日
平成14年度 平成14年4月1日～平成14年11月22日
6. 整理期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日
7. 発掘調査組織の体制は次の通りである。

平成13年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 赤山容造（事業担当） 吉田 豊（総務担当）
管理部長 住谷 進 調査研究部長 能登 健 調査研究第3課長 中束耕志 係長 国定 均
事務担当 大島信夫・笠原秀樹・小山建夫・須田朋子・吉田有光・森下弘美・片岡徳雄・吉田恵子
今井もと子・内山佳子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子
松下次男・吉田 茂・蘇原正義
発掘調査担当 小野和之・須田正久・井原陽一

平成14年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 吉田 豊 事業局長 神保侑史
管理部長 萩原利通 調査研究部長 巾 隆之 調査研究第1課長 中束耕志 係長 国定 均
事務担当 植原恒夫・小山健夫・高橋房雄・須田朋子・吉田有光・森下弘美・田中賢一・今井もと子
内山佳子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・松下次男
吉田 茂
発掘調査担当 小野和之・伊平 敬・平方篤行・井原陽一

8. 整理事業組織の体制は次の通りである。

平成14年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 吉田 豊 事業局長 神保侑史
管理部長 萩原利通 調査研究部長 巾 隆之 資料整理課長 西田健彦
事務担当 植原恒夫・小山健夫・高橋房雄・須田朋子・吉田有光・森下弘美・田中賢一
今井もと子・内山佳子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり
狩野真子・松下次男・吉田 茂
整理担当 須田正久（平14・4～7月） 小野和之（平14・8～平15・3月）
本文執筆 中束耕志・小野和之・須田正久
（中・近世陶磁器）大西雅広（人骨・獣骨）檜崎修一郎（天明泥流畑）関 俊明
編 集 小野和之・須田正久

保存処理 関 邦一・土橋まり子・小材浩一・横倉知子

遺物写真 佐藤元彦




整理補助 矢島三枝子・本多琴恵・狩野芳子・勅使川原操子・萩原妙子・白井和子

機械実測 田中精子・酒井史恵

9. 石材鑑定については飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。
10. 1面建物推定平面図は石井榮一氏（世田谷区教育委員会）による。
11. 発掘調査資料、出土遺物等は群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。
12. 発掘調査については、玉村町教育委員会、玉村町都市計画課、並びに関係各機関、地元関係者各位より多大なご協力をいただいた。また、村田敬一氏・石井榮一氏には調査及び整理において多くのご指導を受けましたことに感謝いたします。
13. 協力者（敬称略）村田敬一、坂爪久純、小柴可信、中里正憲、中島直樹、石井榮一、小川 望、両角まり

凡 例

- 調査区は国家座標第IX系に基づき5mの方眼グリッドを設定した。
- 挿図中に使用した方位は、座標北を表す。
- 本書中のテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通りである。
As-A 浅間山噴出A軽石（天明3年・1783）
As-A泥流 浅間山噴出物が吾妻川から利根川へと流れ込み発生した泥流（鎌原泥流）（天明3年・1783）
As-B 浅間山噴出B軽石（天仁元年・1108）
Hr-FP 榛名山二ッ岳噴出軽石（6世紀中頃）
Hr-FA 榛名山二ッ岳噴出火山灰（6世紀初頭）
As-C 浅間山噴出C軽石（4世紀初頭）
- 遺構図の縮尺については、付図400分の1 竪穴住居跡60分の1 建物跡80分の1
土坑・井戸60分の1 溝、畠等については図中に記した。
- 遺物の縮尺は陶磁器3分の1、4分の1 石器3分の1、6分の1 鉄・銅製品3分の1、銅銭・鉄銭2分の1 石臼類6分の1である。その他小形品については2分の1とした。
- 図中に使用したスクリーン・トーンは以下のことを表す。

焼土	灰・炭化物	その他については図中に記した。
As-A	As-A泥流	As-B
		
- 竪穴住居跡の面積は、デジタルプランイメーターで3回計測した平均値を採用した。
- 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に基づいている。
- 土器の実測図は原則として四分画法をとった。残存量が二分の一以下の遺物は180°展開して図上復元として、中心線は点線で示した。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 調査に至る経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 基本土層	4
第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	8
第3章 検出された遺構と遺物	11
第1節 古墳時代I期(7面)	11
1. 土坑 2. 溝	
第2節 古墳時代II期(6面)	11
1. 土坑 2. 溝 3. 柵列	
第3節 平安時代I期(5面)	18
1. 住居跡 2. 土坑 3. 溝状遺構・柵列遺構 4. 溝	
第4節 平安時代II期(4面)	57
1. 畠 2. 掘立柱建物跡 3. 土坑 4. 溝 5. 柵列 6. 復旧畠	
第5節 中世(3面)	66
1. 建物跡 2. 土坑 3. ピット 4. 溝 5. 畠	
第6節 近世I期(2面)	98
1. 建物跡 2. 土坑・集石 3. 畑・復旧畑 4. 出土遺物	
第7節 近世II期(1面)	117
1. 建物跡 2. 井戸 3. 土坑 4. 溝 5. 盛り土 6. 土手 7. 集石	
8. 道 9. 畑 10. 出土遺物	
第8節 天明3年以降(0面)	220
1. 建物跡 2. 列石 3. 土坑	
第9節 上福島中町遺跡出土人骨	222
1. I区3面38号土坑出土火葬人骨 2. II区0面1号土坑出土人骨	
3. II区5面38号土坑出土火葬人骨 4. II区3面28号土坑出土人骨	
5. II区3面49号土坑出土人骨 6. II区3面62号土坑出土人骨	
7. II区3面82号土坑出土人骨	
第10節 上福島中町遺跡出土獣骨	232
1. II区2号土坑出土獣骨 2. VI区2号建物出土獣骨	
第4章 まとめ	234
抄録	
写真図版	
付図	

挿 図 目 次

第 1 図	調査区範囲図	1
第 2 図	グリッド設定図	2
第 3 図	基本土層図	4
第 4 図	遺跡位置図	6
第 5 図	玉村町の地形	7
第 6 図	周辺の遺跡	9
第 7 図	II区 7 面全体図	12
第 8 図	I 区 6 面全体図	13
第 9 図	II区 6 面全体図(1)	14
第 10 図	II区 6 面全体図(2)	15
第 11 図	I・II区 7・6 面出土遺物	16
第 12 図	I 区 1 号住居跡・出土遺物	18
第 13 図	I 区 2・3 号住居跡・出土遺物	19
第 14 図	I 区 4 号住居跡・出土遺物	20
第 15 図	I 区 5・6 号住居跡・出土遺物	21
第 16 図	I 区 7・8 号住居跡・出土遺物	22
第 17 図	II区 1 号住居跡・出土遺物	23
第 18 図	II区 2 号住居跡	24
第 19 図	II区 2 号住居跡出土遺物	25
第 20 図	II区 3 号住居跡・出土遺物	26
第 21 図	II区 4 号住居跡・出土遺物	27
第 22 図	II区 5 号住居跡	27
第 23 図	II区 6 号住居跡・出土遺物	28
第 24 図	II区 7・8 号住居跡・出土遺物	29
第 25 図	II区 7・8 号住居跡・出土遺物	30
第 26 図	II区 9 号住居跡・出土遺物	31
第 27 図	VI区 1 号住居跡・出土遺物	31
第 28 図	VI区 2 号住居跡・出土遺物	32
第 29 図	VI区 3 号住居跡・出土遺物	33
第 30 図	VI区 4・5 号住居跡・出土遺物	34
第 31 図	VI区 4・5 号住居跡・出土遺物	35
第 32 図	VI区 6・7 号住居跡・出土遺物	35
第 33 図	VI区 8 号住居跡	36
第 34 図	VI区 9 号住居跡・出土遺物	36
第 35 図	VI区 10 号住居跡・出土遺物	37
第 36 図	I 区 1 号掘立柱建物跡	38
第 37 図	土坑(1)	40
第 38 図	土坑(2)	41
第 39 図	土坑(3)・VI区 1 号ピット	42
第 40 図	土坑・ピット出土遺物	43
第 41 図	溝・グリッド出土遺物	44
第 42 図	II区道状遺構・柵列遺構	47
第 43 図	II・VI区溝	48
第 44 図	II区As-B 下畝	57
第 45 図	VI区As-B 下畝・1・2 号溝	58
第 46 図	1 号掘立柱建物跡	58
第 47 図	土坑	59
第 48 図	II区溝	60
第 49 図	II区 7 号溝	61
第 50 図	I 区復旧畝	62
第 51 図	II区復旧畝	63
第 52 図	4 面出土遺物	64
第 53 図	I 区 1・2 号掘立柱建物跡	66
第 54 図	土坑(1)	68
第 55 図	土坑(2)	69
第 56 図	土坑(3)	70
第 57 図	土坑(4)	72
第 58 図	土坑(5)	73
第 59 図	土坑(6)・ピット	74
第 60 図	II・VI区溝全体図	75・76
第 61 図	II区畝平面図	77
第 62 図	土坑出土遺物(1)	78
第 63 図	土坑出土遺物(2)	79
第 64 図	土坑出土遺物(3)	80
第 65 図	土坑出土遺物(4)	81
第 66 図	土坑(5)・ピット出土遺物	82
第 67 図	溝出土遺物(1)	83
第 68 図	溝出土遺物(2)	84
第 69 図	溝出土遺物(3)	85
第 70 図	集石・畝・グリッド出土遺物	86
第 71 図	遺構外出土遺物	87
第 72 図	I 区 1 号建物跡	98
第 73 図	II区 1 号建物跡	99
第 74 図	VI区 1・2 号建物跡	100
第 75 図	VI区 3 号建物跡	101
第 76 図	VI区 3・8 号土坑	101
第 77 図	土坑・集石	102
第 78 図	畑・復旧溝	103
第 79 図	I 区 1 号建物跡出土遺物(1)	105
第 80 図	I 区 1 号建物跡出土遺物(2)	106
第 81 図	VI区 1・2 号建物跡出土遺物(1)	107
第 82 図	VI区 1・2 号建物跡出土遺物(2)	108
第 83 図	VI区 1・2 号建物跡出土遺物(3)	109
第 84 図	土坑・畑・遺構外出土遺物(1)	110
第 85 図	土坑・畑・遺構外出土遺物(2)	111
第 86 図	土坑・畑・遺構外出土遺物(3)	112
第 87 図	II区 1 号建物跡	118
第 88 図	II区 1 号建物跡囲炉裏・竈	119
第 89 図	II区 1 号建物跡遺物分布図	119
第 90 図	II区 2 号建物跡	120
第 91 図	II区 3 号建物跡遺物分布図	120
第 92 図	II区 4 号建物跡	121
第 93 図	II区 4 号建物跡囲炉裏・竈	122
第 94 図	II区 4 号建物跡遺物分布図	122
第 95 図	II区 5 号建物跡	123
第 96 図	II区 6 号建物跡	124
第 97 図	II区 6 号建物跡囲炉裏	124
第 98 図	II区 7 号建物跡	124
第 99 図	II区 6 号建物跡遺物分布図	125
第 100 図	VI区 1 号建物跡	126
第 101 図	VI区 1 号建物跡壁・床材出土状況	127
第 102 図	VI区 1 号建物跡囲炉裏・竈	128
第 103 図	VI区 1 号建物跡遺物分布図	128
第 104 図	VI区 2 号建物跡	130
第 105 図	VI区 2 号建物跡囲炉裏・竈	131
第 106 図	VI区 2 号建物跡遺物分布図(1)	131
第 107 図	VI区 2 号建物跡遺物分布図(2)	132
第 108 図	VI区 3 号建物跡	133
第 109 図	VI区 3 号建物跡囲炉裏	134
第 110 図	VI区 3 号建物跡遺物分布図	135
第 111 図	VI区 4 号建物跡	136
第 112 図	VI区 5 号建物跡	136
第 113 図	VI区 6 号建物跡	137
第 114 図	VI区 6 号建物跡囲炉裏・竈	138
第 115 図	VI区 6 号建物跡便所	139
第 116 図	VI区 6 号建物跡遺物分布図	139
第 117 図	VI区 7 号建物跡	140
第 118 図	VI区 8・9 号建物跡	140
第 119 図	I・II・IV区全体図	141・142
第 120 図	VI区 1 面全体図	143

表目次

第121図	井戸・土坑	145
第122図	集石・盛土	146
第123図	道・溝	147
第124図	溝・土手	148
第125図	畑全体図	150
第126図	II区1号建物跡出土遺物(1)	154
第127図	II区1号建物跡出土遺物(2)	155
第128図	II区1号建物跡出土遺物(3)	156
第129図	II区1号建物跡出土遺物(4)	157
第130図	II区2号建物跡出土遺物	157
第131図	II区3号建物跡出土遺物	158
第132図	II区4号建物跡出土遺物(1)	159
第133図	II区4号建物跡出土遺物(2)	160
第134図	II区4号建物跡出土遺物(3)	161
第135図	II区4号建物跡出土遺物(4)	162
第136図	II区6号建物跡出土遺物(1)	163
第137図	II区6号建物跡出土遺物(2)	164
第138図	II区6号建物跡出土遺物(3)	165
第139図	II区6号建物跡出土遺物(4)	166
第140図	II区6号建物跡出土遺物(5)	167
第141図	II区6号建物跡出土遺物(6)	168
第142図	II区6号建物跡出土遺物(7)	169
第143図	VI区1号建物跡出土遺物(1)	170
第144図	VI区1号建物跡出土遺物(2)	171
第145図	VI区1号建物跡出土遺物(3)	172
第146図	VI区1号建物跡出土遺物(4)	173
第147図	VI区2号建物跡出土遺物(1)	174
第148図	VI区2号建物跡出土遺物(2)	175
第149図	VI区2号建物跡出土遺物(3)	176
第150図	VI区2号建物跡出土遺物(4)	177
第151図	VI区2号建物跡出土遺物(5)	178
第152図	VI区2号建物跡出土遺物(6)	179
第153図	VI区2号建物跡出土遺物(7)	180
第154図	VI区3号建物跡出土遺物(1)	181
第155図	VI区3号建物跡出土遺物(2)	182
第156図	VI区3号建物跡出土遺物(3)	183
第157図	VI区3号建物跡出土遺物(4)	184
第158図	VI区3号建物跡出土遺物(5)	185
第159図	VI区4・5号建物跡出土遺物	186
第160図	VI区6号建物跡出土遺物	187
第161図	VI区7号建物跡出土遺物	187
第162図	II・VI区井戸・土坑・溝出土遺物	188
第163図	II区溝・集石出土遺物	189
第164図	II・VI区集石・列石・盛土・土手出土遺物	190
第165図	II区土手出土遺物	191
第166図	II区土手・畑出土遺物	192
第167図	遺構外出土遺物(1)	193
第168図	遺構外出土遺物(2)	194
第169図	遺構外出土遺物(3)	195
第170図	遺構外出土遺物(4)	196
第171図	遺構外出土遺物(5)	197
第172図	II区0面遺構図	221

表1	周辺の遺跡	10
表2	7・6面出土遺物観察表	17
表3	5面出土遺物観察表	49
表4	4面出土遺物観察表	64
表5	3面出土遺物観察表	88
表6	3面土坑一覧表	93
表7	2面出土遺物観察表	113
表8	1面出土遺物観察表	117
表9	1面畑計測表	153
表10	1面出土遺物観察表	198

写真図版目次

- P L 1 II区7面全景 東より
 II区6面全景 東より
 P L 2 I区5面全景 東より
 I区5面1号住居跡 北より
 I区5面2・3号住居跡 西より
 I区5面4号住居跡 西より
 I区5面5～8号住居跡 西より
 I区5面7号住居跡竈 西より
 I区5面1号掘立柱建物跡 西より
 P L 3 II区5面全景 東より
 II区5面全景 西より
 P L 4 II区5面1号住居跡 北より
 II区5面1号住居跡 西より
 II区5面2号住居跡 西より
 II区5面2号住居跡竈 西より
 II区5面3・4号住居跡 西より
 II区5面4号住居跡竈 西より
 II区5面5号住居跡 西より
 II区5面6号住居跡 西より
 P L 5 II区5面7号住居跡 西より
 II区5面7号住居跡竈 西より
 II区5面8号住居跡 西より
 II区5面9号住居跡 西より
 VI区5面全景 上空より
 P L 6 VI区5面1号住居跡 西より
 VI区5面2号住居跡 西より
 VI区5面3号住居跡 西より
 VI区5面4・5号住居跡 南より
 VI区5面4・5号住居跡竈 西より
 VI区5面6号住居跡 北より
 VI区5面7号住居跡 北より
 VI区5面8号住居跡 北より
 P L 7 VI区5面9号住居跡 西より
 VI区5面10号住居跡 西より
 II区5面21号土坑遺物出土状況
 II区5面37号土坑 北より
 II区5面38号土坑遺物出土状況
 II区5面柵列検出状況 南より
 II区5面1号道状遺構 南より
 II区5面1・2号溝 北より
 P L 8 II区4面全景 東より
 II区4面全景 上空より
 P L 9 I区4面全景 東より
 II区4面復旧畠 南より
 II区4面10・11号溝 北より
 VI区4面1号溝 南より
 II区3面全景 上空より
 P L 10 II区3面全景 上空より
 II区3面全景 西より
 P L 11 I区3面全景 北より
 II区3面全景 東より
 II区3面全景 東より
 I区3面38号土坑 西より
 II区3面3号土坑 北より
 P L 12 II区3面24号土坑 南より
 II区3面24号土坑炭化米出土状況
 II区3面28号土坑人骨出土状況
 II区3面37号土坑炭化麦出土状況
 II区3面40号土坑遺物出土状況
 II区3面49号土坑人骨出土状況
 II区3面49号土坑人骨出土状況
 II区3面62号土坑人骨出土状況
 P L 13 II区3面82号土坑人骨出土状況
 II区3面114号土坑 南から
 II区3面243号土坑遺物出土状況
 II区3面255号土坑 東より
 II区3面2号畠 北より
 II区3面2号畠セクション 南より
 II区3面1号溝セクション 東より
 II区3面1号溝指し銭出土状況
 P L 14 II区3面3号溝セクション 北より
 VI区3面1号溝セクション 西より
 VI区3面1号溝折れ状況 西より
 VI区3面1号溝 東より
 I区2面全景 西より
 P L 15 I区2面1号建物跡 南より
 VI区2面1号建物跡遺物出土状況
 VI区2面1・2号建物跡 北より
 VI区2面1・2号建物跡 南より
 VI区1面(手前)・2面(奥)全景 西より
 VI区2面1号掘立柱建物跡 西より
 VI区2面8号建物跡旧便溝跡
 P L 16 II区2面1号畑 南より
 II区2面2号畑 西より
 II区2面畑及び1面畑断面 南より
 II区2面復旧溝 北より
 I区1面畑全景 西より
 P L 17 II区調査前風景 東より
 II区1面全景 上空より
 P L 18 II区北壁基本土層
 I区西壁基本土層
 II区1面1号建物跡断面 北より
 P L 19 II区1面1号建物跡遺物出土状況
 II区1面1号建物跡遺物出土状況
 II区1面1号建物跡遺物跡囲炉裏 南より
 II区1面1号建物跡跡囲炉裏 南より
 II区1面1号建物跡竈 南より
 II区1面1号建物跡全景 西より
 II区1面3号建物跡セクション 北より
 II区1面3号建物跡全景 南より
 P L 20 II区1面4号建物跡遺物出土状況
 II区1面4号建物跡遺物出土状況
 II区1面4号建物跡竈 南より
 II区1面4号建物跡全景(北側部分)
 II区1面4号建物跡遺物出土状況
 II区1面4号建物跡跡囲炉裏 南より
 II区1面4号建物跡遺物出土状況
 II区1面4号建物跡床材痕検出状況
 P L 21 II区1面4号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 P L 22 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡遺物出土状況
 II区1面6号建物跡跡囲炉裏 南より
 II区1面6号建物跡竈鉄釜出土状況

	II区1面6号建物跡遺物出土状況	VI区1面3号建物跡床柱痕 南より	
	II区1面6号建物跡遺物出土状況	VI区1面3号建物跡囲炉裏 西より	
	II区1面6号建物跡全景 南より	VI区1面3号建物跡石臼出土状況	
	IV区1面全景 東より	VI区1面3号建物跡礎石番付	
P L 23	VI区1面1号建物跡壁検出状況 西より	VI区1面3号建物跡礎石番付	
	VI区1面1号建物跡壁検出状況 北より	VI区1面3号建物跡礎石番付	
P L 24	VI区1面1号建物跡遺物出土状況 東より	P L 32	VI区1面3号建物跡断面 南より
	VI区1面1号建物跡壁検出状況 南より	VI区1面3号建物跡遺物出土状況	
	VI区1面1号建物跡壁検出遺跡状況 北より	VI区1面3号建物跡遺物出土状況	
	VI区1面1号建物跡壁状況	VI区1面3号建物跡礎石番付	
	VI区1面1号建物跡壁断面	VI区1面3号建物跡礎石番付	
	VI区1面1号建物跡壁状況 北より	VI区1面3号建物跡礎石番付	
	VI区1面1号建物跡囲炉裏 東より	VI区1面3号建物跡礎石番付	
	VI区1面1号建物跡全景(南側部分) 北より	VI区1面5号建物跡 西より	
P L 25	VI区1面1号建物跡セクション 北より	P L 33	VI区1面6号建物跡石組 北より
	VI区1面1号建物跡壁検出状況	VI区1面6号建物跡全景 北より	
	VI区1面1号建物跡床材検出状況	VI区1面6号建物跡囲炉裏 北より	
	VI区1面1号建物跡遺物出土状況	VI区1面6号建物跡囲炉裏 西より	
	VI区1面1号建物跡模造小判出土状況	VI区1面6号建物跡便所 西より	
	VI区1面1号建物跡(北側部分) 北より	VI区1面6号建物跡便所大甕セクション	
	VI区1面1号建物跡囲炉裏	VI区1面6号建物跡排水坑全景	
	VI区1面1号建物跡電検出状況	VI区1面7号建物跡全景 北より	
P L 26	VI区1面1号建物跡壁検出状況	P L 34	II区1面2号建物跡全景 西より
	VI区1面1号建物跡柱痕・遺物出土状況	II区1面5号建物跡全景 南より	
	VI1面1号建物跡柱・壁痕	VI区1面7号建物跡全景 東より	
	VI区1面1号建物跡壁竹小舞痕	VI区1面4号建物跡全景 西より	
	VI区1面1号建物跡竹材痕	VI区1面8号建物跡全景 西より	
	VI区1面1号建物跡電検出状況 東より	VI区1面9号建物跡全景 西より	
	VI区1面1号建物跡壁検出状況 西より	II区1面1号井戸全景 東より	
	VI区1面1号建物跡(南側部分) 東より	II区1面1号井戸断面 北より	
P L 27	VI区1面2号建物跡(北側部分) 北より	P L 35	II区1面2号建物跡便槽断面
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況 南より	II区1面2号建物跡便槽断面	
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	II区1面2号建物跡便槽完掘状況	
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	II区1面1号井戸全景	
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	II区1面1号建物跡内土坑	
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	II区1面1号建物跡排水坑断面	
P L 28	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	VI区1面土坑	
	VI区1面2号建物跡排水坑全景	VI区1面1号土坑全景 北より	
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	P L 36	VI区1面1号井戸全景 西より
	VI区1面2号建物跡囲炉裏遺物出土状況	VI区1面1号土坑全景 西より	
	VI区1面2号建物跡馬屋排水坑全景	II区1面2号集石全景 西より	
	VI区1面2号建物跡礎石番付	II区1面1号溝・1号土手断面 南より	
	VI区1面2号建物跡礎石番付	II区1面3・4号溝 東より	
	VI区1面2号建物跡礎石番付	II区1面5号道断面 南より	
P L 29	VI区1面2号建物跡(東側部分) 南より	II区1面1号道・5号溝 西より	
	VI区1面2号建物跡(東側部分) 東より	VI区1面1号道断面 南より	
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	P L 37	II区1面全景 東より
	VI区1面2号建物跡囲炉裏 南から	II区1面1号建物跡全景 上空より	
	VI区1面2号建物跡遺物出土状況	P L 38	II区1面1号建物跡全景 上空より
	VI区1面2号建物跡礎石番付	II区1面1号建物跡全景 西より	
	VI区1面2号建物跡礎石番付	II区1面3号建物跡全景 東より	
	VI区1面2号建物跡礎石番付	II区1面3号建物跡全景 上空より	
P L 30	VI区1面3号建物跡断面 南より	P L 39	II区4号建物跡全景 上空より
	VI区1面3号建物跡ムシロ痕	II区6号建物全景 上空より	
	VI区1面3号建物跡竹スノコ痕	P L 40	VI区1面全景 上空より
	VI区1面3号建物跡竹スノコ痕	VI区1面全景(2・3号建物跡) 上空より	
	VI区1面3号建物跡遺物出土状況 南より	P L 41	VI区1面全景 上空より
	VI区1面3号建物跡遺物出土状況	VI区1面全景 西より	
	VI区1面3号建物跡石臼下糞痕	P L 42	VI区1面全景(2・6号建物跡) 上空より
	VI区1面3号建物跡排水坑全景	VI区1面全景 東より	
P L 31	VI区1面3号建物跡全景 南より	P L 43	VI区1面1号建物跡(北側部分) 上空より
	VI区1面3号建物跡竹スノコ痕検出状況	VI区1面1号建物跡(南側部分) 上空より	
		P L 44	VI区1面2号建物跡(北側部分) 上空より

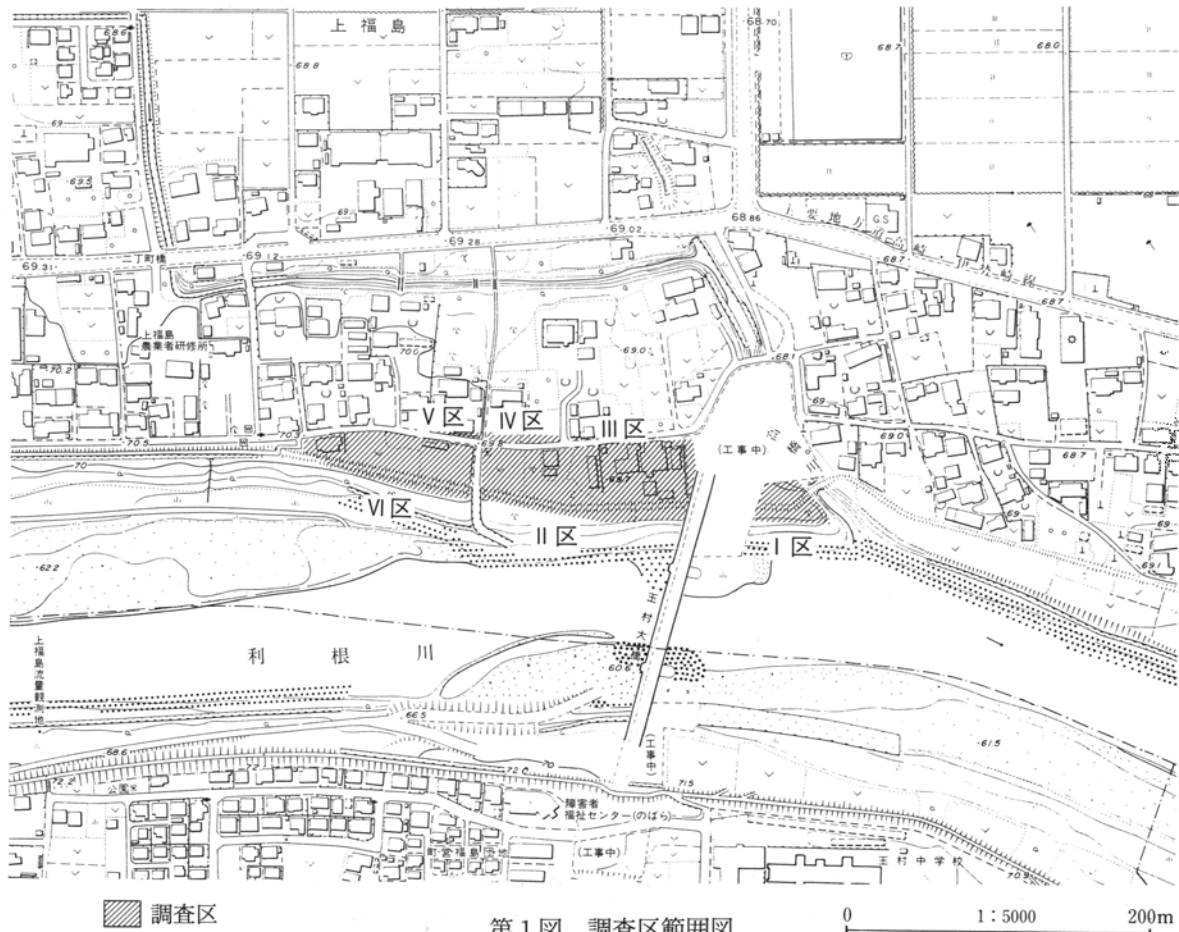
- VI区1面2号建物跡(南側部分) 上空より
P L 45 VI区1面3号建物跡 上空より
VI区1面6号建物跡 上空より
P L 46 I区1面畑検出状況 東より
II区1面畑検出状況 南より
P L 47 II区1面5号溝 東より
VI区1面畑検出状況 東より
P L 48 VI区1面畑検出状況 北より
VI区1面畑検出状況 北より
P L 49 VI区1面全景 北より
VI区1面全景 北より
P L 50 II区1面泥流中石臼出土状況
II区0面1号建物跡全景 西より
II区0面1号建物跡全景 東より
II区0面1号建物跡礎石状況
II区0面1号建物跡礎石状況
II区0面1号建物跡礎石状況
II区0面1号列石 北より
II区0面1号土坑 西より
P L 51 7・6・5面出土遺物
P L 52 5面出土遺物
P L 53 5・4面出土遺物
P L 54 3面出土遺物
P L 55 3面出土遺物
P L 56 3面出土遺物
P L 57 2面出土遺物
P L 58 2面出土遺物
P L 59 2・1面出土遺物
P L 60 1面出土遺物
P L 61 1面出土遺物
P L 62 1面出土遺物
P L 63 1面出土遺物
P L 64 1面出土遺物
P L 65 1面出土遺物
P L 66 1面出土遺物
P L 67 1面出土遺物
P L 68 1面出土遺物
P L 69 1面出土遺物
P L 70 1面出土遺物
P L 71 1面出土遺物
P L 72 1面出土遺物
P L 73 1・0面・その他
P L 74 I区1面1号建物
P L 75 II区1面4・6号建物跡出土陶磁器
P L 76 VI区1面1・2号建物跡出土陶磁器
P L 77 VI区1面3・2号建物跡出土陶磁器・鉄器

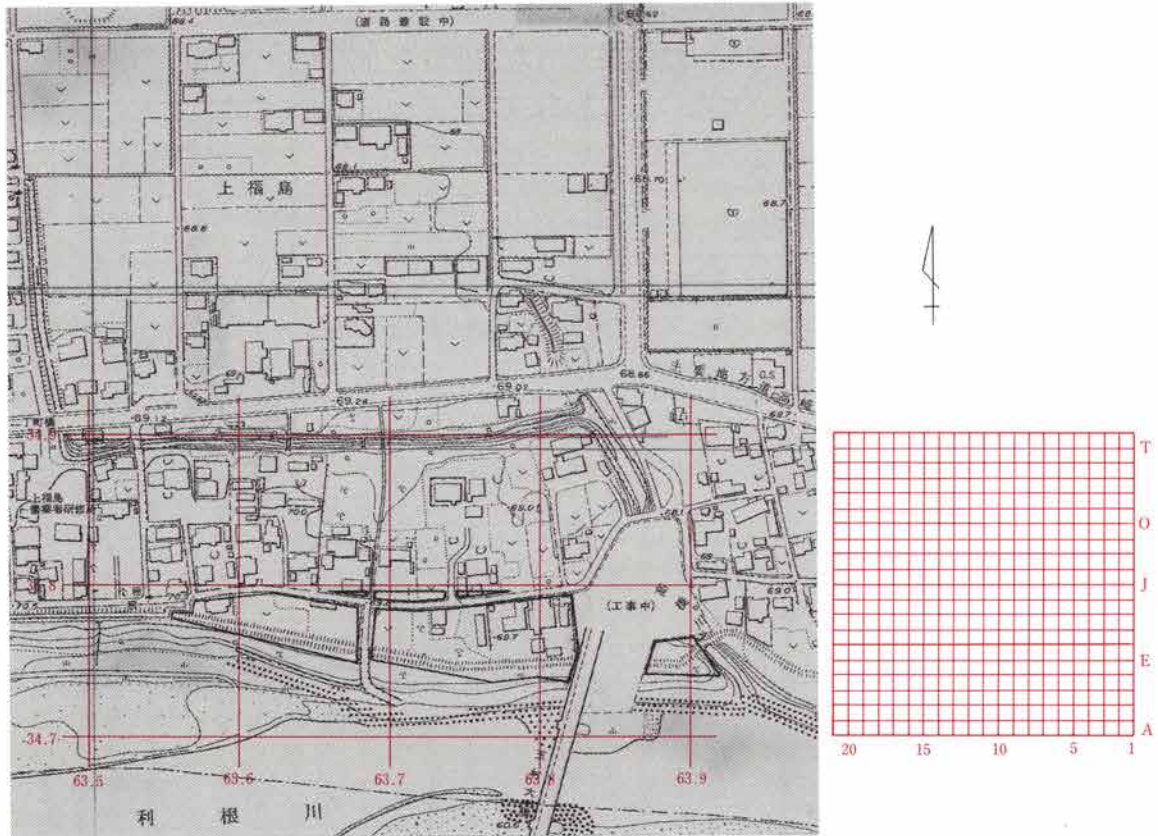
第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

本遺跡は平成13年4月2日付け群馬県（土木部河川課）と本事業団の間で締結された、「平成13年度一級河川利根川広域一般河川改修（局改）事業に係わる埋蔵文化財発掘調査」についての委託契約に基づいて、同年6月11日から発掘調査を開始した。調査を実施する以前の平成12年10月13日に県教育委員会文化財保護課は、伊勢崎土木事務所の依頼により、玉村町教育委員会と当事業団の立会の下に試掘調査を実施した。本遺跡は利根川の自然堤防上に位置し、天明3年の泥流で埋没した江戸時代の集落の存在が予測された。その結果を受け、同年5月31日に県教育委員会文化財保護課と伊勢崎土木事務所、及び当事業団の三者による調整会議を開催し、工期の切迫していた東半部分から着手することとなった。また、河川改修事業は、県下一律に平成13年度で終了することになっていたため、同年12月までに発掘調査を終了させ、平成13年3月までに報告書を刊行する計画で、調査を進めることになった。

しかし、調査が進捗していくと、堤外地まで遺構が延びるとともに、古墳時代から江戸時代までの遺構が重複して、形成されていることが判明した。当初の調査対象面積は約5,000㎡であったが、14,000㎡に広がること予測された。よって、平成13年8月6日に再度の調整会議を開催し、次年度へ調査を継続していくとともに、堤防直下及び堤外地の一部の調査は、河川法との関連より堤防・護岸工事時の立会調査とすることに調整された。文化財保護課は、渇水期に入った同年10月17日に堤外地の試掘調査を実施し、工事対象地全





第2図 グリッド設定図

面へ遺構が広がるとともに、堤内地と同様な時代の遺構が重複していることを確認した。その結果を受け、11月2日及び9日に第3回目の三者調査会議を開催し、工事工程と調整の上、平成14年度に堤外地の調査を継続するとともに、整理作業を実施することに決定された。

第2節 調査の方法と経過

調査区は利根川左岸の現堤防及びその両側部分の河川改修工事に掛かる範囲が対象となった。調査区の長さはおよそ350m、幅は最も広がる場所で約70mであった。対象地内には利根川に掛かる玉村大橋（仮称）や生活道路が走っており、分割されたものとなっている。このためそれぞれの調査区をⅠ～Ⅵ区に分け呼称することとした。（第1図）

また、調査グリッドの設定は、利根川を挟んで本遺跡と隣接する藤岡・大胡線関連の調査と同様の基準方眼である国家座標IX系を用いた。大グリッド36地区（1km）、中グリッド18・28・38区（100m）に位置し、この中グリッド内を5m方眼で割り、南東隅を基点として北へ5m進む毎にA→T、西に5m進む毎に1→20として5m方眼の小グリッド名とした。（第2図）

調査は工事工程の関係で最も東側のⅠ区から開始し、その後Ⅱ区（堤防内側）、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区そしてⅥ区へと進めた。調査開始直後から第1面とした天明3年(1783)のAs-A泥流で覆われた面の遺構が極めて遺存状態が良く、建物や畑、井戸、道などが当時の姿そのままに検出された。これらの遺構は浅間山給源の軽石（As-A）によって覆われており、その上に軽石降下直後に利根川を流れ下ってきた泥流が厚さ1m以上も堆積していた。調査はこの泥流を慎重に除去することから始まり、その直下に堆積する軽石の除去を丁寧に行った。

比較的平坦な面や畑については比較的順調に進んだが、建物部分では軽石が途切れ、礎石や遺物の存在に注意しなければならず、さらには部分的に家の壁が残っている状況も見られたことから、発掘作業は、より慎重に進められた。

天明3年面の下層、約40cmは洪水によって堆積した砂層で、この砂層によって覆われた家や畑も検出され、この面を2面とした。現時点では結論は得ていないが、寛保2年の洪水によって埋没した可能性が高い。

3面とした面は中世に相当し、館の堀と考えられる2重の直角に折れる大堀や土坑群、ピット群が検出されている。II区の南半分（新堤防外側）部分については、新堤防保持の安全確保上、調査はこの面で終了させた。

4面はAs-B面である。ここでは、As-B降下直後の復旧畠が検出されており注目される。また部分的ではあるが、As-Bで覆われた畠も確認されている。その他数は少ないが土坑、溝、ピットなども検出されている。

平安時代に相当する5面では竪穴住居、土坑、溝、が検出された。住居は調査区の南側に多く検出、川に沿って東西に広がって作られている。住居の他溝、土坑、柵列などが検出されている。

6面は古墳時代後期に相当する面であるが、住居は検出されず、溝、土坑、柵列等で、遺物もほとんど見られない。

7面はAs-C下面に相当する面である。I・II区において土坑、溝が検出された。出土遺物は少ないが若干の土器片と石器、剥片が出土している。調査は層的に進められたが堆積土が厚く、なおかつ砂質であった。7面は現地表面から4m以上も下がるため、安全確保上法面掘削を行った。このため下面に調査が進むにつれ、調査面積は縮小せざるを得ない状況が生じた。

なお、VI区の現堤防下および堤外部については伊勢崎土木事務所との工程調整の結果10・11月に工事立会い調査として実施した。

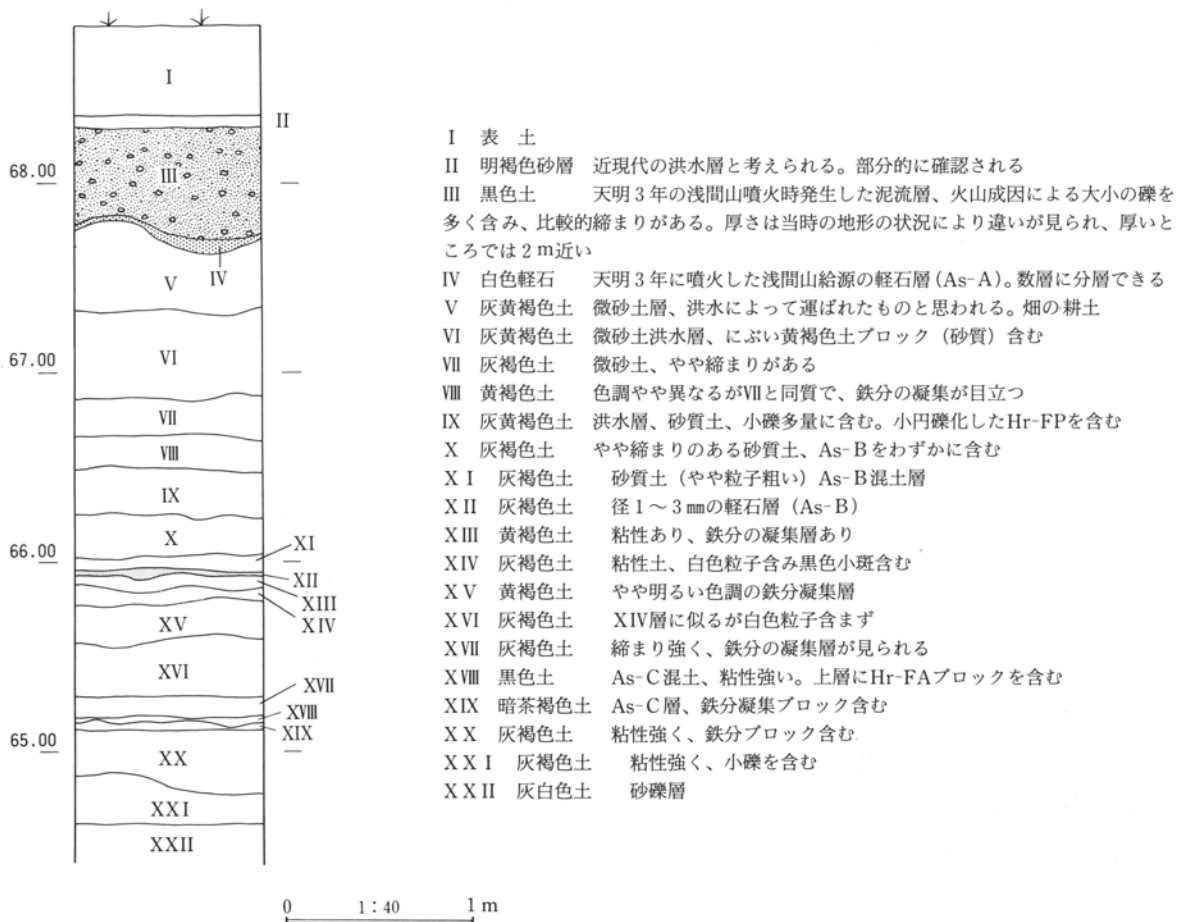
平成13年度	平成14年度
7月 調査開始 天明泥流除去 I区畑、II区建物、畑、道等検出	4月 II区1面3～6号建物調査 VI区1面1～5号建物調査
8月 II区建物、便所、井戸等調査	5月 II・VI区2・3面調査
9月 II区建物、便所、井戸等精査	6月 II区3面調査 土坑・溝・ピット群調査
10月 現地説明会 10月27日（見学者約500名）	VI区5面住居調査
11月 II区2、3面調査開始 中世の大堀・土坑等調査 建物調査	7月 II区3面調査 10月 立会い調査開始 VI区1面調査1・2・6号
12月 II区3・4面調査 溝・畠等 II区5・6面調査 住居・溝・土坑等調査	11月 VI区2面調査 調査終了
1月 VI区1面1～4号建物調査	
2月 VI区1面1～4号建物調査、1部2～5面調査	
3月 II区5面住居調査	

第3節 基本土層

本遺跡における基本土層は、下図に示すように、利根川が現在の流路に変流した以後の、堆積土が厚くなっていることが大きな特徴として挙げられる。変流の時期は15世紀頃とされているが、正確な時期決定には至っていない。この変流時期と判断されるIX層以後の堆積土は、縮まりや色調、粒子の大小に違いは見られるものの、基本的には微砂土で粘性はほとんどない。また、VI層は砂粒が目立つ洪水砂層で、この層に覆われた建物跡、畑跡、道などが検出されており、江戸時代中期の寛保2年(1741)の大洪水による洪水堆積土の可能性がある。

IX層は調査区ほぼ全面に認められた砂質土層で、部分的に小砂礫を多く含む。かなり大きな洪水による堆積土と考えられる。中世の畠や溝の多くがこの層で埋まっている。

XII層としたAs-B層は2～数cmの厚さで調査区ほぼ全域で確認されている。このAs-B層を挟み復旧畠と埋没した畠が確認されている。平安時代の住居跡はXIV層上面で確認した。かなり粘性と縮まりを持った土で鉄分の凝集が目立つ。



第3図 基本土層図

第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡

第1節 地理的環境

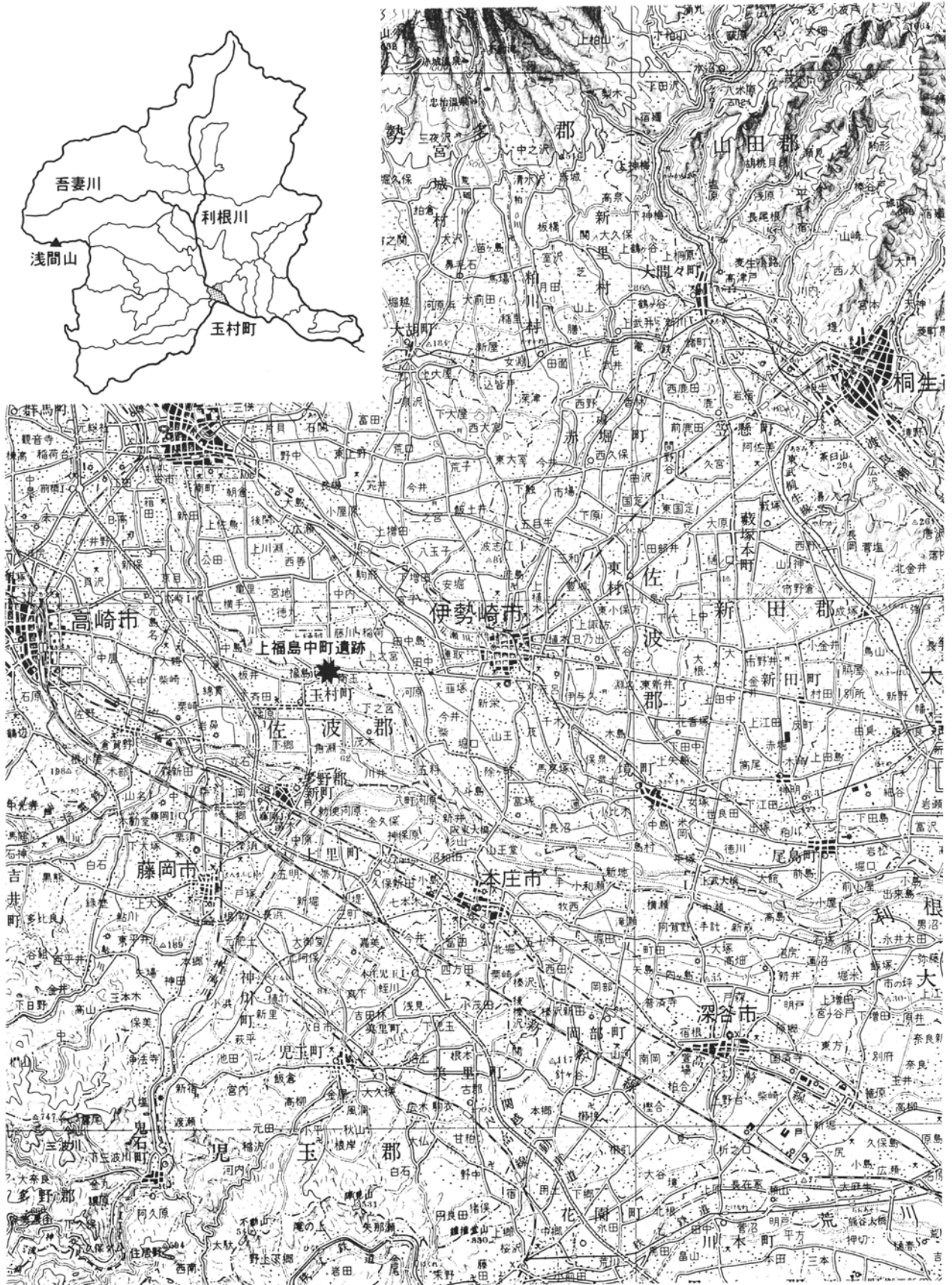
上福島中町遺跡の所在する佐波郡玉村町は、関東平野の北西端に位置し、東経139°・北緯36°を測る。地形的には低湿地と微高地の違いによる多少の高低差はあるものの、北西方向から南東方向に緩やかに傾斜する平坦地となっている。標高は68m～69mを測る。町の北東部を利根川が北西から南東に流れ、西には井野川が南流している。また、南には井野川と合流し南東方向に流れる烏川がある。このように、この玉村町は古くから利根川や烏川といった大きな河川に囲まれた水利に恵まれてきた地である。町の郊外には圃場整備により整然と区画された水田地帯が広がり、米麦二毛作を中心とした農業が行われている。また、赤城山・榛名山・妙義山に代表される上毛三山をはじめとし、さらに遠方には北に谷川岳、西には浅間山といった県境の山々を一望することができる。

遺跡の南約1.3kmに日光例幣使道（現国道354）が東西に、西約3.5kmには関越自動車道が南北に走る。北約2.0kmには平成12年3月に伊勢崎 I . C まで開通した高崎を分岐点とする北関東自動車道が東西に横断する。遺跡周辺は近年、隣接する前橋市や高崎市、伊勢崎市などのベッドタウンとして住宅が激増し、人口もここ数年で著しく増加した。また、開発の余波による大型店舗の進出や工場、倉庫などといった企業関連の施設も増加の傾向にあり、それに伴い主要道路の建設や整備、利根川の橋架建設などの交通網の整備が大々的に行われ、町はここ数年で著しい発展を遂げてきている。

上福島中町遺跡はこの玉村町の北東部利根川左岸、前橋台地の南端に立地する。この前橋台地は、洪積世後期、利根川によってもたらされた厚さ200m以上で堆積した前橋砂礫層の上に約20,000年～24,000年前の浅間山の山体崩壊に起因する前橋泥流が極めて短期間にこの台地を覆い堆積し形成されたものである。凝灰角礫岩を含むこの地層は前橋泥流堆積層と呼ばれ、西は群馬郡南部から高崎市北・東部の平野部へと広がり、東は前橋市の北東部から伊勢崎市西部にかけて厚さ10m以上堆積しており、烏川と広瀬川とに挟まれた県央の平野地域の基盤層となっている。この前橋泥流堆積層の上には、シルト・粘土・砂・泥炭層などによって構成されている水成ローム層が堆積しているが、シルト・泥炭層は水中や湿潤な環境で形成されることから、この時期の前橋台地が湿原状態であったことを示している。化学的分析によると、水成ローム層に含まれる泥炭質粘土層は約13,000年前という測定値を示し、現在の1000m～1500mの山岳地帯の落葉樹林帯を形成する植生が推定できることから、ウルム氷期に比定されるようである。

こうして形成された前橋台地上には洪積世後期以降、利根川をはじめとする幾つかの小河川が流れ、小規模ながら氾濫原を各所に形成していった。特に台地の東側を流れる利根川は、榛名山南東裾野の末端を浸食する形で南流し、前橋市大手町付近から玉村町五料付近まではこの台地を貫通している。約24,000年前は、総社町辺りから新前橋～染谷川、滝川付近を流れ井野川に注いでいたとされ、その後17,000年前には榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城南西麓縁の広瀬川低地帯にその流路を変更している。現在の河道に移ったのは中世後期であると考えられている。その後、利根川は大きな変流こそ起こさなかったが、洪水などの氾濫は度々起こし周辺の小河川に影響を与えながらこの台地を刻み続けた。その結果、後背湿地と微高地とが複雑に入り組んだ地形が形成されたのである。このように利根川の存在は玉村町の地形形成における大きな要因となっている。

利根川は、中世の変流後も幾度となく大洪水を引き起こしている。特に1783年（天明三年）の浅間山噴火の



第4図 遺跡位置図〔国土地理院 1/200,000「宇都宮・長野」〕

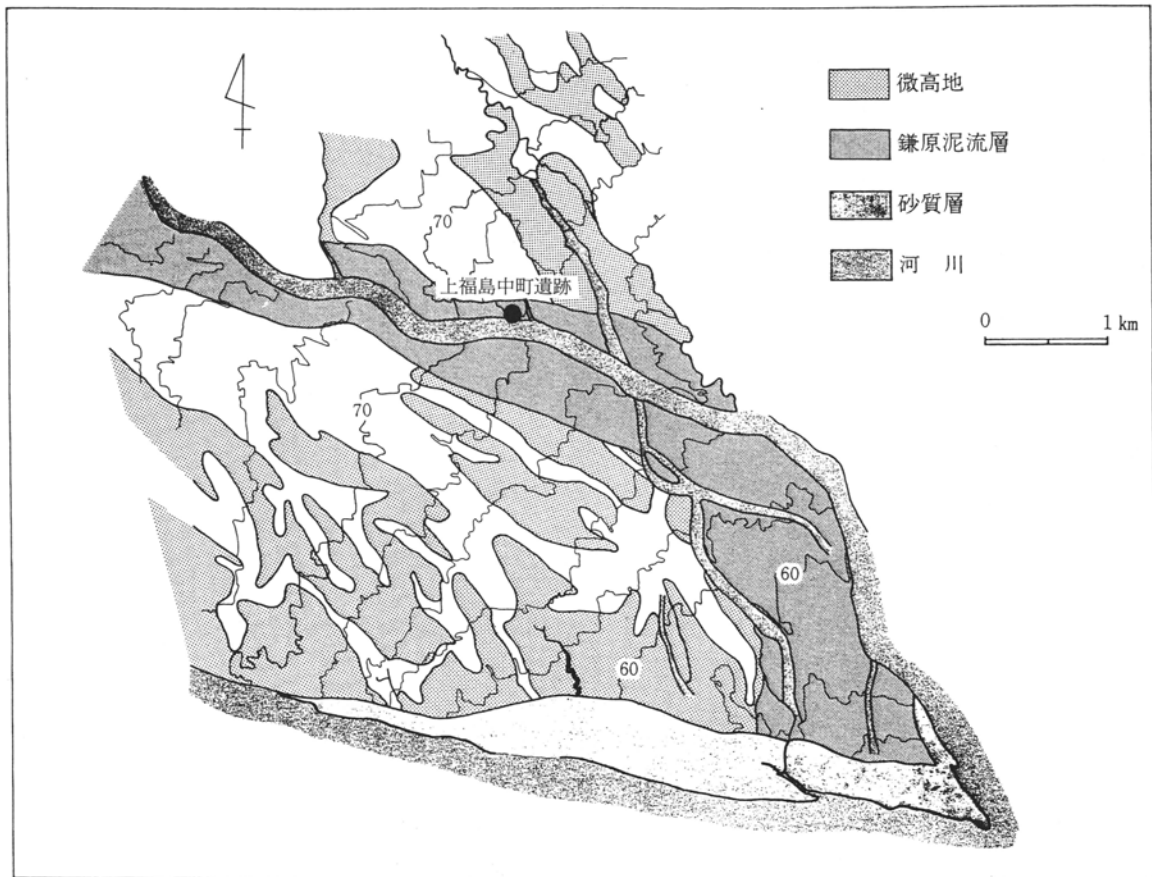
際に流出した泥流は、吾妻川を流れ下り、やがて利根川に流れ込み上福島村をはじめ沿岸の村々を一気にのみ込み、多大な被害を及ぼしている。近年に至っても昭和22年のキャサリン台風の直撃を受け、氾濫によって大きな被害を被っている。現在の遺跡周辺は昭和40年代の土地改良により一変し、往時の自然地形を窺い知ることはできない。しかし、今回の発掘調査によって上福島中町遺跡を襲った度重なる洪水災害の状況や、その後の人々の復旧への努力や生活の様子など、数多くの事実がその痕跡から確認できた。

〔参考文献〕

『玉村町誌』 通史編上巻1992

『玉村町の遺跡』 玉村町教育委員会1992

『下阿内壱町畑遺跡 下阿内前田遺跡』 群馬埋文2001



第5図 玉村町の地形

「玉村町の遺跡」より

第2節 歴史的環境

玉村町は近年著しい開発に伴い、多くの発掘調査が行われている。その調査結果から周辺地域の歴史が明らかになってきている。今回の調査で見つかった天明泥流に覆われた建物や畑などの多くの遺構や遺物は、当時の災害の様子や上福島村の人々の生活を知る上で貴重な資料となるものと思われる。以下では玉村町周辺の遺跡について時代ごとに記す。

【旧石器時代】 現在の地形が形成されたのは2万数千年前とされ、しかも低湿地であったため人間が生活できる環境ではなかったとされている。

【縄文時代】 縄文時代の遺構は台地縁辺部にわずかに認められる程で、この時代の遺跡は希薄である。遺構が確認された遺跡は、中期の土坑が検出されている福島曲戸遺跡(8)や上之手石塚Ⅲ遺跡(40)などがある。しかし、これらに伴う集落は確認されておらず、前橋台地が依然として湿潤な状態が続いていたため、居住地としての環境を備えていなかったと考えられる。本遺跡においても中期から後期にかけての土器片や石器等が出土しているが、これらに伴う遺構は確認されていない。

【弥生時代】 玉村町の西に隣接する高崎市の井野川流域は県内では最も弥生文化の盛んな地域の一つであるが、玉村町にはその痕跡すら認められておらず、上之手石塚Ⅲ遺跡から土坑が検出されている程度である。しかし、今後の調査によって弥生時代の遺構が確認される可能性は少なくない。

【古墳時代】 玉村町に大規模な集落が形成されるようになったのは、4世紀初頭と考えられている。これは微高地部から古墳前期の土器が多く出土するようになり、遺跡の拡大傾向を示していることから推測される。前期の集落跡は福島曲戸遺跡や福島稲荷木遺跡(13)、上之手八王子遺跡(37)、上飯島芝根Ⅱ遺跡(30)などがある。上之手八王子遺跡では竪穴住居の外周に方形の溝を巡らす環濠住居が検出されている。福島飯塚遺跡(11)、御門遺跡(46)、下郷遺跡(45)、北原遺跡(26)などの遺跡からは古墳時代前期の周溝墓が検出されている。中でも下郷遺跡では28基の方形周溝墓を中心に円形周溝墓や前方後円墳などが数多く検出されている。また、行花文鏡2面が出土した軍配山古墳(34)もこの時期の築造と考えられている。中期・後期の遺跡は小泉大塚遺跡(24)、小泉長塚遺跡(25)などから検出された古墳や梨ノ木山古墳(33)、オトカ古墳(32)などがある。特に小泉大塚遺跡や小泉長塚遺跡で検出された古墳は「上毛古墳総覧」に記載されていない新たな古墳の発見であり、貴重な遺物も数多く出土し注目を集めた。福島曲戸遺跡や福島久保田遺跡(9)などの低地からは小区画水田などの生産遺構がHr-FA下から検出されている。

【奈良・平安時代】 「倭名類聚抄」によれば那波郡には朝倉、鞆田、田子、佐味、倭文、池田、荒束の七つの郷があり、このうち佐味・鞆田郷の一部、朝倉郷の一部が現在の玉村町に比定する可能性があると考えられている。この時期の集落は数多く存在し、福島稲荷木遺跡、上飯島芝根Ⅱ遺跡、上之手八王子遺跡、行人塚遺跡(39)、神人村Ⅱ遺跡(15)、原浦遺跡(16)、原浦Ⅱ遺跡(17)などで確認されている。金免遺跡(6)や深町遺跡(20)、中道西遺跡(21)、三境遺跡(29)、三境Ⅱ遺跡(28)からは1108年の浅間山噴火による軽石で埋まった水田跡を中心とした生産遺構が検出されている。一万田遺跡(5)では柵列や瓦が確認されており郡衙や寺などの施設が存在していたことが考えられる。また、砂町遺跡(4)や上福島尾柄町遺跡(2)からは推定東山道が検出されている。

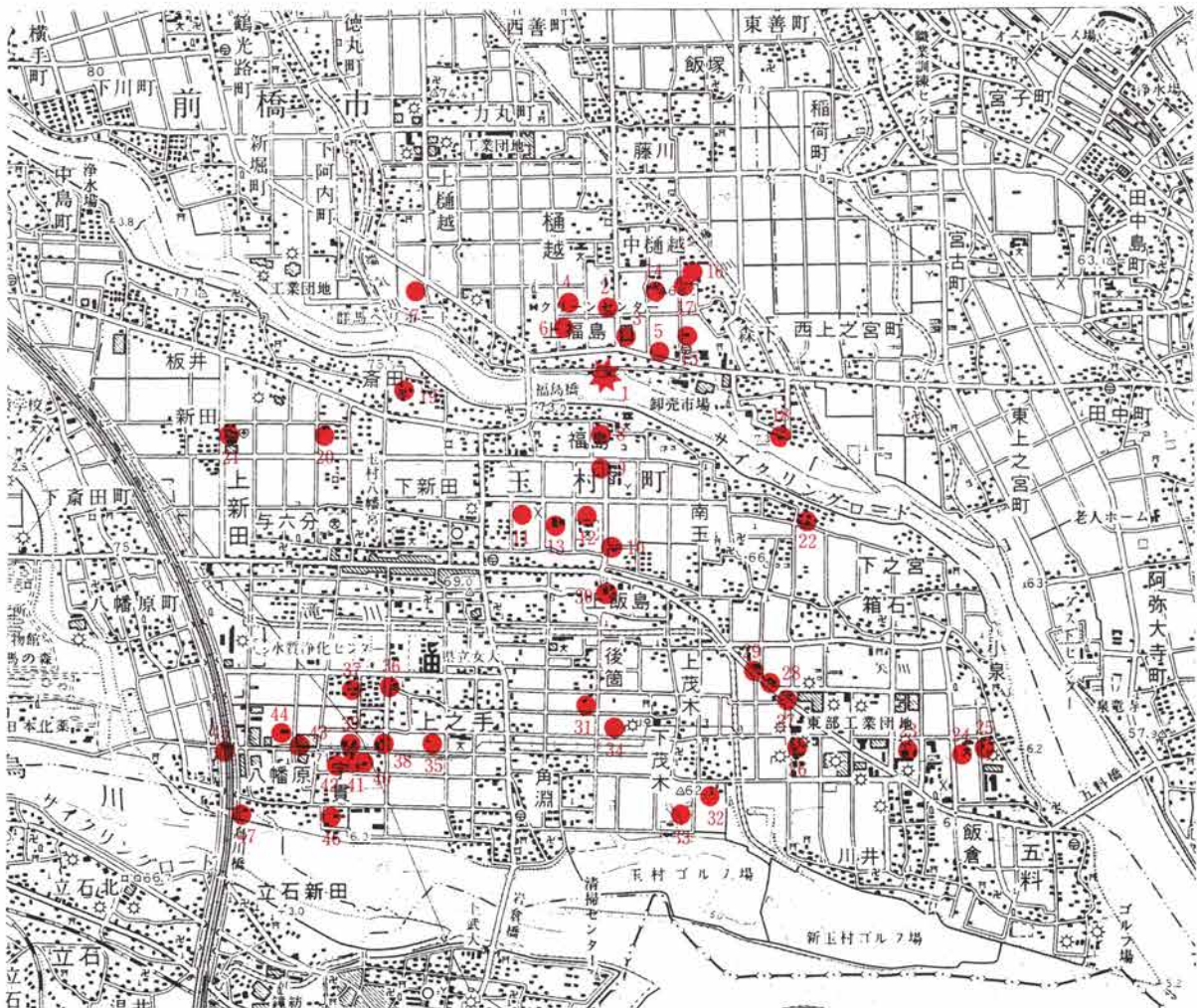
【中・近世】 浅間山噴火による災害から、人々は再び水田区画をつくり始めた頃、微高地には周囲に溝を巡らせ、内部に掘立柱建物群の立ち並ぶ屋敷が出現し始める。田口下屋敷遺跡(19)は斎田環濠屋敷群と呼ばれる中のひとつで、2重構えで外郭は東西80m×120m、内郭は東西45m×45mの規模をもち、1560年前後

に築かれたものとされている。宇貫遺跡(43)では大堀を2重にめぐらせた宇貫館と呼称される遺構が検出され、下郷遺跡や上之手石塚遺跡(42)、福島大光坊遺跡(10)、福島大島遺跡(12)、阿佐美館(14)などの遺跡からも中世の館跡が検出されている。利根川変流以降この地域は度重なる水害の被害を受けていたため、洪水層下からは洪水ごとに復旧した水田や畠が多くの遺跡から検出されている。特に1783年の浅間山噴火に伴う泥流と軽石(As-A)に覆われた遺跡からは状態の良い遺構や遺物が検出されている。本遺跡からも泥流に埋もれた建物跡や当時の生活用具が数多く検出され注目を集めた。利根川右岸の利根添遺跡(22)では長さ58m、高さ1.2m~1.3mの矢川の堤防と村境という役割を果たしていたと考えられている土手と畑が検出されている。また、樋越諏訪前遺跡(18)からは家屋や植え込み、土手、畑などが検出されている。柄田添遺跡(7)からは畑や水田の当時の耕作痕や足跡が明瞭な形で検出されている。また、沖遺跡(23)や小泉大塚遺跡、小泉長塚遺跡でも畑が検出されている。

〔参考文献〕

『玉村町誌』 通史編 上巻1992

『玉村の遺跡』 玉村町教育委員会1992



第6図 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

No	遺跡名	所在地	遺跡の内容	参考文献
1	上福島中町遺跡	玉村町上福島	本書所収	
2	上福島尾柄町遺跡	玉村町上福島	平安時代の水田。推定東山道(牛堀・矢ノ原ルート)	県埋文 報告書2002
3	尾柄町遺跡	玉村町上福島	平安時代の水田。	町教委 報告書1992
4	砂町遺跡	玉村町上福島	古墳時代の用水路、奈良・平安時代の道路遺構(東山道)、平安時代の水田。	県埋文『年報』18
5	一万田遺跡	玉村町上福島	奈良・平安代住の官衛跡か。	「玉村町の遺跡」町教委1992
6	金免遺跡	玉村町上福島	平安時代の水田。	町教委 報告書1989
7	柄田添遺跡	玉村町上福島	奈良・平安時代の住居、水田。江戸時代の畑。	町教委 報告書1997
8	福島曲戸遺跡	玉村町福島	古墳、奈良・平安時代の住居、掘立柱建物、水田。近世の復旧溝等。	県埋文 報告書2002
9	福島久保田遺跡	玉村町福島	古墳時代、平安時代の住居、水田。中世の掘立柱建物、水田。	県埋文『年報』17
10	福島大光坊遺跡	玉村町福島	古墳、奈良・平安時代の住居、水田。中世の屋敷堀等。	県埋文『年報』16・17
11	福島飯塚遺跡	玉村町福島	古墳時代の方形周溝墓、水田。平安時代の住居、水田。中世の溝、ピット群等。	県埋文『年報』18・19
12	福島大島遺跡	玉村町福島	古墳時代の水田、平安時代の住居、水田。中世居館跡。	県埋文『年報』16・17
13	福島稲荷木遺跡	玉村町福島	古墳、奈良・平安時代の住居等。	町教委 報告書1991
14	阿佐美館	玉村町樋越	中世居館。	『群馬県古城の研究』山崎一著
15	神人村Ⅱ遺跡	玉村町樋越	奈良・平安時代住居跡。	町教委 報告書1992
16	原浦遺跡	玉村町樋越	平安時代の住居他。	町教委 報告書1998
17	原浦Ⅱ遺跡	玉村町樋越	古墳時代の溝。平安時代の集落。鎌倉時代以降の溝。	町教委 報告書1996
18	樋越諏訪前遺跡	玉村町樋越	江戸時代の家屋、植え込み、土手、溝、畑。	『群馬の遺跡2-発掘最前線97』
19	田口下屋敷遺跡	玉村町齊田	中世の屋敷跡。	町教委 報告書2000
20	深町遺跡	玉村町上新田	平安時代の水田。	「玉村町の遺跡」町教委1992
21	中道西遺跡	玉村町上新田	平安時代の水田。近世の溝。	町教委 報告書1996
22	利根添遺跡	玉村町下之宮	江戸時代の畠、土手遺構。	町教委 報告書1998
23	沖遺跡	玉村町川井	江戸時代の畠・旧河川跡。	町教委 報告書1999
24	小泉大塚遺跡	玉村町小泉	古墳(後期)。平安時代水田。江戸時代の畠。	町教委 報告書1993
25	小泉長塚遺跡	玉村町小泉	古墳(後期)。江戸時代の畠。	「玉村町の遺跡」町教委1992
26	北原遺跡	玉村町川井	古墳時代、方形周溝墓。奈良・平安時代の集落。	町教委 報告書1995
27	平塚堰北遺跡	玉村町川井	平安時代のピット。江戸時代の水田。	町教委 報告書1996
28	三境Ⅱ遺跡	玉村町上茂木	平安時代の水田。	町教委 報告書1997
29	三境遺跡	玉村町上茂木	平安時代の水田。	町教委 報告書1997
30	上飯島芝根Ⅱ遺跡	玉村町上飯島	古墳時代前期の集落。奈良・平安時代の集落、水田。	「玉村町の遺跡」町教委1992
31	五郎作巡遺跡	玉村町後箇	平安時代の住居、掘立柱建物跡。近・現代の溝。	町教委 報告書1998
32	オトカ塚古墳	玉村町下茂木	古墳(後期)。	上毛古墳総覧芝根村2号墳
33	梨ノ木山古墳	玉村町下茂木	古墳(後期)。	上毛古墳総覧玉村1号墳
34	軍配山古墳	玉村町角淵	古墳(前期)。	上毛古墳総覧芝根村3号墳
35	粉糠島遺跡	玉村町上之手	平安時代の溝、土坑。	町教委 報告書1998
36	上之手八王子Ⅱ遺跡	玉村町上之手	平安時代の住居、溝。中世以降の溝。	町教委 報告書1997
37	上之手八王子遺跡	玉村町上之手	古墳時代前期集落跡。奈良・平安時代集落跡。	町教委 報告書1991
38	原屋敷Ⅱ遺跡	玉村町上之手	平安時代住居跡・溝跡。中世以降溝跡。	町教委 報告書1997
39	行人塚遺跡	玉村町上之手	奈良・平安時代の集落。	「玉村町の遺跡」町教委1992
40	上之手石塚Ⅲ遺跡	玉村町上之手	縄文・弥生時代土坑。平安時代の住居、溝。中世の溝、土坑	町教委 報告書1998
41	上之手石塚Ⅳ遺跡	玉村町上之手	奈良時代の住居。平安～近・現代の溝。	町教委 報告書1993
42	上之手石塚遺跡	玉村町上之手	古墳時代前期方形周溝墓、住居。奈良・平安時代の住居。中世居館。	町教委 報告書2000
43	字貫遺跡	玉村町字貫	古墳時代前期の住居・土坑。中世居館。	町教委 報告書1999
44	赤城Ⅱ遺跡	玉村町字貫	古墳・奈良時代の土坑。中・近世の溝。	町教委 報告書1993
45	下郷遺跡	玉村町字貫	古墳時代前期の方形周溝墓、古墳。中世居館。	県教委 報告書1980
46	御門遺跡	玉村町角淵	古墳時代前期の方形周溝墓跡、住居。	町教委 報告書1998
47	城遺跡	玉村町八幡原	古墳。	町教委 報告書1989

*参考文献の略称は下記の通り

県埋文 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 県教委 群馬県教育委員会
町教委 玉村町教育委員会

第3章 検出された遺構と遺物

本遺跡において検出された遺構は古墳時代から近代にわたっている。調査面は7面で上から順に、第1面江戸時代1（一部近代が含まれる）、第2面江戸時代2、第3面中世、第4面平安時代1（2期に分けられる）、第5面平安時代2、第6面古墳時代1期、第7面古墳時代2期である。以下各面において検出された遺構・遺物について第7面より報告を行う。

第1節 古墳時代1期（7面）

調査面としては最終面となる。層的にはAs-C層下面にあたる。時期は古墳時代前半期以前と考えられる。検出された遺構は溝1条及び土坑1基である。遺物は縄文土器片および石器、石片が少数出土している。

II区1号土坑（第7図、PL1）

18N-19グリッドに位置する。長径1.2m、短径0.7m、深さ約10cmの楕円形を呈す。若干のAs-Cを含む黒褐色土を覆土とする。出土遺物は見られなかった。

II区1土坑（第7図、PL1）

検出した長さは67mである。多少の曲がりは見られるが、ほぼ直線に掘られ、走行方向はN-65°-Eである。溝幅60～80cmで深さは平均で20cm、断面は浅いU字状を呈す。覆土上層にはややAs-Cを混入する黒色粘質土が堆積する。出土遺物はほとんど見られなかった。

第2節 古墳時代2期（6面）

遺構検出面としては基本土層のXVIII層上面である。検出された遺構は、土坑1基、溝7条、ピット群である。これらの時期は古墳時代後半～奈良時代と考えられる。出土遺物はほとんど見られない。

I区1号土坑（第8図）

18N-4グリッドに位置する。1号溝の東側に近接、長円形で長径1.3m、短径1m深さは30cmである。出土遺物は見られない。

I区1号溝（第8図）

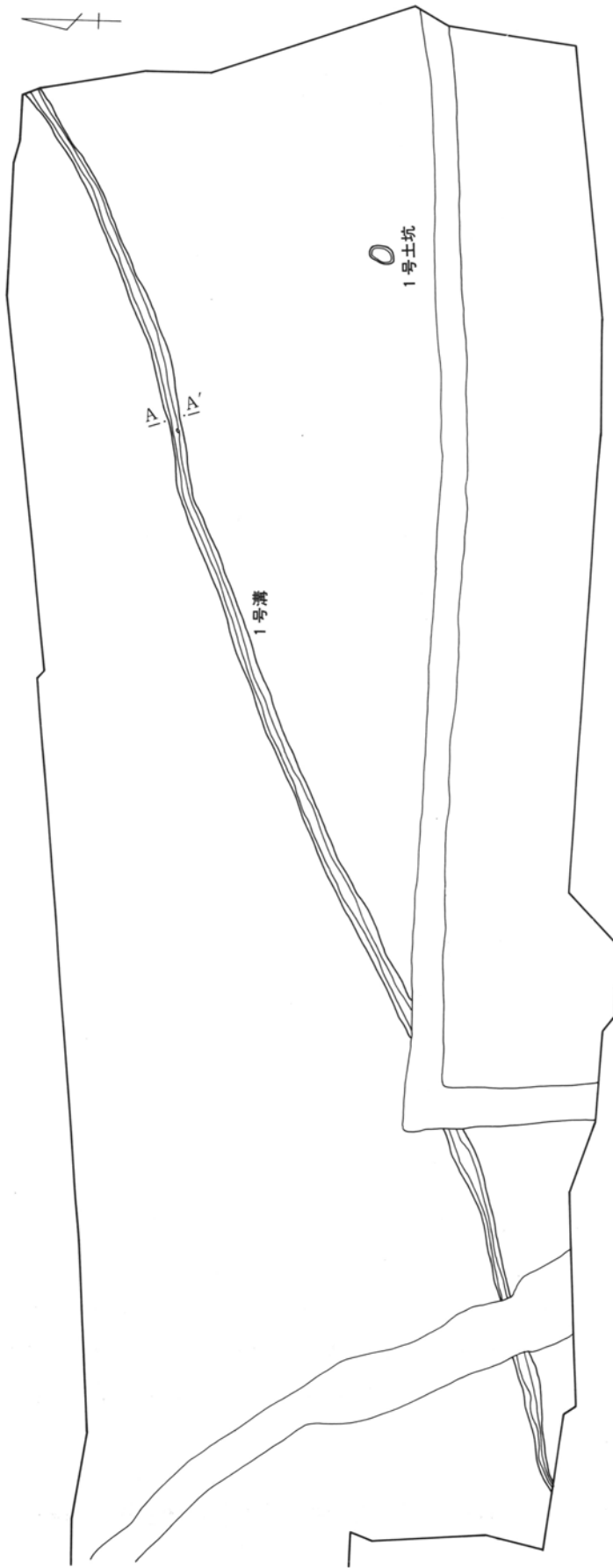
調査区東端において検出された。ほぼ南北に走り、幅20cm、深さ10cmである。覆土は黒褐色の粘質土でAs-Cを含む。出土遺物は見られなかった。

柵列（第9図、PL1）

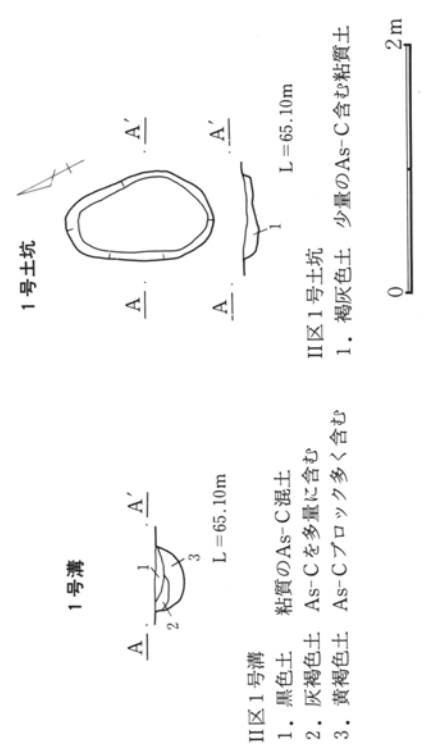
径10～数10cmのピット約350基が広範囲にわたって検出された。場所はII区の東側半分に限られ、20基程が柵列状に並んで検出されている。直線に並ぶものと大きな弧を描くように並列するものがある。走行方向は直線のもののはほぼ東西、その他はやや北に振れた東西方向である。また1号溝の西側にも南北に並ぶ柵列が見られる。ピットの形はおおよそ円形であるが、比較的大きなものは南北方向に長軸を持つ長円形が多い。掘り込みはいずれも浅く、5～10cm位のもものがほとんどである。覆土は黄白色の微砂土である。出土遺物も見られなかった。建物遺構とは思われず、列状に整然と並ぶものも見られることから、柵列としたが遺構の性格は不明である。

I区2号溝（第8図）

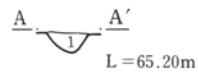
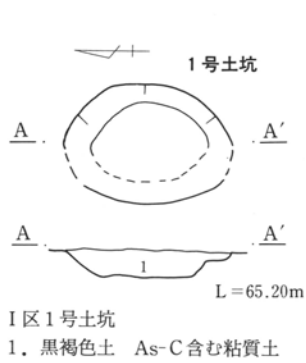
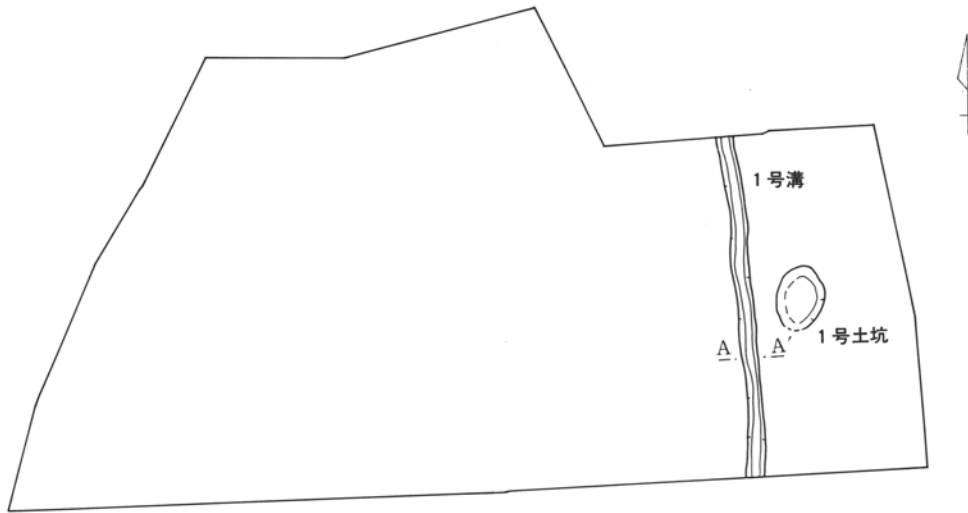
幅約1m、深さは50cm程で断面V字状を呈す。走行方向はN-115°-Eである。黒褐色の粘質土で埋没する。



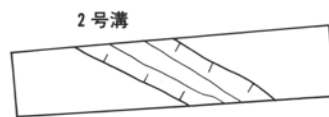
0 8 m



第7図 II区7面全体図



I区1号溝
1. 黒褐色土 As-C含む粘質土



第8図 I区6面全体図

II区1・3号溝 (第10図、PL1)

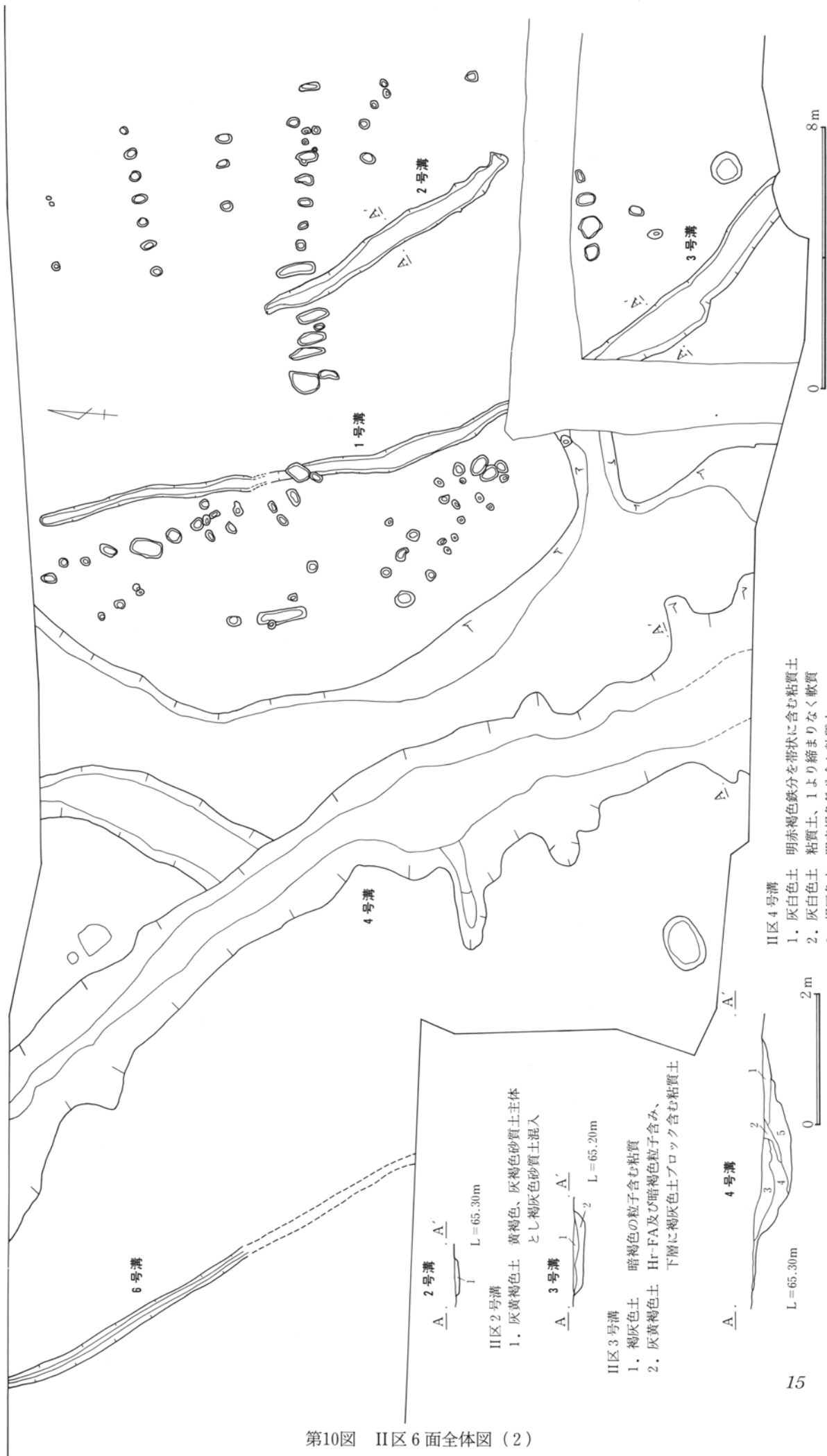
II区中央をやや東に曲がりながら南東に向かって走る。3面3号溝によって切られている。当初別のものと考え北を1号、南側を3号としたが同一遺構と考えられる。検出した長さは25m程で、規模は北側部分が幅30cm、深さ5cmと細いのに対し、南部分は幅が約1m、深さ20cmと広がる。

II区2号溝 (第10図、PL1)

II区中央で1号溝の東に並行して検出されているが、長さ9m程で終息している。幅約70cmで深さは10cm程である。



第9图 II区6面全体图(1)

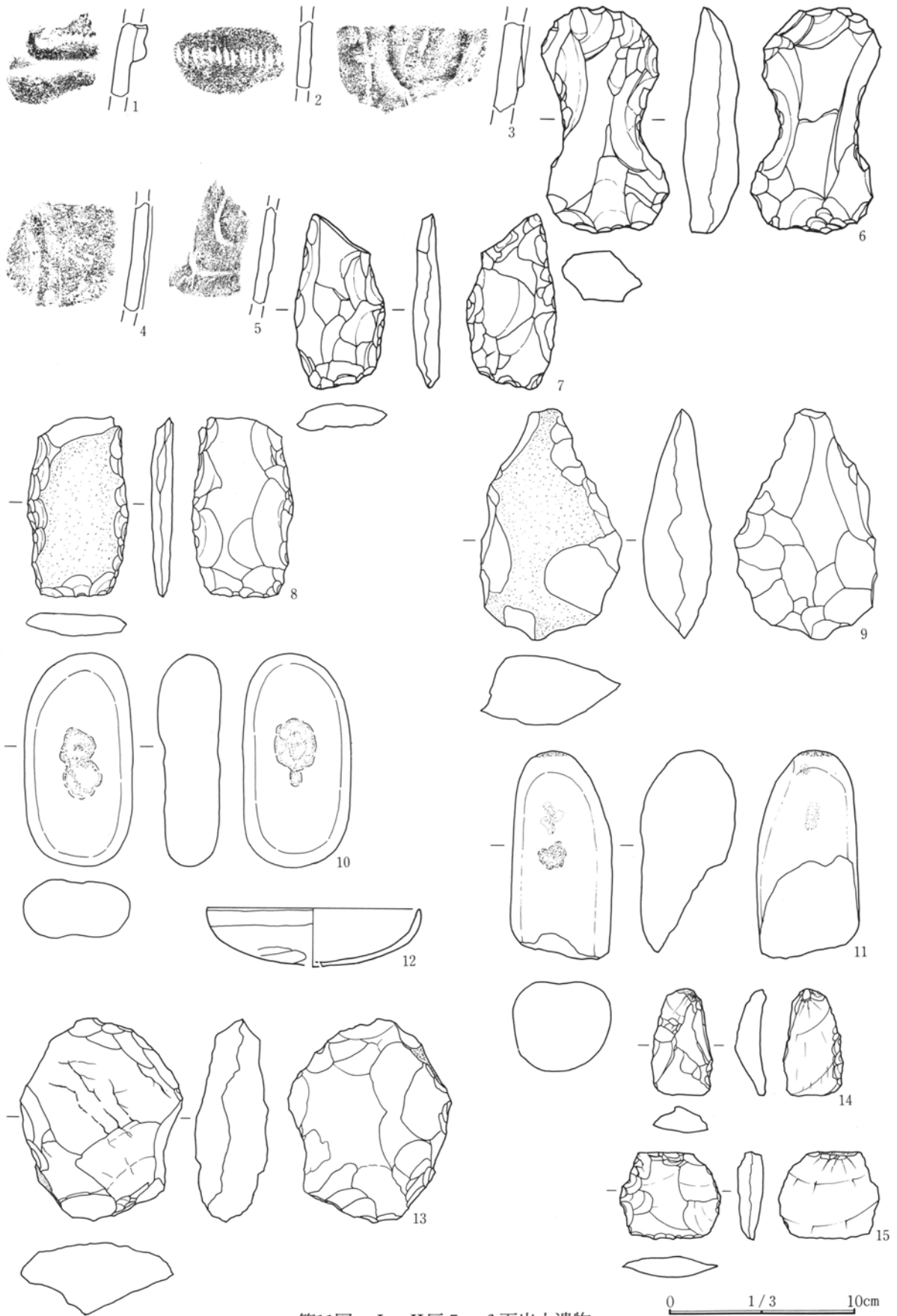


第10図 II区6面全体図(2)

- II区4号溝
1. 灰白色土 明赤褐色鉄分を帯状に含む粘質土
 2. 灰白色土 粘質土、1より縮まりなく軟質
 3. 褐灰色土 明赤褐色鉄分含む粘質土
 4. 褐灰色土 中央部に砂質土を挟む粘質土
 5. 褐灰色土 4より暗色、明褐色鉄分全体に含む粘質土

- II区2号溝
1. 灰黄褐色土 黄褐色、灰褐色砂質土主体
 2. 灰黄褐色土 とし褐灰色砂質土混入

- II区3号溝
1. 褐灰色土 暗褐色の粒子含む粘質
 2. 灰黄褐色土 Hr-FA及び暗褐色粒子含み、下層に褐灰色土ブロック含む粘質土



第11图 I·II区7·6面出土遗物

II区4号溝 (第10図、P L 1)

II区ほぼ中央をやや西に曲がりながら南東に走る。両肩がやや乱れており、上端ラインが明確でなかった。底は平坦で両壁の立ち上がりは緩やかである。幅は約2～3mと一定せず、深さは50cm程である。覆土中に砂層を挟み、水の流れた痕跡が見られる。遺物は出土していない。

II区5号溝

II区の北西隅に検出された。南側の立ち上がり部分のみの検出である。北東から南西に走るものと思われ、規模の大きな溝ないしは落ち込みと考えられる。遺物の出土は無かった。

II区6号溝 (第10図、P L 1)

ほぼ直線で南東に走る。幅40～50cm、深さは5cmと浅く、南に行くにつれ形状は不明瞭となっている。

出土遺物 (第11図、P L 51)

7・6面における出土遺物は13を除きすべてグリッド出土である。7面において縄文土器の小破片が出土しているがいずれも摩滅している。石器は打製石斧、礫器、磨り石、凹石類で縄文時代に帰属するものと思われるが、該期の遺構に関しては確認されなかった。古墳時代の遺物に関しては、土師器坏が1点のみ6面で出土している。

表2 7・6面出土遺物観察表 (第11図)

出土位置 番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高(cm) 重さ(g)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調・胎土 (石材)
I区7面 1	縄文 深鉢	胴部破片		グリッド	横位隆線、連続角押文。	砂粒含む。 中期前半
I区7面 2	縄文 深鉢	胴部破片		グリッド	横位連続爪形文。	砂粒含む。 中期前半
I区7面 3	縄文 深鉢	胴部破片		グリッド	隆線による楕円文、縦位の沈線。	砂粒含む。表面摩滅。 中期後半
I区7面 4	縄文 深鉢	胴部破片		グリッド	縦位沈線。	砂粒含む。表面摩滅。 中期前半
I区7面 5	縄文 深鉢	胴部破片		グリッド	沈線による三角文。	砂粒含む。表面摩滅。 後期前半
II区7面 6	打製石斧	完形 長さ11.9 幅6.4 厚さ2.9 重さ234 黒色安山岩		グリッド出土	1面に自然面残す、厚みのある分銅型。	
II区7面 7	打製石斧	基部欠く 長さ(9.2) 幅4.6 厚さ1.5 重さ64 黒色安山岩		グリッド出土	撥型、薄手でやや風化が見られる。	
II区7面 8	打製石斧	基部欠く 長さ(9.4) 幅(5.2) 厚さ1.1 重さ80 黒色安山岩		グリッド出土	短冊型で基部欠損、刃部側縁は両面剝離により調整、薄手で片面に自然残す。	
II区7面 9	打製石斧	完形 長さ12.3 幅7.6 厚さ3.6 重さ302 黒色頁岩		グリッド出土	刃部は厚く、丸みを持った撥型、片面に自然面残す。	
II区7面 10	凹石	完形 長さ11.3 幅 5.7 厚さ3.3 重さ345 黒色頁岩		グリッド出土	長円形の礫で両面に窪みが見られる。	
II区7面 11	凹石	一部欠 長さ(11.0) 幅 5.4 厚さ4.7 重さー 黒色頁岩		グリッド出土	1端を破損、棒状の礫で1面に浅い窪みを有す。	
I区6面 12	土師器 坏	4分の1	(11.4) 3.0	グリッド	口縁部横撫で、底、体部窪ケズリ	良 黄橙色 微砂粒含む。
II区6面 13	礫器	完形 長さ10.8 幅8.7 厚さ3.8 重さ332 硬質泥岩		2号溝出土	上及び端部に自然面残す、両面より荒割りされて刃部が作り出されている。	
II区6面 14	小形 打製石斧	完形 長さ5.5 幅3.1 厚さ1.2 重さ23 黒色頁岩		グリッド出土	撥形を呈す、縦長剥片より作出、やや内湾し背部は膨らむ、側縁部剝離調整。	
II区6面 15	スクレイパー	完形 長さ4.6 幅5.4 厚さ1.3 重さ31 黒色頁岩		グリッド出土	側縁やや膨らみ、刃部は直線的で剝離調整で作出されている。	

第3節 平安時代I期（5面）

検出された遺構は、竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡1棟、土坑64基、溝9条、ピット（柵列）等である。遺構の確認面はAs-B下の黄褐色土面である。住居は東西に細長い調査区の利根川寄りに集中して分布している。住居間での重複も見られるが、時期は9世紀後半から10世紀後半である。

1. 住居跡

I区 1号住居跡（第12図、PL2・51）

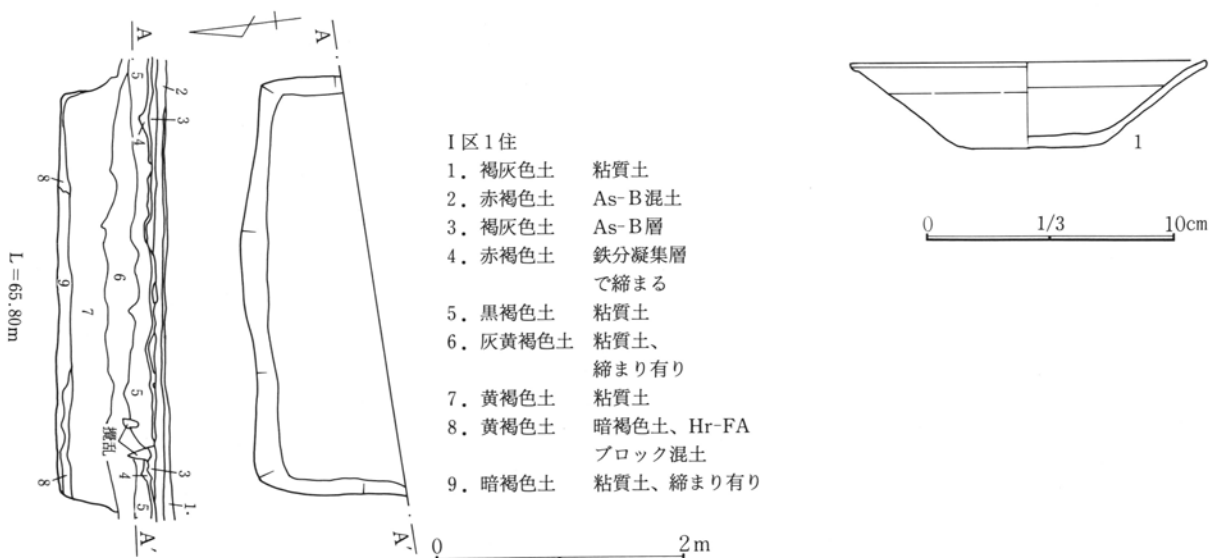
18N-4グリッドに位置する。住居南部半分は調査区域外に入り、全容は不明である。規模は長軸3.2m×短軸調査範囲1.3mである。平面形は検出範囲が少ないため明確にはできない。主軸方位は北壁基軸N-83°-Wを示し、壁高は46cmを測る。

床面はほぼ平坦で、踏み締まりは良好で全体に硬く締まっている。床土は粘質土を主体とする暗褐色土である。部分的に黄褐色土を混土して、貼り床を施した痕跡がある。竈、貯蔵穴などの内部施設は調査区外の可能性が高く調査範囲内からは検出されなかった。遺物は埋土から須恵器坏や埴片などが出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

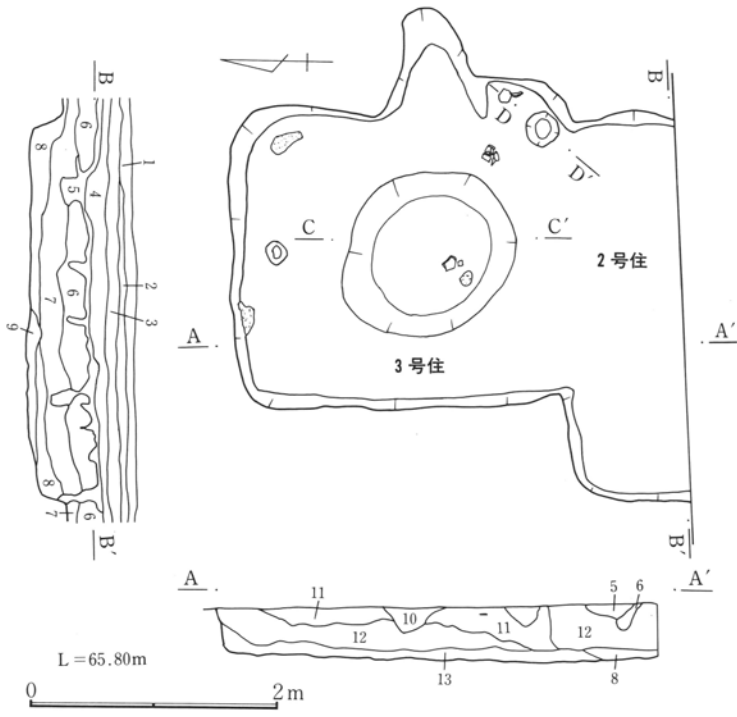
I区 2号住居跡（第13図、PL2・51）

18N-5グリッドに位置する。住居南部は調査区域外に入り、全容は不明である。重複関係は北部で3号住居跡と重複し、本住居がこれより新しい。平面形は半分以上が調査区外のため明確にはできない。規模は長軸3.0m×短軸検出範囲1.0mである。主軸方位は北壁基軸N-90°-Eを示し、壁高は28cmを測る。

床面は平坦であるが、踏み締まりは全体的に弱い。床土は粘質土を主体とする暗褐色土である。竈、貯蔵穴などの内部施設は調査区外の可能性が高く調査範囲内からは検出されなかった。遺物は埋土から土師器小型台付甕台部や坏片、須恵器坏片数点が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。



第12図 I区1号住居跡・出土遺物

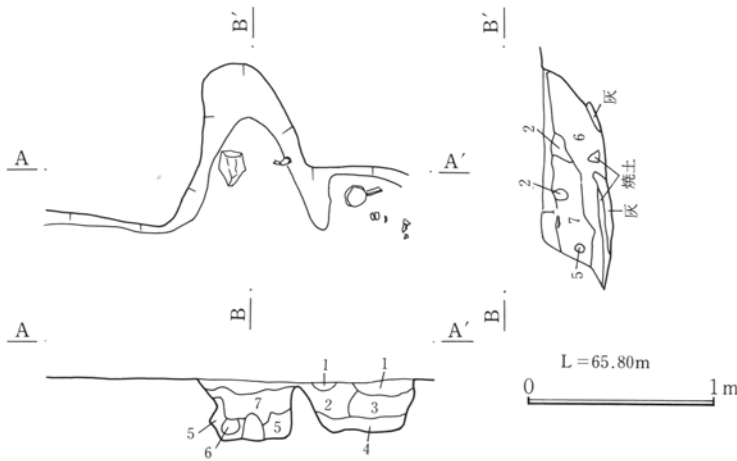


I区3号住床下土坑
1. 黒褐色土 粘質土、やや軟質

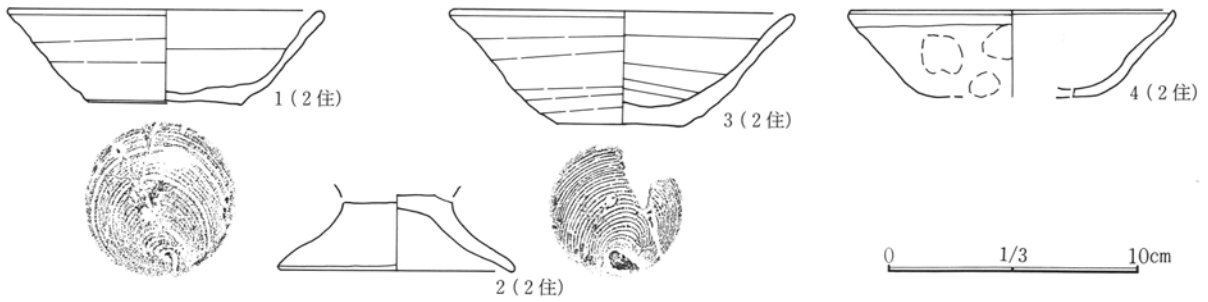


I区3号住貯蔵穴
1. 暗黄橙色土 黄橙色土ブロック少量含む
2. 暗褐色土 粘質土、縮まりあり

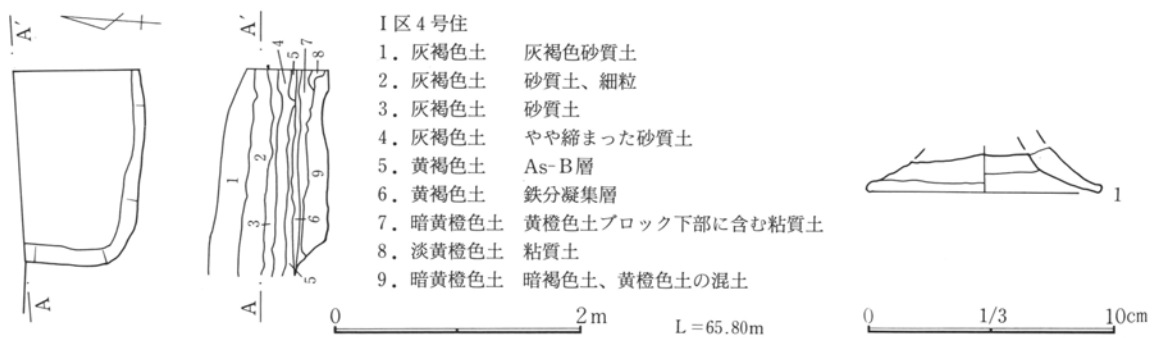
I区2・3号住
1. 褐灰色土 粘質土
2. 赤褐色土 As-B混土
3. 褐灰色土 As-B層
4. 赤褐色土 鉄分凝集層縮まりあり
5. 黒褐色土 粘質土、縮まりあり
6. 灰黄褐色土 砂質土ブロックを下部に含む
7. 暗黄橙色土 黄橙色ブロック下部に含む
8. 暗黄橙色土 暗褐色土、黄橙色土の混土
9. 暗褐色土 粘質土主体、硬く縮まる
10. 黒褐色土 粘質土、縮まりあり
11. 暗黄橙色土 黄橙色土ブロック下部に含む
12. 暗黄橙色土 炭化物少量含む粘質土
13. 褐灰色土 炭化物含む粘質土



I区3号住竈
1. 黄橙色土 柔らかく縮まりない
2. 暗黄橙色土 粘質土、1を少量含む
3. 暗黄橙色土 細砂粒を含む
4. 暗褐色土 粘質土、縮まりあり
5. 黒褐色土 粘質土、縮まりあり
6. 黒褐色土 焼土粒少量含む
7. 褐灰色土 黄橙色土、焼土粒含む



第13図 I区2・3号住居跡・出土遺物



第14図 I区4号住居跡・出土遺物

I区 3号住居跡 (第13図、PL2)

18N-5グリッドに位置する。重複関係は南部で2号住居跡と重複し、本住居がこれより古い。平面形は竈南壁線がやや東に膨らむ南北に長軸をもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸2.6m×短軸2.4m・面積6.24m²である。主軸方位は竈基軸N-90°-Eを示し、壁高は31cmを測る。

床面は平坦であるが、踏み締まりはやや弱い。竈前面には灰や焼土粒が流出しており、周辺の床面は硬く締まっている。竈は東壁やや南側を掘り込み付設され、規模は焼き口幅60cm、燃烧部奥行き38cmである。燃烧部は住居外にあり、中央には支脚に用いたと考えられる石材が置かれている。貯蔵穴は東壁南隅の竈右脇にあり、規模は径30cm×26cm・深18cmである。形状は円形を呈する。住居中央部には床下土坑があり、規模は径1.4m×1.2m・深8cm～16cmである。形状は楕円形を呈する。遺物は床面から須恵器坏が出土し、埋土から土師器坏片や台付甕台部、須恵器坏片などが出土している。床下土坑内からは須恵器坏が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

I区 4号住居跡 (第14図、PL2・51)

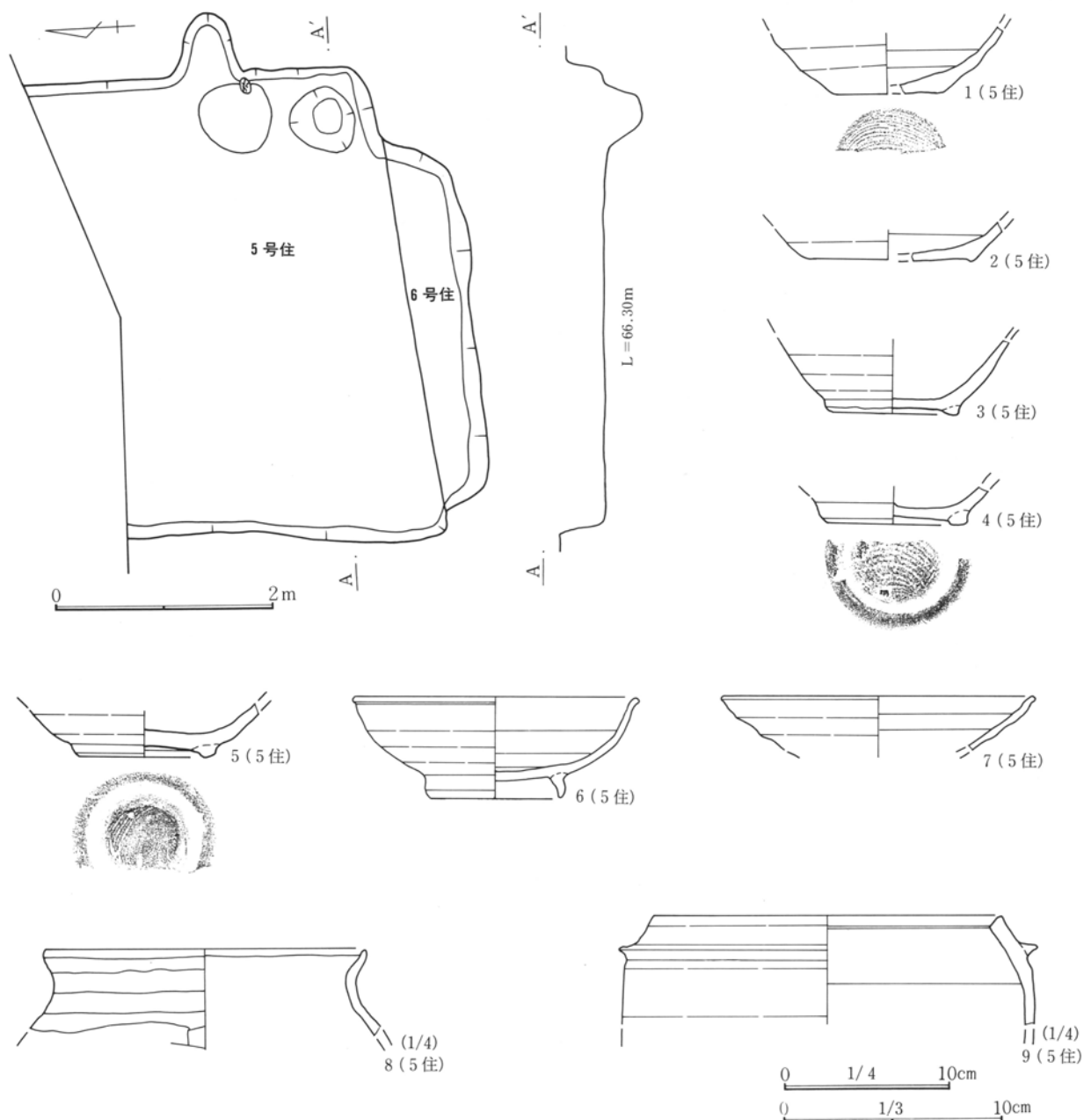
18O-4グリッドに位置する。住居の3/4以上が調査区域外に入り全容は不明である。検出範囲は南壁1.2m・西壁0.6mである。平面形は検出面が僅かなため、明確にはできない。主軸方位は南壁基軸N-89°-Eを示し、壁高は28cmを測る。

床面は不整で、踏み締まりが弱く不安定である。東隅部に床下土坑と考えられる掘り込みがある。遺物は埋土中から土師器坏や須恵器坏などの小片が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

I区 5号住居跡 (第15図、PL2・51)

18K-3グリッドに位置する。住居北部及び東部は調査区域外に入り、全容は不明である。重複関係は南部で6号住居跡と重複し、本住居がこれより新しい。平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈すると考えられる。規模は長軸4.2m×短軸検出範囲3.0mである。主軸方位は竈基軸N-89°-Wを示し、壁高は46cmを測る。

床面は平坦であるが、踏み締まりは弱く安定しない。竈は東壁に付設され、規模は焼き口部幅60cm、燃烧部奥行き30cmである。竈前面には灰や焼土が流出しており、周辺の床面は踏み締まりが強い。貯蔵穴は東壁南隅の竈脇にあり、規模は径60cm×56cm・深28cmである。形状は円形を呈する。遺物は土師器坏片、須恵器坏や埴、羽釜、灰釉陶器片が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。



第15図 I区 5・6号住居跡・出土遺物

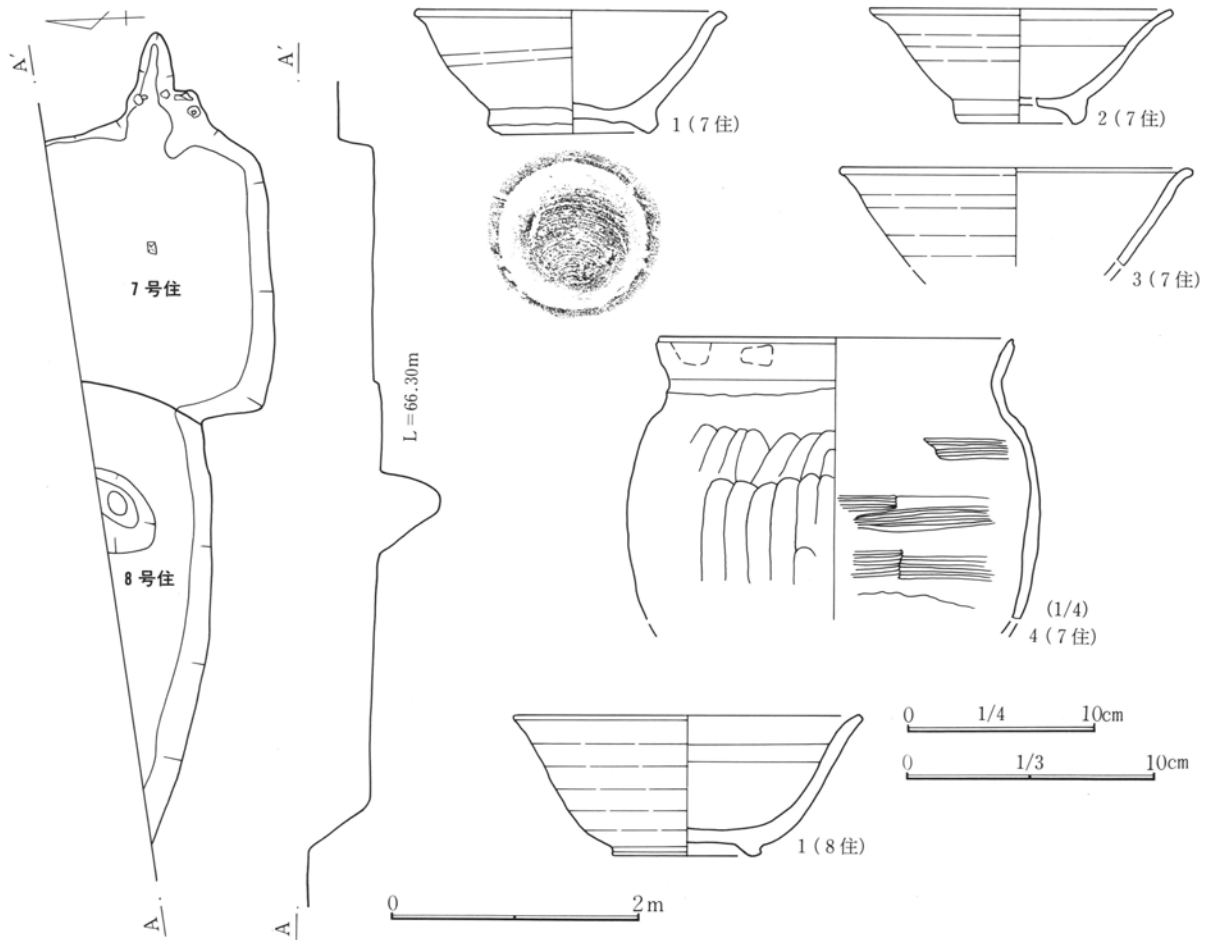
I区 6号住居跡 (第15図、PL 2)

18K-3グリッドに位置する。住居の大半が、5号住居跡と重複するため全容は不明である。新旧関係は本住居がこれより古い。検出範囲は南壁2.8mであり、西壁と東壁は僅かに残存している程度である。主軸方位は南壁基軸N-88°-Eを示し、壁高は46cmを測る。本住居には出土遺物がなく、調査範囲も少ないため時期を明確にすることはできない。

I区 7号住居跡 (第16図、PL 2・51)

18K-5グリッドに位置する。住居北部は調査区外に入り、全容は不明である。重複関係は西部で8号住居と重複し、本住居がこれより古い。平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈すると考えられる。規模は長軸2.4m×短軸検出範囲2.0mである。主軸方位は竈基軸N-86°-Wを示し、壁高30cmを測る。

床面は平坦であり、踏み締めりは弱い。竈前面には灰が流出しており、周辺の床面は硬く締まっている。



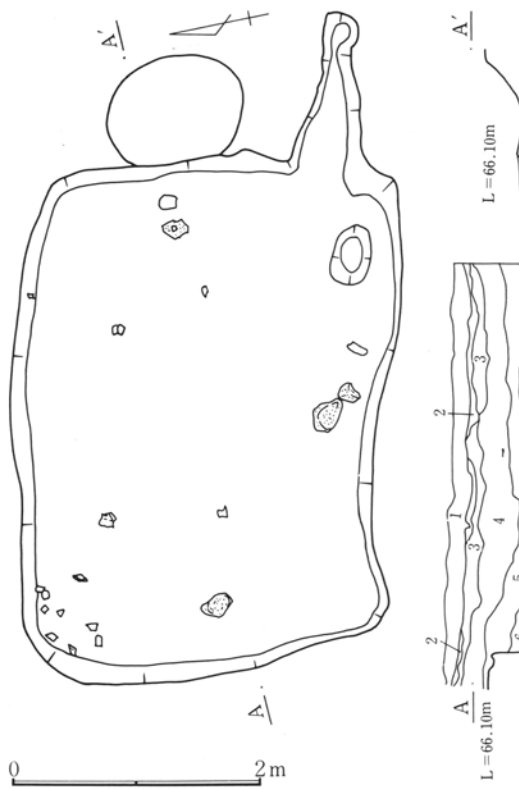
第16図 I区7・8号住居跡・出土遺物

竈は東壁やや南側を掘り込み付設されている。規模は袖部長さ20cm、焚き口幅32cm、燃烧部奥行き20cmである。煙道は更に30cm突出する。貯蔵穴は検出されなかった。遺物は竈内から土師器甕片が出土し、埋土からは土師器坏や埴、須恵器坏や埴小片、釘、鉄滓などが出土している。時期は出土遺物から10世紀前中頃と考えられる。

I区 8号住居跡 (第16図、P L 2・51)

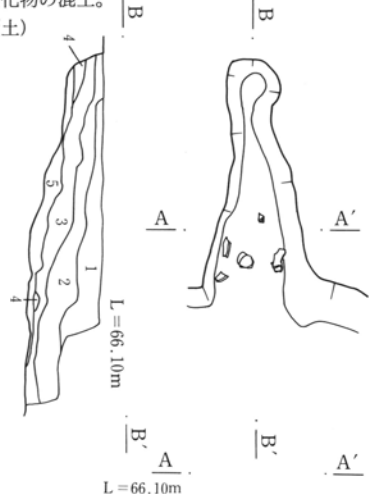
18K-5グリッドに位置する。住居の3/4は調査区域外に入るため、全容は不明である。重複関係は、東側一部で7号住居と重複し、本住居がこれより古い。平面形は残存状態が良好でないため明確にはできない。主軸方位は南壁基軸N-75°-Wを示し、壁高は45cmを測る。

床面は平坦であるが、踏み締まりは弱く小さな凹凸が全体的に見られ安定しない。竈は調査範囲内では検出されなかったが、住居東側で僅かに灰の流出跡が確認されることから、東側に付設されていたものと考えられる。南脇には貯蔵穴と考えられる穴があり、規模は長軸検出範囲50cm×短軸60cm・深60cmである。形状は楕円形を呈すると考えられる。遺物は須恵器埴が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。



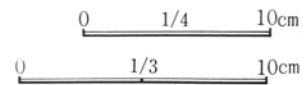
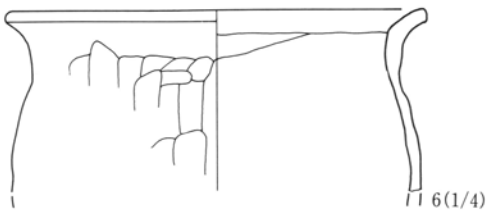
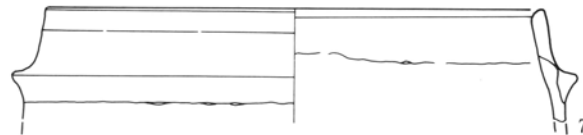
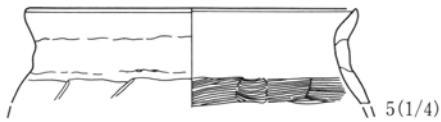
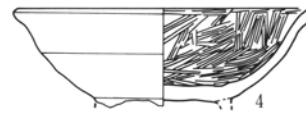
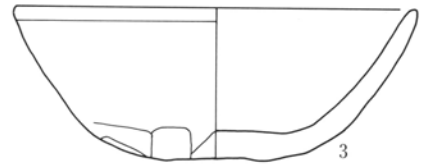
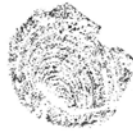
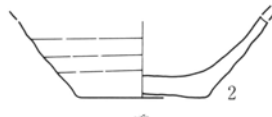
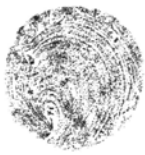
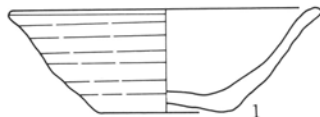
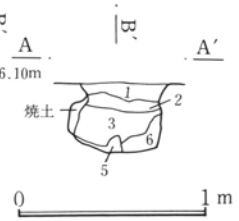
II区1号住

1. As-B層
2. 黄褐色土 粘質土
3. 褐色土 粘質土、炭化物若干含む
4. 暗褐色土 炭化物少量含む粘質土
5. 暗褐色土 炭化物多く含む、黄橙色砂質土ブロック少量含む
6. 褐灰色土 炭化物少量含む
7. 黄褐色土 粘性強く、炭化物混入
8. 黒色灰層。
9. 暗赤褐色土 焼土塊、炭化物の混土。
(7. 8. 9層は掘方覆土)

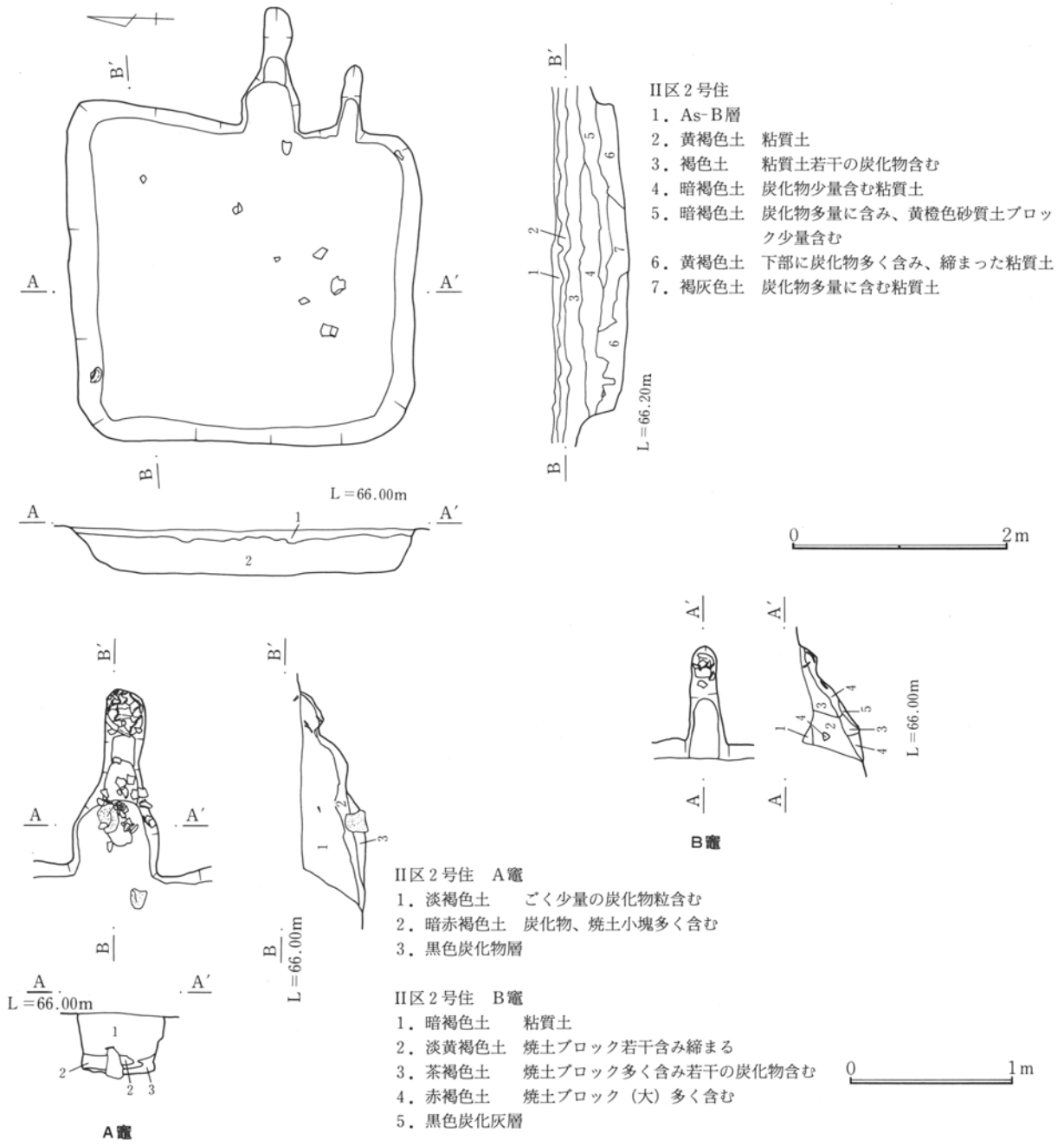


II区1号住竈

1. 淡褐色土 少量の焼土粒、炭化物含む粘質土
2. 淡褐色土 焼土粒、炭化物粒まだらに含む粘質土
3. 淡褐色土 2と似るが、焼土、炭化物多く含む
4. 赤褐色土 焼土塊
5. 黒色炭化物層
6. 淡褐色土 炭化物、若干の焼土含む縮まる



第17図 II区1号住居跡・出土遺物

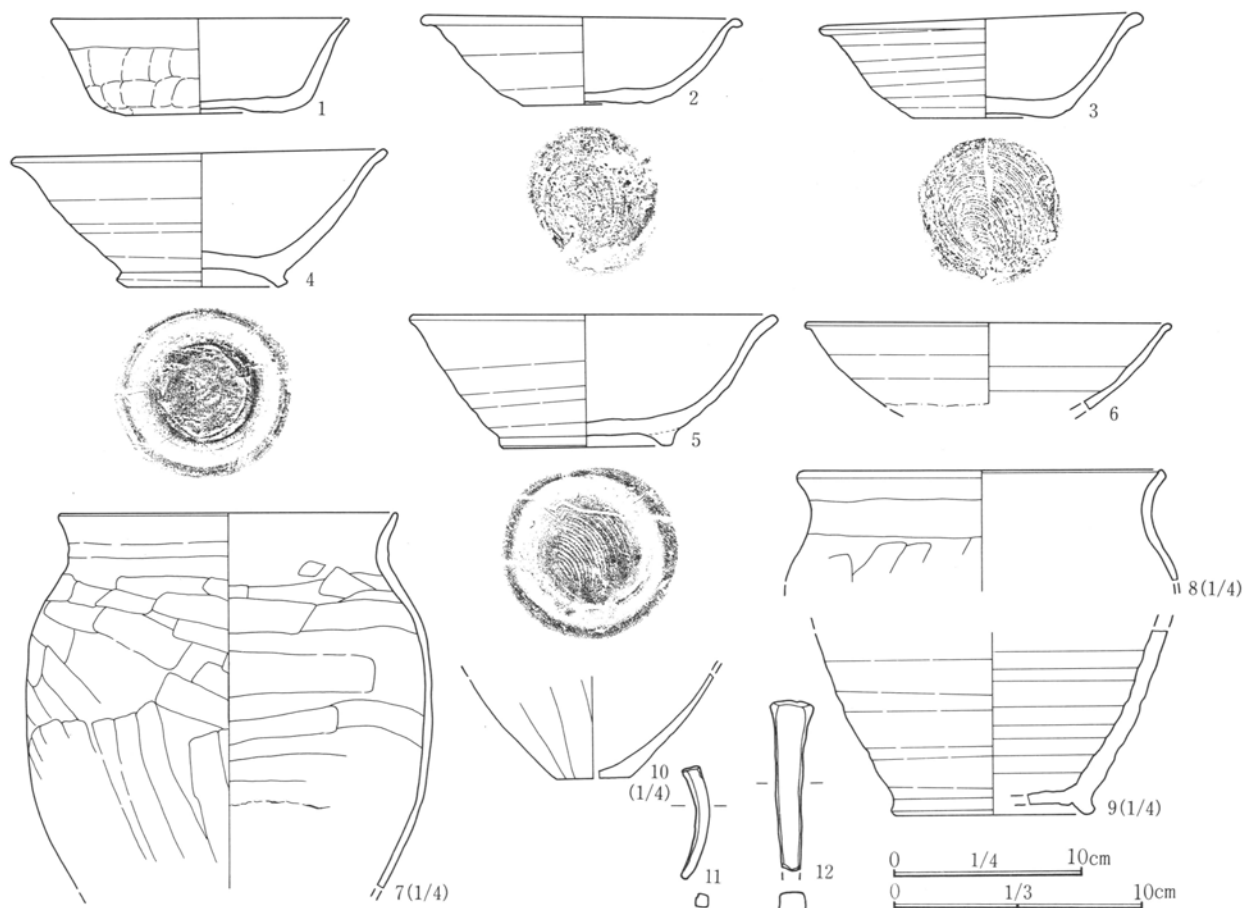


第18図 II区 2号住居跡

II区 1号住居跡 (第17図、PL 4・51)

38N-1グリッドに位置する。平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.0m×短軸3.0m・面積は12.0m²である。主軸方位は竈基軸N-71°-Wを示し、壁高は34cmを測る。

床面は西壁方向へ緩やかに傾斜をし、踏み締まりは弱く安定しない。竈は東壁南隅部に付設されている。規模は焼き口幅38cm、燃烧部、煙道部を含む長さは1.3mである。貯蔵穴は東壁南隅の竈右脇にあり、規模は径48cm×28cmである。形状は楕円形を呈する。遺物は竈から羽釜が出土し、覆土中からは土師器甕や鉢、須恵器壺などが出土している。19図1の土器は掘り方からの出土である。時期は出土遺物から10世紀前半と考えられる。

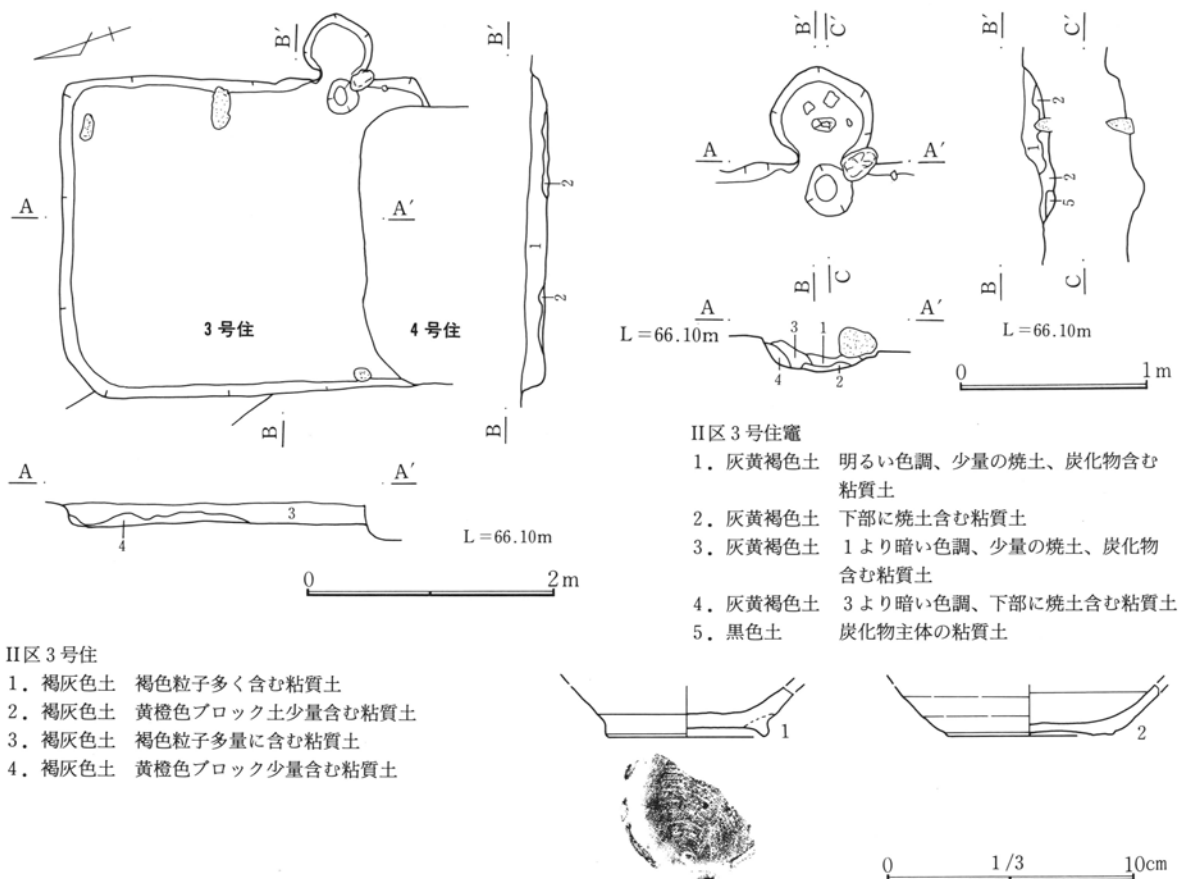


第19図 II区 2号住居跡出土遺物

II区 2号住居跡 (第18・19図、P L 4・51)

28N-20グリッドに位置する。重複関係は南部で9号住居跡と重複し、本住居がこれより新しい。平面形は居住中に拡張したためか、東壁が僅かに内側に歪む不整形な隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.0m×短軸2.8m・面積8.4㎡である。主軸方位はB竈基軸N-83°-Wを示し、壁高は約50cmを測る。

床面は中央部に向かいやや傾斜をしているが、踏み締まりは良好である。竈は東壁南側に2基付設されている。A竈は重複する9号住居跡のものである可能性も考えられたが、調査時の土層断面や9号住居跡の検出結果により、A竈は本住居の拡張以前のものであると考えられ、B竈は住居拡張による付け替え後のものであることが確認された。燃焼部はA、Bとも住居外にあり、規模はA竈、焚き口幅16cm、燃焼部奥行き50cm、煙道64cm。B竈、焚き口幅44cm、燃焼部奥行き34cm、煙道32cmである。遺物はA竈の煙出し口から土師器甕が伏せた状態で出土している。B竈の煙道からは須恵器坏や埴が出土し、覆土中からは灰釉埴が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。



第20図 II区 3号住居跡・出土遺物

II区 3号住居跡 (第20図、P L 4・51)

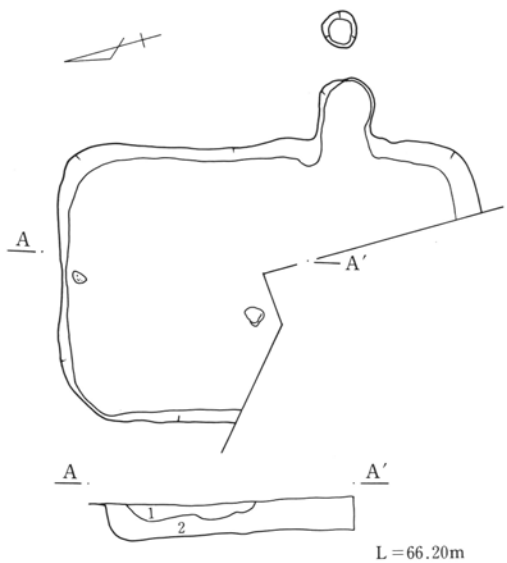
38N-2グリッド位置する。重複関係は南壁部で4号住居跡と重複し、本住居がこれより古い。平面形は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.9m×短軸2.4m・面積6.96m²である。主軸方位は竈基軸N-73°-Wを示し、壁高は21.5cmを測る。

床面はほぼ平坦で、踏み締まりは弱い。竈は東壁南側隅部に付設され、燃焼部は住居外に円形に張り出す。規模は焚き口幅24cm、燃焼部奥行き50cmである。火床部中央に支脚として据えられた石が検出されている。右袖部には、石を袖材に使用したと考えられる痕跡がある。遺物は埋土中から若干の須恵器塊類が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

II区 4号住居跡 (第21図、P L 4・52)

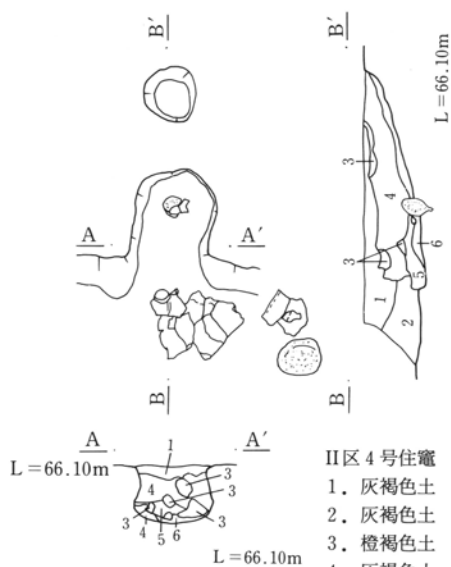
38N-2グリッドに位置する。南西部が調査区域外に入るため全容は不明である。重複関係は北部で3号住居跡と重複し、本住居がこれより新しい。平面形は南北に長軸をもつ、隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.3m×短軸2.2m・面積7.26m²である。主軸方位は竈基軸N-73°-Wを示し、壁高は39cmを測る。

床面は平坦で、踏み締まりは良好である。竈は東壁南側に付設され、燃焼部は住居外にある。規模は焚き口幅36cm、燃焼部奥行き60cm、煙道54cmである。煙道先端部には径20cm程の煙出穴が良好な状態で残存する。竈前面には使用していたと考えられる土師器土釜が落ち込んだ状態で出土している。また、刀子の先端部と考えられる鉄製品が出土している。時期は出土遺物から10世紀後半と考えられる。



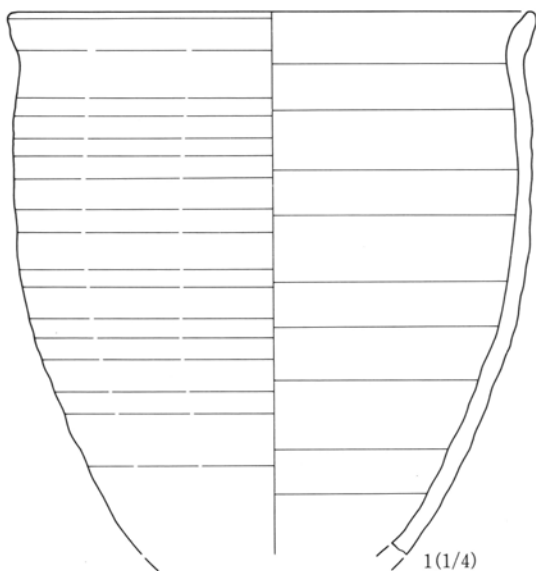
II区4号住

1. 褐灰色土 黄橙色ブロック少量含む粘質土
2. 褐灰色土 褐色粒多量に含む粘質土



II区4号住竈

1. 灰褐色土 ごく少量の焼土含む粘質土
2. 灰褐色土 1と似るが灰を少量含む
3. 橙褐色土 焼土塊
4. 灰褐色土 焼土ブロック少量含む
5. 暗灰褐色土 灰、炭化物、焼土混入
6. 黒色炭化物層

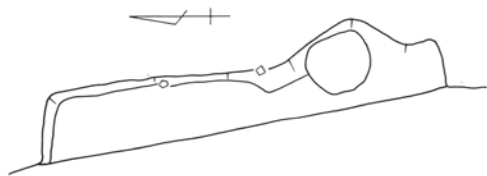


第21図 II区4号住居跡・出土遺物



0 1/4 10cm

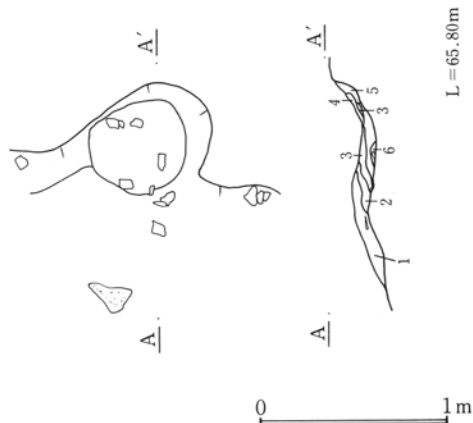
0 1/3 10cm



II区5号住竈

1. 灰褐色土 2号溝覆土
2. 灰褐色土 若干の焼土ブロック、炭化物含む
3. 赤褐色土 焼土塊多く含む
4. 灰黒色土 灰および炭化物層
5. 灰褐色土 焼土少量含む
6. 灰褐色土 地山土主体とし、焼土少量含む

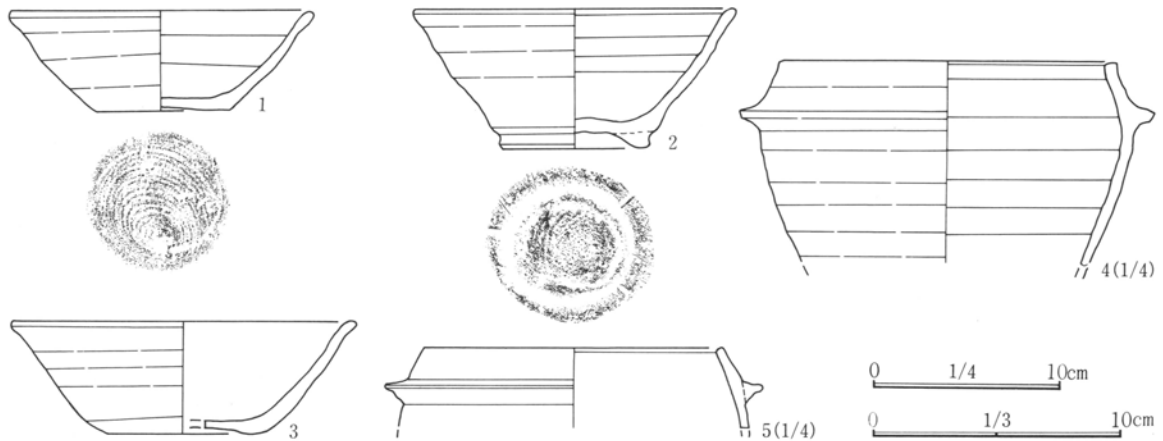
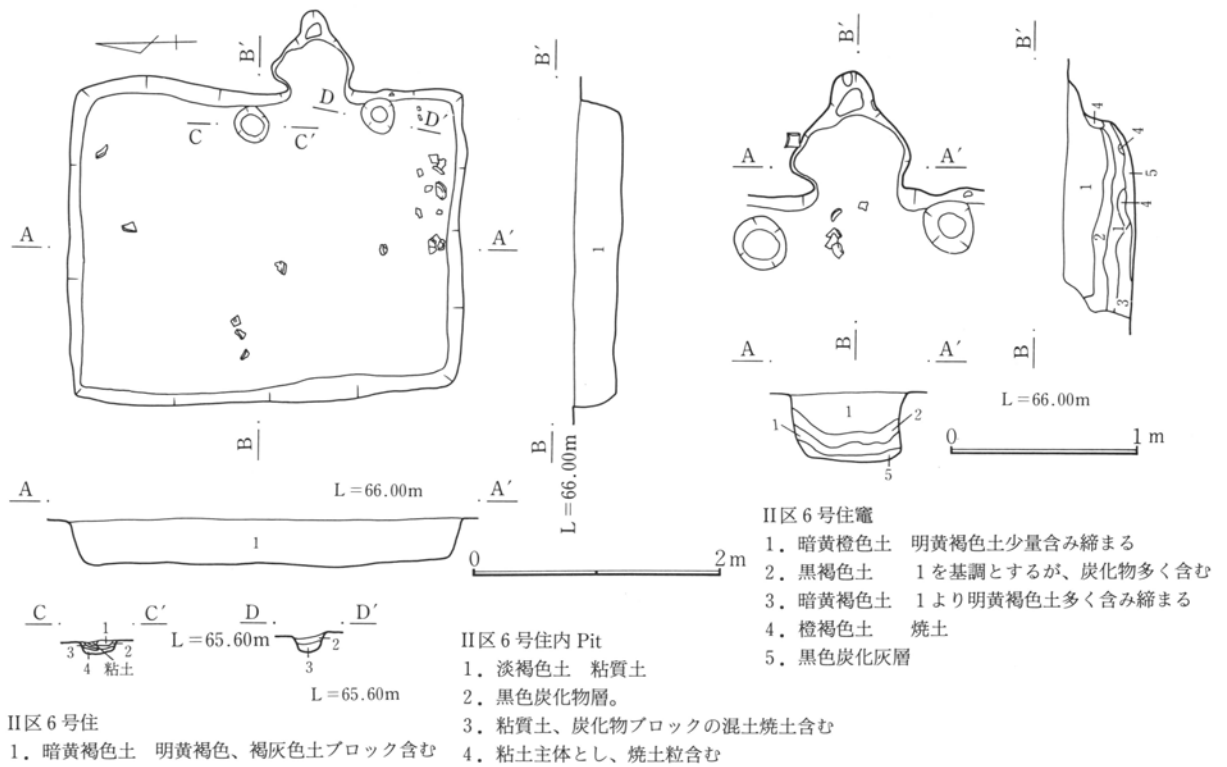
0 2m



L=65.80m

0 1m

第22図 II区5号住居跡

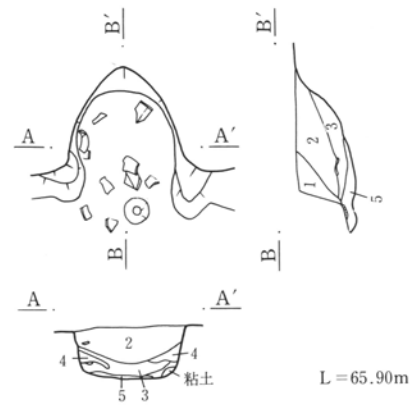
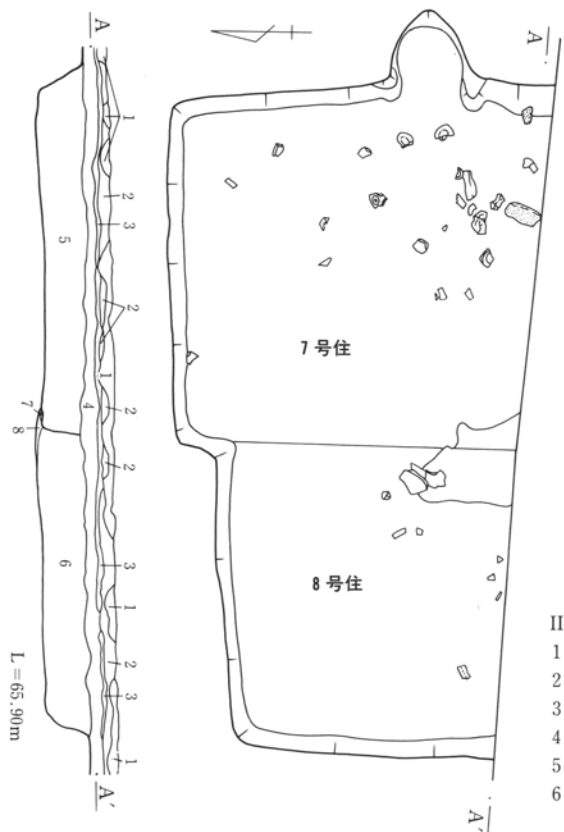


第23図 II区6号住居跡・出土遺物

II区 5号住居跡 (第22図、P L 4)

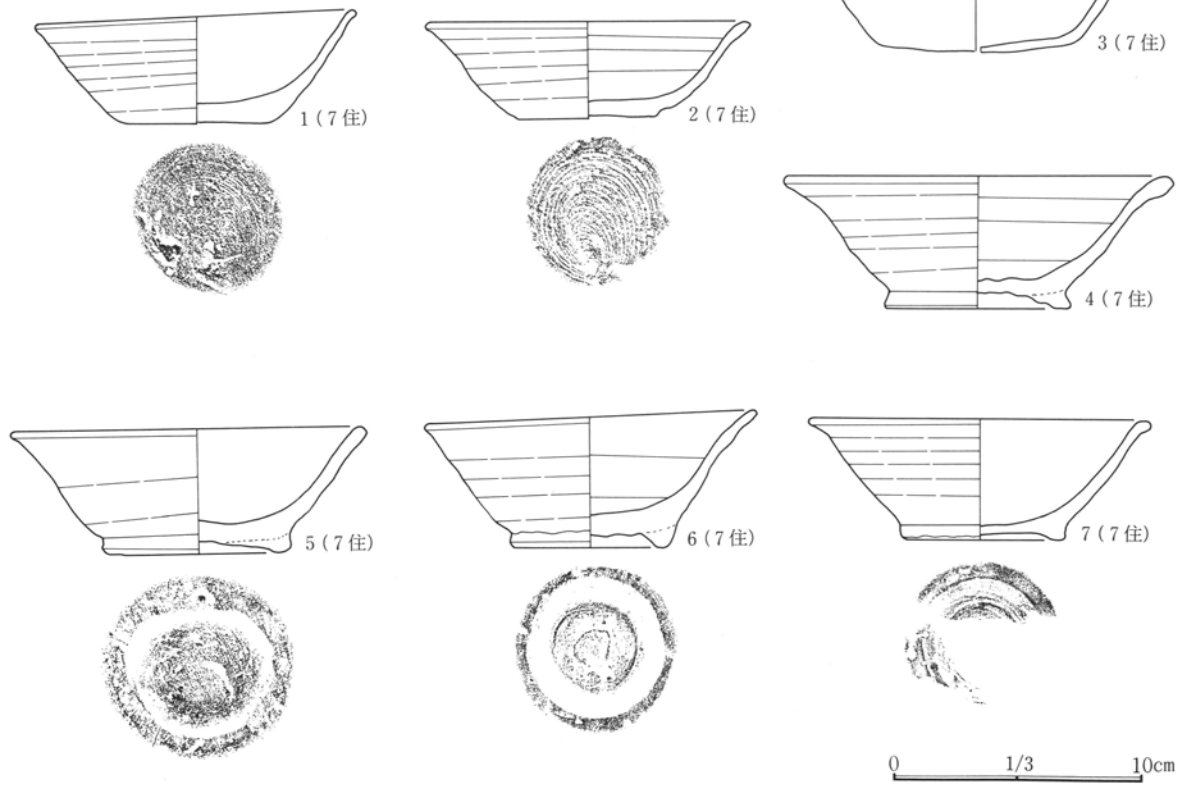
28O-15グリッドに位置する。住居の大半が2号溝との重複によって消失しており、遺存状態は極めて悪く、東壁北側と竈燃焼部が僅かに残存する程度である。平面形及び規模は残存状態が良好でないため明確にはできない。主軸方位は竈基軸N-90°-Wを示す。

竈は東壁に付設され、燃焼部は住居外にある。規模は焚き口幅約50cmである。上層部が殆ど削平されているため構造は不明であるが、火床部の焼土層、灰層が認められた。遺物は竈内から須恵器坏片が出土している。時期は出土遺物から10世紀前半と考えられる。

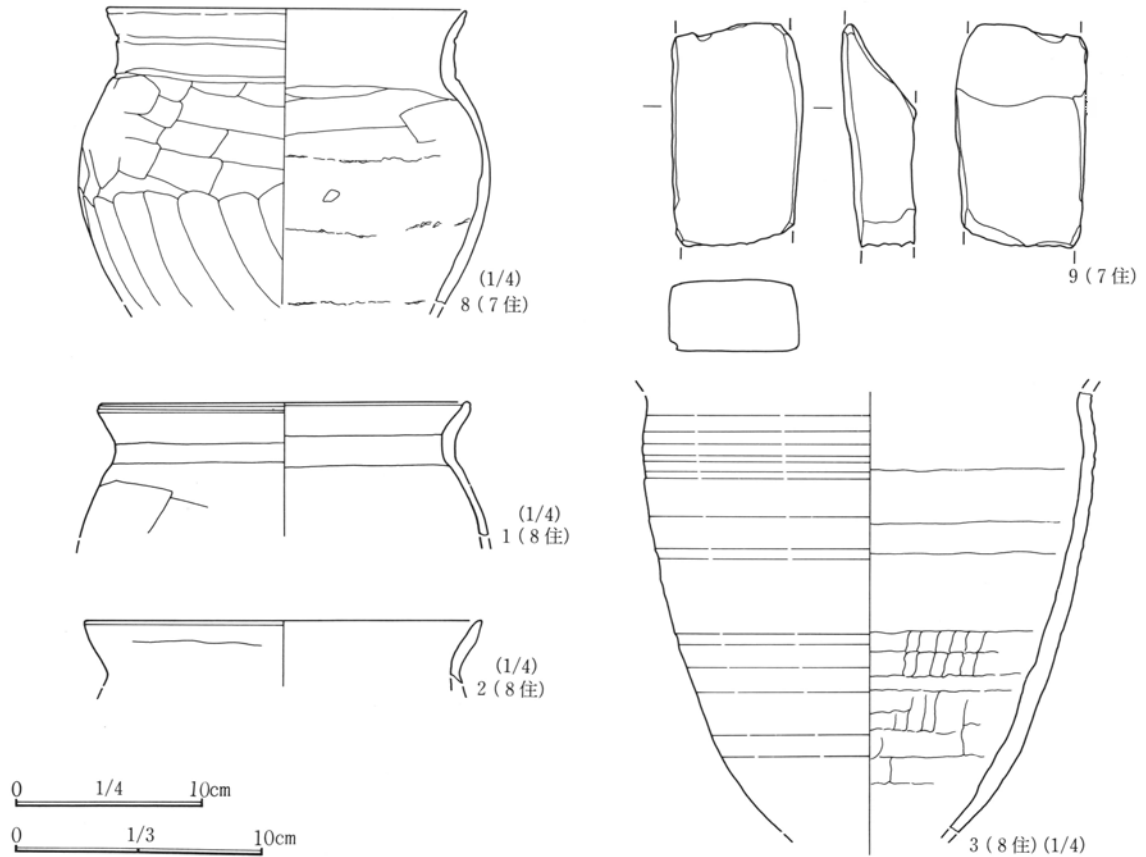


- II区7号住竈
1. 淡褐色土 少量の焼土粒、炭化物粒含み締まる
 2. 淡褐色土 1と近似、やや灰色を帯びる
 3. 橙褐色土 焼土塊、炭化物含む
 4. 橙褐色土 焼土多く含む
 5. 黒色炭化物層

- II区7・8号住
1. 暗褐色土 As-B混土 (復旧畠耕土)
 2. As-B層
 3. 黄色土 粘性土
 4. 暗褐色土 粘性強く締まる
 5. 灰褐色土 黄色土ブロック含む
 6. 灰褐色土 黄色土ブロック含み やや灰色を帯びる
 7. 赤褐色土 焼土ブロック
 8. 黒色土 灰、炭化物層



第24図 II区7・8号住居跡・出土遺物



第25図 II区7・8号住居跡出土遺物

II区 6号住居跡 (第23図、P L 4・52)

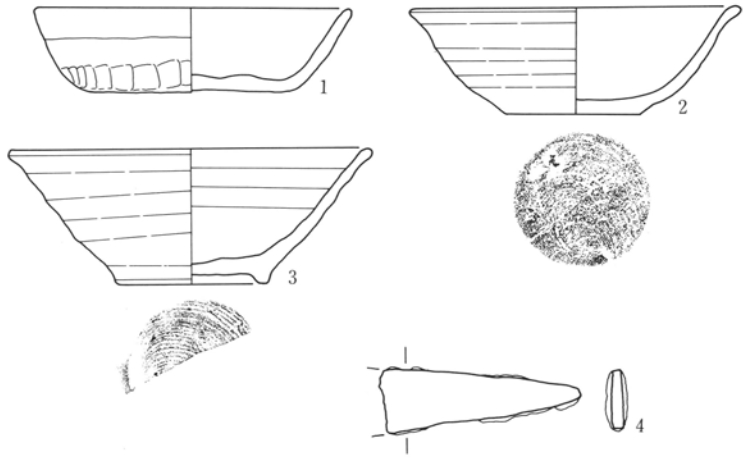
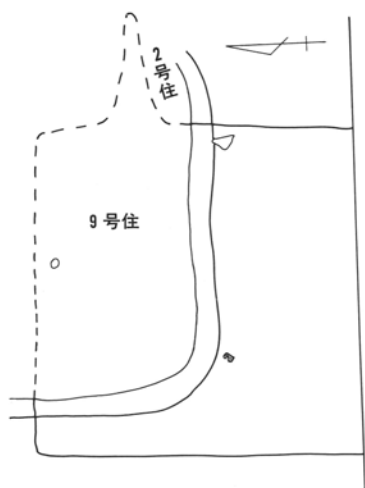
28M-14グリッドに位置する。平面形は南北に長軸をもつ長方形を呈する。規模は長軸3.1m×短軸2.4m・面積7.44m²である。主軸方位は竈基軸N-90°-Wを示し、壁高は41cmを測る。

床面は平坦で、踏み締まりは弱く安定しない。埋土は灰褐色土主体で、径が5～7cm程の明黄褐色ブロックを多量に含む。この埋土は基本土層には見られず、人為的に埋められた可能性が強い。竈は東壁やや南側に付設され、燃烧部は住居外にある。規模は焚き口幅40cm、燃烧部奥行き50cmである。竈両脇には径28cm・深10cm程度の円形のピットが一对検出されている。貯蔵穴である可能性もあるが、浅く出土遺物もないため、ここではピットとして扱った。遺物は南壁寄りが多く出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

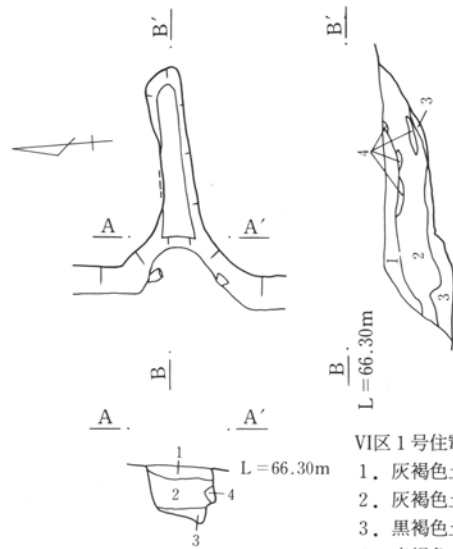
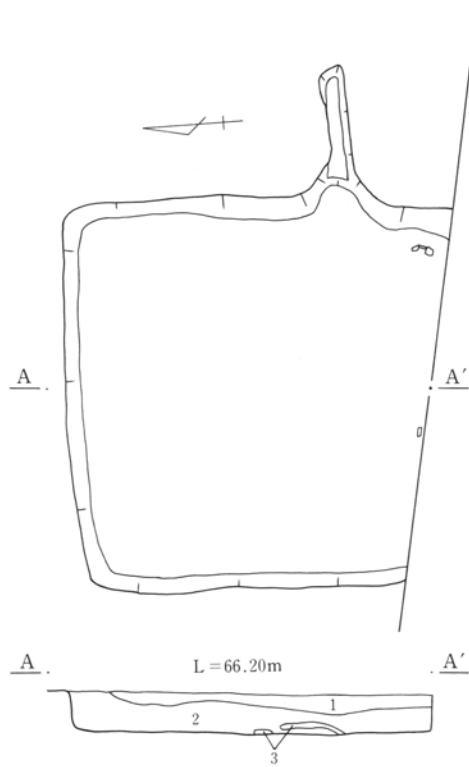
II区 7号住居跡 (第24・25図、P L 5・52)

28M-12グリッドに位置する。住居南部は調査区域外に入る。重複関係は西部で8号住居と重複し、本住居がこれより新しい。平面形は、南北に長軸をもつ長方形を呈すると考えられる。規模は長軸検出範囲3.0m×短軸2.8mである。主軸方位は竈基軸N-90°-Eを示し、壁高は30.5cmを測る。

床面はほぼ平坦で、踏み締まりは良好である。特に竈周辺は硬く締まっている。竈は東壁に付設され、規模は焚き口幅60cm、燃烧部奥行き60cmであり、壁外に馬蹄形に張り出し壁面は良く焼土化している。埋土は6号住居跡同様、自然堆積ではない様相を示す。遺物は竈内から土師器・須恵器埴類が出土し、竈前面の床面からも多くの土器片が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

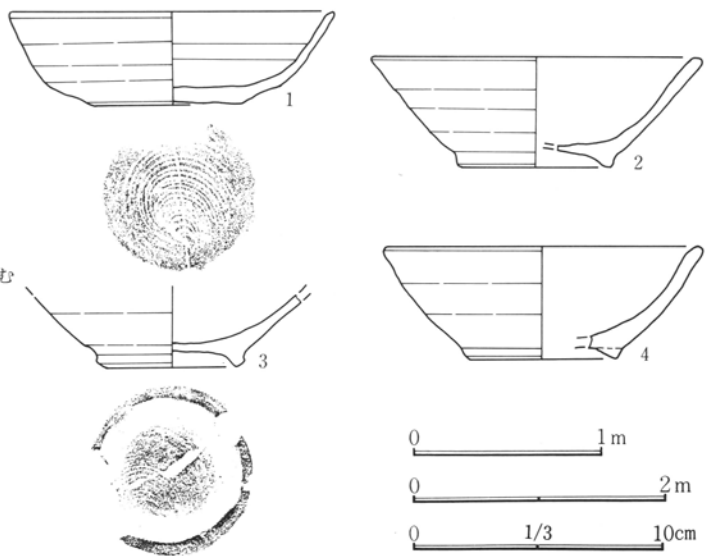


第26図 II区9号住居跡・出土遺物

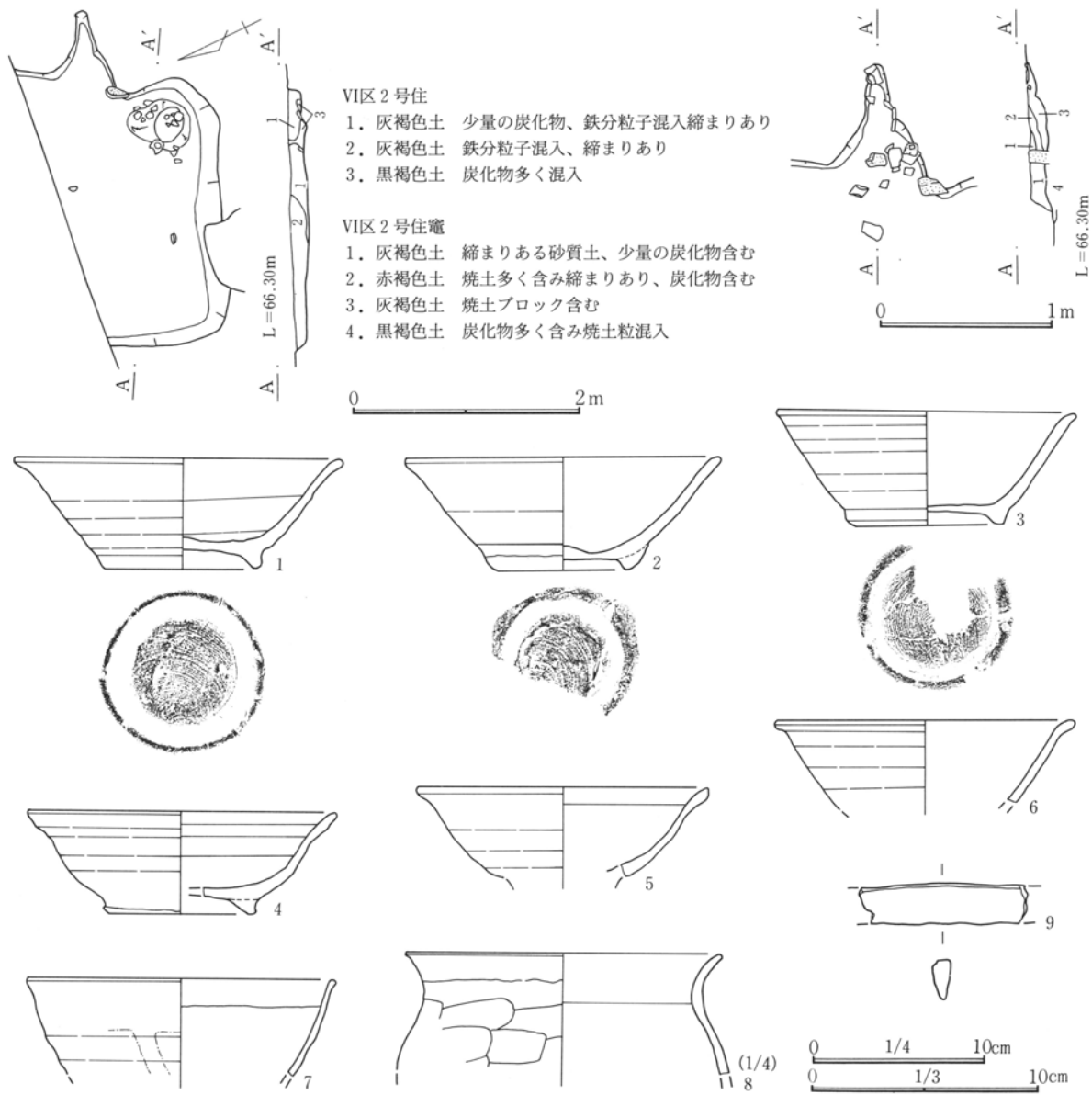


- VI区1号住竈
- 1. 灰褐色土 少量の焼土含む
 - 2. 灰褐色土 1よりも焼土やや多い
 - 3. 黒褐色土 灰、炭化物、焼土塊の混土
 - 4. 赤褐色土 焼土塊

- VI区1号住
- 1. 灰褐色土 微砂粒、少量の炭化物含む
 - 2. 灰褐色土 微砂粒、鉄分凝集小斑、少量の炭化物含む
 - 3. 黒色炭化物層



第27図 VI区1号住居跡・出土遺物

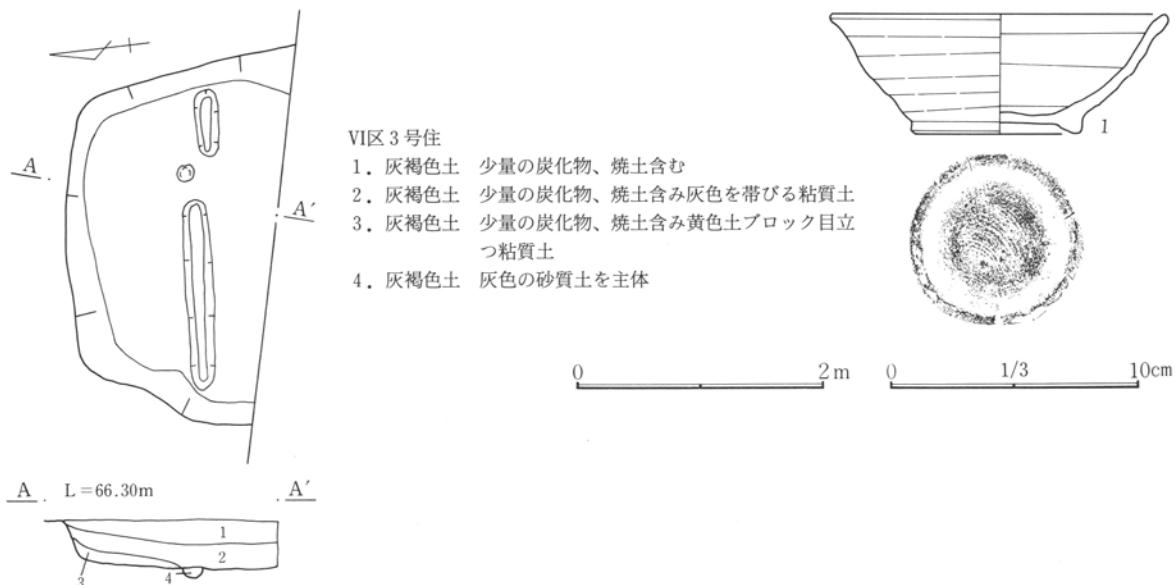


第28図 VI区 2号住居跡・出土遺物

II区 8号住居跡 (第24・25図、PL 5・52)

28N-13グリッドに位置する。住居跡南部は調査区域外に入る。重複関係は東部で7号住居跡と重複し、本住居跡がこれより古い。平面形は残存状態が良好でないため不明確である。検出範囲は北壁2.0m×西壁2.0mである。主軸方位は北壁線基軸N-90°-Wを示し、壁高は30.5cmを測る。

床面は平坦で、踏み締まりは弱い。住居跡埋没状態は6、7号住居跡同様で灰褐色土一層である。竈は7号住居跡との重複により消失し検出されなかったが、南東隅部で竈から流出したと考えられる灰と炭が残存している。遺物は土師器甕口縁部片や羽釜などが出土している。時期は出土遺物から10世紀前半代と考えられる。



- VI区3号住
1. 灰褐色土 少量の炭化物、焼土含む
 2. 灰褐色土 少量の炭化物、焼土含み灰色を帯びる粘質土
 3. 灰褐色土 少量の炭化物、焼土含み黄色土ブロック目立つ粘質土
 4. 灰褐色土 灰色の砂質土を主体

第29図 VI区3号住居跡・出土遺物

II区 9号住居跡 (第26図、P L 5・52)

28N-20グリッドに位置する。重複関係は南部で2号住居跡と重複し、本住居がこれより古い。本住居は2号住居跡床下で確認されたため、南壁及び西壁一部しか残存していない。このため平面形、内部施設などは明確にはできない。主軸方位は南壁基軸N-87°-Wを示す。

竈は僅かに焼土が残存している程度であったが、東壁から外に約80cm程延びる沿道部が確認されたが残存状態が悪く構造等は不明である。遺物は埋土中から土師器坏、須恵器坏や埴が出土した他、鉄鏃なども出土している。時期は出土遺物から9世紀後半と考えられる。

VI区 1号住居跡 (第27図、P L 6・52)

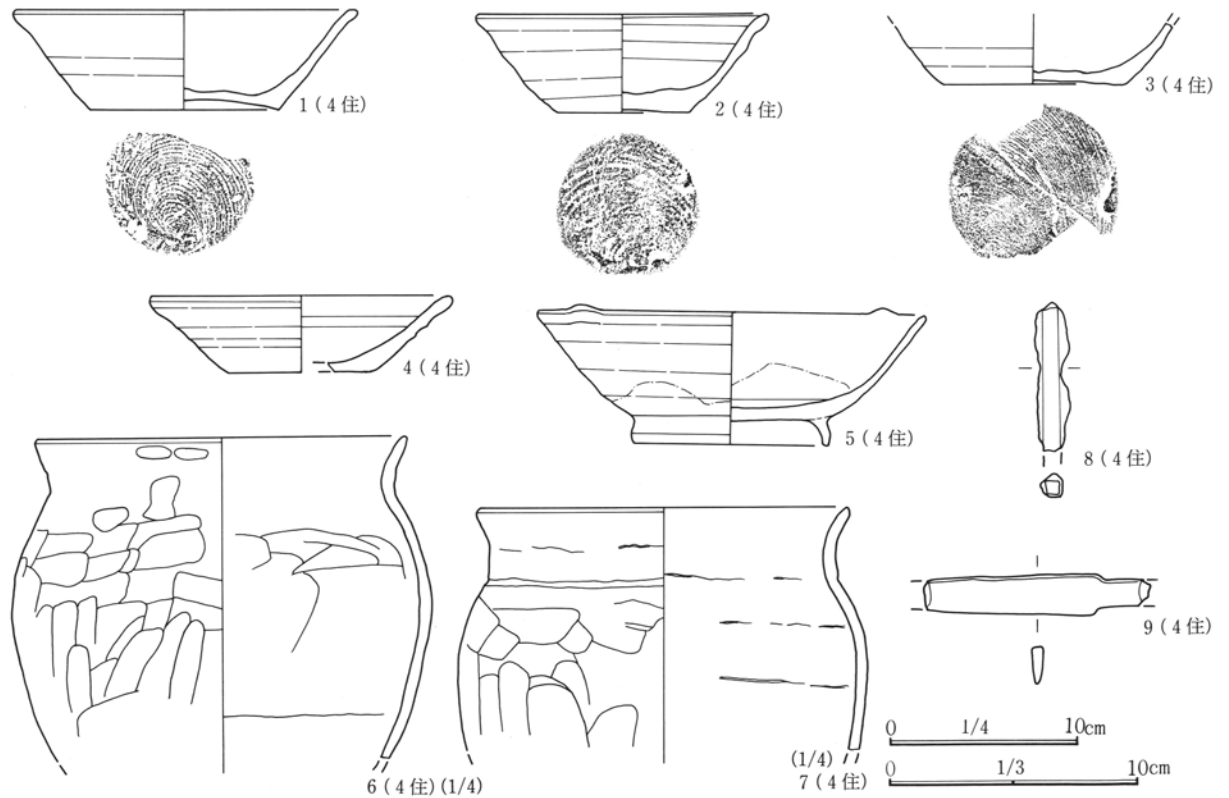
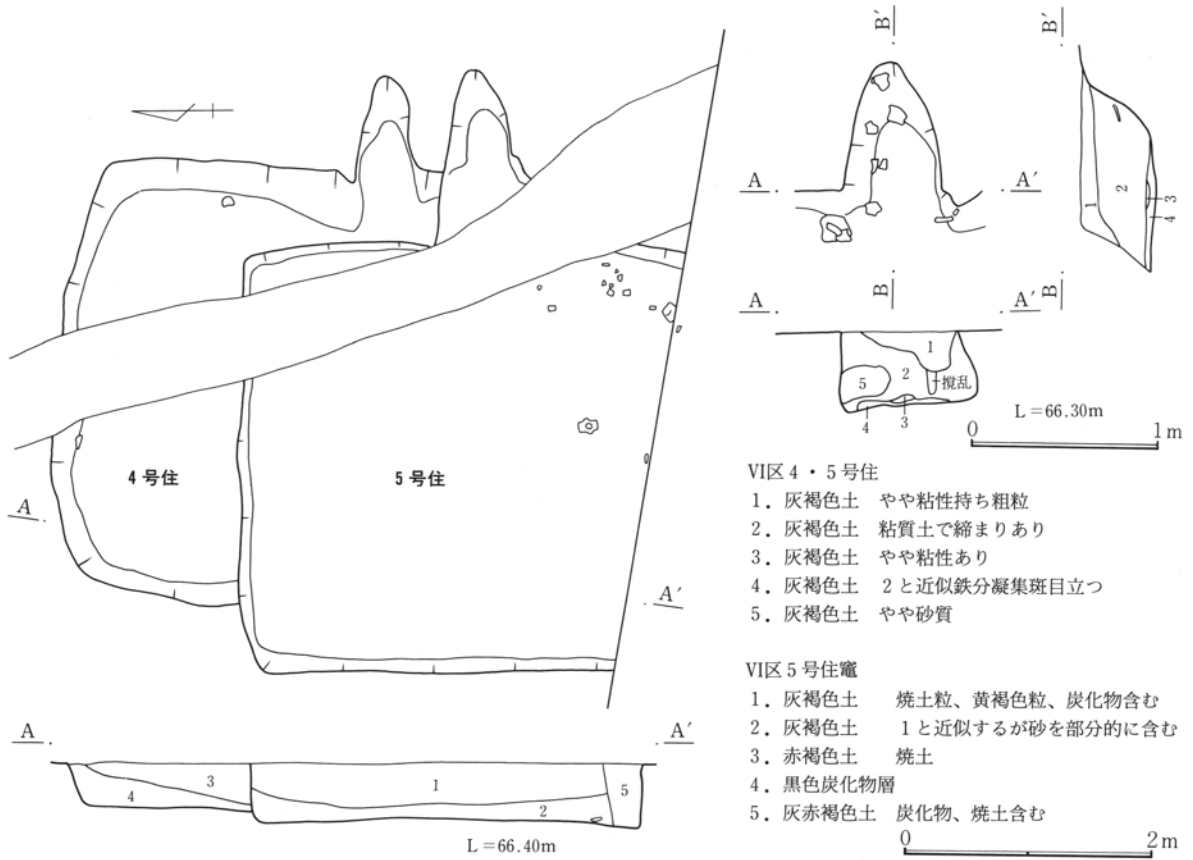
38P-13グリッドグリッドに位置する。南北にやや長い長方形を呈すと考えられるが、南側一部は調査区外であるため全容は明確にはできない。規模は長軸検出範囲3.1m×短軸3.1mである。主軸方位は竈基軸N-90°-Wを示し、壁高は約30cmを測る。

床面は平坦で中央及び竈前面は比較的締まりがある。竈は東壁に付設され、規模は焚き口幅80cm、燃烧部奥行き20cm、煙道1.2mである。袖石や支脚は検出されなかった。出土遺物は竈内及び壁脇から須恵器坏・埴類が僅かながら出土している。時期は出土遺物から9世紀後半と考えられる。

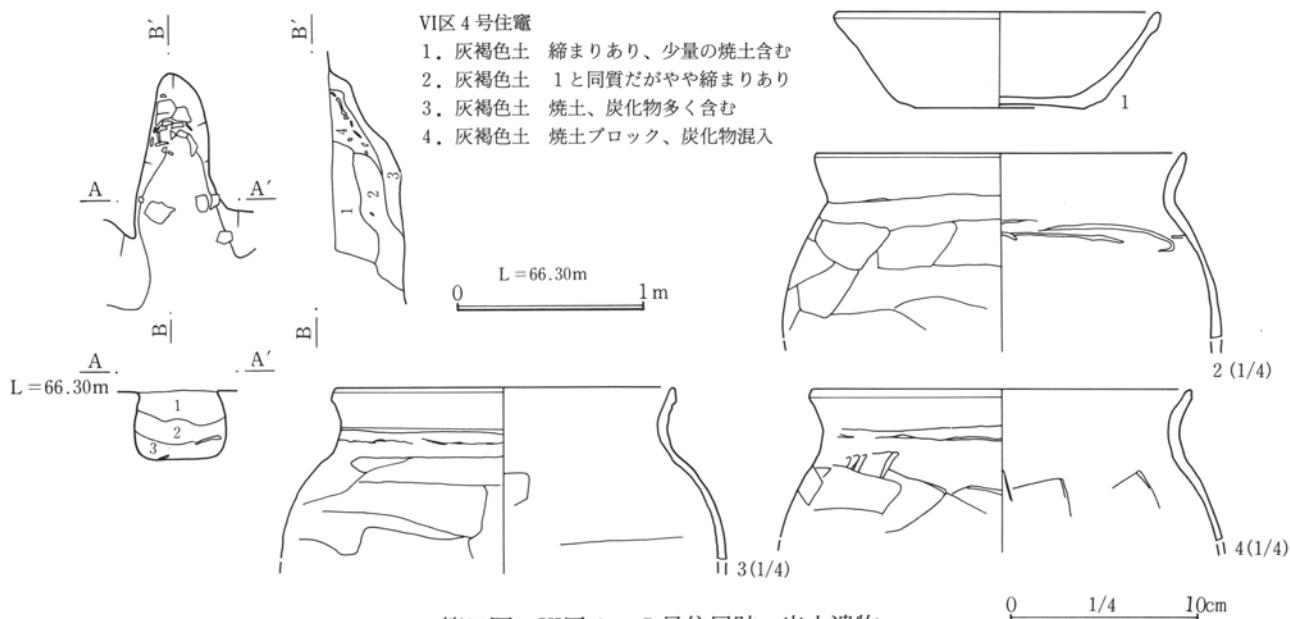
VI区 2号住居跡 (第28図、P L 6・52)

38Q-12グリッドに位置する。重複関係は北側半分が3面1号堀、南壁一部が5号土坑と重複し、本住居が1号堀より旧く、5号土坑より新しい。規模は長軸2.2m×短軸検出範囲1.7mである。主軸方位は竈基軸N-70°-Wを示し、壁高は10~15cmを測る。

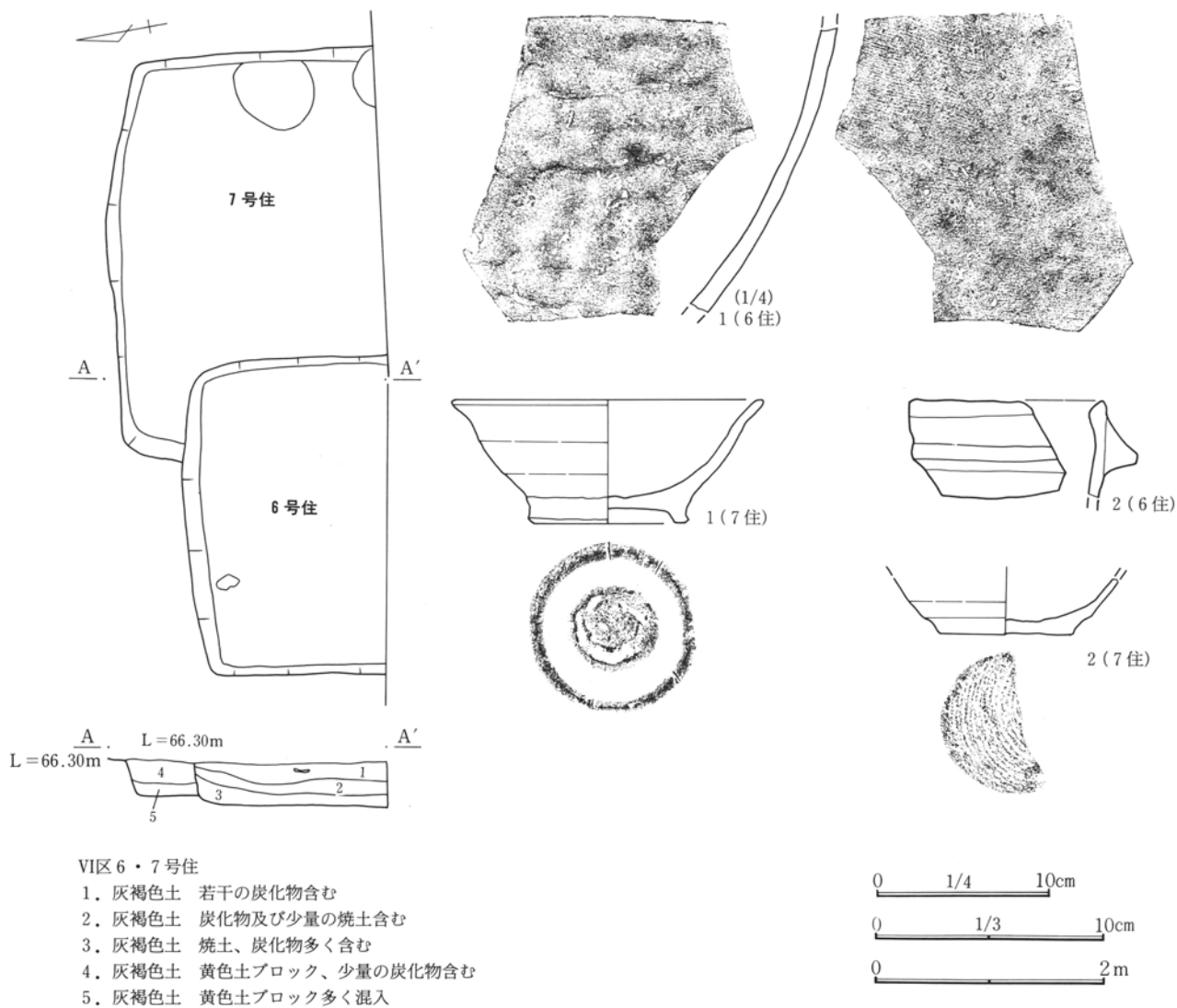
床面は比較的締まりが良好である。南東隅に径50cm程の貯蔵穴が設けられている。形状は不正な楕円形を呈する。竈は東壁に付設され、規模は焚き口幅40cm、燃烧部奥行き30cm、煙道38cmである。燃烧部中央部から支脚に使用したと考えられる石が検出されている。遺物は土師器甕片や須恵器埴類、灰釉埴片、刀子などが出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。



第30図 VI区 4・5住居跡・出土遺物



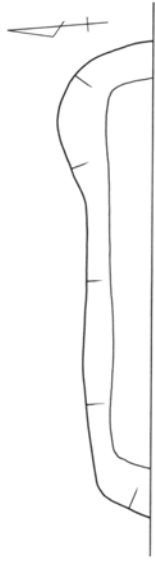
第31図 VI区 4・5号住居跡・出土遺物



VI区 6・7号住

1. 灰褐色土 若干の炭化物含む
2. 灰褐色土 炭化物及び少量の焼土含む
3. 灰褐色土 焼土、炭化物多く含む
4. 灰褐色土 黄色土ブロック、少量の炭化物含む
5. 灰褐色土 黄色土ブロック多く混入

第32図 VI区 6・7号住居跡・出土遺物



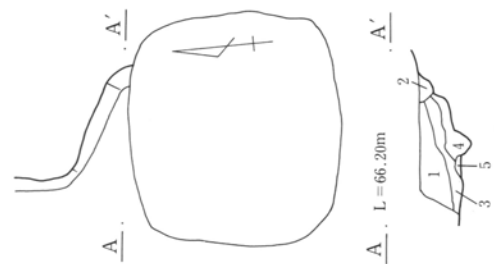
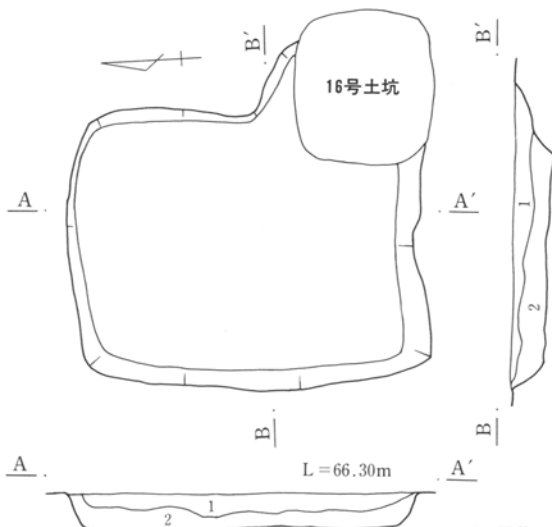
第33図 VI区 8号住居跡

VI区 3号住居跡 (第29図、P L 6・52)

38P-12グリッドに位置する。南半分は調査区外になるため全容は不明である。平面形は南北にやや長い隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸2.9m×短軸検出範囲1.8mである。主軸方位は北壁基軸N-70°-Wを示し、壁高は最大で30cmを測る。床面は平坦で踏み締まりは良好である。住居床面に東西に走る幅20cm、深さ10cm弱の間仕切り溝が見られる。竈は調査範囲内からは検出されなかった。須恵器塚が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

VI区 4号住居跡 (第30・31図、P L 6・52)

38P-10グリッドに位置する。重複関係は住居中央で4面1号溝、南側で5号住居跡と重複し、本住居跡がこれらより古い。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸3.4m×短軸検出範囲3.0mである。主軸方位は竈基軸N-90°-Wを示す。床面は締まりが良好である。竈は東壁に付設され、規模は焼き口幅約50cm、燃烧部奥行き53cmである。遺物は土師器甕や須恵器坏が出土している。時期は出土遺物から10世紀前半と考えられる。

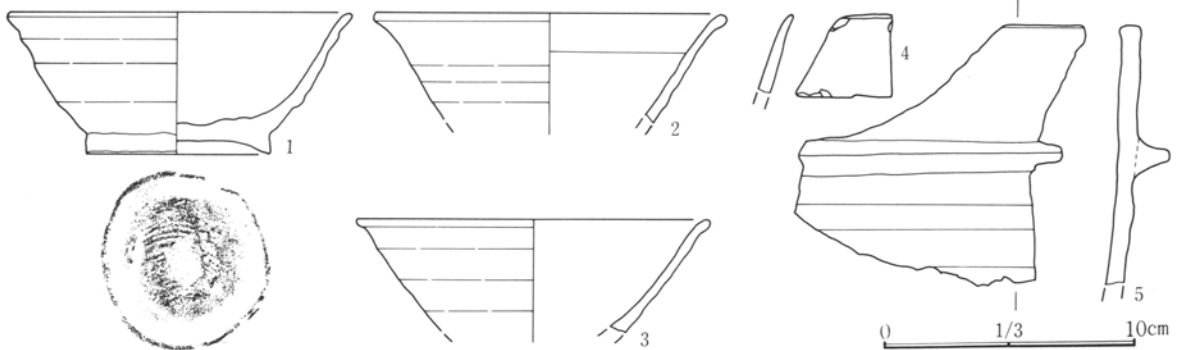


VI区 9号住居

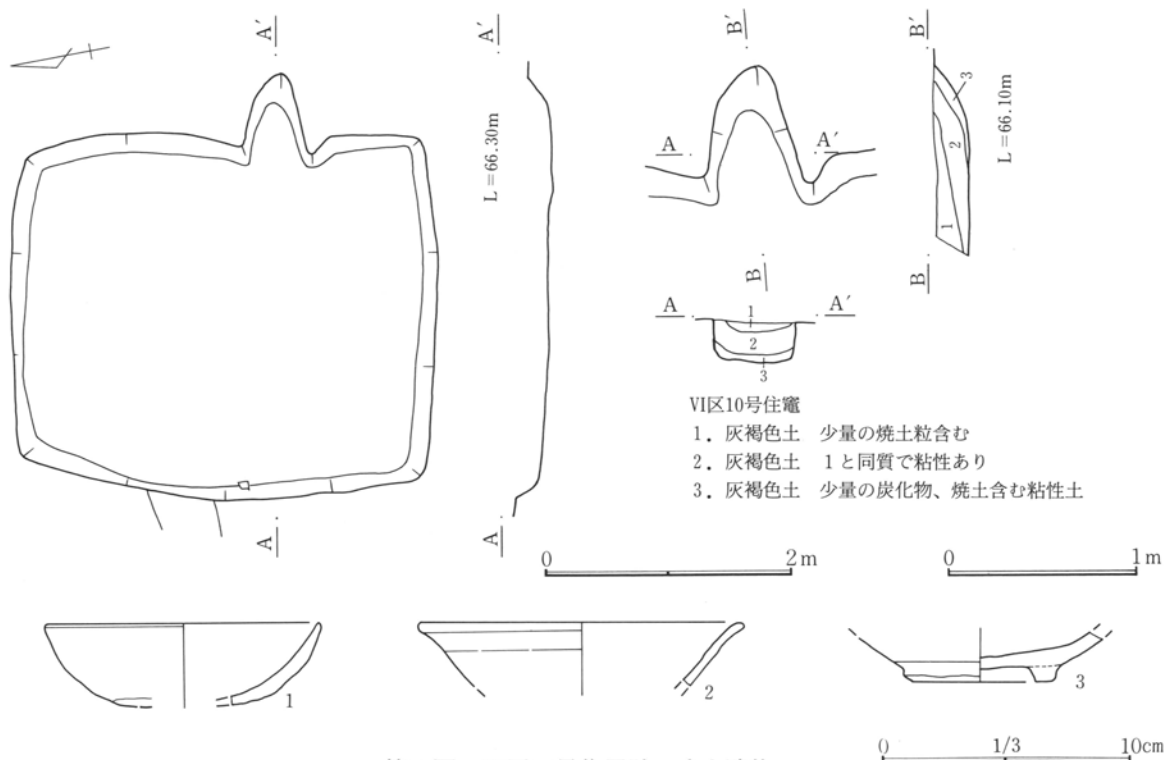
1. 灰褐色土 若干の焼土粒、炭化物含む
2. 灰褐色土 1と似るか焼土粒より多く含む
3. 灰褐色土 焼土含み炭化物をブロック状に含む
4. 灰褐色土 灰を多く含み焼土ブロック目立つ
5. 灰褐色土 地山黄色土ブロック多く含み若干の焼土混入

VI区 9号住

1. 灰褐色土 少量の炭化物混入
2. 灰褐色土 少量の炭化物及び焼土粒含む



第34図 VI区 9号住居跡・出土遺物



第35図 VI区10号住居跡・出土遺物

VI区 5号住居跡 (第30・31図、P L 6・53)

38P-10グリッドに位置する。重複関係は住居東部で4面1号溝、北側で4号住居跡と重複し、本住居が1号溝より旧く、4号住居跡より新しい。平面形は南壁部分が調査区外のため全容は明確にはできないが、南北に長軸をとる隅丸長方形と考えられる。規模は長軸検出範囲3.5m×短軸検出範囲3.4mである。主軸方位は竈基軸N-90°-Wを示し、壁高は約20cmを測る。

床面は踏み締まりが良好でかなり硬く締まっており、何回か貼り直された痕跡が観察された。竈は東壁に付設され、規模は焚き口幅推定50cm、燃烧部奥行き50cmである。内部には多量の炭化物、灰層及び焼土が認められた。出土遺物は竈及び周辺部から土師器甕、須恵器碗、灰釉碗が検出された他、刀子と見られる鉄製品が出土している。時期は出土遺物から10世紀前半と考えられる。

VI区 6号住居跡 (第32図、P L 6・53)

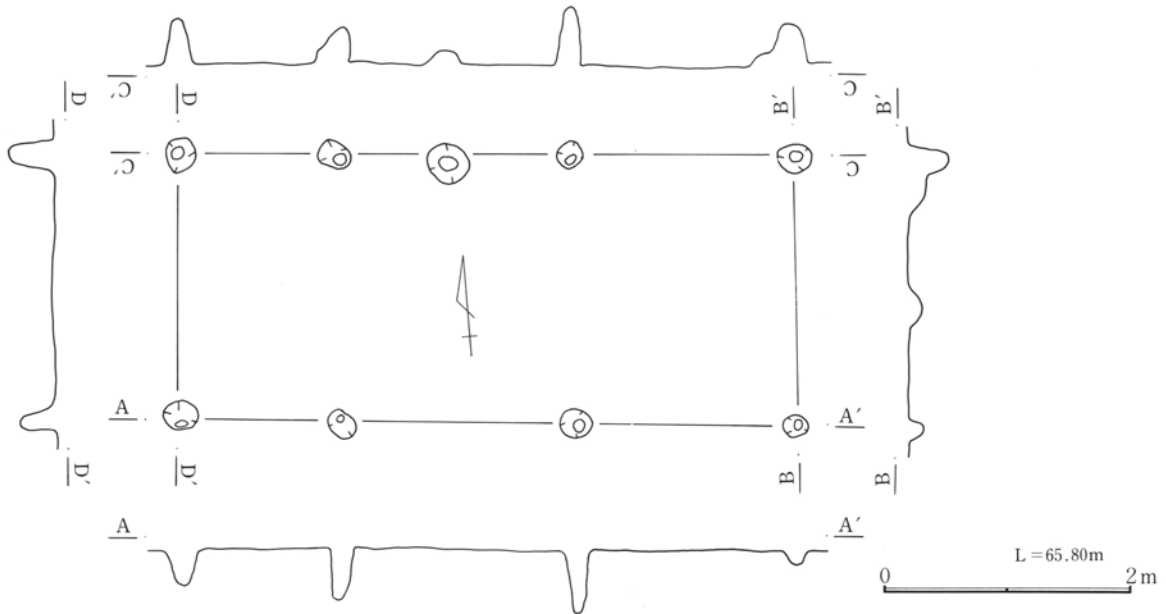
38P-10グリッドに位置する。重複関係は住居跡東側で7号住居跡と重複し、本住居がこれより新しい。

平面形は南側半分が調査区外のため明確にはできないが、隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸2.7m×短軸検出範囲1.9mである。主軸方位は北壁基N-80°-Wを示し、壁高は約30cmを測る。

床面は平坦で踏み締まりが強い。竈は調査範囲内からは検出されなかった。出土遺物は須恵器甕胴部片及び羽釜口縁部片が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

VI区 7号住居跡 (第32図、P L 6・53)

38O-9グリッドに位置する。重複関係は住居西側で6号住居跡と重複し、本住居がこれより古い。平面形は住居南半分が調査区外のため明確にはできないが、隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸3.4m×短軸調査範囲2.3mである。主軸方位は北壁基軸N-78°-Wを示し、壁高は25cmを測る。床面は平坦で比較的良く締まる。竈は東壁に付設されていると考えられるが調査範囲内からは検出されなかった遺物は須恵器坏片や碗が出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。



第36図 I区1号掘立柱建物跡

VI区 8号住居跡 (第33図、P L 6)

38O-8グリッドに位置する。平面形は北壁から僅か20~30cmを検出できたのみで、ほとんどが調査区外のため全容は明確にはできない。規模は北壁の長さ3.5mである。主軸方位は北壁基軸N-86°-Wを示し、壁高は40cmを測る。出土遺物もないため時期は明確にはできない。

VI区 9号住居跡 (第34図、P L 7、53)

38P-8グリッドに位置する。重複関係は住居南東隅部で16号土坑と重複し、新旧関係は本住居のほうがこれより古い。平面形は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.8m×短軸2.2m・面積7.6m²である。主軸方位は南壁基軸N-90°-Wを示し、壁高は25cmを測る。床面は平坦で締まりがある。竈は東壁に付設されているが、16号土坑との重複によって南半分が消失しているため規模や構造は明確にはできない。遺物は須恵器壺や緑釉壺片などが出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

VI区 10号住居跡 (第35図、P L 7・53)

38Q-8グリッドに位置する。平面形は南北に長軸をもち、西壁中央部分が僅かに外側に張り出す隅丸長方形を呈す。規模は長軸3.4m×短軸2.9m・面積9.86m²である。主軸方位は竈基軸N-80°-Wを示し、壁高は10cmを測る。床面は平坦で住居中央部が周辺に比べ締まりが強い。竈は東壁やや南寄りに付設されている。規模は焚口50cm、燃焼部奥行き50cmである。遺物は土師器坏や須恵器碗などが出土している。時期は出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

I区 1号掘立柱建物跡 (第36図、P L 2)

18O-6グリッドに位置する。規模は間口4.9m×奥行き2.1mの3間×1間であるが、西側の柱間がやや短くなっている。主軸方位はN-96°-Eを示す。柱穴の規模は径25~20cm、深13~45cmである。出土遺物は土師器甕小片が出土している。時期は周辺の住居跡埋土と本柱穴埋土が近似することから、周辺住居跡との時代差はないと考えられる。

2. 土坑 (第37~40図、P L 7・53)

検出された土坑の総数は61基にのぼる。形状や規模もばらつきが見られ、かなり集中して検出された場所もある。時期に関しては平安時代に帰属すると考えられるが、一部中世に入るものもあると思われる。

遺物を伴うものは比較的少なく性格を想定できるものも僅かである。そうした中でII区21号土坑のように鉄鏝が出土したものや、多量の炭化物、焼土を伴ったII区38号土坑などは特筆されよう。住居等と切り合い関係を持つものも見られることから、時間差も見られる。紙数の都合で一部の土坑（主に遺物を伴うもの）のみを図示せざるを得なかった。

I区1号土坑

18N-3グリッドに位置する。長円形で、規模は長径1.5m、短径1.1mで深さは35cmである。底は平らでやや砂質の土で埋まる。

II区14号土坑

38O-2グリッドに位置する。長円形で長径70cm、短径50cm、深さは15cmである。須恵器の壺が出土している。II区4号溝と重複する。

II区21号土坑

28N-20グリッドに位置する。平面形状はややくずれた隅丸長方形を呈す。長径1.2m、短径1mで深さは75cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底は平らである。土師器、須恵器片およびやや大型の鉄鏝が1点出土している。土坑墓と考えられる。

II区25号土坑

28O-14グリッドに位置する。やや曲がった長円形で長径1.3m、短径50cm、深さは10cmである。土器片が出土している。上層に炭化物層が見られる。

II区28号土坑

28P-16グリッドに位置する。円形で径40cm、深さ10cmである。埋土中に炭化物、焼土を含み、遺物は須恵器の壺が出土している。

II区31号土坑

38M-21グリッドに位置する。南部分は未調査である。長円形で軸は南北方向である、長径(1.0m)、短径70cm、深さ10cmである。須恵器の壺が出土している。

II区36号土坑

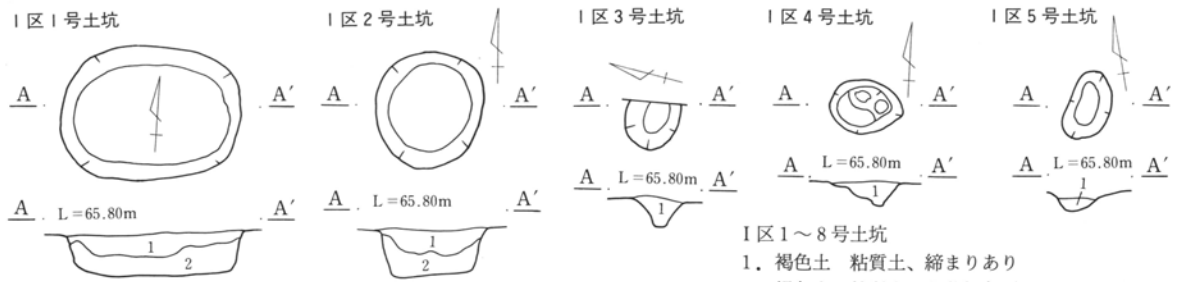
28N-19グリッドに位置する。II区1号住の東壁に接している。長円形で長径1.1m、短径80cm、深さは30cmである。数点の土器片が出土している。

II区37号土坑

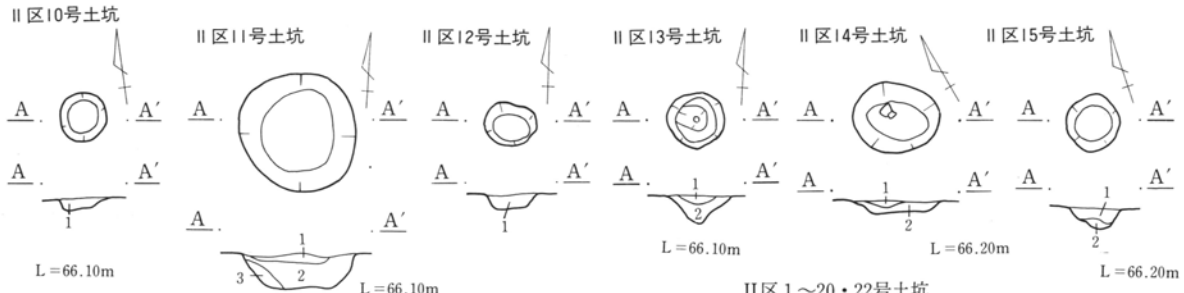
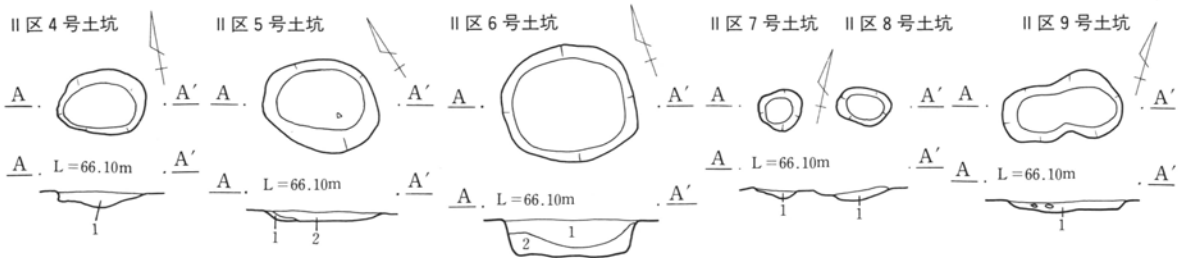
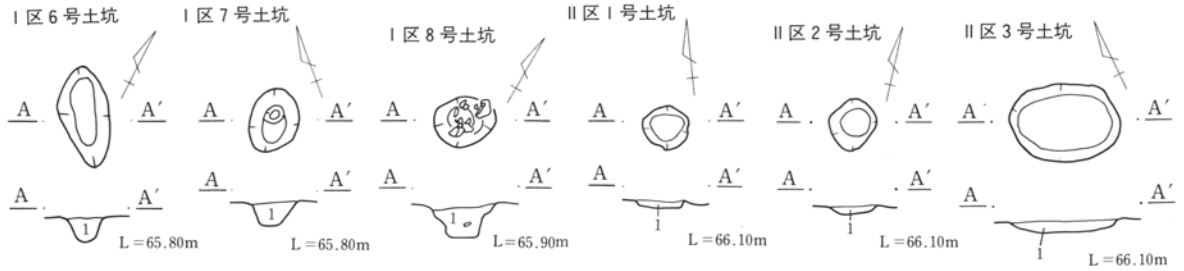
38Q-1グリッドに位置する。38号土坑の北側に接している。やや歪んだ長方形を呈す。ほぼ東西に軸方向を持ち、規模は長軸2.9m、短軸1.6mで深さは15cmと大きさの割りに浅い。

II区38号土坑

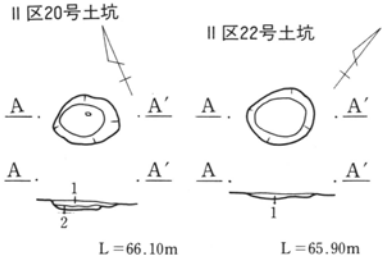
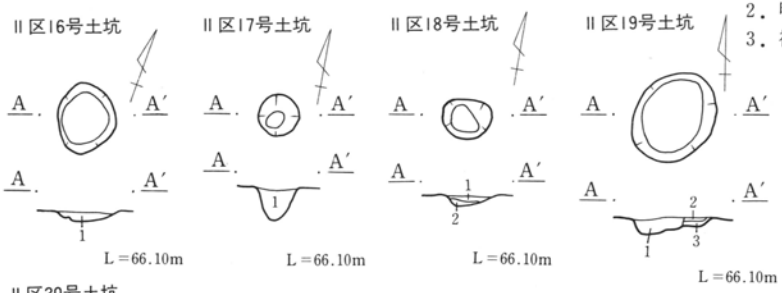
38P-1グリッドに位置する。隅丸長方形であるが、南側が突出している。南北に軸を持ち、長軸2.25m、短軸1.1mで深さは15cm程である。壁内面が火を受け焼土化している。底面に大きく焼土塊を混入する炭化物層が広がる。須恵器および土師器片が出土している。また炭化物層に混じりわずかながら骨片および歯が検出されている。



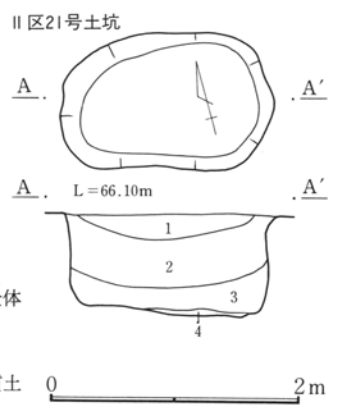
I区1～8号土坑
 1. 褐色土 粘質土、締めりあり
 2. 褐色土 粘質土、黄茶褐色ブロック少量含む



II区1～20・22号土坑
 1. 褐灰色土 黄褐色土ブロック含む (Brownish soil, containing yellowish-brown soil blocks)
 2. 明黄褐色土 褐色粒含む粘質土 (Light yellowish-brown soil, clayey with brown granules)
 3. 褐灰色土 明黄褐色のブロック少量含む粘質土 (Brownish soil, clayey with small amounts of light yellowish-brown blocks)

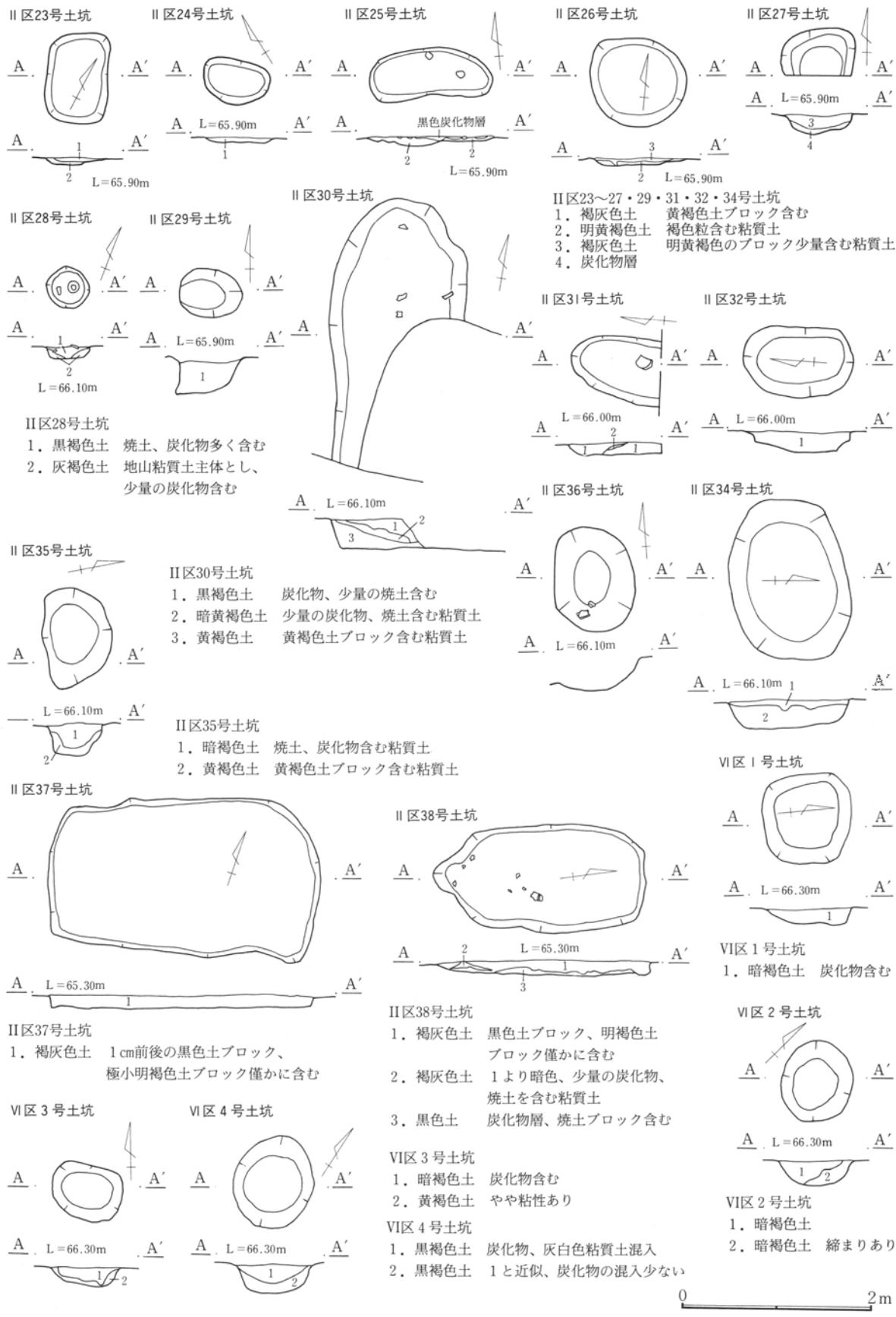


II区21号土坑
 1. 暗黄褐色土 明るい色調の粘質土 (Dark yellowish-brown soil, clayey with light color)
 2. 灰黄褐色土 上層にふい黄褐色土多く含み、全体に黄褐色土ブロック含む (Greyish yellowish-brown soil, containing much light yellowish-brown soil in the upper layer, and yellowish-brown soil blocks throughout)
 3. 灰黄褐色土 褐灰色土ブロック含む粘質土 (Greyish yellowish-brown soil, clayey with brownish soil blocks)
 4. 褐灰色土 黒色及び黄褐色土ブロック含む粘質土 (Brownish soil, clayey with black and yellowish-brown soil blocks)

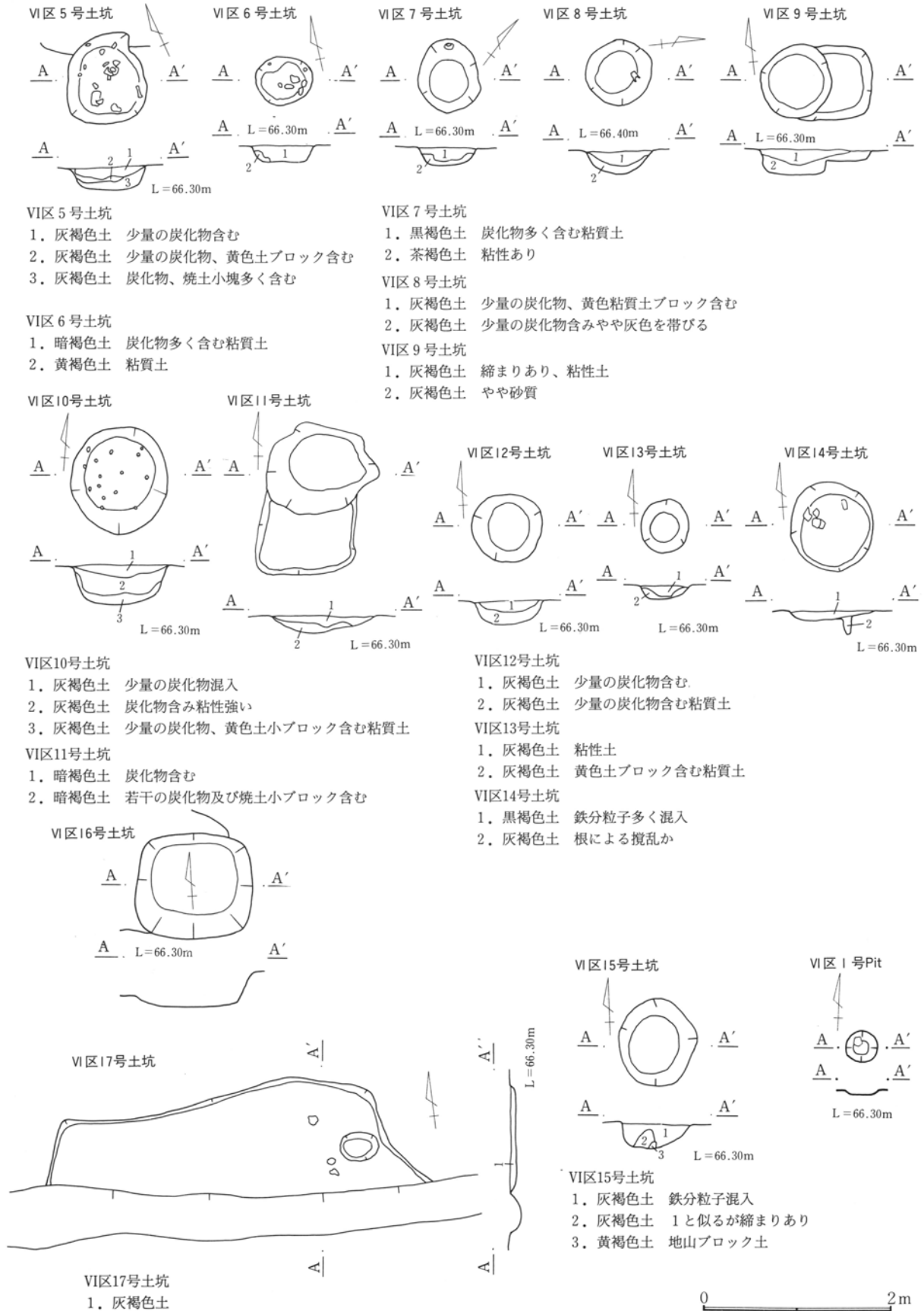


0 2m

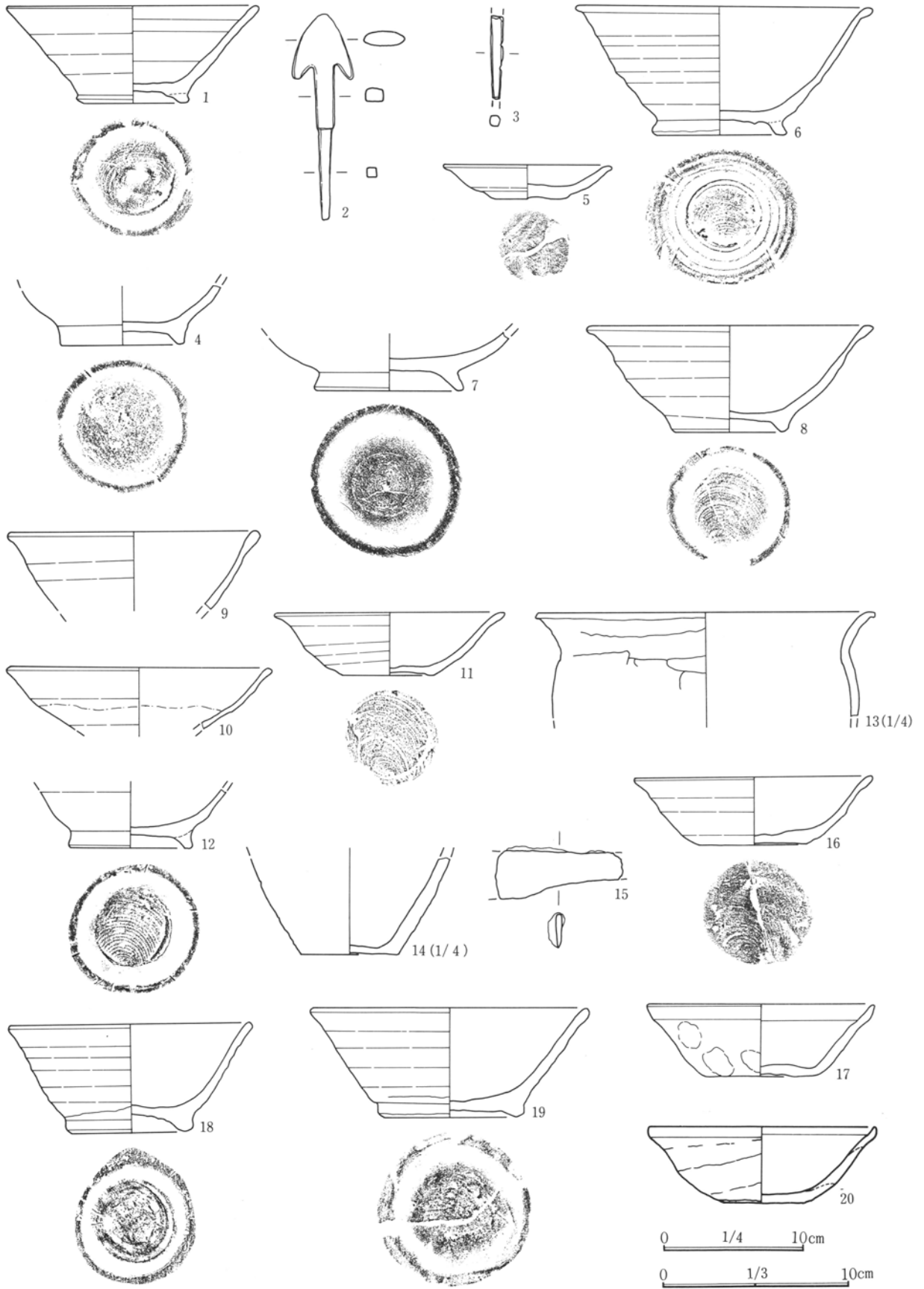
第37図 土坑 (1)



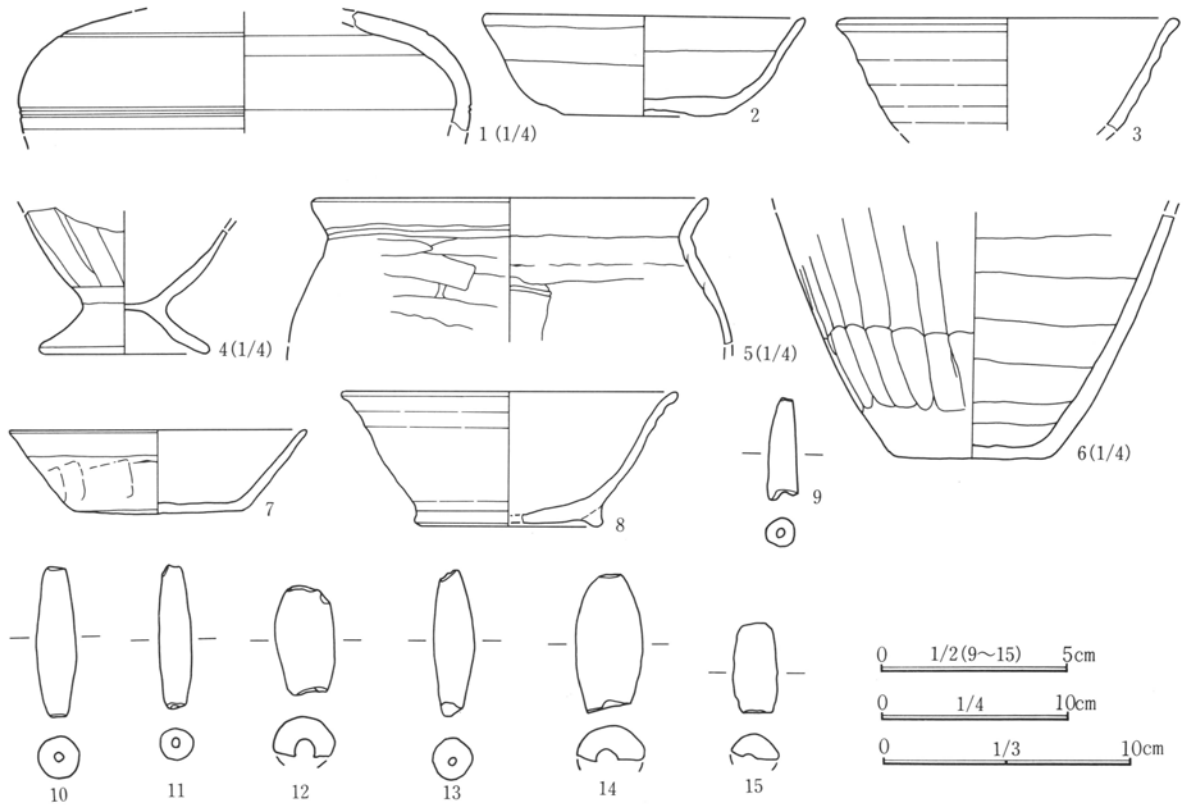
第38図 土坑(2)



第39図 土坑(3)・VI区1号ピット



第40図 土坑・ピット出土遺物



第41図 溝・グリッド出土遺物

VI区 1号土坑

38Q-14グリッドに位置する。1辺約90cmの隅丸方形を呈し、深さは30cmで覆土中に多量の炭化物を含む。

VI区 2号土坑

38Q-13グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し丸底を呈す。径約80cmで、深さは25cmである。灰釉碗の小片が出土している。

VI区 5号土坑

38Q-12グリッドに位置する。不定円形を呈す。VI区 2号住の南に重複しており、住居よりも古い。大きさは長径約1m、短径80cmで深さは25cmである。覆土中に炭化物、焼土を含む。出土遺物は土師器甕、須恵器碗などが見られる他、鉄製品も1点出土している。

VI区 6号土坑

38Q-12グリッドに位置する。長円形を呈し、長径60cm、短径50cmで深さは20cmである。覆土に若干の炭化物を含む、須恵器坏が出土している。

VI区 7号土坑

38P-12グリッドに位置する。長円形を呈し、長径75cm、短径60cmで深さは20cmである。土師器坏が出土している。

VI区10号土坑

38P-11グリッドに位置する。円形を呈し、径約110cmで深さは45cmである。底は僅かに丸みを呈し、十数個の小穴が見られる。埋土中に若干の炭化物を含む。

VI区14号土坑

38P-9グリッドに位置する。円形を呈し、径90cm、深さは10cmである。須恵器碗が出土している。

VI区16号土坑

38P-9グリッドに位置する。VI区9号住の南東隅に重複しており、住居を切っている。隅丸方形を呈し、一辺約1.2m、深さは35cmである。

VI区17号土坑

38Q-9グリッドに位置する。不定形で長軸4m、短軸1.2mで深さは5cmと浅い。9号溝に南側部分を切られる。土師器片および須恵器壺が出土している。

VI区1号ピット

38Q-14グリッドに位置する。円形で径35cm、深さは10cm程である。土師器の坏が1点出土している。

3. 道状遺構・柵列遺構 (第42図、PL7)

II区東端の18M~R20グリッドに位置する。南北にほぼ並行して2条の溝が検出されている。溝の形状はやや不明瞭であるが幅1~2mで深さは10~30cmである。また中央で一部途切れている部分が見られる。溝に挟まれた幅は両溝の心芯で3~4mで北側が僅かに広がっている。特に硬化した面は確認されていない。検出面は4面(平安時代)下面で、両溝の埋土はやや粘性を持つ灰褐色土である。出土遺物はほとんど見られない。積極的に道と認定する確証はないが可能性を指摘しておく。

柵列遺構

II区の中央部分に約3m離れて並行した2列が確認された。径20~30cm、深さは5~10cmと浅い。それらの間隔は50~60cmである。はっきりとした性格は不明である。

4. 溝 (第41・43図、PL7)

II区1号溝

調査区西側、28N~P16グリッドに位置する。南北方向に走る。幅2~2.3m、深さ約30cmである。両側の立ち上がりは比較的緩やかである。

II区2号溝

28N~P-15グリッドに位置する。II区1号溝の東側約5m離れ、ほぼ並行して走る。幅2.6m、深さは60cmである。両壁の立ち上がりは緩やかで、若干の土器片が出土している。

II区3号溝

38O~Q-2グリッドに位置する。南北に走るが、北側は明瞭でなくなる。幅30cm程で深さは10cmである。出土遺物は見られない。

II区4号溝

3号溝の東側に並行して検出された。38O~Q-2グリッドに位置する。幅約80cm、深さ5cmと浅い。

II区5号溝

28O-20グリッドに位置する。東西に走るが、全長5.5mで終息している。幅20cm、深さ5cmと浅く、溝としたが、サク状遺構の可能性はある。

II区6号溝

18O~R-20グリッドに位置する。南北に走り、7号溝と並行する。幅約1m、深さ5cm程であるが、断続しており、不明瞭な部分がある。

II区7号溝

18O～R-20グリッドに位置する。6号溝の東側3m程離れ並行して走る。幅70cmで深さは10cm程である。途切れている部分もあり、北側部分については広がっている。

II区8号溝

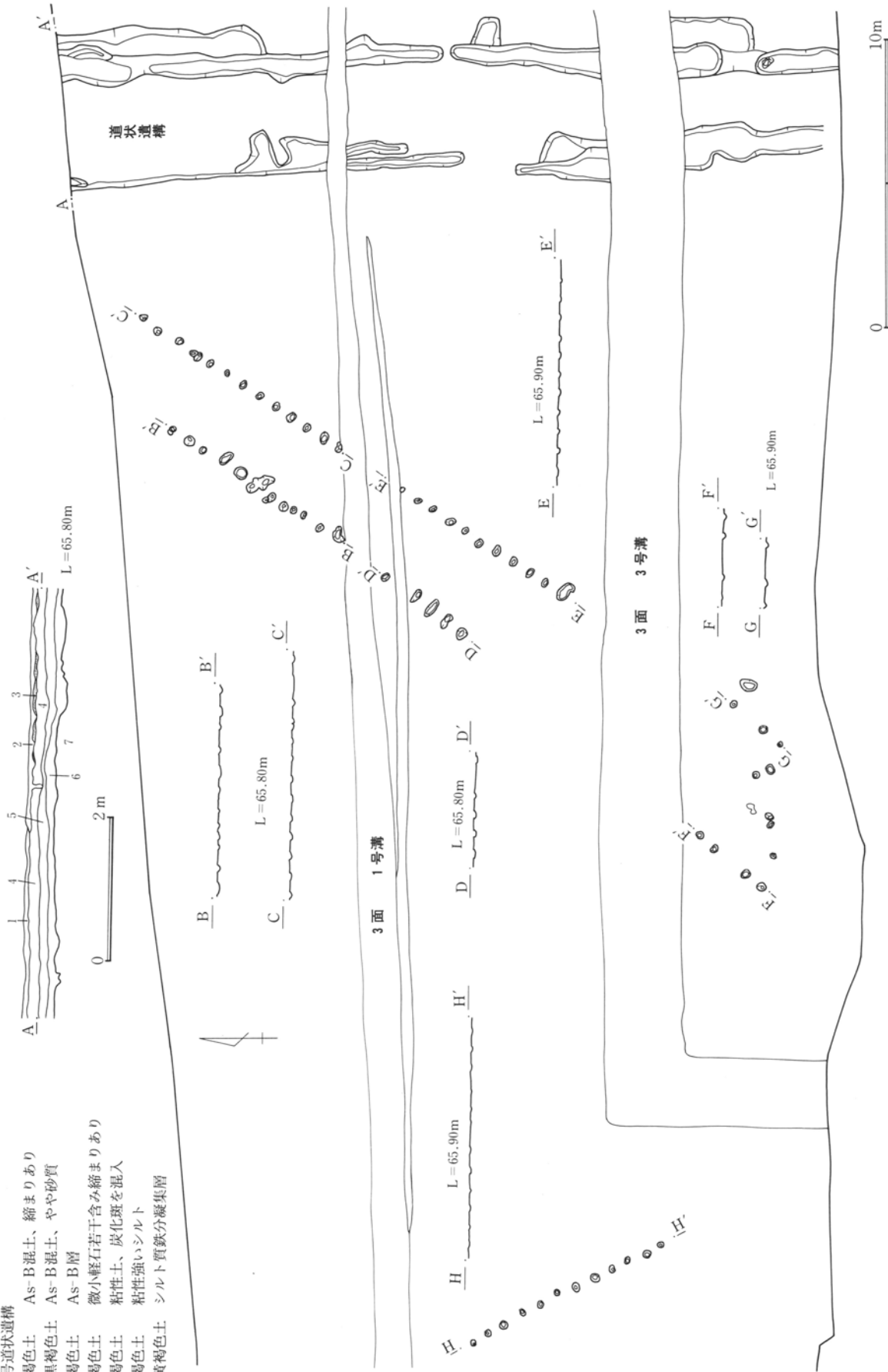
28N-18グリッドに位置する。南北に走り、幅50cm、深さ8cm程であるが4m程で終息している。サク状遺構の可能性はある。

VI区1号溝

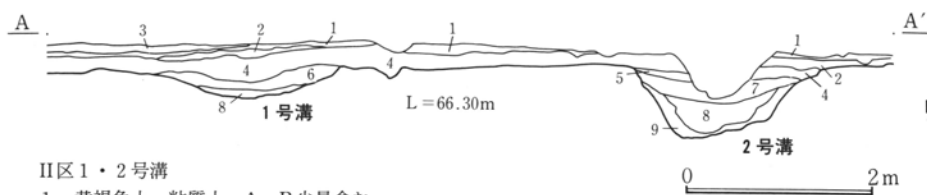
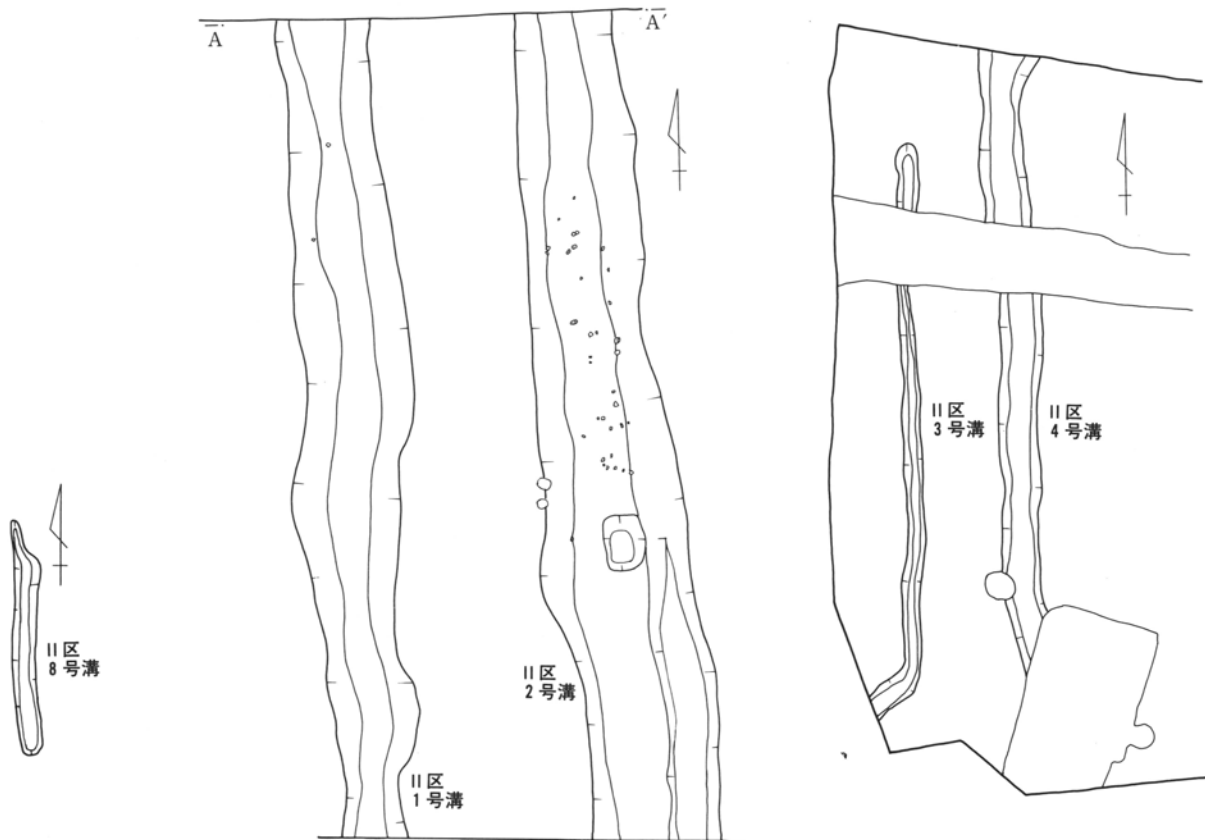
38Q-8～10グリッドに位置する。東西方向に走る。長さ約12mで終わっている。幅は60～40cm、深さ10cmで東端でVI区10号住居と重複、これを切っている。土師器坏、須恵器埴及び土錘などが出土している。

II区1号道状遺構

1. 灰褐色土、縮まりあり
2. 灰黒褐色土、やや砂質
3. 灰褐色土、As-B層
4. 暗褐色土、微小軽石若干含み縮まりあり
5. 灰褐色土、粘性土、炭化斑を混入
6. 黄褐色土、粘性強いシルト
7. 明黄褐色土、シルト質鉄分凝集層

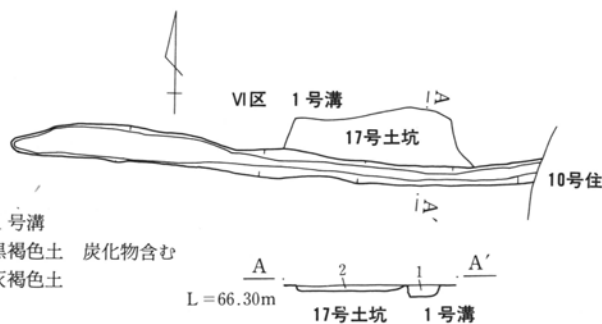
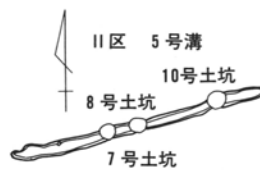


第42図 II区道状遺構・柵列遺構



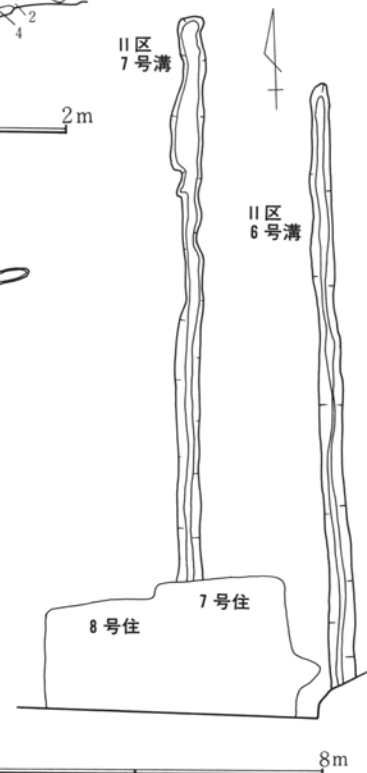
II区 1・2号溝

1. 黄褐色土 粘質土、As-B少量含む
2. 暗褐色土 粘質土、縮まりあり
3. As-B
4. 褐灰色土 黄褐色粘質土を含む
5. 褐灰色土 9より黄褐色土多く含み縮まり弱い
6. 灰褐色土 縮まりある粘質土、下部に黄褐色土含む
7. 灰白色土 褐灰色粘質土ブロック含み固く締まる
8. 灰褐色土 鉄分凝集ブロック含むシルト層
9. 黄褐色土 鉄分凝集ブロック多く含む



VI区 1号溝

1. 黒褐色土 炭化物含む
2. 灰褐色土



第43図 II・VI区溝

表3 5面出土遺物観察表

I区1号住居跡(第12図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 坏	底～口縁部 3分の1	(14.0) (5.3) 3.5	覆土	ロクロ整形	良 灰黒色 小礫僅かに含む

I区2号住居跡(第13図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 坏	底～口縁部 3分の2	(12.5) 6.0 4.0	覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良(硬質) 灰褐色 砂粒、雲母含む
2	土師器 台付甕	脚台部	— (9.4) —	覆土	横撫で	良 茶褐色 微砂粒僅かに含む

I区3号住居跡(第13図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
3	須恵器 坏	底～口縁部 4分の3	(13.4) 5.0 4.4	床面	ロクロ整形、底部回転糸切り(左)	良 灰褐色 微砂粒僅かに含む
4	土師器 坏	5分の1	(12.6) — 3.4	覆土	口縁部横撫で、底～体部篋削り	良 黄茶褐色 微砂粒含む

I区4号住居跡(第14図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	土師器 台付甕	脚台部片	— (9.4) —	覆土	横撫で 3住と接合	良 茶褐色 微砂粒含む

I区5号住居跡(第15図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 坏	底～体部 4分の1	— (5.0) —	覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 灰色 砂粒含む
2	須恵器 坏	底部片	— (7.9) —	覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 灰色 微砂粒僅かに含む
3	須恵器 埴	底～体部 4分の1	— (6.0) —	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	良 灰色 砂粒極少量含む
4	須恵器 埴	底部片	— (6.6) —	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	良 黒色 砂粒含む
5	須恵器 埴	底～体部	— 6.4 —	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	良 暗褐色 砂粒僅かに含む
6	灰釉埴	口～底部 3分の1	(12.9) (6.4) 4.6	覆土	ロクロ整形、体部篋削り、付け高台 底部撫で調整	良 灰色 微砂粒含む
7	灰釉埴	口縁部片	(14.2) — —	覆土	ロクロ整形	良 灰緑色 微砂粒含む
8	土師器 甕	口縁部片	(19.4) — —	覆土	口縁部横撫で、胴部篋削り	良 茶褐色 砂粒含む
9	羽釜	口縁部 8分の1	(21.0) — —	覆土	ロクロ整形	良 黄茶褐色 砂粒僅かに含
10	羽釜	口縁部 8分の1	(21.0) — —	覆土	ロクロ整形	黄茶褐色 砂粒僅かに含む

I区7号住居跡(第16図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 埴	体～口縁部 5分の1	(14.0) — —	竈内	ロクロ整形	良 黒色 砂粒含む
2	須恵器 埴	口～底部 4分の1	(12.0) (5.0) 4.5	覆土	ロクロ整形、付け高台	良 灰色 砂粒含む
3	土師器 甕	口～胴部 5分の1	(19.0) — —	覆土	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 暗茶褐色 砂粒含む

I区8号住居跡(第16図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 埴	口～底部 2分の1	(13.7) (5.8) 5.5	竈内	ロクロ整形、付け高台 底部糸切り後調整	良 暗灰色 砂粒含む

II区1号住居跡(第17図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 坏	口～底部 2分の1	12.4 5.4 4.1	掘方	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 灰黒色 微砂粒含む
2	須恵器 坏	底部片	— 5.2 —	覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 灰黒色 砂粒僅かに含む
3	土師器 鉢	口～底部 3分の1	(15.9) 5.0 6.1	覆土	口縁部横撫で後磨き、底部篋切り 内面篋磨き	良 茶褐色 黒色砂粒含む
4	須恵器 埴	口～底部 2分の1		覆土	ロクロ整形、付け高台、底部回転糸切り後 撫で調整 内黒磨き 高台欠損	やや軟質 淡褐色 砂粒含む
5	土師器 甕	口縁部片	(17.1) — —	掘方	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 淡茶褐色 砂粒僅かに含む
6	土師器 甕	口縁部片	(22.3) — —	覆土	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面撫で	良 黒色 砂粒含む
7	羽釜	口縁部片	(26.5) — —	竈内	ロクロ整形、口縁は僅かに内傾 酸化焰焼成	良 赤褐色 砂粒含む
8	砥石	破片	長さ(2.4) 幅 3.3 厚さ 0.8	覆土	薄手の破損品、1面使用	砥沢石

II区2号住居跡(第19図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴備考	焼成・色調 胎土	
1	土師器 坏	口～底部 4分の3	11.8 6.0 4.9	覆土	口縁部横撫で、体部、底部篋削りおよ び指押さえ	良 暗茶褐色 砂粒僅かに含む	
2	須恵器 坏	口～底部 3分の2	12.8 5.0 3.7	竈B内	ロクロ整形、底部回転糸切り(右) 底部外面2次火熱を受けている。	良 灰桃色 微砂粒僅かに含む	
3	須恵器 坏	ほぼ完形	12.3 5.5 4.6	覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 黒色 石英粒目立つ	
4	須恵器 埴	口～底部 2分の1	14.6 6.0 5.2	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り後撫で調整	良 灰黒色 砂粒僅かに含む	
5	須恵器 埴	口～底部 4分の3	14.6 6.7 5.1	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右) 内面黒色	良 灰黒色 砂粒僅かに含む	
6	灰釉 埴	口縁部片	(14.4) — —	覆土	ロクロ整形	良 灰色 黒変砂粒目立つ	
7	土師器 甕	口～胴下半部	(18.0) — —	竈内	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 黒褐色 砂粒含む	
8	土師器 甕	口縁部片	(19.0) — —	竈内	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 茶褐色 微砂粒僅かに含む	
9	須恵器 甕	底部片	— (10.5) —	覆土	ロクロ整形、付け高台 3住0494が接合	良 灰黒色 石英粒含む	
10	土師器 甕	底部片	— 4.0 —	竈内	胴部篋削り、内面横撫で	良 茶褐色 砂粒含む	
11	釘	長さ4.5 幅0.6、先端部を欠き曲がっている。					
12	釘	長さ6.8 幅1.8 頭部太く断面は長方形。先端部を欠く。大型品。					

II区3号住居跡(第20図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 埴	底部片	— (6.4) —	掘方	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	良 灰色 黒色粒点在
2	須恵器 埴	底部片	— (6.5) —	掘方	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右) 摩耗著しい	良 灰色 砂粒僅かに含む

II区4号住居跡(第21図)

番号	器種器形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	土師器 土釜	口～胴部 4分の3	28.1 —	竈内	口縁部横撫で、胴部撫で整形 内面横撫で	良 黒褐色 砂粒含む
2	鉄製品 刀子か	長さ3.0 幅1.5 厚さ0.4 先端部片か				

II区6号住居跡(第23図)

番号	器種器形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 坏	口～底部 3分の2	12.1 3.9	5.3 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右) 内面黒色	良 灰黒色 砂粒僅かに含む
2	須恵器 塊	口～底部 2分の1	12.8 5.5	5.6 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	良 灰色 砂粒含む
3	須恵器 塊	口～底部	(13.6) 4.4	(6.0) 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 茶褐色 酸化粒含む
4	羽釜	口縁部片	(18.0) —	— 覆土	ロクロ整形	良 淡橙褐色 砂粒含む
5	羽釜	口縁部片	16.0 —	— 覆土	ロクロ整形 2号溝覆土が接合	良 灰黒色 微砂粒含む

II区7号住居跡(第24・25図)

番号	器種器形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
1	須恵器 坏	口～底部 5分の4	12.7 4.0	5.8 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 灰褐色 微砂粒僅かに含む	
2	須恵器 坏	口～底部 5分の4	12.9 3.9	5.5 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右)	良 灰色 砂粒含む	
3	須恵器 坏	口～底部 4分の1	12.0 3.5	4.0 覆土	口縁部横撫で、底部篋削り 内面撫で	良 茶褐色 砂粒僅かに含む	
4	須恵器 塊	口～底部 3分の2	15.4 5.2	7.2 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部に植物の圧痕	軟質 淡黄褐色 砂粒含む	
5	須恵器 塊	完形	14.0 5.1	7.5 竈内	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	やや軟質 灰褐色 砂粒含む	
6	須恵器 塊	口～底部 3分の2	13.1 5.4	6.1 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部にて調整	良 灰褐色 微砂粒僅かに含む	
7	須恵器 塊	口～底部 2分の1	13.5 4.7	6.3 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	良 赤茶褐色 酸化粒目立つ	
8	土師器 甕	口～胴部 2分の1	(19.0) —	— 竈内	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面撫で	良 茶褐色 微砂粒含む	
9	砥石	破損品	長さ(8.8) 幅5.1 厚さ2.8		覆土	断面長方形、両面使用	砥沢石

II区8号住居跡(第25図)

番号	器種器形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	土師器 甕	口縁部片	(19.4) —	— 覆土	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 暗褐色 微砂粒含む
2	土師器 甕	口縁部片	(21.0) —	— 覆土	口縁部横撫で	良 黒褐色 砂粒含む
3	羽釜	胴部 4分の1	— —	— 覆土	ロクロ整形、下部篋削り	良 淡褐色 砂粒含む

II区9号住居跡(第26図)

番号	器種器形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	土師器 坏	ほぼ完形	12.4 3.4	7.8 覆土	口縁部横撫で、底部篋削り 内面撫で	良 茶褐色 微砂粒僅かに含む
2	須恵器 坏	口～底部 3分の2	13.0 4.3	5.3 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り(右) 摩耗見られる	良 褐灰色 微砂粒含む
3	須恵器 塊	口～底部 2分の1	14.4 5.3	6.0 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り(右)	良 灰色 石英粒僅かに含む

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
4	鉄鏃か	長さ8.0 幅2.6	厚さ0.8	先端部が広がる細長い三角形である。		

Ⅵ区1号住居跡 (第27図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 坏	口～底部 3分の2	(12.9) 5.9 3.6	覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右) 外面口縁部に煤付着	良 暗褐色 微砂粒僅かに含む
2	須恵器 塊	口～底部 3分の1	(13.0) (6.2) 4.3	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 茶褐色 砂粒含む
3	須恵器 塊	口～底部 4分の1	(12.5) (6.2) 4.3	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 砂粒含む
4	須恵器 塊	底部片	— —	5.1 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 微砂粒含む

Ⅵ区2号住居跡 (第28図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
1	須恵器 塊	ほぼ完形	14.2 4.8	6.8 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右) 墨書(八)か	良 黒色 砂粒含む	
2	須恵器 塊	口～底部 3分の2	13.6 4.8	5.8 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右) 内外面摩耗	良 灰白色 微砂粒含む	
3	須恵器 塊	ほぼ完形	13.0 5.0	6.5 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰黒色 砂粒僅かに含む	
4	須恵器 塊	口～底部 3分の1	(13.4) 4.7	(6.5) 覆土	ロクロ整形、付け高台	良 灰色 砂粒僅かに含む	
5	須恵器 塊	口縁部片	(12.5) —	— 覆土	ロクロ整形	良 橙褐色 微砂粒含む	
6	須恵器 塊	口縁部片	(13.0) —	— 覆土	ロクロ整形	良 灰色 砂粒含む	
7	灰釉塊	口縁部片	(13.3) —	— 覆土	ロクロ整形、ドブ漬け	良 灰色 黒色粒混入	
8	土師器 甕	口縁部片	(18.2) —	— 覆土	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 明褐色 砂粒含む	
9	刀子	長さ(7.4) 幅1.75 厚さ0.8	刃部の断面三角で両端を欠く。				

Ⅵ区3号住居跡 (第29図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 塊	完形	13.3 4.7	6.5 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 砂粒僅かに含む

Ⅵ区4号住居跡 (第30図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 坏	口～底部 2分の1	13.6 3.9	7.6 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	良 灰色 砂粒含む
2	須恵器 坏	口～底部 3分の2	(11.6) 3.8	5.2 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	良 灰色 石英粒僅かに含む
3	須恵器 坏	底部片	— —	(7.0) 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	良 灰色 微砂粒含む
4	須恵器 坏	口～底部 3分の1	(12.0) 3.0	(5.7) 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	やや軟質 暗褐色 砂粒含む
5	灰釉 塊	口～底部 3分の2	(15.4) 5.4	(7.9) 覆土	ロクロ整形、付け高台、底部篋削り ドブ漬け、口唇部押さえ痕(4)カ所か	良 灰白色 精製
6	土師器 甕	口～胴部 4分の1	(19.7) —	— 竈内	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 淡茶褐色 微砂粒含む
7	土師器 甕	口～胴部 5分の1	(19.7) —	— 覆土	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面撫で	良 淡茶褐色 砂粒含む

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
8	釘				長さ6.0 幅1.3 断面正方形で両端部を欠く。	
9	刀子				長さ9.1 幅1.7 厚さ0.4 両端部を欠く、マチ部分括れる。	

VI区5号住居跡 (第31図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
1	土師器 坏	口～底部 2分の1	13.0 3.7	6.6	覆土	口縁部横撫で、底部寛削り 内面撫で	良 茶褐色 微砂粒僅かに含む
2	土師器 甕	口～胴部 4分の1	(19.6) -	-	竈内	口縁部横撫で、胴部寛削り 内面横撫で	良 茶褐色 微砂粒含む
3	土師器 甕	口～胴部 6分の1	(18.0) -	-	竈内	口縁部横撫で、胴部寛削り 内面横撫で	良 茶褐色 微砂粒含む
4	土師器 甕	口～胴部 5分の1	(20.2) -	-	覆土	口縁部横撫で、胴部へら削り 内面横撫で	良 暗褐色 微砂粒含む

VI区6号住居跡 (第32図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
1	須恵器 甕	胴部片	- -	-	床面	紐作り、外面叩き 転用硯か	良 暗灰色 砂粒含む
2	羽釜	口縁部片	- -	-	覆土	ロクロ整形	良 橙褐色 微砂粒僅かに含む

VI区7号住居跡 (第32図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
1	須恵器 埴	口～底部 2分の1	13.4 5.2	7.0	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 小砂礫含む
2	須恵器 坏	底部片	- -	(5.9)	覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	良 暗灰色 微砂粒含む

VI区9号住居跡 (第34図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
1	須恵器 埴	口～底部 3分の2	(13.8) 5.5	7.4	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰褐色 砂粒含む
2	須恵器 埴	口縁部片	(14.0) -	-	覆土	ロクロ整形	良 暗灰色 微砂粒僅かに含む
3	須恵器 埴	口縁部片	(14.0) -	-	覆土	ロクロ整形	良 灰色 砂粒僅かに含む
4	緑釉 埴	口縁部片	- -	-	覆土	ロクロ整形、発色はやや鈍い。	良 薄緑色 精製
5	須恵器 甕か	口縁部片	- -	-	覆土	ロクロ整形	良 灰黒色 砂粒含む

VI区10号住居跡 (第35図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
1	土師器 坏	口縁部片	(11.0) -	-	覆土	口縁部横撫で、底部寛削り 内面撫で	良 明褐色 微砂粒僅かに含む
2	須恵器 埴	口縁部片	(13.0) -	-	覆土	ロクロ整形	良 灰色 微砂粒含む
3	須恵器 埴	底部片	- -	(5.8)	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 微砂粒含む

II区14号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 埴	口～底部 2分の1	13.3 5.1	6.0 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右) やや歪みあり	良 灰色 砂粒含む

II区21号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土	
2	鉄鏃	長さ11.0 幅3.1 厚さ0.7	かえり大きく、鏃基部は断面長方形基部は正方形である。				
3	釘か	長さ (4.6) 幅0.7	両端部を欠く。先がやや細くなっている。				

II区25号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
4	須恵器 埴	底部片	— —	6.7 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右) 撫で調整	良 灰色 砂粒多く含む

II区28号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
5	土師器 坏	ほぼ完形	9.0 1.8	4.0 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	良 明黄褐色 微砂粒僅かに含む

II区31号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
6	須恵器 埴	口～底部 3分の2	15.7 6.8	7.2 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 砂粒含む

II区36号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
7	須恵器 埴	底部片	— —	8.0 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部撫で調整 内面黒色寛磨き	良 暗灰色 微砂粒含む

II区38号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
8	須恵器 埴	口～底部	(15.0) 5.6	(6.2) 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右) 酸化焰気味	良 灰黄褐色 微砂粒僅かに含む
9	須恵器 埴	口～体部 5分の1	(13.0) —	— 覆土	ロクロ整形	良 灰色 黒色微砂粒含む

VI区2号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
10	灰釉 埴	口縁部片	(14.0) —	— 底面	ロクロ整形、ドブ漬け	良 灰色 精製

VI区5号土坑 (第40図)

番号	器種 器形	部位 残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
11	須恵器 坏	ほぼ完形	13.0 4.3	6.2 覆土	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	良 茶褐色 砂粒含む
12	須恵器 埴	底部片	— —	6.4 覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 砂粒僅かに含む
13	土師器 甕	口縁部片	(24.0) —	— 覆土	口縁部横撫で、胴部寛削り 内面横撫で	良 茶褐色 砂粒含む
14	羽釜	底部片	— —	(7.0) 覆土	胴部寛削り、底部寛削り 内面撫で	良 暗灰色 砂粒含む

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
15	刀子か		長さ(6.7) 幅2.6 厚さ0.35		刃部幅広で両端を欠く。	

Ⅵ区6号土坑 (第40図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
16	須恵器 坏	口～底部 3分の2	(12.6) 5.6 3.6	グリッド	ロクロ整形、底部回転糸切り (右)	良 灰色 砂粒含む

Ⅵ区7号土坑 (第40図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
17	土師器 坏	口～底部 4分の3	(12.0) 6.0 3.8	覆土	口縁部横撫で 体部指撫で 内面撫で 底面に多量の砂粒付着	良 淡褐色 微砂粒含む

Ⅵ区14号土坑 (第40図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
18	須恵器 壺	口～底部 2分の1	13.0 6.7 5.7	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 小砂礫含む

Ⅵ区17号土坑 (第40図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
19	須恵器 壺	口～底部 2分の1	15.0 7.2	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	良 灰色 微砂粒含む

Ⅵ区1号ピット (第40図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
20	土師器 坏	2分の1	(12.1) 4.5 4.0	覆土	紐作り、口縁部横撫で、底面に多量の砂粒 付着。	良 暗茶褐色 微砂粒僅かに含む

Ⅱ区1号溝 (第41図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	須恵器 壺か	胴(肩)部 片	— —	覆土	ロクロ整形 自然釉 横位沈線	良 灰色 精製

Ⅱ区2号溝 (第41図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
2	土師器 坏	ほぼ完形	12.7 6.4 4.3	覆土	口縁部横撫で、体、底部篋削り 内面撫で	良 茶褐色 底部に砂粒目立つ
3	須恵器 壺	口縁部片	(13.1) —	覆土	ロクロ整形	良 暗灰色 微砂粒含む
4	土師器 台付甕	底～脚台部	— (9.0)	覆土	胴部篋削り、脚部横撫で 内面撫で	良 暗褐色 砂粒含む
5	土師器 甕	口縁部片	(21.0) —	覆土	口縁部横撫で、胴部篋削り 内面横撫で	良 黒褐色 砂粒含む
6	羽釜	胴～底部	— (8.3)	覆土	ロクロ整形、底部篋削り後撫で調整 1住掘方No20が接合	良 灰色 砂粒多く含む

Ⅵ区1号溝 (第41図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
7	土師器 坏	口～底部 3分の2	11.8 6.6 3.8	覆土	口縁部横撫で、底部篋削り 内面撫で	良 茶褐色 微砂粒含む
8	須恵器 壺	口～底部 3分の1	(13.4) (6.8) 5.3	覆土	ロクロ整形、付け高台 底部回転糸切り (右)	やや軟質 灰褐色 砂粒含む

番 号	器 種 器 形	部 位 残 存	口 径・底 径 器 高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
9	土錘	端部欠	径0.8	覆土	細身、表面平滑	良 黒色 微砂粒僅かに含む

VI区グリッド (第41図)

番 号	器 種 器 形	部 位 残 存	口 径・底 径 器 高 (cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
10	土錘	完品	長さ4.0 径1.1	グリッド	外面磨き。紡錘状。	良 灰色 精製
11	土錘	ほぼ完品	長さ3.8 径0.8	グリッド	外面磨き、細身で中央の膨らみは弱い。	良 灰黒色 精製
12	土錘	一部欠	長さ(3.9) 径1.6	グリッド	外面磨き、やや太めで孔も大きい。	良 茶色 微砂粒含む
13	土錘	ほぼ完品	長さ3.9 径1.1	グリッド	外面磨き。紡錘状。	良 灰色 精製
14	土錘	半分欠	長さ(3.8) 径1.8	28 O-20	やや太めの作り	良 灰褐色 精製
15	土錘	2分の1	長さ(2.4) 径(1.1)	グリッド	外面磨き、両端部を欠き、縦に割れている。	良 灰黒色 精製

第4節 平安時代II期（4面）

本遺構面は層位的にはAs-Bの下面であるが、調査時においてAs-Bの上に乗る混土層を除去し、露出させたところ、As-B降下後余り時間を置かずに作られたと考えられる畝跡（復旧畝）が、サク状遺構として広い範囲で確認された。このため、As-B上面も新たに調査面として加え調査を実施した。その結果、本面は調査区ほぼ全域において比較的安定した面として検出された。遺構としては畝跡の他に掘立柱建物跡、土坑、溝等が見られる。

これら両面の遺構の時期については平安時代末～中世と考えられ、やや時間幅を持つものと判断された。

以上述べたように、本面は実質的には2面となるため本項では、平安時代I期（As-B下）、平安時代II期（As-B上）の遺構として記載する。なお、I期の遺構としては比較的As-Bの遺存状態が良好であった場所において畝跡が検出されている。

1. 畝（I期）

II区As-B下畝（第44図）

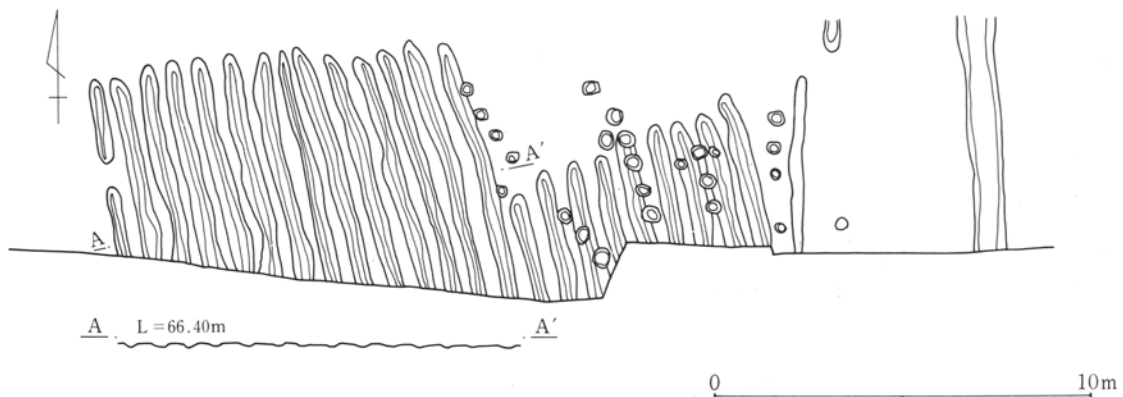
II区・VI区において部分的に確認されている。かなり広い範囲に作られていたと思われるが、削平、およびII期とした復旧畝などによって壊されており、限られた部分でしか確認できなかった。

1号畝は比較的As-Bの遺存状態の良かった28N・M-17～20グリッドにおいて確認された。畝幅60cmで高さは5cm程と低いものの、遺存状態は比較的良好である。畦の方向はやや西に振れた南北方向で、22条が確認されている。検出した長さは5～7mで、北側は一定の長さで終わっている。また、東側の畝半分はさらに短い長さで収束している。なお南側は未調査であるため全体の面積等に関しては不明である。

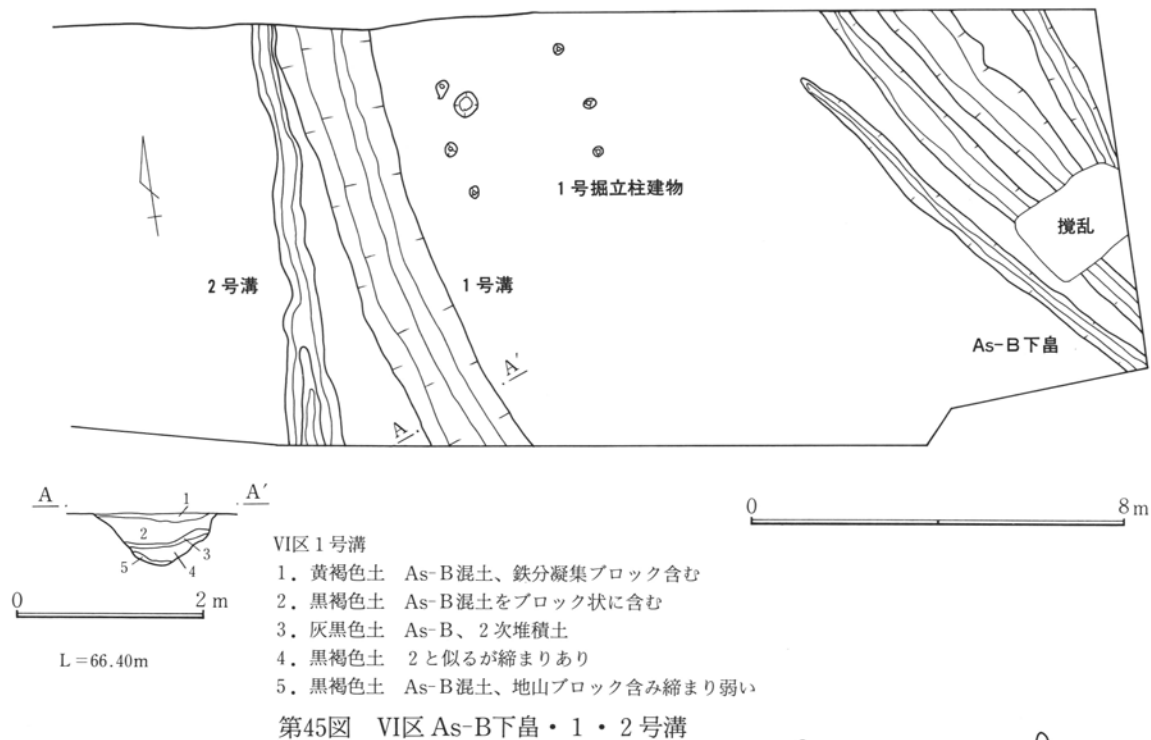
畝の東側には10・11号溝が平行して南北に走っている。この溝を境に東側は復旧畝のサクが東西に走っている。また本遺構を切って1号柵列が掘りこまれている。

VI区As-B下畝（第45図）

調査区の東端、38P～Q-8グリッドに位置する。畝は4条が検出された。南東方向に走り、畝幅約1mで高さは5～10cm程で、北側および東側は未調査である。畝の上面はかなり削られており、サクに見られたAs-Bも2次堆積である。



第44図 II区As-B下畝



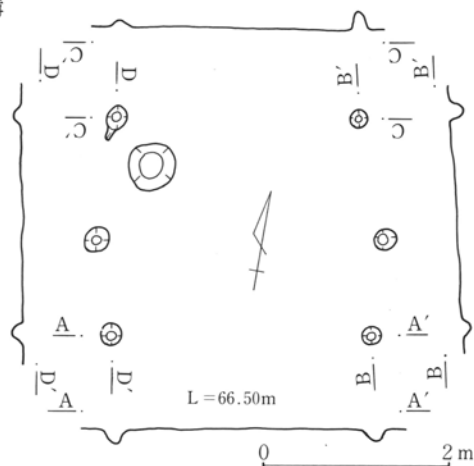
2. 掘立柱建物跡 (II期)

VI区 1号掘立柱建物跡 (第46図)

38Q-10グリッドに位置する。VI区1号溝の東側に近接している。規模は2間×2間であるが、東と西側には僅かに外側に出た位置に間柱が見られる。

間口2.75m、奥行き2.3mである。柱穴は円形で規模は20～25cmで深さは10～20cmである。主軸方位はN-80°-Eである。

柱穴内の覆土はAs-Bを若干混入する砂質土である。建物内の北西隅に径50cm程の土坑が1基検出されているが関連は不明である。出土遺物も見られない。



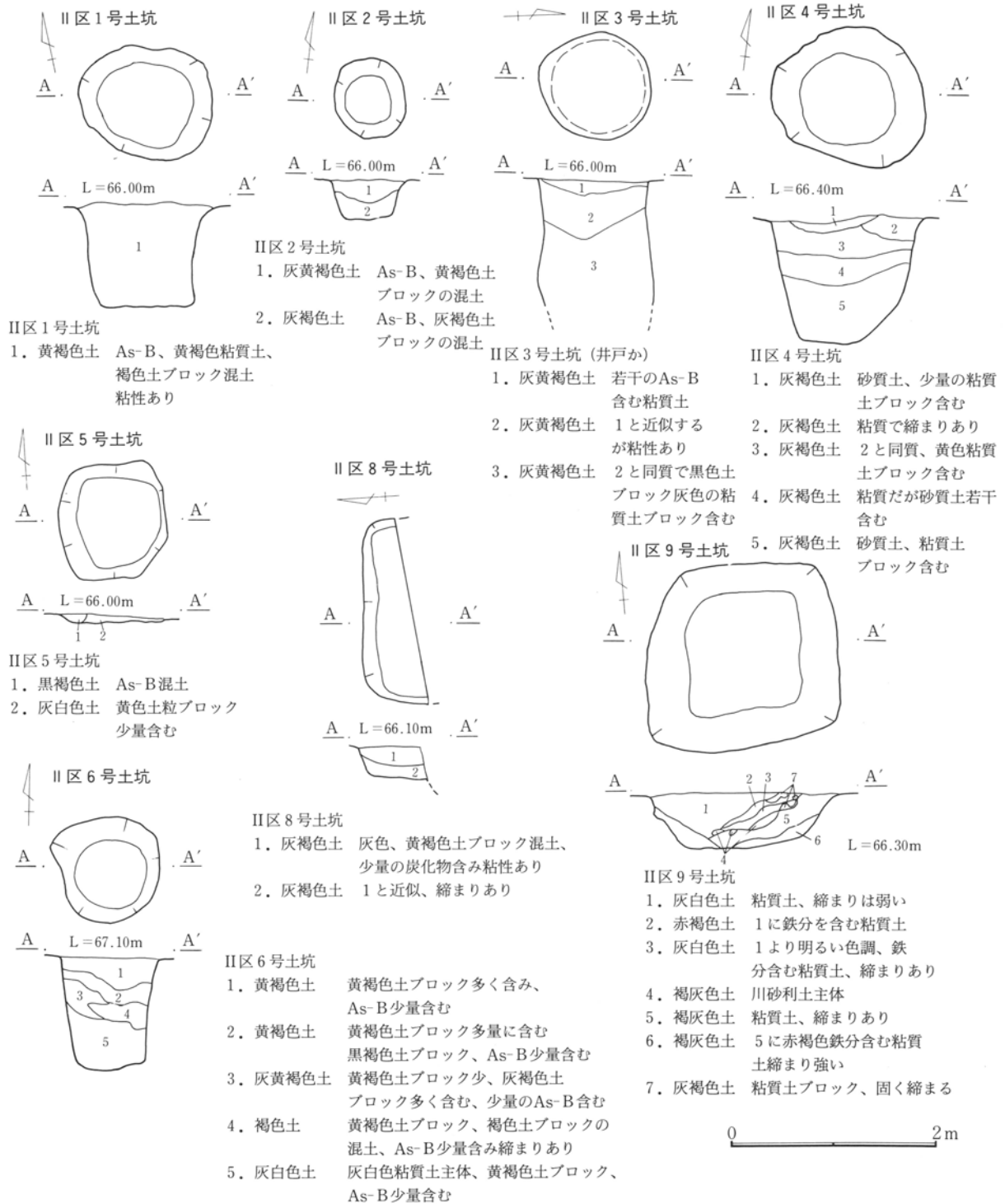
第46図 1号掘立柱建物跡

3. 土坑 (第47図)

II区において8基が検出されている。いずれも覆土中にAs-B混土を含み、地山黄褐色土ブロックを混入するものも見られる。多くは上位層からの掘り込みであると考えられ、時期に関しては中世に下るものもあると考えられる。出土遺物はほとんど見られなかった。

II区 1号土坑

28P-6グリッドに位置する。長円形を呈し、長径1.3m、短径1.0mで深さ1.0mである。底は平らで、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。出土遺物はない。



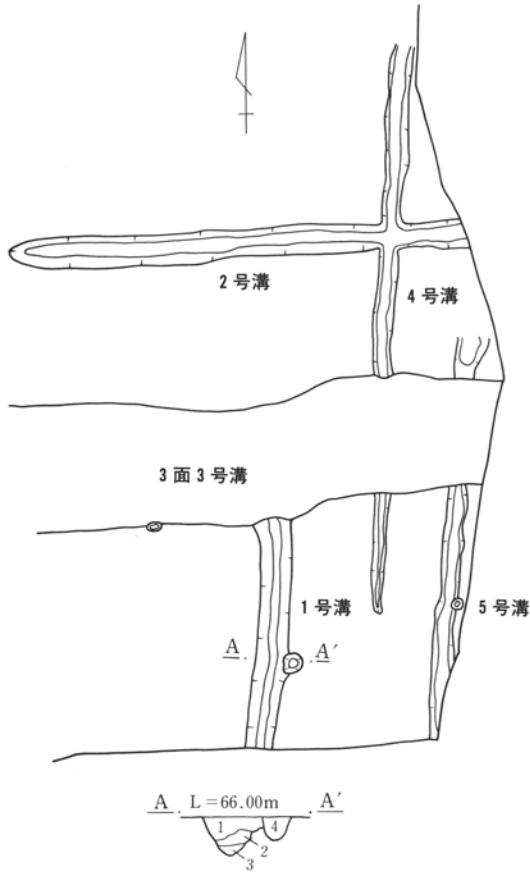
第47図 土坑

II区2号土坑

18N-20グリッドに位置する。円形を呈し、径60cm、深さ40cmである。

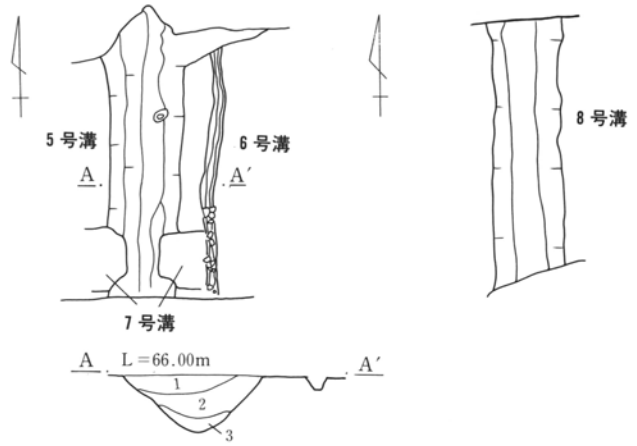
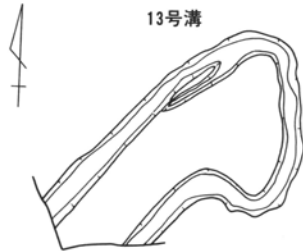
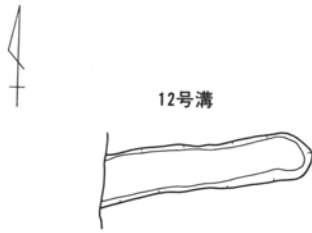
II区3号土坑

18M-17グリッドに位置する。円形で径90cm、深さは1.5mと深い。底は平らで壁は垂直に掘り込まれ、下部がやや広がっている。



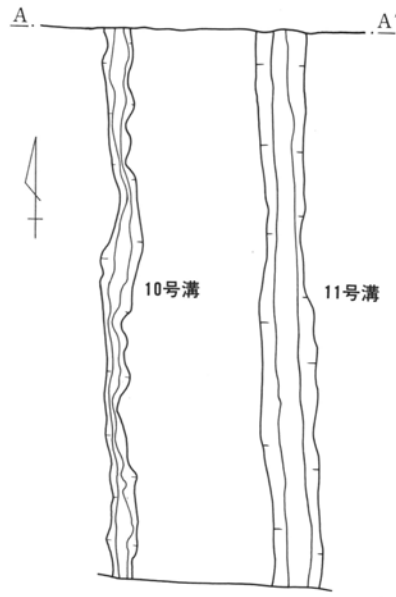
II区 1号溝

1. 灰褐色土 As-Bを若干含む粘質土
2. 灰褐色土 1と同質だがAs-B少ない
3. 灰褐色土 地山黄色土ブロック目立つ粘質土
4. 灰褐色土 As-B少量含む灰色粘質土多く含む



II区 5号溝

1. 黄褐色土 黄褐色土ブロック、黒褐色土ブロック含む人為的埋土
2. 灰白色土 白色砂質土ブロック少量含む粘質土
3. 灰白色土 2を基調とし、黄褐色粘質土ブロック少量含む

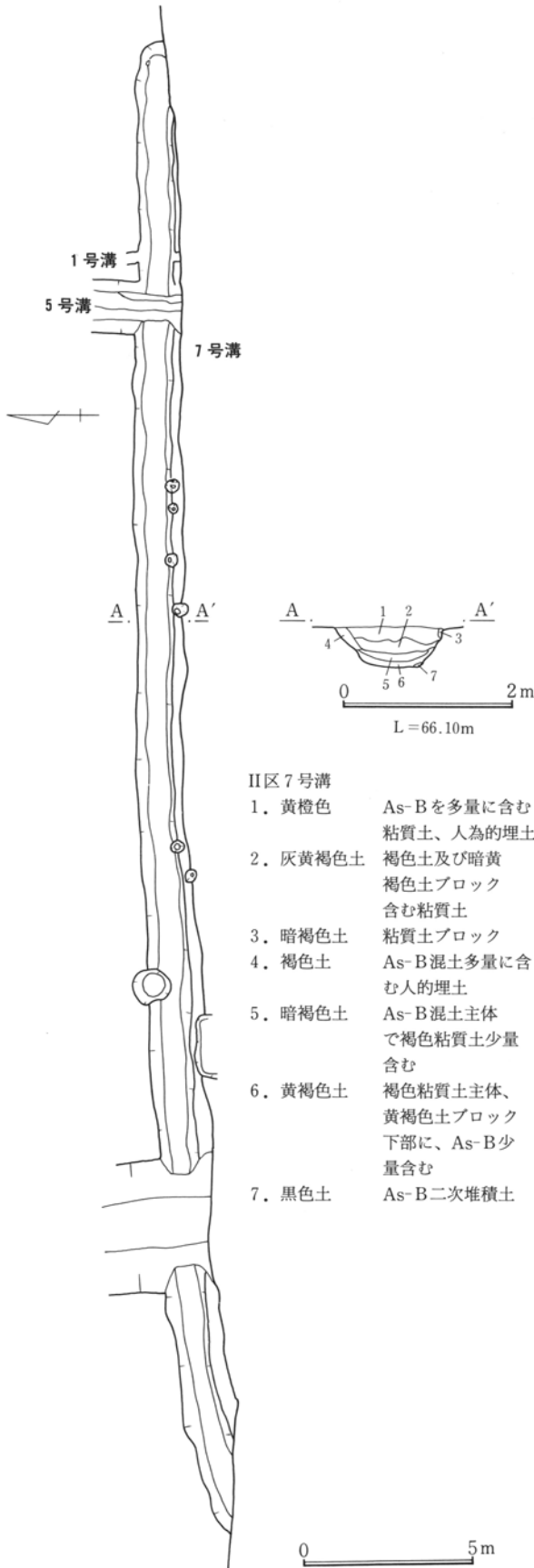


II区10・11号溝

1. 褐灰色土 As-B少量混入
2. 黄褐色土 As-B粒子多量に含む粘質土
3. 褐灰色土 黄褐色ブロック、As-B含む粘質土
4. 灰黄褐色土 As-B含む粘質土
5. 褐灰色土 As-B若干含む粘質土



第48図 II区溝



第49図 II区7号溝

II区4号土坑

18M-19グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、径1.35mで深さは1.2mである。ほぼ垂直に掘り込まれており、底はやや丸みを持つ。

II区5号土坑

18M-20グリッドに位置する。隅丸長方形を呈す、長辺1.1m、短辺1.0mで深さは10cmと浅い。

II区6号土坑

28M-5グリッドに位置する。南側は7号溝によって切られる。不正円形を呈す。径は約90cmで深さは1.1mである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底はやや丸みを持つ。

II区8号土坑

28M-1グリッドに位置する。3面3号溝に北半分を切られている。径1.5mほどの円形を呈すと思われる。

II区9号土坑

28P-20グリッドに位置する。隅丸方形を呈す。一辺は約1.8mで深さは約50cmである。壁の立ち上がりは緩やかである。

4. 溝 (第48・49図、P L 9)

16条が検出されている。部分的な検出にとどまっているものが多く形状も様々である。土坑同様に上層から掘り込まれているものが多い。

I区1号溝

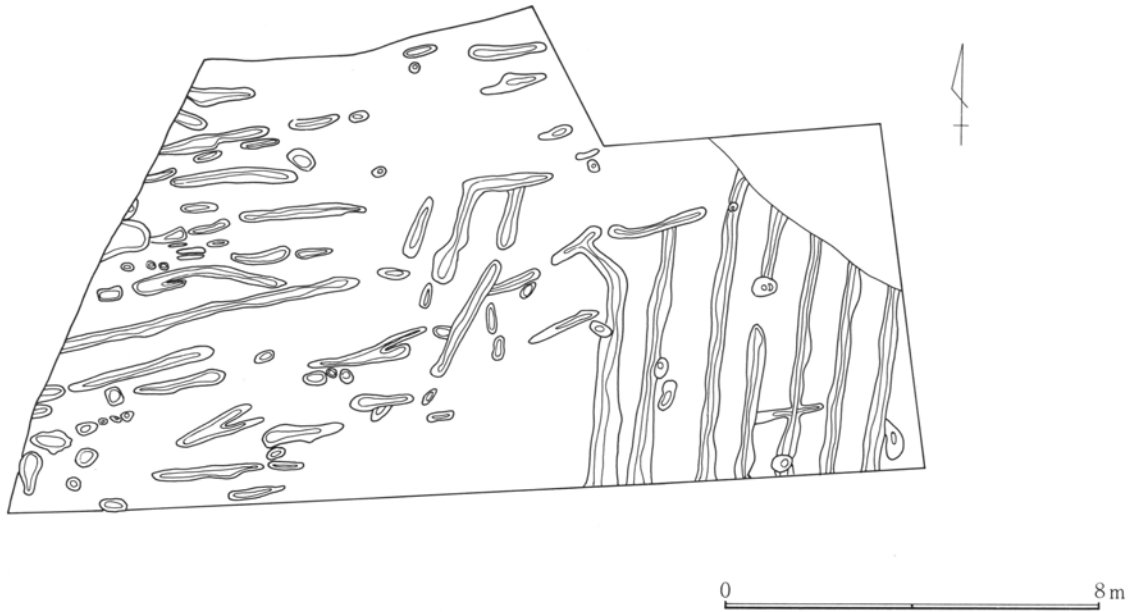
北東隅に検出、南西方向に走る南側の立ち上がりのみ確認した。調査した範囲内での深さは50cm程であるが、さらに深いと思われる。覆土や復旧畠を切っていることなどから時期は中世と考えられる。

II区1号溝

II区東部分18M-18グリッドに位置する。南北に走り、北側は3面3号溝に繋がっている。幅60cm深さ70cmで断面V字状を呈す。出土遺物は見られないが、覆土の観察から時期は中世と思われる。

II区2号溝

18O-17~19グリッドに位置する。東西に走り、4号溝と交差する。長さ約10mを検出した。東は調査



第50図 I区復旧畠

区外となる。幅60cm、深さ15cmである。

II区3号溝

東は18P-17グリッドから始まり、3面1号溝の南側にほぼ並行して走り、28P-9グリッドで3面1号溝が南に直角に折れるところで合流する形で終わっている。幅は0.7~1.2mで深さは40cm程である。断面はやや開いたV字状を呈す。3面1号溝に先行する溝と思われる、時期は中世と考えられる。

II区4号溝

18M~P-17グリッドに位置する。南北に走り、長さ約12mが検出された。南側は調査区内で終わっており、北側は調査区外となる。幅約40~50cm、深さは15cm程である。

II区5号溝

3面3号溝と合流する。幅1.5mで深さ約1mである。断面はV字状を呈す。時期は中世と考えられる。7号溝と直交しこれを切っている。

II区6号溝

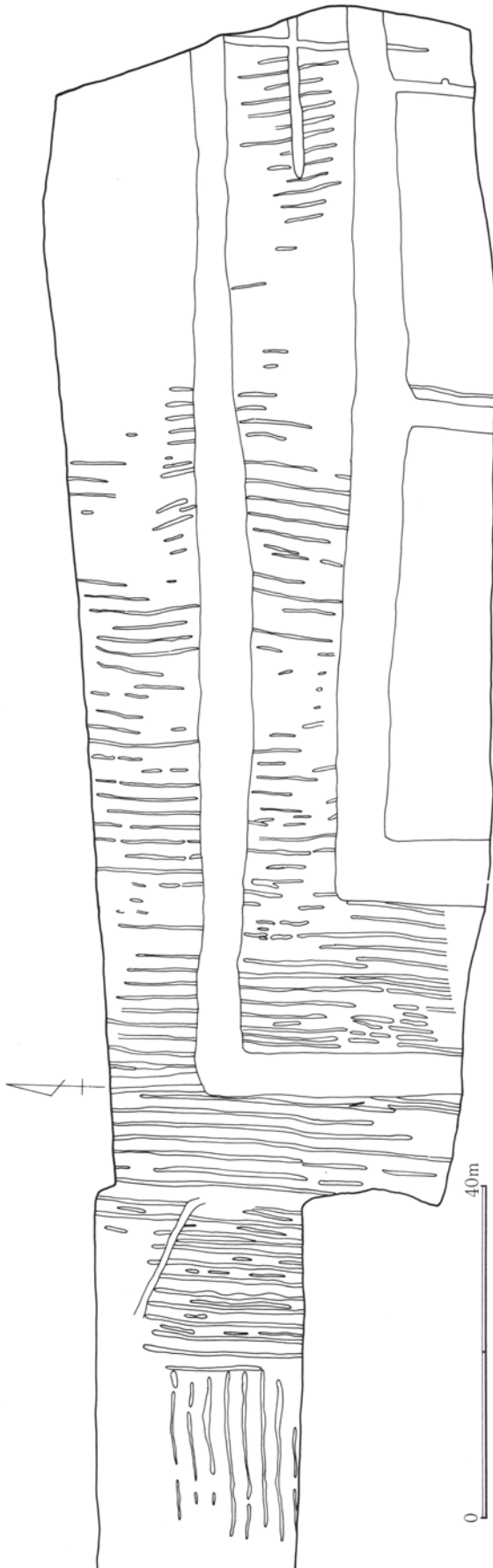
28M-1グリッドに位置する。5号溝の東側に並行して南北に走り、緩やかに蛇行する。幅25cm、深さは約20cmである。北側で3面3号溝、南側で7号溝と交わる。

II区7号溝

18M-18~28M-8グリッドに位置する。東西に走るが、東端は南に折れるものと思われるが調査区外であるため明らかではない。また西端もやや南に曲がって終わっている。幅は1.4m、深さは50cm程である。出土遺物はほとんど見られない。直交する5号溝に切られる。覆土にはAs-B混土を多量に含む。

II区8号溝

28P・Q-9グリッドに位置する。ほぼ直線で南北に走る。北側は調査区外となり、南側はII区1面1号溝にぶつかっている。上幅約1mで深さは30cm程である。時期はやや新しくなると見られ、3面1号溝との関連も考えられる。



第51図 II区復旧畠

II区10号溝

28N～Q-16に位置する。幅30～60cm、深さは約10cmである。南北に走るが掘り方が極めて不明瞭である。南側部分では西側の立ち上がりは確認できなかった。

II区11号溝

28N～Q-15グリッドに位置する。10号溝の東側約3mに並行しており、直線的に南北に走る。幅1.1m、深さは50cmである。

II区12号溝

38O-2～3グリッドに位置する。検出した長さは4m程で、西側は調査区外となる。幅90cm、深さは15cm程である。

II区13号溝

38N～O-2グリッドに位置する。調査区の南西隅から始まり曲線を描いて戻っている。幅50cm、深さ10cm程である。溝としたが人為的に作られたものではない可能性もある。

VI区1号溝 (第45図)

38P-10からQ-11にかけて位置する。調査区内をほぼ南北に走る。幅1.6m、深さ約60cmを測る。覆土はAs-B混土を主体とする。

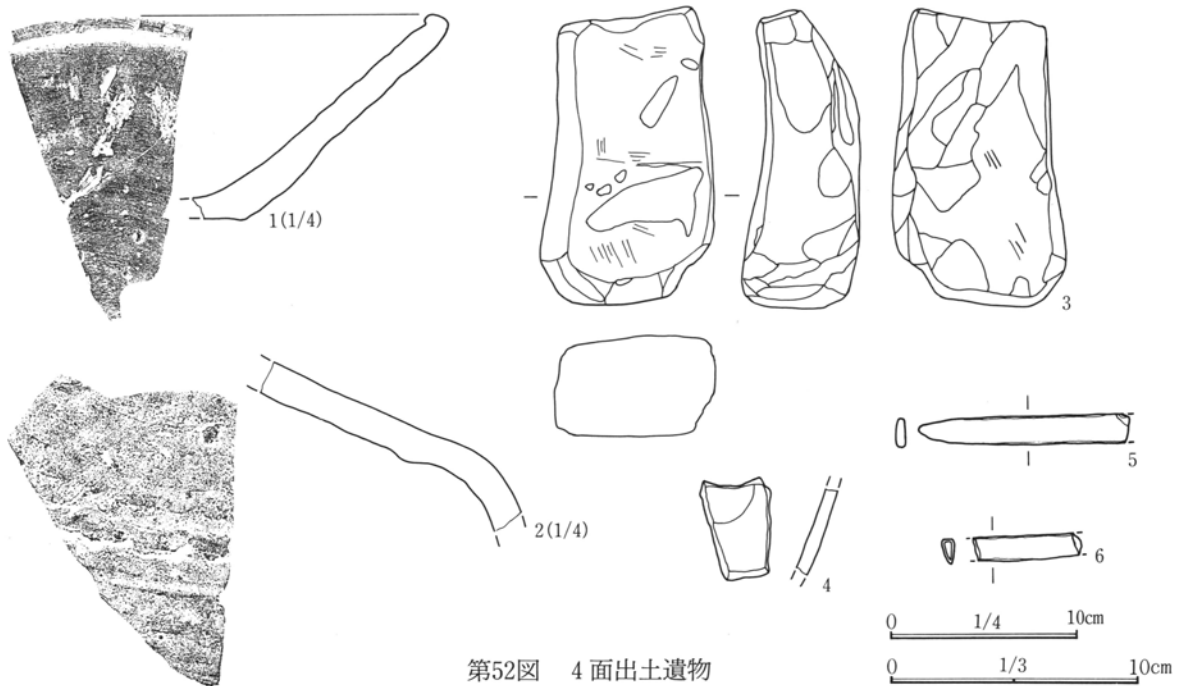
VI区2号溝 (第45図)

38P～Q-11グリッドに位置する。VI区1号溝の西側に並んで検出されている。極めて浅く掘り込みははっきりしない。幅40～70cmで深さは5cm程である。南側は二股に分かれている。溝に沿った東側がわずかに高まりを持っている。

5. 柵列

II区1号柵列

28N-17・18グリッド付近に検出されている。3～5個のピットが南から広がるように4列認められる。ピットの大きさは径30～40cm、深さは5～10cmと浅く、覆土はAs-Bの混土である。性格は不明。



第52図 4面出土遺物

表4 4面出土遺物観察表

II区3土坑(第52図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
1	陶器鉢	口～底部 8分の1		3号土坑 覆土	紐作り、内外面撫で	良 灰色 微砂粒含む
2	陶器甕	胴部(肩) 片		3号土坑 覆土	紐作り 自然釉 常滑焼	良 茶色 小砂礫含む
3	砥石	一部欠	長さ11.8 幅6.9 厚さ4.6	3号土坑 覆土	1面使用、中央凹んで反った形、磨り面や や荒れている。	砥沢石
4	青磁碗	体部片		VI区2号 溝	中国磁器、内面に片切り彫りで文様を描く。 描く、青磁釉に貫入する。龍泉窯系	良 淡青緑色 様雑物なし

グリッド(第52図)

番号	器種形	部位残存	口径・底径 器高(cm)	出土位置	成・整形の特徴・備考	焼成・色調 胎土
5	刀子	グリッド出土、長さ8.4、幅1.1 厚さ0.4 基部を欠く。				
6	鞘か	グリッド出土、長さ(4.3)幅1.0 厚さ0.6 両端を欠く。				

6. 復旧畠(第50・51図、PL9)

I区復旧畠(第50図)

As-B降下直後に作られた復旧畠が検出されている。検出された畠はサクが並行して見られ、幅10~20cm、深さは数cmと浅い。またサクは南北方向に走るものは比較的整っており、畝幅はおよそ90cmを測り、広いところでは1.3mである。I区西側では東西方向のものも確認されているが、サク痕は断続的で、不明瞭であった。サクの覆土はAs-Bを主体とした混土で黒味を帯びている。サクの深い部分はAs-B層を抜いて茶褐色の粘質土まで達しているところもあるが、平均して掘り込みは浅い。

II区復旧畠(第51図、PL9)

ほぼ全域においてサクが確認される、南北方向を基本とするが、中央東寄りのものは東ないしは西にやや振れており、区画を異にするのかも知れない。中央部分のものは、ほぼ南北に整って走る。また西側には東

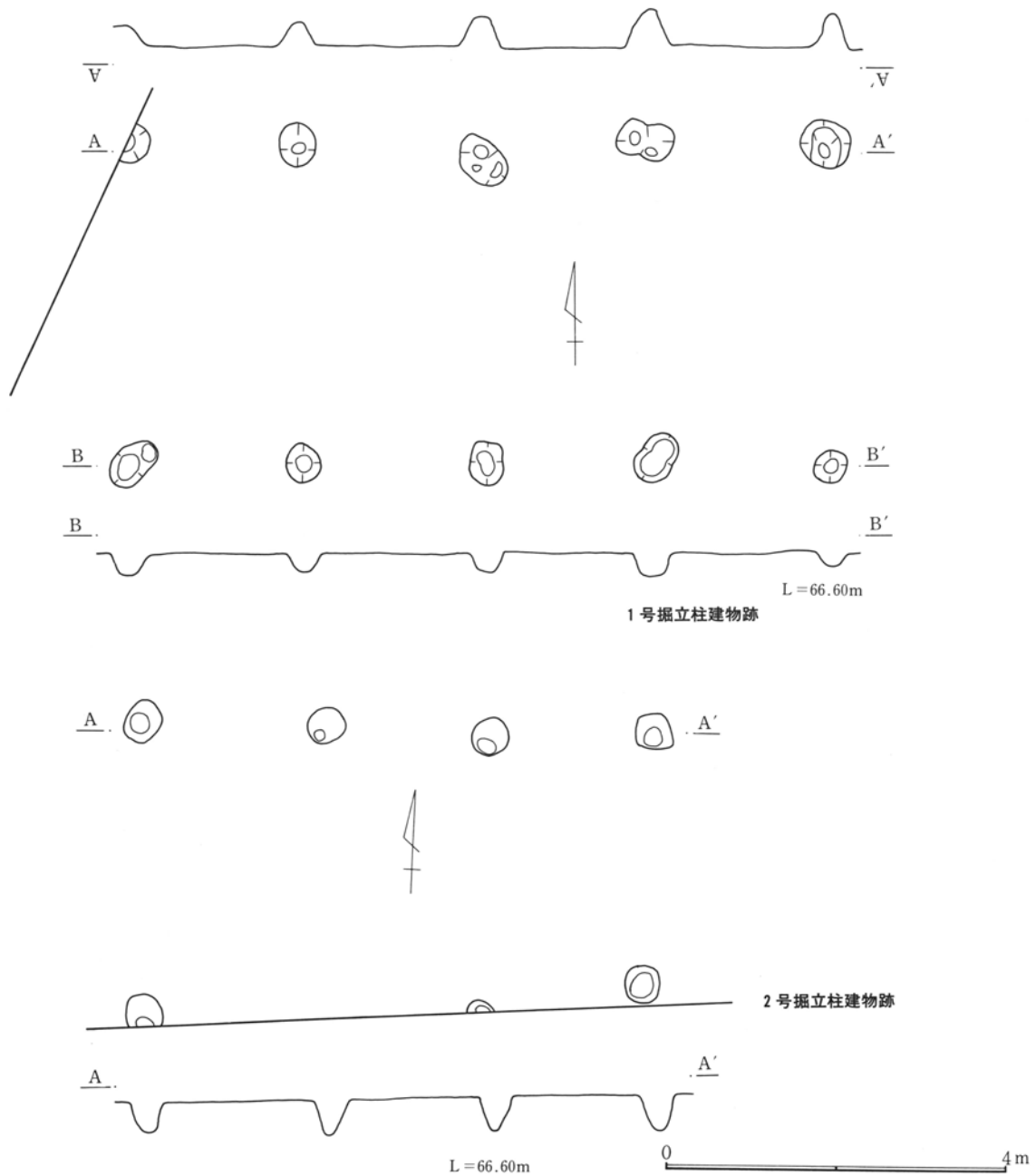
西方向のものが検出されている。さらに西側についてはごく一部に東西、南北方向のものが検出されているのみである。これらのサクは粘質土に残された掘方を良く観察すると底が凹凸で、鋤と考えられる工具の痕跡がかなり規則的に認められることから、耕作は極めて短期間であったと推測される。

第5節 中世（3面）

本面は基本土層で示したⅦ層上面に相当する。ただし調査区全域において均一な面としては残っておらず、さらに上位の遺構に削平されている部分もかなりある。このため検出された遺構の時期は、上限はほぼ中世（15～16世紀）と考えられるが、下限については一部江戸時代（天明3年以前）のものも含まれている。

1. 掘立柱建物跡（第53図）

I区において2棟を検出した。II区においては500以上の小ピットが検出されており、建物の存在が想定されるものの明確なものは認められなかった。



第53図 I区1・2号掘立柱建物跡

I 区 1号掘立柱建物跡 (第53図)

I 区18O-5・6グリッドに位置する。東西4間(8.4m、柱間は2m)、南北1間(3.8m)の規模で、主軸はN-1°-Wである。柱穴の径は30~40cmで現状での深さは10~50cmを測る。重複しているものも見られ、建て替えも考えられる。本遺構は2面の1号建物の直下にあり、何らかの関連も想定される。

I 区 2号掘立柱建物跡 (第53図)

1号掘立柱建物跡の南東に位置する。南側は調査区壁に接している。東西3間(6m、柱間約2m)南北1間(2.9m)で主軸はN-0°であるがさらに南に延びる可能性もある。柱穴の径は約40cm、深さは約40cmである。これらの建物周辺には多くのピットが存在するが、建物と判断されたのはこの2棟のみである。

2. 土坑 (第54~59、62~66図、P L 11~13・54・55・73)

調査区内において数多くの土坑、ピットが検出されている。特にII区において顕著であった。その分布を見ると、溝に画された部分に集中しており、3・4号溝の内側、11号溝、19・20号溝に囲まれた場所で集中して検出されている。このことは建物等の存在が想定されたが、明確なものは確認できなかった。

さらに、平面形状は円形から長方形までいくつか見られるが、注目されるものとして長方形の土坑が何か所か切り合って群として検出されるところがある。またこれらの土坑は規模、形態が似ており比較的短期間に掘られたものと思われ、切り合いを見ると屋敷地を画すと考えられる溝よりも新しいものと判断される。

検出数が多いため遺物を出土したものを中心として図示し、個別の内容については一覧表とした。

I 区 1号土坑

18O-4グリッドに位置する。隅丸長方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.2mで西辺がやや短くなっている。深さは60cm程である。底は平らで底面より、かわらけが1点出土している。

I 区 3号土坑

18M-4グリッドに位置する。長円形で長径2.0m、短径1mで、深さ80cmを測る。底は平らである。かわらけ1点が底面北東寄り出土している。

I 区34号土坑

18N-4グリッドに位置する。不定円形で径約40cm、深さは25cmである。永楽通宝が出土している。

I 区38号土坑 I 区 1号火葬墓

18L-2グリッドに位置する。隅丸長方形を呈すと思われる。長軸1.05m、短軸(0.5)m、深さ0.4mである。立会い調査時に検出された。トレンチ断面に掛かった状態で検出されたために西側が削られている。人骨1体分が火葬された状況(集骨されている)で検出された。多くの炭化材が見られ、壁は焼けている。頭位を北、顔は西向きの屈葬位。頭の下には大形の礫が置かれ、底面には薄く剥がれた礫片が敷かれていた。

II 区 1号土坑・II 区 2号土坑

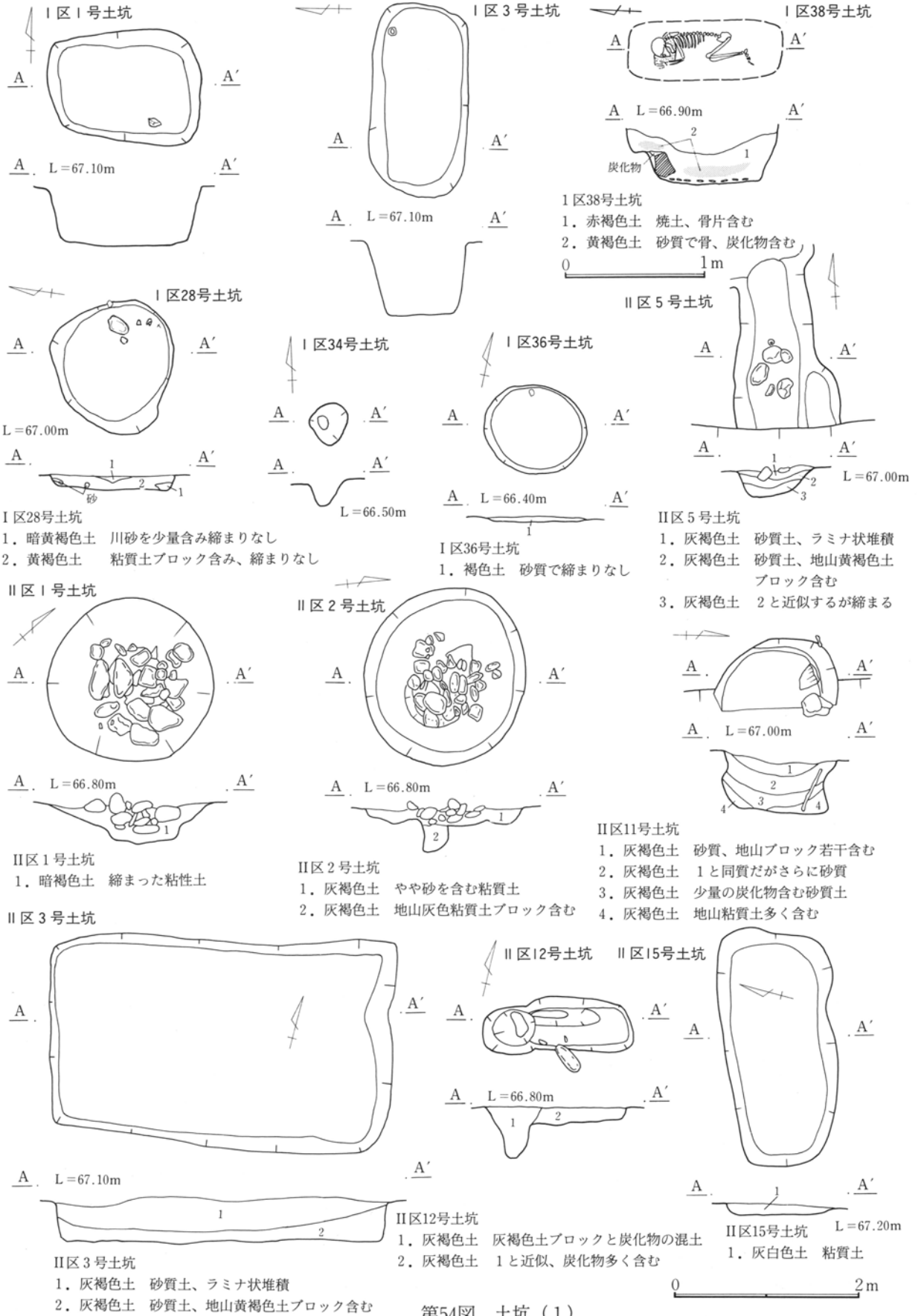
共に円形を呈し中央が落ち込む集石土坑、石臼、掘り鉢片が出土している。

II 区 3号土坑

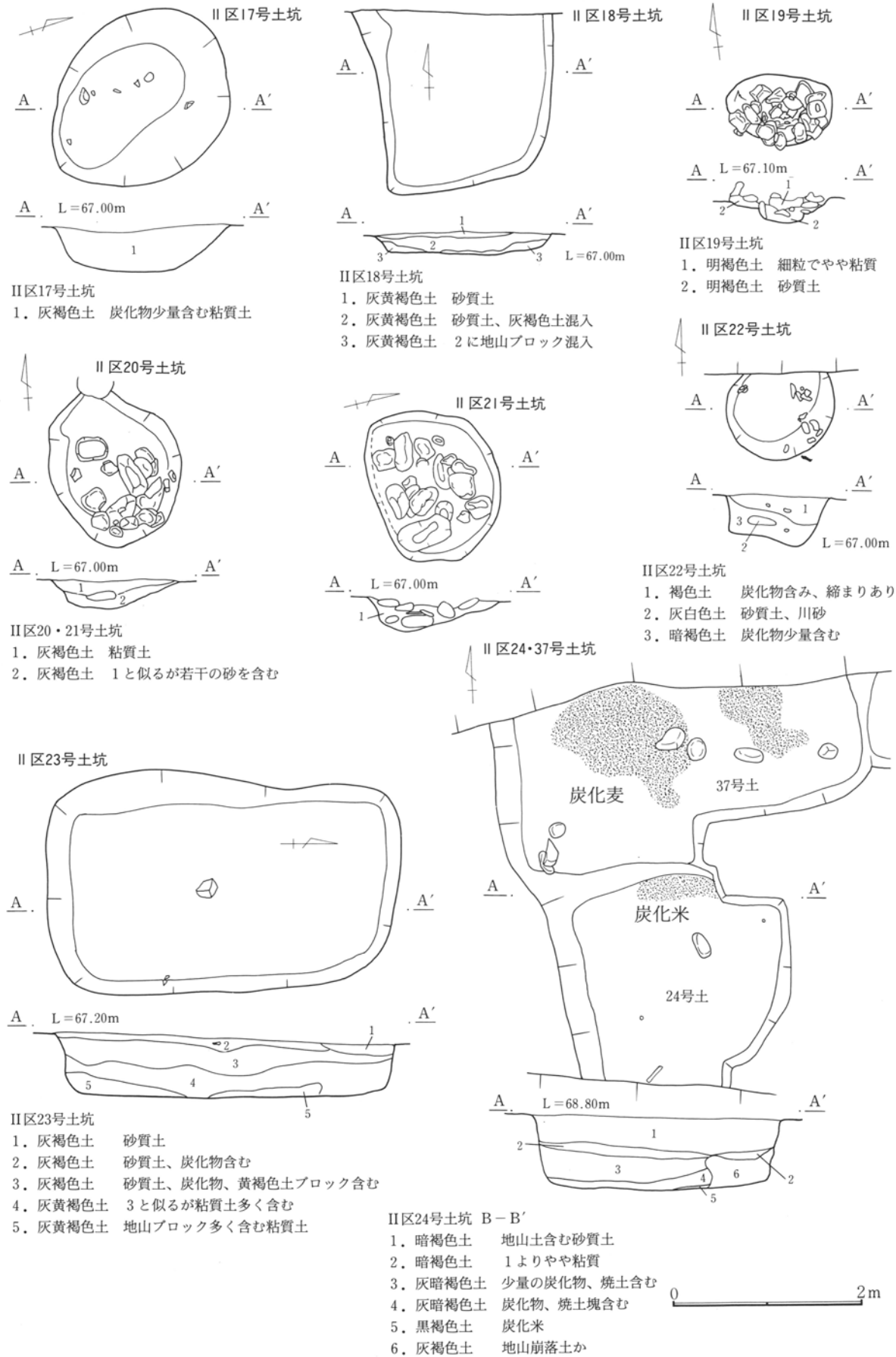
II 区の東端に位置する。長方形を呈し、規模は長辺3.7m、短辺2.2mである。壁はほぼ垂直に掘りこまれ、底面は平らで、東壁際に径20cm程の小ピットが検出されている。土坑の覆土は砂質土で一気に埋没した状況を示す。かわらけ、内耳鍋片が出土している。

II 区 5号土坑

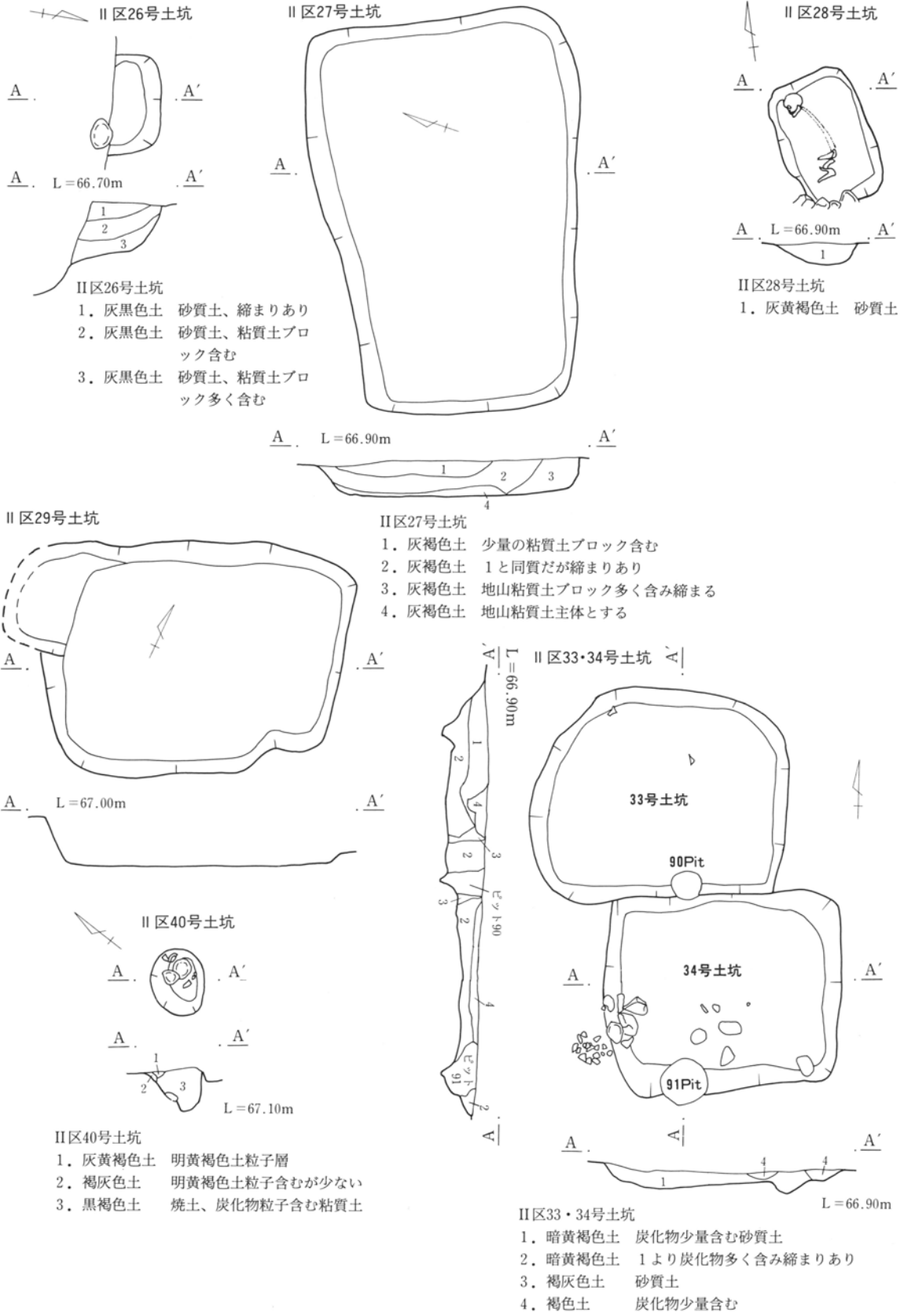
長円形を呈し南はII 区 3号溝を切り、北は4号土坑と重複する。礫が入り幅80cm深さは30cm程である。陶



第54図 土坑 (1)



第55図 土坑 (2)



第56図 土坑 (3)

0 2m

器片、鉄滓が出土している。

II区11号土坑

円形を呈し、1号溝と重複する。火を受けた板碑片、内耳鍋片が出土している。

II区20号土坑

長円径を呈す集石土坑である。銅銭3点が出土している。

II区21号土坑

長円形を呈す集石土坑である。かわらけ、凹石が出土している。

II区23号土坑

隅丸長方形を呈す。東西軸を持つ大型土坑である。焙烙片、石鉢片、銅製品が出土している。

II区24号土坑

検出した部分はほぼ方形を呈すが南に延びる可能性がある。銅銭（永楽通宝他）、釘、砥石などの他、北壁際において炭化米が出土している。

II区27号土坑

隅丸長方形を呈す大型土坑で、東辺がやや広がる。底は平らで覆土は砂質土である。鉢が出土している。

II区28号土坑

隅丸長方形を呈す。南西隅に19号土坑が重複している。土坑墓である。人骨1体とかわらけ、銅銭3点、砥石が出土している。人骨は頭を北にし、西を向き手足を折り曲げた状態で埋葬されている。

II区29号土坑

南側がやや張り出す隅丸長方形を呈す。覆土は砂質土である。石製丸鞆が出土している。

II区33・34号土坑

共に方形を呈す。深さはそれぞれ40・20cm程である。陶器碗、小柄、銅銭が出土している。

II区36・37号土坑

長方形を呈し重複する。1基である可能性もある。南には24号土坑が接している。北側は5号溝によって切られる。深さは60cm程で、多量の焼土と炭化麦が出土している。24号土坑を含め貯蔵目的か。

II区40号土坑

長円形を呈す。礫を混入し、かわらけ、鉄製の輪、銅銭が出土している。

II区44号土坑

長円形を呈すが西側を10号溝に切られる。中央に47号土坑が重複する。棒状の銅製品が出土している。

II区49号土坑

南北に軸を持ち隅丸長方形を呈す。深さは25cm程である。人骨、銅銭5枚が出土している。人骨は頭を北にし、西向きで手足を折り曲げた状態で埋葬されている。

II区62号土坑

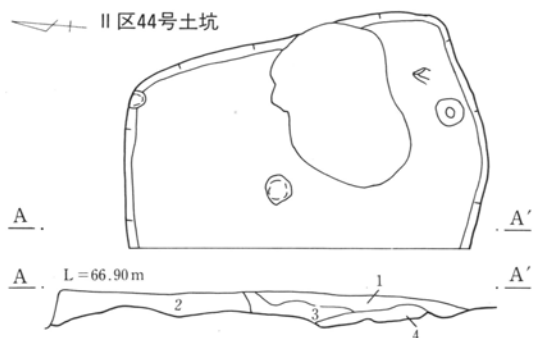
やや西辺が長い方形を呈す。人骨2体が出土している。共に頭を北にし西を向いた状態で埋葬されている。

II区82号土坑

北辺がやや広がる隅丸長方形を呈す。人骨1体が出土しているが、遺存状態は悪い。

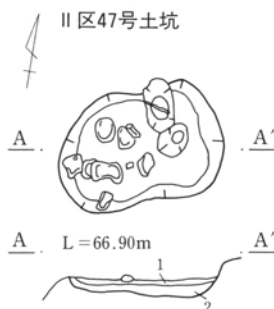
II区109号土坑

土坑が集中する場所の北端に位置。円形で径は約70cmである。ほぼ垂直に掘り込まれている。井戸か。



II区44号土坑

1. 褐灰色土 砂質土、黄橙色粒子含む
2. 褐色土 砂質土
3. 暗黄橙色土 黄褐色粘質土多く含む
4. 暗黄橙色土 炭化物層状に含む



II区47号土坑

1. 褐色土 砂質土
2. 暗褐色土 黄橙色土含む粘質土



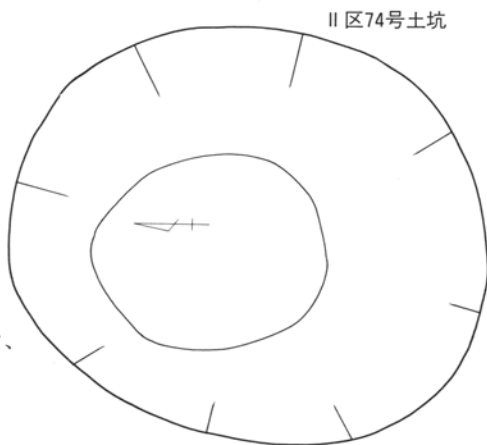
II区49・51号土坑

1. 灰黄褐色土 砂質土、黑色粘質土ブロック少量含む

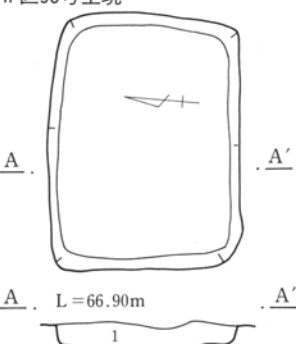


II区62号土坑

1. 褐色土 砂質土、褐色粒少量含む
2. 明褐色土 砂質土、褐灰色土ブロック、褐色粒少量含む



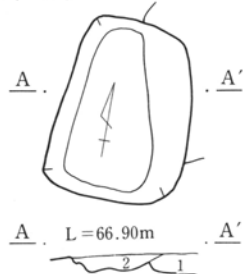
II区74号土坑



II区90号土坑

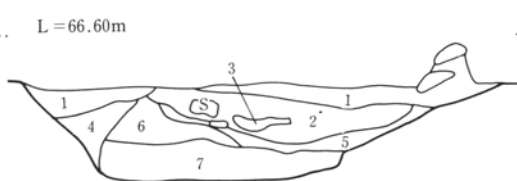
1. 灰黄褐色土 浅黄橙色、褐灰色砂質土ブロック含み、灰黄褐色砂質土混入

II区93号土坑



II区93号土坑

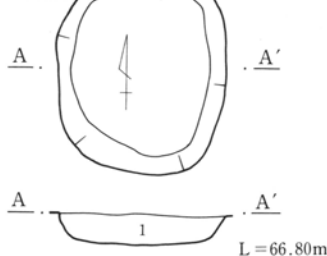
1. 灰黄褐色土 砂質土、浅黄橙色、褐灰色砂質土をブロック状に含む
2. 褐灰色土 粘質土、川砂混入



II区74号土坑

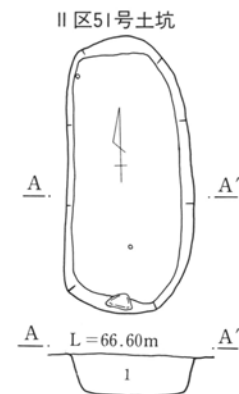
1. 灰黄褐色土 砂質土
2. 暗黄褐色土 砂質土、褐灰色土ブロック含む
3. 灰褐色土 縮まりあり
4. 灰褐色土 褐色土ブロック混入
5. 灰褐色土 砂質土やや粘性あり
6. 暗褐色土 縮まりあり
7. 暗褐色土 6より地山ブロック多く混入

II区98号土坑



II区98号土坑

1. 暗黄褐色土 明黄褐色の砂質土と褐灰色砂質土をブロック状に含む



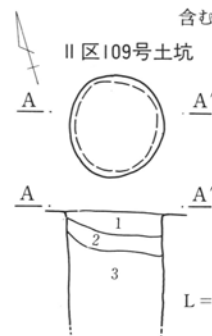
II区51号土坑



II区82号土坑

II区82号土坑

1. 灰黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土ブロック含む



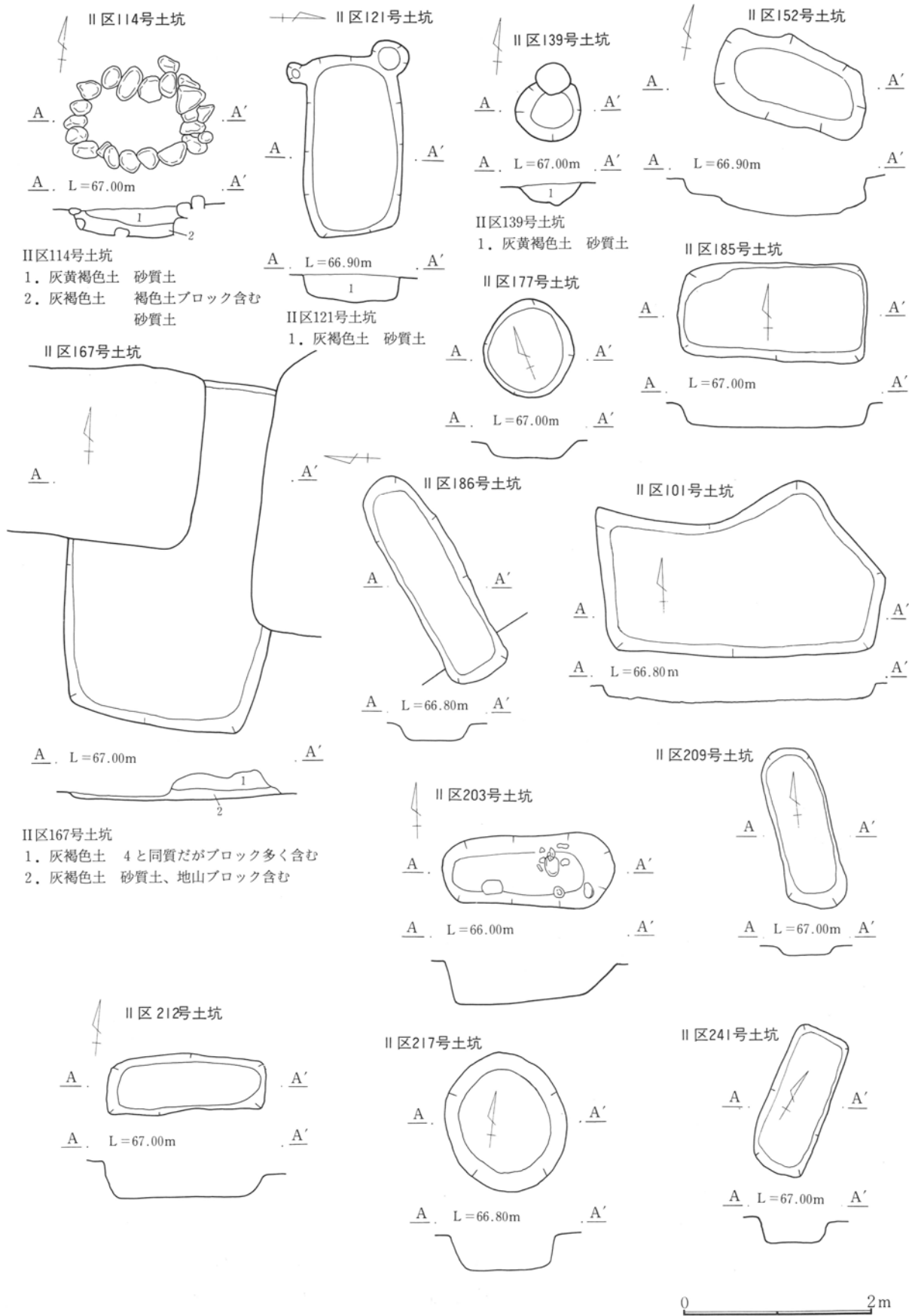
II区109号土坑

II区109号土坑 (井戸か)

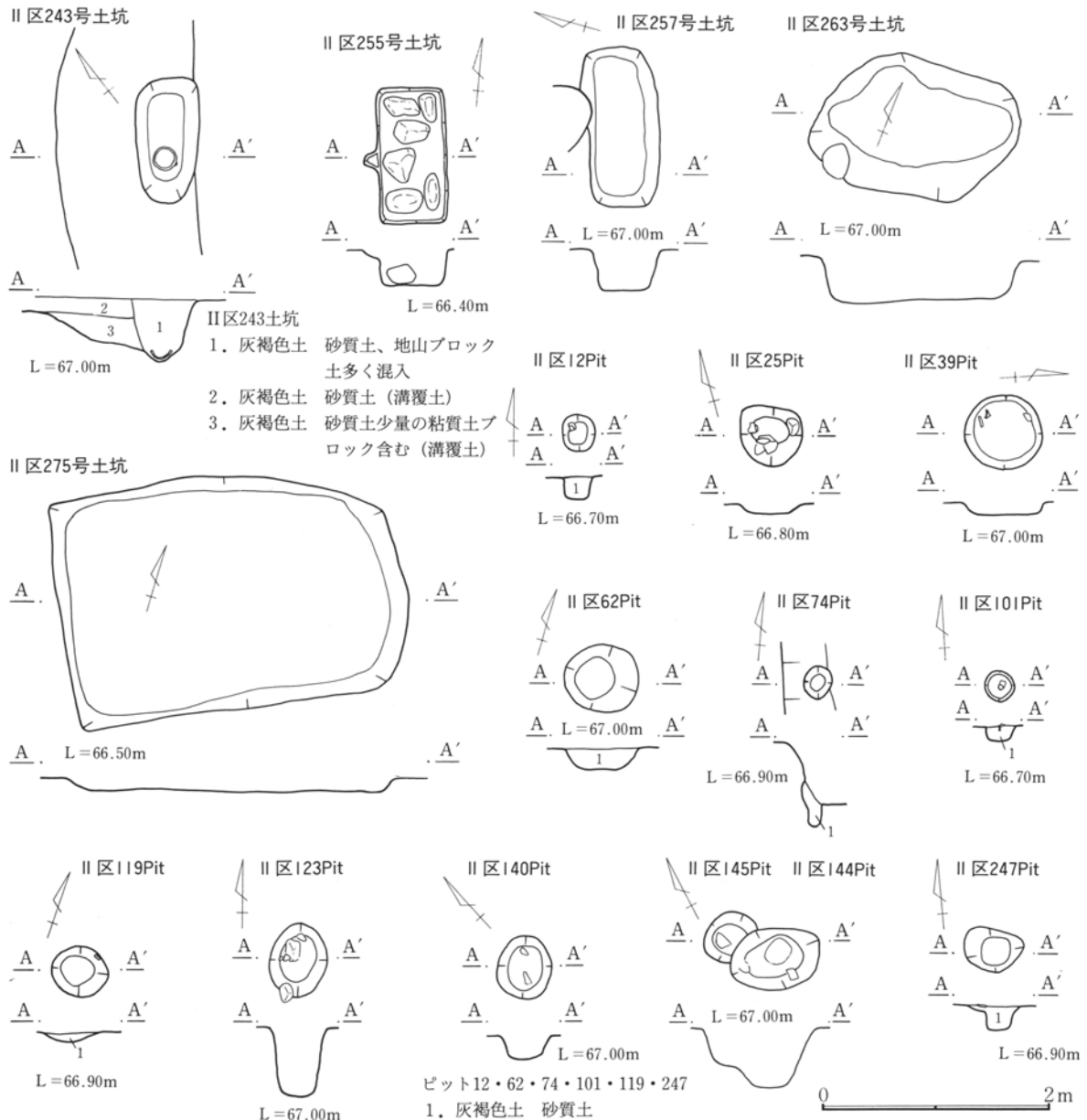
1. 灰黄褐色土 砂質土
2. 灰黄褐色土 砂質土、川砂混入、黒褐色砂質土ブロック少量含む
3. 灰黄褐色土 砂質土

0 2m

第57図 土坑(4)



第58図 土坑 (5)



第59図 土坑(6)・ピット

II区114号土坑

長円形の石組み土坑である。長軸1.5m、短軸1.0mで深さは30cmである。出土遺物は見られない。

II区203号土坑

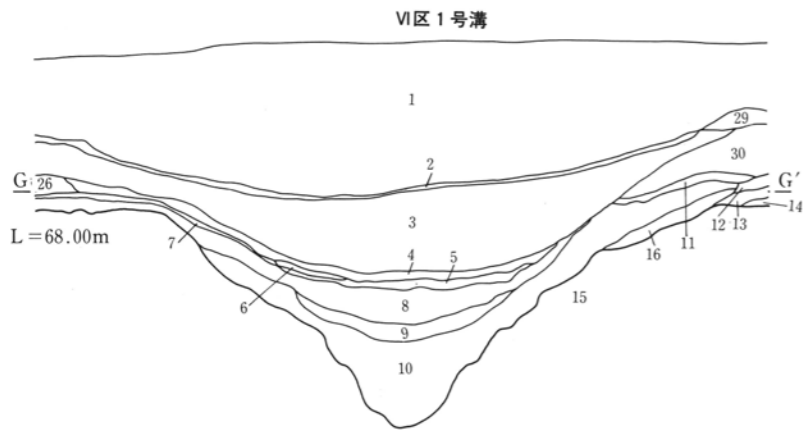
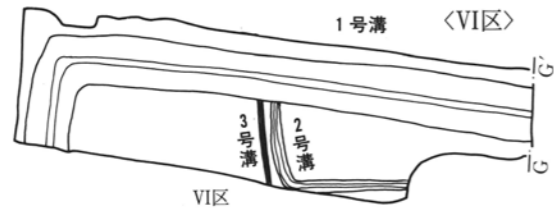
長円形を呈す、かわらけ3点、および水輪が出土している。

II区243号土坑

隅丸長方形を呈す。溝を切って掘り込まれたものと思われる。底面より完形の片口が出土している。

II区255号土坑・II区1号火葬墓

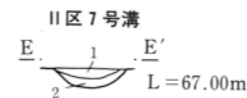
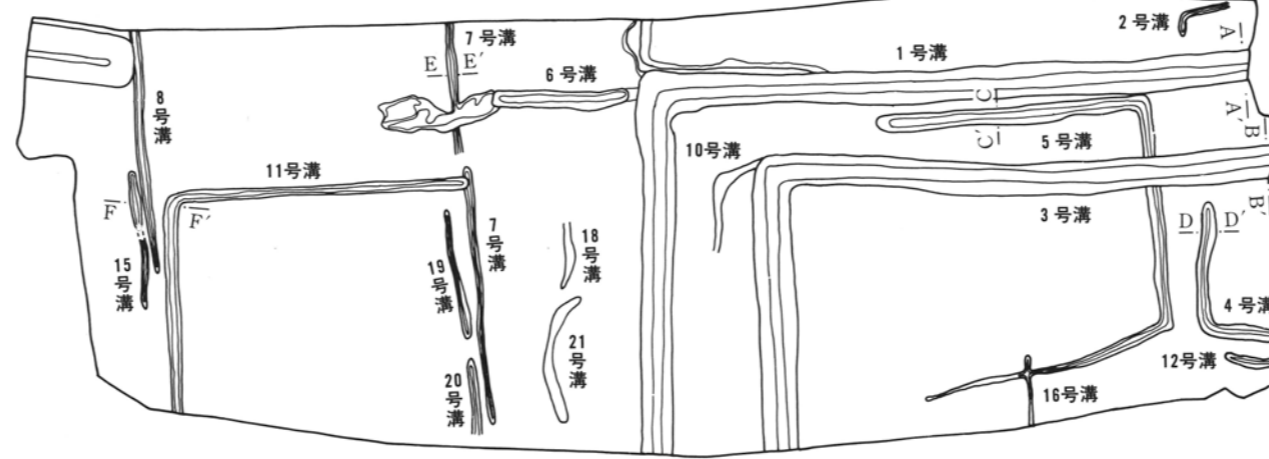
28L-3グリッドに位置する。長さ1.15m、幅0.6mの長方形で、西側のほぼ中央に煙道状の張り出しを持つ。深さは30cm程である。大形の礫が両脇と中央部分に並べられるが、両側の石は低く据えられている。壁面は良く焼けており、埋土中には炭化物が多く含まれる。



VI区 1号溝

1. 黒色土 天明3年泥流層、多量の火山成因の礫、および河原礫を含む砂礫層
2. 灰白色土 As-A層 (1次堆積)
3. 黄褐色土 砂質土
4. 黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土若干混入
5. 明黄褐色土 砂質土、酸化鉄分混入、褐灰色粘質土含む
6. 明黄褐色土 5に近似、やや締まりあり
7. 暗黄褐色土 細粒砂質土
8. 灰黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土多く含む
9. 黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土含む
10. 暗黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土多く含む
11. 暗黄褐色土 細粒砂質土
12. 暗黄褐色土 砂質だが褐灰色、灰黄褐色粘質土をブロック状に含む
13. 暗褐色土 砂質土、褐灰色粘質土僅かに含み、川砂混入
14. 暗黄褐色土 砂質土、褐灰色、灰黄褐色粘質土ブロック多く含む
15. 暗褐色土 砂質土、褐灰色粘質土、川砂混入
16. 暗黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土、灰黄褐色粘質土混入流れ出し

II区



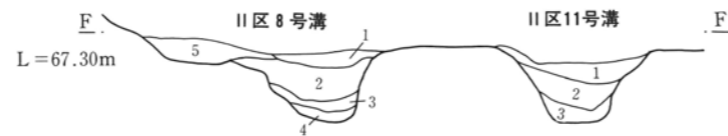
II区 7号溝

1. 灰褐色土 砂質土、地山土ブロック少量混入
2. 灰褐色土 地山土ブロック多く混入し粘性あり



II区 5号溝

1. 灰白色土 砂を多量に含む
2. 灰白色土 1と同質だがやや細粒
3. 灰白色土 2と同質だが黄褐色土ブロック含む



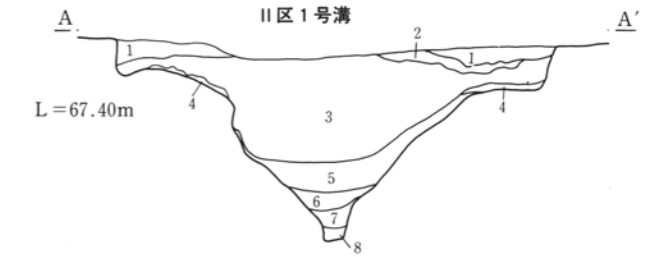
II区 8, 11号溝

1. 灰褐色土 地山ブロック、砂を含む
2. 灰褐色土 1と近似、地山ブロック混入少ない
3. 灰褐色土 砂層、小礫含む
4. 灰褐色土 砂質だが、地山土含み締まりあり
5. 灰褐色土 1と同質だが締まりあり



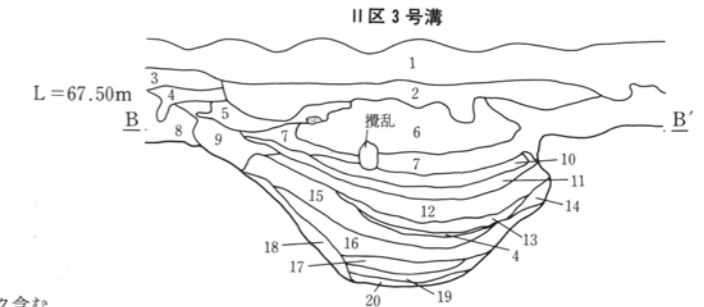
II区 4号溝

1. 灰褐色土 微砂土
2. 灰褐色土 微砂土、やや締まりあり
3. 灰褐色土 微砂土、締まりあり
4. 灰褐色土 微砂土、やや軟質
5. 灰褐色土 微砂土、締まりあり
6. 暗褐色土 砂質土
7. 暗灰褐色土 粘質土、締まりあり
8. 暗灰褐色土 砂質土



II区 1号溝

1. 灰白色土 川砂、白色粒子多量に含む
2. 黄褐色土 粘質土、締まりあり
3. 灰白褐色土 1と同質だがやや細粒
4. 褐色土 3と同質だが褐色土ブロック含む
5. 灰褐色土 微砂土、やや粘性あり
6. 灰褐色土 微砂土、灰褐色粘質土ブロック混入
7. 灰褐色土 褐色、灰褐色土ブロック、および黒色土ブロック、As-Bを若干混入
8. 灰褐色土 7と同質、As-C混土を多く含む

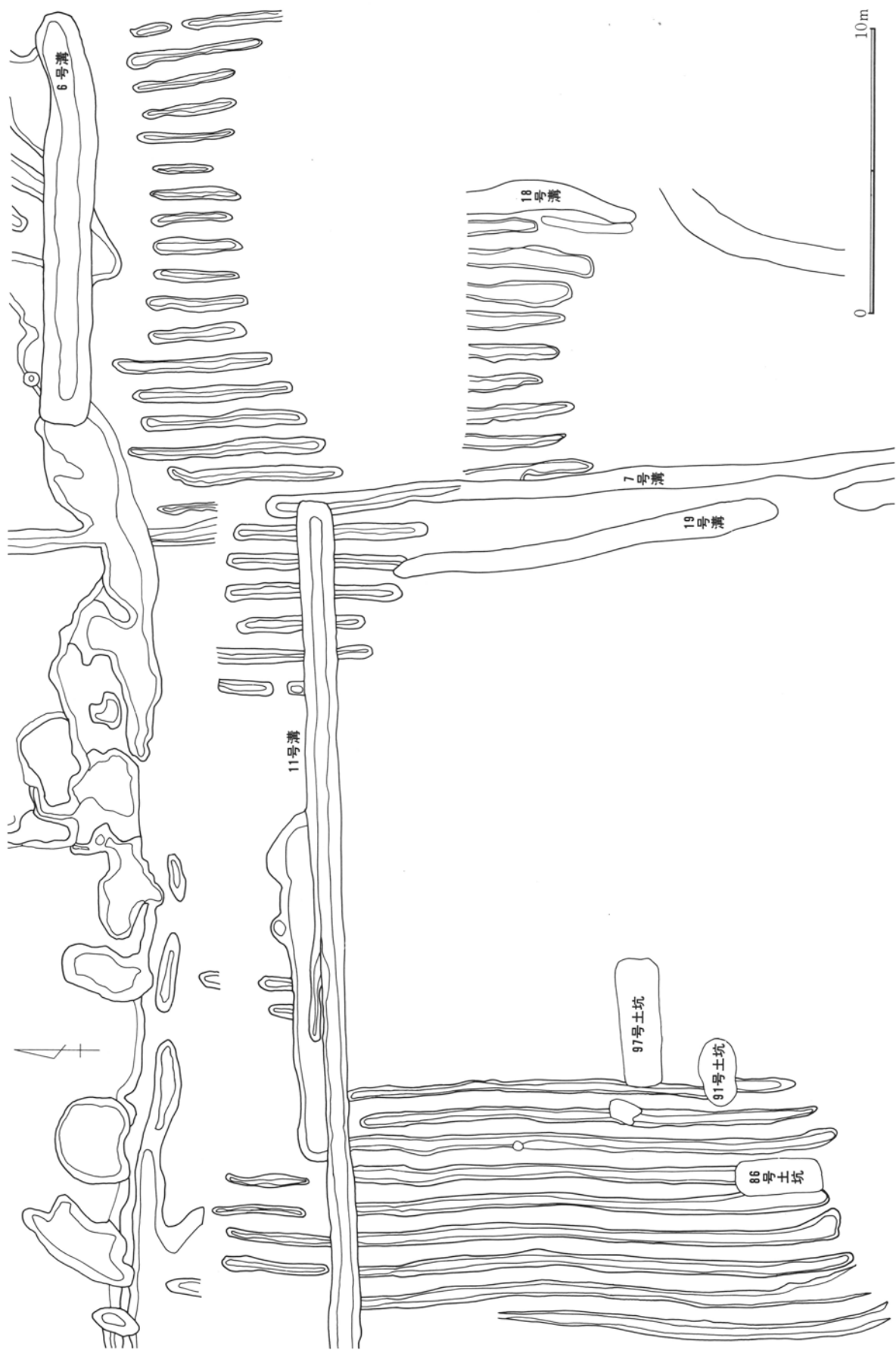


II区 3号溝

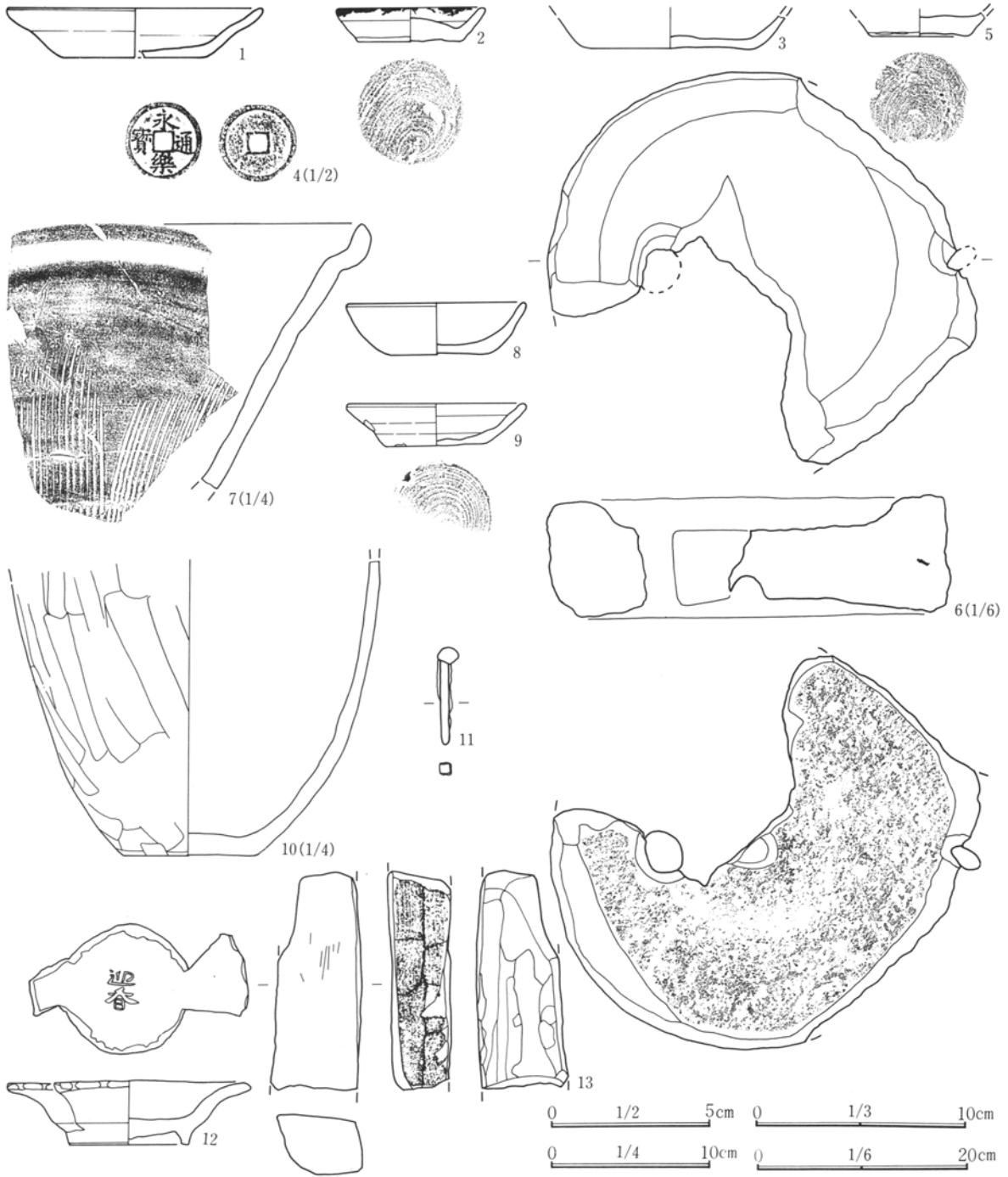
1. 明黄褐色土 細砂土
2. 明黄褐色土 砂粒やや粗くブロック土混入
3. 明黄褐色土 鉄分凝集見られる
4. 明黄褐色土 3に似るが黒味を持つ
5. 黒褐色土 土坑覆土、炭化物、礫を混入
6. 灰褐色土 シルト質でやや粘性あり
7. 明黄褐色土 6と微砂土の層を交互に含む
8. 明褐色土 黄褐色土ブロック含む
9. 灰褐色土 6と似るがブロック化している
10. 灰褐色土 シルト層、粘性あり
11. 暗褐色土 シルト層やや固く締まる
12. 灰褐色土 シルト質、やや粘性あり
13. 灰褐色土 15に似るが灰色を帯びる
14. 黄褐色土 16と同質
15. 灰褐色土 微砂土、粘性は弱い
16. 明黄褐色土 シルト層やや粘性を示す
17. 灰褐色土 シルト層、ラミナ状堆積
18. 灰褐色土 シルト層、粘性あり
19. 灰褐色土 微砂土層、粘性なし
20. 灰褐色土 シルト層、粘性あり

第60図 II・VI区溝全体図





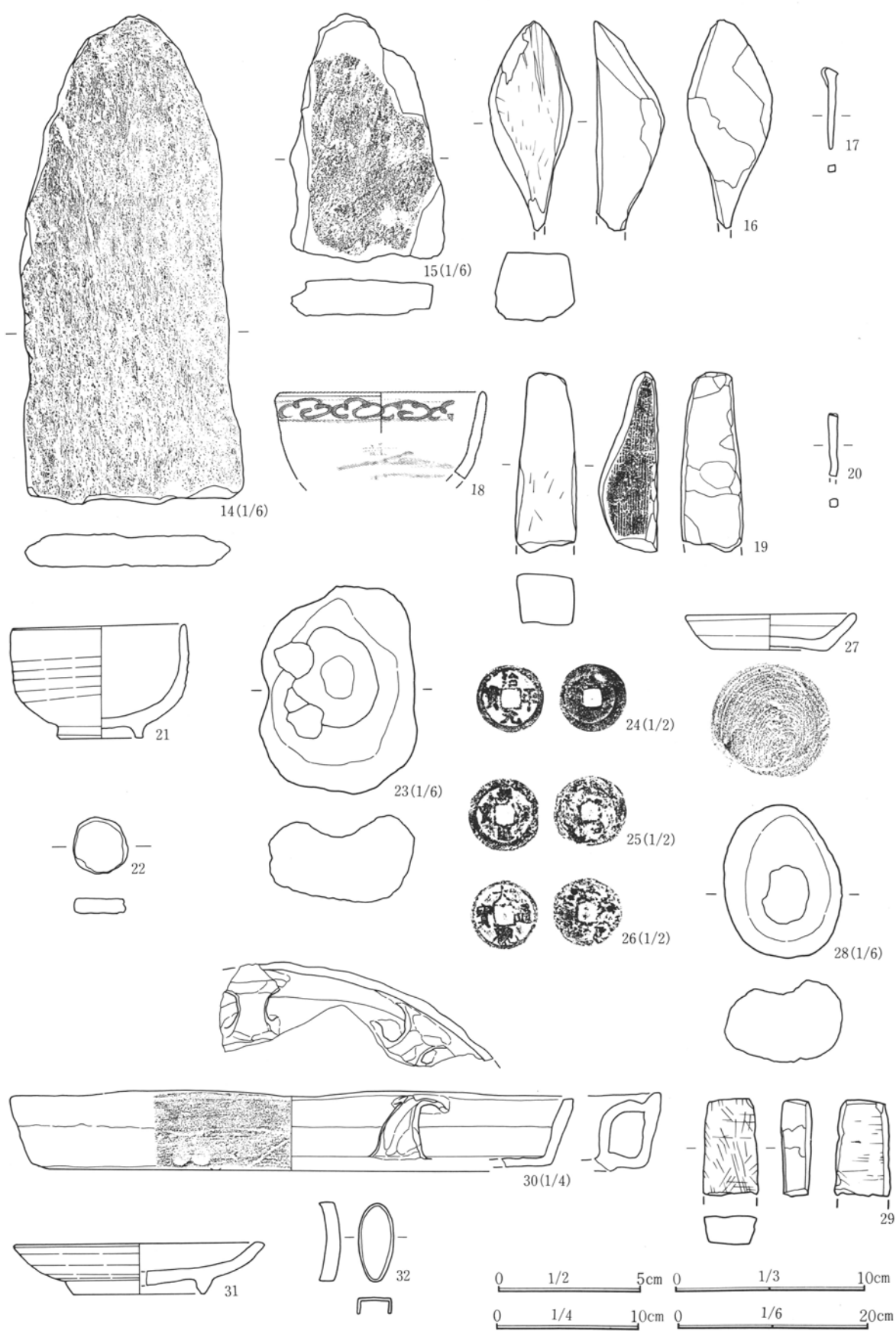
第61图 II区畠平面图



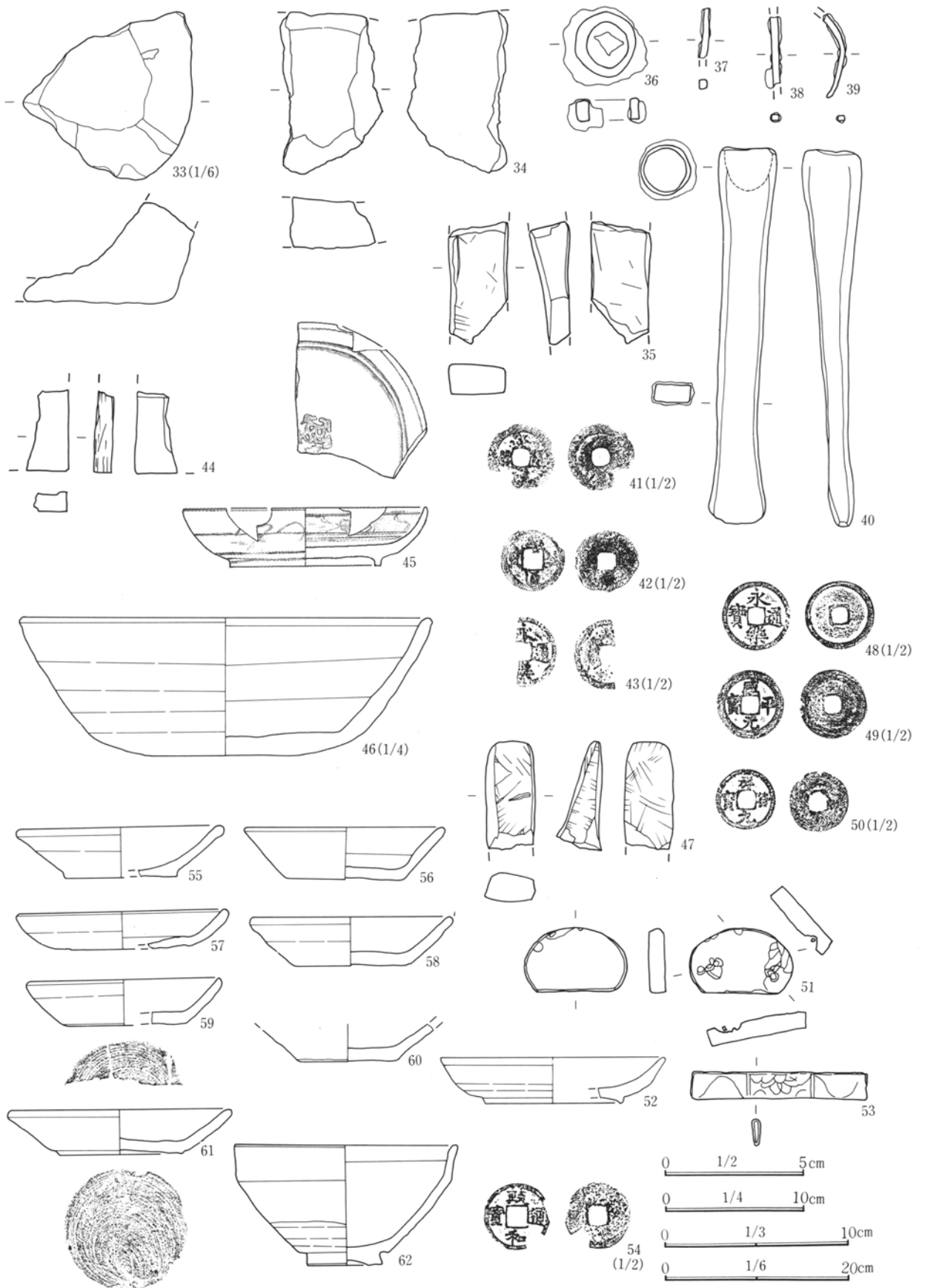
第62図 土坑出土遺物（1）

3. ピット（第59・60図、P L55）

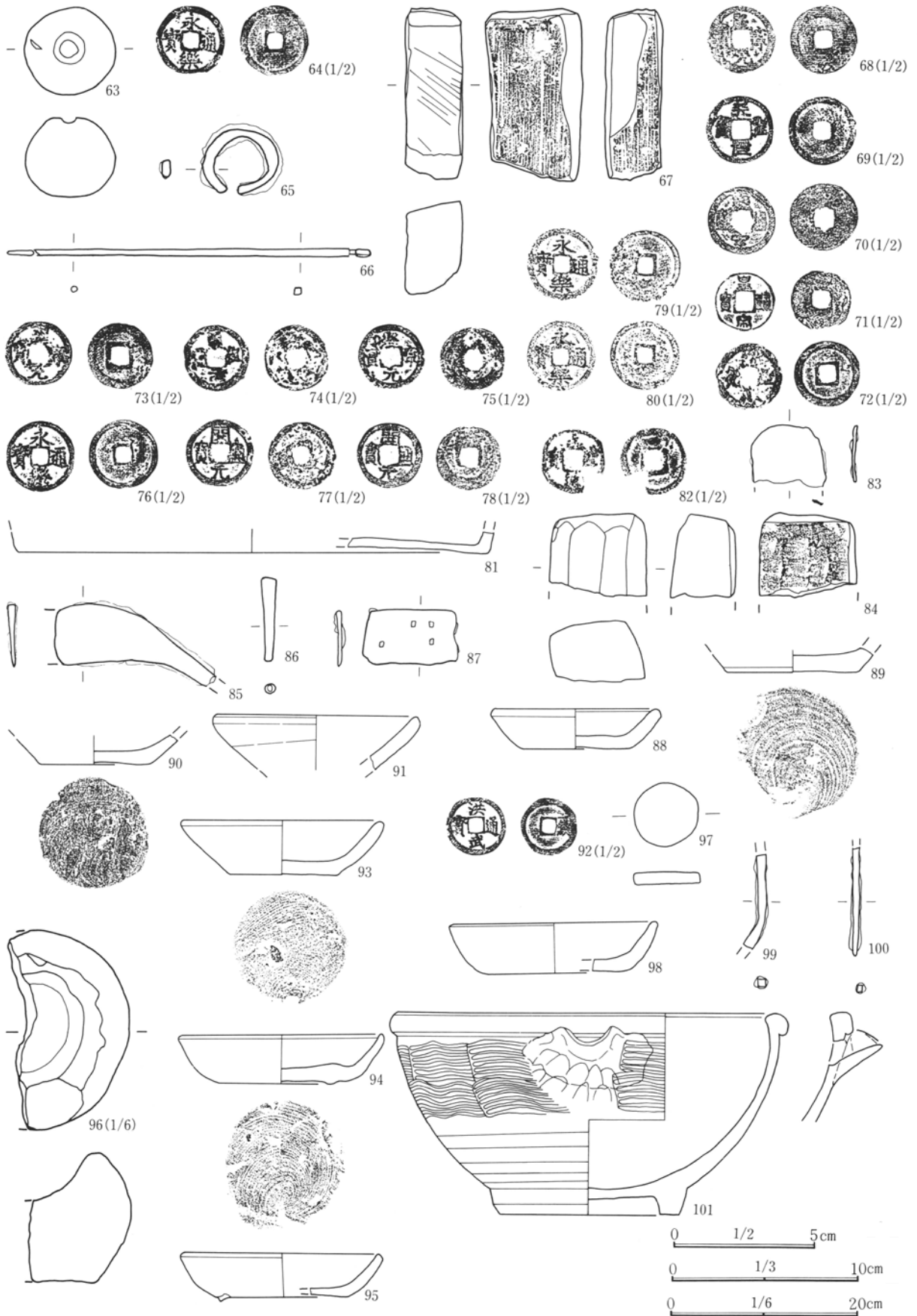
総数600基以上にのぼる。特にII区においてその数が突出する。その分布を見るといくつかの集中する場所が見られる。1、2号溝に囲まれた場所には多く、その中にも集中しているところがある。また土坑が集中した場所と重なっている点も注目される。さらに11号溝の南側の一面においてもかなりの数のピットが集中して検出されている。これらのピットの中には近世に属するものも多く含まれているものと思われるが、その判断は困難であった。埋土の多くが極めて砂質の土である。掘立柱建物等は確認できなかった。



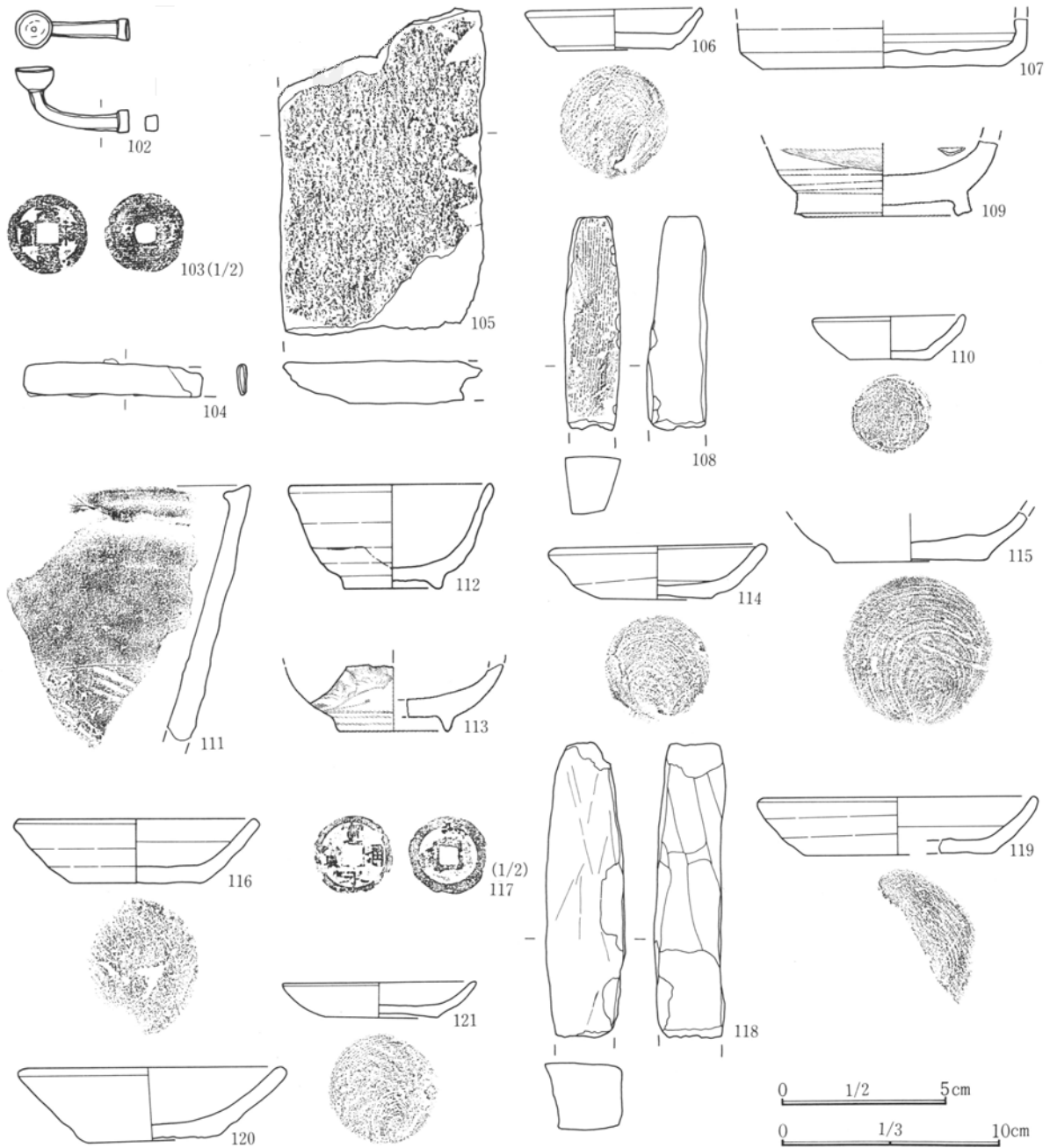
第63图 土坑出土遗物(2)



第64图 土坑出土遗物(3)



第65図 土坑出土遺物 (4)

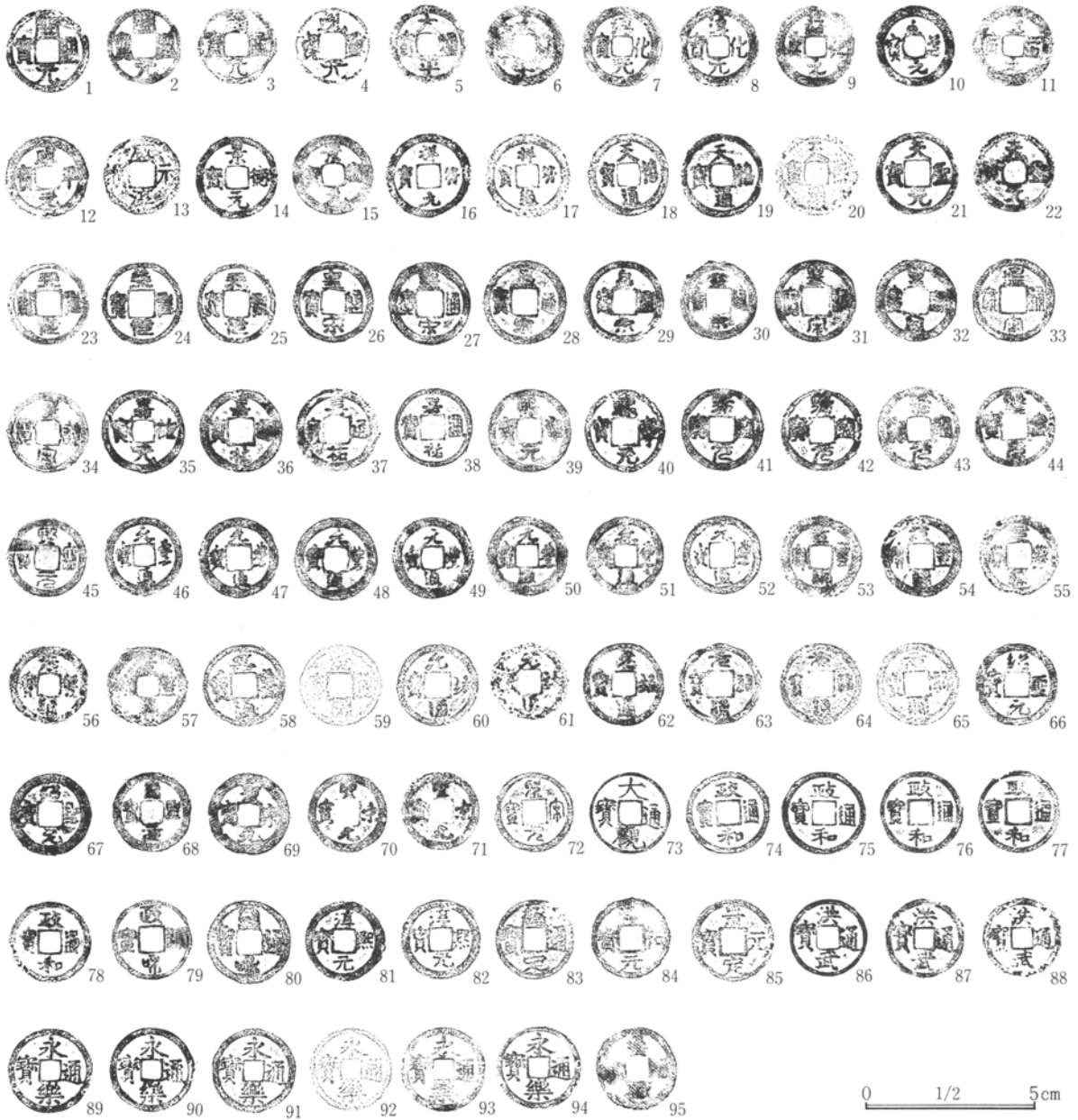


第66図 土坑(5)・ピット出土遺物

4. 溝 (第60・67~69図、P L13・14・55・56)

3面において検出された溝は17条である。このうちII区1号・3号・VI区1号溝は屋敷地を画する溝と思われ、共に規模は上幅4~5m深さは2mを超える。断面形状はV字状を呈す。

II区1号溝は調査区北側で検出された。約62m西に延びほぼ直角に南に折れ利根川に向かう。断面はV字で底部は狭くなる。埋土は下部については締まりのあるシルト質土で粘性がある。中位から上は砂で一気に埋まった状況がうかがえる。出土遺物は多くなく若干の土器、石器類と指し銭が出土している。

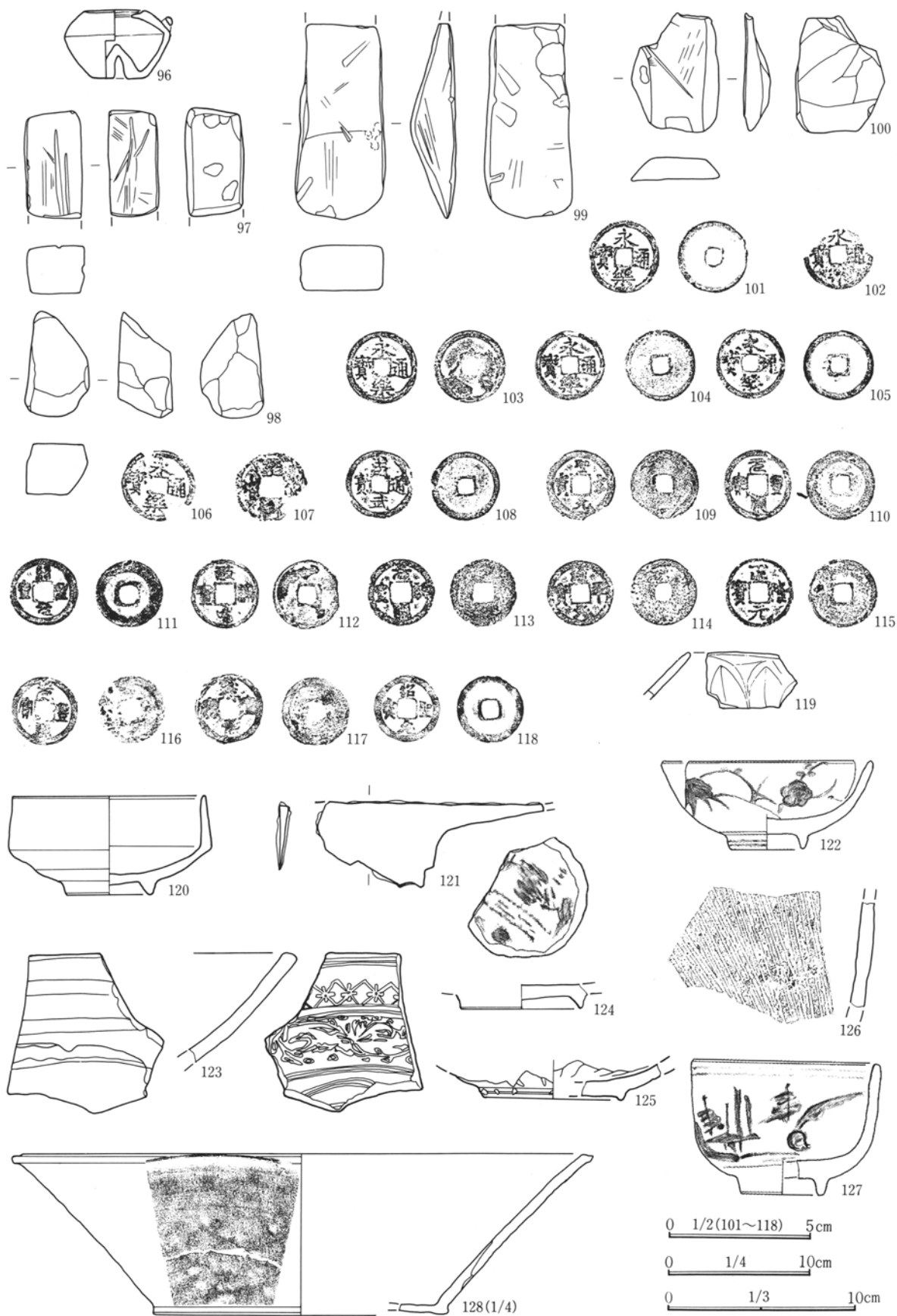


第67図 溝出土遺物（1）

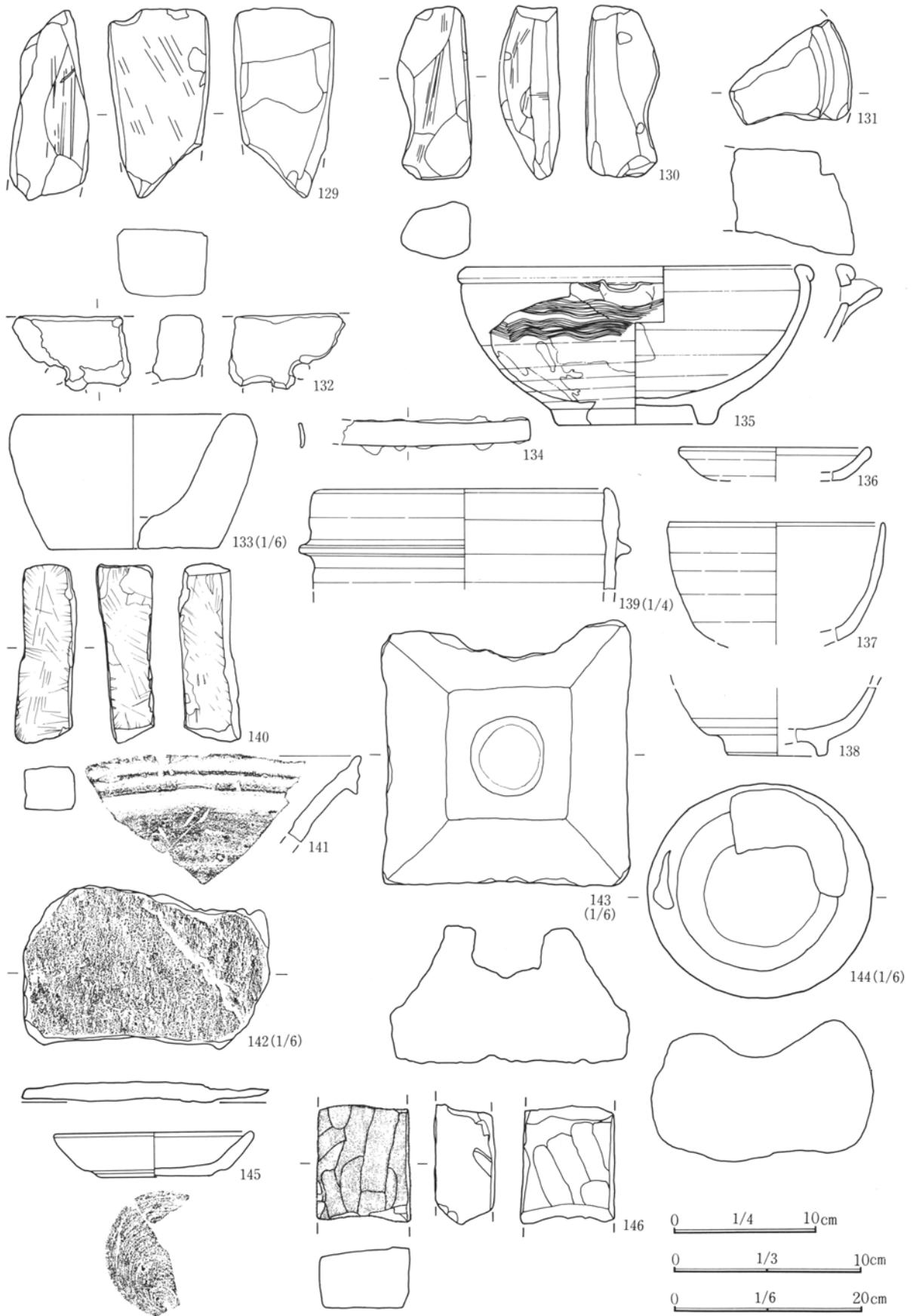
II区3号溝は1号溝の南側に平行して検出された。規模もほぼ同じであるが、断面は底がやや丸くなる。埋土の上位には比較的砂質の土が堆積しているが、1号溝に見られた砂は認められなかった。1号溝に先行すると思われる。出土遺物は少なく、ほとんどは上層において見られた。

II区4号溝は調査区内から始まり東に折れる。5号溝は西に開いたコの字状を呈す。幅は1～2mで深さは1m程である。北側は1号溝に沿っている。南側は上面が削られてしまったと思われる。6号溝は1号溝の角部から西に延びるが15m程で収束している。11号溝は幅1m深さは80cm程でL字状を呈す。

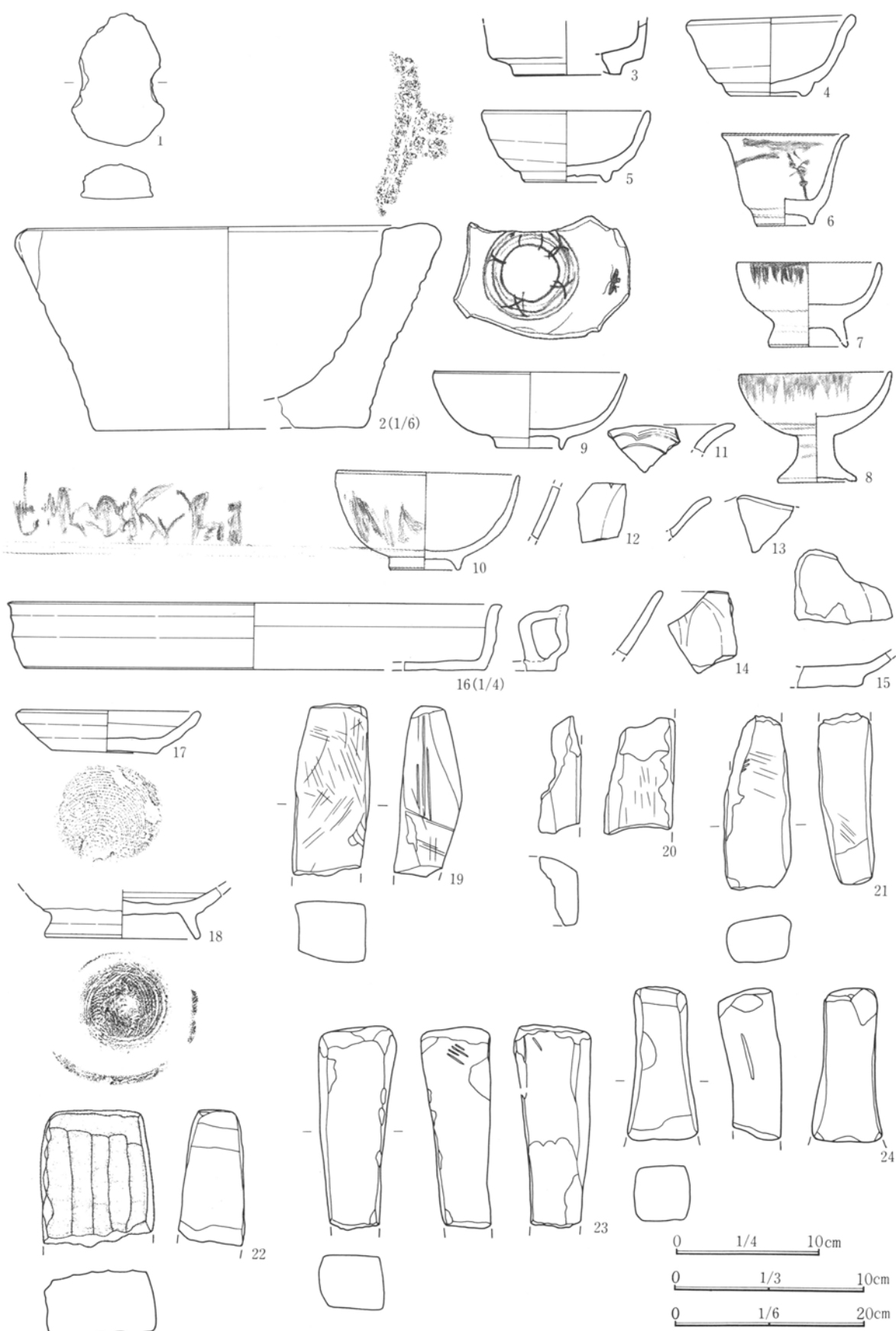
II区7・8・15・18・19・20・21号溝は南北に走るが、規模は小さく途中で終わったり、切れたりしており明瞭でない。



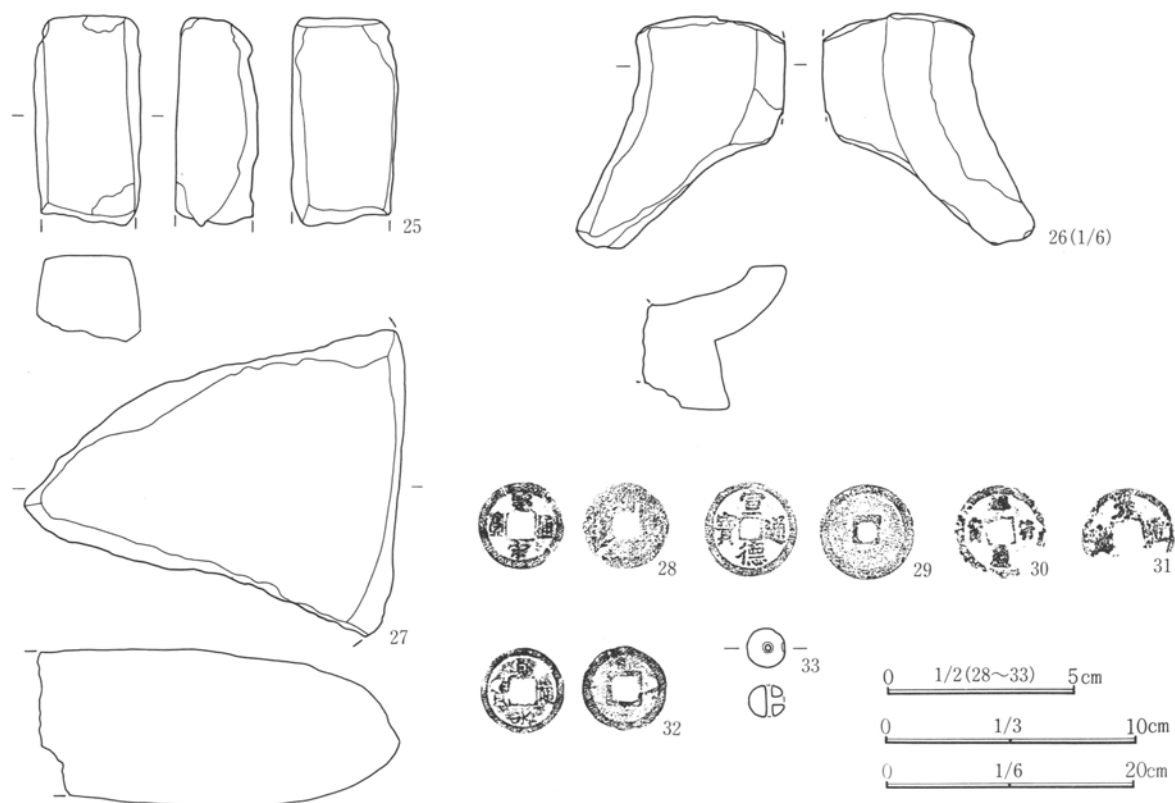
第68図 溝出土遺物(2)



第69図 溝出土遺物(3)



第70図 集石・畠・グリッド出土遺物



第71図 遺構外出土遺物

VI区 1号溝

II区の西端調査区内から始まり西に延び、VI区に入り南に直角に折れ利根川に向かっている。断面はかなり広がるV字状である。天明期においても溝の部分はかなり落ち込んでいた。また南側の立ち上がり部分で土塁の痕跡と思われる土の堆積が認められる。底面近くから五輪塔の一部が出土している。

VI区 2号溝

北はVI区 1号溝に接し南に延びL字に折れて東に向く。

5. 畝 (第61・70図、PL13)

II区 1号畝

18K・L-17グリッドに位置する。L字に走る4号溝の内側に数条の畝が検出されている。畝は南北で9条が検出されている。洪水によってもたらされたと考えられる砂で埋まっている。

II区 2号畝

L～O-10～14グリッドに検出されている。畝は南北に走り、長さ18m程と考えられるが一部空白部分が見られるが畝が続いていた可能性もある。22条が検出されている。

II区 3号畝

28J～M-17～19グリッドに位置する。畝は南北に作られ長さ約20m、幅約60cmで9条が検出されている。高さは15cm程で、土は締まりのある微砂土である。畝は洪水で運ばれてきたと考えられる川原砂で埋まっていた。西側には13号溝が南北に走り、東側には土坑、ピットが多数検出されている。

表5 3面出土遺物観察表
土坑・ピット (第62~66図)

番号	出土遺構	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)cm	特徴・その他	備考
1	I区1号土坑	在地系土器	皿	11.9 2.3 7	底部左回転系切り無調整。胎土中に僅かに砂粒含む。	
2	I区3号土坑	在地系土器	皿	7.0 1.6 5.0	底部左回転系切り無調整。口唇部に煤付着。	
3	I区28号土坑	在地系土器	皿	8.2	底部左回転系切り無調整。	
4	I区34号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
5	I区36号土坑	在地系土器	皿	4.7	底部左回転系切り無調整。胎土中に微砂粒僅かに含む。	
6	II区1号土坑	石臼(挽き臼)	上臼	38.0 11.2	破損品、引き手も欠損。	二ッ岳石
7	II区2号土坑	瀬戸・美濃陶器	すり鉢		口縁部外方に折れ、上方に立ち上がる。錆釉施す。	
8	II区3号土坑	在地系土器	皿	8.3 2.4 4.7	底部右回転系切り無調整。器面摩滅。	
9	II区3号土坑	在地系土器	皿	8.4 2.0 4.9	底部右回転系切り無調整。胎土精製。	
10	II区3号土坑	在地系土器	甕	8.1	胴部寛ケズリ、内面撫で。	
11	II区3号土坑	鉄製品	釘	長4.5 幅0.5	先端部欠、断面方形。	
12	II区5号土坑	中国磁器	青磁皿	11.4 2.9 5.5	内面から高台端部に青磁釉を施す。貫入入る。口縁部は輪花にし、口縁部内面と体部内面に文様を施す。見込みに「迎春」の押印。	中世
13	II区5号土坑	石製品	砥石	(10.1) 4.2 2.9	1面使用、断面台形。側面整形痕残る。	砥沢石
14	II区11号土坑	石製品	板碑	(50.0) (22.8) 3.5	基部か、文字は見られず、火を受けている。	緑色片岩
15	II区11号土坑	石製品	板碑	(25.5) (15.6) 3.7	小破片、火を受けている。	緑色片岩
16	II区12号土坑	石製品	砥石	(10.9) 4.4 3.5	不定形、4面使用、両端が尖るように磨り減る。	砥沢石
17	II区15号土坑	鉄製品	釘	4.2 0.3		
18	II区17号土坑	肥前陶器	碗	10.8	外面に山水文を描く。	陶胎染付
19	II区17号土坑	石製品	砥石	(9.3) 3.3 3.0	1面使用、中央部厚く端部は薄くなる。他面に製作痕残る。	砥沢石
20	II区17号土坑	鉄製品	釘	3.2 0.4	両端を欠く。	
21	II区18号土坑	瀬戸・美濃陶器	碗	9.1 5.9 4.9	内面粗い貫入の入り灰釉、高台内から体部外面に鉄釉施す。外面口縁部下に螺旋状凹線巡らす。	腰錆碗
22	II区19号土坑	在地系土器	円盤	2.9 0.8	焙烙底部片を円形に加工する。周縁の磨きが粗く、不整円形を呈する。	
23	II区19号土坑	石製品	凹石	21.3 16.2 9.0	重さ3500g	粗粒輝石安山岩
24	II区20号土坑	銅銭	治平元宝			初鑄年1064
25	II区20号土坑	銅銭				
26	II区20号土坑	銅銭	大観通宝			初鑄年1107
27	II区21号土坑	在地系土器	皿	4.8 2.0 6.0	底部外面左回転系切り無調整。体部直線的に開く。	口縁部全面に油付着
28	II区21号土坑	石製品	凹石	15.7 12.1 8.5	重さ1800g	粗粒輝石安山岩
29	II区21号土坑	石製品	砥石	(4.9) 2.9 1.6	破損品、1面使用。	砥沢石
30	II区22号土坑	在地系土器	焙烙	39.2 5.5 36.2	底部から外面体部下位型作り痕残る。型作り痕上には紐作り痕明瞭に残る。燻し焼成。内耳ニカ所残存。	口縁部から体部外面煤付着
31	II区22号土坑	瀬戸・美濃陶器	皿	13.0 2.6 6.9	高台は断面三角形を呈する。内面から高台脇に灰釉を施す。見込み重ね焼き時の高台痕残る。	
32	II区23号土坑	銅製品	飾り具	4.0 1.8 1.1	蓋状を呈す長円形の銅製品。	
33	II区23号土坑	石製品	鉢		底部片、底は薄く作られている。	粗粒輝石安山岩
34	II区23号土坑	石製品	鉢		口縁部片、比較的薄手に作られている。	
35	II区24号土坑	石製品	砥石	(6.5) 3.2 2.2	破損品、2面使用、一端が薄くなる。火を受けている。	砥沢石
36	II区24号土坑	鉄製品	環状製品	径3.4 1.1	断面板状の環状を呈す。	
37	II区24号土坑	鉄製品	釘	2.6 0.5	両端を欠損。	
38	II区24号土坑	鉄製品	釘か	3.8 0.4	断面方形、両端を欠く。	
39	II区24号土坑	鉄製品	釘	4.5 0.3		
40	II区24号土坑	鉄製品	石突きか	20.0 2.6	先端部やや幅が広く薄くなっている。基部は袋状を呈す。	
41	II区24号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
42	II区24号土坑	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
43	II区24号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
44	II区25号土坑	石製品	硯	(4.4) (2.2) 1.0	陸部小破片、剝離している。	点紋頁岩
45	II区26号土坑	肥前磁器	皿	13.0 3.1 8.0	見込みやや大きいコンニャク判による五弁花。口縁部内面墨はじき?により曲線文を描く。高台内1重圈線。	波佐見系
46	II区27号土坑	在地系土器	鉢	29.5 9.8 11.0	焼成は軟質の陶器風である。底部平底で糸切り痕や砂の付着は認められない。器表は黒灰色を呈するが、剝離が著しい。調整は丁寧である。	
47	II区28号土坑	石製品	砥石	(5.8) 2.6 2.4	破損品2面使用、一端が薄くなる。	砥沢石
48	II区28号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
49	II区28号土坑	銅銭	咸平元宝			初鑄年998
50	II区28号土坑	銅銭	祥符元宝			初鑄年1008
51	II区29号土坑	石製品	丸柄	3.7 2.3 0.7	かまぼこ形で表面側縁は平滑に磨かれる。裏面に3カ所紐通し孔。	暗灰色無斑晶安山岩
52	II区33号土坑	瀬戸・美濃陶器	皿	12.0 2.4 7.4	高台は小さく断面三角形を呈する。高台内から内面に黄瀬戸風の灰釉を施す。貫入入る。高台内中央無軸か。	大窯期?
53	II区34号土坑	鉄製品	小柄	9.4 1.4 0.4		
54	II区34号土坑	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
55	II区40号土坑	在地系土器	皿	11.0 2.6 6.0	外面の底部と体部の境は明瞭であるが、内面は不明瞭。	
56	II区40号土坑	在地系土器	皿	10.8 2.9 6.2	底部左回転系切り無調整。内面底部周縁と体部境やや強い回転横無で。	
57	II区40号土坑	在地系土器	皿	11.0 2.0 6.7	底部回転系切り無調整。体部内湾する。内面底部と体部の境不明瞭。底部外面歪む。	
58	II区40号土坑	在地系土器	皿	10.6 2.6 6.0	燃りの少ない糸による左回転系切り無調整?体部は直線的に開き、底部中央が盛り上がる。器壁厚い。	
59	II区40号土坑	在地系土器	皿	10.2 2.4 6.0	底部左回転系切り無調整。体部直線的に開く。胎土中に黒色・白色の光沢のある小鉱物含む。	
60	II区40号土坑	在地系土器	皿	5.4	燃りの少ない糸による左回転系切り無調整?体部は直線的に開く。器壁厚い。	

番号	出土遺構	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)cm	特徴・その他	備考
61	II区40号土坑	在地系土器	皿	12.0 2.4 6.6	底部右回転糸切り無調整。底部は高台状に段差を有する。底部内面周縁と体部境やや強い横撫で。	
62	II区40号土坑	瀬戸・美濃陶器	天目碗	12.0 6.5 4.0	体部は直線的に開き、口縁部は外湾して立ち上がる。高台内は浅く伏る。体部中位以下無軸。軸が虫食い状に掛からない場所がある。無花果形で下部に径8mm、深さ3mmほどの穴が見られる。	口縁部内面に油付着。
63	II区40号土坑	石製品	球状製品	径4.8 高さ4.2		
64	II区40号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
65	II区40号土坑	鉄製品	環状製品	3.9 0.9	C字状を呈す。	
66	II区44号土坑	銅製品	箸か	19.2 0.4	箸状で端部に括れを有し、頭部はやや丸みを持つ。	
67	II区47号土坑	石製品	砥石	(9.0) 5.1 3.0	一部欠、一面使用、使用面窪み刃慣らし溝が見られる。整形痕残る。	砥沢石
68	II区49号土坑	銅銭	熙寧元宝			初鑄年1068
69	II区49号土坑	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1039
70	II区49号土坑	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1039
71	II区49号土坑	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1039
72	II区49号土坑	銅銭				
73	II区51号土坑	銅銭	熙寧元宝			初鑄年1068
74	II区51号土坑	銅銭	〇〇元宝			
75	II区51号土坑	銅銭	熙寧元宝			初鑄年1068
76	II区51号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
77	II区51号土坑	銅銭	開元通宝			初鑄年621
78	II区51号土坑	銅銭	開元通宝			初鑄年621
79	II区62号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
80	II区62号土坑	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
81	II区74号土坑	在地系土器	焙烙		底部外面から体部外面型作り痕残る。	
82	II区90号土坑	銅銭	〇〇通宝			
83	II区93号土坑	鉄製品	板状製品	3.7 0.2	小判型を呈すが欠損している。	
84	II区98号土坑	石製品	砥石	(4.4) 5.2 3.4	破損品、両側面使用、他の2面には成形痕残る。	砥沢石
85	II区121号土坑	鉄製品	鎌	8.5 3.2	刃部の先端部を欠く、柄と刃の角度は鈍角である。	
86	II区139号土坑	銅製品・煙管	吸い口	4.4 0.8		
87	II区152号土坑	鉄製品	板状製品	5.0 2.9	板状で、複数の方形の穴が見られる。	
88	II区167号土坑	在地系土器	皿	9.0 2.1 5.7	底部回転糸切り無調整。器壁厚い。胎土は中世的	
89	II区177号土坑	在地系土器	皿?	7.1	底部左回転糸切り無調整。器壁厚い。	
90	II区185号土坑	在地系土器	皿	5.8	底部右回転糸切り無調整。体部は直線的に開く。器壁厚い。	
91	II区186号土坑	在地系土器	皿	10.5	器壁厚い。口縁部尖り気味。	
92	II区191号土坑	銅銭	洪武通宝			初鑄年1368
93	II区203号土坑	在地系土器	皿	10.7 2.9 5.7	底部左回転糸切り無調整。内面底部周縁浅く凹線状に窪む。口縁部の回転撫では内外面をつまんで撫でる。全体に歪む。	
94	II区203号土坑	在地系土器	皿	10.9 2.5 6.2	底部左回転糸切り無調整。糸切り痕周縁の段差は潰れて凹線状をなす。内面底部周縁凹線状に窪む。	溝の145と同様。
95	II区203号土坑	在地系土器	皿	10.7 2.4 6.7	底部左回転糸切り無調整。体部内湾する。内面底部と体部境不明瞭。内面底部と体部境にやや強い回転横撫で。	
96	II区203号土坑	石製品	五輪塔	20.7 13.5	重さ3500g	牛伏砂岩
97	II区209号土坑	在地系土器	円盤	3.4 0.6	焙烙底部片を円形に加工する。周縁の磨きは丁寧である。	
98	II区212号土坑	在地系土器	皿	11.0 2.6 7.0	底部左回転糸切り無調整?	
99	II区241号土坑	鉄製品	釘	4.8 0.4	両端を欠き曲がっている。	
100	II区241号土坑	鉄製品	釘	5.7 0.3	端部を欠く。	
101	II区243号土坑	肥前陶器	片口鉢	20.3 10.6 9.5	高台端部を除く外面に鉄泥を施し、口縁部に白土を波状に掛けた後、透明釉を施す。内面は轆轤回転を利用して白土の刷毛塗りを行い、透明釉を施す。口縁部と高台端部は無軸。	
102	II区257号土坑	銅製品・煙管	雁首	5.1 1.6		
103	II区257号土坑	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
104	II区263号土坑	鉄製品	小柄(鞘)	8.1 1.4		
105	II区275号土坑	石製品			キリクの一部(左端)が残る。	緑色片岩
106	II区12号Pit	在地系土器	皿	7.8 1.8 5.0	底部左回転糸切り無調整。	
107	II区25号Pit	瀬戸・美濃陶器	壺底部	16.4	外面還元、内面酸化。底部外縁面取りされる。	
108	II区39号Pit	石製品	砥石	9.5 2.5 2.7	1面使用、凹凸あり、2面に整形痕見られる。	砥沢石
109	II区69号Pit	瀬戸・美濃陶器	碗	8.0 4.8 4.6		
110	II区72号Pit	在地系土器	皿	6.8 2.0 3.6	底部静止糸切り無調整。還元炎焼成。	
111	II区74号Pit	軟質陶器	すり鉢		土器に比して硬質。内面に3条一単位のすり目。口縁部内面に突出し、上面は浅く窪む。	中世?
112	II区101号Pit	瀬戸・美濃陶器	碗	9.2 4.6 4.4	鉄釉を施す。	
113	II区119号Pit	肥前陶器	碗	9.7 2.9 5.0	松木文。	陶胎染付
114	II区123号Pit	在地系土器	皿	9.8 2.5 4.8	底部右回転糸切り無調整。内面底部にロクロ目凹凸見られる。	
115	II区123号Pit	在地系土器	皿	6.8	底部左回転糸切り無調整。大型品。	
116	II区123号Pit	在地系土器	皿	11.1 2.9 5.9	底部左回転糸切り無調整。大型品。	
117	II区130号Pit	銅銭	寛永通宝			
118	II区140号Pit	石製品	砥石	13.1 3.5 2.9	断面台形、2面使用。	砥沢石
119	II区144号Pit	在地系土器	皿	12.6 2.5 8.6	底部左回転糸切り無調整。大型品。	
120	II区145号Pit	在地系土器	皿	11.7 3.5 5.8	底部右回転糸切り無調整か。厚手である。	
121	II区247号Pit	在地系土器	皿	8.7 1.6 5.1	底部左回転糸切り無調整。外面体部中位厚みを増す。	内面二次的被熱により黒く変色。

溝 (第67~69図)

番号	出土遺構	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)cm	特徴・その他	備考
1	II区1号溝	銅銭	開元通宝			初鑄年621
2	II区1号溝	銅銭	開元通宝			初鑄年621
3	II区1号溝	銅銭	開元通宝			初鑄年621
4	II区1号溝	銅銭	軋元通宝			初鑄年758
5	II区1号溝	銅銭	太平通宝			初鑄年976

番号	出土遺構	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)cm	特徴・その他	備考
6	II区1号溝	銅銭	太平通宝			初鑄年976
7	II区1号溝	銅銭	淳化元宝			初鑄年991
8	II区1号溝	銅銭	淳化元宝			初鑄年991
9	II区1号溝	銅銭	淳化元宝			初鑄年991
10	II区1号溝	銅銭	至道元宝			初鑄年995
11	II区1号溝	銅銭	至道元宝			初鑄年995
12	II区1号溝	銅銭	咸平元宝			初鑄年998
13	II区1号溝	銅銭	咸平元宝			初鑄年998
14	II区1号溝	銅銭	景德元宝			初鑄年1004
15	II区1号溝	銅銭	景德元宝			初鑄年1004
16	II区1号溝	銅銭	祥符元宝			初鑄年1008
17	II区1号溝	銅銭	祥符通宝			初鑄年1008
18	II区1号溝	銅銭	天禧通宝			初鑄年1017
19	II区1号溝	銅銭	天禧通宝			初鑄年1017
20	II区1号溝	銅銭	天禧通宝			初鑄年1017
21	II区1号溝	銅銭	天聖元宝			初鑄年1023
22	II区1号溝	銅銭	天聖元宝			初鑄年1023
23	II区1号溝	銅銭	天聖元宝			初鑄年1023
24	II区1号溝	銅銭	天聖元宝			初鑄年1023
25	II区1号溝	銅銭	天聖元宝			初鑄年1023
26	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
27	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
28	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
29	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
30	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
31	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
32	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
33	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
34	II区1号溝	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1023
35	II区1号溝	銅銭	嘉祐元宝			初鑄年1056
36	II区1号溝	銅銭	嘉祐通宝			初鑄年1056
37	II区1号溝	銅銭	嘉祐通宝			初鑄年1056
38	II区1号溝	銅銭	嘉祐通宝			初鑄年1056
39	II区1号溝	銅銭	宋寧元宝			初鑄年1068
40	II区1号溝	銅銭	宋寧元宝			初鑄年1068
41	II区1号溝	銅銭	宋寧元宝			初鑄年1068
42	II区1号溝	銅銭	宋寧元宝			初鑄年1068
43	II区1号溝	銅銭	宋寧元宝			初鑄年1068
44	II区1号溝	銅銭	宋寧元宝			初鑄年1068
45	II区1号溝	銅銭	宋寧元宝			初鑄年1068
46	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
47	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
48	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
49	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
50	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
51	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
52	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
53	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
54	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
55	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
56	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
57	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
58	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
59	II区1号溝	銅銭	元豐通宝			初鑄年1078
60	II区1号溝	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
61	II区1号溝	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
62	II区1号溝	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
63	II区1号溝	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
64	II区1号溝	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
65	II区1号溝	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
66	II区1号溝	銅銭	紹聖元宝			初鑄年1094
67	II区1号溝	銅銭	紹聖元宝			初鑄年1094
68	II区1号溝	銅銭	紹聖元宝			初鑄年1094
69	II区1号溝	銅銭	聖宋元宝			初鑄年1101
70	II区1号溝	銅銭	聖宋元宝			初鑄年1101
71	II区1号溝	銅銭	聖宋元宝			初鑄年1101
72	II区1号溝	銅銭	聖宋元宝			初鑄年1101
73	II区1号溝	銅銭	大觀通宝			初鑄年1107
74	II区1号溝	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
75	II区1号溝	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
76	II区1号溝	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
77	II区1号溝	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
78	II区1号溝	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
79	II区1号溝	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
80	II区1号溝	銅銭	宣和通宝			初鑄年1119
81	II区1号溝	銅銭	淳熙元宝			初鑄年1174
82	II区1号溝	銅銭	淳熙元宝			初鑄年1174

番号	出土遺構	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)cm	特徴・その他	備考
83	II区1号溝	銅銭	紹定通宝			初鑄年1228
84	II区1号溝	銅銭	淳祐元宝			初鑄年1241
85	II区1号溝	銅銭	景定元宝			初鑄年1260
86	II区1号溝	銅銭	洪武通宝			初鑄年1368
87	II区1号溝	銅銭	洪武通宝			初鑄年1368
88	II区1号溝	銅銭	洪武通宝			初鑄年1368
89	II区1号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
90	II区1号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
91	II区1号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
92	II区1号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
93	II区1号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
94	II区1号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
95	II区1号溝	銅銭	不明			
96	II区3号溝	搬入系土器	灯火具	3.0 3.6 2.8	断面算盤玉形。底部には固定孔をあける。中央に一カ所耳を付ける。口縁部は欠損する。底部内面は固定孔が貫通しないために円錐形の粘土を貼り付ける。透明釉を薄く施す。体部中位の稜線部分で上下を貼り付ける。	
97	II区3号溝	石製品	砥石	(5.6) 3.0 2.6	3面使用、断面方形、溝状の擦り込みが見られる。	デイサイト
98	II区3号溝	石製品	砥石か	5.4 3.4 2.9	不定形の石片、明確な使用面は見られない。	流紋岩
99	II区3号溝	石製品	砥石	10.1 4.6 2.3	両面使用、片面中央部山状に厚く、両端部薄くなる。	砥沢石
100	II区3号溝	石製品	砥石	(6.2) 4.6 1.3	剝離した端部の破片。	砥沢石
101	II区3号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
102	II区3号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
103	II区3号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
104	II区3号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
105	II区3号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
106	II区3号溝	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
107	II区3号溝	銅銭	永楽通宝か			
108	II区3号溝	銅銭	洪武通宝			初鑄年1368
109	II区3号溝	銅銭	聖宋元宝			初鑄年1101
110	II区3号溝	銅銭	元豊通宝			初鑄年1078
111	II区3号溝	銅銭	熙寧元宝			初鑄年1068
112	II区3号溝	銅銭	政和通宝			初鑄年1111
113	II区3号溝	銅銭	元祐通宝			初鑄年1093
114	II区3号溝	銅銭	治平元宝			初鑄年1064
115	II区3号溝	銅銭	正隆元宝			初鑄年1157
116	II区3号溝	銅銭	元豊通宝			初鑄年1078
117	II区3号溝	銅銭	熙寧元宝			初鑄年1068
118	II区3号溝	銅銭	紹聖元宝			初鑄年1094
119	II区4号溝	中国磁器	碗		外面片切り彫りによる鑄蓮弁文。	龍泉窯系青磁。中世。
120	II区4号溝	瀬戸・美濃陶器	碗	(10.2) 5.1 (4.5)	高台が小さく、体部は開く。口縁部は直立気味に立ち上がる。左右で錆色の鉄釉と灰釉を掛け分ける。灰釉に貫入する。高台端部のみ無釉。	掛け分け碗
121	II区4号溝	鉄製品	包丁	11.8 4.2 0.4	刃部、幅があるがほとんど欠損。	
122	II区5号溝	肥前磁器	碗		外面雪輪梅樹。高台内不明跡。	波佐見系
123	II区5号溝	肥前陶器	鉢		体部から口縁部やや内湾する。内面陰刻部に白土を入れるが、周囲にも薄く掛かる。内面から口縁部外面に透明釉を施す。	三鳥手
124	II区5号溝	瀬戸・美濃陶器	皿		高台内面は「ハ」の字状に開き、外面は直立する。見込みに鉄絵具による型紙刷り。高台内から内面に貫入のはいる灰釉を施す。	御深井
125	II区5号溝	瀬戸・美濃陶器	菊皿	7.5	内面は見込みにまで幅広い花卉を施す。外面は幅の狭い花卉を鑿状工具で施す。内面から高台内面まで長石釉か灰釉か区別しがたい色調の釉をやや厚く施す。釉には粗い貫入が入る。見込みに一カ所目痕残る。	連房初期か
126	II区5号溝	丹波陶器	すり鉢		体部外面に指状押さえ痕、口縁部外面回転横無で痕あり。内面すり目を施す。	
127	II区5号溝	肥前陶器	碗	10.0 6.9 4.4	外面に東屋山水文を施す。染め付けは丁寧で明瞭に発色する。	陶胎染付
128	II区5号溝	在地系土器	鍋	40.6 11.1 20.5	底部外面から体部外面下位型作り痕残る。型作り痕上部には明瞭な紐作り痕残る。口縁部は水平に開き、端部上面は平坦である。	口縁部から底部外面煤付着
129	II区5号溝	石製品	砥石	(9.9) 5.3 3.6	不定形、1面使用、1端が薄くなる。	砥沢石
130	II区5号溝	石製品	砥石	9.0 3.8 2.9	完品、不定形使用面一定せず。	砥沢石
131	II区5号溝	石製品	茶臼(下)	径(26.0)高さ10.4	破片、上面は平滑で目は認められない。	粗粒輝石安山岩
132	II区5号溝	石製品	挽き臼(上)		縁辺部の破片、横からの穴が2カ所に認められる。	粗粒輝石安山岩
133	II区5号溝	石製品	鉢	高さ14.0	破片、浅い作り。	粗粒輝石安山岩
134	II区5号溝	鉄製品	板状製品	9.8 1.3 0.2	断面にわずかな丸みを有す板状製品。端部を欠く。	
135	II区8号溝	肥前陶器	片口鉢	23.5 11.2 11.0	口縁部は玉縁をなす。片口部は口縁端部に設ける。内面から口縁部外面に刷毛で白土を施す。外面の白土は波状を呈する。内面から口縁部外面透明釉、体部下位から高台外面鉄化粧。外面口縁部下と高台端部から内面無釉。口縁部玉縁状に肥厚する。	唐津
136	II区8号溝	在地系土器	皿	10.0 2.8	口縁部玉縁状に肥厚する。	
137	II区8号溝	瀬戸・美濃陶器	碗	11.2	胎釉を厚く施す。口縁部は釉が流れ薄い。	
138	II区8号溝	瀬戸・美濃陶器	碗	5.1	内面から体部下位に胎釉を厚く施す。高台脇から高台内鉄化粧。高台端部のみ無釉。	
139	II区8号溝	須恵器	羽釜	22.8		
140	II区8号溝	石製品	砥石	(9.3) 3.1 3.0	一部欠、2面使用。	砥沢石
141	VI区1号溝	須恵器	甕		口縁部片、ロクロ整形。	暗灰色、小砂礫含む。
142	VI区1号溝	石製品	板碑	26.0 15.5 2.0	小破片。	黒色片岩
143	VI区1号溝	石製品	五輪塔	25.0 25.0 14.3	火輪、重さ1436g	粗粒輝石安山岩

番号	出土遺構	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)cm	特徴・その他	備考
144	VI区1号溝	石製品	五輪塔	22.5 14.5	水輪、重さ8900g	牛伏砂岩
145	II区21号溝	在地系土器	皿	10.6 2.3 6.1	底部外面右回転糸切り無調整。糸切り痕周縁高台状に立ち上がる。体部下位は外方に広がる。	II区203号土坑94と同様
146	II区21号溝	石製品	砥石	(5.9) 4.9 3.1	両端部欠、断面長方形、側面1面を使用。	流紋岩

1号集石・畠・遺構外(第70・71図)

番号	出土遺構	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)cm	特徴・その他	備考
1	II区1号集石	石製品	軽石製品	6.9 4.8 1.7	分銅型で1面を磨り面として使用。	砥石か
2	II区1号集石	石製品	鉢	(44.5) 21.0 28.5	破片、底は平らで外傾し直線的に立ち上がる。縁に突起を有す。	粗粒輝石安山岩
3	II区2号畠グリッド	肥前磁器	青磁香炉	5.5	体部外面から高台外面に青磁釉を施す。	
4	グリッド	瀬戸・美濃陶器	小碗	8.7 4.0 4.0	底部外面から体部外面回転篋削り後、高台貼り付け。高台はシャープで高台脇の稜線も明瞭。内面から体部外面下位鉄釉を施す。	
5	グリッド	瀬戸・美濃陶器	小碗	8.8 3.7 4.7	4に比して僅かに器高高く、器壁も厚い。底部外面から体部外面回転篋削り後、高台貼り付け。内面から体部外面下位鉄釉を施す。	高台端部と体部外面露胎部擦れて滑らかとなる。
6	グリッド	肥前磁器	杯	6.6 4.8 3.0	底部器壁厚い。口縁部は外反する。外面に植物文を染め付け。	波佐見系
7	グリッド	肥前磁器	高杯	7.5 4.4 4.2	外面型紙による雨降り文。杯部径と深さは仏飯器と同じであるが、底部が「ハ」の字状に開く高台となる。台部形状は異なるが、体部に1条、高台に2状圏線を巡らすことも共通する。	波佐見系
8	グリッド	肥前磁器	仏飯器	8.0 5.7 4.2	外面型紙による雨降り文。体部に1条と脚部に2条の圏線を施す。	波佐見系?
9	グリッド	肥前磁器	赤絵碗	10.0 3.9 3.4	残存部外面無文。見込蛇ノ目軸刺ぎ。体部内面赤絵具で蝶を、底部に圏線と線描きで文様を描く。軸刺ぎ部には蛇の目状に緑色絵具を入れる。緑色下に赤絵具による圏線を施したためか、緑色部分の圏線は黒く見える。	
10	グリッド	瀬戸・美濃陶器	碗	9.1 5.0 3.6	外面呉須絵。主文様と圏線は滲む。高台内から内面透明釉を施軸。貫入する。	
11	グリッド	中国磁器	青磁皿		口縁部は外反し、等間隔で端部を削り輪花とする。口縁部内面篋状工具による施文。	龍泉窯系青磁。中世。
12	グリッド	中国磁器	青磁碗		蓮弁文碗の体部小片。	龍泉窯系?青磁。中世。
13	グリッド	中国磁器	白磁小鉢		六角形を呈する小鉢であろう。焼成不良で陶器質。	中世
14	グリッド	中国磁器	青磁碗	径16.8	外面片切り彫りによる蓮弁文。残存部に鑄はない。	龍泉窯系青磁。中世。
15	グリッド	中国磁器	青磁碗		見込み篋による施文。内面から高台外面青磁釉を施す。	龍泉窯系青磁。中世。
16	グリッド	在地系土器	焙烙	34.1 4.6 32.0	底部から外面体部下位型作り痕残る。型作り痕上には紐作り痕明瞭に残る。燻し焼成。	外面底部から体部下端を除き煤付着。
17	グリッド	在地系土器	皿	9.7 2.1 5.5	底部左回転糸切り無調整。内面黒く変色する。内面の一部に油?付着。	
18	グリッド	須恵器	碗	8		古代
19	グリッド	石製品	砥石	(8.8) 3.9 3.1	両面使用、中央部厚く端部は薄くなる。	砥沢石
20	グリッド	石製品	砥石	(6.1) 3.5 1.2	使用面2面以上、火を受けている。	アイサイト
21	グリッド	石製品	砥石	(8.8) 3.4 2.8	2面使用、風化が進む。	砥沢石
22	グリッド	石製品	砥石	(7.0) 5.6 3.4	断面長方形、側面2面使用、両面に整形痕。	砥沢石
23	グリッド	石製品	砥石	(10.5) 4.0 3.6	3面使用、片方が使用によって細くなる。	砥沢石
24	グリッド	石製品	砥石	(7.8) 3.2 2.9	4面使用、撥形を呈す。断面方形。	砥沢石
25	グリッド	石製品	砥石	(8.2) 4.2 3.3	2面使用、火熱を受けている。	砥沢石
26	グリッド	石製品	茶臼(下)	41.6 11.3	破片。	粗粒輝石安山岩
27	グリッド	石製品	鉢か	厚み6.2	口縁部片。	粗粒輝石安山岩
28	グリッド	銅銭	皇宋通宝			初鑄年1039
29	グリッド	銅銭	宣徳通宝			初鑄年1433
30	グリッド	銅銭	祥符通宝			初鑄年1008
31	グリッド	銅銭				
32	グリッド	銅銭	寛永通宝			
33	グリッド	ガラス製品か	玉	径1.0 高さ0.9	径1.5mmの穴が貫通し、横からも径2.0mmの穴が中心まで空けられている。	

表6 3面土坑一覽表

I区

番号	位置	形状	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主軸方位	出土遺物	備考
1	18O-4	隅丸長方形	160×120×60	N-90°	かわらけ	
2	18N-4	隅丸長方形	(120)×80×50	N-84°-E		
3	18M-4	長円形	205×105×80	N-90°	かわらけ、内耳鍋	
4	18M-7	円形	50×50×16	N-0°		
5	18N-6	円形	40×40×20	N-0°		
6	18N-6	円形	40×40×30	N-0°		
7	18N-7	長円形	56×36×31	N-33°-E		
8	18N-7	長円形	28×23×12	N-56°-W		
9	18O-6	長円形	48×38×27	N-85°-E		
10	18P-6	不正形	106×94×47	N-36°-W		
11	18O-6	隅丸長方形	143×95×33	N-58°-E		
12	18N-6	長円形	107×68×14	N-11°-W		
13	18N-6	長円形	42×30×21	N-78°-E		
14	18N-6	円形	43×42×33	N-0°		
15	欠番					
16	18N-5	隅丸長方形	183×90×24	N-2°-E		近世
17	18M-5	長円形	80×70×30	N-24°-W		
18	18N-5	長円形	38×23×19	N-89°-E		
19	18N-5	長円形	40×37×29	N-36°-W		
20	18N-5	円形	60×60×28	N-0°		
21	18N-5	長円形	40×36×29	N-28°-W		
22	18N-5	長円形	60×50×30	N-30°-E		
23	18N-5	円形	40×38×20	N-0°		
24	18O-5	長円形	60×40×26	N-85°-E		
25	18O-6	長円形	50×42×24	N-43°-W		
26	18O-5	長円形	134×72×42	N-15°-W		
27	18O-5	円形	45×43×25	N-0°		
28	18M-5	円形	138×130×15	N-0°	かわらけ	
29	18N-5	円形	28×24×20	N-0°		
30	18N-5	長円形	58×44×28	N-35°-E		
31	18N-4	長円形	88×60×16	N-23°-E		
32	18O-3	長円形	92×88×32	N-75°-E		
33	18N-6	隅丸長方形	240×164×20	N-81°-W		
34	18N-4	円形	40×38×28	N-0°	永楽通宝	
35	18O-3	隅丸長方形	194×130×19	N-89°-W		
36	18O-4	長円形	110×98×8	N-78°-E	かわらけ	
37	18O-5	隅丸長方形	260×250×25	N-4°-W		
38	18L-2	隅丸長方形	(105)×(50)×(40)	N-0°	人骨、礫、炭化物。	火葬墓、壁面焼土化

II区

番号	位置	形状	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主軸方位	出土遺物	備考
1	28M-1	円形	172×172×40	N-0°		集石
2	28M-2	円形	180×180×45	N-0°	播り鉢	集石 近世
3	18O-17	隅丸長方形	368×220×24	N-75°-E	土師器甕、かわらけ2	
4	18O-18	長円形	240×68×20	N-68°-E		
5	18N-18	長円形	(180)×80×30	N-0°	青磁皿	
6	18M-20	長円形	160×80×8	N-90°		
7	18M-20	円形	60×60×3	N-0°		
8	18M-20	不正形	54×49×12	N-75°-W		
9	28K-3	長円形	120×83×10	N-85°-W		
10	28M-1	長円形	200×57×63	N-90°		
11	28N-10	円形	120×(80)×5	N-0°	軟質鍋、板碑片	
12	28M-3	長円形	160×60×54	N-73°-E		
13	28M-3	円形	92×92×16	N-0°		
14	28M-3	不正形	100×78×16	N-83°-E		
15	28M-6	隅丸長方形	256×120×11	N-66°-E		
16	28N-4	長円形か	160×(100)×40	-		
17	28K-7	長円形	216×168×50	N-30°-W	磁器?、砥石	近世
18	28N-10	隅丸長方形	320×240×2	N-5°-W	軟質鍋	
19	28M-9	長円形	112×(62)×27	N-84°-W	焙烙、土製円盤	集石
20	28M-8	長円形	194×128×29	N-7°-W	治平元宝、大観通宝	
21	28K-7	不正形	160×136×21	N-90°	かわらけ、砥石	集石
22	28N-5	円形	112×(96)×52	N-0°	陶器皿、焙烙	
23	28O-5	隅丸長方形	360×238×66	N-0°	焙烙、石鉢	
24	28N-3	不正形	272×(196)×43	N-90°	炭化米、元々通宝、砥石	

番号	位置	形状	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主軸方位	出土遺物	備考
25	28N-2	隅丸長方形か	156×(78)×40	N-90°	硯	
26	18M-20	隅丸長方形	100×(60)×60	N-90°	磁器皿近世	
27	28M-8	隅丸長方形	400×280×35	N-67°-E	鉢	
28	28M-8	隅丸長方形	140×92×22	N-12°-W	人骨、永楽通宝他、砥石	
29	28N-9	隅丸長方形	305×238×46	N-66°-E	石製丸鞆	
30	28N-5	隅丸長方形	528×250×75	N-8°-E		
31	28K-5	長円形	(60)×56×-	N-48°-W		
32	28M-4	隅丸長方形	136×50×13	N-0°		
33	28M-4	隅丸長方形	262×208×45	N-90°	陶器皿	
34	28M-4	隅丸方形	240×200×24	N-90°	陶器皿、政和通宝	
35	28N-9	不明	108×(68)×37	N-10°-W		
36	欠番					
37	28O-3	不正形	(400)×(190)×7	N-80°-E	炭化麦	
38	28O-2	隅丸方形	108×104×25	N-0°		
39	28M-7	長円形	136×96×13	N-50°-E		
40	28M-7	長円形	68×60×42	N-21°-E	かわらけ8、陶器、球状石製品	
41	28M-8	長円形	220×120×29	N-4°-W		
42	欠番					
43	28M-8	長円形	256×184×54	N-14°-E		
44	28M-8	長円形	280×160×37	N-16°-W		
45	18M-19	長円形	(290)×150×25	N-11°-W		
46	28M-4	長円形	160×108×33	N-80°-E		
47	28M-8	長円形	136×96×15	N-73°-E	砥石	
48	18O-17	長円形	116×82×15	N-69°-E		
49	18K-20	隅丸長方形	106×76×29	N-4°-W	人骨、熙寧元宝	
50	18L-20	不正形	150×120×44	N-90°		
51	18L-20	長円形	122×102×34	N-0°	永楽、開元通宝	
52	18K-20	隅丸長方形	112×68×45	N-86°-E		
53	18L-20	隅丸長方形	90×70×20	N-90°		
54	18L-20	長円形	194×68×28	N-80°-E		
55	18L-20	長円形	110×60×40	N-80°-E		
56	18L-20	隅丸長方形	144×87×21	N-90°-E		
57	18L-20	隅丸長方形	144×70×10	N-71°-E		
58	18L-20	円形	110×110×17	N-0°		
59	28K-1	隅丸長方形	140×70×18	N-80°-E		
60	28L-1	長円形	158×80×17	N-9°-W		
61	28L-1	隅丸長方形	172×86×21	N-5°-W		
62	18K-19	不正形	100×86×17	N-86°-E	人骨2体	
63	28L-1	隅丸長方形	138×80×26	N-84°-E		
64	28L-2	隅丸長方形	130×54×41	N-80°-E		
65	28L-2	隅丸長方形	173×50×15	N-79°-E		
66	28L-2	隅丸長方形	110×83×16	N-83°-E		
67	28L-2	長円形	136×82×43	N-80°-E		
68	28K-1	長円形	106×50×16	N-0°		
69	28K-2	長円形	150×100×10	N-87°-E		
70	28L-3	長円形	140×100×13	N-90°		
71	28K-3	隅丸長方形	152×60×10	N-60°-E		
72	28L-3	隅丸長方形	160×48×4	N-82°-E		
73	28K-4	隅丸長方形	110×82×10	N-65°-E		
74	28J-4	長円形	385×326×85	N-12°-E	かわらけ、鍋、焙烙	
75	18K-20	隅丸長方形	(134)×64×25	N-90°		
76	18K-20	隅丸長方形	(72)×60×18	N-74°-E		
77	18K-20	隅丸長方形	112×(70)×29	N-90°		
78	28K-1	隅丸長方形	136×110×21	N-75°-E		
79	28K-1	隅丸長方形	118×100×45	N-78°-E		
80	28K-1	隅丸長方形	80×(48)×21	N-25°-W		
81	28L-1	隅丸長方形	140×72×18	N-62°-W		
82	28K-4	不正形	114×100×26	N-0°	人骨	
83	28L-4	不正形	190×125×34	N-19°-W		
84	28L-4	長円形	80×68×15	N-90°		
85	欠番					
86	28J-18	隅丸長方形	292×128×41	N-3°-W		
87	28L-20	円形	140×140×35	N-0°		
88	28I-18	隅丸長方形	180×127×25	N-73°-E		
89	18L-20	隅丸長方形	126×78×33	N-5°-W		
90	28J-17	長円形	202×150×20	N-85°-E		

番号	位置	形状	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主軸方位	出土遺物	備考
91	28K-17	隅丸長方形	225×120×10	N-81°-E		
92	28L-16	円形	150×150×35	N-90°		
93	28J-17	隅丸長方形	144×106×26	N-5°-E		
94	28J-16	隅丸長方形	220×146×13	N-78°-E		
95	28K-16	隅丸長方形	258×75×9	N-84°-W		
96	28K-16	隅丸長方形	188×98×15	N-87°-W		
97	28K-17	隅丸長方形	440×150×30	N-86°-E		
98	28J-17	長円形	148×132×25	N-10°-E	砥石	
99	28K-15	長円形	(156)×76×8	N-90°		
100	28L-15	隅丸長方形	190×114×23	N-90°		
101	28K-14	隅丸長方形	176×58×21	N-0°		
102	28K-15	隅丸長方形	248×180×38	N-90°		
103	欠番					
104	28J-15	隅丸長方形	242×220×44	N-90°		
105	28I-15	隅丸長方形	174×46×15	N-35°-W		
106	欠番					
107	28K-14	不正形	226×226×19	N-14°-W		
108	28L-16	不正形	90×60×22	N-22°-E		
109	28M-16	円形	80×80	N-0°		
110	28L-17	不正形	260×190×13	N-90°		
111	28I-14	隅丸長方形	174×58×24	N-48°-W		
112	28L-17	隅丸長方形	140×74×14	N-5°-E		
113	欠番					
114	28L-15	長円形	160×110×32	N-80°-E		
115	28K-14	不正形	85×78×14	N-0°		
116	28I-14	隅丸長方形	170×48×10	N-37°-W		
117	28I-14	隅丸長方形	200×74×16	N-40°-W		
118	28M-17	隅丸長方形	152×78×9	N-82°-E		
119	28I-15	隅丸長方形	224×53×12	N-16°-W		
120	28I-15	隅丸長方形	198×60×20	N-12°-W		
121	28J-14	隅丸長方形	190×100×29	N-90°		
122	28L-15	隅丸長方形	172×48×21	N-7°-E		
123	28I-14	長円形	102×52×14	N-90°		
124	28L-15	隅丸長方形	327×60×17	N-0°		
125	28L-16	隅丸長方形	(208)×110×12	N-83°-E		
126	28L-16	隅丸長方形	220×84×19	N-90°		
127	28J-17	不正形	92×70×18	N-90°		
128	28L-17	隅丸長方形	(124)×50×11	N-13°-W		
129	28L-17	隅丸長方形	(262)×70×12	N-85°-E		
130	欠番					
131	28J-16	長円形	60×52×45	N-90°		
132	28J-16	長円形	77×66×15	N-85°-W		
133	欠番					
134	欠番					
135	28J-14	長円形	170×138×18	N-55°-E		
136	28M-15	隅丸長方形	142×48	N-5°-E		
137	28J-16	隅丸長方形	240×166×19	N-7°-W		
138	28K-14	不正形	150×122×20	N-0°		
139	28L-16	円形	70×70×23	N-0°		
140	28K-16	不正形	88×50×8	N-90°		
141	28K-16	長円形	294×100×15	N-90°		
142	28J-15	長円形	(192)×100×22	N-84°-E		
143	28K-16	不正形	152×87×19	N-0°		
144	28J-14	隅丸長方形	114×46×9	N-90°		
145	欠番					
146	28J-17	隅丸長方形	156×124×40	N-15°-W		
147	28M-16	長円形	750×110×54	N-88°-E	陶器皿	
148	28K-16	隅丸長方形	104×44×21	N-80°-E		
149	欠番					
150	28J-14	不正形	260×234×10	N-36°-W		
151	28L-16	隅丸長方形	160×50×14	N-90°		
152	28I-15	隅丸長方形	164×94×39	N-81°-W		
153	欠番					
154	28L-16	不正形	(96)×60×14	N-4°-W		
155A	28M-14	円形	80×80×12	N-0°		
155B	28J-9	隅丸長方形	157×84×11	N-78°-E		

番号	位置	形状	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主軸方位	出土遺物	備考
156	28M-15	隅丸長方形	147×50×23	N-75°-E		
157	28L-10	隅丸長方形	156×78×23	N-75°-E		
158	欠番					
159	欠番					
160	28L-10	隅丸長方形	220×190×33	N-90°		
161	欠番					
162	28L-10	隅丸方形	320×200×26	N-0°		
163	28K-11	長円形	126×70×11	N-5°-W		
164	28K-10	長円形	242×64×14	N-6°-W		
165	28K-10	長円形	135×66×7	N-90°		
166	28K-11	長円形	(100)×82×28	N-90°		
167	28L-10	隅丸長方形	370×220×38	N-0°	かわらけ	202土坑と同一
168	欠番					
169	28J-10	隅丸長方形	166×110×15	N-11°-W		
170	28J-10	隅丸長方形	90×(40)	N-18°-W		
171	28J-11	隅丸長方形	174×70×14	N-22°-W		
172	28J-10	隅丸長方形	300×114×23	N-73°-E		
173	28J-10	隅丸長方形	100×60×17	N-8°-W		
174	28J-10	隅丸長方形	(190)×100×23	N-70°-E		
175	28J-11	隅丸長方形	100×66×10	N-6°-W		
176	欠番					
177	28I-10	円形	100×100×19	N-0°	かわらけ	
178	欠番					
179	28K-6	長円形	178×52×13	N-25°-W		
180	28I-10	隅丸長方形	174×70×10	N-84°-E		
181	28I-10	長方形か	-×36×4	-		
182	28I-11	隅丸長方形	190×60×12	N-54°-E		
183	欠番					
184	28I-10	隅丸長方形	(180)×72×11	N-81°-E		
185	28I-10	隅丸長方形	283×(58)×25	N-90°	かわらけ	
186	28H-10	長円形	(200)×68	N-60°-E	かわらけ	
187	欠番					
188	28J-10	長円形	141×80×36	N-90°		
189	28I-10	隅丸長方形	386×96×17	N-90°		
190	欠番					
191	28J-11	不正形	294×182×19	N-90°		
192	28K-5	長円形	158×48×16	N-11°-W		
193	28L-11	長円形	326×38×10	N-4°-E		
194	28L-11	長円形	150×50×5	N-5°-E		
195	28L-1	長円形	220×46×13	N-8°-E		
196	欠番					
197	28L-9	長円形	210×140×20	N-90°		
198	28K-9	長円形	180×76	N-90°		
199	28J-10	隅丸長方形	270×104×31	N-6°-E		
200	28J-10	隅丸長方形	150×94×11	N-72°-E		
201	欠番					
202	28K-10	隅丸長方形	220×184×69	N-17°-W		167土坑
203	28K-9	長円形	183×80	N-90°	かわらけ、五輪塔	
204	欠番					
205	欠番					
206	欠番					
207	28J-9	隅丸長方形	218×70×30	N-81°-E		
208	28J-9	隅丸長方形	180×74×33	N-8°-W		
209	28J-9	長円形	170×60×46	N-11°-W	土製円盤	
210	28K-8	長円形	113×75×9	N-85°-E		
211	28K-8	隅丸長方形	145×62×18	N-4°-W		
212	28K-8	隅丸長方形	170×57×20	N-80°-E	かわらけ	
213	28J-8	隅丸長方形	150×58×36	N-77°-E		
214	28L-8	長円形	67×40×7	N-80°-E		
215	28K-8	隅丸長方形	164×76×28	N-16°-W		
216	28I-9	隅丸長方形	160×64×34	N-16°-W		
217	28L-7	長円形	144×122×37	N-22°-W		
218	28L-7	円形	65×65	N-0°		
219	28L-7	長円形	132×88×21	N-90°		
220	28L-6	長円形	145×70×11	N-90°	陶器皿	
221	28L-6	長円形	(130)×70×10	N-23°-W		

番号	位置	形状	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主軸方位	出土遺物	備考
222	28L-6	長円形	(250)×68×5	N-5°-W		
223	28K-6	不明	240×-×27			
224	28K-6	隅丸長方形	80×54×18	N-0°		
225	28L-4	長円形	116×77	N-16°-W		
226	28K-6	長円形	142×68×24	N-5°-W		
227	28L-8	長円形	(80)×60×12	N-66°-E		
228	28L-8	隅丸長方形	68×60×10	N-30°-W		
229	28K-5	隅丸長方形	(80)×57×17	N-21°-W		
230	28L-8	隅丸長方形	58×50	N-75°-E		
231A	28L-8	長円形	59×26	N-86°-E		
231B	28J-8	隅丸長方形	80×40×10	N-73°-E		
232	28I-9	隅丸長方形	184×60×40	N-74°-E		
233	28I-11	隅丸長方形	(190)×58	N-66°-E		
234	28K-9	長円形	90×50	N-80°-E		
235	28K-8	円形	100×100×17	N-0°		
236	28K-9	不正形	110×74	N-87°-E		
237	28K-9	長円形	(64)×50	N-68°-W		
238	28I-10	隅丸長方形	240×96×24	N-16°-W		
239	28I-10	隅丸長方形	234×60×34	N-86°-E		
240	28H-10	隅丸長方形	180×70×30	N-46°-W		
241	28I-8	隅丸長方形	153×62×22	N-12°-W		
242	28I-9	隅丸長方形	120×74×21	N-55°-E		
243	28K-11	隅丸長方形	108×56×73	N-40°-E	陶器片口	近世
244	28H-10	隅丸長方形	192×85×18	N-46°-W		
245	28L-7	円形	90×90	N-0°		
246	28L-6	長円形	(108)×72×43	N-70°-E		
247	28I-10	隅丸長方形	236×58×40	N-26°-W		
248	28I-10	隅丸長方形	238×80×5	N-77°-E		
249	28H-10	隅丸長方形	225×73×20	N-36°-W		
250	28K-8	隅丸長方形	(150)×51×20	N-70°-E		
251	28L-8	隅丸長方形	170×75×24	N-81°-E		
252	28L-8	隅丸長方形	144×68×29	N-3°-W		
253	28K-8	隅丸長方形	208×84×15	N-81°-E		
254	28K-8	隅丸長方形	150×90×60	N-7°-W		
255	28L-3	長方形	115×60×30	N-7°-W	礫、炭化物。	火葬墓、壁面焼土化
256	28J-8	隅丸長方形	165×58×27	N-20°-W		
257	28J-9	隅丸長方形	138×66×29	N-70°-E		
258	28J-8	隅丸長方形	322×120×54	N-80°-E	かわらけ、陶器皿	
259	28J-8	隅丸長方形	280×70×33	N-22°-W		
260	28J-8	隅丸長方形	160×120×25	N-65°-W		
261	28J-8	隅丸長方形	70×70×14	N-16°-W		
262	28J-8	円形	80×80	N-0°		
263	28J-8	不正形	184×(120)×46	N-62°-E		
264	28I-8	隅丸長方形	182×74×25	N-24°-W		
265	28L-6	不正形	285×162×17	N-0°		
266	28I-9	不正形	(140)×84×30			
267	28L-6	隅丸長方形	122×74×58	N-9°-E		
268	28K-6					
269	28K-6	隅丸長方形	188×108×6	N-85°-E		
270	28K-3	長円形	176×92	N-90°		
271	28K-3	隅丸長方形	206×74	N-90°		
272	28K-4	長円形	156×76	N-12°-E		
273	28L-4	隅丸長方形	(90)×84	N-11°-W		
274	28K-3	長円形	96×56	N-0°		
275	28J-5	隅丸長方形	300×198×16	N-66°-E	板碑	
276	28J-3	隅丸長方形	150×70	N-58°-W		

VI区

番号	位置	形状	規模(長軸×短軸×深さ)cm	主軸方位	出土遺物	備考
1	38P-14	長円形	(126)×82×14	N-4°-E		
2	38P-13	長円形	180×100×15	N-88°-W		
3	38P-13	円形	50×50×6	N-0°		
4	38P-13	長円形	70×50×8	N-77°-E		
5	38P-13	円形	54×54×8	N-0°		
6	38P-13	長円形	70×50×8	N-75°-E		
7	38P-11	方形か	107×(58)×14	N-75°-W		

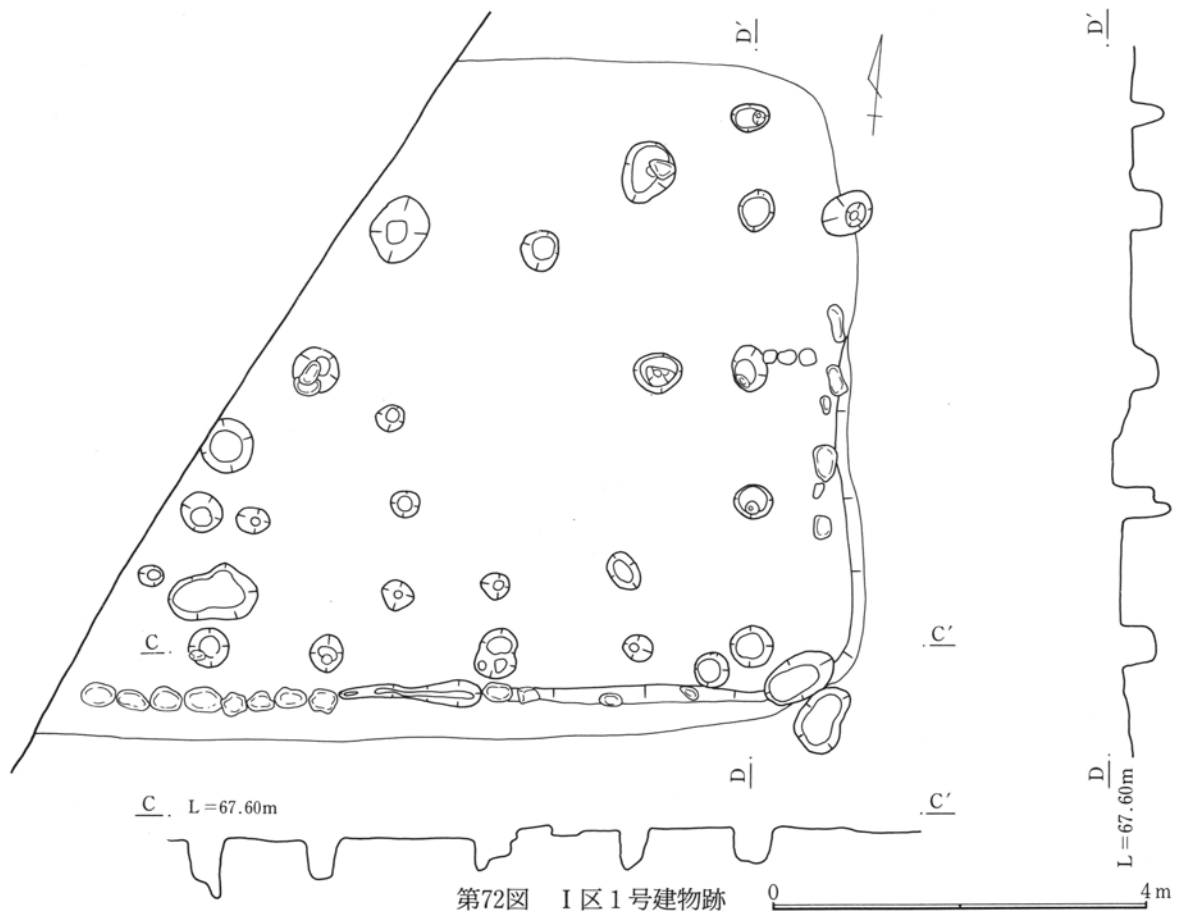
第6節 近世I期（2面）

本遺構面は層位的には天明の面より40~50cm下がった面で、洪水によって運ばれたと見られる砂層で覆われている。調査区内では比較的広い範囲でこの砂層は認められるものの、遺構面として確認できたのは部分的である。しかしながら、建物や畑、道など本遺跡の変遷を知る上でも重要な遺構も検出されており、注目される。なお、この砂層の成因と考えられる洪水として有力視されるものは、寛保2年（1742）の大洪水が挙げられる。

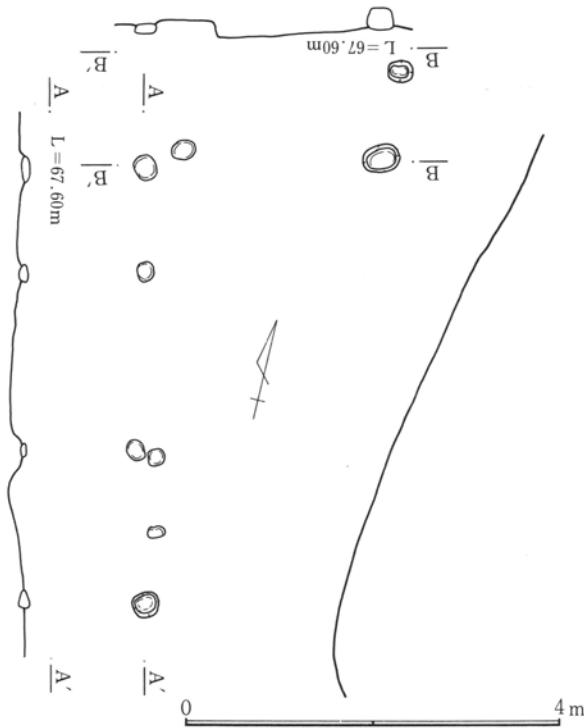
1. 建物跡

I区1号建物跡（第72図、P L15・57）

調査区の西寄りに検出されたため、西側部分は調査区外である。東西約（8）m、南北7mの長方形を呈す範囲がやや高まり、この高まりの南縁には扁平な川原石が直線的に東西に配列されている。本遺構は砂層で埋まっており、上層（天明3年面）は畑であった。この畑の面より約40cm下位に位置する。柱を立てたと思われるピットは東西方向に（5）本、南北方向（東面）に5本が検出されている。ただし、北側はかなり後世の攪乱を受けていたために一部のピットは検出できなかった。柱間は1.3~1.75mである。径は30~40cmで、深さは25~50cmである。内部にもピットが配され、扁平な石が出土しているものも見られる。出土遺物は陶磁器片の他金属製品（煙管、古銭、釘）が比較的多く見られる。焼土や灰層などが点在していたが竈、囲炉裏に関しては場所の確定はできなかった。何回かの改築等がなされた可能性がある。また建物の南側は庭であったと思われ、赤茶色を呈し、固く締まった平坦面をなしている。



第72図 I区1号建物跡



第73図 II区1号建物跡

II区1号建物跡 (第73図)

18P・Q-17グリッドに位置する。天明3年の面を約40cm掘り下げたところ検出した。遺構を覆っていた砂層はI区1号建物跡を覆っている層と同質である。底部に扁平な石を据えた掘立柱建物と思われるが、柱穴自体はほとんど削られてしまっている。

検出した規模は3間×1間である。主軸方位はN-13°-Wである。東側は調査区外に、南側も明確でなく礎石、掘り込みは確認されなかった。検出できたのは北側2本、西側4本である。近接して扁平な石が見られることなどから、建て替えが行われた可能性もある。

出土遺物はまったく見られず、建物内部においても硬化した面や囲炉裏等の施設は痕跡も含めて確認されなかった。

VI区1・2号建物跡(第74図、P L15・57・58)

38R・S-17~19グリッドに位置する。1面(VI区1面3号建物)下に検出されたもので、約40cmの洪水砂層下に埋もれていた。東側は南北に走る7個の礎石列が残るが、その他に関しては点在する礎石、ピットが確認された。また、西側、南側はかなり状態が悪く建物の範囲を確定することはできなかった。また、建物の位置する場所は周囲より10~15cm高くなっている。

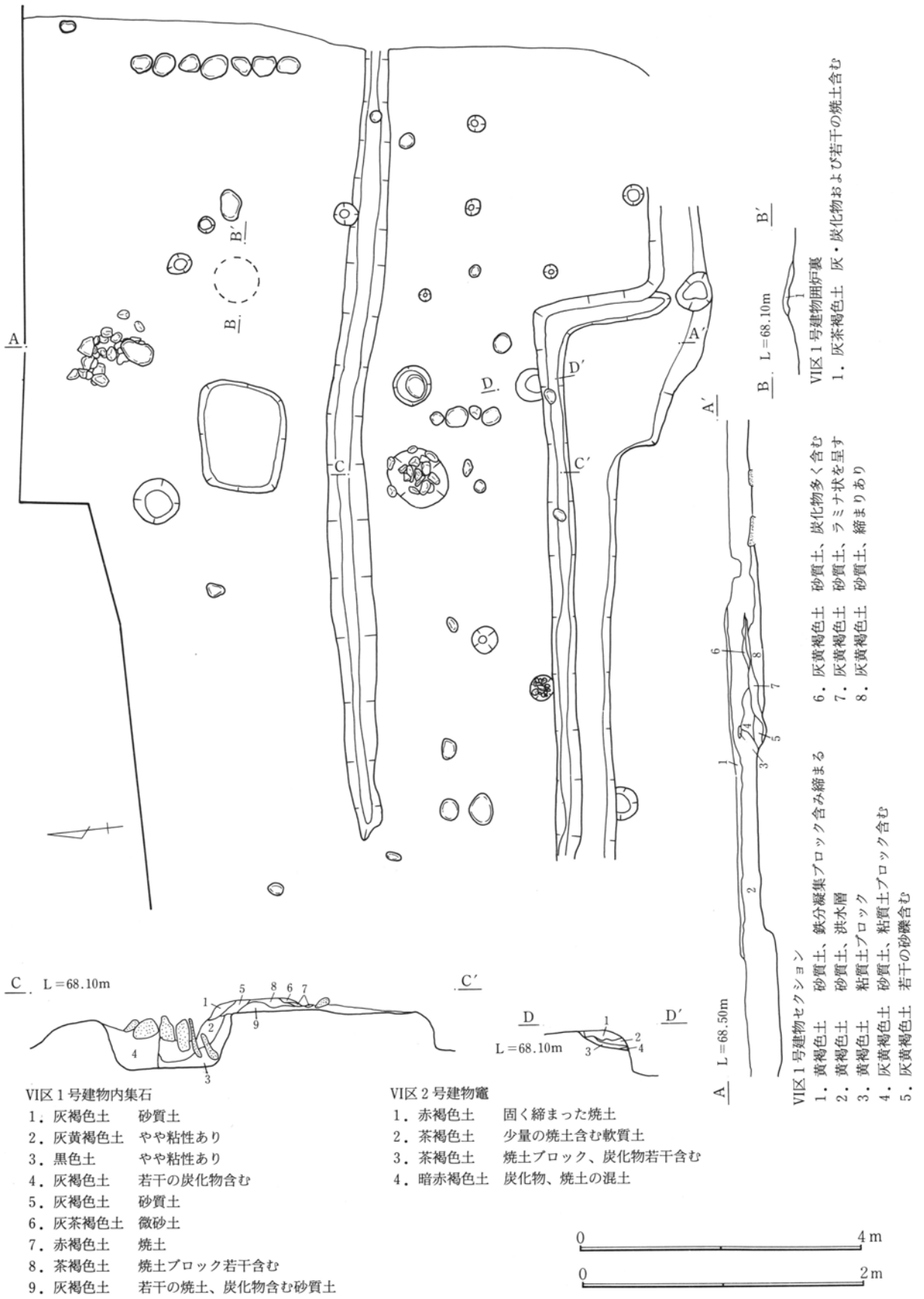
建物内の北東部分には多くの炭化物や土器が検出されている。硬化した面も認められることから、土間である可能性が高い。建物内の施設として囲炉裏、竈の痕跡が認められる。中央に検出された長方形の浅い掘り込みは覆土中に少量の灰、炭化物を含んでおり、囲炉裏であった可能性がある。ピット1は円形でかなり焼土化が見られることや、壁材ではないかと思われるスサの混入した粘土塊が検出されている。

建物内を東西に走る平行する幅60~80cmの浅い溝2条が検出されているが本建物に関連するものかは、不明である。切り合ったピットや溝、集石土坑、焼土痕などの状況から建て替えが行われたことも考えられる。本建物は厚さ約40cmの洪水層を挟んでVI区1面3号建物の下で確認されている。この洪水層については、寛保二年の大洪水によってもたらされた可能性が高い。

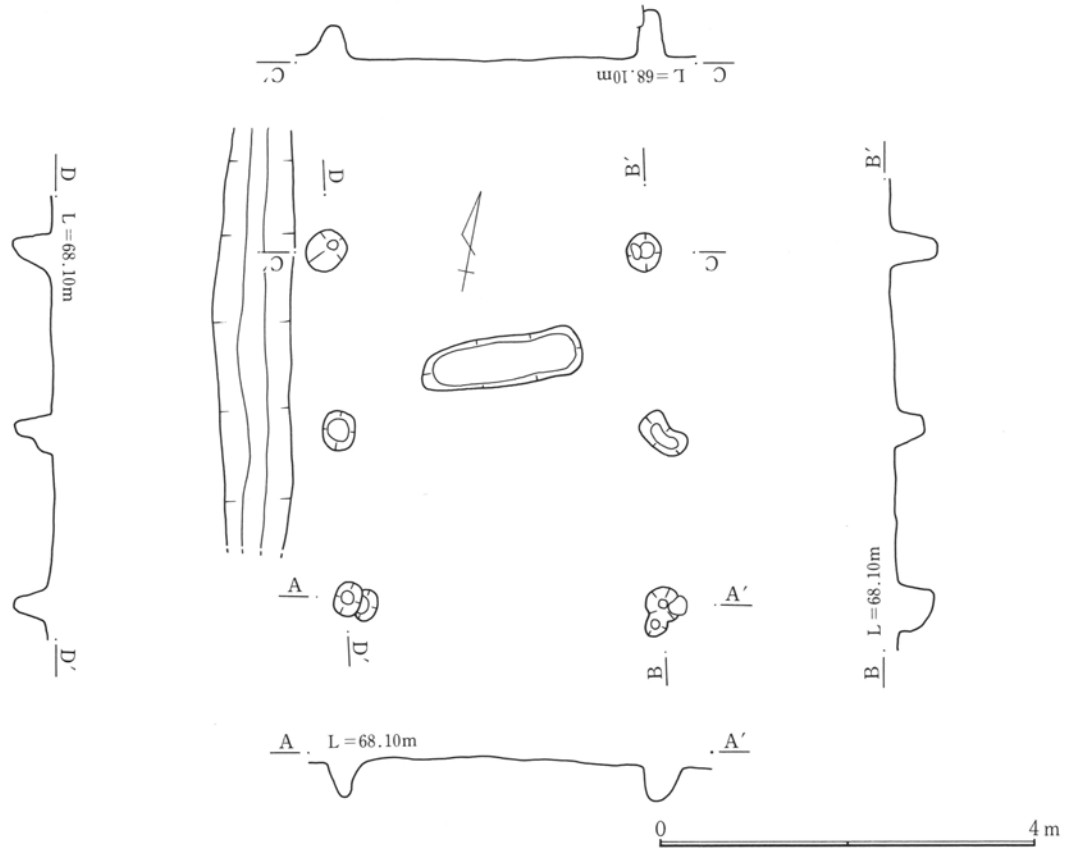
出土遺物は東側において内耳焙烙片が多量に出土している他、若干の陶磁器類、鉄(銅)製品、銅銭や石臼などが見られる。

VI区3号建物跡 (第75図)

48P-3グリッドに位置する。南北3.8m(2間)、東西3.4m(1間)である。柱間は1.9mで主軸方位はN-10°-Wである。柱穴の規模は径30~40cmで深さは20~45cmである。中央やや北寄りに長さ1.7m程の隅丸長方形の土坑が検出されているが、伴うものかどうかは不明である。出土遺物はほとんど見られなかった。VI区1面8号建物の南東に約2m程ずれた位置に位置しており、洪水で埋まった前身の建物と考えられる。



第74図 VI区 1・2号建物跡



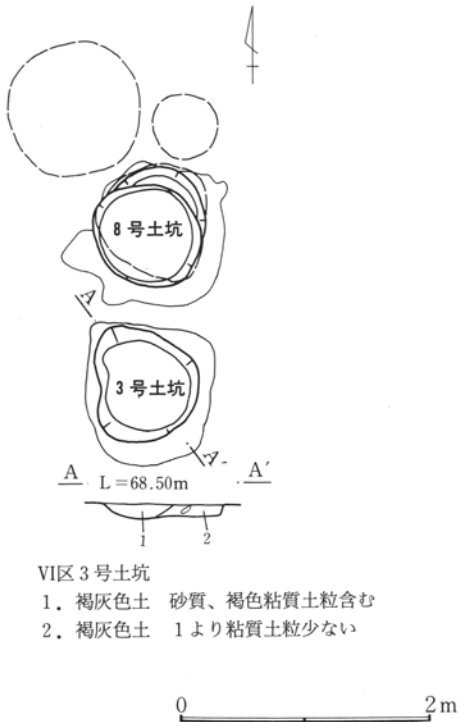
第75図 VI区3号建物跡

2. 土坑・集石

I・II・VI区において土坑10基、集石土坑1基が検出されている。いずれも砂質土（洪水層）で埋没しているが、埋没時に空いていたものと、すでに埋まっていたものと見られる。それぞれの性格等は不明である。また形状や掘り込みの明瞭でないものも見られた。本項では比較的検出状況の良い6基のみ図示説明を行う。なお、VI区3および8号土坑は便槽跡と考えられる。

I区1号土坑（第77図）

18M-6グリッドに位置する。I区1号建物の南東に位置している。南北に長い長円形を呈す。規模は長径3.0m、短径2.2m、深さは0.5mである。覆土は川砂様の砂質土で住居や庭の部分を覆っていたものと同じものと判断され、一気に埋まった状況が観察された。砂層中に炭化物のブロックが含まれている。出土遺物は風化した獣骨（牛角か）が1点見られる。ごみ穴か。



VI区3号土坑

1. 褐灰色土 砂質、褐色粘質土粒含む
2. 褐灰色土 1より粘質土粒少ない

第76図 VI区3・8号土坑

I区 2号土坑 (第77図)

18O-5グリッドに位置する。長円形を呈し、軸方向は東西である。規模は長径1.35m、短径0.8m、深さ0.15mである。覆土は1号土坑同様に砂質土で中に礫が入り、下層には灰、炭化物が多く混入する。

西壁際で古銭が1点出土している。

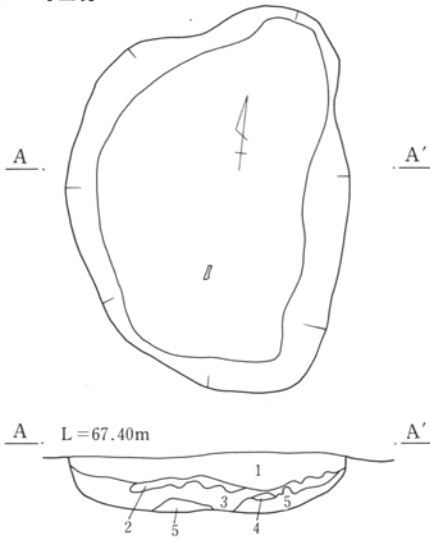
VI区 1号土坑 (第77図)

38P-13グリッドに位置する。やや東西に長い長円形を呈す。規模は長軸1.6m、短軸1.4mで深さは15cm程で壁はなだらかな立ち上がりである。底部中央部分がやや盛り上がっている。細かい砂質土で埋没している。土器片1点が出土している。

VI区 3号土坑 (第76図)

38P-20グリッドに位置する。径約90cmの不正円形を呈す。砂質土で埋没している。周囲に固くしまった粘質土ブロック土が囲むように見られる。深さは上面が削られているために10cmと浅い。8号土坑が北に隣接して位置している。

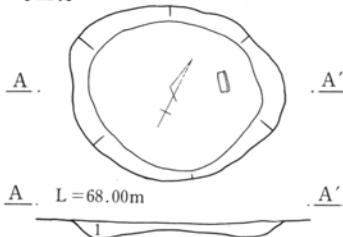
I区 1号土坑



I区 1号土坑

1. 褐色土 砂質土、若干の粘質土ブロック混入
2. 褐色土 砂質土、湿り気あり
3. 褐色土 粘質土と細砂粒土の混土
4. 炭化物
5. 黄褐色土 砂質土

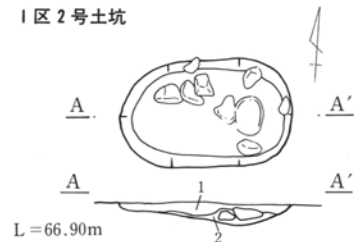
VI区 1号土坑



VI区 1号土坑

1. 黄褐色土 微砂土、粘性土小ブロック含む

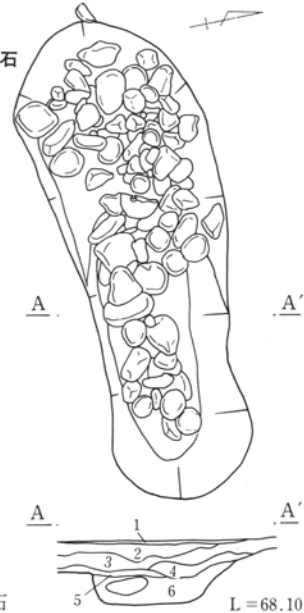
I区 2号土坑



I区 2号土坑

1. 灰褐色土 微砂土やや締めりあり
2. 灰黒色土 炭化物多く含む砂質土

VI区 1号集石

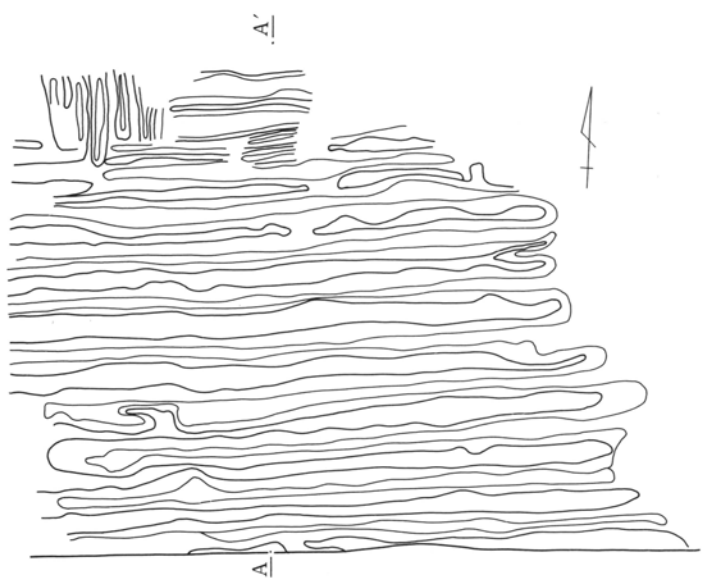


VI区 1号集石

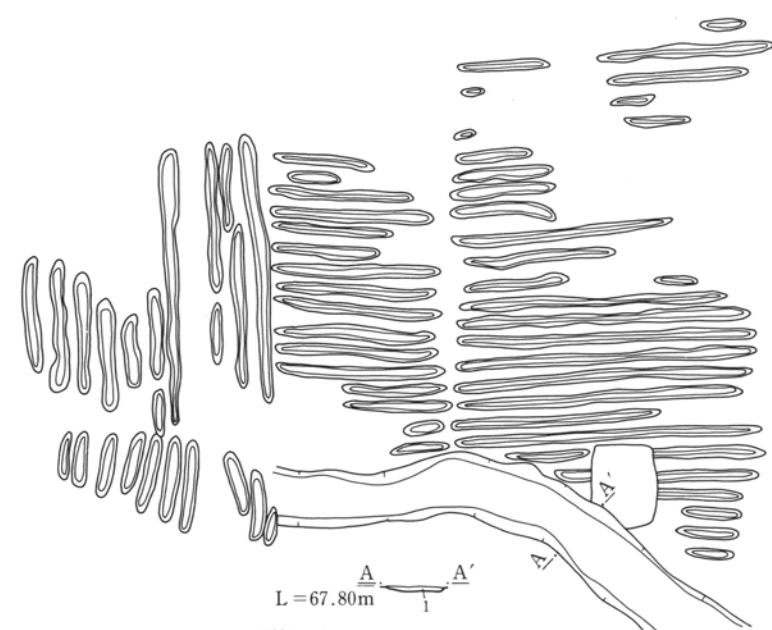
1. 灰黒色土 粘質土
2. 灰黒色土 鉄分凝集斑を含む
3. 灰黒色土 鉄分凝集斑多く含む
4. 灰黒色土 3と似るが砂を含む
5. 灰黒色土 4と同質だが砂を含まず
6. 灰黒色土 砂質で締めりあり

0 2m

第77図 土坑・集石

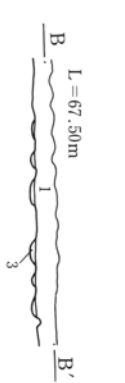
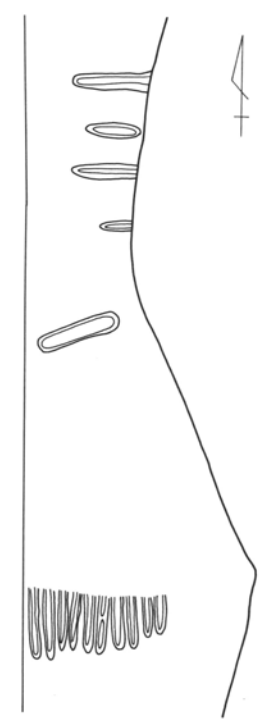


A' L = 67.50m A

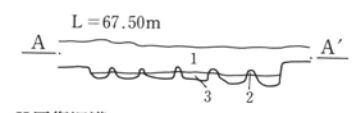
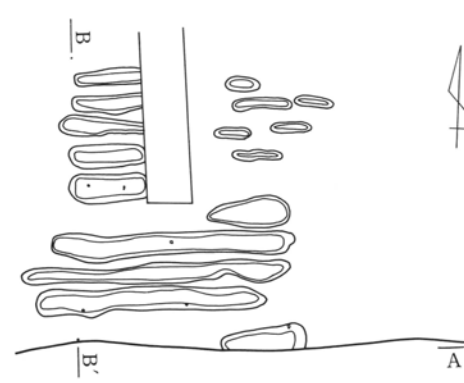


L = 67.80m A A'

I区畑セクション
1. 暗黄褐色土 砂質土、締まりなし



L = 67.50m B B'



II区復旧溝
1. 灰黄褐色土 砂質土
2. 灰褐色土 砂質だが締まりあり
3. 灰褐色土 2に似るが締まりは弱い

0 8m

第78図 畑・復旧溝

VI区 8号土坑 (第76図)

38P-20グリッドに位置する。径約90cmの円形を呈す、深さは完掘しておらず不明である。周囲に不定形な形で粘土が巡っている。また北側には別の土坑の一部が架かっている。この土坑を切って掘り込まれたものと考えられる。3・8号土坑は1面の8号建物(便所)のわずかに南にずれて検出されており、その構造や形態から洪水埋没前の便槽と判断される。また8号土坑に架かった土坑の存在から、さらに古い時期での作り替えも想定される。

VI区 1号集石 (第77図)

38P-13グリッドに位置する。VI区3面1号溝が南にほぼ直角に折れる内側部分に接して位置している。規模は東西長3.0m、南北幅1.0mで軸方向はほぼ東西である。大小様々な大きさの範囲に川原石が投げ込まれた状態で集中して検出された。大きなものは長さ50cm程のものも見られる。

深さは50cm程で東側が一段低くなった堀方を持つ。若干の土器片、石臼が出土している。埋土は砂質土が主体である。用途等性格は不明であるが、土層の観察などから江戸期でもやや古く、中世にまで遡る可能性もある。

3. 畑・復旧溝 (第78図、P L16・58)

畑および復旧溝はいずれも比較的狭い範囲ではあるが、I・II・VI区すべての区において確認されている。畑に関しては基本的に建物跡を覆っていた砂層で埋没している。この砂層をもたらした洪水が寛保二年のものであるとすれば、天明三年から約40年前ということになる。畑は洪水の影響もあるのであろうか、畝などはあまり高くなく、明瞭さを欠くところもかなり見られる。

I区において検出された畑はI区1号建物と同時に存在していたものと考えられ、この建物に住んでいた人が耕作していたものであろう。

II区においては、畑および砂質土を溝に並列して何条か掘り埋め込んだ、いわゆる復旧溝がII区の東部分において検出されている。この復旧溝は畑を覆っていた砂ではなく、比較するとさらに細かな砂が埋まっていた。この砂に関しては寛保二年以前の洪水でもたらされた砂であることも考えられ、時間的には畑よりも古くなるものと判断された。

VI区においても畑が検出されているがやはり部分的な範囲に限られる。以上述べたように2面における畑の検出状況は極めて部分的なものである、かなり削平されてしまった部分も多くあったと考えられ、1面同様それぞれの家の周囲においてかなり広範囲に作られていたことが窺われる。

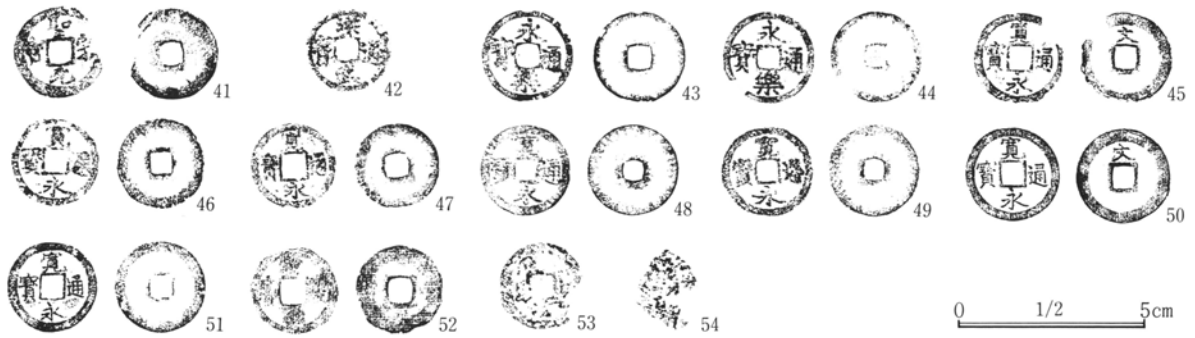
I区 1号畑

調査区南東よりかなり広い範囲が検出された、西側には1号建物が位置する。天明3年面より約40cm下位に検出された。洪水による砂質土で埋まっている。畝方向は東西と一部北西部分に南北に走る畝が検出されているが、上層の天明3年面の畑の畝と走行がほぼ一致している。

畝の高さは低く畝間は約60cmで、高さは10cm前後である。畝やサクはかなり乱れている部分もあり洪水によるものであろうか。畝の走行は東西のもの南北のものが見られる。東西方向の畝の長さは12~14mである。途中で切れる場所もあり形状はややくずれている。西端は不明瞭であるが、おそらく終息しているものと思われる。南北のものは北側にわずかに見られたのみである。南側は調査区外となる。1号建物に付随して耕作されていたものと考えられる。



第79图 I区1号建物跡出土遺物(1)



第80図 I区1号建物跡出土遺物(2)

II区1号畑

18P-17グリッドに位置する。II区の東端部分において極めて狭い範囲の検出である。畝は東西方向に作られ畝の西端のわずかな部分である。東側はほとんどが調査区外となる。畝幅は約1mで3条を認めた。高さは10cm程である。

II区2号畑

18N-17グリッドに位置する。1号畑の南に位置する。畝10条を認め南北方向に走っているが、南端のごく一部分の検出であった。上部および北側は削られており全容は不明である。畝幅は20cm程と極めて狭く密接している。確認された畝の高さは5~10cmである。サクに入っていた土は細砂で、1号畑を被う砂とはやや異なる。

II区4号畑

II区の西端部分38K~M-1~3グリッドに位置する。遺存状態はあまり良好ではなかったが、南北および東西に走る畝が検出され、少なくとも2区画の畑が認められる。畝幅は30cmほどで、上部が削られており現状での高さは5cm以下である。両方向の畝は共に途切れるカ所が見られる。

畑を埋める土は非常に細かい微砂土でラミナ状を呈す。耕作土は灰色を帯びた微砂土で比較的締まりがある。また畑の南側には幅約1.5mの一段低くなった道状遺構が長さ10mにわたって検出された。やや蛇行して東西方向に走り、周囲より10cmほど低くなっている。路面は平坦赤褐色を呈し固く締まっている。

この道状遺構は川原砂を含む砂質土で埋まっており、西側は畑によって切られている。畑の埋土はシルト質の細砂である。

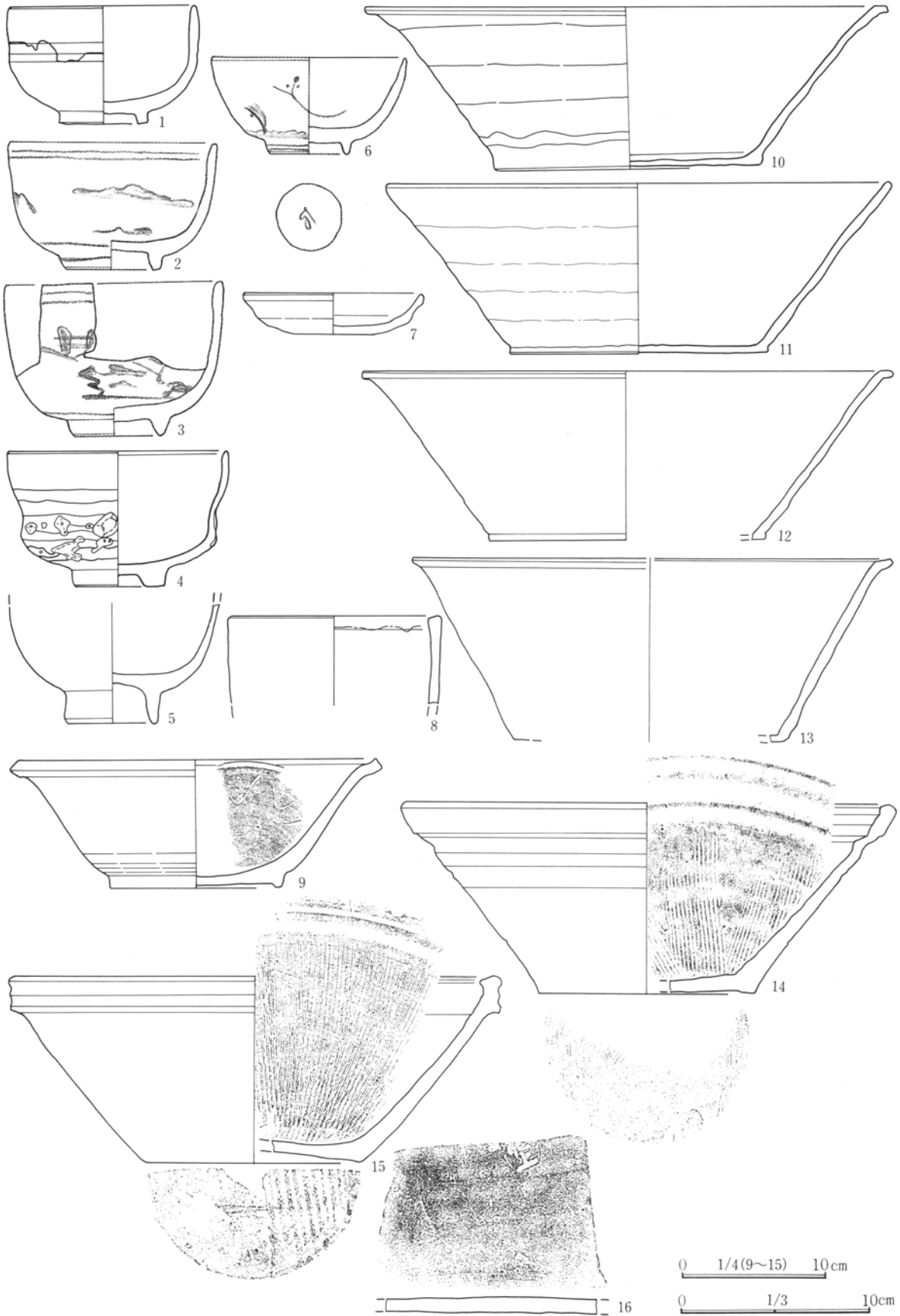
II区1号復旧溝

18M-19グリッドに位置する。南北方向に6条が密接して検出された。上面はかなり削平されてしまったものと思われる。長さ(2.5m)、幅50~70cm、深さは30cmである。

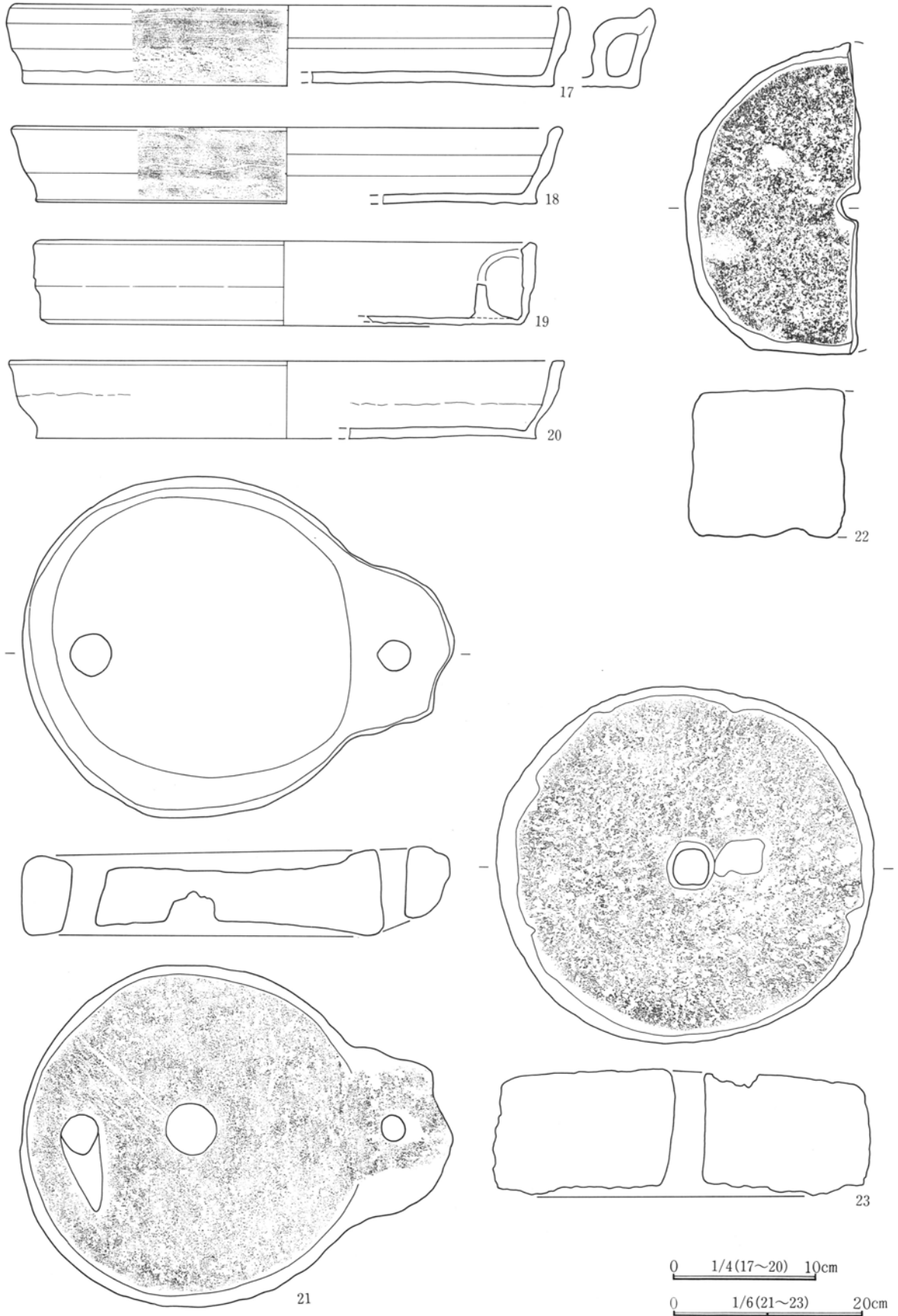
溝の形状は北端部分が角張る。覆土は砂質で比較的締まりがある。壁の立ち上がりはほぼ垂直に近く、底は平らである。

II区2号復旧溝

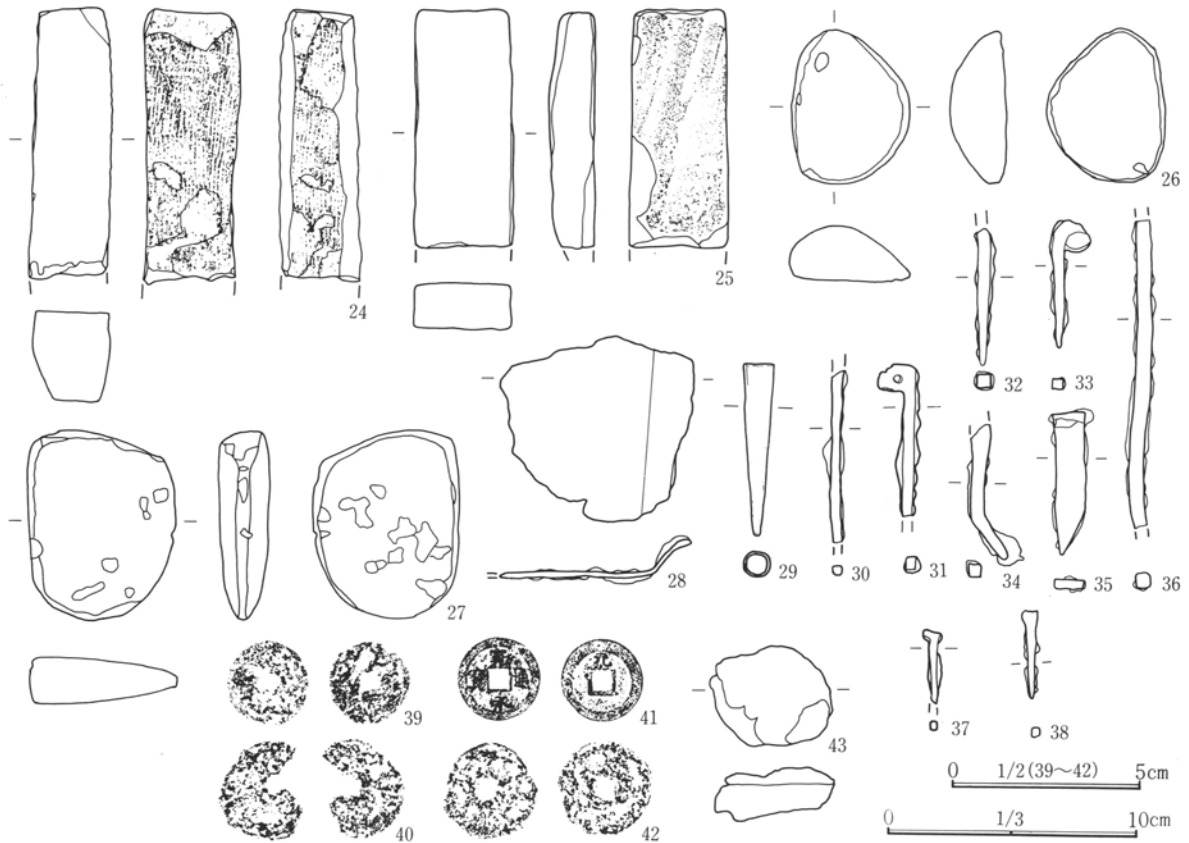
28M-1・2グリッドに位置する。1号復旧溝の西約4mにあり、溝の走行方向は東西である。一部断絶しているものもあるが、およそ10条が検出されている。最も長いものは長さ6m、幅30~50cm、深さは10cm程である。1号同様上部はかなり削られていると考えられる。壁の立ち上がりは1号に比してやや緩やかであるが底は平らである。



第81图 VI区1・2号建物跡出土遺物(1)



第82図 VI区1・2号建物跡出土遺物(2)



第83図 VI区1・2号建物跡出土遺物（3）

4. 出土遺物（第79～83図、P L58・59）

2面でも出土した遺物は、各遺構に伴って出土した遺物以外にも多数見られ、遺構を覆っていた洪水層中の遺物に関してもここで扱うこととした。陶磁器については1面において出土した遺物と時間的には大差が見られず江戸時代後期に比定されるものが大半を占めている。

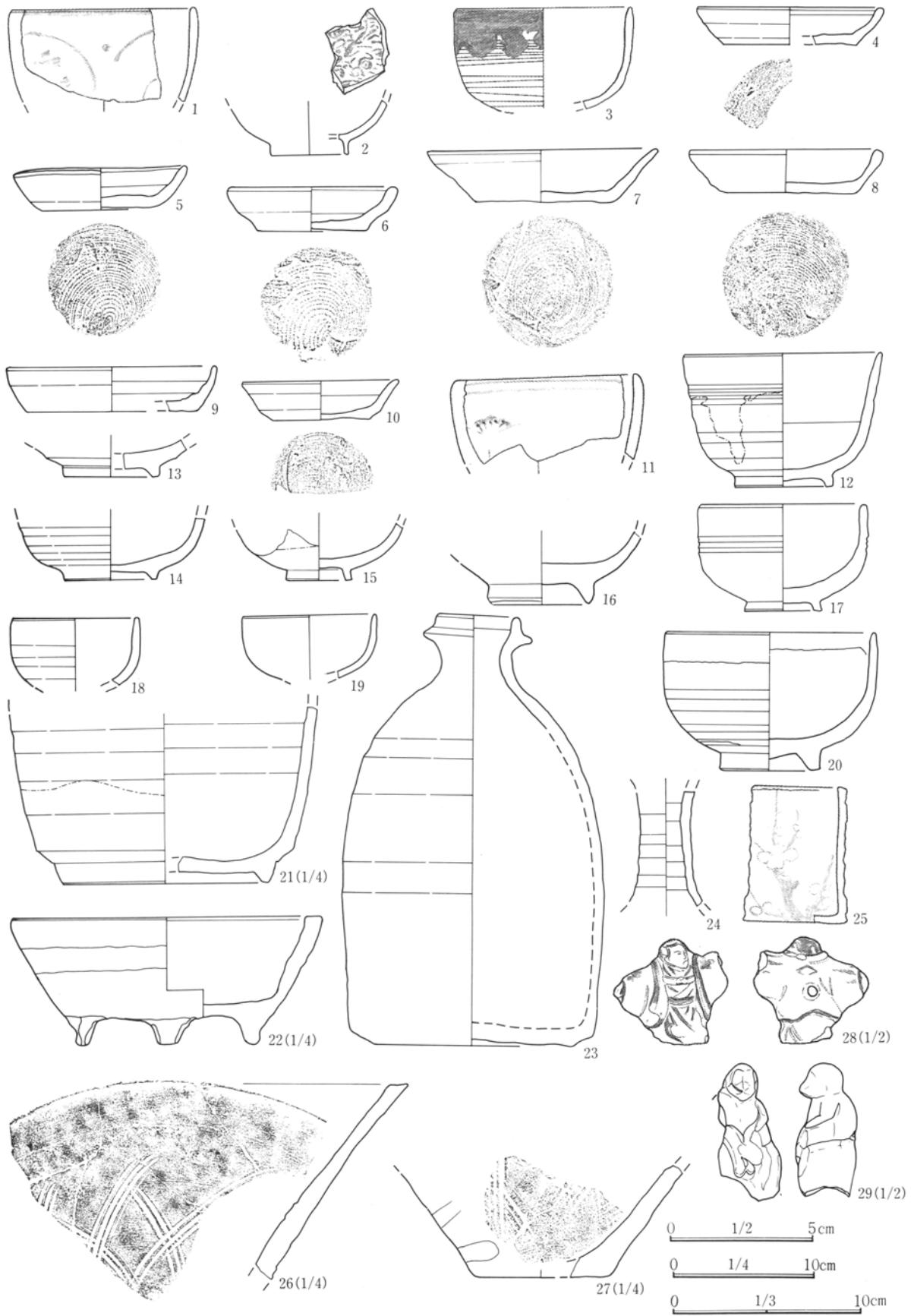
種類としては在地系の皿類をはじめとして、各種陶磁器や砥石などの石器類、鉄・銅製品など多種にわたっている。

陶磁器類は在地系の皿をはじめ、同じく在地系の鍋類、焙烙などが多く建物跡から出土している。I区1号建物においては、大型品は少なかったものの、在地系の皿、灯明皿、碗類が見られる。また煙管やさまざまな鉄製品、釘なども見られる。さらに銅銭も数多く出土している。寛永通宝が多いが宋銭も何点か混在している。

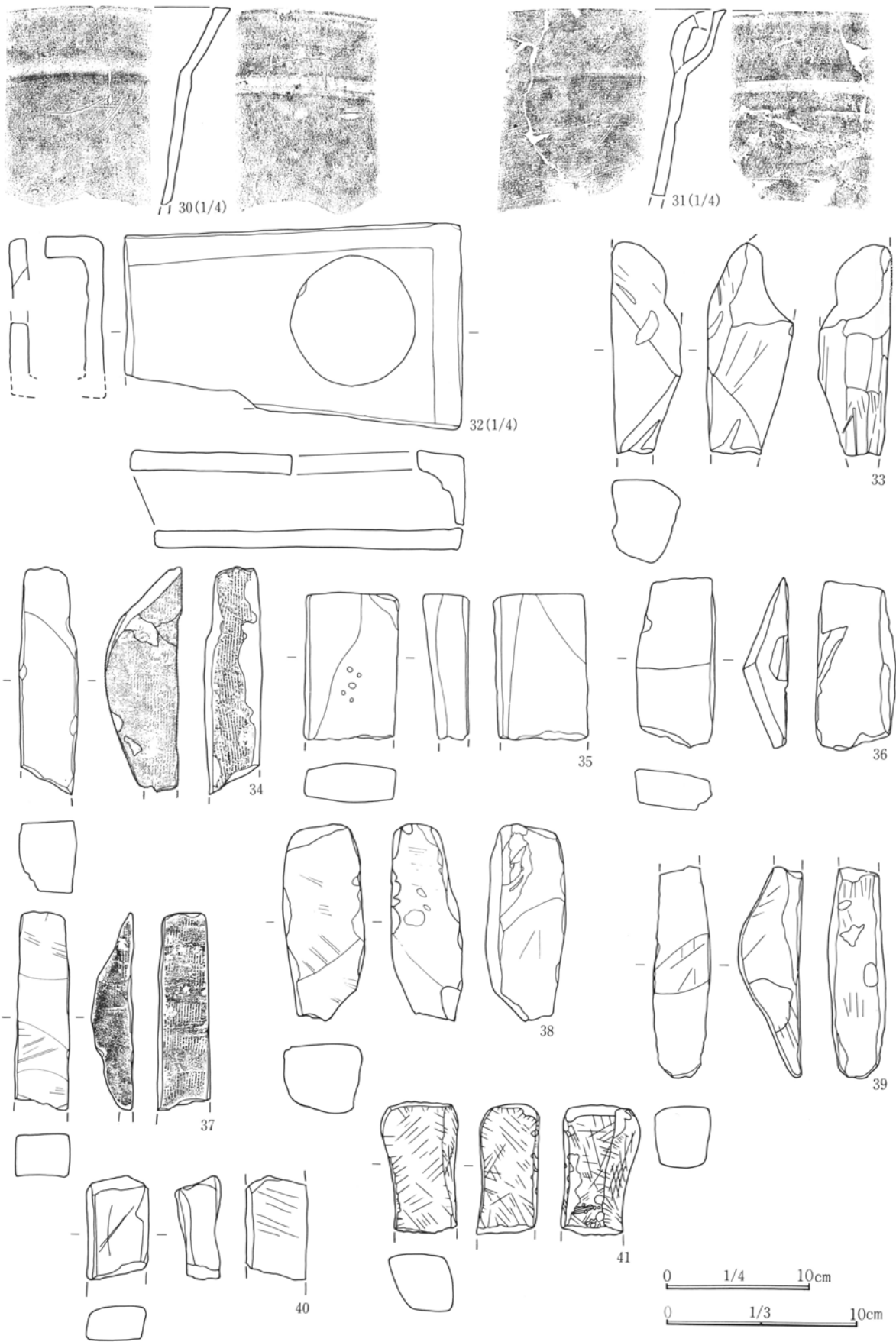
石製品は砥石の出土が目立つ、いずれも良く使い込まれた様子がかがえ、細い線条痕が見られる。石材は砥沢石が主である。

VI区1号建物においては碗類をはじめ在地系の鍋、焙烙類の出土が目立っている。さらに摺り鉢なども出土している。石製品としては石臼、砥石が見られる。軽石を利用した砥石2点も出土している。鉄製品は釘類が目立つ。

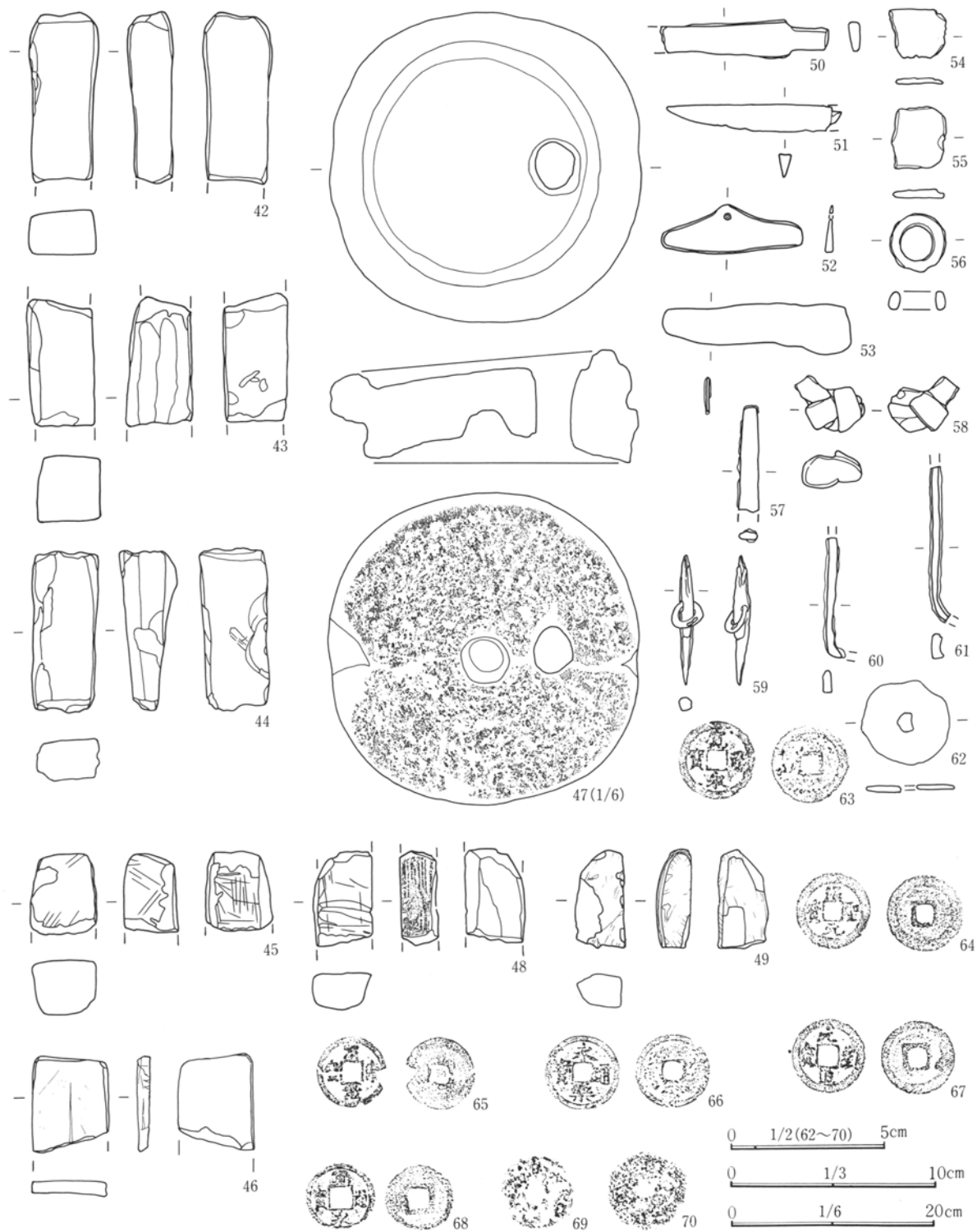
遺構外出土の遺物も多く、皿、碗の他徳利、火鉢なども見られる。さらに人形や風口などが出土している。石製品としては砥石類が多く石臼も見られる。鉄製品としては刀子、火打ち金が出土している。その他銅銭、鉄銭も出土している。



第84図 土坑・畑・遺構外出土遺物（1）



第85図 土坑・畑・遺構外出土遺物 (2)



第86図 土坑・畑・遺構外出土遺物 (3)

表7 2面出土遺物観察表

I区1号建物(第79・80図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	皿	(11.3) 3.0 (6.0)	体部小さく外湾して開く。底部外面左回転糸切り無調整。	中世
2	在地系土器	皿	(8.8) 1.9 4.7	歪みがひどく、高さの違いが著しい。底部外面左回転糸切り無調整。見込み撫であり。	口縁端部を除く内面全面に油若しくは墨と思われる黒変あり。
3	在地系土器	皿	8.0 1.8 5.5	器壁厚く、見込み中央窪む。底部外面左回転糸切り無調整。	口縁端部油付着。中世。
4	在地系土器	皿	(11.4) 3.0 (7.0)	器高高い。底部外面回転糸切り無調整。	中世
5	在地系土器	皿	10.0 2.5 6.0	底部回転糸切り無調整。口縁部器壁やや厚い。	
6	瀬戸・美濃陶器	皿	(11.5) 3.0 6.5	全面に長石釉を施すが、一部白濁し発色も悪い。貫入入る。高台内団子状目痕三カ所。	高台端部一様にすり減る。口縁部の小さい欠損部は僅かに摩滅し油も付着する。
7	瀬戸・美濃陶器	皿	(11.0) 2.5 (5.7)	底部外面を除き施釉。釉は長石釉と思われるが、白濁・無光沢である。	
8	瀬戸・美濃陶器	小皿	(8.0) 2.1 (4.0)	高台内を除き緑色味のある灰釉を施し、高台内にも薄く掛かる。見込みと、高台脇釉溜まる。釉の厚い部分に貫入入る。	大窯期
9	志戸呂陶器	灯明受け皿	9.4 2.0 4.0	内面から口縁部外面鉄泥。受け部は高く、一カ所にアーチ状の流入部を設ける。	
10	瀬戸・美濃陶器	壺蓋	(12.5) 2.6 (5.6)	雑な作りの蓋で、口縁部内面から上面に鉄釉を薄く施す。下部は右回転糸切り無調整。	口縁部内面に1cm程の礫が入る。歪みあり。
11	瀬戸・美濃陶器	碗	11.2 - -	胎釉を施した後、口縁部に薬灰釉を掛ける。	尾呂茶碗
12	瀬戸・美濃陶器	碗	(13.0) - -	高台脇以下を除き灰釉を施す。大振りで深い碗。	
13	肥前磁器	皿	- - (7.1)	見込み二重線内に植物文。体部外面は唐草文。高台内不明銘。	
14	瀬戸・美濃陶器	皿	- - (6.0)	緑味のある灰釉を全面施釉。貫入入る。高台内輪状の目痕。見込み菊花状の押印。	大窯期
15	瀬戸・美濃陶器	天目碗	(11.4) - -	器高やや低い。口縁部の立ち上がりは小さく、端部の外反も小さい。鉄釉は釉溜まり以外錆色に発色し、光沢が強い。	大窯期?
16	肥前陶器	碗	(12.0) - -	貫入の入る透明釉を施す。外面に鉄絵具による山水文を描く。	京焼風。
17	在地系土器	瓦灯?	- - (8.0)	還元炎で瓦風の焼成。皿状を呈する下部は欠損する。残存部が小さく器種は不明であるが、瓦灯のつまみである可能性が高い。	
18	瀬戸・美濃陶器	香炉	(10.0) - -	外面端部下端から口縁部内面胎釉。口縁端部は内傾し上面は窪む。	
19	肥前陶器	片口鉢		内面白土刷毛塗り。口縁部外面は白土で波状文を描く。内面から口縁部外面施釉。	
20	石製品	砥石	(8.6) 3.2 3.1	一端を欠く、断面台形、2面使用端部は細くなっている。	砥沢石
21	石製品	砥石	12.6 4.2 4.3	2面使用、角柱状を呈す。	砥沢石
22	石製品	砥石	(9.8) 3.5 3.6	一端を欠く、断面三角形を呈し、1面使用、鑿による整形痕残る。	砥沢石
23	石製品	砥石	(9.6) 3.6 2.6	一端を欠く、2面使用、端部がやや薄くなる。細い線状の使用痕顕著。	砥沢石
24	石製品	砥石	(5.8) 3.0 1.2	破損品、2面使用。	珪質粘板岩
25	石製品	砥石	4.3 2.7 1.3	小形品、2面使用。線状の使用痕顕著。	砥沢石
26	銅製品	留め金具	9.0 1.0 0.2	L字状を呈し、両端部に目釘穴を有す。	
27	銅製品	煙管吸い口	5.5 1.6 3.5	板状に潰れている。	
28	銅製品	煙管雁首	5.3 0.8 -		
29	銅製品	煙管吸い口	5.4 1.0 -	肩部中央がやや太くなっている。	
30	銅製品	煙管吸い口	(3.8) 0.6 -	小口部を欠く。	
31	銅製品	切羽	2.0 1.3 -		
32	鉄製品	刀子	(7.9) 1.1 0.4	両端を欠く。	
33	鉄製品	刀子か	(15.2) 2.5 0.4	やや幅広。	
34	鉄製品	板状製品	3.3 1.9 0.9		
35	鉄製品	板状製品	3.9 3.5 0.8		
36	鉄製品	板状製品	3.3 3.4 0.4	三角形を呈すが、一辺はやや丸みを持つ。	
37	鉄製品	板状製品	2.4 2.1 0.8	厚みがある。一辺がやや丸みを持つ。	
38	鉄製品	釘	(6.8) 0.6 -	両端部欠き、折れ曲がる。	
39	鉄製品	釘	5.8 0.5 -	頭部分を有す。	
40	ガラス製品	小玉	0.4 0.3 -	径0.4cmで穴が貫通している。透明感あり。	
41	銅銭	聖宋元宝		一部欠損	初鑄年1101
42	銅銭	洪武通宝			初鑄年1368
43	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
44	銅銭	永楽通宝			初鑄年1411
45	銅銭	寛永通宝		一部欠損、背文文字	
46	銅銭	寛永通宝			
47	銅銭	寛永通宝			
48	銅銭	寛永通宝			
49	銅銭	寛永通宝			
50	銅銭	寛永通宝		背文文字	
51	銅銭	寛永通宝			

番号	種類	器種・器形	計測値	特徴・その他	備考
52	銅銭	不明			
53	銅銭	不明			
54	銅銭	不明		破損著しい	

Ⅵ区1・2号建物(第81~83)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.9) 6.1 4.6	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰鎗碗
2	肥前陶器	碗	(11.0) 6.6 (5.0)	外面東屋山水文か。口縁部・高台脇共に2条の圏線。高台脇は部分的に3条。高台は高く、高台内の挟りも深い。内外面に細かい貫入の入る透明釉。	陶胎染付。
3	肥前陶器	碗	11.5 8.0 4.7	外面東屋山水文。口縁部・高台脇共に2条の圏線。	陶胎染付。
4	瀬戸・美濃陶器	碗	(11.6) 7.0 4.7	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。高台は幅広く蛇の目状を呈する。高台端部と高台外面の釉は拭い取る。外面中位を六カ所窪ませ、外面の鉄釉部分に長石釉を斑状に施す。	腰鎗碗
5	肥前陶器	碗	4.6 - -	高台高く、高台内は括る。透明釉。貫入入る。	呉器手。
6	肥前磁器	碗	(10.2) 5.0 4.1	外面雪輪梅樹文。高台内不明銘。	波佐見系
7	志戸呂陶器	灯明皿	(9.4) 2.1 4.2	内面から口縁部外面に鉄泥を施す。底部外面から口縁部外面回転削り。	口縁部内外面油付着。
8	肥前磁器	香炉か	(11.1) - -	外面から口縁部内面透明釉。残存部に染め付けはない。	波佐見系
9	瀬戸・美濃陶器	鉢	26.1 8.9 12.0	体部は直線的に広がり、口縁部は外反する。口縁上端部は尖る。口縁部内面櫛状工具による波状文を巡らす。口縁部内外面に銅緑釉を掛ける。高台内から内面に薄く灰釉を施す。高台内の施釉は雑。底部内面団子状の目痕二カ所残存。	
10	在地系土器	鍋	36.4 11.3 18.5	底部外面型作り痕残す。体部外面粘土帯接合痕残る。口縁部外方に開き、端部上面を平坦にする。	底部外面から口縁部外面煤付着。口縁部から体部下位の煤が著しい。
11	在地系土器	鍋	(35.4) 11.8 18.0	外面体部下半斜めの凹線状圧痕。内面から体部外面上半回転撫で。口縁部は丸くおさめる。燻し焼成。底部内面菊形押印。	外面著しく煤付着。
12	在地系土器	焙烙	(38.8) 5.6(38.0)	耳は一カ所残る。外面底部から体部下位型作り痕残る。型作り痕上には紐作り痕明瞭に残る。燻し焼成。	体部外面煤付着。
13	在地系土器	鍋	(33.5) 12.7(18.8)	外面体部下半斜めの凹線状圧痕。内面から体部外面上半回転撫で。口縁部平坦面を有する。燻し焼成。	体部外面下半著しく煤付着。
14	瀬戸・美濃陶器	すり鉢	(33.4) 13.2(15.0)	口縁部下で小さく立ち上がった後、外方に折れ、口縁部は再び立ち上がる。錆釉を施すが、底部の拭い取りは行っていない。底部右回転糸切り無調整。底部内外面に目痕三カ所残る。	使用による内面の摩滅認められない。
15	堺・明石陶器	すり鉢	(34.6) 12.9(15.0)	外面口縁部以下削り。底部外面板状圧痕。口縁部内面の突帯は明瞭。見込みすり目は使用によりすり減る。	
16	在地系土器	焙烙か	厚さ7.5	底部片。内面に小判型の「…極上」押印か。上部は欠損し不明であるが、「大極上」であろう。	
17	在地系土器	焙烙	(38.8) 5.6(38.0)	耳は一カ所残る。外面底部から体部下位型作り痕残る。型作り痕上には紐作り痕明瞭に残る。燻し焼成。	体部外面煤付着。
18	在地系土器	焙烙	(38.6) 5.4(35.0)	外面底部から体部下位型作り痕残る。型作り痕上には紐作り痕明瞭に残る。燻し焼成。	体部外面煤付着。
19	在地系土器	焙烙	(35.0) 5.7(34.0)	耳は一カ所残る。外面底部から体部下位型作り痕残る。型作り痕上には紐作り痕明瞭に残る。燻し焼成。	体部外面煤付着。
20	在地系土器	焙烙	(38.8) 5.4(35.0)	耳は一カ所残る。外面底部から体部下位型作り痕残る。型作り痕上には紐作り痕明瞭に残る。燻し焼成。	焼き上がりは軟質の瓦質。体部外面煤付着。
21	石製品(挽き白)	上白	35.0 9.2 -	完品、取っ手付き。裏面の目は不鮮明。重さ16,700g。	牛伏砂岩
22	石製品(挽き白)	下白	32.0 13.0 -	約半分に割れる。目は不鮮明。	粗粒輝石安山岩
23	石製品(挽き白)	下白	38.8 13.0 -	完品、目は不鮮明。重さ30,500g。	粗粒輝石安山岩
24	石製品	砥石	(10.6) 3.2 3.8	断面台形、1面使用整形痕残る。	砥石
25	石製品	砥石	(9.4) 4.0 1.8	断面長方形、1面使用。表面に鉄分沈着著しい。	流紋岩
26	石製品	砥石	6.0 4.7 3.2	1面使用、使用面は平坦。	二ッ岳軽石
27	石製品	砥石	7.5 5.8 1.9	両面使用、側面部整形している。磨り面は平坦。	二ッ岳軽石
28	鉄製品	十能か	(7.7) (7.3) 0.2	板状製品、側縁が「く」の字に折れ、端部が外反する。	
29	銅製品	煙管吸い口	6.7 1.1 -	吸い口から肩にかけて直線的な作りである。	
30	鉄製品	釘	(6.7) 0.5 -	両端部欠。	
31	鉄製品	釘	(6.0) 0.5 -	頭部分は環状。	
32	鉄製品	釘	(5.3) 0.5 -	頭部分を欠く。	
33	鉄製品	釘	5.0 0.4 -	頭部分は丸く折れ曲がる。	
34	鉄製品	釘	(5.3) 0.5 -	頭部欠、くの字に折れ曲がる。	
35	鉄製品	釘か	5.7 1.1 0.4	板状で頭部分は短く折れ曲がる。	
36	鉄製品	釘か	(12.1) 0.6 -	両端部欠。	

番号	種類	器種・器形	計測値	特徴・その他	備考
37	鉄製品	釘	(2.9) 0.3 -	頭部分は折れ曲がる。	
38	鉄製品	釘	3.4 0.3 -	頭部分が残る。	
39	銅銭	不明			
40	銅銭	不明		破損品。	
41	銅銭	寛永通宝		背文文字	
42	銅銭	不明			
43	鉄銭	不明		錆化著しい。	

土坑・畑・遺構外 (第84~86図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	肥前陶器	碗	(9.8) - -	外面簡略化した唐草文を大きく描く。釉に貫入する。	陶胎染付
2	肥前陶器	碗	- - (4.0)	器壁薄く胎土も緻密。内外面白土を刷毛掛け。	
3	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.0) - -	器形は腰錆と同様であるが、口縁部外面の凹線が細かい。釉は内面から口縁部外面が鉄釉、他が灰釉と逆である。また、口縁部外面に鉄釉を斑状に巡らす。	
4	在地系土器	皿	(9.5) (7.0) 1.9	底部回転糸切り無調整、身はやや薄い。	
5	在地系土器	皿	9.1 2.1 5.8	底部左回転糸切り無調整。底部内面周縁強い回転撫でにより凹線状に窪む。	
6	在地系土器	皿	(8.9) 2.3 5.8	底部左回転糸切り無調整。底部は高台状に低く突き出る。口縁端部やや肥厚。底部内面と体部内面境は不明瞭。底部内面周縁の回転撫ではやや強い。	
7	在地系土器	皿	12.0 2.8 7.0	底部左回転糸切り無調整。外面底部と体部の境はシャープな稜線をなさない。体部は外反する。	中世
8	在地系土器	皿	10.2 2.3 7.0	体部は外反し、口縁部は肥厚して丸く納める。左回転糸切り無調整。口縁端部灯芯痕8カ所残る。	大きさに比して軽い。
9	在地系土器	皿	(11.0) 2.3 (9.0)	底部回転糸切り無調整。底部径大きい。底部周縁と体部下端が2条の突帯状に盛り上がる。破片のため、盛り上がり螺旋状か否かは不明。	
10	搬入系?土器	皿	(8.2) 2.0 (5.0)	体部はさほど開かず、口径の割りに器高が高い。胎土はやや緻密で雲母状の小鉱物目立つ。左回転糸切り無調整。	
11	肥前陶器	碗	(9.7) - -	口縁部外面に2重圈線、体部外面に植物?文を描く。	陶胎染付
12	瀬戸・美濃陶器	碗	(10.4) 6.9 5.2	器高高く、口縁部は外反気味。内面粗い貫入のはいる灰釉、高台内から体部外面に鉄釉を施す。外面口縁部下に螺旋状凹線巡らす。釉境部分窪ませる。	腰錆碗
13	瀬戸・美濃陶器	碗	- - (5.0)	内面灰釉、外面鉄釉。	腰錆碗
14	瀬戸・美濃陶器	碗	- - (4.8)	内面粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉を施す。外面口縁部下に螺旋状凹線巡らす。	腰錆碗
15	製作地不詳陶器	碗	- - 3.4	高台径は小さく、シャープに削り出す。内面から高台脇に天目釉を施す。	
16	肥前陶器	碗	- - (5.0)	高台端部を除き透明釉を施す。貫入する。高台内の扱いは浅い。	呉器手
17	瀬戸・美濃陶器	碗	(8.8) 5.6 4.0	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰錆碗
18	瀬戸・美濃陶器	小碗	(6.7) - -	外面口縁部下まで回転斡削り。内面から高台脇貫入の入る灰釉を施す。	
19	瀬戸・美濃陶器	仏飯器か小碗	(7.0) - -	外面口縁部下まで回転斡削り。内面から体部外面下位に貫入の入る灰釉を施す。口径の割りに杯部の器高が低い。	
20	瀬戸・美濃陶器	碗	11.0 7.2 5.2	内面から高台脇に鉛釉を施し、口縁部にうのふ釉を掛ける。	尾呂茶碗
21	瀬戸・美濃陶器	甕	- - (10.7)	内面から体部外面下位に錆色の鉄釉を施す。	底部中央に直径15mm程焼成後の穿孔が認められる。
22	在地系土器	火鉢?	21.7 8.8 14.6	器形は小型の火鉢型を呈する。器表は煙し焼成により黒色を呈する。内面は回転撫で調整。外面は磨きを施す。底部外面は型作り痕を有し、低い脚を4カ所に貼り付ける。	二次的な酸化被熱を受けていない。
23	瀬戸・美濃陶器	瓶	4.2 22.3 10.4	口縁部内面から底部外面に柿釉を施す。底部外面の釉は拭い取る。	徳利
24	肥前磁器	瓶		内外面透明釉。頸部内面に螺旋状の紋が目明瞭に残る。	波佐見系
25	製作地不詳	灰落とし?	5.0 7.1 5.4	凹凸の装飾を施した粘土板を底部上に巻き付けて成形する。接合部の凹凸文様は潰れる。口縁部と内面の調整は板を巻き付けた後に行っており、凹凸上に返りができている。外面一カ所に鉄泥で木、花?を白土で下絵付けする。底部外面を除き極薄く透明釉を施す。	38-Q-17G。口縁部の欠けはない。関西系。
26	軟質陶器	すり鉢	(32.0) - -	体部は直線的に開き、口縁部は外傾する。端部中央は窪む。内面に3本1単位のすり目を施す。	中世から近世
27	軟質陶器	すり鉢	- - (9.8)	体部下位片。内面に7本1単位のすり目を施す。内面体部下位使用によりすり減る。	中世。26と同一個体の可能性高い。
28	肥前磁器	赤絵人形	4.0 3.7 1.9	力士風の人形。背中に空気抜き穴一カ所。髪の毛は黒、裾の数は黄緑、他は赤色の上絵付け。足は欠損する。	

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
29	在地系?土器	人形		前後の型による型作り。彩色はない。型が摩滅しているせいか顔が不明瞭である。器表には型離れを良くするための粉が付着する。着衣表現がなく、口吻表現がなされていることから猿であろうか。	
30	軟質陶器	内耳鍋	(33.0) - -	口縁部外傾し、端部は平坦面を有する。内面口縁部下に段を有する。燻し焼成。	外面煤付着。中世。
31	軟質陶器	内耳鍋	(36.0) - -	口縁部外傾し、端部は平坦面を有する。内面口縁部下に段を有する。耳は一カ所残存。燻し焼成。	外面煤付着。中世。
32	在地系土器	風口		木口と両側面は剥がれる。断面は還元炎であるが、器表面は酸化炎である。二次的か否かは不明。	焔炉部品
33	石製品	砥石	(10.8) 3.7 4.4	一端を欠く、不定形で1面使用、磨り面は3分される。	砥沢石
34	石製品	砥石	(11.7) 2.9 3.7	1面使用、中央部厚く両端が薄くなる。整形痕見られる。	砥沢石
35	石製品	砥石	(7.6) 4.7 2.0	一端を欠く、両面使用。	珪質粘板岩
36	石製品	砥石	(8.7) 4.0 2.3	やや扁平で2面使用、中央厚く両端が薄くなる。	砥沢石
37	石製品	砥石	(10.2) 2.7 2.1	1面使用、使用面波打つ、中央部厚く両端が薄くなる。	砥沢石
38	石製品	砥石	10.0 4.2 3.9	3面使用、使用面一様でなく、端部に欠けが多い。	砥沢石、畠面出土
39	石製品	砥石	(10.9) 2.9 3.3	1面使用、中央部厚く高まり、両端が薄く磨り減る。	
40	石製品	砥石	(5.3) 3.1 2.3	両端部欠く。	砥沢石
41	石製品	砥石	(6.7) 4.0 3.2	4面使用、細い線状の使用痕顕著。	デイサイト
42	石製品	砥石	(8.2) 3.3 2.2	一端を欠く、両面使用。	砂岩
43	石製品	砥石	(6.1) 3.1 3.1	両端部欠く。断面方形で両面使用、側面に撃状整形痕残る。	砥沢石、溝出土
44	石製品	砥石	(7.7) 3.2 2.7	両面使用、一端がやや薄くなる。	砥沢石
45	石製品	砥石	(3.8) 3.2 2.6	端部片、1面使用。	砥沢石、畠面出土
46	石製品	砥石	(4.6) 3.7 (6.0)	剥離片、磨り面は極めて平滑。	珪質粘板岩
47	石製品(挽き臼)	上臼	30.0 10.4 -	2つに割れたものが接合。片減りしている、目は不鮮明。	粗粒輝石安山岩
48	石製品	砥石	(4.5) 2.8 1.8	破片、1面使用。他面には線状の整形痕見られる。	砥沢石、畠面出土
49	石製品	砥石	(4.6) 2.4 1.6	破損品、3面使用。線状の磨り痕あり。	砥沢石
50	鉄製品	刀子	(8.1) 1.9 0.5	背部に関を有す。先端部を欠く。	
51	鉄製品	刀子	(8.5) 1.3 0.6	基部を欠く、断面三角形。	
52	鉄製品	火打ち金	6.9 2.4 0.4	上部中央が山状に張り出し、紐通し穴を持つ。	
53	鉄製品	刀子か	9.1 2.4 0.3		
54	鉄製品	板状製品	2.8 2.3 0.3	薄い板状の製品。	
55	鉄製品	板状製品	2.6 2.9 0.4	薄い板状の製品。	
56	鉄製品	環状製品	2.7 0.5 -	断面やや扁平である。	
57	鉄製品	刀子	(5.1) 0.9 0.4	端部を欠く、厚みがある。	
58	鉄製品	板状製品	3.3 2.3 1.6	細長い板状のものが結び目状を呈す。	
59	鉄製品	釘か	6.3 0.8 -	両端が尖り、中央部に環が付く。	
60	鉄製品	板状製品	5.7 0.6 1.1	両端を欠き、細長い板状で端部が曲がる。	
61	鉄製品	板状製品	(7.5) 0.5 1.2	両端を欠く。細長い板状で片面はやや丸みを呈す。	
62	鉄銭	不明	2.8 0.15 -		
63	銅銭	寛永通宝			
64	銅銭	紹聖元宝			初鑄年1094
65	銅銭	熙寧元宝か			初鑄年1068
66	銅銭	永樂通宝			初鑄年1411
67	銅銭	元豊通宝			初鑄年1078
68	銅銭	寛永通宝			
69	銅銭	銭名不明		錆化著しい	
70	銅銭	銭名不明		錆化著しい	

第7節 近世II期（1面）

調査区全域において良好な状態で検出されている。天明3年（1783）に浅間山の大噴火に伴って発生した泥流によって本面は覆い尽くされ、泥流の直下には直前に降下した浅間山の火山灰（As-A）も5cm前後の厚さで全面に残されていた。遺構は厚さ1～2mの泥流を取り除くとこの火山灰（軽石）にきれいに覆われた状態で姿を現した。ただし建物遺構部分については軽石層は途切れ、泥流層が覆っていた。

検出された遺構は当時の状況がそのまま残された状況で、建物に関しては上部は殆ど失われてはいたものの、土壁や柱の痕跡も残っており、極めて遺存状況は良好であった。検出された遺構の種類は建物跡16棟（便所6棟を含む）、井戸2基、道6条、畑、溝8条、土坑4基、その他土手等である。

1. 建物跡

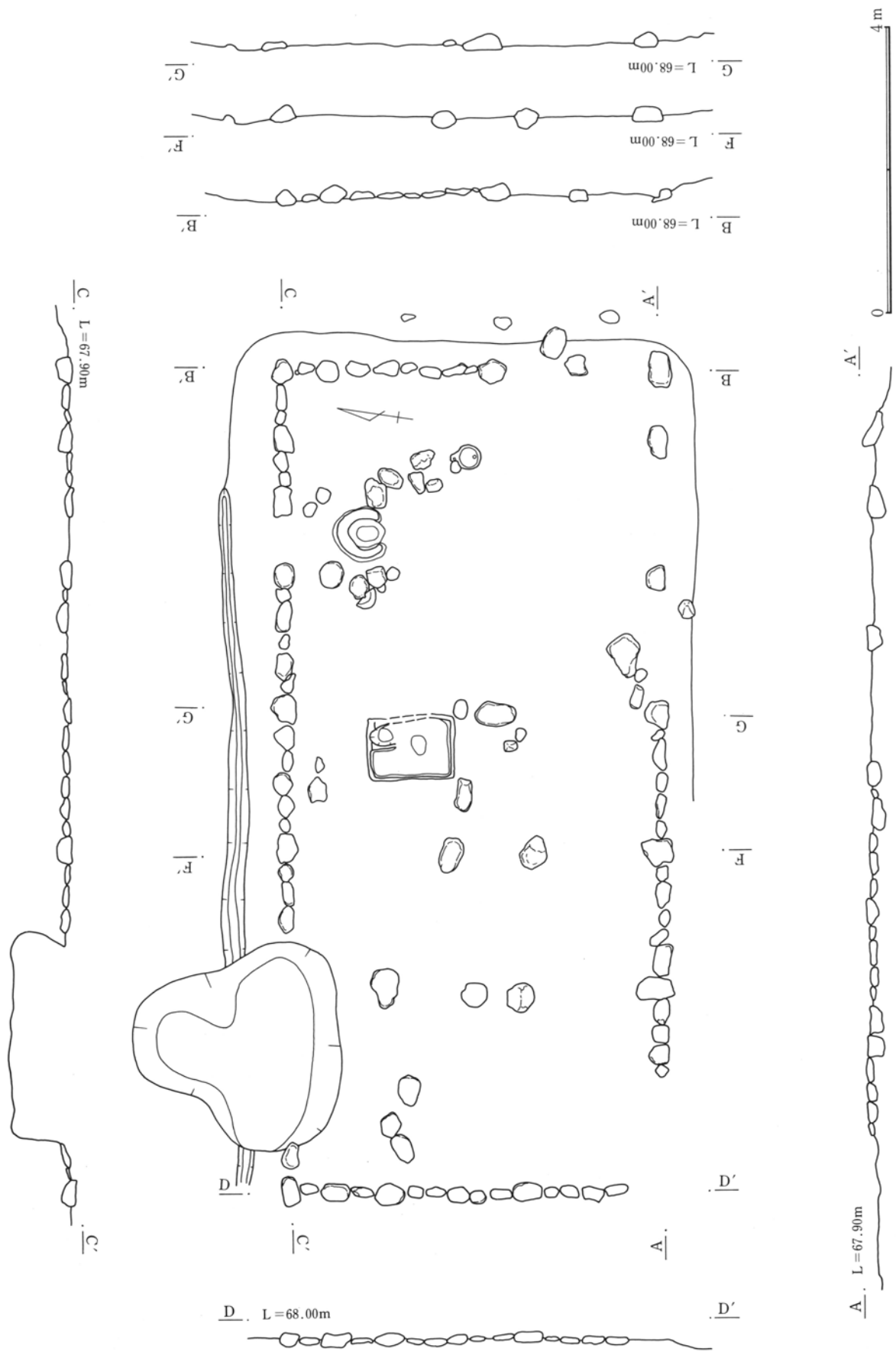
II区1号建物跡（第87～89図、P L 19・59・60・74）

28N・O-5～7グリッドに位置する。II区のほぼ中央にあり、東西に梁を持つ。規模は東西6間(11.4)、桁行3間(5.2)で東側は土間で西側は板の間であったと考えられる。土間は黄褐色の砂質土でかなり締まっていた。土間の北側に竈が作られている。規模は幅75cm、長さ80cmで現状での高さは25cm程である。締まりのある茶褐色土で馬蹄形状に築かれている。検出時には内部に泥流が入り込んだ状況であった。

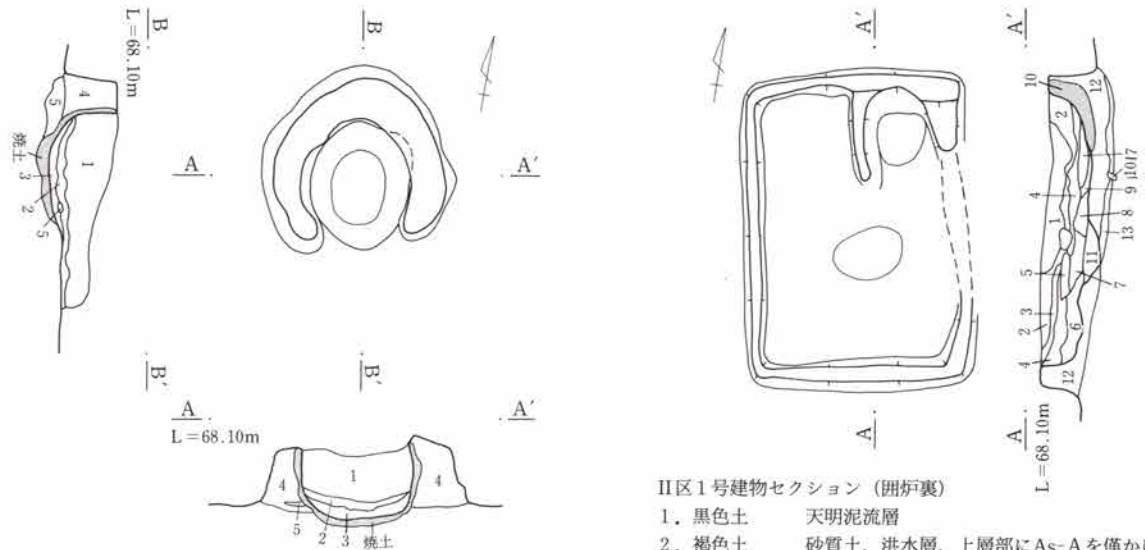
内面は火床面は土間部分よりやや下がり、内壁面は橙褐色に焼けて硬くなっている。周囲には礫や陶磁器類石臼などが多く出土している。

表8 中町遺跡1面建物跡一覧表

建物番号	位置	規模	間取り形式	柱間	構造	推定建造年代	備考
II区1号建物	28N・O-5 ～7G	3間×5間 5.2m×11.4m	広間型	190cm	平屋建寄せ棟	17C後半	N-10°-W
II区2号建物				便所			
II区3号建物	18K・ L17・18G	1.26×2.1間 2.4m×4.0m					N-2°-W
II区4号建物	28L・M- 15～17	3×5間 5.2m×9.5m					N-4°-W
II区5号建物				便所			
II区6号建物	28K-18 ・19G	2.5×4間 4.4m×6.8m					N-5°-E
II区7号建物				便所			
VI区1号建物	28N・O- 8～10G	2(3.5)×5間 3.8(6.65)m×9.5m					N-8°-E
VI区2号建物	48Q・R- 1～3G	2.3×6間 4.4m×12m					N-3°-E
VI区3号建物	38R・S- 17～19G	3×6間					N-3°-E
VI区4号建物				便所			
VI区5号建物	48S-1・2 G	-×3間 -×5.7m					
VI区6号建物	38O～P- 19・20G	3×3(2.5)間					N-5°-E
VI区7号建物	48P・Q- 3G	1.26×2.3間 2.4m×4.4m		便所			N-0°
VI区8号建物							
VI区9号建物							



第87图 II区1号建物跡



II区1号建物竈

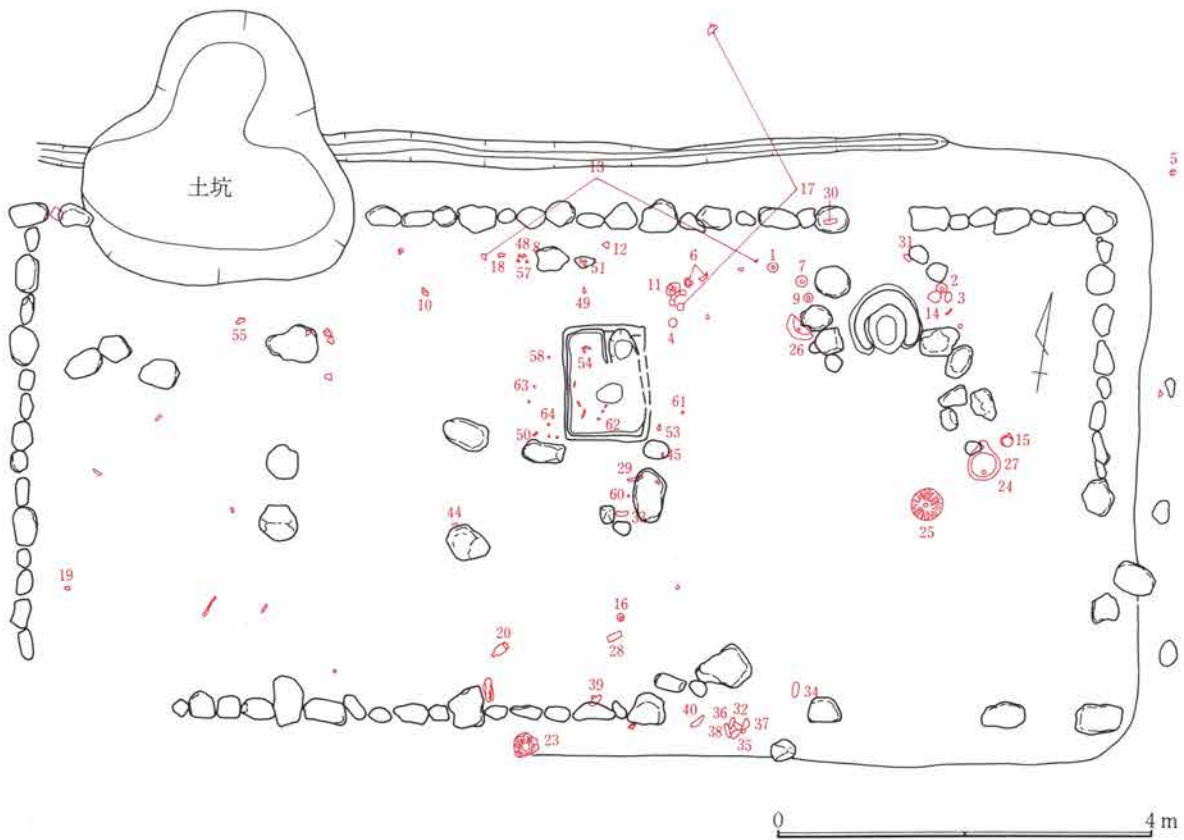
1. 灰褐色土 微砂層
2. 灰褐色土 やや暗い色調で粘性持つシルト層
3. 赤褐色土 焼土、灰を含み軟質
4. 灰褐色土 竈の構築材、砂質だが締まりあり
5. 黒色土 砂礫土 (As-A泥流)

II区1号建物セクション (囲炉裏)

1. 黒色土 天明泥流層
2. 褐色土 砂質土、洪水層、上層部にAs-Aを僅かに混じる
3. 暗灰色土 やや粘性を持つシルト層
4. 黒色土 炭化物
5. 灰黒色土 灰を主体とし、少量の焼土含む
6. 灰黒色土 炭化物、焼土粒の混土
7. 黄灰褐色土 少量の焼土含む砂質土
8. 黄灰褐色土 7と似るが粘性弱い
9. 黒褐色土 焼土含む黒色土
10. 赤褐色土 焼土層
11. 明赤褐色土 焼土
12. 灰褐色土 やや粘質で締まりある砂質土 (囲炉裏構築土)
13. 黒色土 炭化物層

0 1m

第88図 2区1号建物跡囲炉裏・竈



第89図 II区1号建物跡遺物分布図

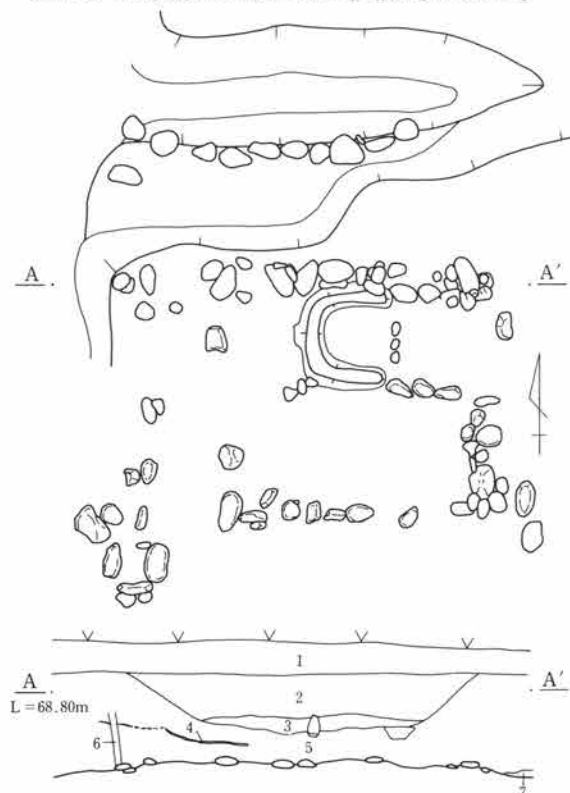
囲炉裏は中央やや北に位置している。南北にやや長い長方形に粘土で築かれている。規模は125×95cmである。現状での高さは20cmを測る。壁の厚さは平均8cmである。内部には上面にAs-A泥流がレンズ状に堆積し、その下には灰、炭化物の層がおよそ20cmの厚さに堆積していた。最下層面には橙褐色の焼土が見られる。

遺物は囲炉裏、竈周辺に多く見られ、竈周辺には陶磁器類が多く、囲炉裏周辺には煙管や銭類が多く出土している。また土間部分には石臼が出土しているが、上臼は土に埋まった状態で出土している。

II区2号建物跡(便所)(第90・130図、P L60)

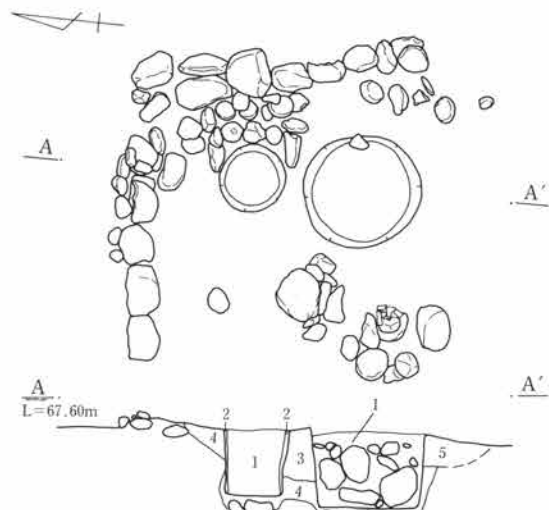
28M・N-4グリッドに位置する。II区1号建物の南東に約6m程離れて作られている。礎石は方形に配され、規模は2.3×2.3mで西および南側は石列が見られない。

大小2つの円形の土坑があり便槽と見られる。



II区3号建物A-A'

1. 表土(攪乱が著しい)
2. 表土 As-A泥流混土
3. 灰褐色土 微砂土、洪水層
4. 黄褐色土 粒子状の黄褐色土層、有機質を含む(床板痕)

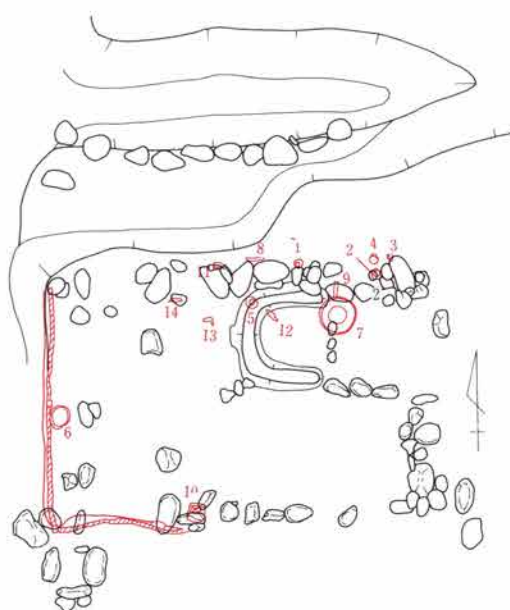


II区2号建物内

1. 黒色土 As-A泥流
2. 黄褐色土 木質痕
3. 灰褐色土 砂を含み締まりあり
4. 灰褐色土 少量の炭化物含み締まりあり
5. 灰褐色土 黒色土ブロック含み締まりあり

0 2m

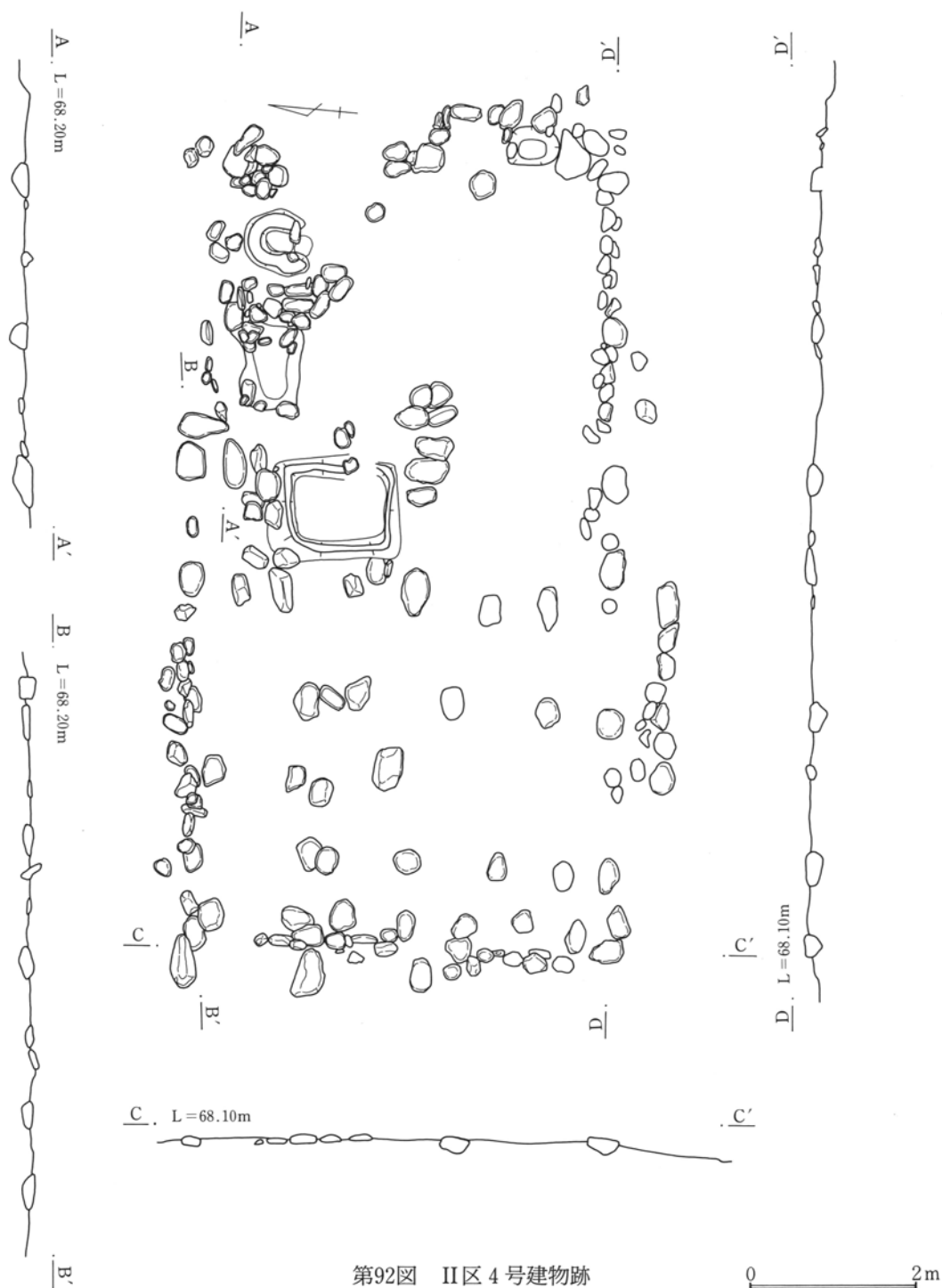
第90図 II区2号建物跡



5. 黒褐色土 As-A泥流層
6. 灰白色土 As-A
7. 明茶褐色土 土壁、微砂土。植物痕(藁か)見られる

0 2m

第91図 II区3号建物跡遺物分布図

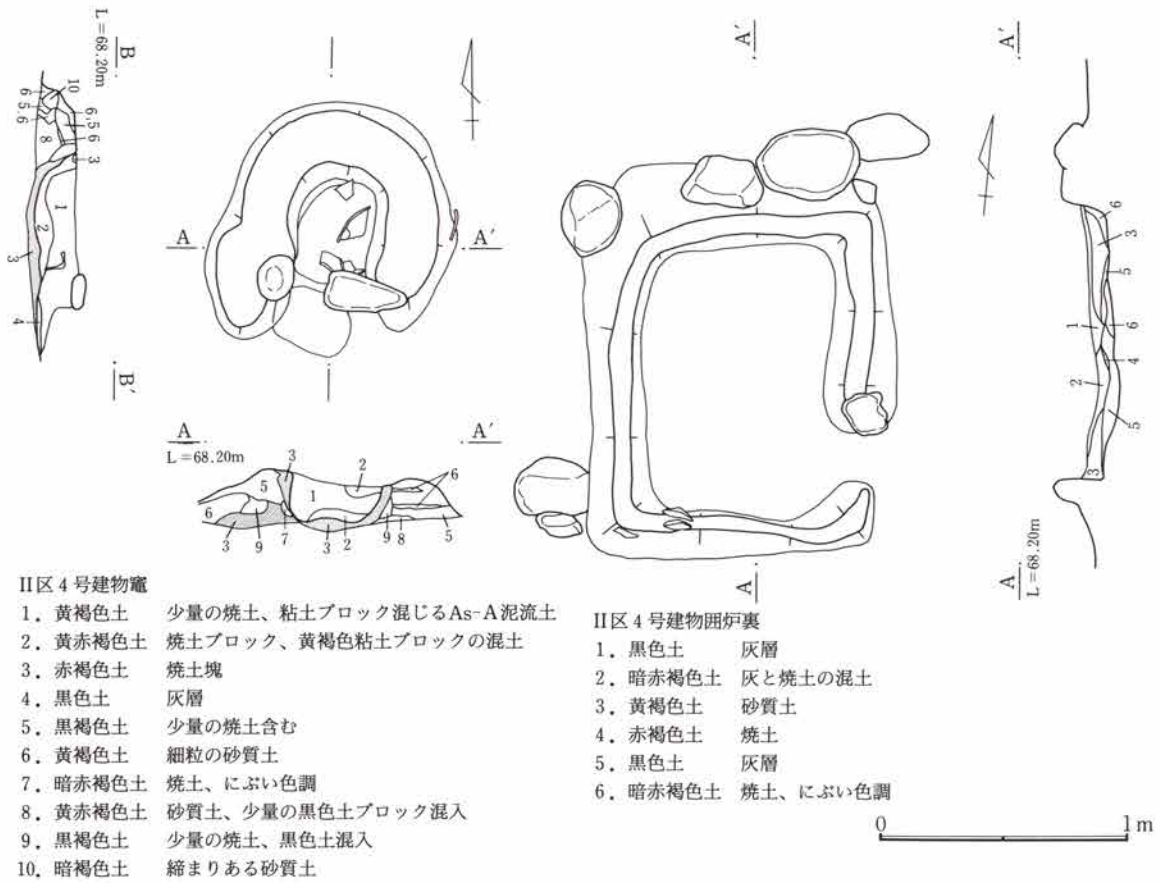


第92図 II区4号建物跡

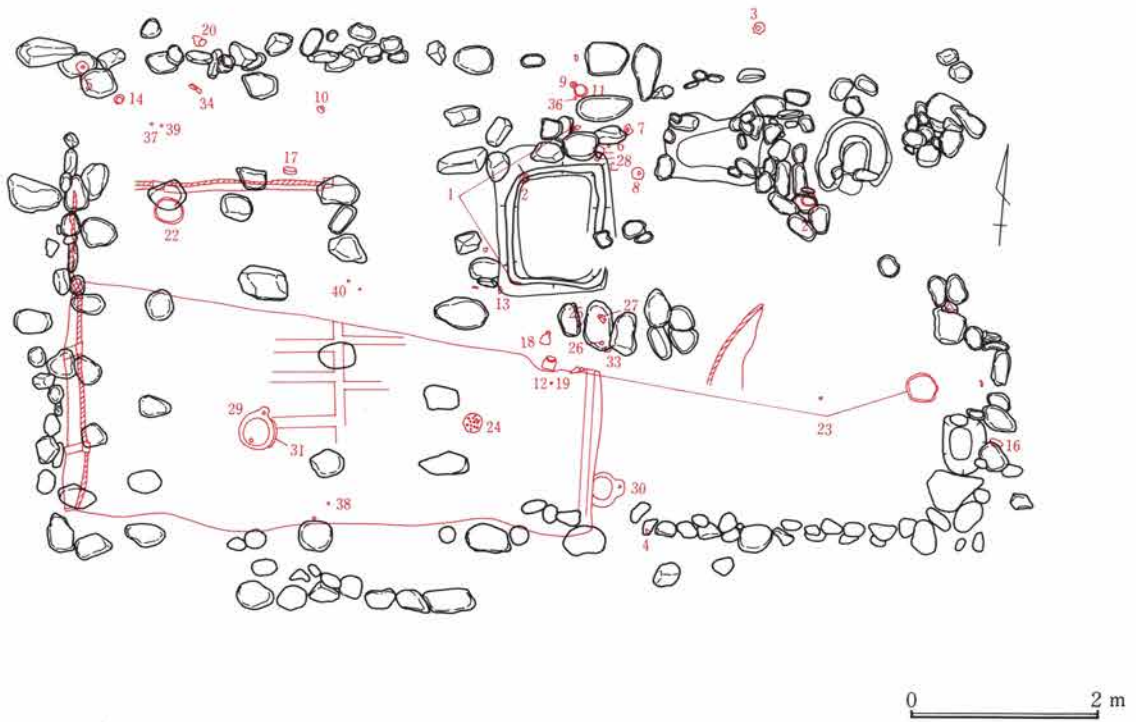
南側のものが大きく、径約90cm、深さ60cmである。北側のものは径50cm、深さ50cmである。いずれも木桶が埋め込まれていた痕跡が見られる。便槽はAs-A泥流で埋まっていた。

II区3号建物跡 (第91図、P L19・60)

18L-17・18グリッドに位置する。調査区の南東部分でII区2号溝が南端でL字に折れる場所にある。規模は東西4.0m×南北2.5mで東西に長い小型の建物である。入口を南東に持つと見られる。北寄り中央に囲炉裏が見られ、囲炉裏から西側が部屋、東側が土間と考えられる。また本建物は埋没断面において土壁および板の間の痕跡が確認されている。泥流中の板の間の高さ部分において徳利などの遺物が出土している。



第93図 II区4号建物跡囲炉裏・竈



第94図 II区4号建物跡遺物分布図

II区4号建物跡 (第92～94図、P L20・60・61・75)

28L・M-15～17グリッドに位置する。本建物も調査工程上二度に分けて調査が行われている。II区の西寄り、5号道と5号溝に挟まれた一画にある。北側は数十cmの比高差をもって一段高くなっている。東および南には近接して畑が作られている。建物の規模は、東西間口9.52m、南北5.15mである。

南側ほぼ中央が入口と思われ、右手が土間、左手が板の間と考えられる。土間の北東隅に竈が検出されている。上部がやや削られているが馬蹄形に粘土が廻り、焚口の両側には細長い川原石が袖材として用いられている。規模は長さ90cm、幅約90cmで現状での高さは25cmである。内部には焼土を僅かに混入した泥流が入り込んでいた。下層には焼土層が見られ焚口部には灰層が検出されている。

土間部分は比較的硬く締まっていた。板の間部分については検出時に、根太の痕跡を認めている。また西壁についても高さ60cm程であるが検出されている。中位で折れ内側に倒れこんだ状況が確認されている。壁の厚さは3～4cmで淡黄褐色の微砂土である。また柱の痕跡も確認されている。壁については北西部分の納戸を仕切っていたと思われる部分についても検出されている。

囲炉裏は中央やや北に作られている。やや南北が長い長方形で、規模は南北1.25m、東西1.1mである。現状での高さは約15cmである。北側と西側にやや大きな石が据えられ、これらを押さえにした形で粘土を長方形に廻して作っている。内部は泥流に覆われていた。泥流下には灰層、焼土層、砂層が互層をなして堆積していた。

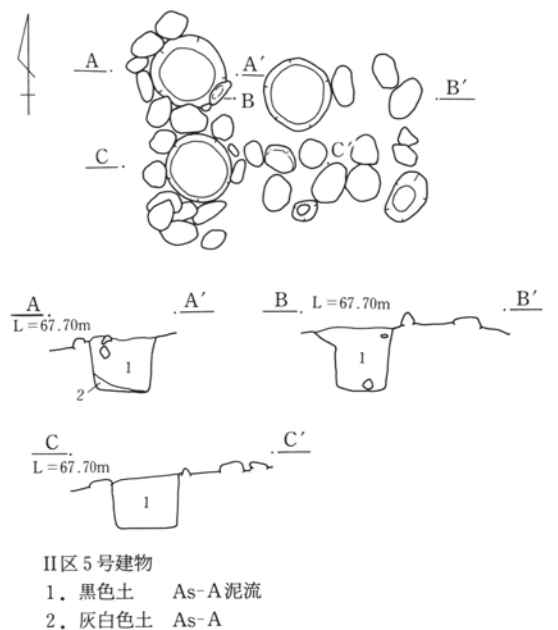
出土遺物はあまり多くはなかったが碗や徳利などのほか鬚グライなど見られる。また焜炉、火鉢なども出土している。石器類は石臼が板の間にセットで置かれていた。また鉄が一点出土している。

II区5号建物跡(便所) (第95図)

28L-13グリッドに位置する。II区4号建物の東側、3号盛土の東に並んで検出された。東西約2m、南北1.4mの規模で石が据えられている北側が入口と思われ石の並びは見られない。便槽と思われる土坑が3箇所検出されている。規模はほぼ同じで径約50cm、深さは40～50cmである。いずれも木桶が埋設されていたと見られる。3基とも泥流で埋没していたが、北西に位置する土坑の底部にAs-A軽石の堆積が確認されている。このことからこの土坑については屋外に位置していたか、壁などの遮蔽物がなかったことが考えられる。

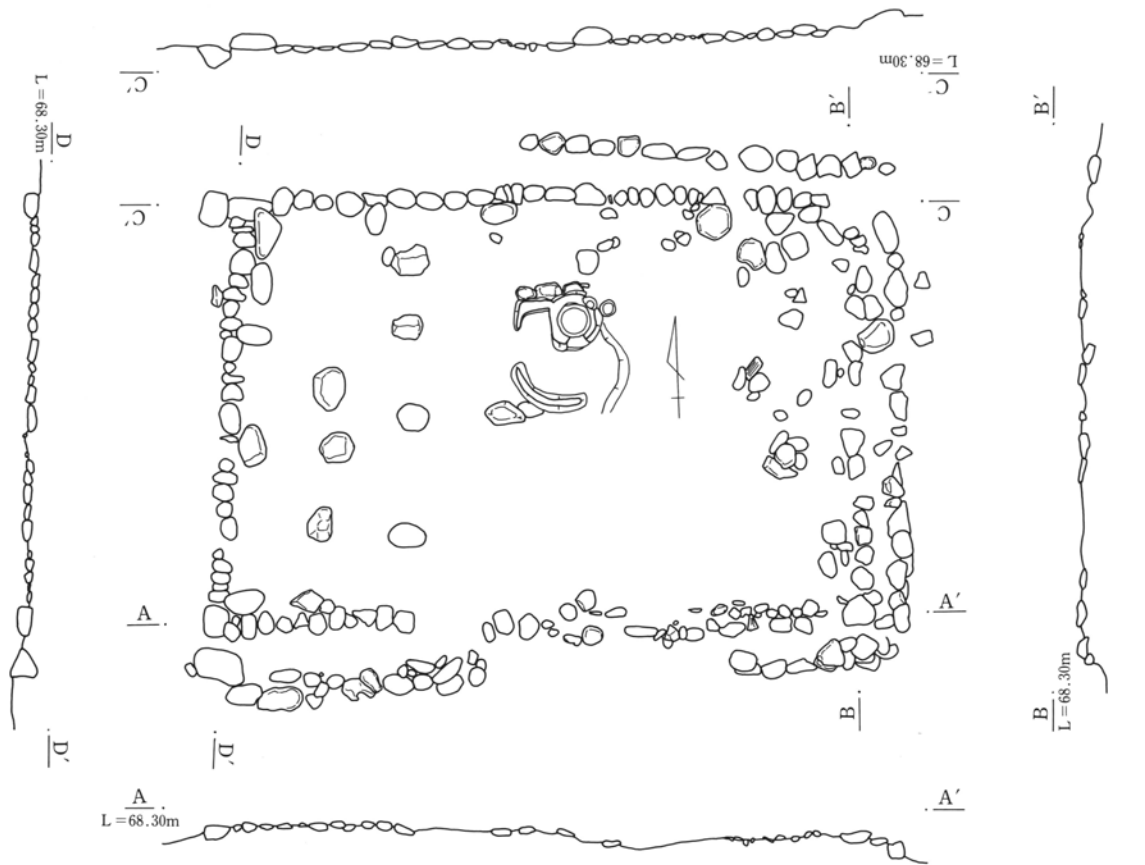
II区6号建物跡(第96～98図、P L21・22・61～64・75)

II区の西寄り、28K-18・19グリッドに位置する。本遺跡で検出された建物中最も利根川寄りに位置している。西側には北から延びている5号溝が短く折れて終わっている。北側は1m程の高まりを持つ4号土手が近接する。建物の規模は間口6.53m、奥行き4.34mである。南側に入口、入って右手が土間、左が板の間となる。ほぼ中央に竈が設けられている。竈の西側に囲炉裏状に囲った粘土の高まりが見られ



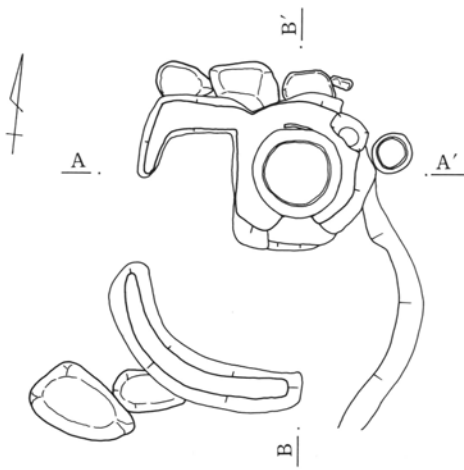
0 2m

第95図 II区5号建物跡

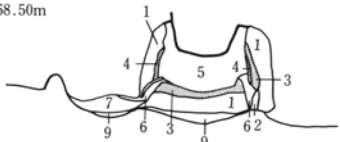


第96図 II区6号建物跡

0 2m



A
L=68.50m

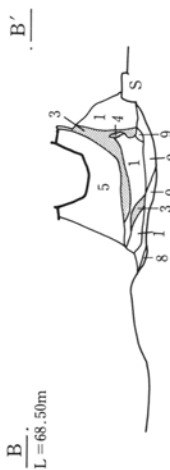


0 1m

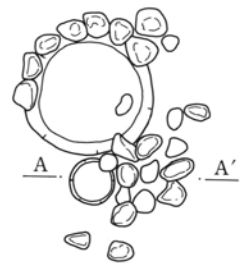
II区6号建物竈

1. 灰黄色土 粘質土、竈構築材
2. 灰黄色土 1と同質だが混入物見られる
3. 暗赤褐色土 焼土
4. 橙褐色土 焼土(良く焼けている) 竈内壁
5. 黒色土 As-A泥流
6. 黒色土 灰層
7. 黒色土 灰層、締めりあり
8. 黒色土 炭化物層
9. 暗赤褐色土 焼土

第97図 II区6号建物跡囲炉裏



B
L=68.50m

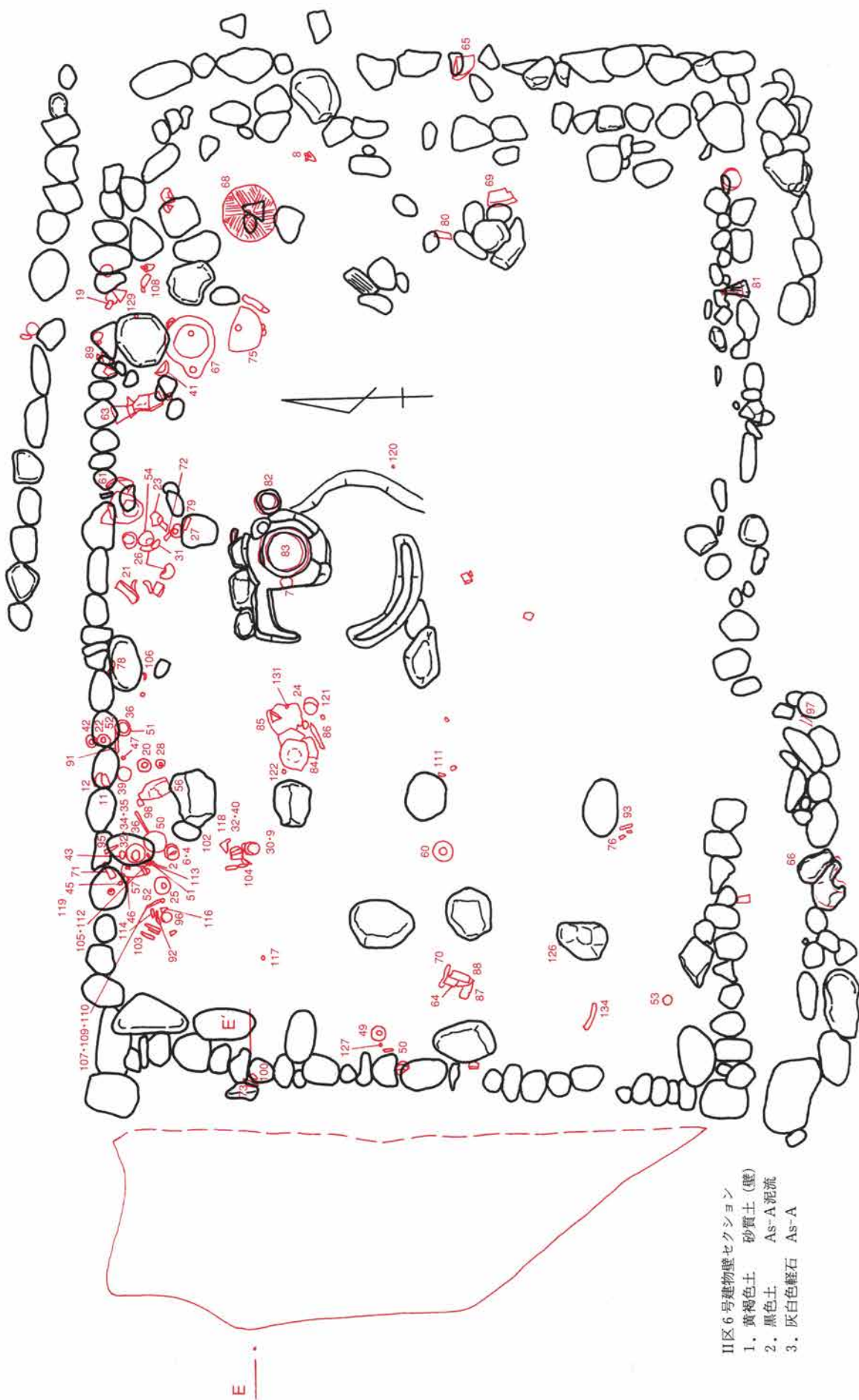


A
L=67.80m

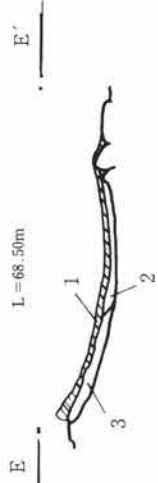
- II区7号建物
1. 黒色土 As-A泥流
 2. 灰白色土 As-A

0 2m

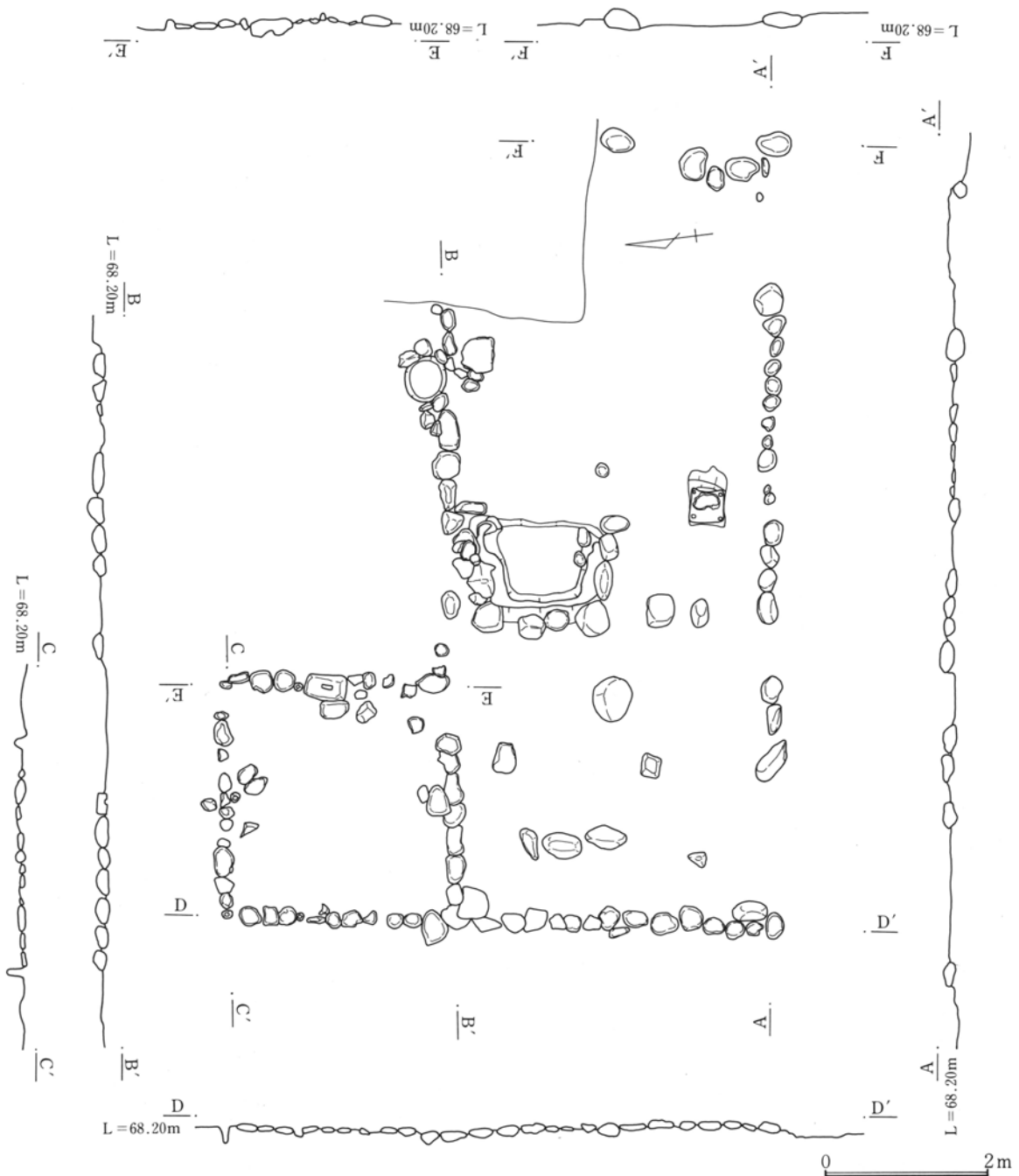
第98図 II区7号建物跡



II区6号建物壁セクション
 1. 黄褐色土 砂質土(壁)
 2. 黒色土 As-A泥流
 3. 灰白色軽石 As-A



第99図 II区6号建物跡遺物分布図

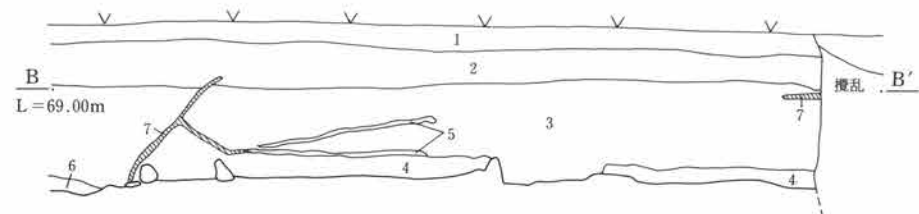
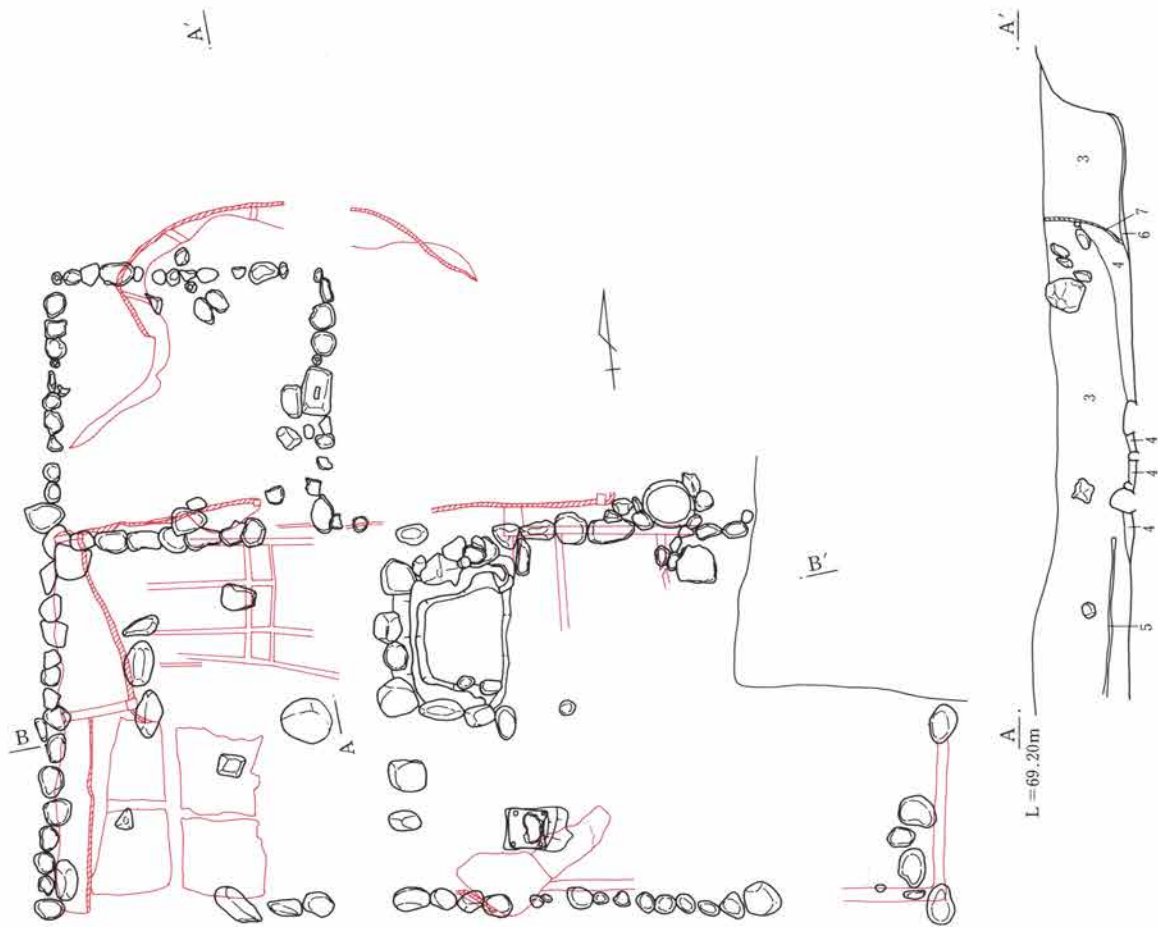


第100図 VI区1号建物跡

る。竈には鉄釜が掛かった状態で出土しており、その右脇下には茶釜（火消し壺か）が出土している。竈はやや粘質の灰黄褐色土で作られており、内部にはAs-A泥流が入り込んでいた。内壁は良く焼けており焼土化が顕著である。

また、囲炉裏状に囲われた内部には灰層が厚く堆積していた。土間部分は入口から竈焚口部にかけて大きく窪んでおり、人の出入りが頻繁であったことが考えられる。

出土遺物は多く、建物全域において出土しているが、特に竈の北側部分や建物の北西部分において顕著である。種類も様々で陶磁器類の他、石臼や砥石などの石製品、鍋、釜、包丁、さらには火打ち金、煙管、錠、



VI区 1号建物セクション

- 1. 表土
- 2. 表土 (泥流土を多く混入)
- 3. 黒色土 As-A泥流。大形の火山礫含む
- 4. 黒色土 As-A泥流、1よりも細粒、礫の混入少ない
- 5. 黒褐色土 砂質土層 (床板痕)
- 6. 灰白色土 As-A
- 7. 黄褐色土 締まりのある砂質土 (壁)

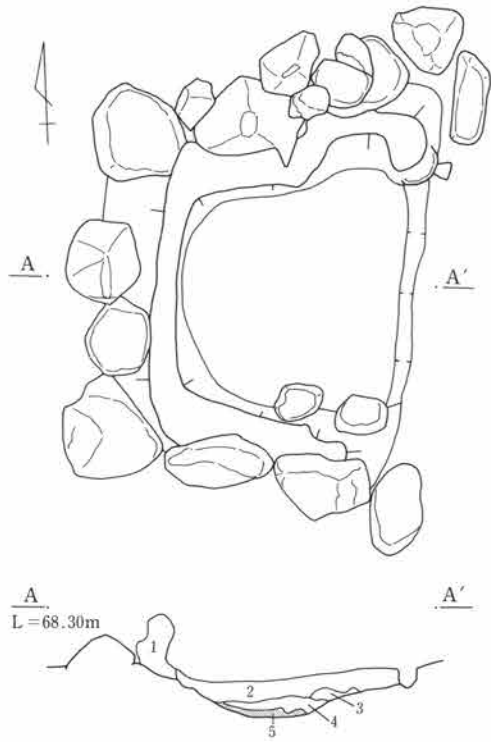


第101図 VI区 1号建物跡壁・床材出土状況

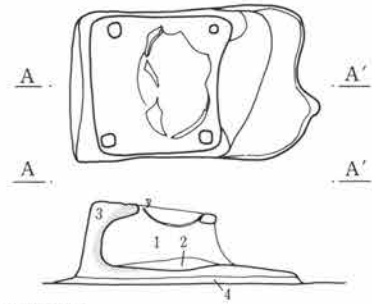
銅（鉄）銭などが見られる。

II区 7号建物跡（便所）（第99図）

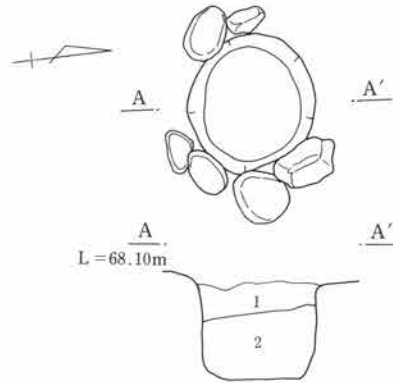
28K-17グリッドに位置する。II区7号建物の東に極めて近接して作られている。大小の円形土坑が南北に並び、大きい土坑の周囲および小さい土坑の東に川原石が見られる。規模はそれぞれ径100cm、35cmで深さは70cm、40cmである。いずれの土坑もAs-A泥流で埋まっているが、小さい土坑の最下部にはAs-A軽石の堆積



- VI区1号建物囲炉裏
1. 灰黄色土 粘性土
 2. 灰黑色土 灰層、(炭化物、灰層が互層をなす)
 3. 黄褐色土 灰層、黄色粘質土主体とする
 4. 灰黑色土 灰、焼土の混土
 5. 赤褐色土 焼土層



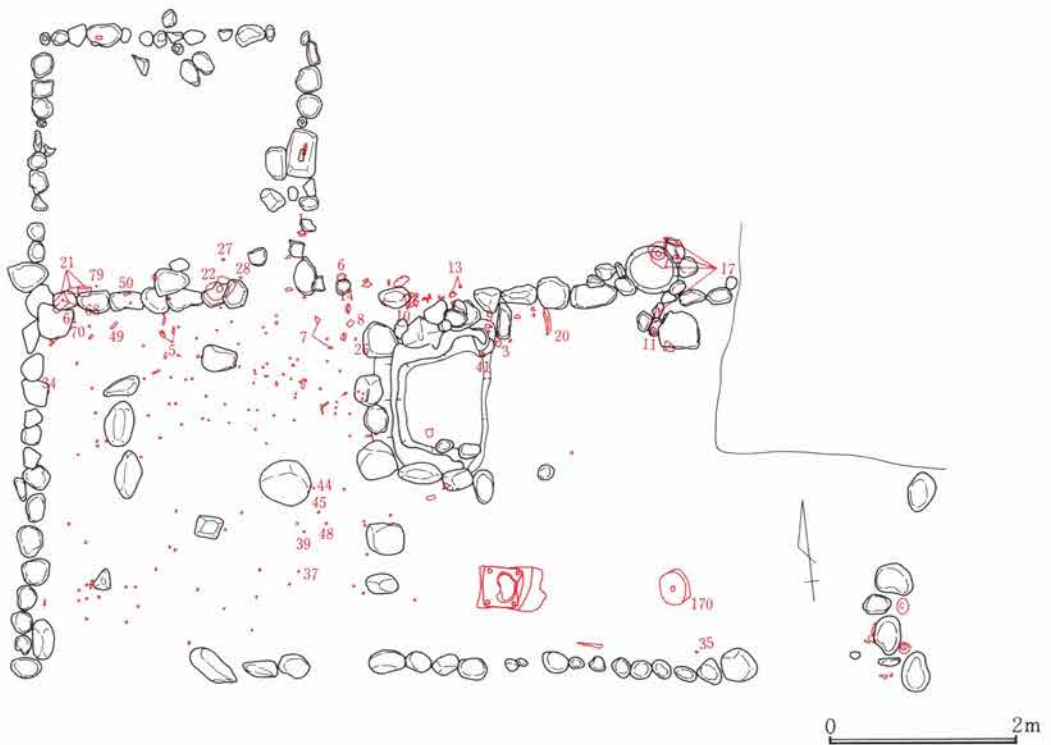
- VI区1号建物竈
1. As-A泥流
 2. 灰層
 3. 黄褐色粘土 (竈構築土)
 4. 灰褐色土 やや締めまりのある砂質土



- VI区1号建物排水坑
1. 黒色土 As-A泥流
 2. 灰白色土 As-A

0 1m

第102図 VI区1号建物跡囲炉裏・竈



第103図 VI区1号建物跡遺物分布図

が見られた。簡単な上屋施設があったものと考えられるが明確な構造は不明である。

VI区 1号建物跡 (第100～103図、P L23～26・64・65・76)

IV区の東寄り、38N・O-8・9グリッドに位置する。南と東側に若干の庭を持ち、北側は約1mほど高くなっている。建物は北西部分にヘヤを持つ曲り屋で、この形状の建物は調査された建物の中では唯一である。北東隅部分は後世の攪乱坑により壊されている。規模は東西間口9.58m、奥行き6.72 (3.84)mである。本建物はVI区の調査開始後最初に検出された建物であったが、南側部分が現堤防の下に掛かっていたために、北側と南側の2回に分けての調査となった。

掘り下げを行ってゆく過程で壁の存在が確認されたため、その状態を残す形で調査を進めた。その結果、西側の壁および北側の壁が良好な状態で検出された。西壁は礎石から立ち上がり、厚さ約4cm、高さ約1mが残存していた。また柱に関しても、材そのものは失われてしまっていたものの、柱部分に細かい砂質土が入り込んでいたために形状が明瞭に残っていた。断面の計測では一辺約9cmである。西壁は上流から押されたように東側にやや倒れ掛かり、中位で折れて建物の内側に倒れこんでいた。また北側のヘヤの壁については泥流の勢いに押され、柱ごと大きく折れ曲がり、建物の外側に押し出された状況が観察された。

また建物内部を仕切っていた壁も明瞭に残っていた。さらに泥流中に板の間の痕跡を残す有機質の層が地面から約25cmの高さで水平に残っていた。

建物内の施設については、中央やや北寄りに囲炉裏が設けられている。やや南北に長い長方形であるが北東部分に小さなかまど状の作りを持つ張り出した部分が付設する。囲炉裏の規模は張り出し部分を含め1.4×1.0mで現状での高さは約20cmである。構造は周囲に30cm前後のやや大きな石を並べ押さえとし、長方形に粘土を廻して構築している。内部は泥流で覆われた下に灰、炭化物の互層が堆積し、最下層に焼土が見られる。また置き竈が入り口の左手に検出された。縦90cm、横60cm、高さ約30cmの大きさで、鍋を置く部分は60cmの方形で、四隅に竈を作る際の芯材の跡と見られる3・4cmの穴が空いている。かなり壊れた状態であったが鉄鍋が掛かった状態で出土している。出土焚口を東にしている。内部には泥流が入り込んでいたが、火床面には灰層が残っていた。土間の北側屋外に径50cm、深さ40cmの排水坑が検出され、内部には底から半分以上の高さまでAs-A軽石の堆積が見られた。

出土遺物は碗や徳利などの陶磁器類をはじめ鉢や焙烙、さらには鉄・銅製品が多く出土している。中でも床下に蒔かれたように多量の銭が出土しており注目される。

VI区 2号建物跡 (第104～107図、P L27～29・66・67・73・76・77)

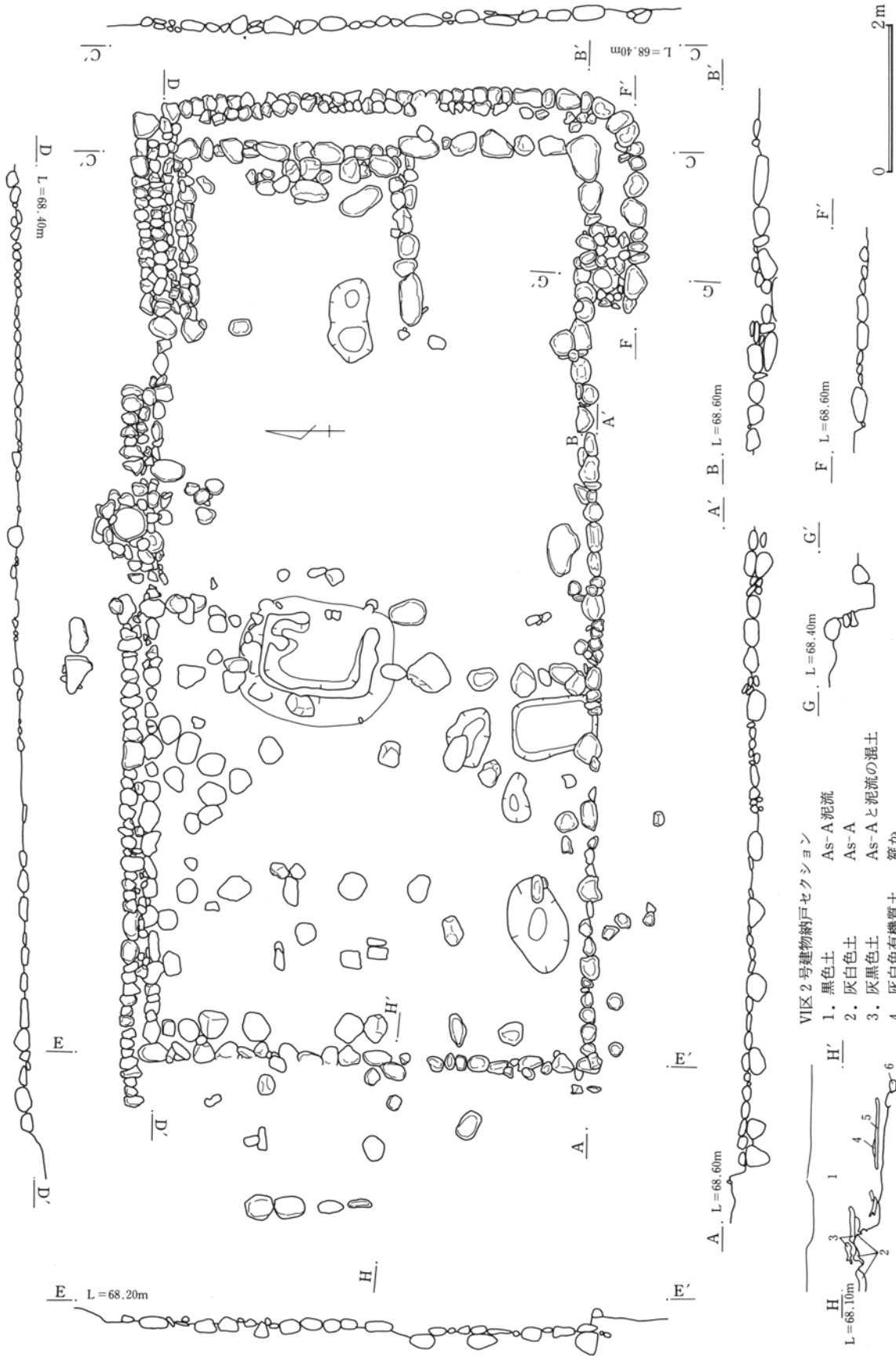
48Q・R-1～3グリッド、VI区の西端に位置する。長方形に礎石が配され、規模は間口12.46m、奥行き5.8mで、西側に1.9m程に作り出された内倉と思われる付属部分が見られる。

屋敷廻りは西側はわずかに高まりを持った土手を境として南北に走る道である。北側は平坦で、数m離れてVI区5号建物が位置する。北西部は南北に走る浅い溝に画された極めて不明瞭ではあるが畑が認められている。東側は南北に走る道となっている。北東部道脇にはVI区1号井戸、VI区1号土坑が並んでいる。

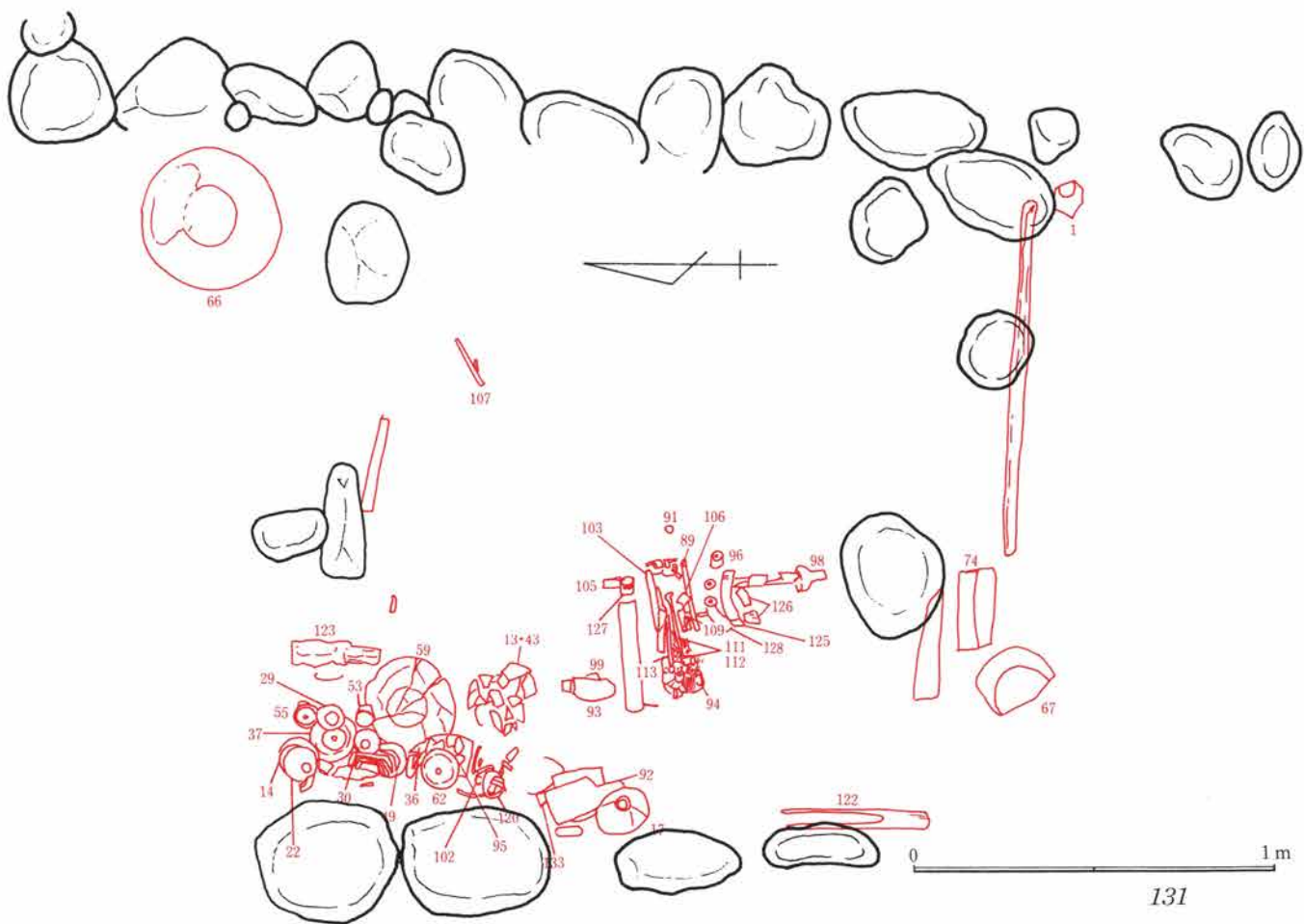
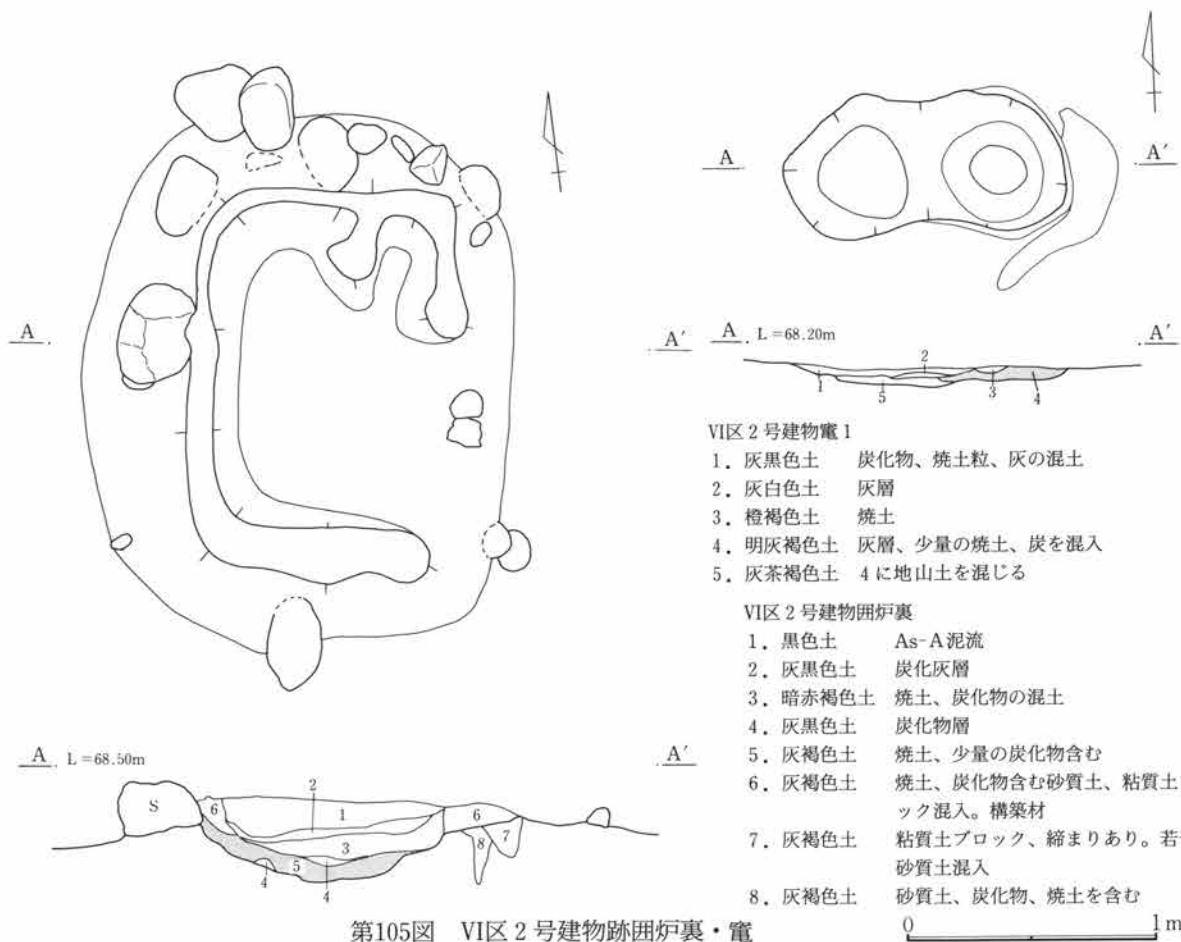
南側は庭で平坦で硬く締まっている。庭の東寄りには土坑VI区8号建物(便所)、盛土遺構が見られ、西には納屋と思われるVI区7号建物が位置している。

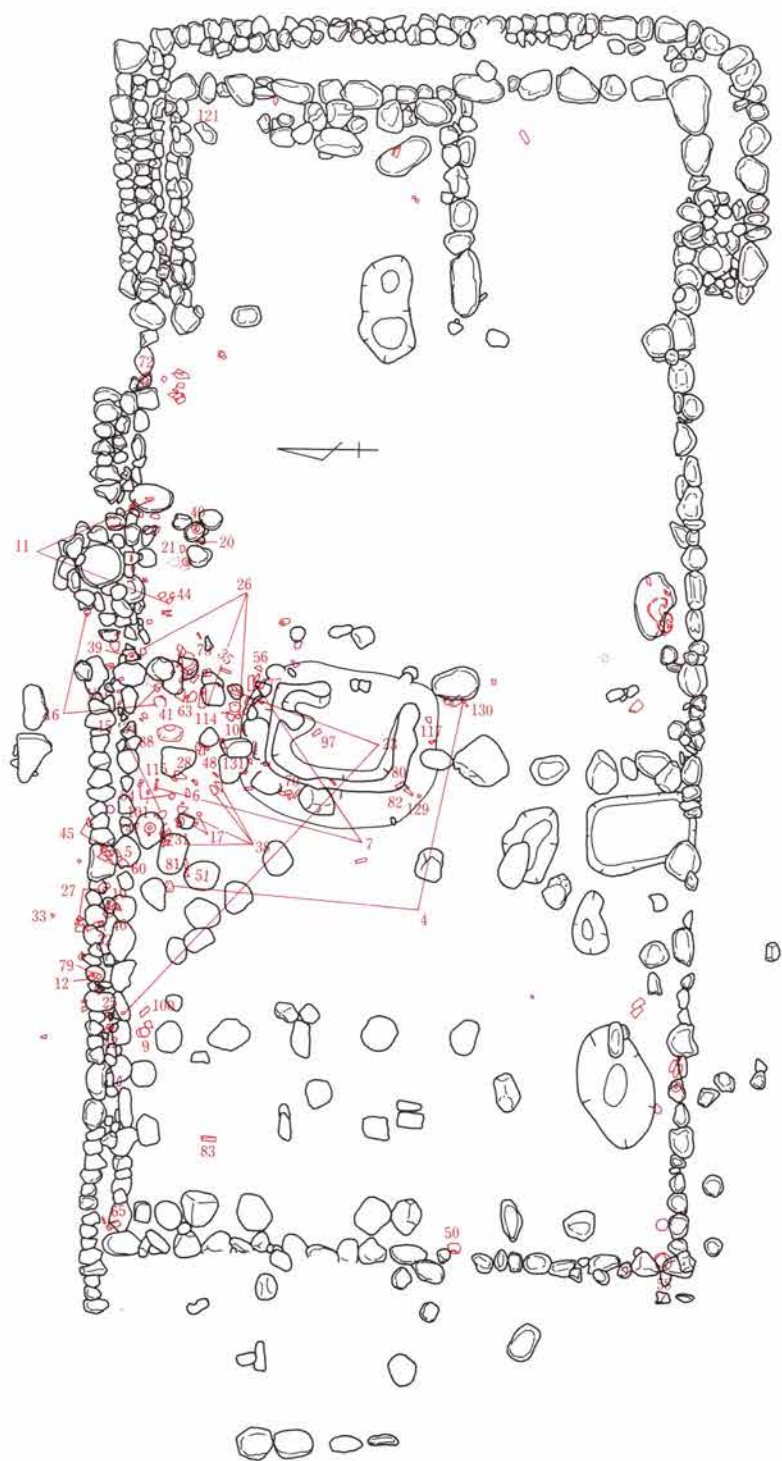
本建物もVI区1号建物同様現堤防に掛かっていたために北側と南側と2回に分けての調査となった。検出された建物中最も規模が大きく、付属すると考えられる遺構も多く中心的な位置にあった建物と考えられる。礎石は東側と北側部分については2列ないしは3列に廻されている。

内部施設は南側に入口、建物の右手ほぼ半分が土間と見られ硬く締まっている。南東隅に厩が作られていた



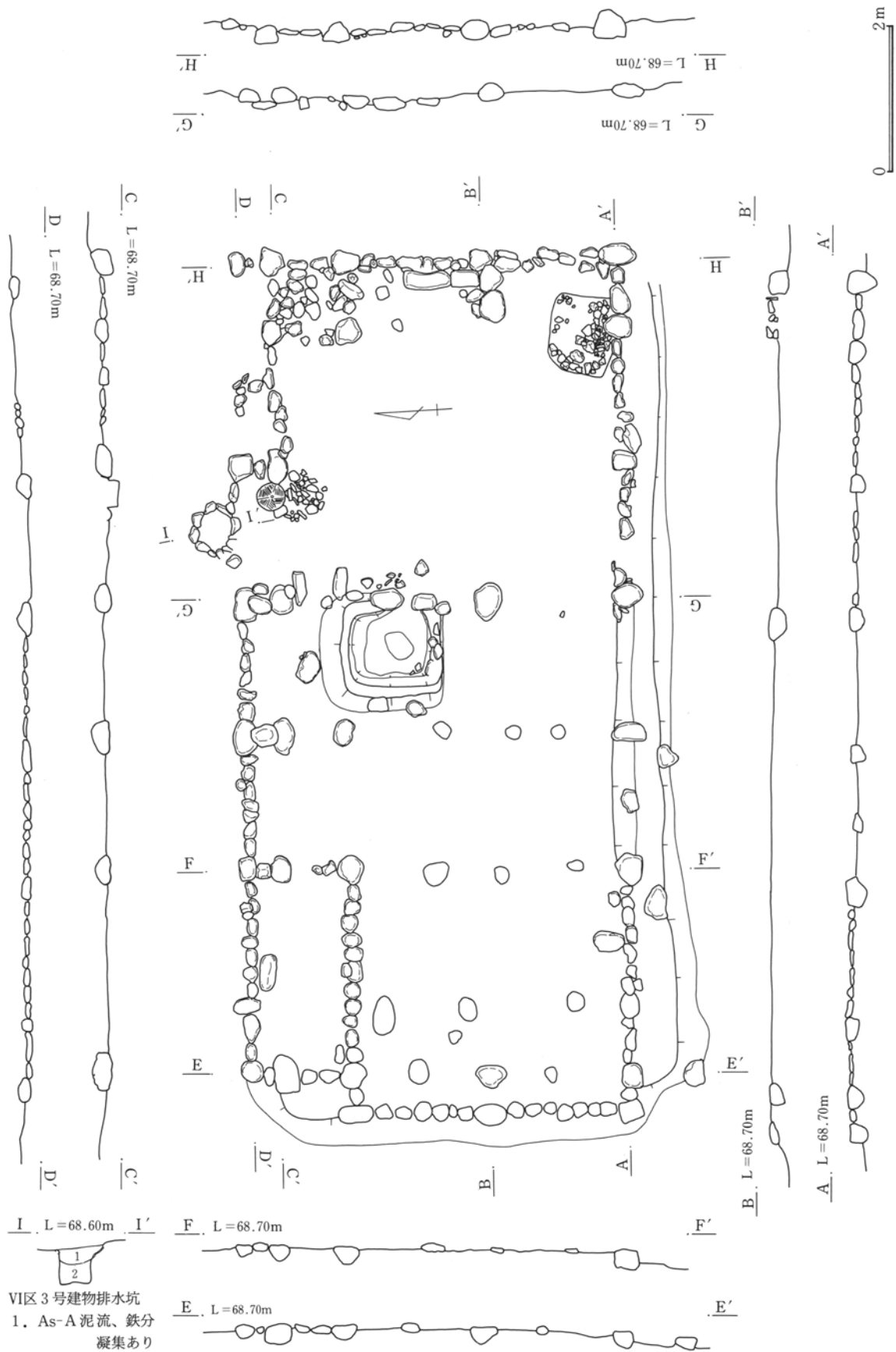
第104図 VI区2号建物跡



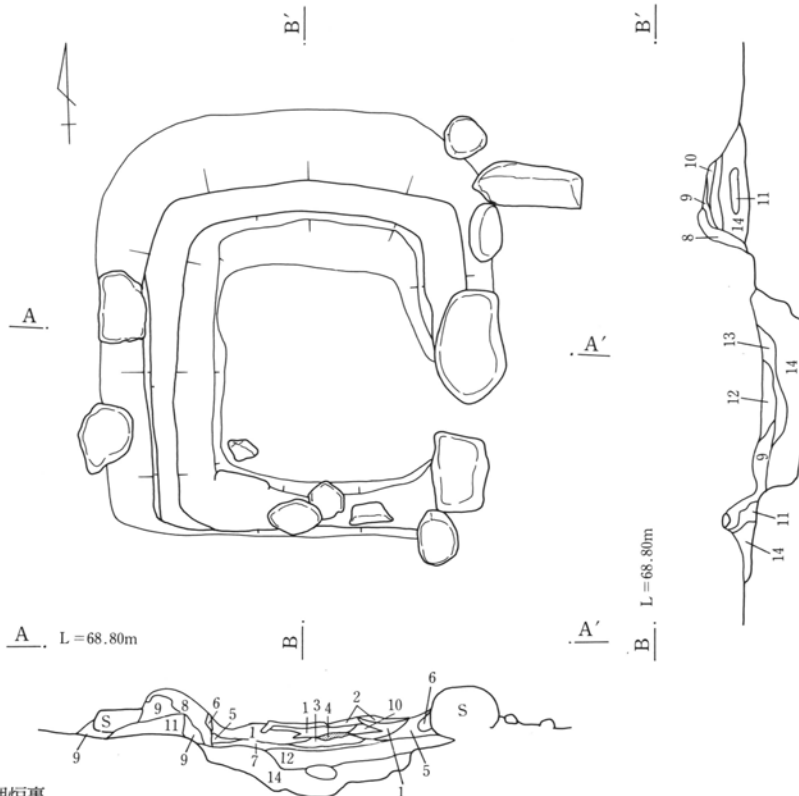


0 2m

第107图 VI区2号建物跡遺物分布图(2)



第108図 VI区3号建物跡



VI区 2号建物 囲炉裏

- | | | | | | |
|----------|---------------|-----------|-------------|-----------|--------------|
| 1. 明灰色土 | 灰層少量の焼土粒含む | 6. 灰黒色土 | 灰層、炭化物目立つ | 11. 明黄褐色土 | 地山砂質土 |
| 2. 明灰色土 | 灰層 | 7. 赤褐色土 | 焼土、少量の灰を混じる | 12. 赤褐色土 | 焼土 |
| 3. 明灰褐色土 | 灰層、焼土含むがにぶい色調 | 8. 灰白色土 | 細密で締めりあり | 13. 黄褐色土 | 砂質土、少量の炭化物含む |
| 4. 明橙褐色 | 焼土層 | 9. 明黄褐色土 | 少量の炭化物含む | 14. 灰褐色土 | 砂質土 |
| 5. 明灰褐色土 | 焼土、および砂質土の混土 | 10. 明黄褐色土 | 9よりやや締まる | | |

第109図 VI区 3号建物跡 囲炉裏

0 1 m

と思われ、内部の床が大きく窪んでいる。また南屋外にし尿を溜めたと考えられる径25cm程の土坑が作られている。土坑は周囲に石が配置され木桶が据えられていた。さらに木の蓋があったことが痕跡から想定される。土間部分のほぼ中央に瓢箪の形に焼土が残っており、竈が作られていたことをうかがわせる。

囲炉裏は中央やや北に寄っている。南北にやや長い長方形で規模は約2m×1mで、現状での高さは10cm程である。北東部分には小さく馬蹄形に作られた施設を持ち、東側は粘土が切れている。構造は粘土を長方形に廻し、周囲にはやや大形の石が据えられている。粘土は裾部分はかなり広がっており、北側の石は粘土の中に埋め込まれた状況を呈す。内部上層は泥流で覆われ、その下に灰、炭化物、焼土が互層に堆積し、下層には厚さ数cmの焼土層が認められた。構造はVI区1号建物に似る。北側中央屋外に排水坑が作られている。径50cmで周りには石が何段か廻っている。木桶が埋め込まれており、上層は泥流に埋まっていたが下層には厚くAs-A軽石の堆積が観察されている。

出土遺物は土間部分には少ないが、囲炉裏の北側部分において多数見られ、特に西側の内倉内において多量の遺物が出土している。種類としては陶磁器類の他、刀、煙管、錠、印籠、矢立や鋤、鉋などの農具類さらには指し銭などがまとまって出土している。これらの遺物の出土状態を見ると木箱や布などに包まれた状態で保管されていたものもあったと考えられる。また床面にはムシロが敷かれていたことが判明している。

VI区 3号建物跡 (第108～110図、P L 31・32・68・69・77)

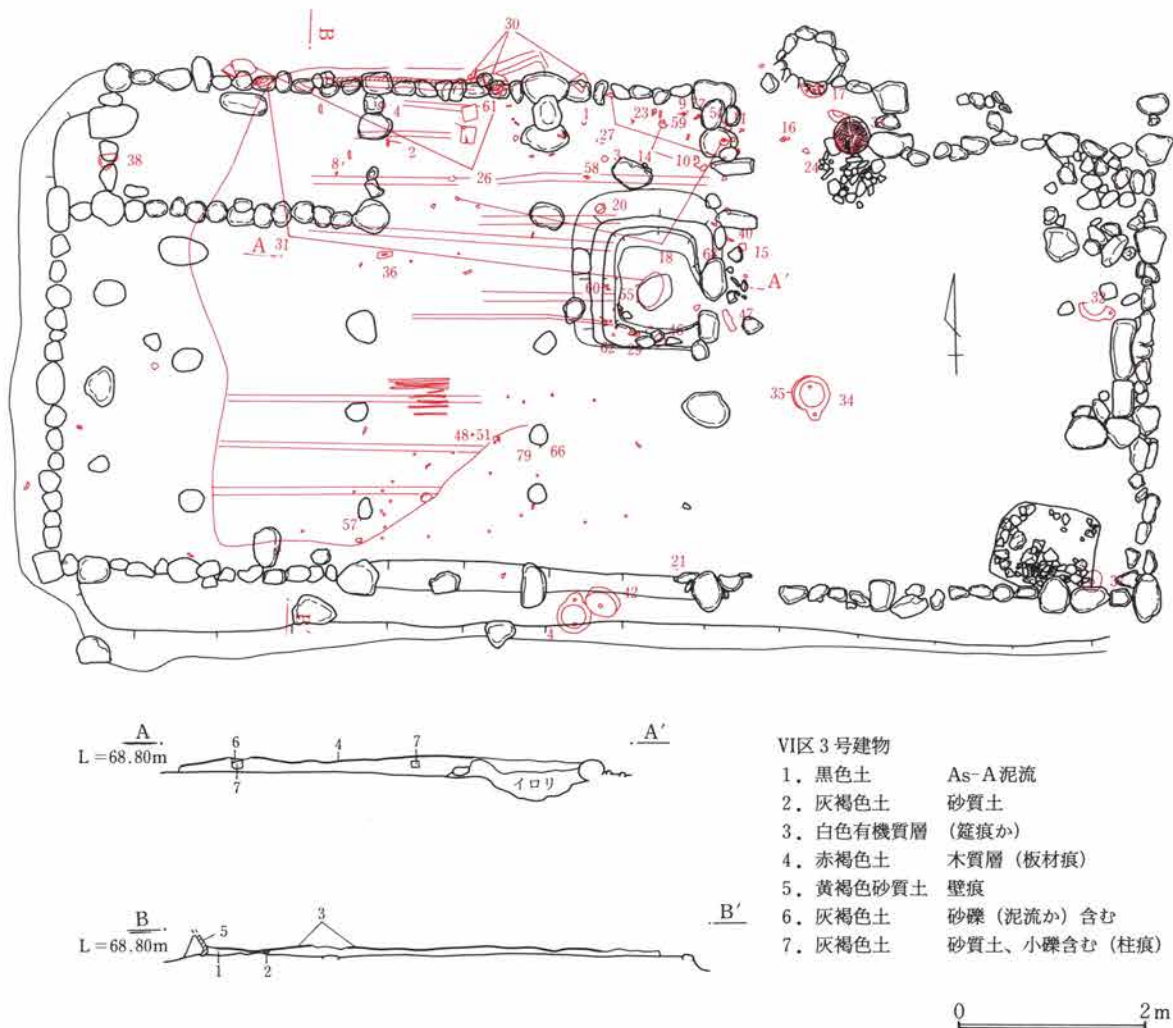
38R-17～19グリッドに位置する。VI区2号建物の東に近接している。南には庭を挟んでVI区6号建物が在

る。北側一段高くなっており高さ60cm程の石垣が築かれている。東側は北に延びる比較的広い道となっており、南に突き当たった場所にはVI区4号建物（便所）が位置している。

建物の規模は間口11.28m、奥行き5.17mである。奥行きに関しては北東部分が50cm程内に入り短くなっている。入口を入り右手が土間、左手が板の間となる。土間部分は硬く締まっており、南東隅にやや掘り下げた部分に礫が集中している場所が見られる。また北側には石臼（下臼）が置かれ周囲に礫が集められた場所があり、この部分では茶褐色に硬化した鉄分沈着層が顕著に見られた。囲炉裏は中央やや北に位置しており、一辺約1.3mの方形に粘土が廻っている。現状での高さは20cm程で裾部分が大きく広がっている。東側は一部切れており両端に石が据えられている。泥流で直接埋没していた。泥流下は灰、および炭化物、焼土が混じったものが堆積し、最下層には薄く全面に焼土が確認された。また中央灰層上面に径30cm程の焙烙の底部片が置かれていた。

本建物は検出時泥流中にムシロと見られる床面が認められた。地面より約7～20cmの高さに白い有機質層として検出されている。その下には竹スノコの痕跡と見られるものも部分的に認められている。さらにその下では根太や南北に渡されたころばし根太の痕跡も確認された。

また、礎石に書かれた柱の番付け痕も確認されている。南東隅を起点に柱を受ける石にそれぞれ西に一、二、三…、北へイ、ロ、ハ…とふられている。



第110図 VI区3号建物跡遺物分布図

出土遺物は囲炉裏周辺で多く見られた。陶磁器類では碗や皿類を中心に両耳壺、灯明皿、鬚グライなど、その他播り鉢や鍋、焙烙等が見られる。さらに石臼、砥石などの石製品、さらには煙管、銅（鉄）銭や火打ち金などが見られた。農具類はほとんど無く、鉈が1点のみである。二次転用されたと思われる硯、柄鏡なども出土している。

石臼が多く見られ、上下合わせて6点が出土している。1組は土間に置かれ、使用時の状態で出土し、下には藁が敷かれた状態で検出されている。

VI区4号建物跡（便所）（第111図、P L34・69）

38Q-17グリッドに位置する。VI区3号建物の南東にある。礎石は南北に配され、規模は2.2×1.3mである。6個の柱受けの石とその間に並べられた石が検出されているが北側および北東部分には見られない。

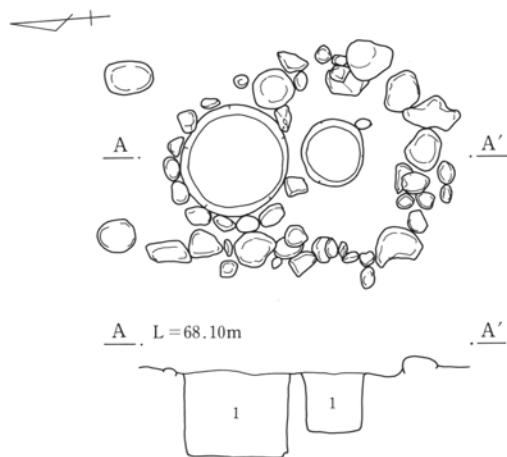
中には大小の土坑が南北に並び、大が径90cm、深さ65cmで小が径50cm、深さ45cmである。大の周囲には礫が15cm前後の石が周っている。いずれも垂直に掘り込まれており、底は平らで木桶が据えられていた痕跡が見られた。泥流で埋まっており、As-A軽石の堆積は見られなかった。

VI区5号建物跡（第112図、P L32・69）

48S-1グリッドに位置している。VI区の西寄り北端において検出されたが、調査した部分は南の礎石列のわずかな部分である。北側大部分は調査区外となる。東西に間口5.8m（3間）で奥行きは不明。東側および南側には幅20~30cm、深さ数cmの浅い雨落ち溝が検出されている。西側の溝は幅40cmと広く、VI区2号建物の近くまで延びて終わっている。出土遺物は検出範囲が少ないため皿および大甕の口縁部片が見られたのみである。VI区2号建物の北に近接しており、付属屋的なものであろうか。

VI区6号建物跡（第113~116図、P L33・69・70）

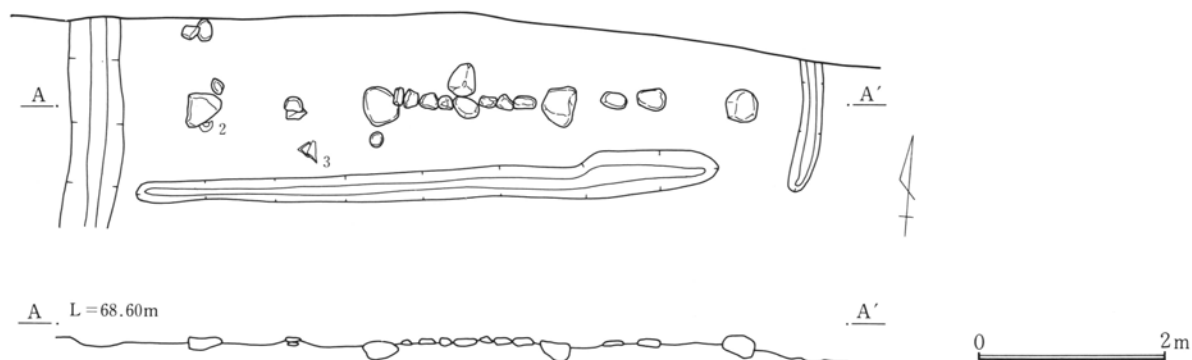
38O~Q-19グリッドに位置する。VI区2号建物の南東、VI区3号建物の南に在って、両建物に対して若干高い位置に作られている。南側にはやや土盛りされた部分に東西方向の石列が見られ西端は木戸を思わせる様に石の並びが曲がっている。西側および北側には犬走り状の礎石列に続く、幅50cm程のやや高くなった部



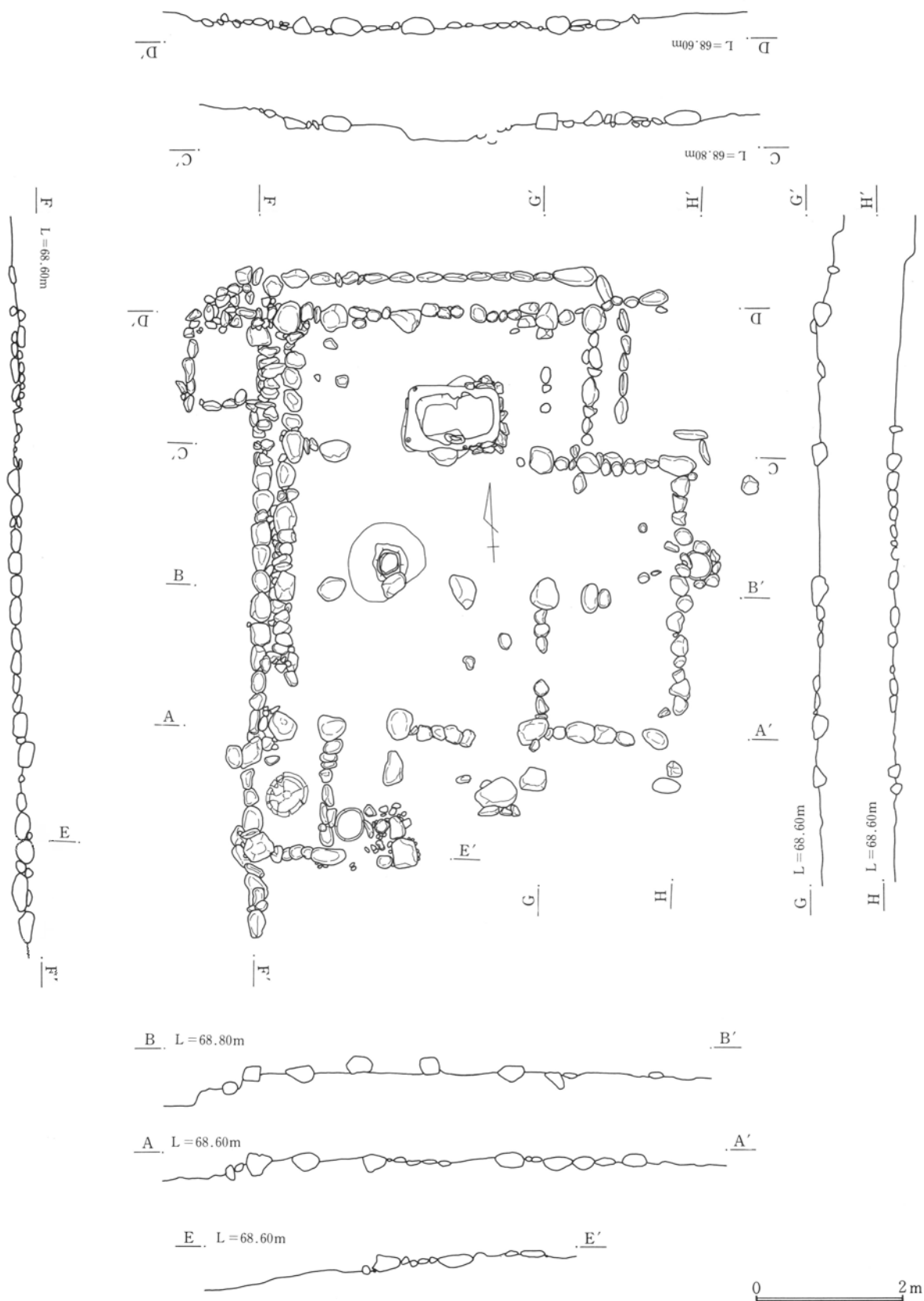
1. 黒色土 As-A泥流、壁面、底面に木質痕残る

0 2m

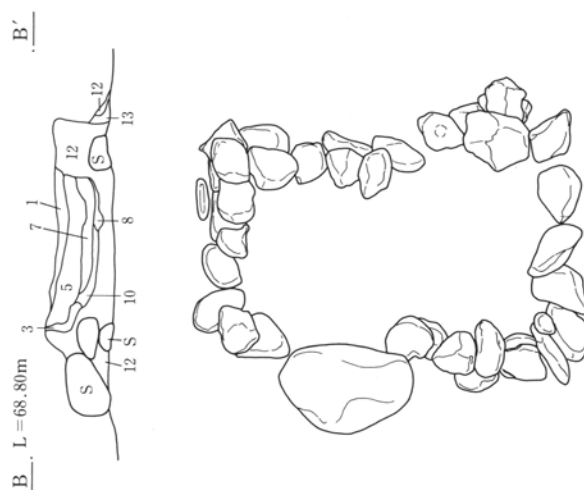
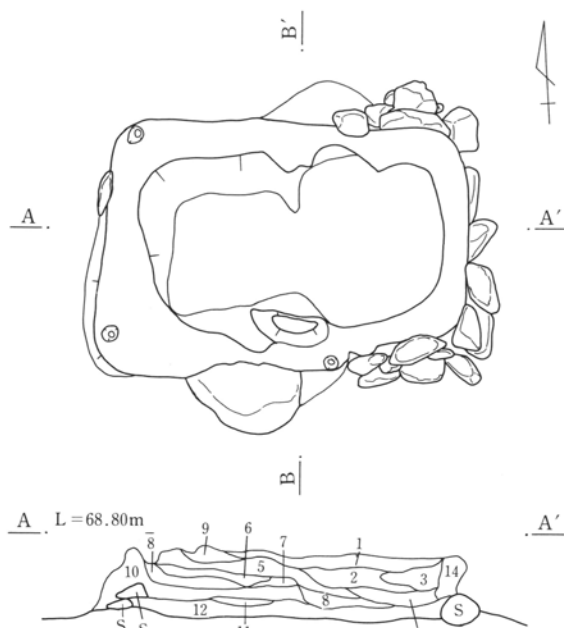
第111図 VI区4号建物跡



第112図 VI区5号建物跡



第113图 VI区6号建物跡



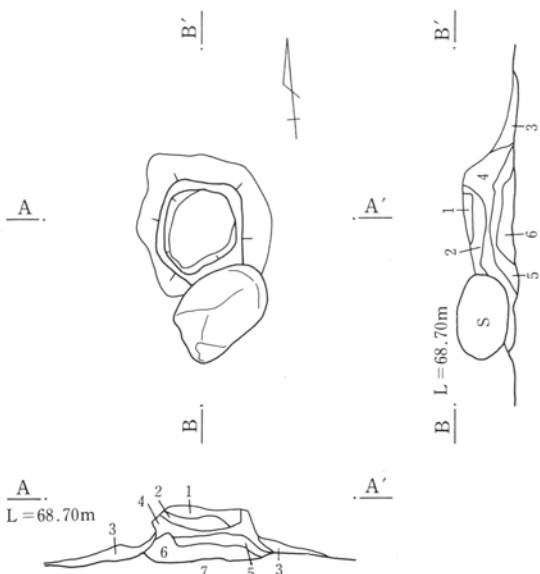
VI区6号建物囲炉裏

1. 灰黄褐色土 灰層、炭化物、焼土を僅かに含む
2. 灰黄褐色土 灰層、1より焼土を多く含む
3. 暗黄褐色土 縮まりあり、囲炉裏の構築材か
4. 灰黄褐色土 砂質土
5. 褐灰色土 灰主体で炭化物、焼土を僅かに含む
6. 褐灰色土 灰層、焼土を僅かに含む
7. 黒褐色土 炭化物主体、灰白色灰、褐灰色灰少し含む
8. 暗黄褐色土 細砂粒土
9. 黒褐色土 天明泥流土、囲炉裏構築材を混じる
10. 褐灰色土 灰様の細粒土主体、にぶい黄褐色砂質土混じる
11. 黒褐色土 炭化物主体で焼土含む
12. 褐灰色土 灰様の細粒土主体、10とほぼ同質
13. 黒褐色土 天明泥流土、L字状に入り込む
14. 黒褐色土 粘質土、赤褐色の酸化鉄分が斑に混じる

分が作られている。

建物の規模は間口5.28m、奥行5.46mで、北西部分に長さ1.23mの大きさに作り出された施設と南西部には長さ1.82mの長さに作り出された便所が付随している。土間の部分は北東部にわずか見られるのみで、入口もこの場所と考えられる。囲炉裏は建物の中央やや北に寄ったところにあり、東西に長い長方形である。大きさは約1.4×1.0mで粘土で作られている。上端部の幅は10~20cmで、現状での高さは20cm程である。下幅は30cm程で、基礎部分には長方形に据えられた礫の並びが検出されている。

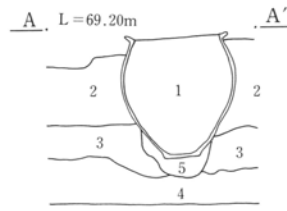
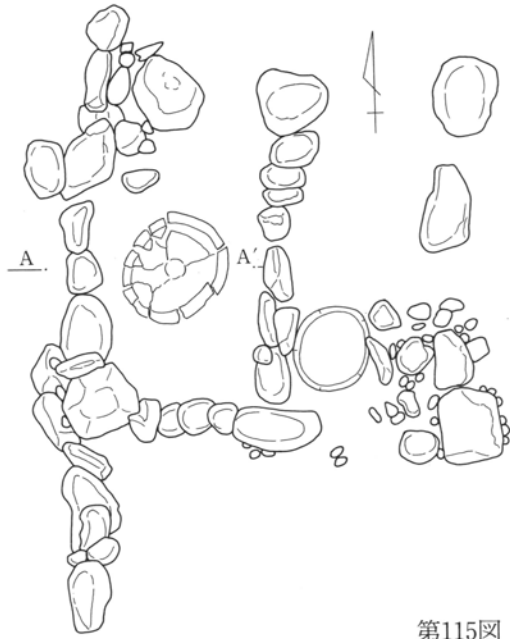
内部にはほぼ水平の高さにまで灰が堆積していた。以下色調を異にした灰層、炭化物、焼土層が互層に堆積している。さらに中央やや西寄りに1辺35cm程の小型の囲炉裏様の施設が見られた。粘土で盛り上げられ中央部分が窪む。内部には灰、若干の炭化物が認められた。



1. 暗黄橙色土 砂質土
2. 暗黄褐色土 黄橙色砂質土と暗褐色粘質土ブロックの混土
3. 暗褐色土 暗褐色粘質土主体、灰白色灰、炭化物若干混じる
4. 暗褐色土 粘質土、構築材。
5. 褐灰色土 粘質土主体、暗褐色粘質土若干含み灰白色灰混じる
6. 灰白色土 砂質土、土台状に盛られる
7. にぶい黄橙色土 砂質土、褐灰粘質土をブロック状に混じる

0 1m

第114図 VI区6号建物跡囲炉裏・竈

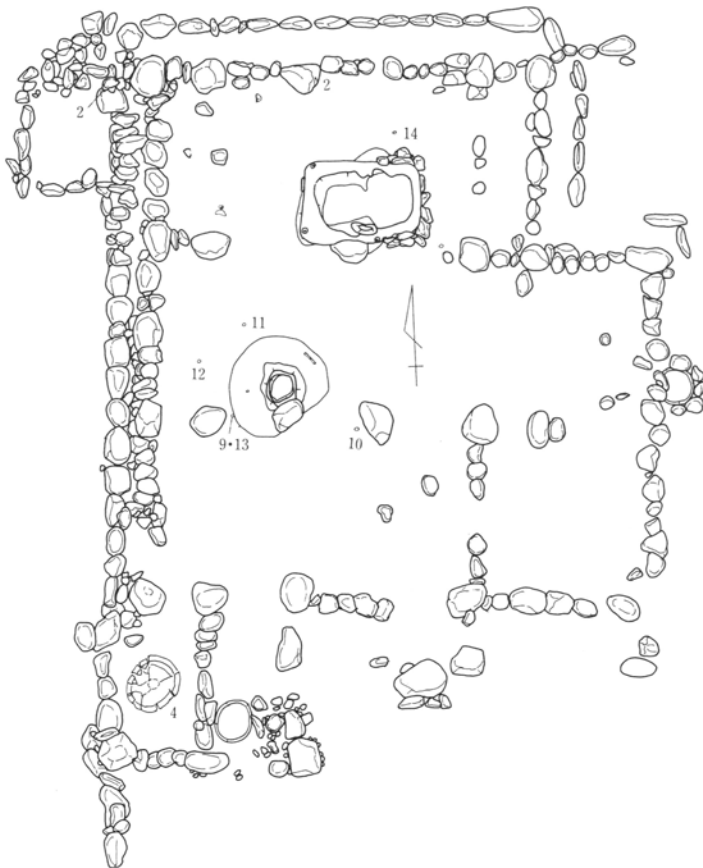


便所 (大甕、桶断ち割りセクション)

1. 黒色土 As-A 泥流
2. 暗黄橙色土 砂質土、褐灰色粘質土 (微細土) をブロック状に含む
3. 暗黄橙色土 2 と近似するが締まりやや弱い
4. 褐灰色土 褐灰色粘質土 (微細土) 主体とするにふい黄褐色砂質土若干混じる
5. 暗黄褐色土 砂質土、3 に比べ締まり強い

第115図 VI区 6号建物跡便所

0 1m



本建物で注目された施設として南西部分に付設されている便所がある。今回の調査で検出された建物の中でいわゆる内便所は唯一である。便槽は径60cm程の大甕を埋め込んだものと、その東側に径40cm程の木桶を埋め込んだと考えられる土坑である。共に建物内から廊下続きに入る構造であったものと考えられる。

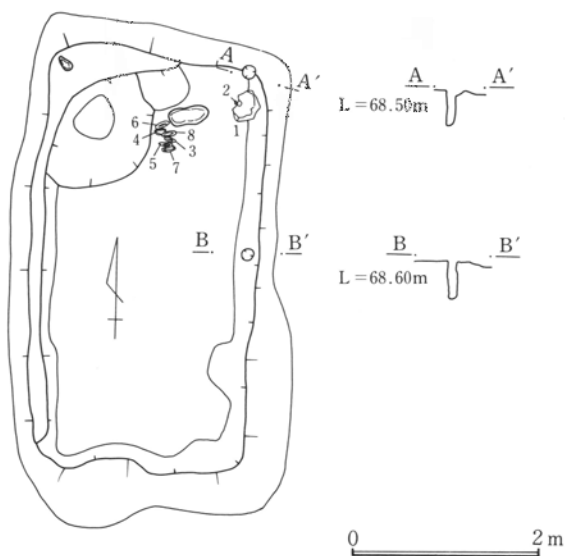
検出時には両者ともにAs-A泥流で埋没していた。

出土遺物は少なく、碗や皿といった陶磁器類はまったく見られなかった。砥石や若干の銅(鉄)銭が見られたのみである。

0 1

0 2m

第116図 VI区 6号建物跡遺物分布図



第117図 VI区7号建物跡

VI区7号建物跡 (第117図、P L33・70)

48P・Q-3グリッド、VI区2号建物の南西に近接して建てられている。南北に主軸を持ち、間口2間、奥行き1間の掘立柱建物である。柱穴は北西の2本のみ確認されたがその他については明確には確認できなかった。柱位置部分がやや高まり、建物内はわずかに低くなっている。床面はやや締まっている。遺物は菰編み石、石臼の破片が北側において出土している。

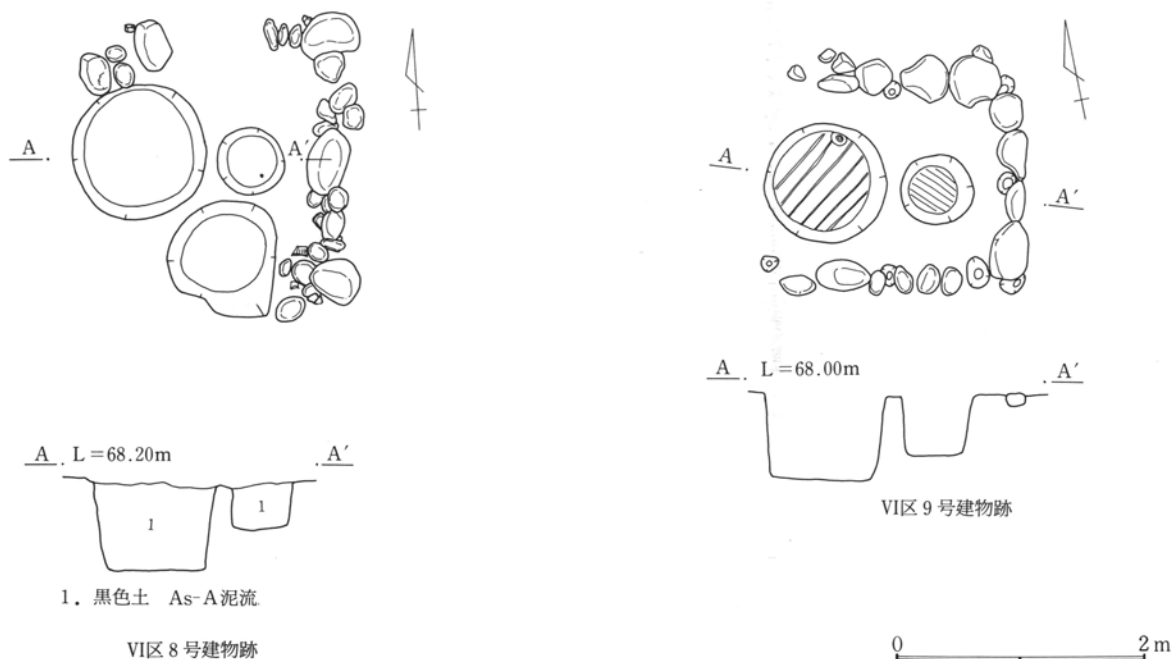
VI区8号建物跡 (便所) (第118図)

38P-20グリッドに位置する。VI区2号建物の南東部に作られている。大中小3基の円形土坑が掘られ東側および北側に石が配されている。推定規模は2.0×2.0mである。いずれの土坑も木桶が

埋め込まれていた痕跡が見られる。大きさは大が径105cm、深さ約70cm中が径80cm、小が径50cm、深さ35cmである。As-A泥流で埋没していた。

VI区9号建物跡 (第118図)

38N-7グリッドに位置する。VI区1号建物の東に作られている。西に開いたコの字状に礎石が並び、中に大小の土坑(便槽)が東西に掘り込まれている。建物の規模は東西2.0m、南北1.6mである。土坑の規模は大が径95cm、深さ65cm、小が径55cm、深さ45cmである。いずれも底面、壁面に木桶の板材が残っていた。また埋土はAs-A泥流である。石の間に小ピットも検出されている。

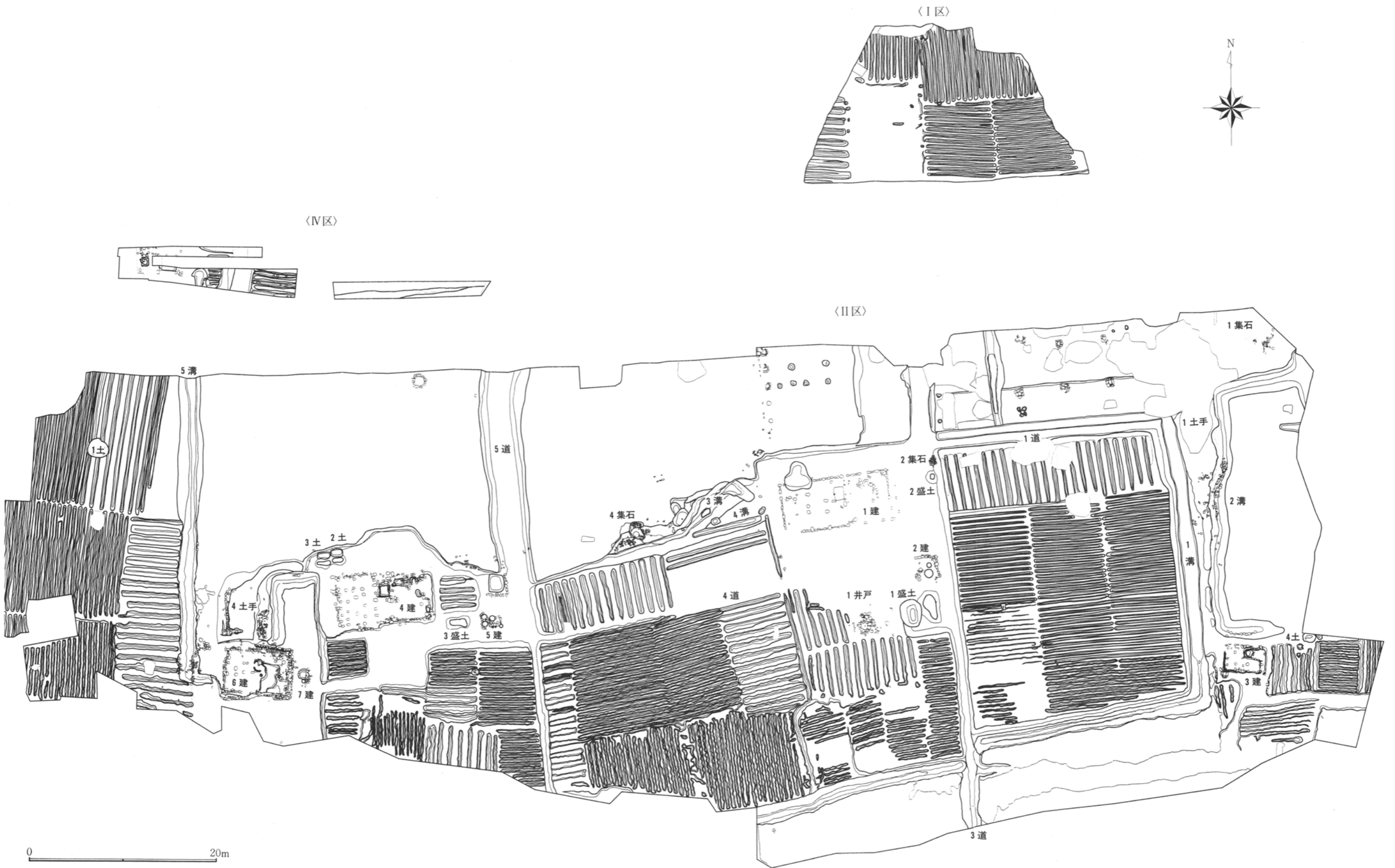


1. 黒色土 As-A泥流

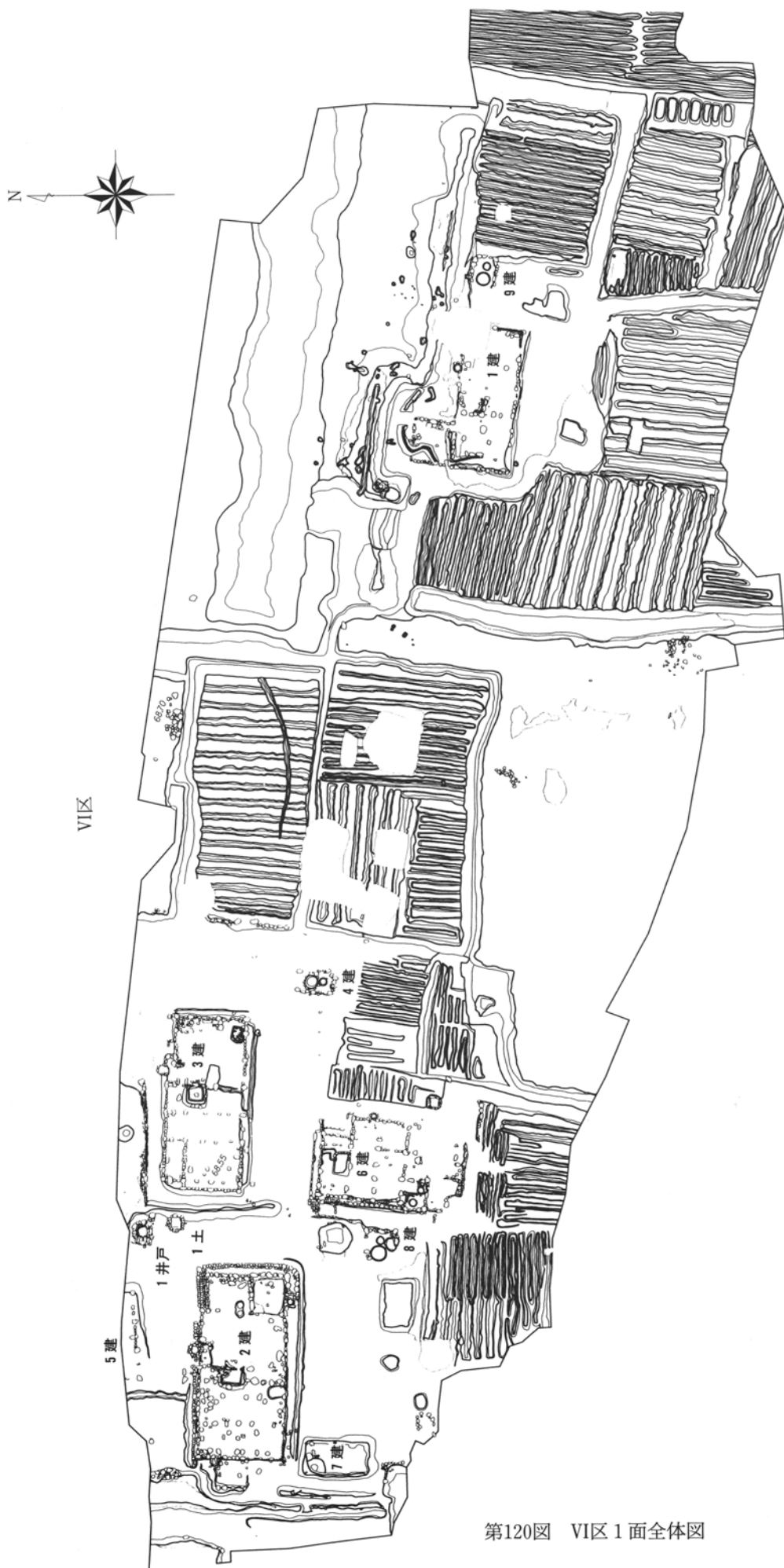
VI区8号建物跡

VI区9号建物跡

第118図 VI区8・9号建物跡



第119図 I・II・IV区全体図



VI区

第120图 VI区 1面全体图

0 20 m

2. 井戸

II区1号井戸 (第121図、P L34・70)

28L-6グリッドに位置する。1号建物の南にあり、川原石が円形に生まれ、周辺にも石が敷かれている。上屋の存在は明らかでない。内径70cm、深さは約4mである。周辺において陶磁器、刀子などが出土している。構造は径3m程の堀方を持ち、円形にやや細長い石を小口積みに石を組み上げ、ある程度の高さに組んだところで廻りに土を入れ、これを10回程繰り返して造っている。内部はAs-A泥流で埋まる。

VI区1号井戸 (第121図、P L36)

38S-20グリッドに位置する。径1.5mの大きさに河原石を円形に巡らしている。内径は80cm、深さは完掘できなかったために不明である。埋土はAs-A泥流である。石積みの井戸である。南東部分にやや大きな扁平の石が置かれており、また南には1号土坑が位置する。

3. 土坑 (P L70)

II区1号土坑 (第119図)

38P-2グリッドに位置する。畑の畝を切って掘られている。やや長円形で規模は2.2m×1.7m、深さは約50cmである。泥流で埋まっていた。

II区2号土坑 (第121図)

28N-17グリッドに位置する。隅丸長方形を呈す。規模は長軸1.3m、短軸0.80m、深さは約50cmで底は平らである。As-A泥流で埋まり、下層にはAs-Aの堆積が見られた。出土遺物はない。

II区3号土坑 (第121図)

28N-17グリッドに位置し、2号土坑と接している。隅丸長方形を呈す。長軸1.3m、短軸0.70m、深さ約50cmである。形状、規模共に1号土坑と近似し、覆土も同様である。両土坑の南側には掘り上げた土が見られることから、掘られた直後に軽石、さらには泥流に埋没したものと認められる。用途は不明。

II区4号土坑 (第121図)

II区3号建物跡の東約4m程の所に位置する。径60cmで深さは10cmと浅い、周囲に数個の川原石が見られる。底にはAs-Aが見られ、上はAs-A泥流で覆われていた。

VI区1号土坑 (第121図、P L35)

VI区2号井戸の南に位置する。20~30cm程の河原石が方形に廻り、下部にさらに大きな石が四角に組まれている。内法が約70cmで深さは約40cmである。底は中央部が僅かに窪む。As-A、およびAs-A泥流によって埋没していた。2号井戸の構築面から傾斜して下がった面に造られており、排水坑と考えられる。

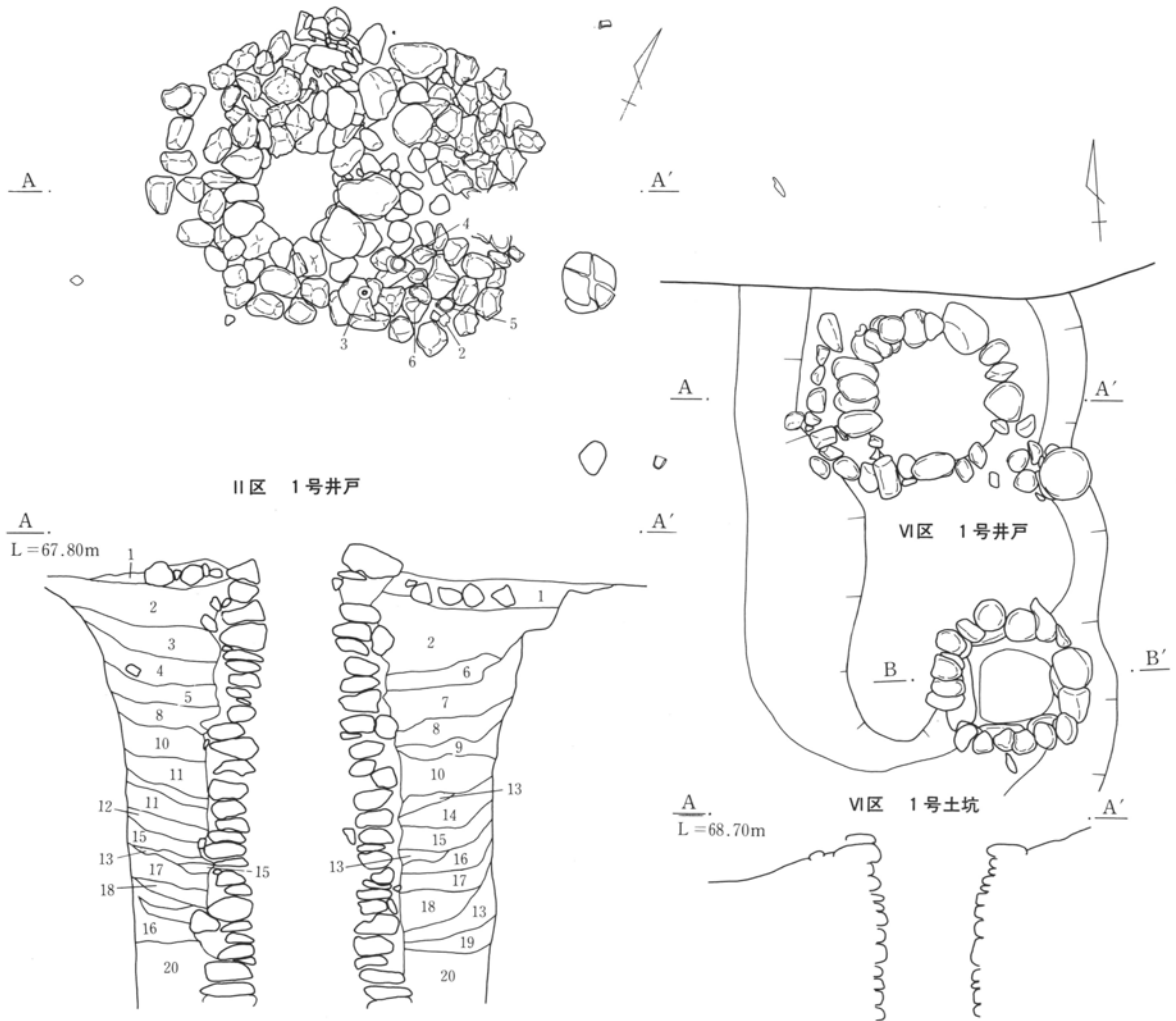
4. 溝 (P L70)

II区1号溝 (第119図)

II区12号畑の北から東側、南側をコの字に囲むように掘られている。上幅は広いところでは約2mで深さは約1mである。底は検出時には緩やかな丸みを持っていた。軽石降下時にはかなり埋まっていたものと見られ、3面においても重なる形で溝が確認されており、当初の掘削面はさらに深かったことが確認されている。このことからかなり古い時期に掘られた溝と考えられる。

II区2号溝 (第119図)

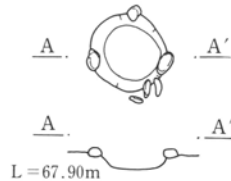
II区1号土手の東側に南北に走り両端は東に直角に曲がった直後に終息する。当初はかなり深かったもの



II区 1号井戸

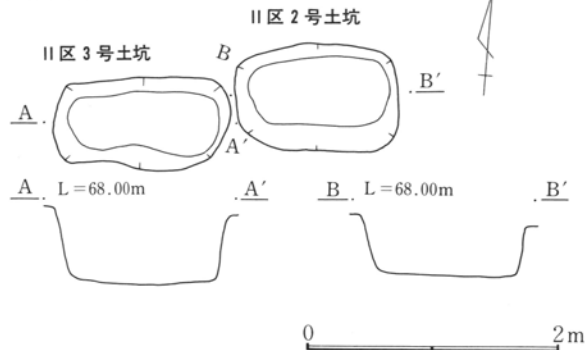
1. 灰褐色土 粘質の微砂土
2. 灰茶褐色土 1と近似、鉄分凝集ブロック含む
3. 灰茶褐色土 2と似るが灰色の粘質土ブロック僅かに含む
4. 灰茶褐色土 3と同質で灰色粘質土ブロックさらに多く含む
5. 灰茶褐色土 3と同質だが鉄分凝集ブロック目立つ
6. 灰茶褐色土 茶褐色、黄褐色土ブロックの混土、縮まりあり
7. 灰黄褐色土 灰褐色土主体とし、黄褐色土小ブロック含む
8. 灰茶褐色土 6と近似するが、灰色のやや大きな粘質土ブロック含む
9. 灰褐色土 混入ブロック少なく縮まりあり
10. 灰茶褐色土 8と近似、粘性やや弱い
11. 灰茶褐色土 10と同質で、やや粘性あり
12. 灰茶褐色土 10と同質だが、やや縮まりがある
13. 灰茶褐色土 灰色、茶褐色土のブロック主体とし、粘性あり
14. 灰褐色土 茶褐色、灰色の粘質土ブロック主体とする
15. 灰褐色土 14と同質、やや大きいブロックが目立つ
16. 灰褐色土 14と同質、粘性強い
17. 灰茶褐色土 灰色、黄褐色粘質土ブロック主体とする粘質土
18. 灰褐色土 茶褐色、灰褐色の粘質土ブロック混土、粘性あり
19. 暗灰褐色土 黒色、灰褐色、灰白色の粘質土ブロック多く含み粘性強い、砂礫も僅かに混入
20. 暗灰褐色土 19と似るが黒色土ブロック目立ち粘性強い

II区 4号土坑

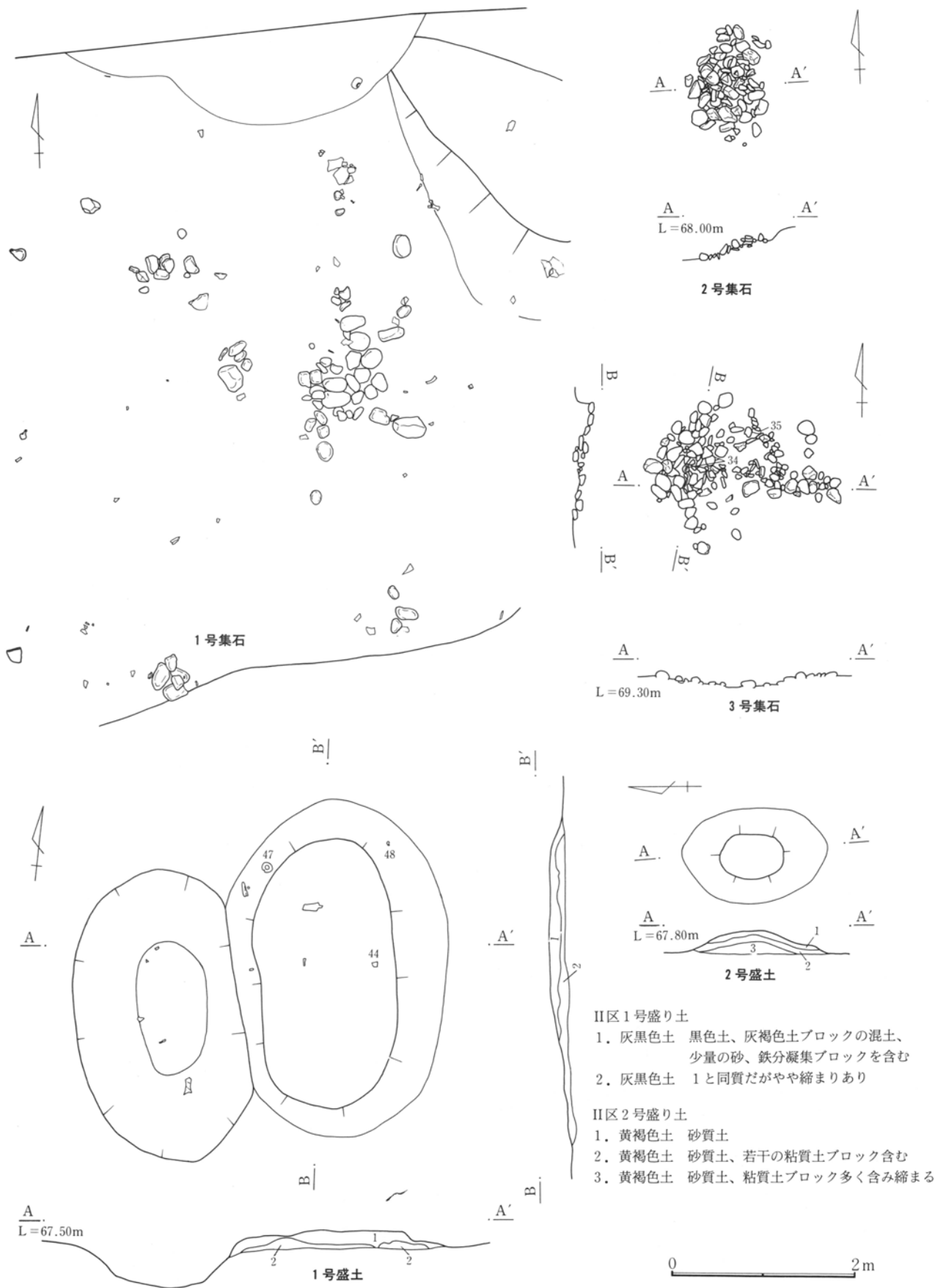


VI区 1号土坑

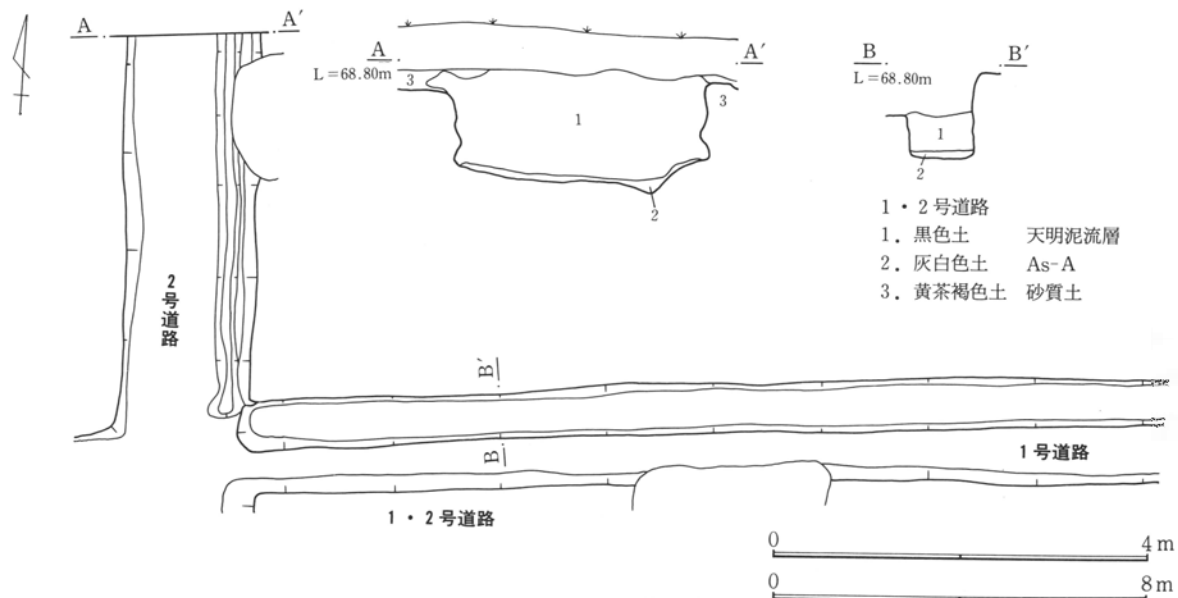
1. 黒色土 As-A泥流
2. 灰白色土 As-A 2次堆積、分層可能



第121図 井戸・土坑



第122図 II区集石・盛土



と思われるが、かなり頻繁に掘り返しが行われたものと思われる。検出時には1号土手の崩落土がかなり堆積していた。

II区3号溝 (第119図)

II区1号建物の西に位置する。北側は一段高くなっており南は畑である。溝としたが西は次第に細く浅くなってしまい5号道に続く。

II区4号溝 (第119図)

II区1号建物の西に在り東西に走る。幅約1m、深さは40cm程である。ほぼ真っ直ぐで、長さ7.5mで終わっている。壁などの遺存状態が良好なことから、As-A降下直前に掘られたことが想定される。

II区5号溝 (第119図)

II区の西端に南北に走っているが6号建物の脇で終わる。屋敷地とその西の畑とを画す溝である。幅2.5mで深さは1mを測る。

5. 盛り土

II区1号盛り土 (第119・122図)

28M-4グリッドに位置する。長円形の土の山で、縦3.5m、横2.2m、高さは約20cmである。盛り土面は比較的平坦である。西側に接し1号井戸の排水を流したと考えられる長円形の土坑がある。盛り土の土は黒色土と灰褐色土のブロック混土で鉄分の凝集ブロックが目立つ。陶磁器片、鉄製品の他、家のミニチュアも覆土中より出土している。

II区2号盛り土 (第119・122図)

28O-4グリッドに位置する。II区12号畑の西脇に在り、北に接して2号集石が見られる。縦1.5m、横1.0mで高さは25cm程である。盛られた土は3層に分けられる砂質土である。

II区3号盛り土 (付図3)

28L-14グリッドに位置する。4号建物東側の33号畑に北接する。南北1.2m、東西2.4mの規模をもつ。

A. L=68.50m

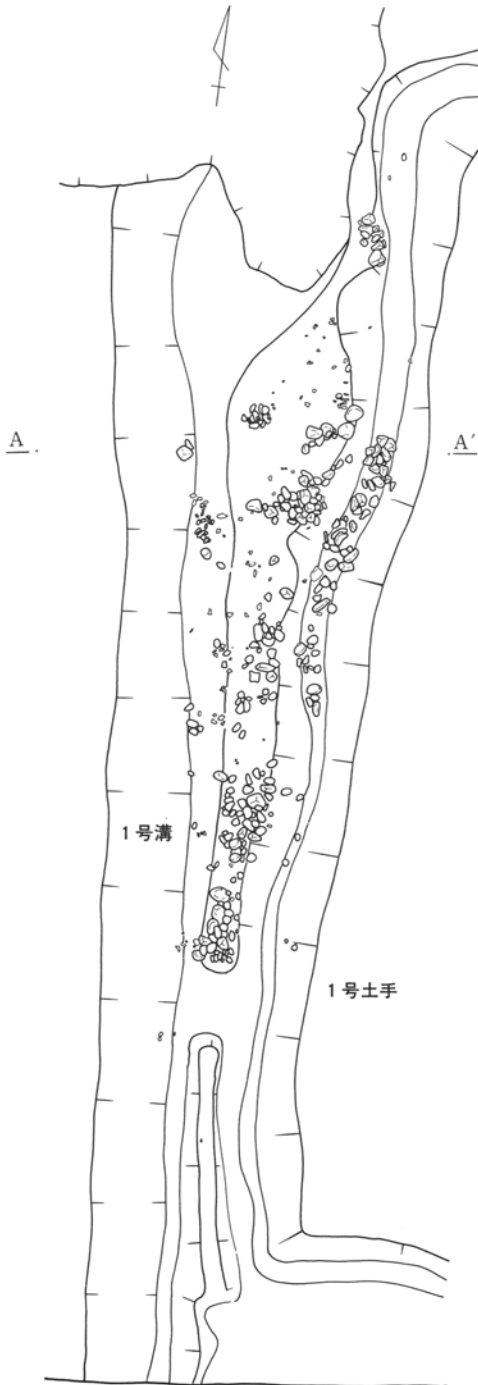
A'



II区1号溝・II区1号土手

- 1. 黒色土 天明泥流層
- 2. 灰白色土 As-A
- 3. 灰褐色土 砂質土、崩落土層
- 4. 暗褐色土 砂質土、少量の黒色土ブロック含む
- 5. 暗褐色土 均質で締まりある砂質土

- 6. 暗褐色土 均質で締まりあり、下層の砂を混入
- 7. 暗灰色土 砂層
- 8. 暗灰色土 砂層、ラミナ状堆積、やや粒子大
- 9. 暗灰色土 砂層、ラミナ状堆積、締まりあり、褐色土ブロック混入



II区1号溝・1号土手

VI区1号盛り土

38R-16グリッドに位置する。長南北約3.5m、東西2.2mの範囲で、長円形を呈し、高さ20cm程である。やや黄色みを帯びた有機質の土で砂質である。最下層面には炭化物、白色の有機質層(藁か)が検出されている。

6. 土手 (第119・124・164~166図、P L70・71)

II区1号土手

南北に走るが、北側はそのまま1段高い場所につながり、南側は次第に細くなっている。西側は1号溝、東側は2号溝になっており、巾は広い北側部分で下幅で4.0m、高さは1.0mを超える。検出時から表面に多くの陶磁器や礫が見えていた。一部石垣状になっている部分もあったが、かなり崩れている。遺物や石は土手の内部にも多く、何度となく盛り上げられたことが想定される。

II区2号土手

II区3号溝の北に接する一段高まった部分である。4号集石が位置している。1号建物の北側から西に続いている部分で、この部分がやや高まりを持っている。検出時にはかなり崩れた状態で凹凸も見られた。

II区4号土手

28L-19グリッド、II区6号建物の北側に位置する。南北約5m、東西約3m、高さ約1mのマウンド状の高まりである。東は溝状に落ちており、かなり崩落している状況であった。石に混じって陶磁器や石器類が多く検出

第124図 溝・土手

されている。また西側は低い石垣状に川原石が残る。建物に面した南側はかなり意識的に切られている状況を示していた。このことからこの土手は何らかの意図をもって構築されたものと思われ、土手上に何らかの施設が設けられていたことが考えられたが、そうしたものの存在を示すような遺構は認められなかった。

7. 集石 (第119・112・163・164図、P L70・71)

II区1号集石

18R-17グリッドに位置する。2号溝の北側の高まった平坦面に位置する。中心に比較的扁平な川原石がまとまって敷かれたように検出されている。また周辺にも数個の石が集中して見られる。その他焼土痕なども検出されている。若干の陶磁器、石器が検出されている。

II区2号集石

28P-4グリッドに位置する。II区12号畑の北西脇斜面にある。南には近接して1号盛り土が位置する。川原石を中心に縦1.2m、横0.8mの範囲に乱雑に寄せ集められた状況を示している。性格は不明。

II区3号集石

調査区北側の1段高くなっている28R-2グリッドに位置する。10~20cmの礫が1辺1.2m程の範囲に検出された。外縁の一部は直線的に石が並んでいる部分も認められ、中央がやや落ち込む形状を呈す。若干の陶磁器、石器が出土している。性格は不明である。

II区4号集石

28N-10・11グリッドに位置する。3号溝北側の1段高い土手の端部に検出された。2カ所の集中カ所が見られ、かなり下部にまで石が検出されている。陶磁器片や石器類が出土している。

8. 道

II区1号道 (第119・123図)

II区12号畑の北側を東西に延びる。西側は2道に繋がっている、北側は1段高くなっている。道幅は80cm程であるが、北側部分は幅70cm、深さ45cmの溝状に掘りこまれている。おそらく東端で1号溝と繋がっているものと思われる。ほぼ垂直に立ち上がっており、底にはAs-Aが堆積し、その上にはAs-A泥流が入り込んでいる。また道の面には灰が細い筋状に延びた痕跡が確認されている。

II区2号道 (第123図)

II区1号建物の屋敷地北東隅から北に延びる。幅約1.8mで両側は高くなっている。東側に側溝状にやや落ち込む部分が認められる。道の面は赤褐色を呈し硬化している。

II区3号道 (第119図)

II区2号道の線上ほぼ南に位置する。1号建物の屋敷地東南隅から南に延び畑の間を抜け南の堤防状の高まりに上がって利根川へと下る道と考えられる。幅は約1mで、面は赤褐色で硬化している。

II区4号道 (第119図)

II区1号建物の庭の南西隅からほぼ直線で、4号建物の屋敷地南東隅に繋がっている。幅約1mであるが、西側の畑境を抜ける部分はかなり狭くなっている。面はやはり赤褐色で締まっている。

II区5号道 (第119図)

II区4号建物の屋敷地北東から北に延びる。下幅約2.5mで両側は北に行くほど高くなり、調査区北端では

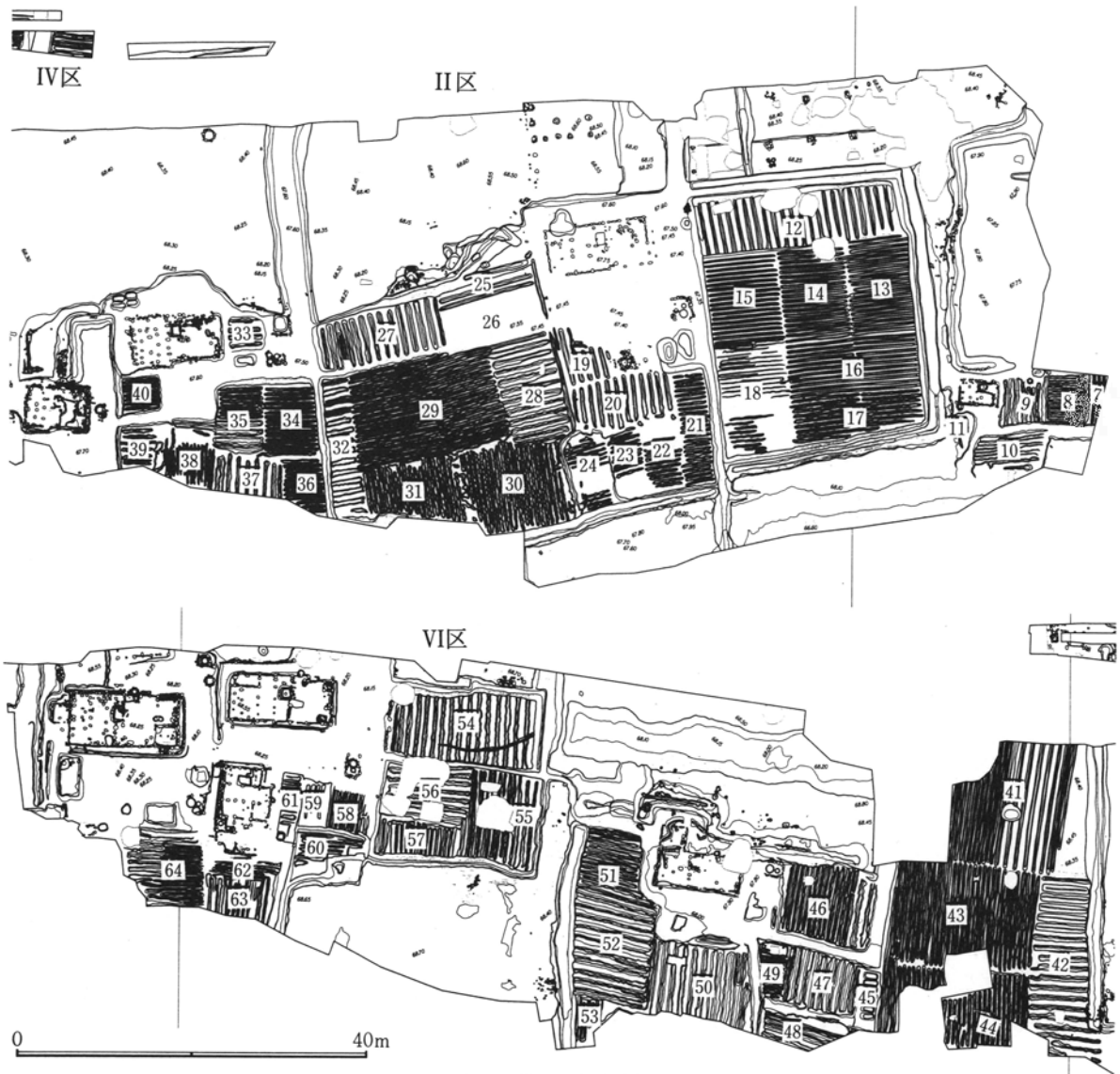
1 m弱の比高差を示す。路面は赤褐色に硬化し、南の延長上には幅約50cmの道が畑を南に抜けている。

9. 畑 (第125・161図、P L 71)

本遺跡で検出された畑は泥流および直前に降下した軽石で覆われ、当時の状況をそのまま保っているものと思われる。また軽石の状況から、降下後除去や復旧を行なう間もなく泥流で厚く覆われてしまったことが窺える。畑は調査区内のかなりの部分を占めている。I区ではほぼ全面、II区においては建物の南側に大きく広がり、VI区でも建物を囲むように検出されている。形状、面積、畝方向、畝幅に違いが見られることから作物の種類や耕作時期に違いがあったものと考えられる。

溝や土手等で一定の大きさに画されその中をさらに畝幅や方向の異なる小区画に分割して耕作を行っている。

検出された畑について下図のように番号を付与し、若干の考察を行うと共に一覧表により計測値等の記載を行った。



第125図 畠全体図

上福島中町遺跡の天明三年浅間災害下「泥流畑」の計測について

関 俊明

泥流畑の計測と表記

本遺跡では、天明三年七月八日（新暦8月5日、以下新暦を算用数字）に浅間山噴火に伴って発生した天明泥流に被災した畑跡が検出されている。民家を伴う当時の農業社会の生活形態の一括資料としてその調査の意義は大きい。その基礎資料として、天明泥流堆積物の下で検出され畑番号を付与したI・II・VI区の64枚の畑遺構の計測値について、得られる視点と計測値算出の根拠を記述する。計測は、空中写真測量図化により作成された40分の1遺構平面図を用いた。その際、図化精度から発生する不明確な畝サクの図示の矛盾部分の修正はおこなわず、その部分は計測の対象としなかった。

なおここでは、「はたけ」の表記に「畑」を用い（黒田1984）、天明三年の8月5日という近世の確定した年代観と季節性を反映した畑として「泥流畑」と呼ぶ（関2003）。また、畑遺構を扱う際に畝と畝の間の溝にあたる部分については、「畝間」と表記される場合があるが、特に泥流畑の場合、民俗例との関連から「サク」の用語を用いる。このことは「サクキリ」、「サクイレ」などの民俗例の農事用語との対応を容易くする。

As-A軽石と泥流畑の特徴

上福島中町遺跡の泥流畑の特徴として、以下の点を計測値とともに記述確認しておく。

①泥流畑は、天明三年の浅間噴火災害に伴い発生し吾妻川～利根川を流下した天明泥流堆積物に覆われ、8月5日の時点で厳封されている。②それ以前に、8月以降（史料によりその中心は8月2日以降と考えられる）に浅間山の噴火で降下堆積した細粒のAs-A軽石により、連続あるいは断続的に5～10cmの厚さで畑面は覆われている。③検出されたすべての畑でAs-A軽石降下以降、天明泥流被災の間に人為的な耕作に関する痕跡は確認されていない。（例えばおよそ70km上流に位置する長野原町の久々戸遺跡などの例にみるような、As-A軽石降下前後の耕作痕跡は確認されない（関・諸田1999、関2000）。）④遺構平面図に示された円形のプランは、攪乱や文化層の異なる土坑などの遺構で、同じく上流域の吾妻郡内で確認されている平坦面（関2003）ではない。⑤本遺跡の泥流畑では8月2日以降の一連のAs-A軽石降下に対しての復旧の痕跡は全く窺えない。⑥降下堆積したAs-A軽石により、畝の上半部（作付面）までが極めて良好に確認できる状態で検出されている。⑦畝の走行は、南北と東西に大別され、山間部における等高線耕作の形態とは異なっている。⑧23号畑等にみられる畝幅の不調な規則性は間作の痕跡かもしれない。⑨発掘調査による作物の特定はなされていない。

畑判読の計測値

畑遺構で畝幅は、栽培されていた作物の種類を分類するのに主たる基礎データである。さらに、農事暦を組み合わせた畑断面の形状から当時の耕作状況を推定するのに重要な意味を持つてくる。以下、本遺跡と同様に天明泥流被災遺跡で畑地景観を扱った『久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集）の「泥流畑の発掘調査の方法」に記述した内容について本遺跡に当てはめて抜粋する。図や詳細については、ここでは省略する。

【株間と畝幅】 植付間隔において、発掘された「はたけ」遺構を扱う用語として、不統一や曖昧な表記が時に見られるため、用語を掲げておきたい。「株間」は畝に生育する作物と作物の根株の間隔をいう。「畝

幅」はサクタテの幅で、作付け時の条の間隔であり、畝と畝の中心の間隔で、サクとサクの中心の距離である。泥流畑では、この間隔が毎年新しく設定されるかまでは検証されないが、一定の畝幅を設定して耕作がなされていることが窺える。「株間」と「畝幅」の値を求めることは、作物、耕作者、農事の地域性などを特定する畑遺構解釈のデータとして掲げておくべき計測値である。

多くの場合、畝幅の計測は単独の畝サクを計測することで求められている。このことで生じる不明確な誤差を回避するため、本計測表は畑全面での本数の距離計測を条数により除すことで計測値を算出した。その際に、空中測量の精度により、適正を欠く表現の平面図部分については計測の対象としていない。

【サクタテ】 吾妻郡内の古老の聞き取り例によれば、一定の畝幅を効率的に割り出すために「マネ」や「サクタテナワ」と呼ばれる農具が用いられる。「マネ」は「真似木」とも呼ばれ、作付けの間隔を効率的に割り出すのに用いられる農具である。その幅は特別なものを除き作物に合わせて、2、3～数種類を使い分けるといふ。同じ作物でもサク幅は耕作者により微妙に異なることもある。「サクタテナワ」はサクタテをおこなう際に、一定幅と直線を割り出すのに用いられる。泥流畑におけるサクタテの用具として、これらの農具の使用を想定しておきたい。表中では、サクタテの幅を「幅」とし、寸尺の相当値を求めた。

【畝立ての高さ】 遺構平面図に記録された畝頂部とサク底部の標高差を算出した。その際には、最大値を求め、一地点だけの突出した値が畑の値とならないよう2地点以上で得られた最大値を「高さ」とした。堆積後の天明泥流堆積物による圧密や経年変化などについては検討できないため、当時の高さを保っているかは不明である。畝立ての高さの比較は、耕作における作業工程の進捗状況を把握する目安ともなる。

〈参考文献〉

黒田日出男 1984『日本中世開発史の研究』校倉書房。

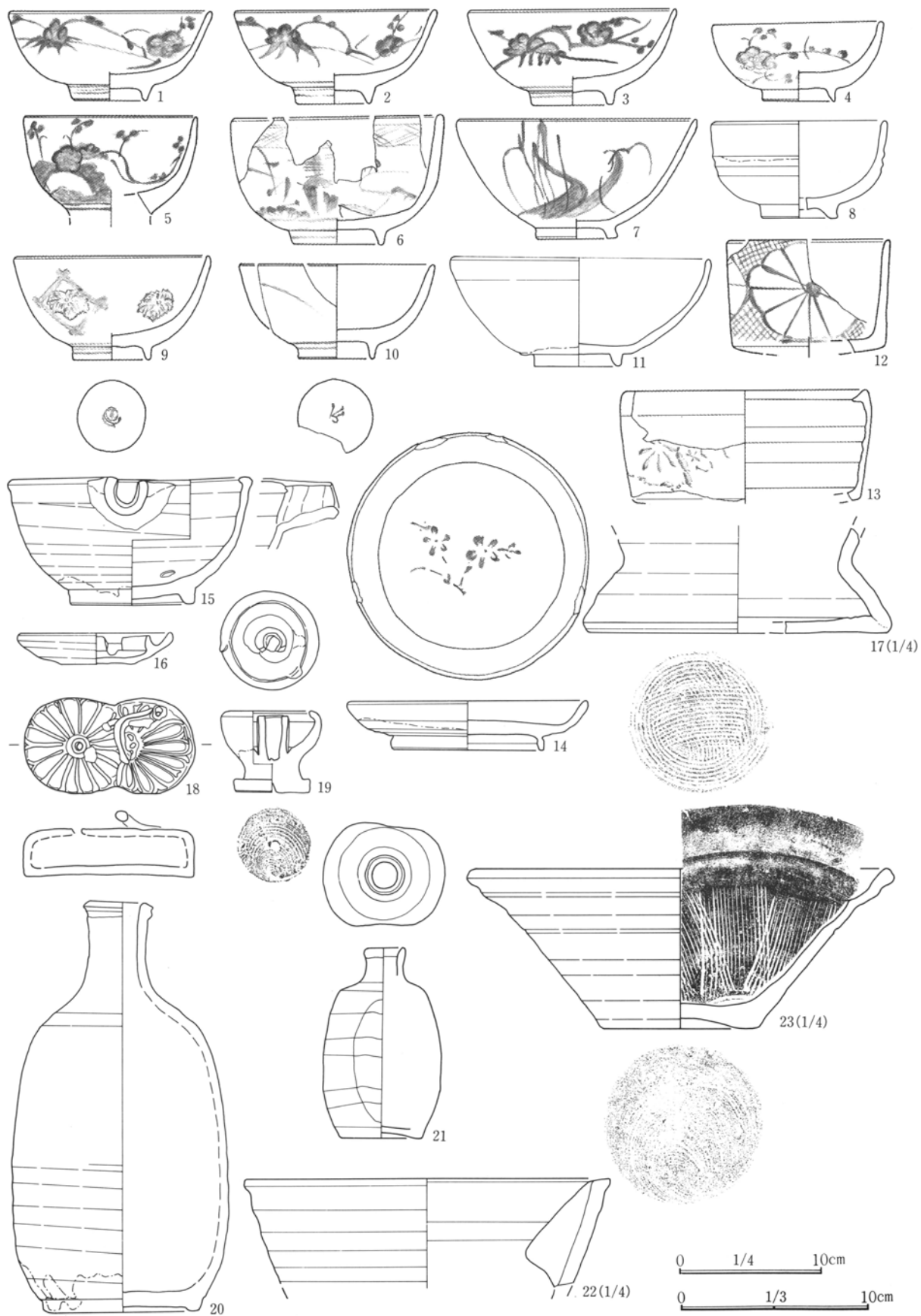
関俊明・諸田康成 1999「天明三年浅間災害に関する地域史的研究－北東地域に降下した浅間A軽石の降下日時の考古学的検証－」『研究紀要』16財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

関俊明2000「天明三(1783)年浅間泥流下の畑」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会。

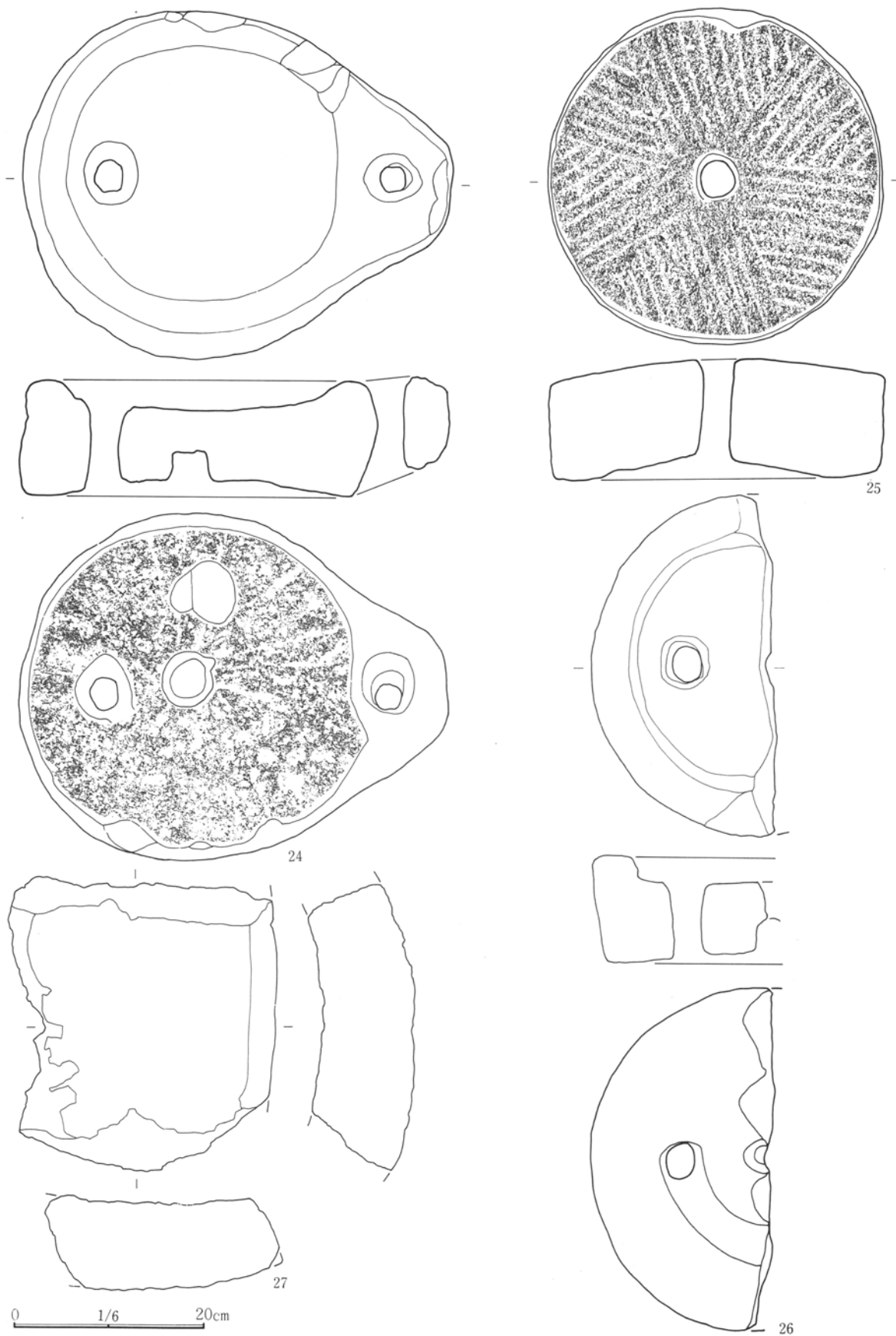
表9 1面畑計測表

2003/7/6

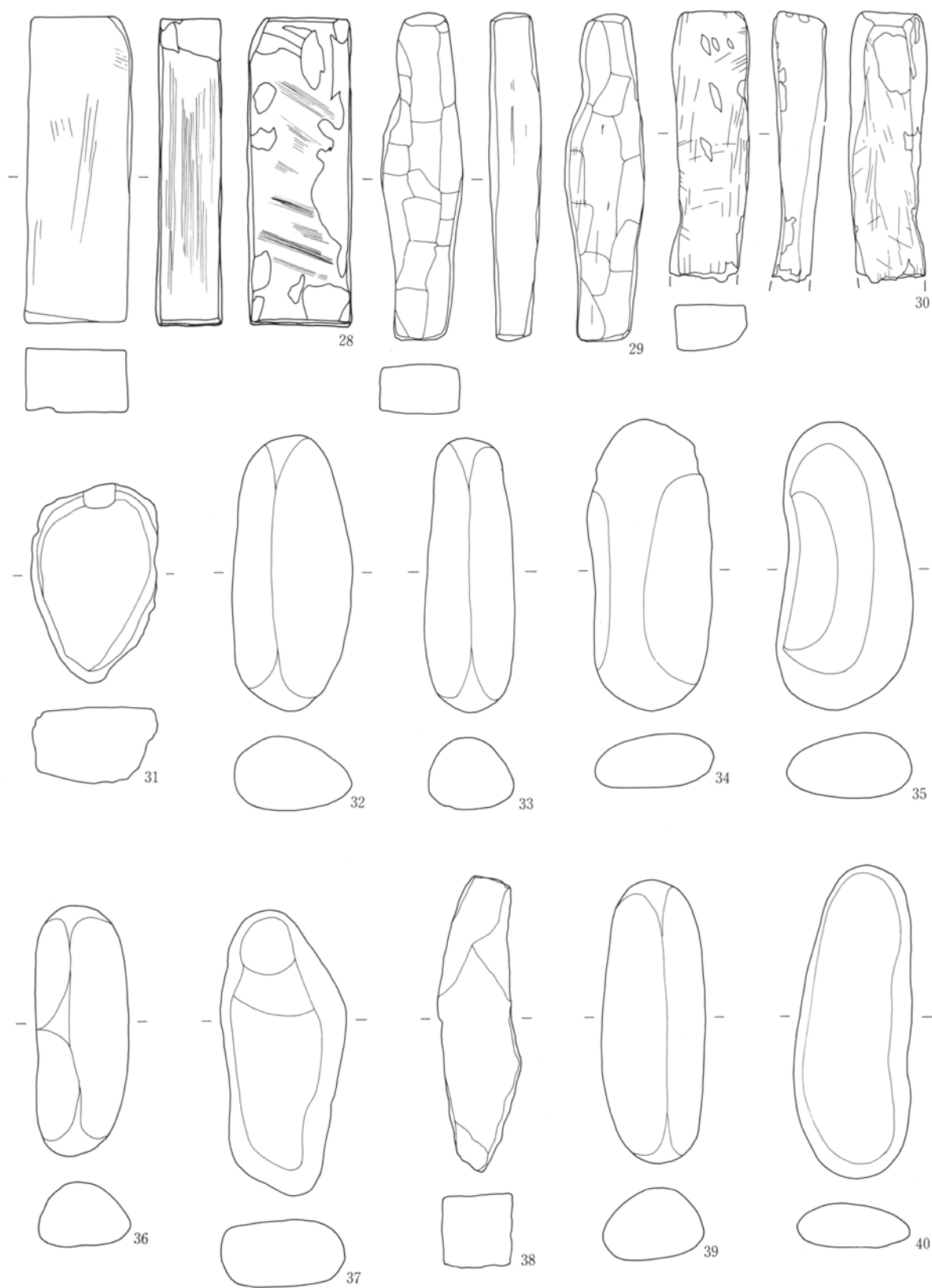
No	区	畝方向	条数	幅	相当尺寸	高さ	面積・m ²
1	I	東西	13	57.3	1.74	9	(59)
2	I	東西	13	56.9	1.72	7	(60)
3	I	南北	20	59.7	1.81	7	(134)
4	I	南北	10	58.9	1.78	4	(30)
5	I	東西	—	—	—	—	(83)
6	I	東西	8	115	3.48	17	(30)
7	II	南北	3	55	1.67	10	(9)
8	II	東西	9	55	1.67	11	23
9	II	南北	5	81	2.45	17	25
10	II	東西	5	80	2.42	9	30
11	II	南北	2	75	2.27	4	8
12	II	南北	21	99.5	3.02	17	134
13	II	東西	19	54.2	1.64	8	82
14	II	東西	18	53.9	1.63	6	87
15	II	東西	17	54.1	1.64	5	83
16	II	東西	10	55	1.67	5	91
17	II	東西	8	56	1.70	6	75
18	II	東西	—	50	1.52	—	98
19	II	南北	6	97.5	2.95	11	34
20	II	南北	12	96.4	2.92	11	63
21	II	東西	23	51.4	1.56	10	48
22	II	東西	—	50.7	1.54	8	35
				46.6	1.47		
23	II	東西	—	100	3.03	5	28
24	II	東西	—	51	1.55	8	42
25	II	東西	—	80	2.42	12	32
26	II	—	—	—	—	—	57
27	II	南北	13	105	3.17	13	85
28	II	東西	11	108	3.26	17	85
29	II	東西	19	55.6	1.68	10	185
30	II	南北	19	55.6	1.68	8	(116)
31	II	南北	18	56.2	1.70	9	(77)
32	II	東西	—	112	3.38	8	53
33	II	東西	3	77.5	2.35	14	15
34	II	東西	14	51.5	1.56	9	50
35	II	東西	10	53.3	1.62	10	41
36	II	東西	11	51.7	1.57	12	(28)
37	II	南北	7	102	3.09	20	(32)
38	II	南北	13	40.5	1.23	3	(37)
39	II	東西	—	66	2.00	7	(24)
40	II	東西	6	50	1.52	8	16
				96	2.91		
				103	3.11		
				51.8	1.57		99
41	VI	南北	19	51.6	1.56	13	66
				111	3.37		
42	VI	東西	17	111	3.35	13	(126)
				56	1.70		
43	VI	南北	29	54.6	1.65	—	(192)
44	VI	南北	(28)	54.7	1.66	7	(133)
45	VI	東西	7	75	2.27	—	14
				100	3.03		14
46	VI	南北	15	58.8	1.78	9	74
47	VI	南北	8	103	3.13	—	55
48	VI	東西	3	71.7	2.17	15	(29)
49	VI	東西	10	46	1.39	7	17
				113	3.41		
50	VI	南北	10	115	3.48	19	(98)
51	VI	東西	11	56.4	1.71	—	47
52	VI	東西	11	111	3.35	21	108
53	VI	南北	4	47.5	1.44	6	(17)
54	VI	南北	15	101	3.07	12	123
				51.9	1.57		
55	VI	南北	12	75	2.27	9	79
56	VI	東西	6	96	2.91	12	68
57	VI	南北	14	56	1.70	7	38
58	VI	南北	8	45.7	1.38	8	19
59	VI	南北	3	56.7	1.72	—	16
60	VI	東西	6	46.7	1.42	5	16
61	VI	東西	(8)	62.5	1.89	16	12
62	VI	東西	—	45	1.36	4	15
63	VI	南北	—	60	1.82	9	(34)
64	VI	東西	14	46.7	1.42	15	(60)



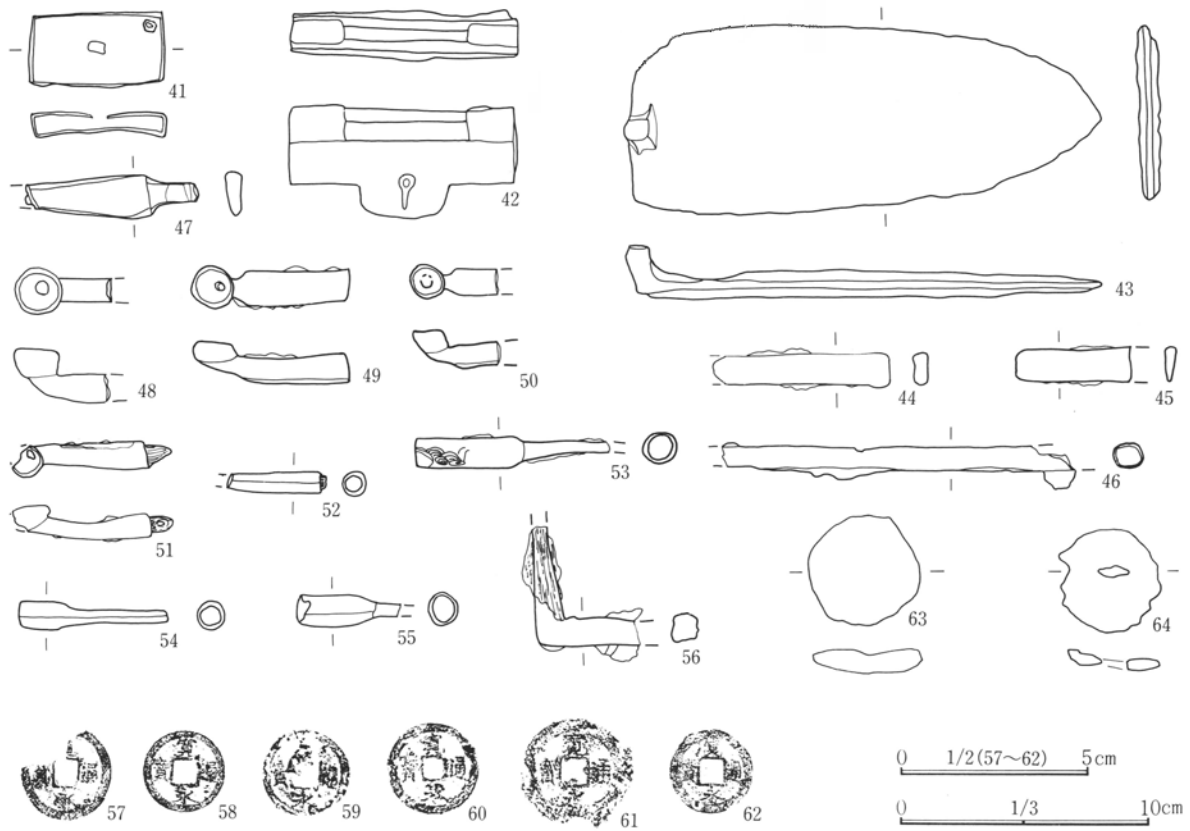
第126图 II区1号建物跡出土遺物(1)



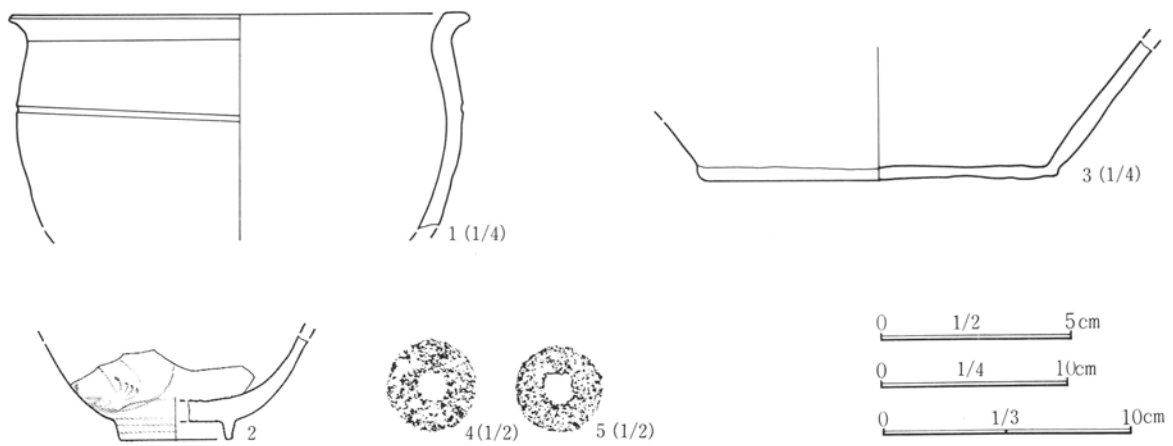
第127图 II区1号建物跡出土遺物(2)



第128图 II区1号建物跡出土遺物(3)



第129図 II区1号建物跡出土遺物(4)



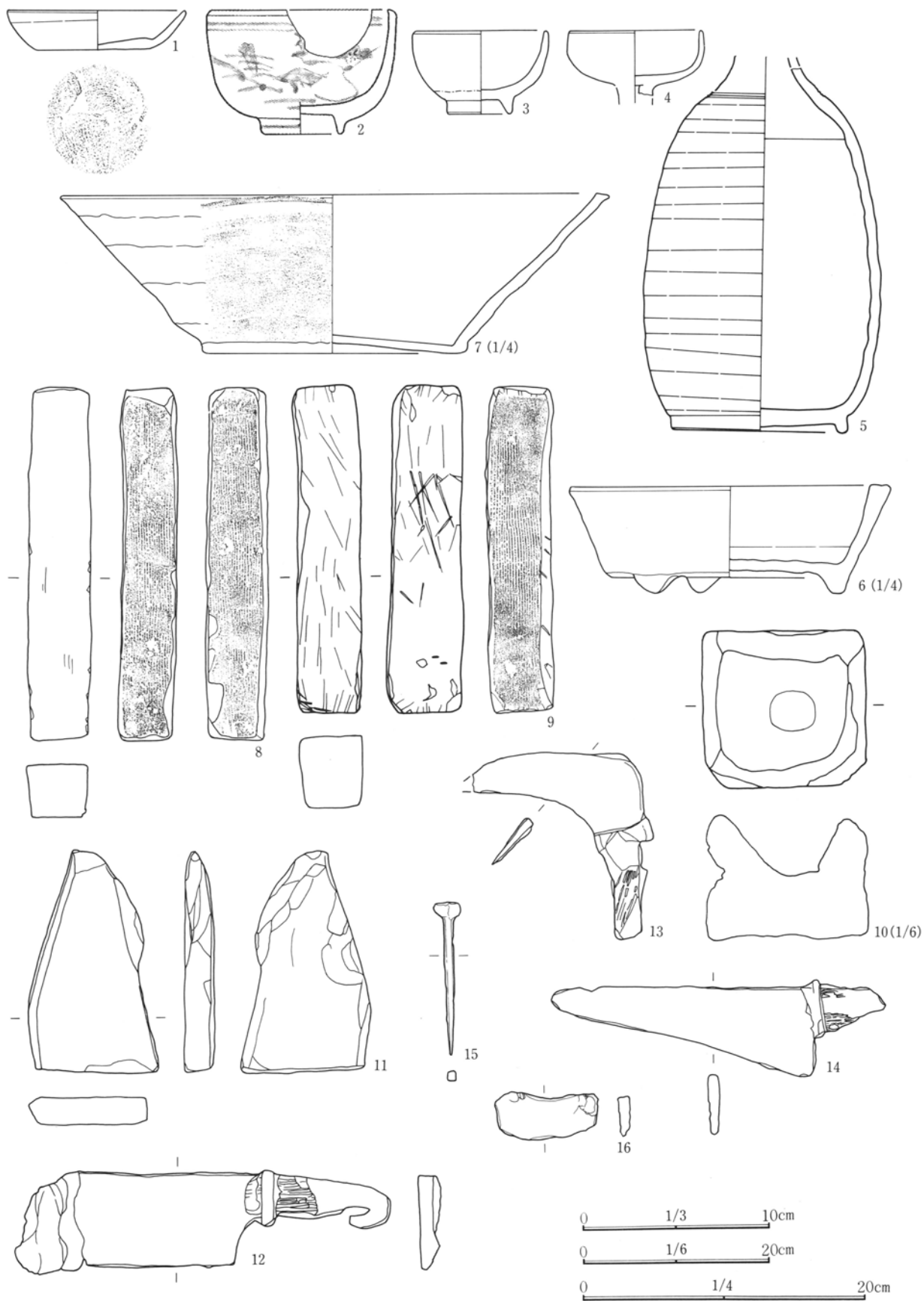
第130図 II区2号建物跡出土遺物

10. 出土遺物

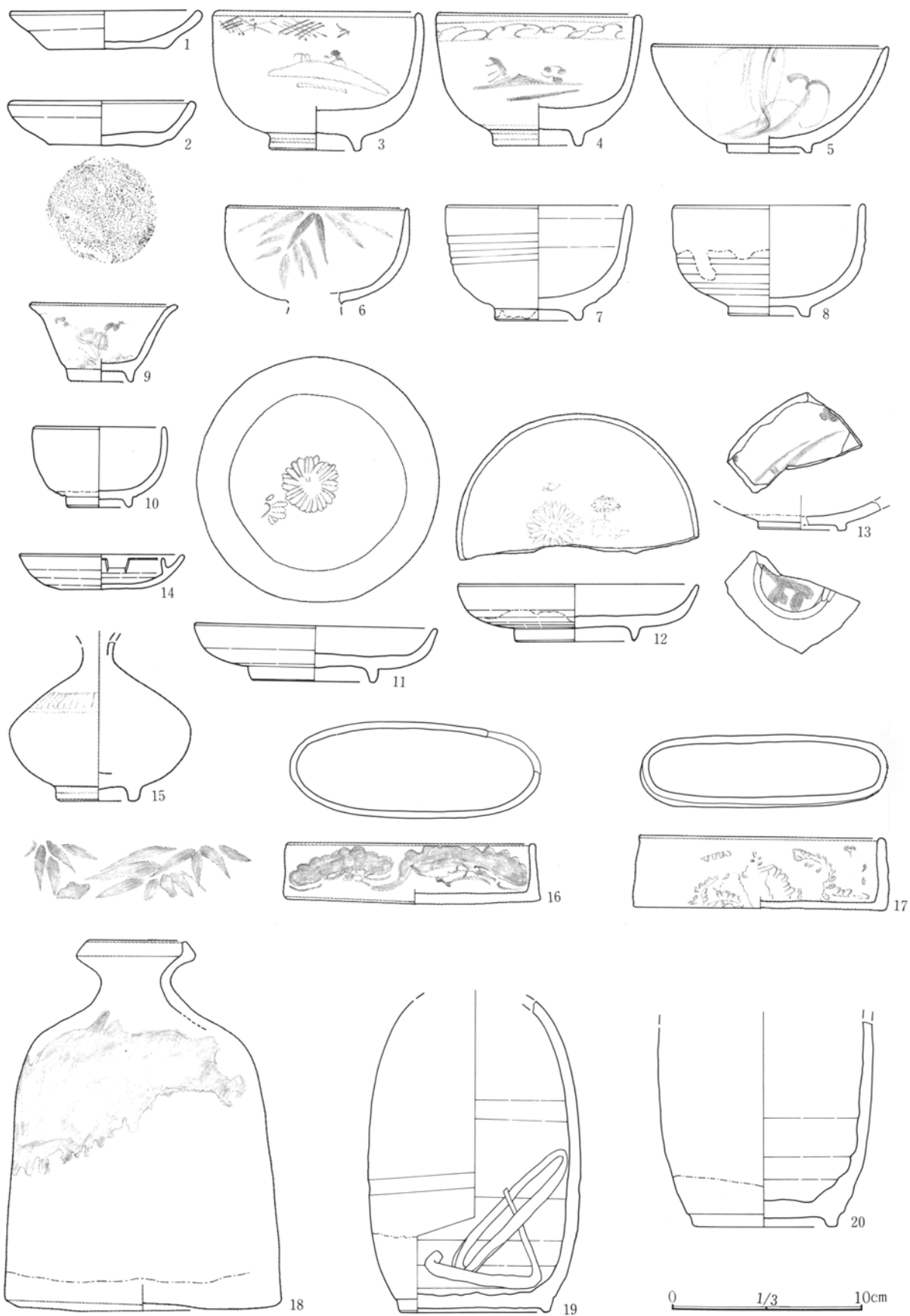
上福島中町遺跡の調査において1面(天明3年埋没)で出土した遺物の総点数は数千点を越えており、特に建物に伴って出土しているという点からも特筆されるもので、江戸時代後期の生活を知る上で極めて良好な資料と言える。

II区1号建物跡(第126~129図、PL59・60・74)

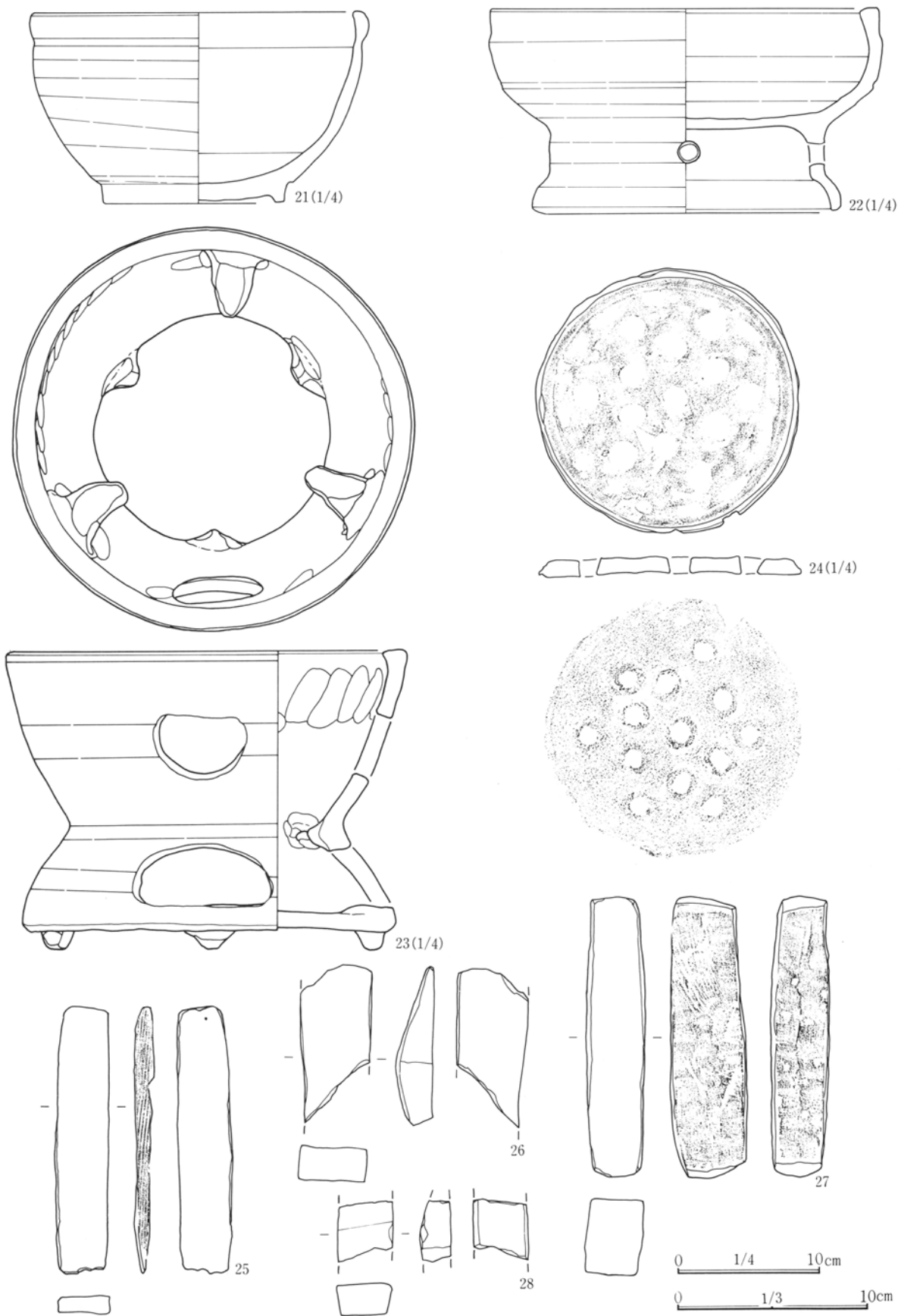
出土した遺物はそれほど多いとはいえないが、陶磁器類では碗が多く皿は1点のみである。その他片口、徳利、すり鉢などの什器類のほか、灯明皿、ひょうそく、水滴などが出土している。石臼や砥石のほか、銅、



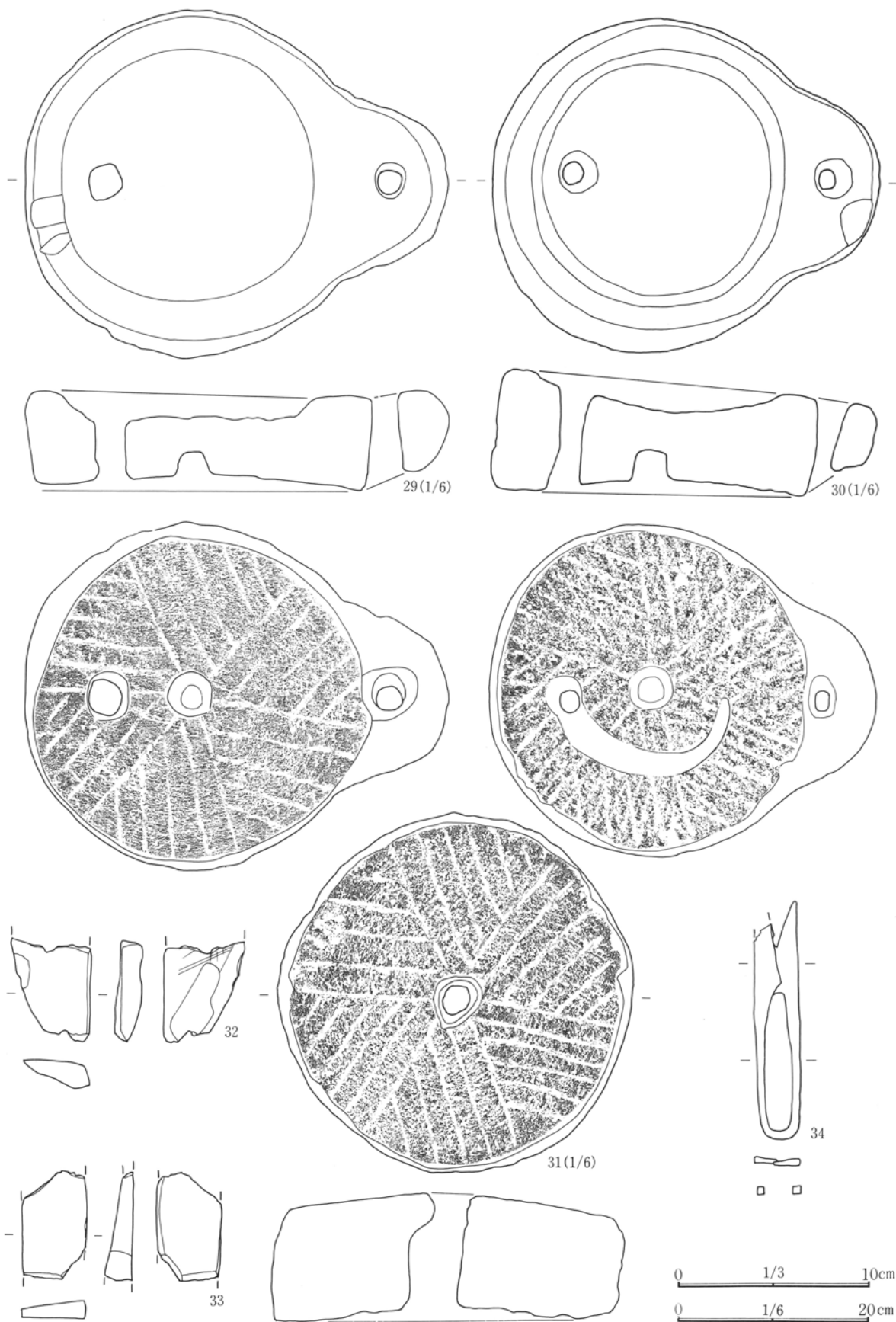
第131图 II区3号建物跡出土遺物



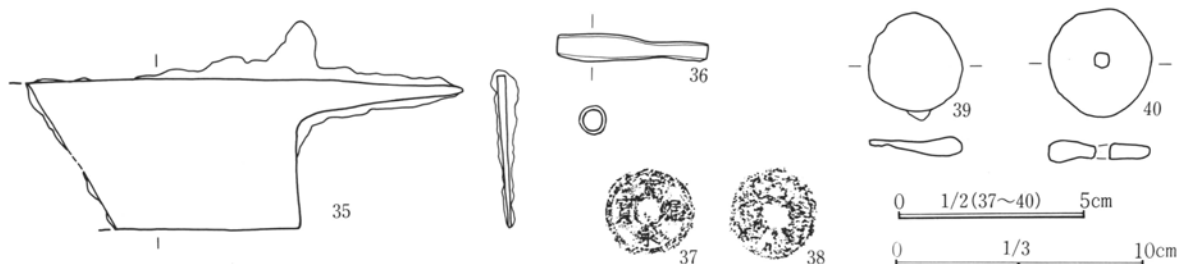
第132图 II区4号建物跡出土遺物(1)



第133图 II区4号建物跡出土遺物(2)



第134图 II区4号建物跡出土遺物(3)



第135図 II区4号建物跡出土遺物(4)

鉄製品として銭や煙管などの他、錠、鋤などが見られる。いわゆる農具の類は出土していない。

II区3号建物跡(第131図、P L60)

極めて規模の小さい建物で出土遺物も比較的少なかった。若干の碗や鍋、徳利などの陶磁器類と砥石、鎌、鉋が出土している。鍋、徳利は地上から浮いた泥流中より出土しており、板の間に置いてあった状態と考えられる。鉋や砥石は北側の礎石部分で検出されている。

II区4号建物跡(第132~135図、P L60・61・75)

在地系の皿、陶磁器碗、皿、瓶などの他鬻水入れが2点出土している。焜炉は建物の北西隅で出土している。本建物では石臼の出土が目立つ。板の間において一対が使用時の状態で置かれていた。また土間部分においても出土している。鉄製品は鉋、包丁、煙管の他銅、鉄銭が出土している。

II区6号建物跡(第136~142図、P L61~64・75)

極めて多くの遺物を出土している。在地系の皿類をはじめ碗、皿などの陶磁器類の他香炉、灯明皿さらには水注、徳利などが見られる。石製品では石臼、砥石などが見られる。さらに破損品ではあるが硯が一点出土している。この建物では金属製品の出土が顕著で、釜、鍋、火消し壺といった器物をはじめ、鉋、鎌、包丁、刀子、刀の鏝などの刃物類さらに錠、火打ち金、矢立などが見られる。

銅製品では煙管、銅・鉄銭なども出土している。出土場所は、鉄釜は竈に掛かった状態でその右脇に火消し壺が置かれていた。鉄鍋は焜炉裏のすぐ脇で出土している。その他の遺物も石臼類を除いて、焜炉裏周辺や建物の北側に寄った部分に集中していた。

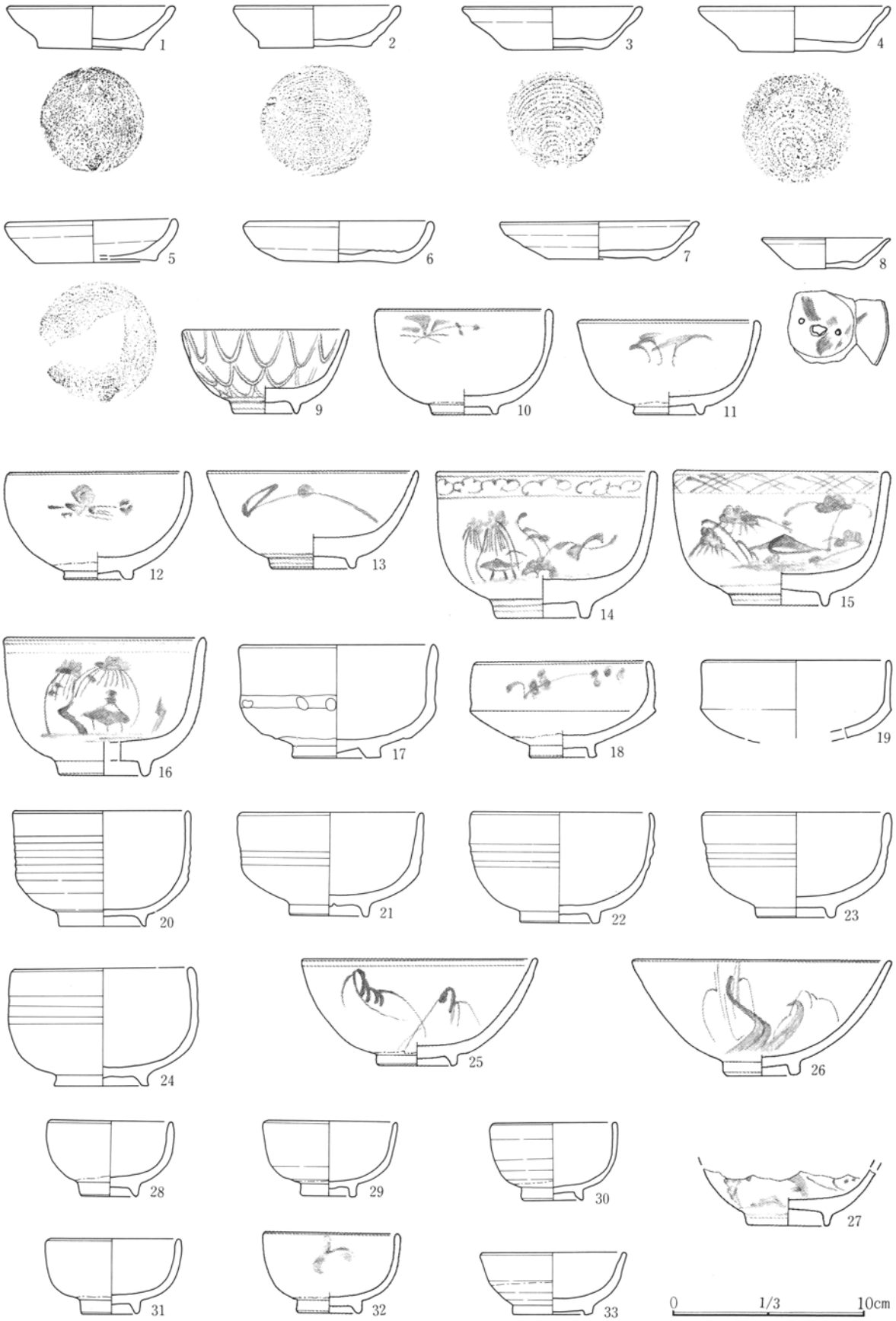
VI区1号建物跡(第143~146図、P L64・65・76)

出土遺物は碗、皿、香炉、鉢、徳利などの他に焙烙が出土している。石製品は少なかったが、土間において下臼が置かれた状態で検出されている。鉄製品は鍋の他、鎌、火打ち金、釘などが見られるが点数は少ない。これに対して銅製品は多く、煙管類、多量の銅(鉄)銭が床下に蒔かれたような状況で出土している。また、模造小判(あて小判)が北側の礎石部分より出土している。

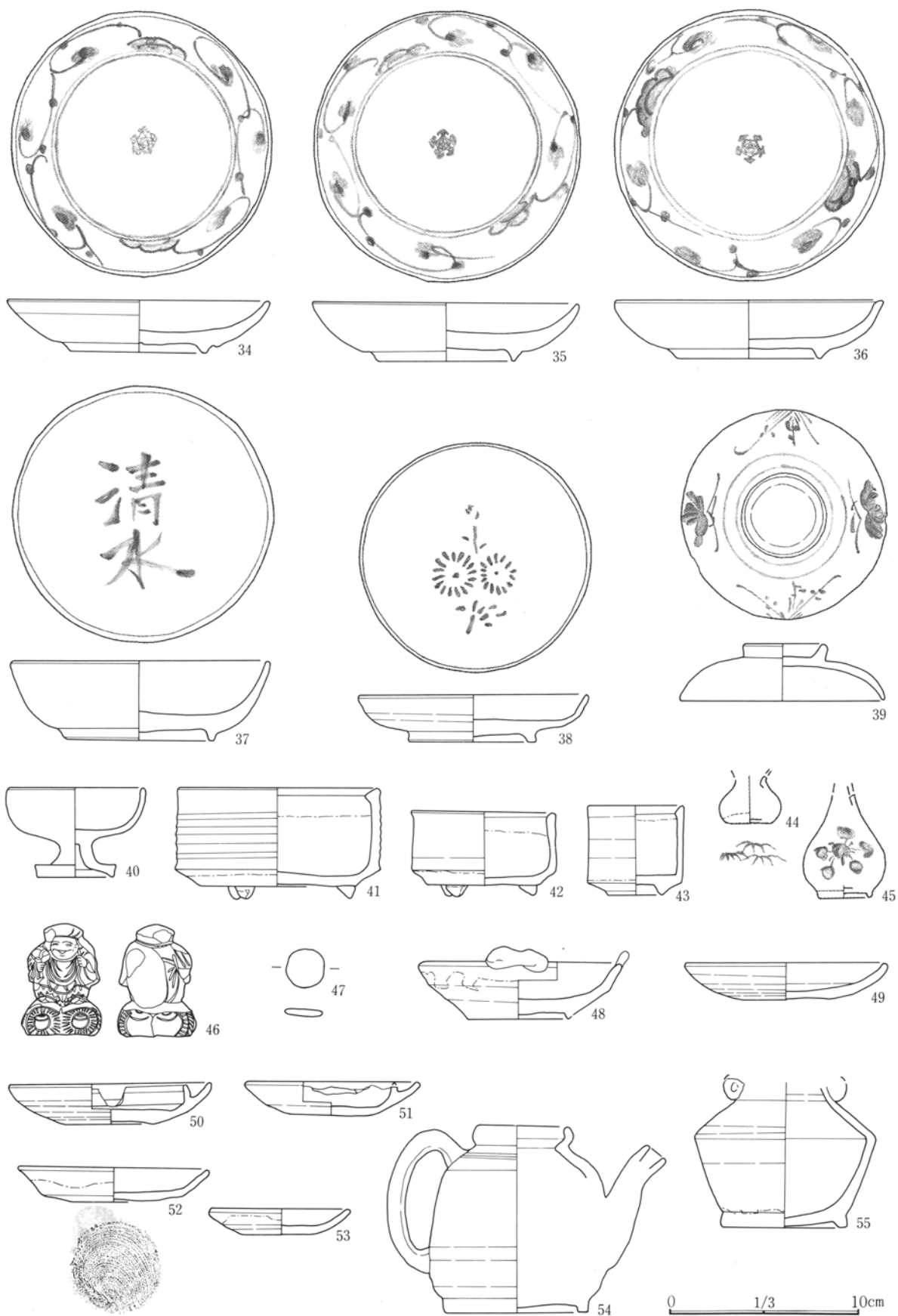
さらに、大形の捏ね鉢が、残存していた壁の内側角部分に押し付けられて二つに割れた状態で出土している。ヘヤの隅に立てかけられていたものが、泥流の土圧によって壊れたものと考えられる。

VI区2号建物跡(第147~153図、P L66・67・76・77)

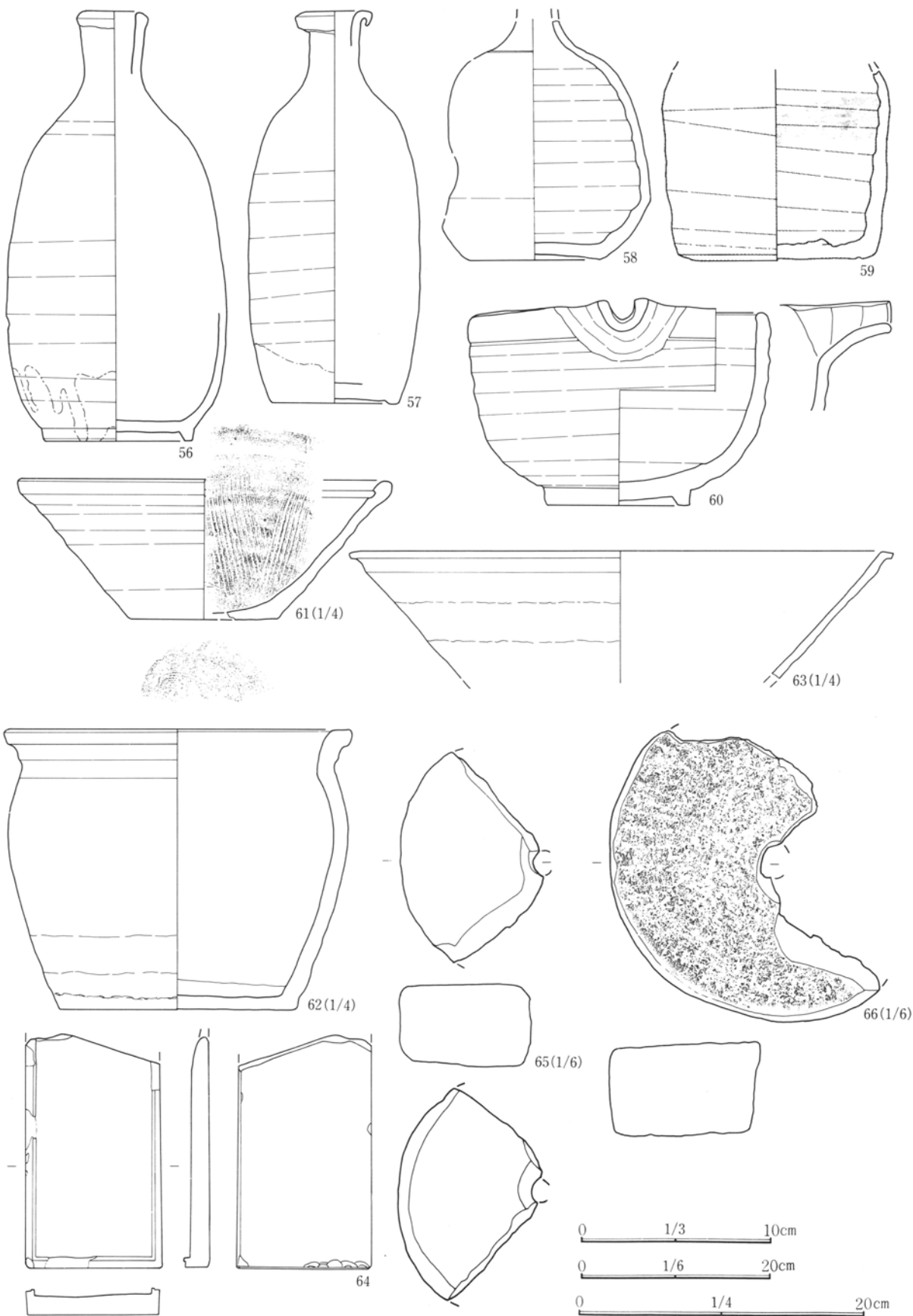
本建物は検出された建物の中で最も規模の大きなものである。遺物も多く出土しており、陶磁器類では碗や皿、瓶、甕、香炉、灯明皿などの他、焙烙、土製鍋などがある。石製品類では、砥石が多く、形状、大きさも様々なものが見られる。銅、鉄製品も多く特にこれらは建物西側に設けられた内倉と思われる場所でまとまって出土している。この部分は母屋に対して地面一段高くなっており、調査時の状況から地面部分にはムシロが敷かれていたものと考えられる。内部には多くの銅、鉄製品がまとまって検出された。刀をはじめ錠、煙管、矢立、印籠などや銅製の下ろし金、鉋や鋤などの農具の類も見られた。さらに指し銭などが木箱、



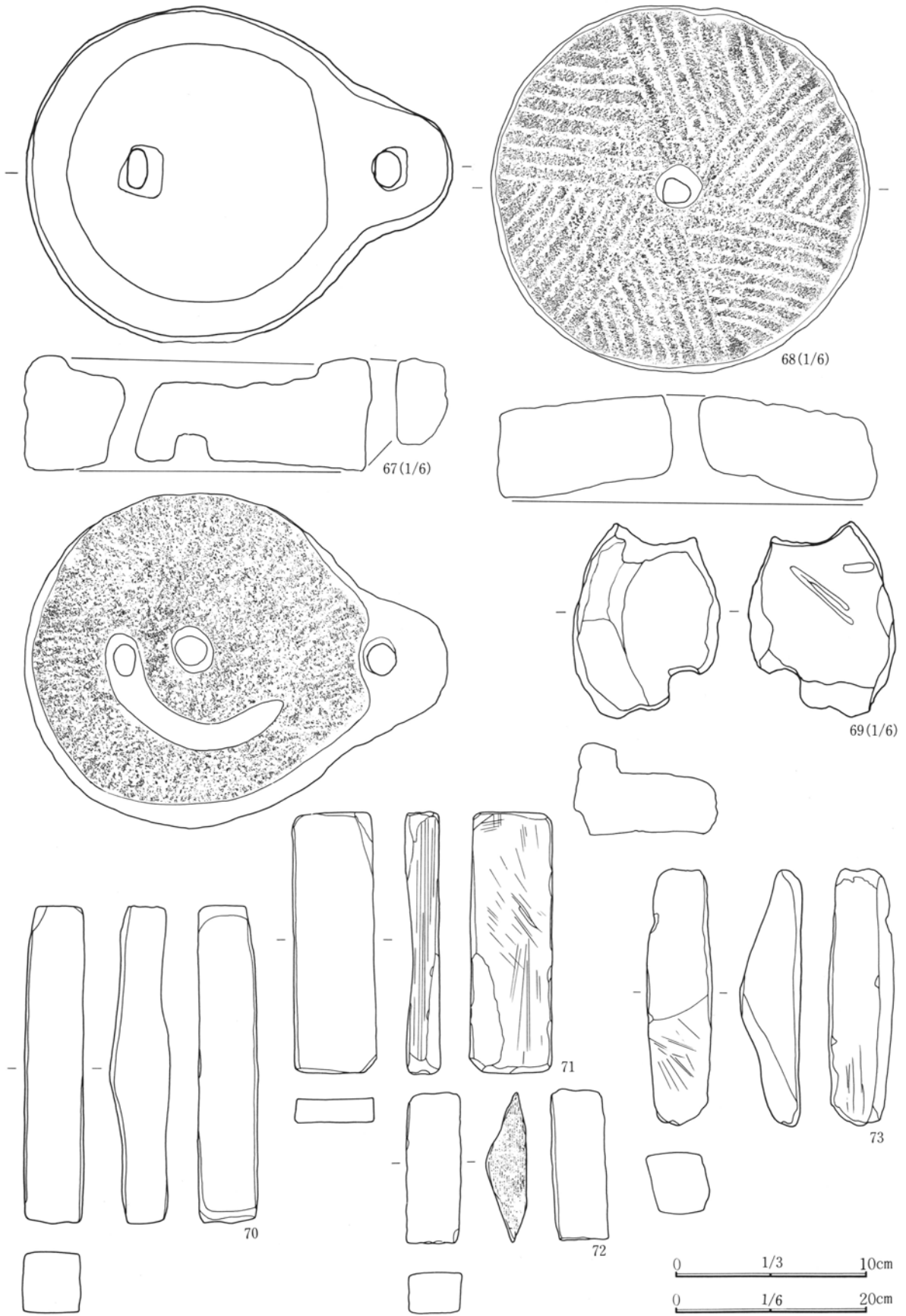
第136图 II区6号建物跡出土遺物(1)



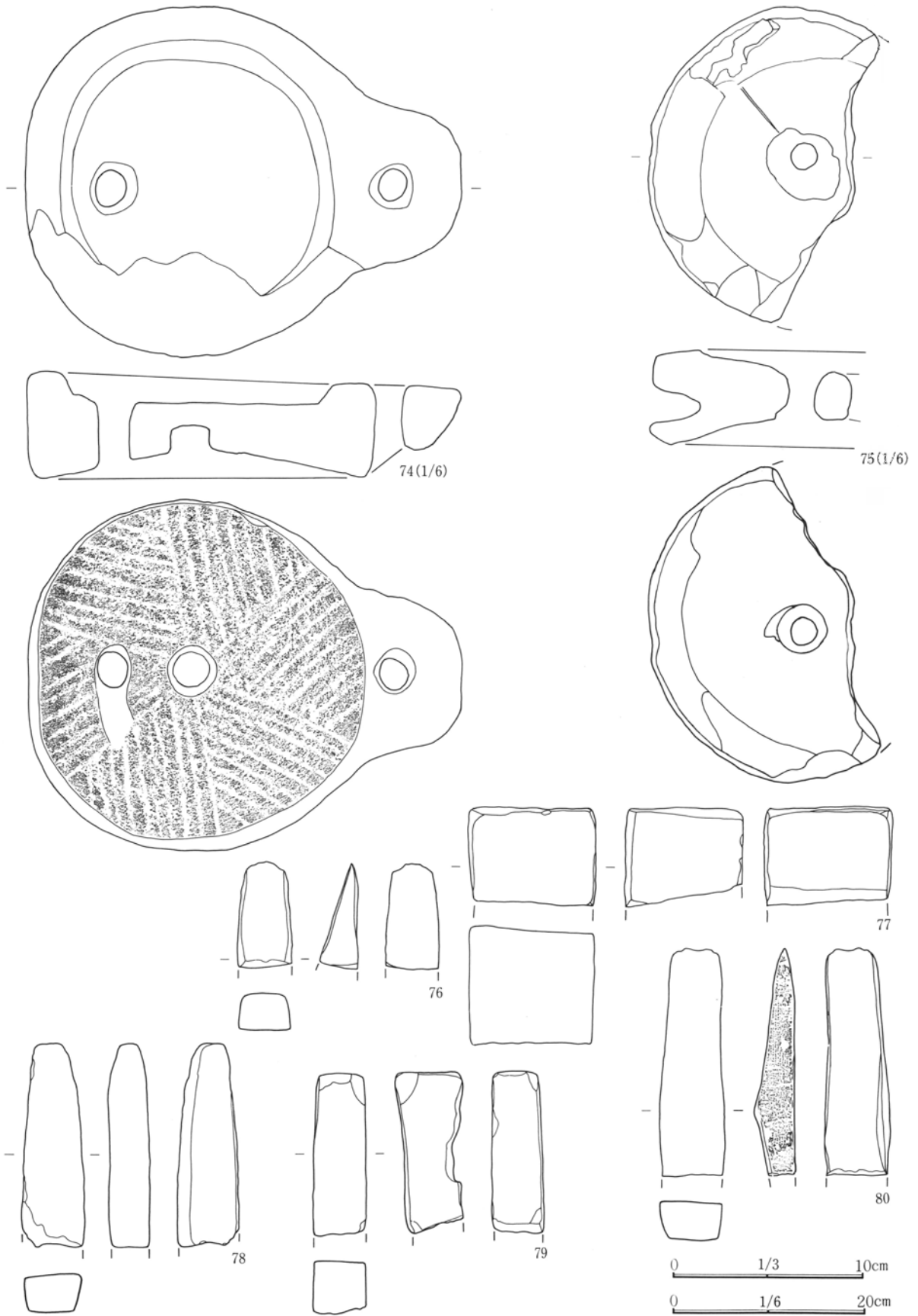
第137图 II区6号建物跡出土遺物(2)



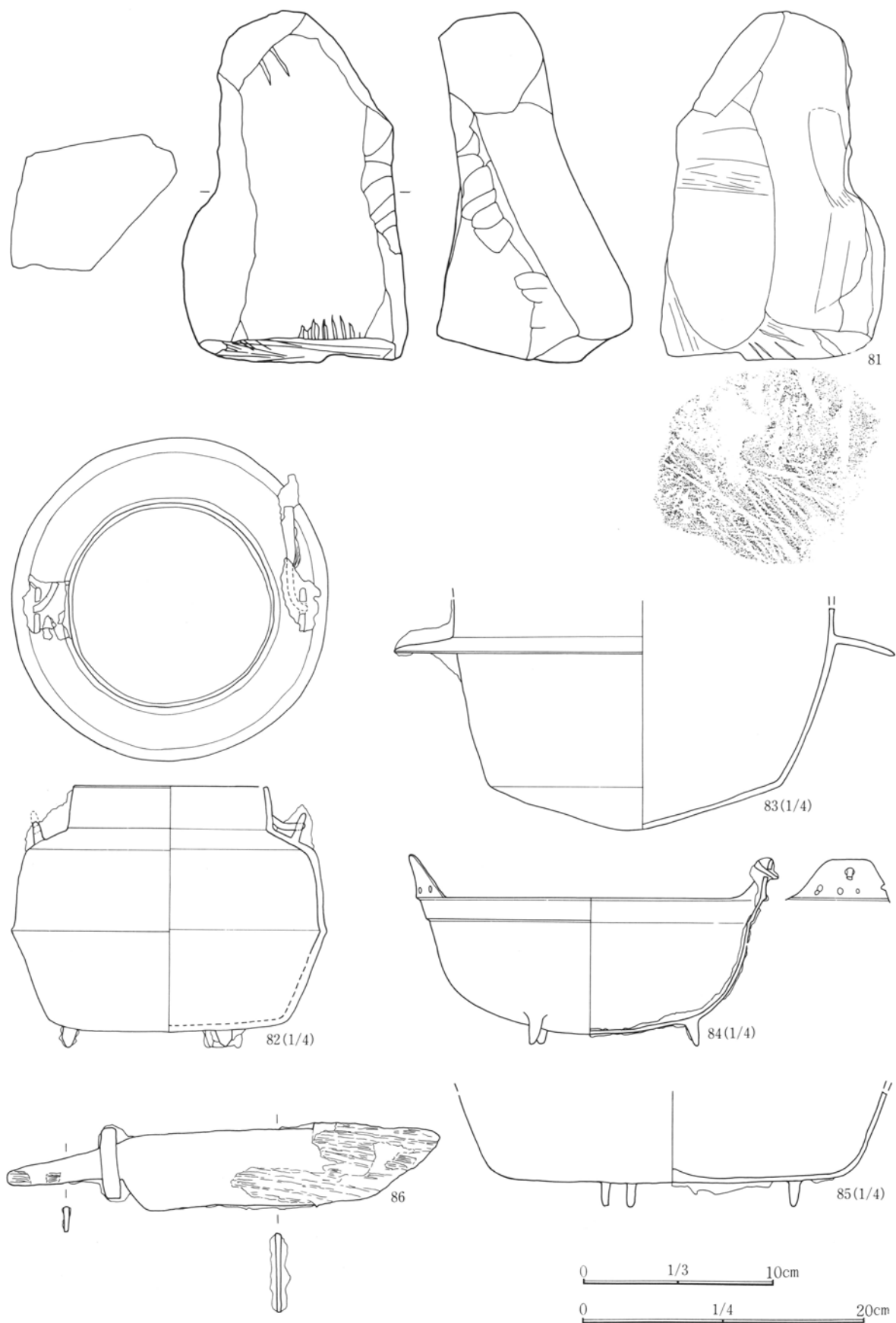
第138图 II区6号建物跡出土遺物(3)



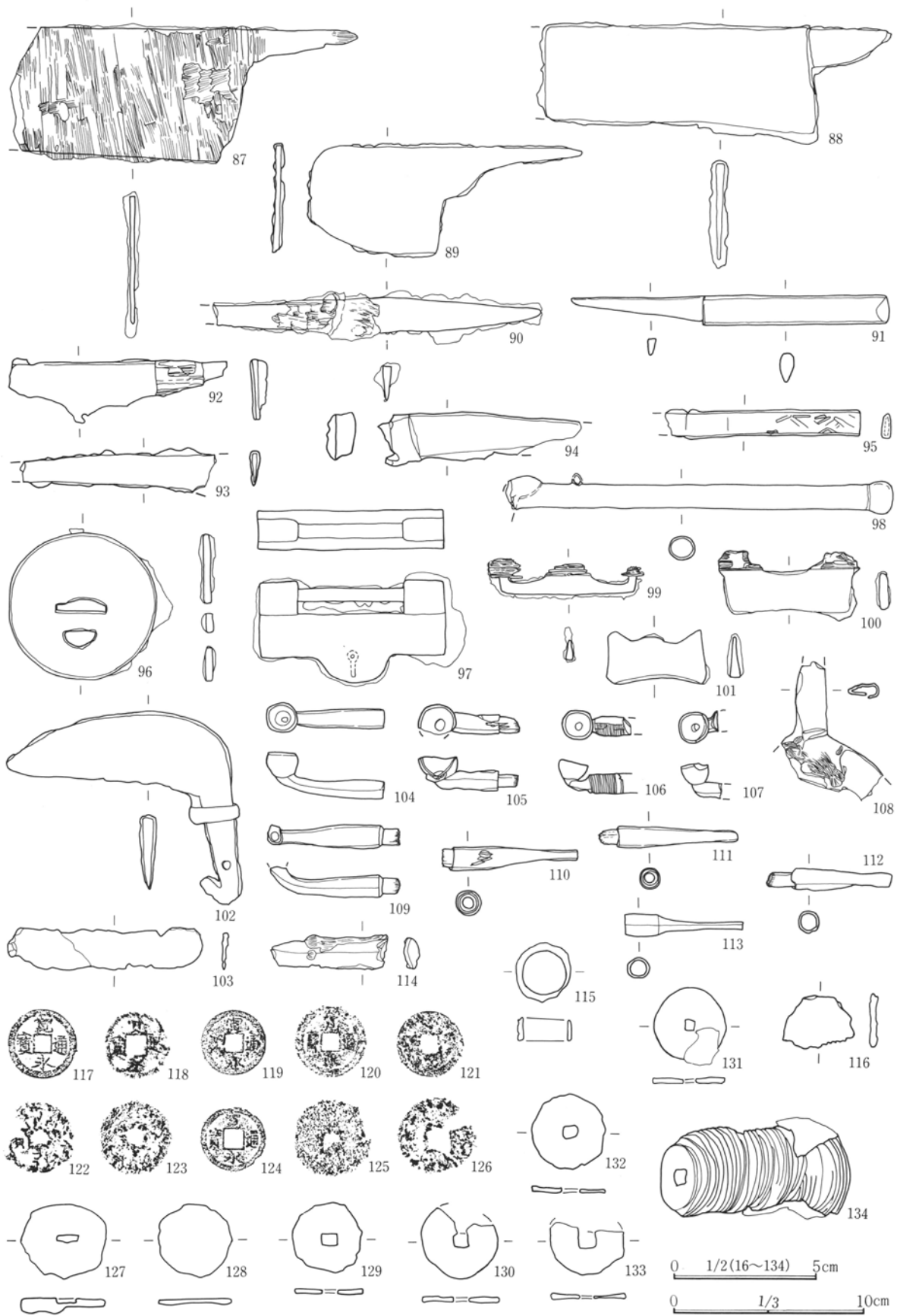
第139图 II区6号建物跡出土遺物(4)



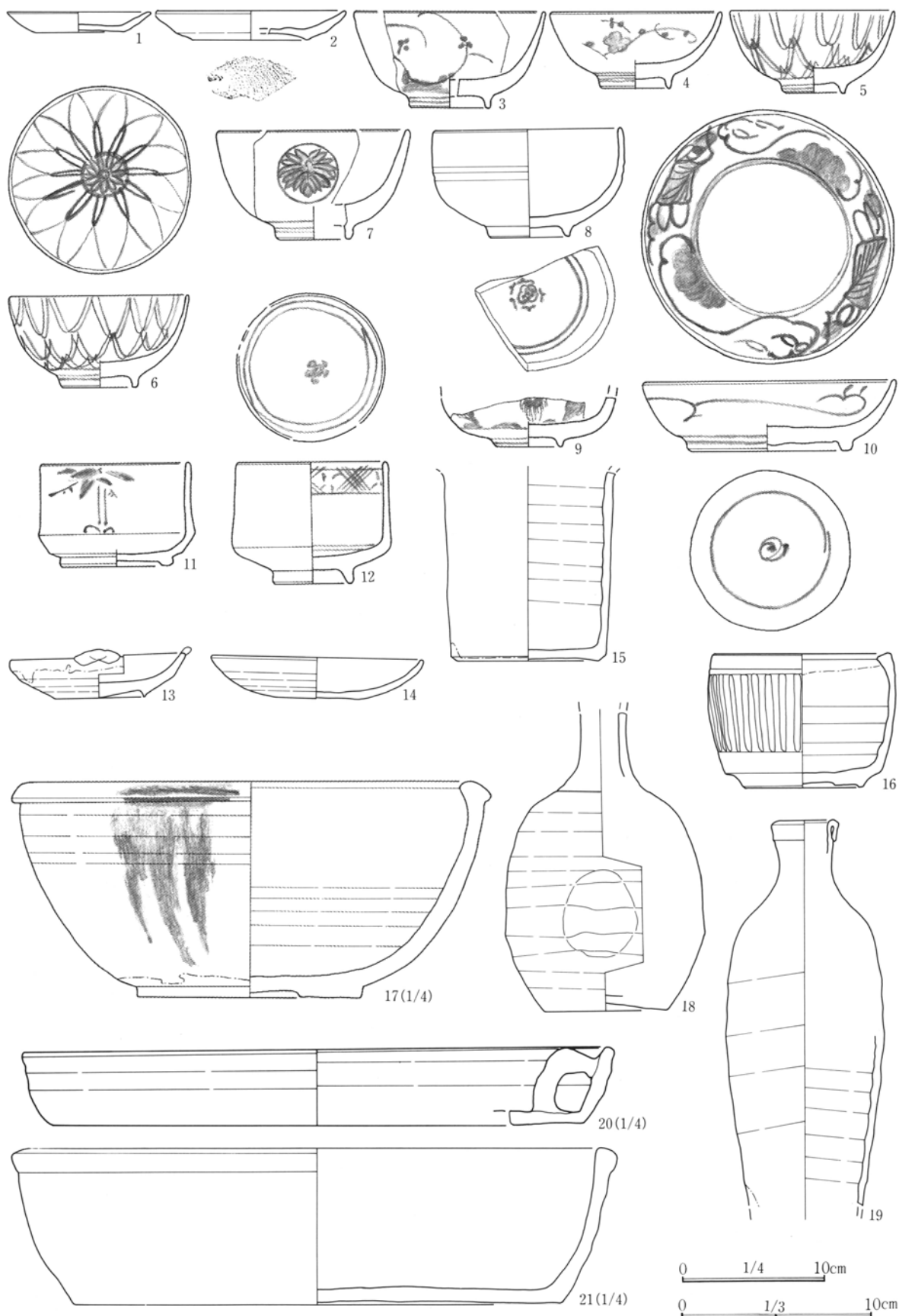
第140图 II区6号建物跡出土遺物(5)



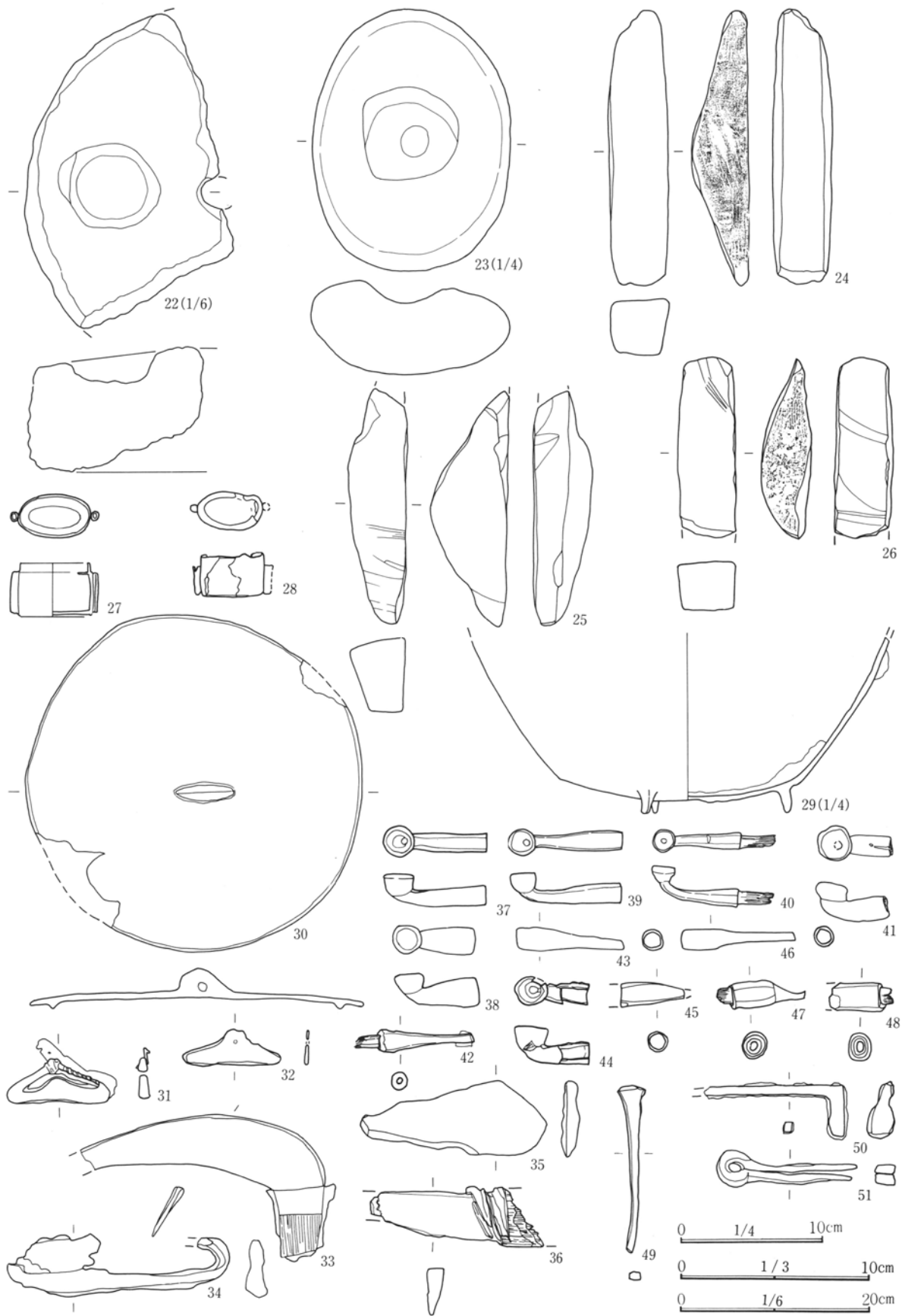
第141图 II区6号建物跡出土遺物(6)



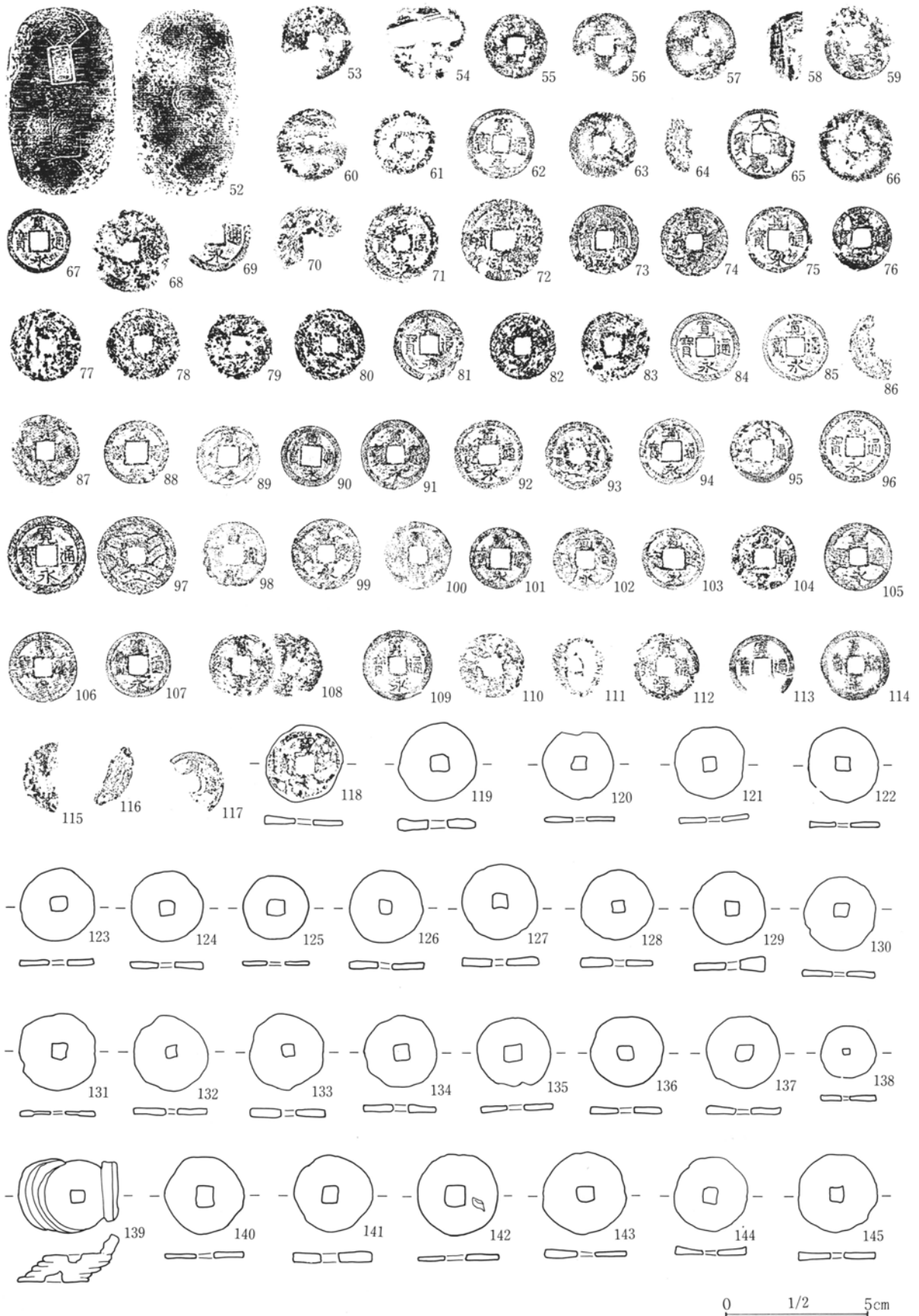
第142图 II区6号建物跡出土遺物(7)



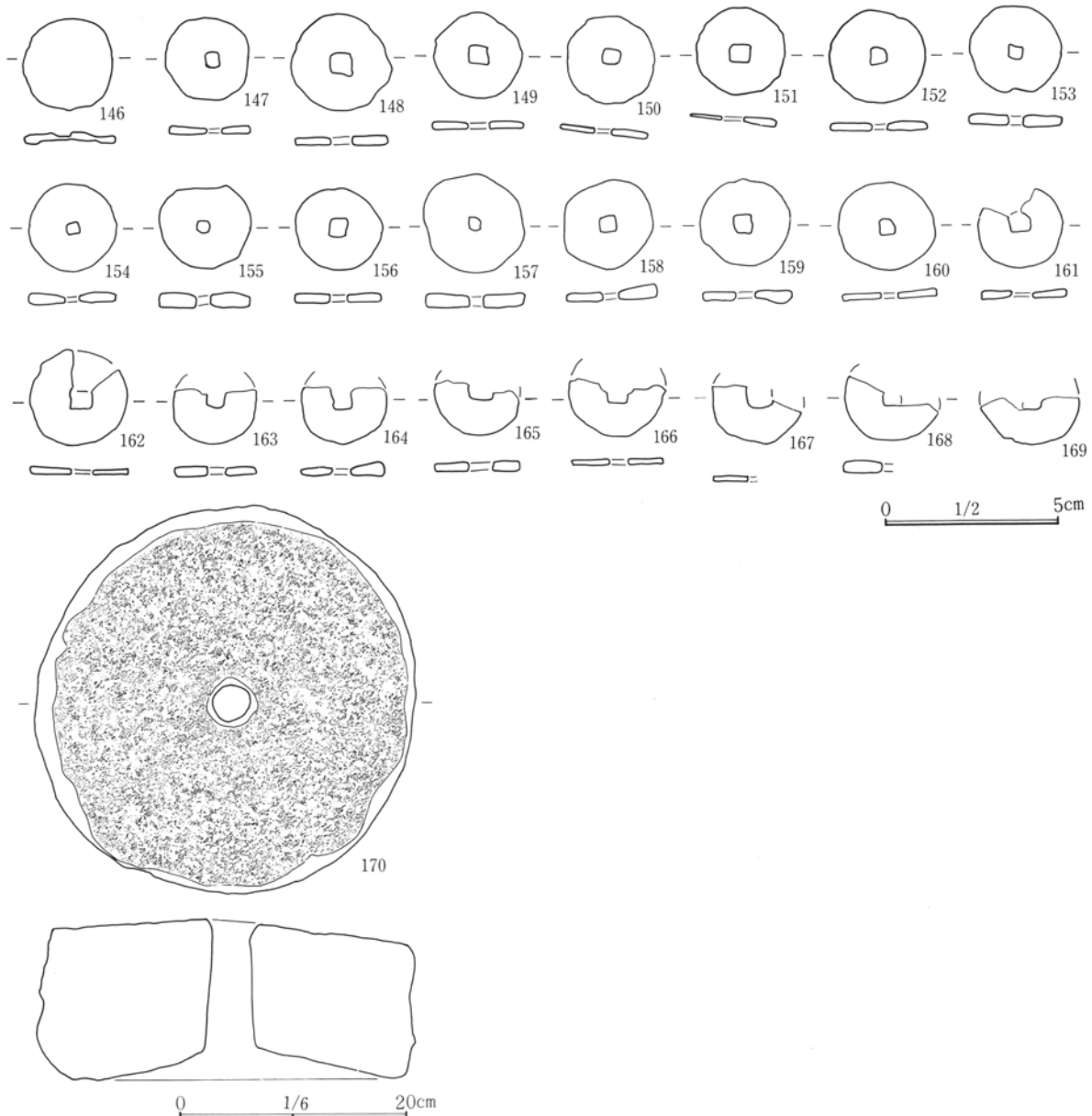
第143图 VI区1号建物跡出土遺物(1)



第144图 VI区1号建物跡出土遺物(2)



第145图 VI区1号建物跡出土遺物(3)

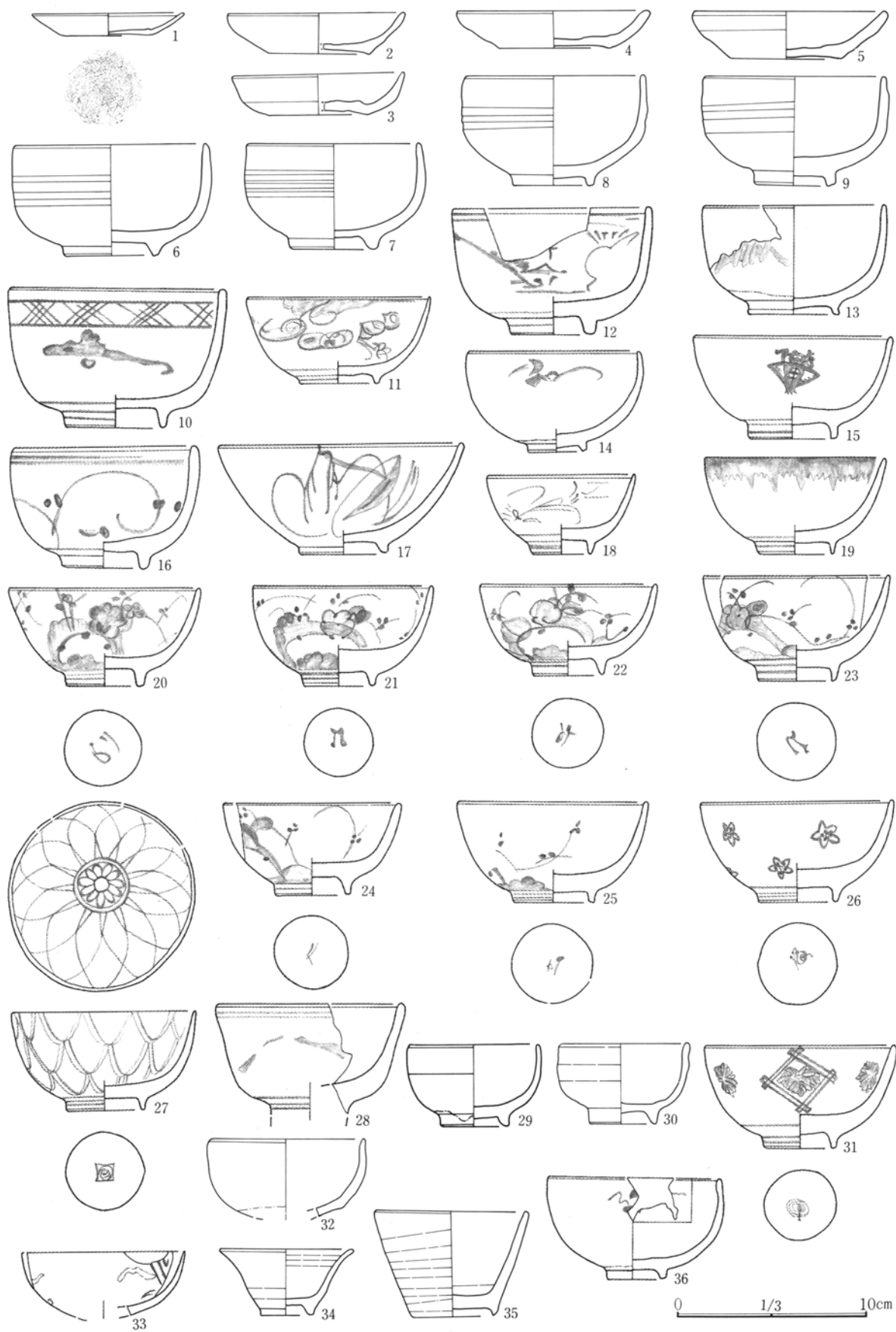


第146図 VI区1号建物跡出土遺物(4)

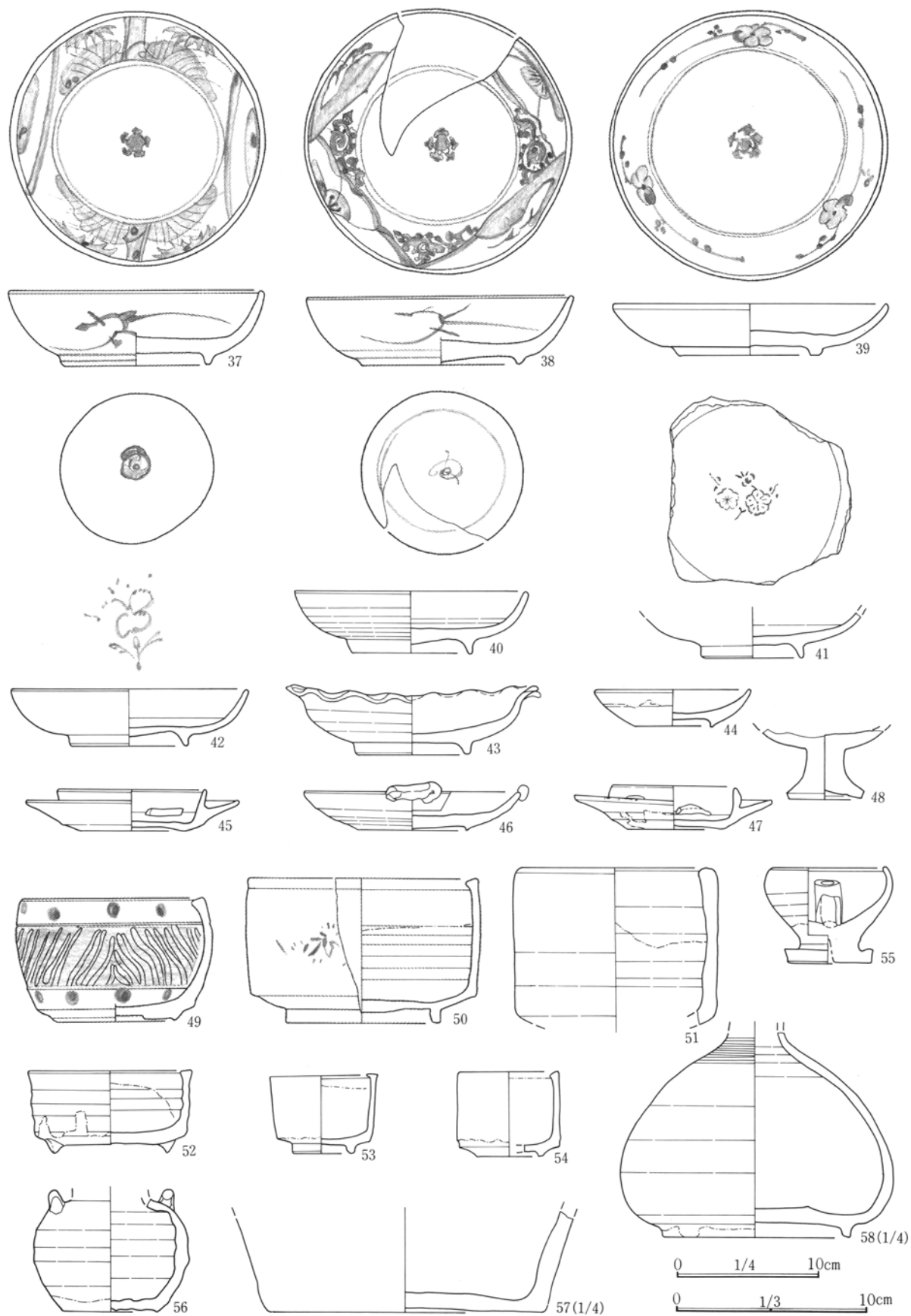
または布袋などに入れられていたと思われる状況で出土している。また、漆に部分的に金粉が残る板材数本、さらには位牌の基段部分ではないかと思われるものも出土している。さらに朱漆の椀も3点ほど出土しているが、木質部分は失われており、わずかに薄皮状になった漆が残っていた。

VI区3号建物跡 (第154~158図、P L 68・69・77)

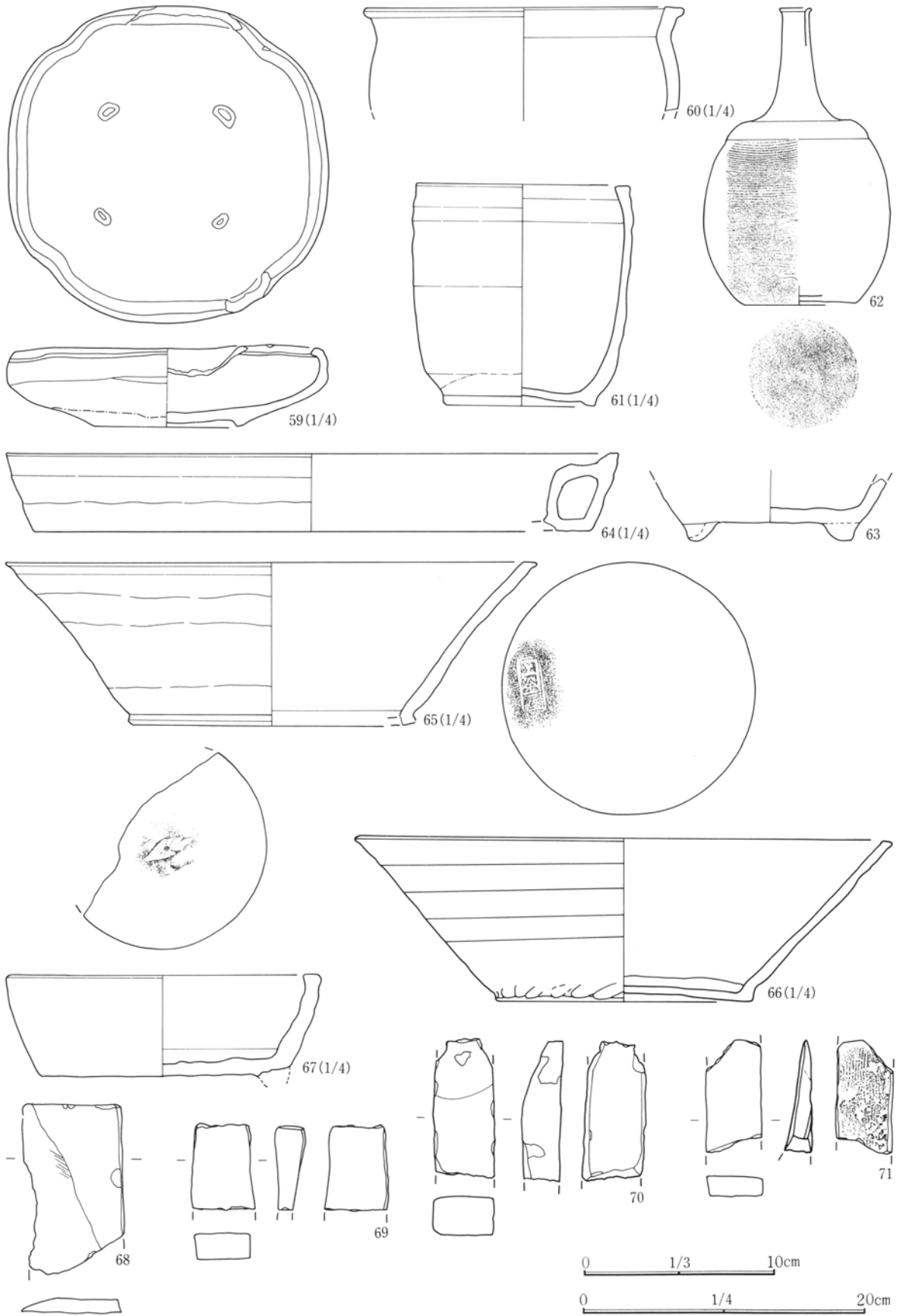
在地系の皿をはじめ陶磁器類では若干の碗、皿類、両耳壺、鬚水入れ、灯明皿などの他仏飯器、水滴などが出土している。大形品類ではすり鉢、鍋、焙烙などが見られる。石製品では土間に一対で置かれた状態で石臼が出土している。また転用されたと思われる硯1点がある。砥石も出土しているが少ない。鉄製品は鉈、火打ち金、蓋、鉄銭等で、銅製品としては煙管、銅銭が見られる。遺物の多くは囲炉裏周辺および、部屋の北側部分において出土している。



第147图 VI区2号建物跡出土遺物(1)



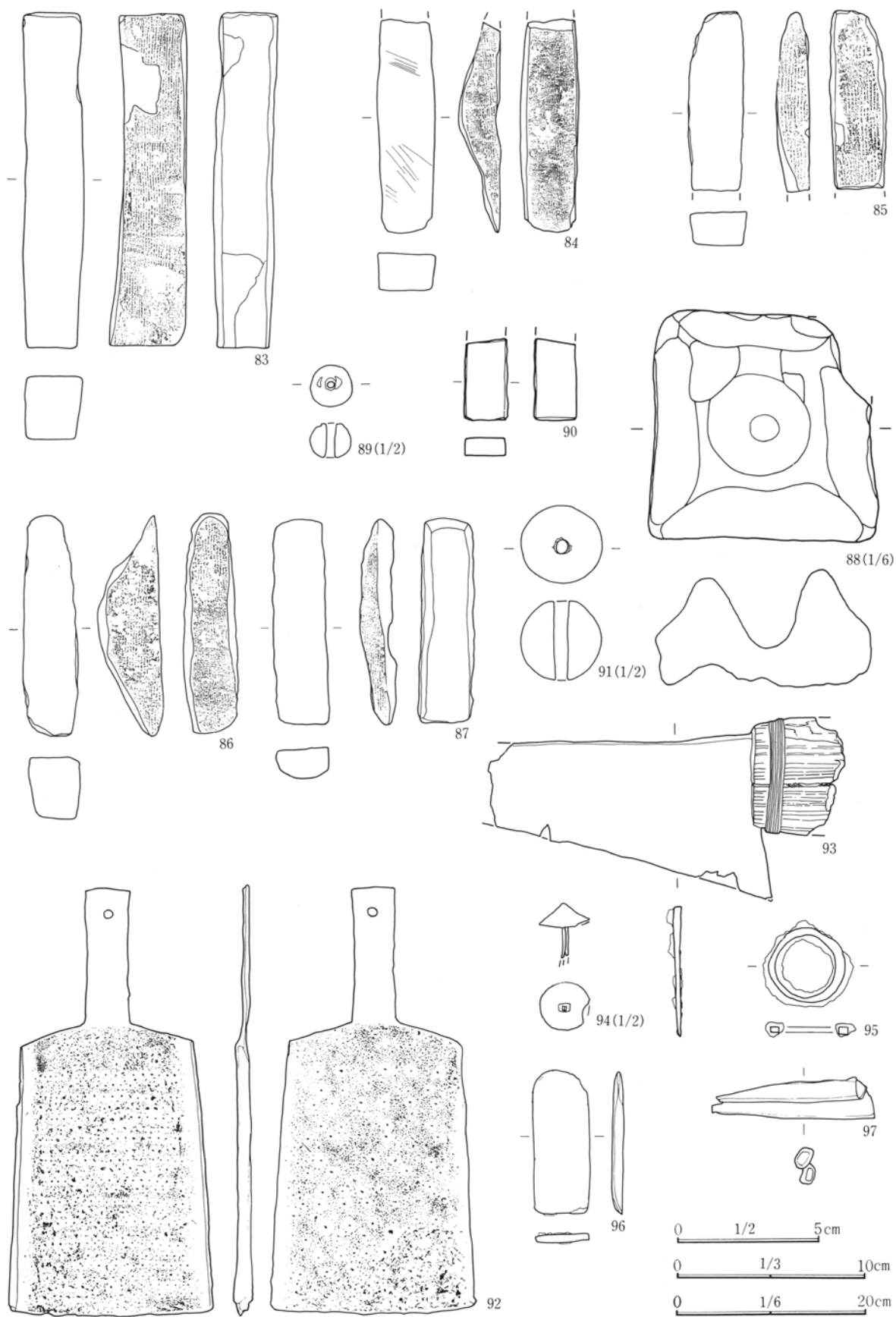
第148图 VI区2号建物跡出土遺物(2)



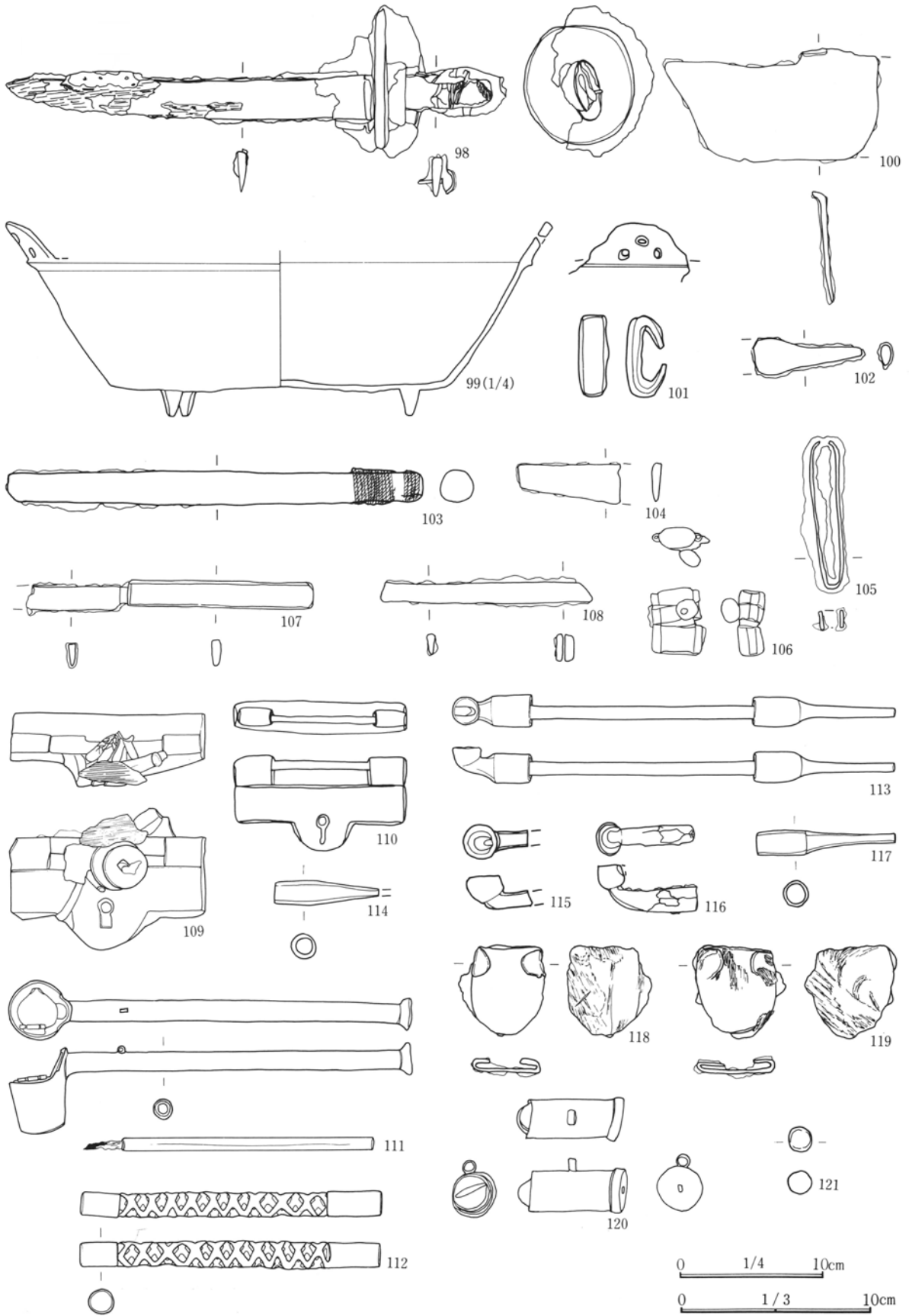
第149图 VI区2号建物跡出土遺物(3)



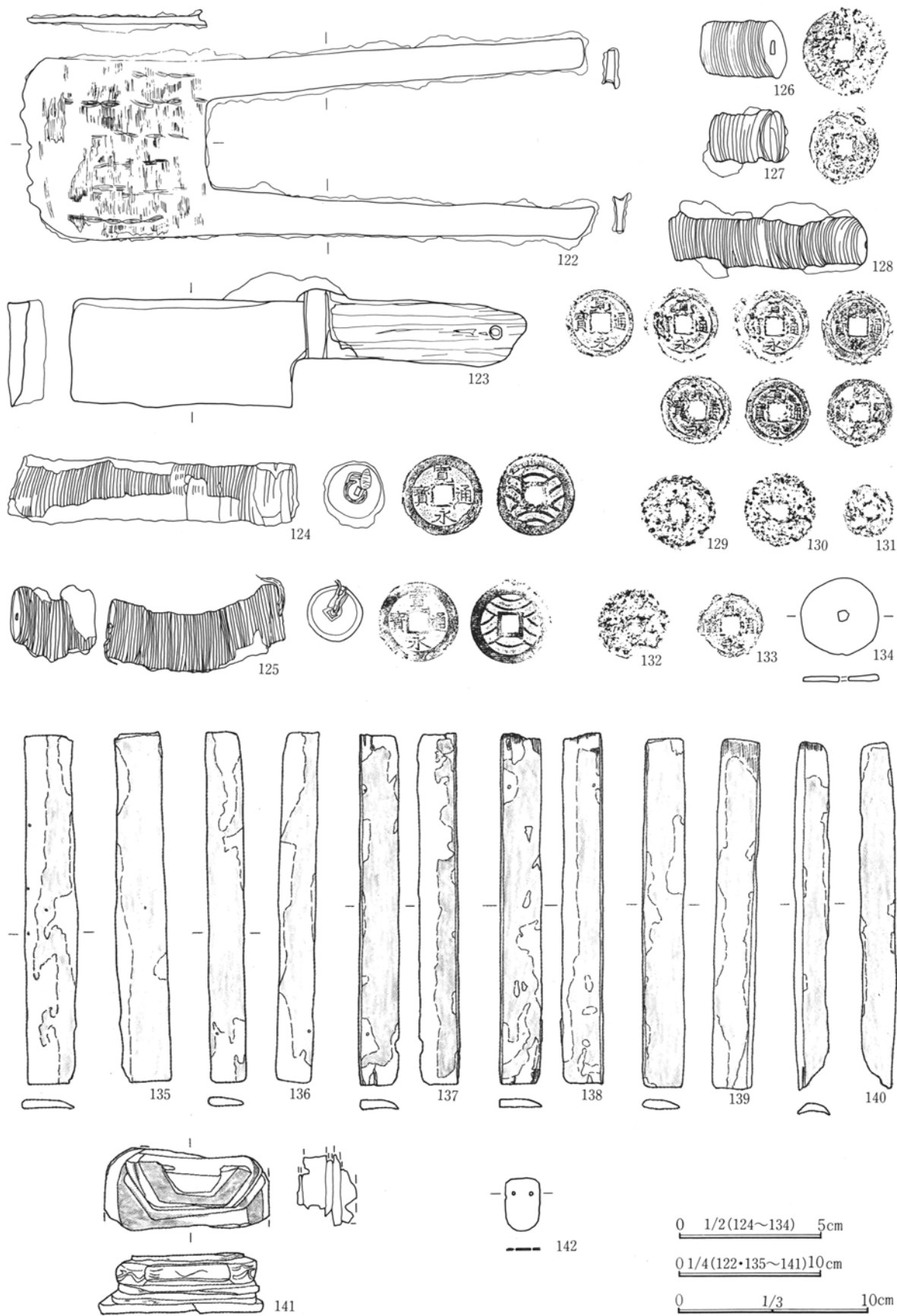
第150图 VI区2号建物跡出土遺物(4)



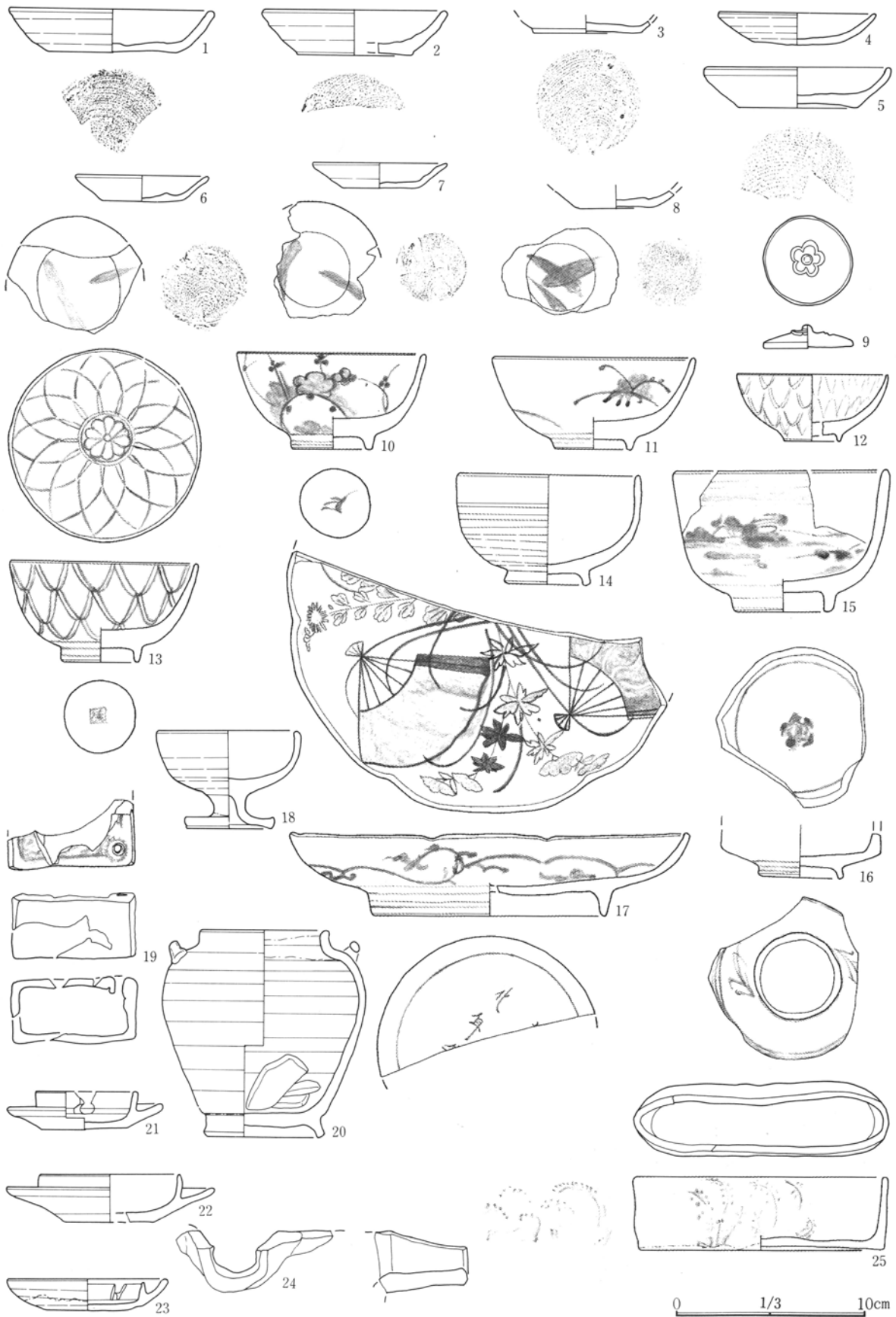
第151图 VI区2号建物跡出土遺物(5)



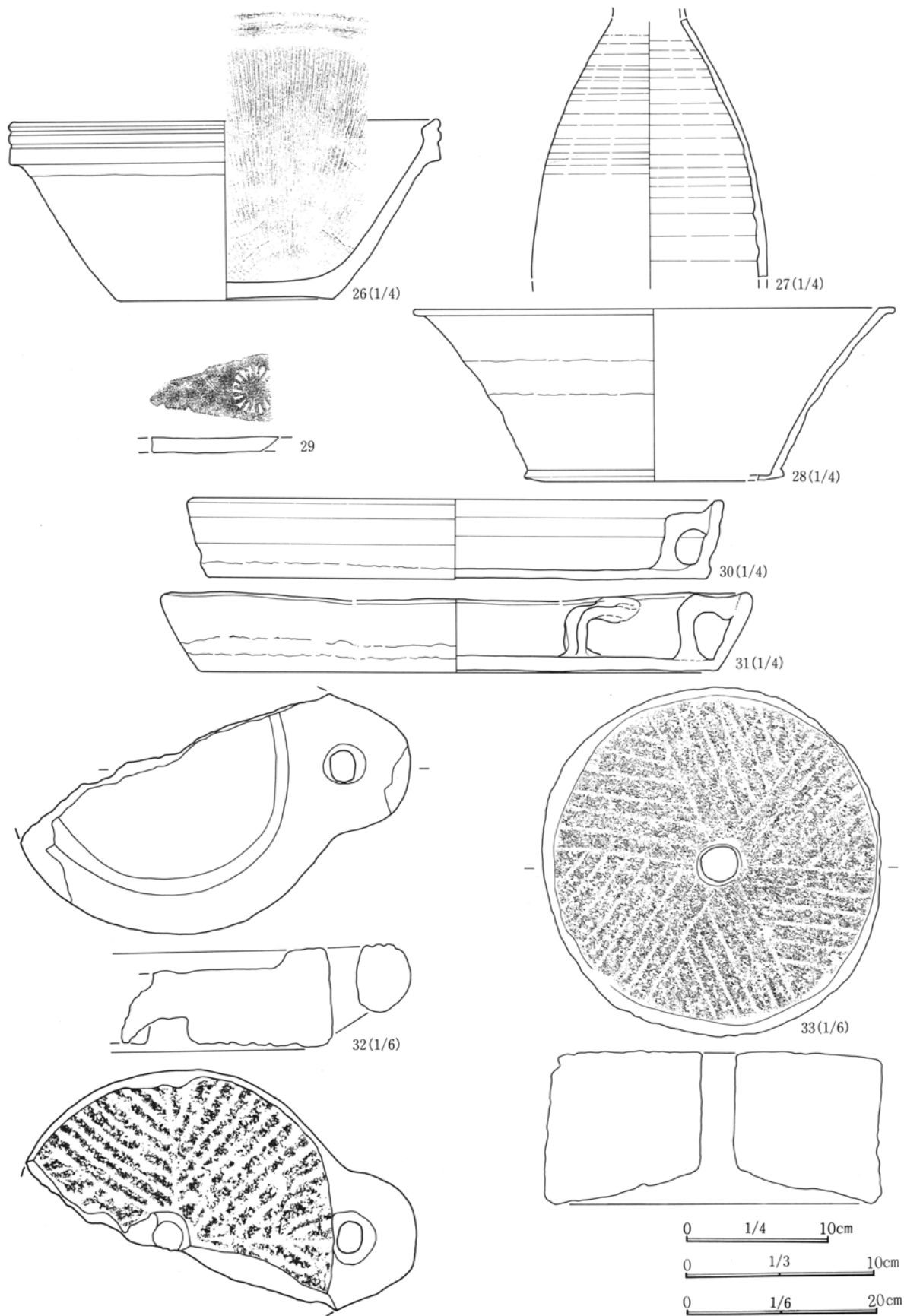
第152图 VI区2号建物跡出土遺物(6)



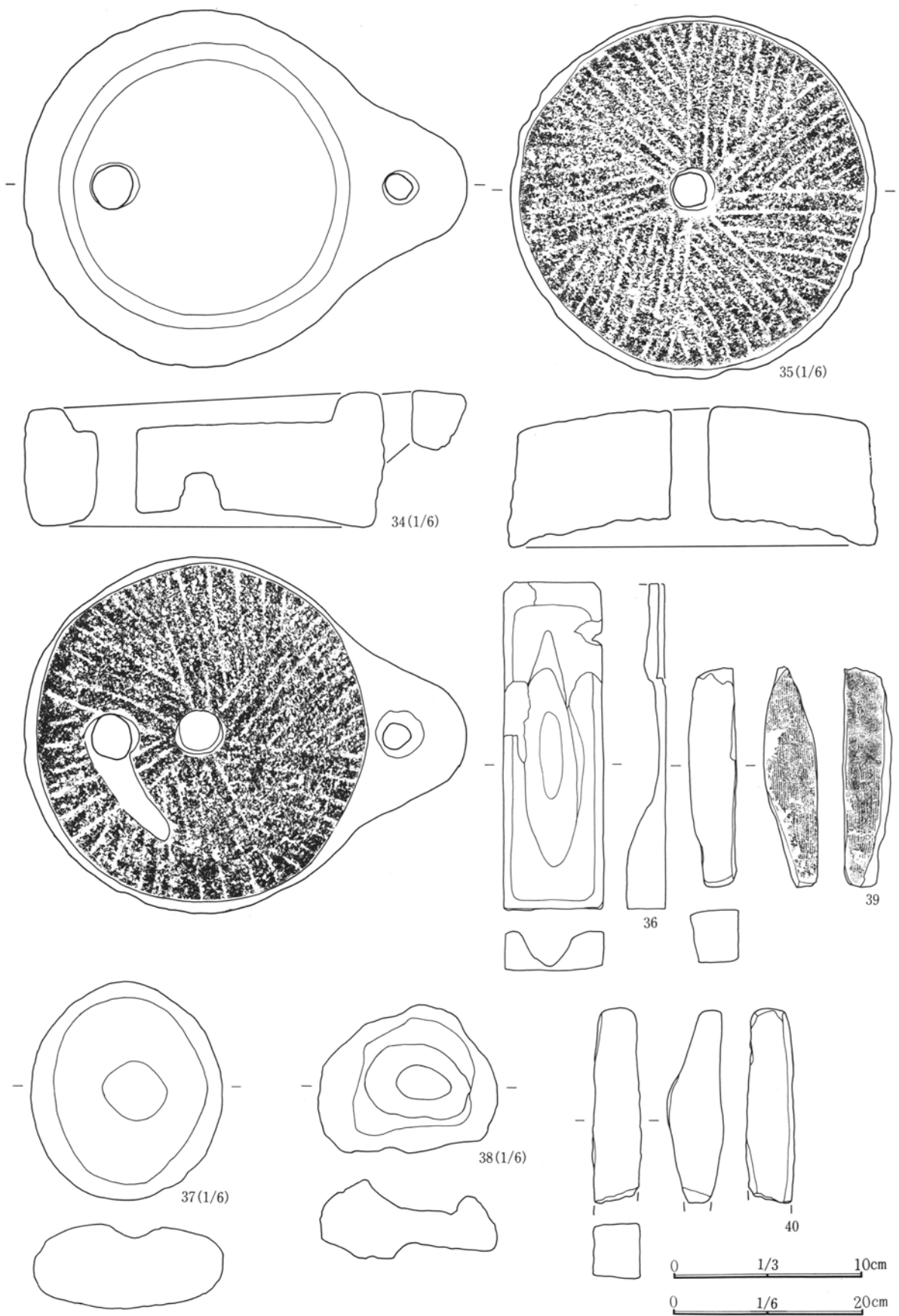
第153图 VI区2号建物跡出土遺物(7)



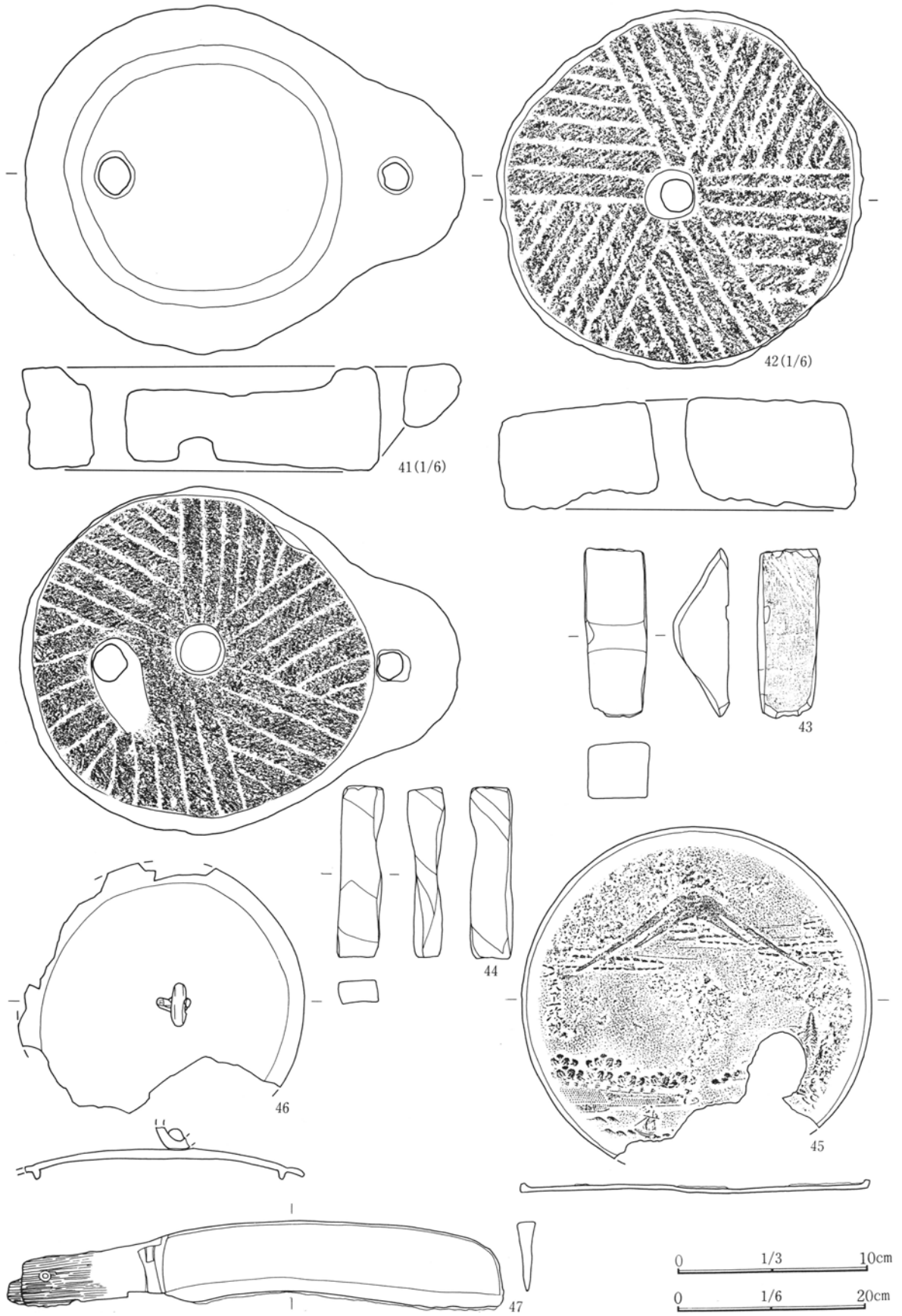
第154图 VI区3号建物跡出土遺物(1)



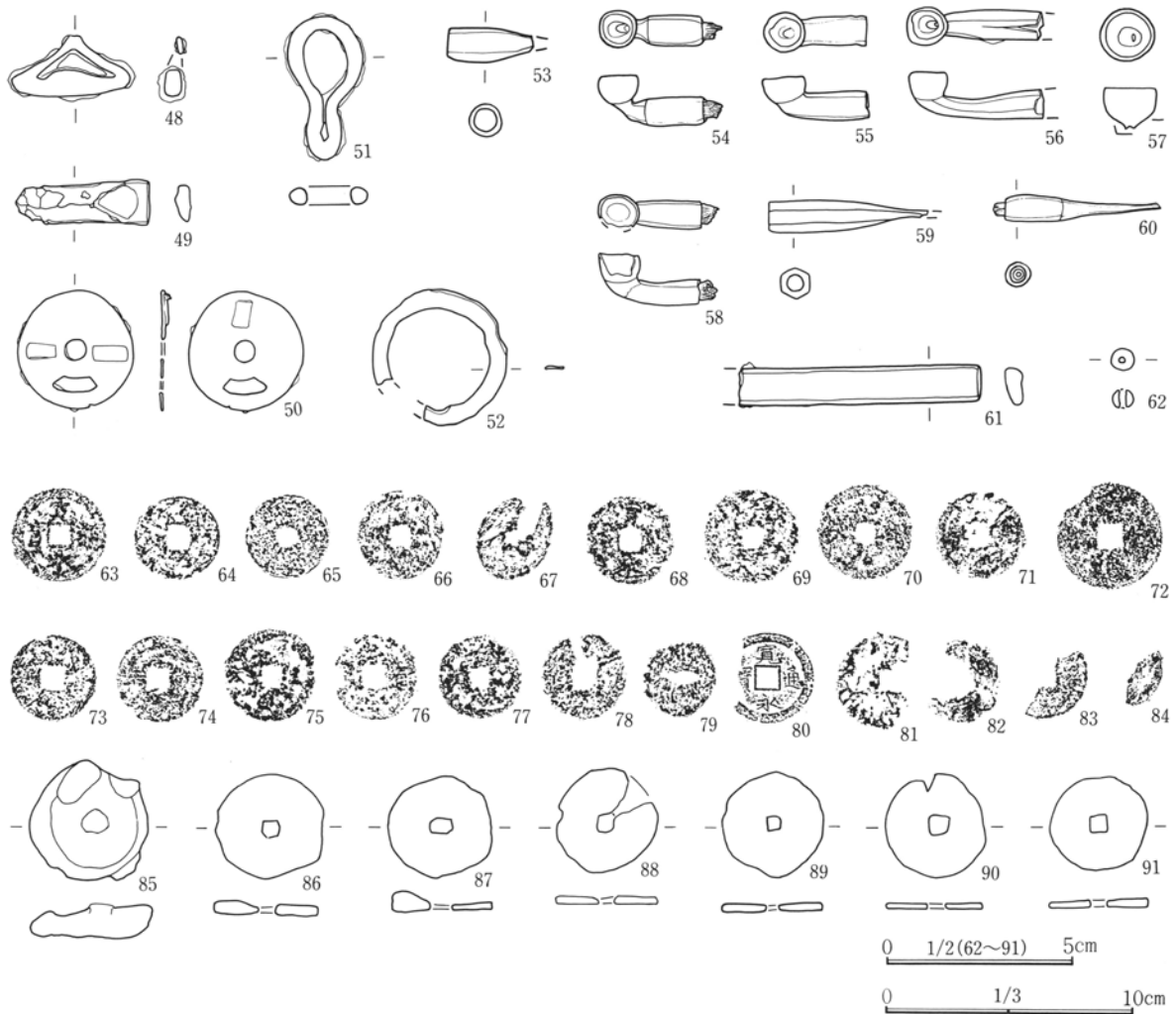
第155图 VI区3号建物跡出土遺物(2)



第156图 VI区3号建物跡出土遺物(3)



第157图 VI区3号建物跡出土遺物(4)



第158図 VI区3号建物跡出土遺物（5）

VI区5号建物跡（第159図、P L69）

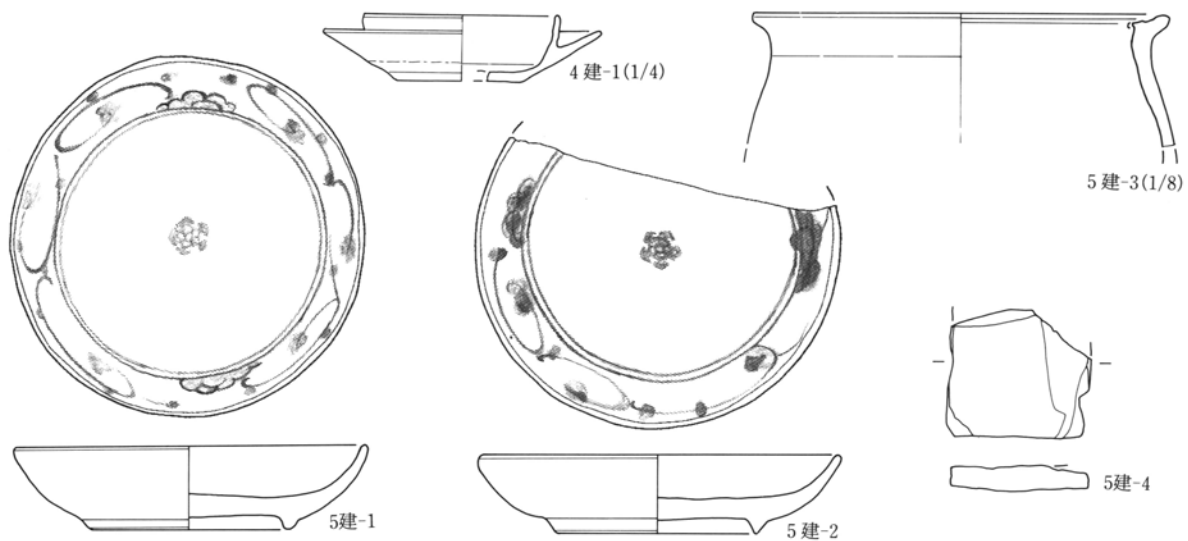
調査範囲がわずかであったために遺物も少ない。土器は常滑の大甕口縁部片と皿が2点である。いずれも南側の礎石付近で出土している。

VI区6号建物跡（第160図、P L69・70）

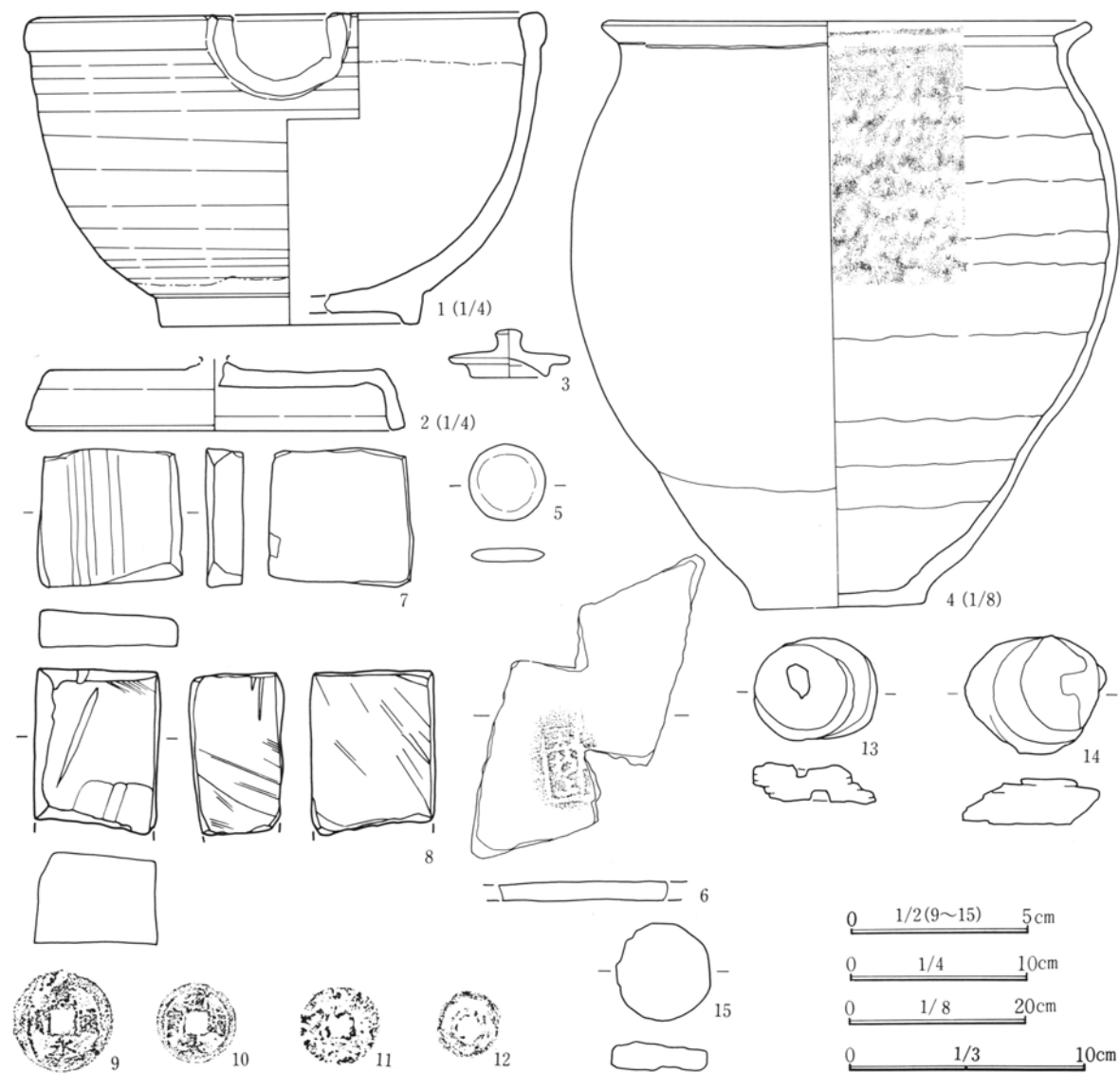
出土遺物は少ない。便槽として用いられている大甕の他、陶磁器類については碗や皿類は見られず、建物の南側、石垣状の高まりの脇に、底に穴を穿ち鉢植えに転用されたとと思われる片口が1点と大小の蓋が見られたのみである。石製品では小型の砥石が2点である。その他銅、鉄銭がわずかに出土している。

VI区7号建物跡（第161図、P L70）

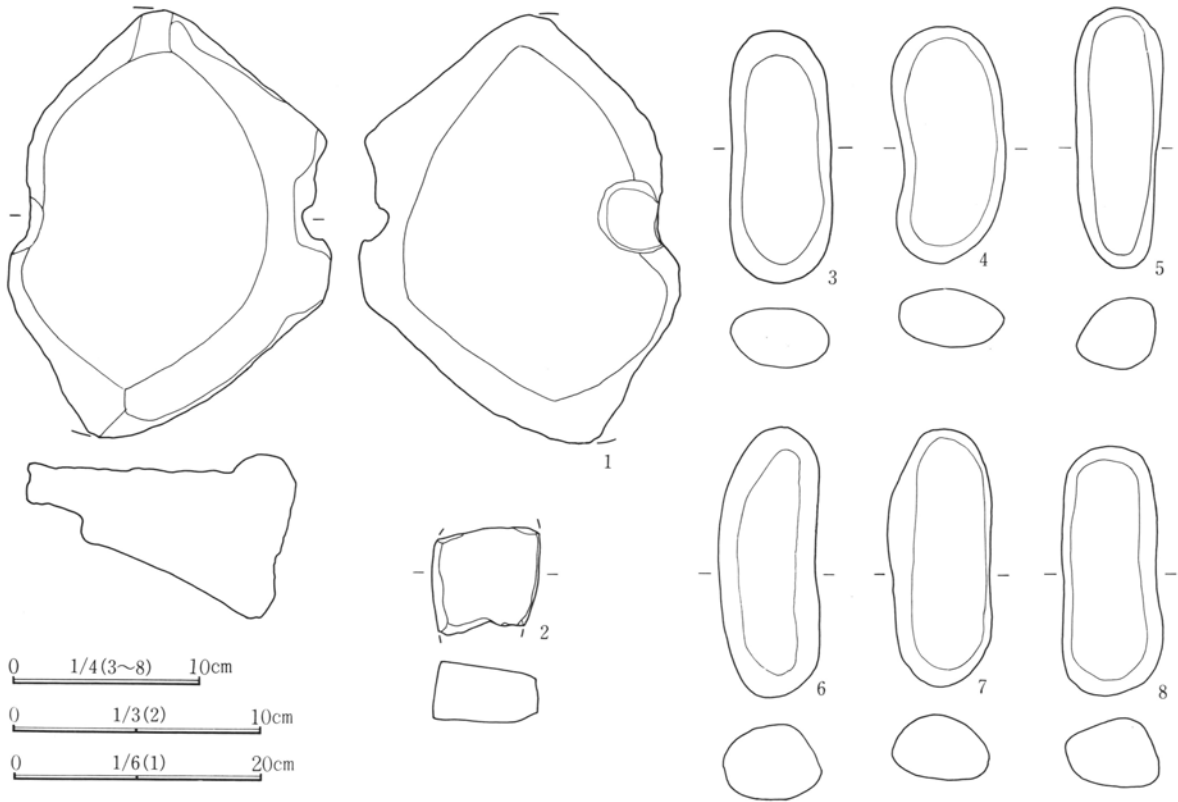
作業小屋と思われ陶磁器、鉄製品類の出土は見られなかった。摩滅の著しい石臼の破片1点の他、薦編み石と思われる長さ10cm程の川原石6点が建物の北側でまとまって出土している。



第159图 VI区4・5号建物跡出土遺物



第160图 VI区6号建物跡出土遺物



第161図 VI区7号建物跡出土遺物

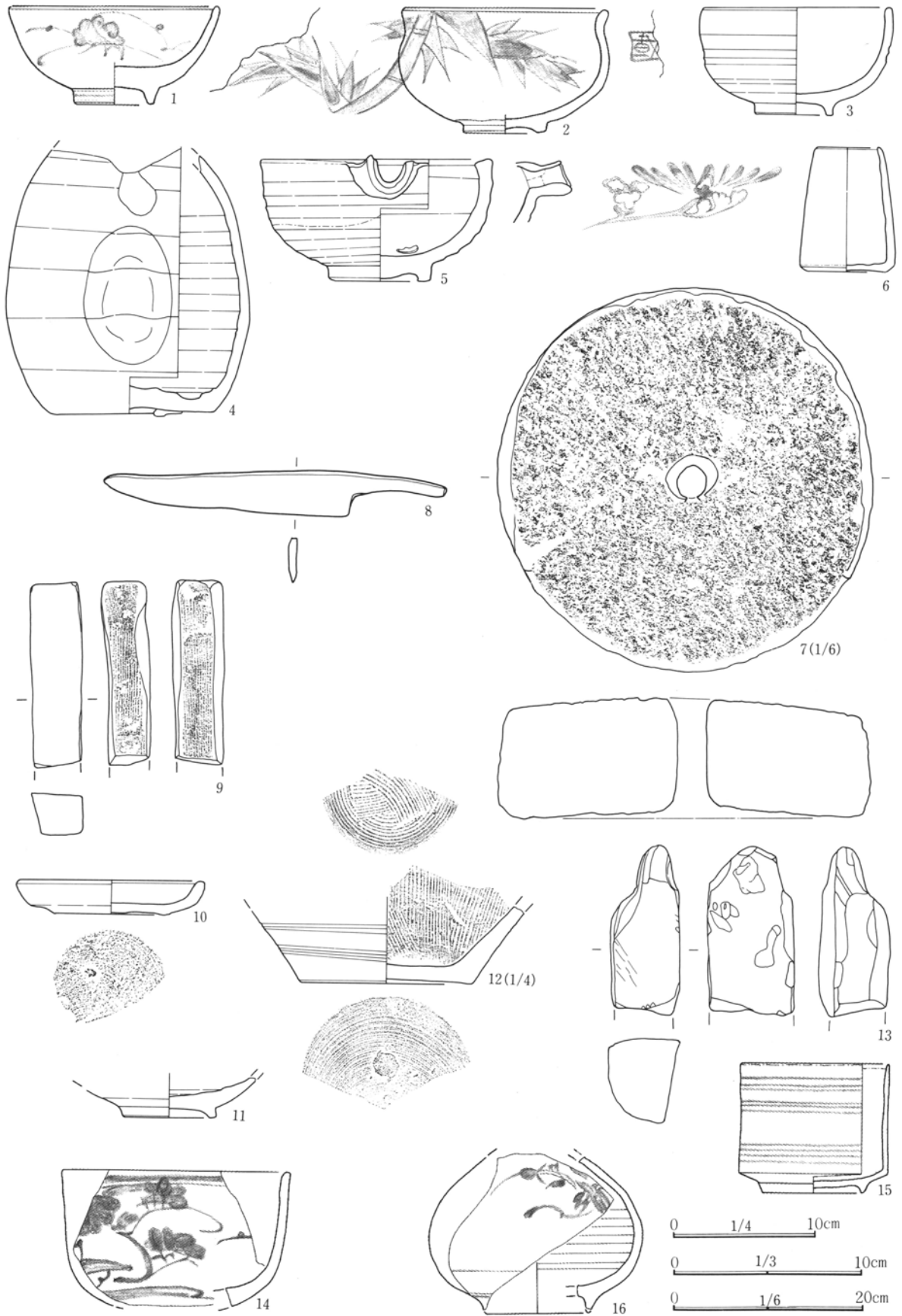
井戸・土坑・溝・集石・盛土・土手・畑・遺構外

II区1号井戸において出土した遺物は陶磁器、石臼、刀子である。遺物点数は少なかったが井戸の東側において数点の陶磁器が検出されている。中でも3は石の上に伏せられた状態で出土している。また7は割れていたものの完形である。作業台として転用されていたと思われる。8の刀子も近くで出土している。

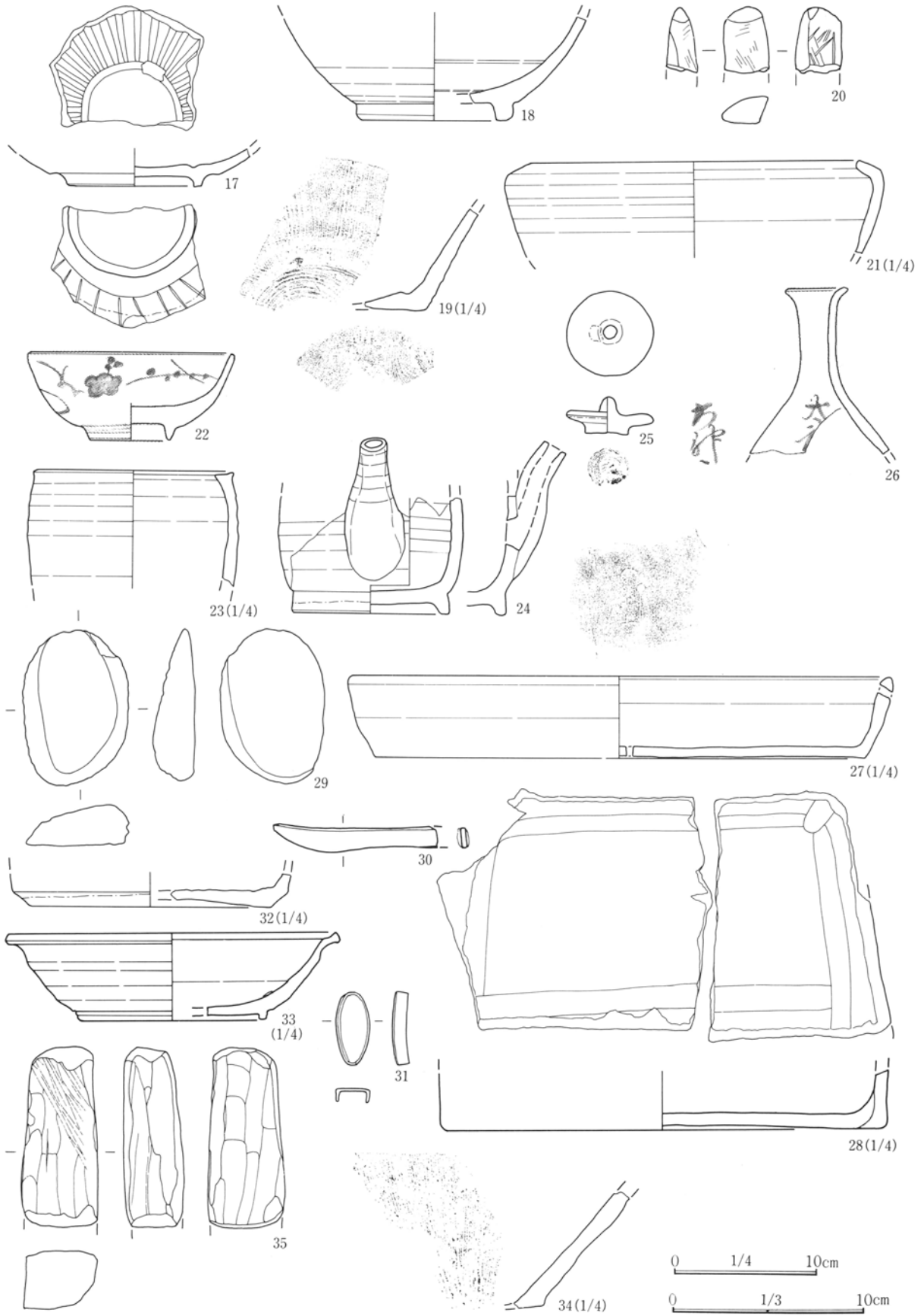
溝に関しては1号溝・2号溝において多くの遺物が出土しているが、多くはこれらの溝に挟まれた1号土手から落ち込んだものと見られる。この1号土手は多くの陶磁器や石器、鉄・銅製品が埋まった状態で包含されており、1・2号溝が幾度となく掘り返されたことが考えられる。

48はII区1号盛り土下で出土している。51は銅製の引き手でVI区1号盛り土中で出土している。II区の土手においては多くの陶磁器類が出土している。これらは廃棄に伴うものと考えられる。

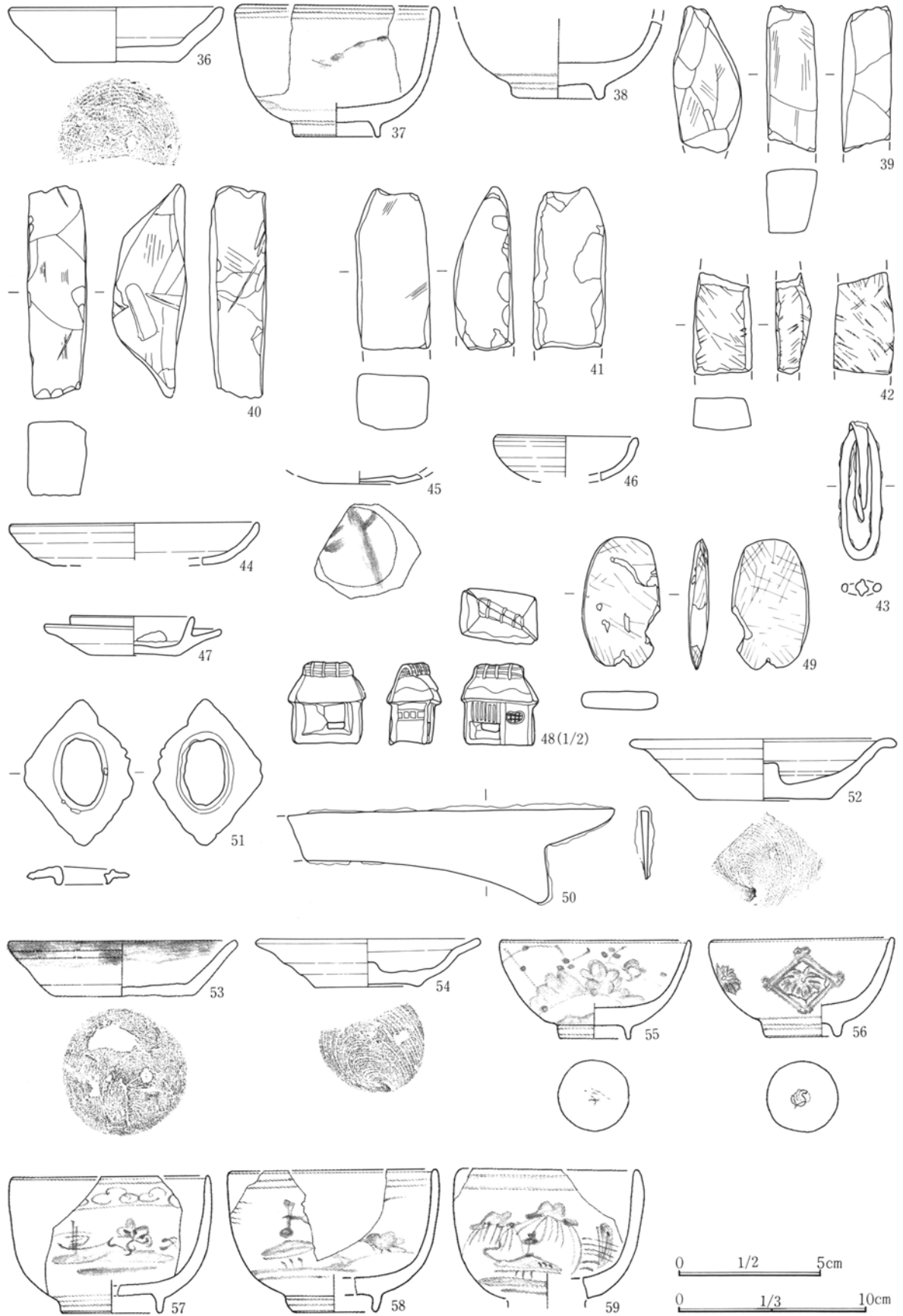
遺構外からの出土遺物も多く、前代からのものもかなり含まれているものと考えられる。なお、石臼64・65は泥流中より重なった状態で出土したものである。(第167~171図、P L72・73)



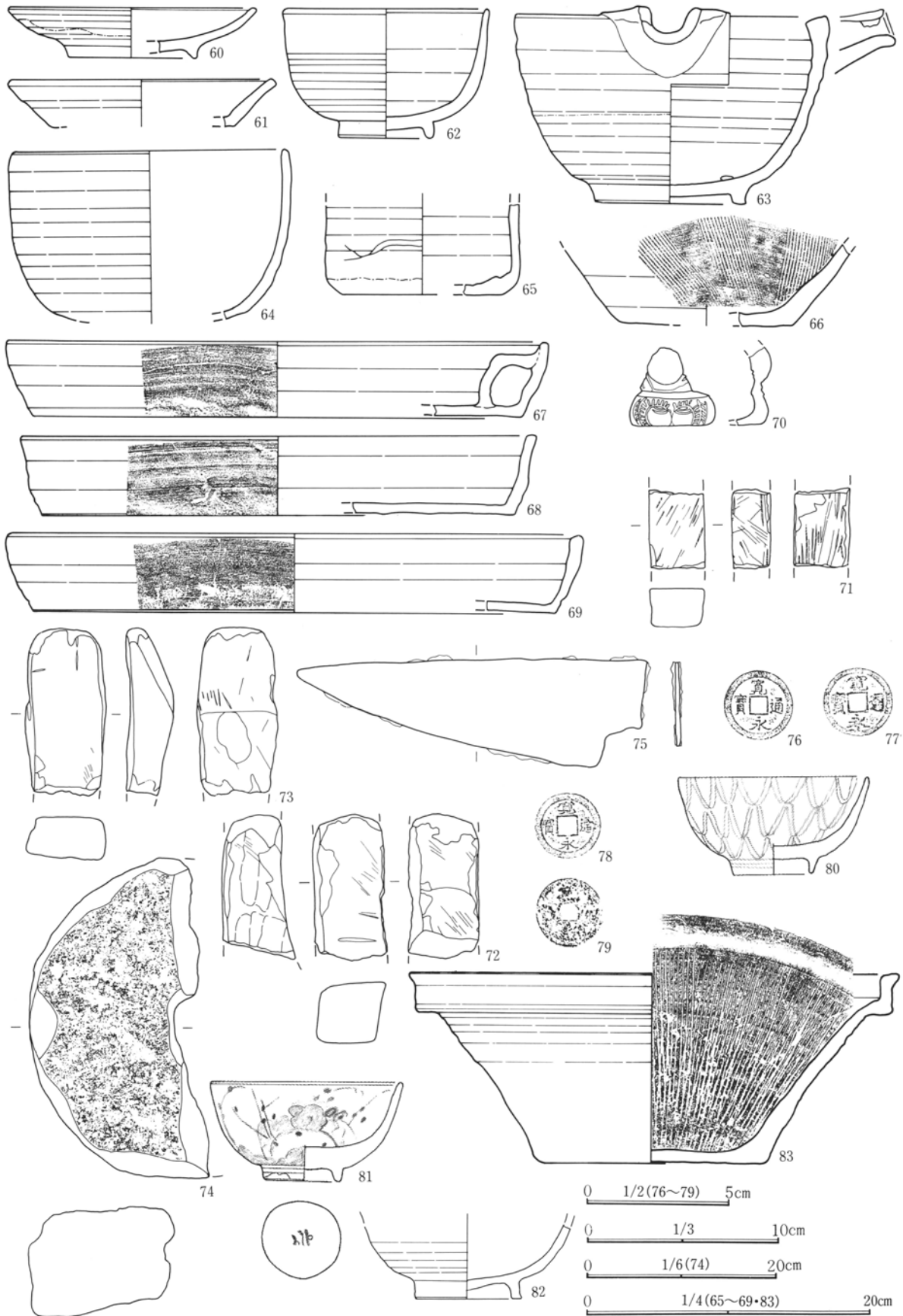
第162图 II·VI区井戸・土坑・溝出土遺物



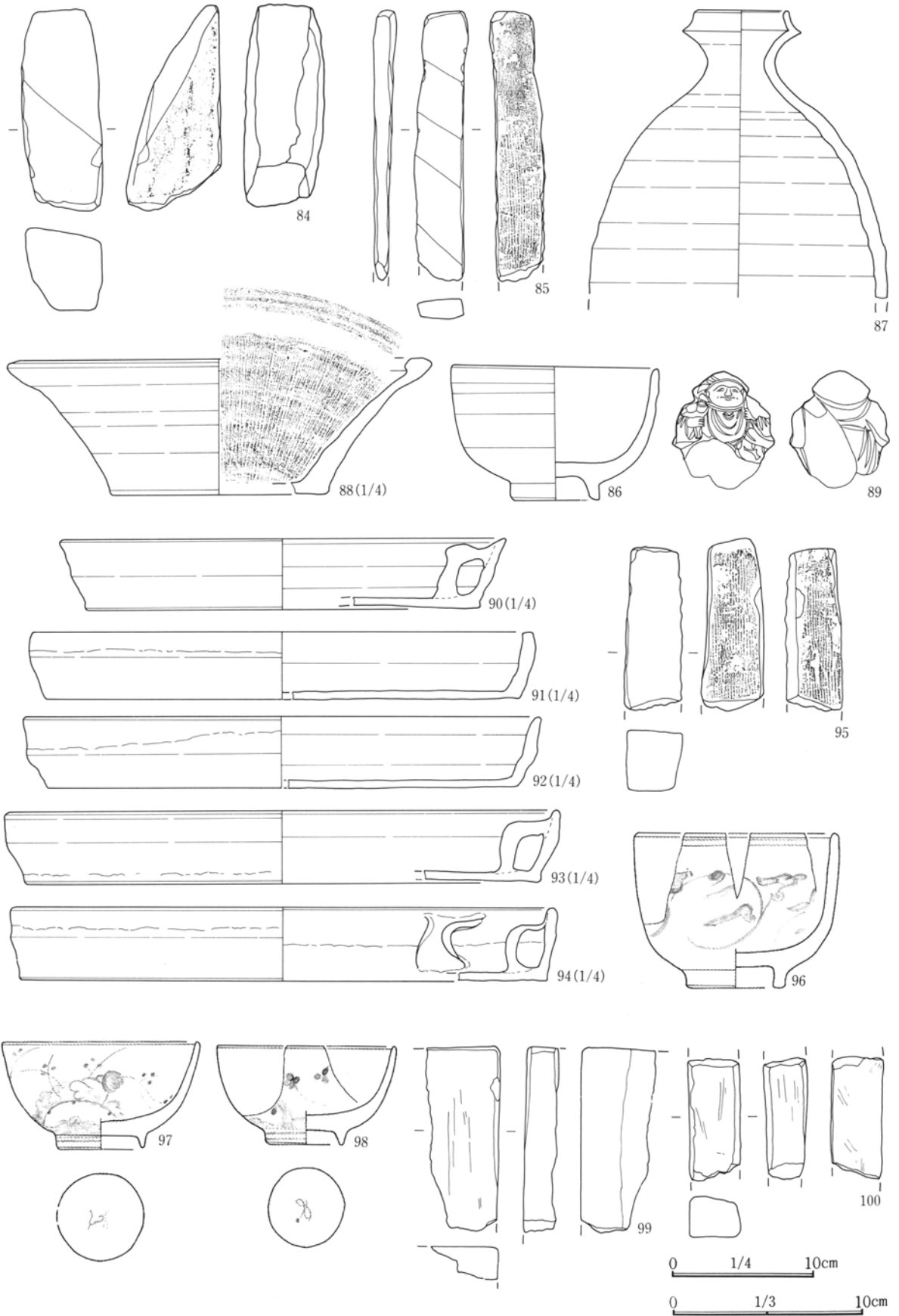
第163図 II区溝・集石出土遺物



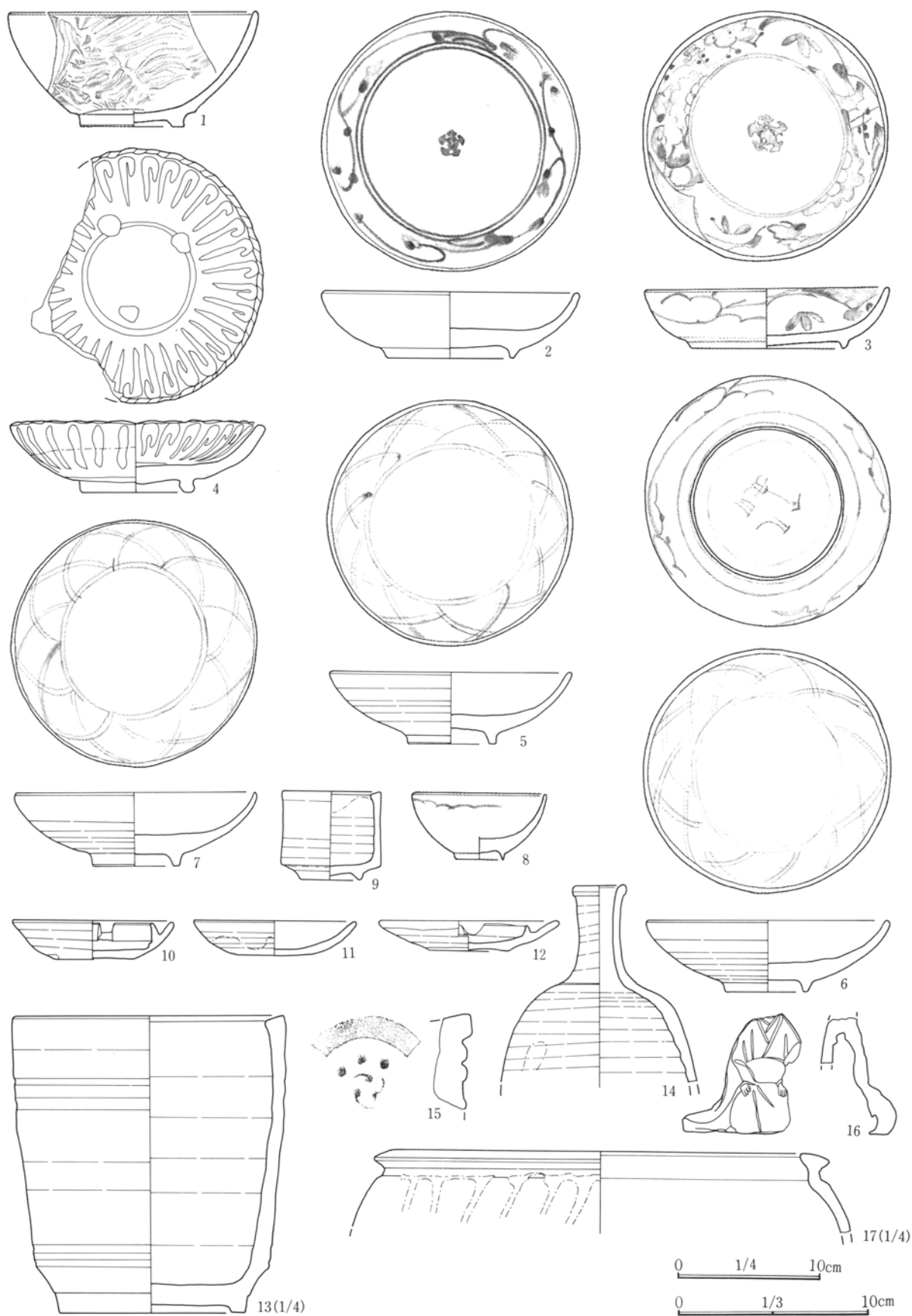
第164图 II·VI区集石·列石·盛土·土手出土遺物



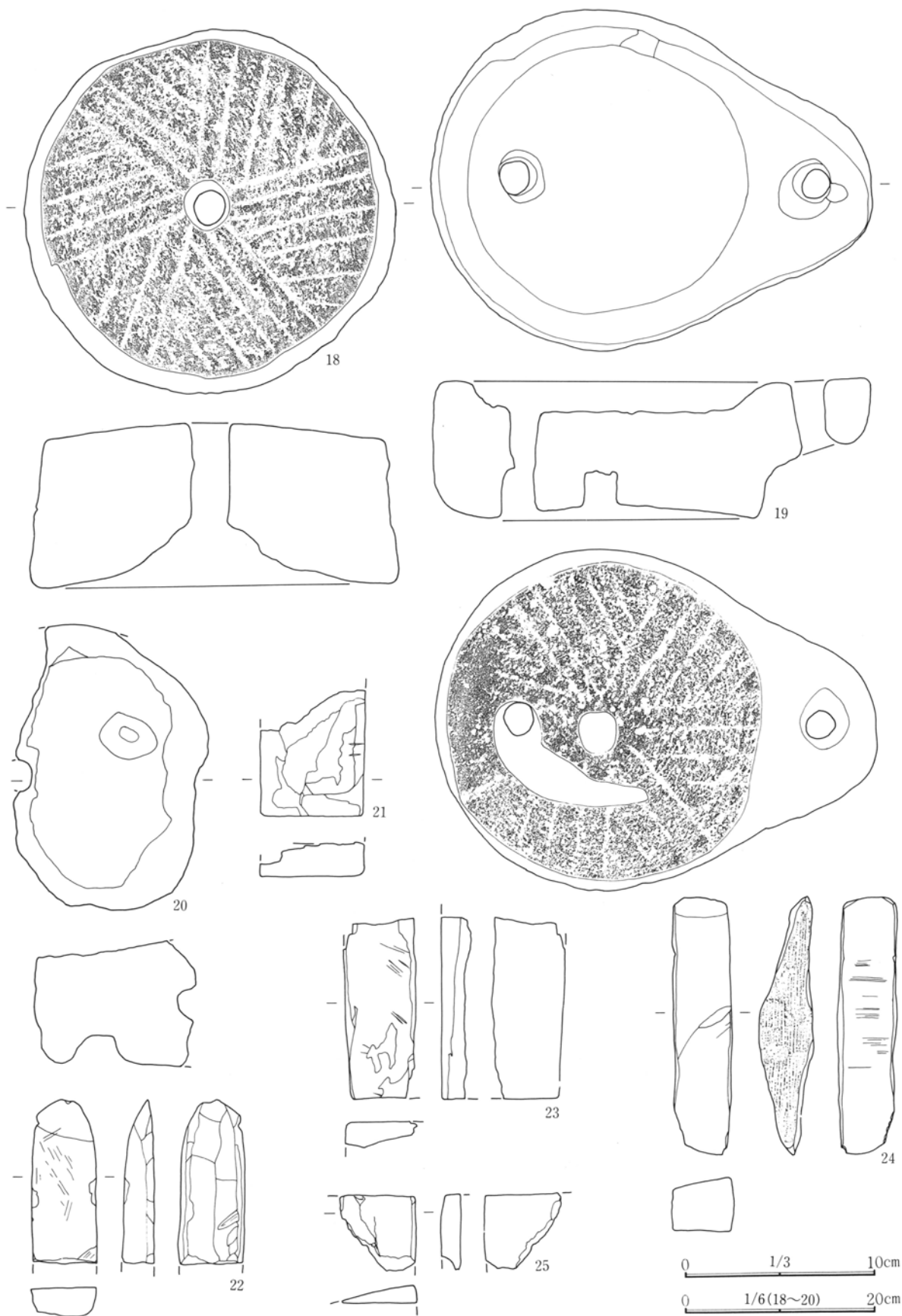
第165图 II区土手出土遺物



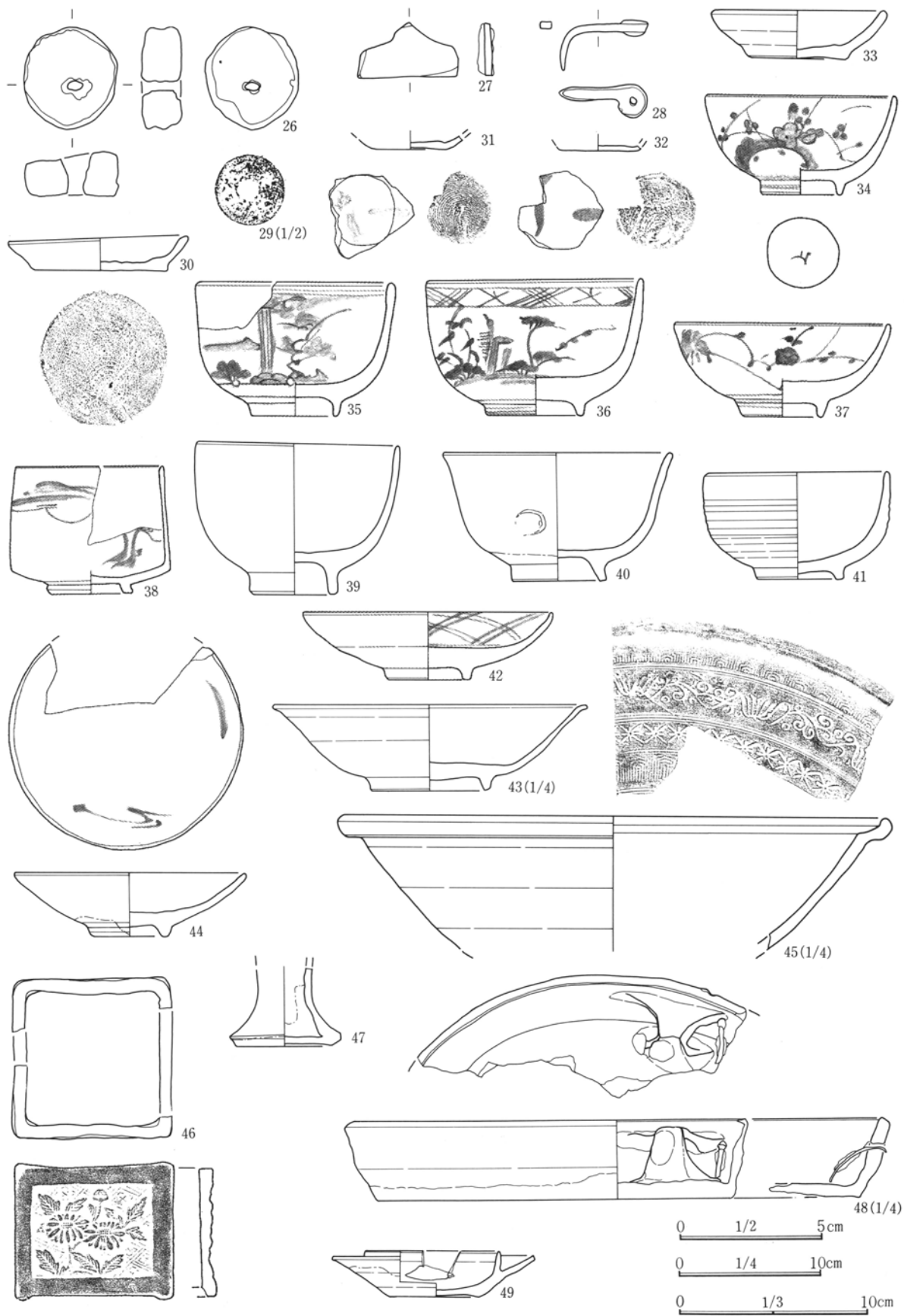
第166図 II区土手・畑出土遺物



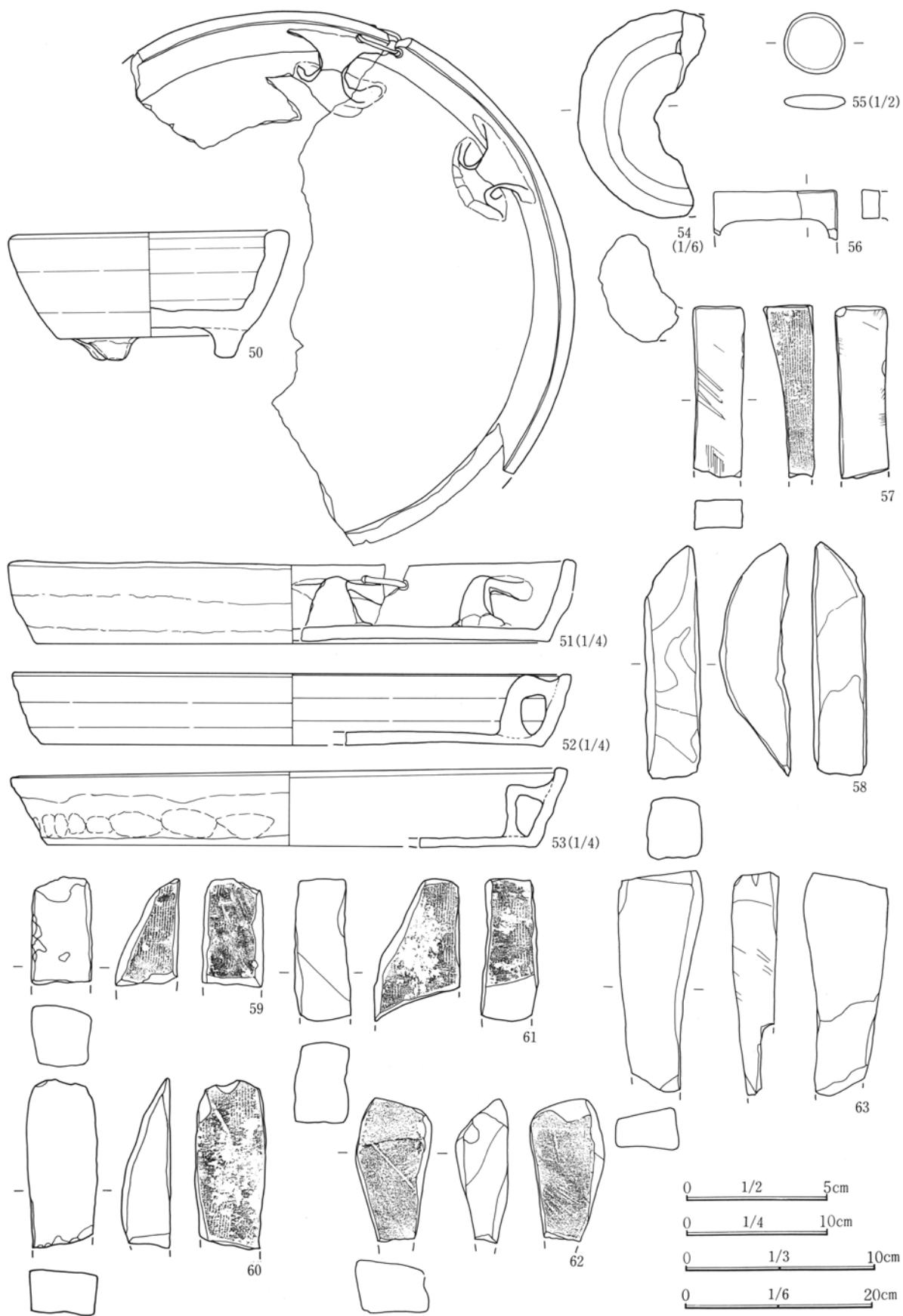
第167図 遺構外出土遺物(1)



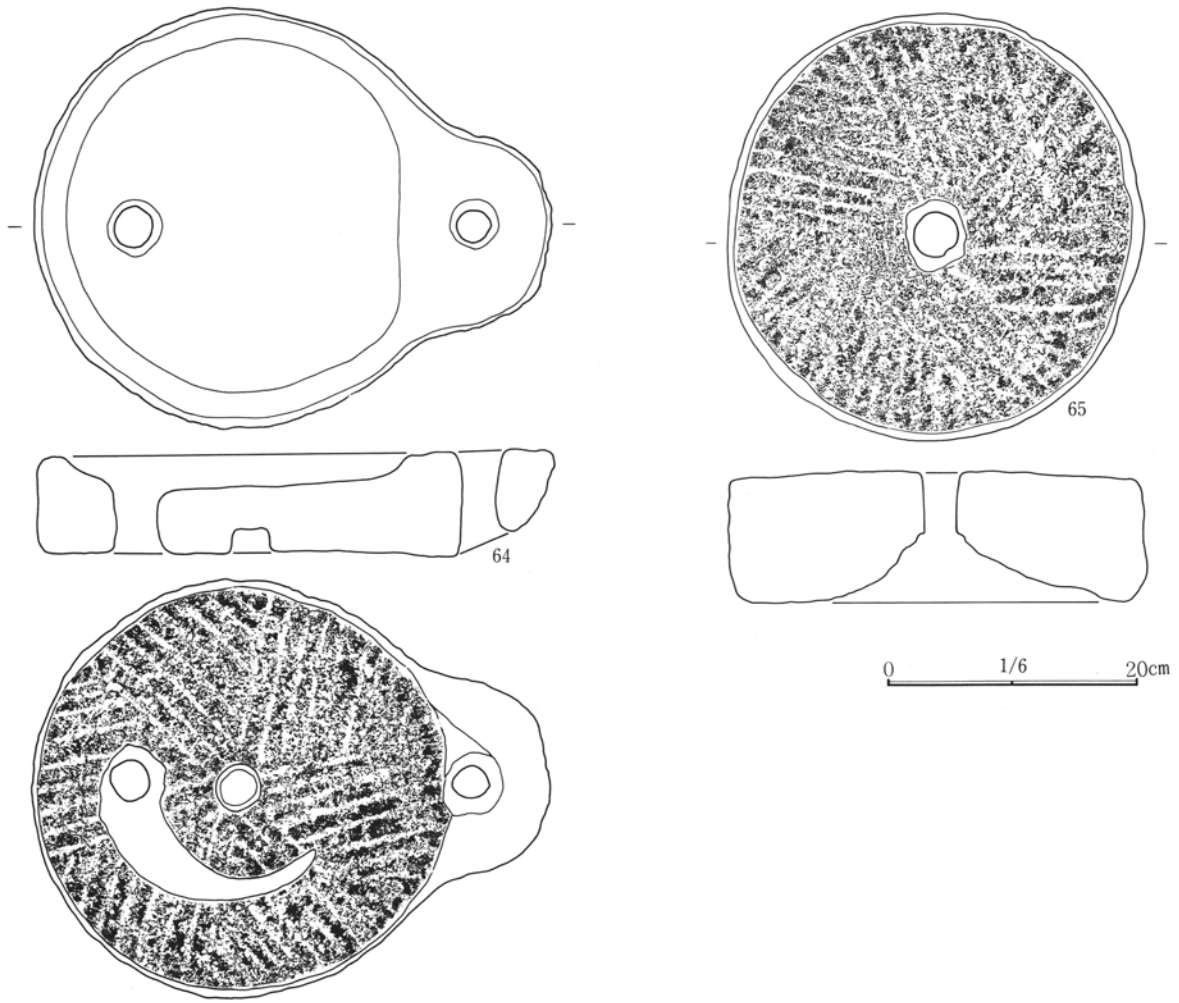
第168図 遺構外出土遺物(2)



第169図 遺構外出土遺物(3)



第170図 遺構外出土遺物(4)



第171図 遺構外出土遺物（5）

表10 1面出土遺物観察表

Ⅱ区1号建物(第126~129図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)			特徴・その他	備考
1	肥前磁器	碗	10.7	4.8	3.9	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面雪持ち笹に梅樹文。	波佐見系
2	肥前磁器	碗	10.6	4.9	4.0	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面雪持ち笹に梅樹文。	波佐見系。1と同器形であるが、焼成不良。
3	肥前磁器	碗	10.9	5.1	4.4	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面雪持ち笹に梅樹文。	波佐見系。1と同器形である。
4	肥前磁器	碗	9.0	4.2	3.8	やや小型の碗。外面にやや丁寧な梅樹文を描く。	波佐見系
5	肥前磁器	碗	(9.5)	-	-	外面雪輪梅樹文。高台内銘は欠損のため不明。	波佐見系
6	肥前陶器	碗	11.1	5.8	5.0	体部に東屋山水?、口縁部に簡略化した四方禪文を描く。底部の器厚やや薄い。	陶胎染付
7	瀬戸・美濃陶器	碗	12.4	6.2	4.2	体部外面に一カ所鉄絵具で柳を描く。高台脇以下を除き灰釉。粗い貫入。高台は低い角高台。	柳茶碗
8	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.4)	5.0	(4.0)	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰鎗碗
9	肥前磁器	碗	10.3	5.4	4.0	外面コンニャク判による井桁内に桐と桐文を各三カ所に施文。高台内簡略化した「渦福」字銘。	波佐見系
10	肥前磁器	碗	(10.2)	4.9	4.0	外面雪輪梅樹文か。高台内不明銘。	波佐見系
11	瀬戸・美濃陶器	碗	13.6	5.7	4.1	「ハ」の字状に小さく開く高台を有し、高台脇は段をなす。淡黄色の胎土上に白土を不規則に施し、灰釉を掛ける。貫入。貫入。	
12	瀬戸・美濃陶器	碗	(8.6)	-	-	筒型を呈する碗で、外面に菊花状文を呉須で描く。底部内面周縁に染め付け圏線巡らす。やや器高は高い。	筒型碗
13	瀬戸・美濃陶器	香炉	(12.8)	-	-	器壁は薄く、口縁部から体部下端に灰釉を施す。細かい貫入。外面一カ所に鉄絵具による型紙刷りで文様を描く。	御深井
14	瀬戸・美濃陶器	皿	12.1	2.6	8.0	内面から口縁部外面に灰釉を施す。細かい貫入。見込み鉄絵具による型紙刷りで梅枝文?を描く。	御深井。酸化気味のため胎土が淡黄色。
15	瀬戸・美濃陶器	片口鉢	12.8	6.7	6.5	内面から高台脇黄釉を施す。口縁部の一部に灰釉掛かる。見込み目痕三カ所。	口縁部内面の1/3擦れにより釉がなくなる。
16	瀬戸・美濃陶器	灯明受け皿	8.2	1.6	3.8	錆釉を施した後、外面の釉を拭う。受け部に「U」字状の流入口を一カ所開ける。	
17	在地系土器	風炉	(21.6)	-	-	4建23と同器形の底部片である。脚部は剥がれ、くびれ部内面は酸化被熱により焦しが戻っている。風口の一部残存。	
18	瀬戸・美濃陶器	水滴	8.8	5.0	3.4	上面に花卉状の文様を施し、つまみを付ける。底部外面を除き灰釉を施す。	御深井
19	瀬戸・美濃陶器	ひょうそく	5.3	4.3	4.0	内面から口縁部外面に柿釉を施す。脚部のくびれは小さい。底部右回転糸切り無調整。底部外面中央に小孔あり。	
20	瀬戸・美濃陶器	徳利	3.6	21.4	8.2	口縁部内面から高台内に鉛釉を施し、体部下位以下の釉を拭う。口縁部から体部にうのふ釉を掛ける。	尾呂徳利
21	瀬戸・美濃陶器	小瓶	2.2	9.9	4.2	口縁部内面から外面に錆釉をやや厚く施す。底部外面の釉を拭う。体部二カ所を窪ませる。	徳利。土坑内出土
22	在地系土器	焜炉か風炉	(25.6)	-	-	口縁部片。口縁部内傾する。焦し焼成で外面は磨かれる。内面の受けは三角形を呈する。受け部下半以下は酸化被熱で焦しが戻る。	
23	瀬戸・美濃陶器	すり鉢	(29.8)	11.0	11.0	錆釉を施した後、体部外面下位から底部の釉を拭う。内面底部から体部使用によりすり減る。	
24	石製品	石臼(上)	径36.0	高さ12.7		挽き手取り付け用の張り出し部を持つ。	粗粒輝石安山岩
25	石製品	石臼(下)	径34.2	高さ12.3		ふくみは浅い。	牛伏砂岩
26	石製品	石臼(上)	径(35.0)	高さ11.0		ほぼ半分が割れている。	粗粒輝石安山岩
27	石製品	石鉢	(15.0)	4.9	-	口縁部片。	粗粒輝石安山岩
28	石製品	砥石	15.3	5.3	3.3	定形品、1面使用、研ぎ面は平らで滑らか、角は面取りされている。	珪質粘板岩
29	石製品	砥石	16.3	4.0	2.5	幅広の2面に整形状痕残る。幅の狭い2面を使用する。木口も整形状痕残る。	砥沢石
30	石製品	砥石	13.5	3.9	2.7	1面使用、刃の当たり痕あり。	点紋頁岩
31	石製品	軽石製品	9.9	6.4	3.9	やや扁平な軽石の1面を磨り面として使用、面はわずかに膨らみを持つ。	軽石
32	石製品	菰編み石	13.8	6.0	3.8	やや扁平な川原石。	粗粒輝石安山岩
33	石製品	菰編み石	13.7	4.5	3.6	棒状の川原石。	デイサイト
34	石製品	菰編み石	14.6	6.3	3.7	やや扁平な川原石。	粗粒輝石安山岩
35	石製品	菰編み石	14.3	6.9	3.2	やや扁平な川原石。	粗粒輝石安山岩
36	石製品	菰編み石	12.5	5.0	3.3	棒状の川原石。	石英閃緑岩
37	石製品	菰編み石	14.3	6.3	3.4	やや扁平な川原石。	ひん岩
38	石製品	菰編み石	14.6	4.2	3.8	角柱状の川原石。	粗粒輝石安山岩
39	石製品	菰編み石	14.2	5.2	3.6	細長い川原石。	石英閃緑岩
40	石製品	菰編み石	15.7	6.0	2.2	やや扁平で細長い川原石。	粗粒輝石安山岩
41	銅製品	水滴か	5.1	2.8	1.0	長方形の容器で隅に突起様の注ぎ口。	土坑内出土

番号	種類	器種・器形	計測値	特徴・その他	備考
42	鉄製品	錠	8.9 4.2 1.9		土坑内出土
43	鉄製品	鏝	18.8 7.4 0.2	木葉状を呈し、取っ手部分を欠く。	土坑内出土
44	鉄製品	板状製品	(7.0) 1.2 0.5	一端を欠く。	
45	鉄製品	刀子か	(4.5) 1.3 0.3	端部欠損。	
46	鉄製品	管	13.9 0.8 -	両端部を欠く管状製品。	
47	鉄製品	刀子	(6.8) 1.7 0.6	先端部欠損。	
48	銅製品	煙管雁首	(3.9) 火皿径1.8	小口部分破損。	
49	銅製品	煙管雁首	6.1 火皿径1.2	脂返し短く、やや扁平な火皿が付く。	
50	銅製品	煙管雁首	(3.4) 火皿径1.3	小口部分破損。	
51	銅製品	煙管雁首	5.4 火皿径1.2	火皿一部欠損、羅字部残存。	
52	銅製品	煙管雁首	(3.3) 0.9 -	火皿部欠損。	
53	銅製品	煙管吸い口	7.7 1.2 -	肩と吸い口との境に丸みを持つ。毛彫り文様。	
54	銅製品	煙管吸い口	5.9 1.0 -	肩部と吸い口との間に段を持つ。	
55	銅製品	煙管吸い口	(4.0) 1.1 -	吸い口部分欠損。	
56	鉄製品	鏝	(4.6) 1.1 -	欠損品、断面方形。	土坑内出土
57	銅銭	寛永通宝			
58	銅銭	寛永通宝			
59	銅銭	寛永通宝			
60	銅銭	寛永通宝			
61	銅銭	寛永通宝			
62	銅銭	寛永通宝			
63	鉄銭				
64	鉄銭				

Ⅱ区2号建物(第130図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	甕	(24.0) - -	器壁は厚く、口縁部は小さい「コ」の字状を呈する。口縁部回転横撫で。肩部に斜めの凹線が1条認められる。	
2	肥前磁器	碗	(4.5) - -	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面の文様は破片のため不明。	波佐見系
3	在地系土器	鍋	(18.9) - -	底部外面に型作り痕残る。内面底部と体部の境小さく直立気味となる。	外面著しく煤付着。
4	銅銭	銭名不明			便槽内出土
5	銅銭	銭名不明			便槽内出土

Ⅱ区3号建物(第131図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	皿	9.5 2.2 5.8	底部左回転糸切り無調整。口縁部内面窪んだ後、端部内面は肥厚する。	
2	肥前陶器	碗	(9.5) 6.6 4.0	やや小型の碗。外面に東屋山水文を描く。口縁部と高台部に各上の圈線を巡らす。	陶胎染付
3	瀬戸・美濃陶器	小碗	7.8 4.4 3.4	高い三角高台を有し、腰部の張りは少ない。外面口縁部下まで回転艶削り。内面から高台脇貫入の入る灰釉を施す。	
4	瀬戸・美濃陶器	仏飯器	7.0 - -	貫入の入る灰釉を施す。杯部は浅く、口径が大きい。	Ⅱ区6建40と同器形
5	瀬戸・美濃陶器	瓶	9.3 - -	低い角高台から瓜実型の体部に至る。外面に胎釉を施し、体部下端以下の釉を拭い取る。肩部に灰釉を流す。肩部に3条の沈線を巡らす。	尾呂徳利
6	在地系土器	火鉢?	22.4 7.5 16.5	器形は小型の火鉢型を呈する。器表は燻し焼成により黒色を呈する。内面は回転撫で調整。外面は磨きを施す。底部外面は型作り痕を有し、低い脚を三カ所に貼り付ける。	二次的な酸化被熱を受けていない。
7	在地系土器	鍋	38.8 11.2 18.6	体部から口縁部直線的に開く。口縁端部上面平坦。端部平坦面内側に細い沈線を巡らす。内面体部下端撫でにより小さく直立する。	底部外面から体部外面の1/3煤付着。1/3程二次的な酸化被熱により燻しが取れる。
8	石製品	砥石	18.5 3.3 3.1	木口2面と平3面に明瞭な歯齧痕残る。1面は調整痕がなくなる程度の使用で、他の3面は未使用。	砥沢石
9	石製品	砥石	17.0 3.6 4.1	木口1面と平3面に明瞭な歯齧痕残る。1面は調整痕がなくなる程度の使用であるが、幅の狭い面を使用。1面は調整痕の一部が消える程度の使用で、他は未使用。	砥沢石
10	石製品	五輪塔(火輪)	17.1 13.0 -	転用品か。	粗粒輝石安山岩
11	石製品	砥石	11.6 6.5 1.5	板状で、一部に面取りが見られる。顕著な使用面は認められず。	珪質粘板岩
12	鉄製品	錠	(17.5) 4.9 0.7	先端部欠、基部端部鈎状に曲がる。	
13	鉄製品	鎌	(9.0) 9.7 0.5	刃は柄に対してほぼ直角をなす。	
14	鉄製品	包丁	17.4 5.1 0.6	刃は三角形で直線的、柄に木質部。	
15	鉄製品	釘	8.1 0.5 -	頭部分厚みあり。	
16	鉄製品	火打ち金か	5.4 2.5 0.6	錠型。	

Ⅱ区4号建物(第132~135図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	皿	(9.8) 2.0 6.1	縷りのない左回転糸切り無調整。内面底部と体部の境不明瞭。口縁部外面窪む。	
2	在地系土器	皿	(9.5) 2.3 5.4	縷りのない左回転糸切り無調整。見込み轆轤調整痕明瞭に残るが、凹線にはならない。見込み中央と周縁は窪む。	底部周縁から体部内面黒く変色。
3	肥前陶器	碗	(10.8) 7.3 4.8	体部外面に三友?と山を描き、口縁部外面には四方棒?を描く。胎土が暗灰色のため、白化粧が明瞭に見える。	陶胎染付
4	肥前陶器	碗	10.8 7.0 5.8	主文様は欠損するが、梅枝状の文様と山が描かれており、3と同文様と考えられる。口縁部は雲状の文様である。	陶胎染付
5	瀬戸・美濃陶器	碗	12.4 5.7 4.4	体部外面に一カ所鉄絵具で柳を描く。高台脇以下を除き灰釉。粗い貫入。高台は低い角高台。	柳茶碗
6	製作地不詳陶器	碗	(9.4) - -	内面から高台脇に細かい貫入の入る灰釉を施す。外面三カ所に笹文を上絵付けする。文様の全体は1面しか解らないが、中央の葉枚を赤、他を黄緑で描く。他の1面には微かに青が見え、中央の葉のみ色を変えていたと考えられる。	関西系?
7	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.8) 6.0 4.7	内面から口縁部外面に貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。鉄釉は薄く錆色呈する。焼成が良好なためか灰釉の貫入は細かい。	腰錆碗
8	瀬戸・美濃陶器	碗	(10.1) 5.8 4.2	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰錆碗
9	肥前磁器	杯	7.8 4.1 3.3	口縁部は大きく開く。外面に一カ所花卉文を描く。	波佐見系
10	瀬戸・美濃陶器	小碗	(7.1) 4.2 3.4	高台脇以下を除き貫入の入る灰釉を施す。高台端部は丸い。	
11	瀬戸・美濃陶器	皿	12.7 3.0 6.4	見込み鉄絵具による型紙刷りで菊花状の文様を描く。内面から高台脇に灰釉を施す。	御深井
12	瀬戸・美濃陶器	皿	12.7 3.0 6.4	見込み鉄絵具による型紙刷りで菊花状の文様を描く。内面から高台脇に灰釉を施す。	御深井
13	製作地不詳陶器	皿?	- (1.5) (4.6)	細かい貫入の入る灰釉を内面から高台脇に施す。見込みと無釉の高台内に黒の上絵具で文様を描く。	関西系。16と同じ胎土、焼成、上絵具。
14	瀬戸・美濃陶器	灯明受け皿	8.6 1.9 4.0	外面底部から体部回転斡削り。錆釉施後、底部外面を拭う。受け部「U」字型の流入口を一カ所設ける。体部外面受け皿の重ね焼き痕。	
15	肥前磁器	瓶	- - 4.4	口縁部欠損。肩部圏線内に柳歯状の赤絵を施す。赤色の上絵具は殆ど剥がれる。	
16	製作地不詳陶器	鬘水入れ	13.1 3.3 13.5	瀬戸・美濃鬘水入れに比して幅が広く、器高が低く、胎土は緻密である。灰釉の貫入は細かい。体部外面1面づつに松と竹を上絵付けする。本来の色は不明であるが、松の幹は黒である。	二次的な弱い被熱を受け、上絵具が発泡する。 関西系。
17	瀬戸・美濃陶器	鬘水入れ	12.9 3.7 13.2	底部外面露胎。内面から体部外面灰釉を施す。体部外面2面に鉄絵具による型紙刷りで植物文を描く。文様不明瞭。	
18	瀬戸・美濃陶器	瓶	5.2 14.1 14.5	寸胴型の体部を有し、口縁は受け口状を呈する。口縁部内面から底部外面に柿釉を施し、体部下端以下の釉を拭う。体部上位の釉は黒色を呈する。	口縁端部はすべて小さく欠ける。
19	瀬戸・美濃陶器	瓶		外面鉛釉施後肩部付近にうのふ釉を掛ける。底部外面から体部下端の釉を拭う。内部に鉄片が入っており、下部は変色する。鉄片の大きさから、口縁部を打ち欠く欠損後にお歯黒壺として使用したと考えられる。	尾呂徳利。お歯黒壺として利用。
20	瀬戸・美濃陶器	瓶	- 7.4 -	外面鉛釉を施し、体部下端から高台内の釉は拭う。内面露胎。	徳利
21	瀬戸・美濃陶器	練り鉢	23.6 13.3 12.8	直立する角高台から緩く内湾して立ち上がり、口縁部は肥厚する。外面口縁部下に凹線。外面口縁部下位以下は回転斡削り。見込み周縁に浅い凹線。見込み目痕三カ所あり。内面から高台脇細かい貫入の入る灰釉を施す。	
22	在地系土器	火鉢?	27.3 14.3 21.6	低い鉢形を呈した体部に「コ」の字状を呈した高台を貼り付ける。高台の2カ所に円孔を開ける。高台内は焙烙と同じ型作り時の痕跡が残る。	
23	在地系土器	風炉	27.8 20.7 26.0	さな部分で大きくびれる。空気取り入れ口は広く開け、焼成部分の窓は小さく開ける。さな受けは三カ所小さく粘土を貼り付け、器受けは長く脚状の粘土を三カ所貼り付ける。焼し焼成。外面やや粗く磨く。底部外面は型作り痕が残り、低い脚を三カ所貼り付ける。	さなと器受け間は酸化炎で焼しが戻る。
24	在地系土器	さな	18.3 1.3 -	径の大きい側は型作り痕が残り、こちらを下にして使用。焼し焼成。径の小さい側は酸化炎で焼しが戻る。	径と使用痕から23には伴わない。
25	石製品	砥石	13.8 2.8 1.0	細長く、薄い板状を呈す。1面使用、片側面に製作痕残る。	流紋岩
26	石製品	砥石	(8.2) 3.7 1.9	1面使用、中央部が厚く両端が薄く磨り減る。	砥沢石
27	石製品	砥石	14.5 4.0 3.1	断面長方形、1面使用、他の面には製作痕残る。	流紋岩
28	石製品	砥石	(3.0) 2.9 1.7	両端を欠く、1面使用他の面に条線状の製作痕残る。	砥沢石
29	石製品	石臼(上)	径36.0 高さ10.3	全体に摩滅、挽き手取り付け部が付く。	粗粒輝石安山岩
30	石製品	石臼(上)	径34.5 高さ13.0	上面がわずかに落ち込む、挽き手取り付け部が付く。	牛伏砂岩。

番号	種類	器種・器形	計測値	特徴・その他	備考
31	石製品	石臼(下)	径36.7 高さ13.1	厚み有り、軸受け穴がやや歪む。	粗粒輝石安山岩
32	石製品	砥石	(5.2) 4.2 1.4	端部片、1面使用。	砥沢石
33	石製品	砥石	(5.6) 3.3 1.4	扁平で片減りしている。1面使用。	流紋岩
34	鉄製品	鉄	12.2 2.3 0.4	握り部から先端部まで直線的な作り。	
35	鉄製品	包丁	(17.1) 6.0 0.3	薄刃で幅広。	
36	銅製品	煙管吸い口	6.0 1.0 -	肩から吸い口にかけてゆるやかに細くなる。	
37	銅銭	寛永通宝			
38	銅銭	寛永通宝か			
39	銅銭				
40	銅銭				

Ⅱ区6号建物(第136~142図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	皿	8.7 2.4 5.5	底部左回転糸切り無調整。体部下端直立気味に立ち上がる。口縁部緩く内湾する。内面底部と体部の境不明瞭。	
2	在地系土器	皿	8.8 2.2 5.9	底部左回転糸切り無調整。糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。見込みと体部の境不明瞭。	口縁部端部灯芯痕5カ所。底部周縁一カ所黒く変色。
3	在地系土器	皿	(9.2) 2.2 5.4	底部右回転糸切り無調整。底部内面螺旋状轆轤目明瞭。体部直線的に開く。	
4	在地系土器	皿	10.0 2.4 6.1	底部右回転糸切り無調整。体部外反する。内面底部と体部境は明瞭。底部内面螺旋状の轆轤目残る。	
5	在地系土器	皿	(8.7) 2.1 (6.3)	底部左回転糸切り無調整。糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。見込みと体部の境不明瞭。	
6	在地系土器	皿	9.6 2.0 6.1	撚りのない左回転糸切り無調整。外面底部と体部の境不明瞭。見込み左回転シャープな螺旋状凹線。見込み窪む。	腰部黒く変色。口縁部端部二カ所灯芯痕。
7	在地系土器	皿	(10.5) 1.9 5.3	底部撚りのない左回転糸切り無調整。体部外面中位窪む。	底部外面周縁油附着。
8	在地系土器	皿	(6.7) 1.6 3.4	底部回転糸切り無調整。胎土は緻密で小型。見込み周縁は断面三角形の凹線巡る。	底部外面不明墨書。底部焼成前穿孔三カ所。
9	肥前磁器	小碗	8.7 4.4 3.4	外面に二重網目文を描く。	波佐見系
10	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.0) 5.5 3.6	器形、釉調や口縁部外面の一カ所に鉄泥で植物文を描くなどの特徴はⅥ区2建36に似ている。しかし、器壁は厚く、高台径も大きく、貫入はやや粗い。また、胎土も粗い。	
11	瀬戸・美濃陶器	碗	9.6 4.9 3.6	器形、釉調や口縁部外面の一カ所に鉄泥で植物文を描くなどの特徴はⅥ区2建36に似ている。しかし、器壁は厚く、高台径も大きく、貫入はやや粗い。また、胎土も比して粗く、10に似る。	
12	瀬戸・美濃陶器	碗	9.5 5.6 3.6	器形、釉調や口縁部外面の一カ所に鉄泥で植物文を描くなどの特徴はⅥ区2建36に似ている。しかし、器壁は厚く、高台径も大きく、貫入はやや粗い。また、胎土も比して粗く、10に似る。	
13	肥前磁器	碗	(10.9) 5.1 4.5	外面簡略化した文様を描く。欠損部は笹文か。見込み蛇の目釉剥ぎ。	波佐見系
14	肥前陶器	碗	11.5 7.6 5.0	口縁部外面二重圏線内に雲状の簡略化した文様、体部に東屋山水文を描く。	陶胎染付
15	肥前陶器	碗	11.1 7.0 5.0	外面に雪持ち笹?と簡略化した東屋山水文を、口縁部外面に簡略化した四方棒?文を描く。	陶胎染付
16	肥前陶器	碗	10.6 7.1 4.7	口縁部外面二重圏線、体部に東屋山水文を描く。	陶胎染付
17	瀬戸・美濃陶器	碗	10.3 5.8 4.7	口縁部下は張り出し、緩い稜をなす。口縁部は直立する。緩い稜線部分斑状に長石釉を施す。高台端部は幅広く、内部は低く突出する。高台脇以下を除き黒色の鉄釉を施す。	
18	瀬戸・美濃陶器	碗	9.3 4.9 3.4	腰に稜を有し、稜直上には凹線が1条巡る。口縁部外面に一カ所鉄泥で枝、呉須で花を描く。高台脇以下を除き貫入の入る灰釉を施す。	せんじ碗
19	瀬戸・美濃陶器	碗	9.8 (4.0) -	器形は18と同様である。腰に稜を有し、稜直上には凹線が1条巡る。貫入の入る灰釉を施す。	せんじ碗
20	瀬戸・美濃陶器	碗	9.3 6.0 4.6	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。腰部に稜を有する。	腰錆碗
21	瀬戸・美濃陶器	碗	9.6 5.4 4.2	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰錆碗
22	瀬戸・美濃陶器	碗	9.6 5.7 4.2	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰錆碗
23	瀬戸・美濃陶器	碗	9.8 5.4 4.2	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰錆碗
24	瀬戸・美濃陶器	碗	9.2 6.1 5.0	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰錆碗
25	瀬戸・美濃陶器	碗	12.2 5.6 4.2	体部に丸味を有し、26に比して小さいが、高台径は大きい。体部外面に一カ所鉄絵具で簡略化した柳を描く。高台脇以下を除き灰釉。粗い貫入入る。	柳茶碗。見込み使用痕。

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
26	瀬戸・美濃陶器	碗	13.4 6.0 3.6	体部と口縁部は緩く内湾し、直線的に開く、高台径は小さい。高台脇以下を除き灰釉。外面に一カ所鉄絵具で柳を描く。	柳茶碗。見込み使用痕。
27	肥前磁器	碗	4.2 - -	外面に雪輪梅樹文。高台内不明銘。	波佐見系
28	瀬戸・美濃陶器	小碗	6.6 3.9 3.0	高台脇以下を除き貫入の入る灰釉を施す。やや高い高台を貼り付ける。	
29	瀬戸・美濃陶器	小碗	7.0 3.9 2.8	高台脇以下を除き貫入の入る灰釉を施す。高台はやや高い。	
30	瀬戸・美濃陶器	小碗	6.7 4.0 3.1	高台脇以下を除き貫入の入る灰釉を施す。やや高い高台を貼り付ける。	
31	瀬戸・美濃陶器	小碗	7.1 3.9 3.1	高台脇以下を除き貫入の入る灰釉を施す。やや高い高台を貼り付ける。	
32	瀬戸・美濃陶器	小碗	7.1 4.1 3.2	高台脇以下を除き貫入の入る灰釉を施す。やや高い高台を貼り付ける。口縁部外面一カ所須で不明文様を描く。	
33	瀬戸・美濃陶器	小碗	7.6 3.3 4.8	高台内の扱りは浅い。外面口縁部下まで回転削り。内面から口縁部外面鉛釉。	
34	肥前磁器	皿	13.8 2.8 7.1	見込み蛇の目釉剥ぎ。見込みコンニャク判による五弁花。体部内面二重圏線と唐草文。	波佐見系。焼成不良。35と組。
35	肥前磁器	皿	14.0 3.0 7.2	見込み蛇の目釉剥ぎ。見込みコンニャク判による五弁花。体部内面二重圏線と唐草文。	波佐見系。焼成不良。34と組。
36	肥前磁器	皿	14.1 3.0 7.5	見込み蛇の目釉剥ぎ。見込みコンニャク判による五弁花。体部内面二重圏線と唐草文。	波佐見系。
37	肥前磁器	皿	13.7 4.1 7.8	見込みに大きく「清水」と書き、他に文様はない。	波佐見系
38	瀬戸・美濃陶器	皿	12.0 2.4 6.6	見込み鉄絵具による型紙刷りで花卉文を描く。内面から高台脇灰釉を薄く施す。	御深井
39	瀬戸・美濃陶器	碗蓋	4.9 3.0 10.7	口鏝。天井部外面に2種一対の鉄絵を描く。つまみ周縁鉄絵具による二重圏線。貫入の入る長石釉を施す。	
40	瀬戸・美濃陶器	仏飯器	7.3 4.7 4.4	低く小さい脚から大型の杯部に至る。脚裾外面から脚内面は無釉。貫入の入る灰釉を施す。	
41	瀬戸・美濃陶器	香炉	(10.7) 5.9 8.2	底部から腰部外面右回転削り。底部に低い脚を三カ所貼り付ける。体部外面は右回転の螺旋状凹線を巡らす。体部外面から口縁部内面黄釉に近い鉛釉。	
42	瀬戸・美濃陶器	香炉	7.5 4.5 5.9	底部から腰部外面右回転削り。底部に低い脚を三カ所貼り付ける。体部外面から口縁部内面黄釉。	
43	瀬戸・美濃陶器	小香炉	5.0 4.7 3.0	体部外面下端から口縁部内面灰釉。口縁部内傾し、端部は内面に突き出す。	
44	瀬戸・美濃陶器	瓶ミニチュア	- 2.3 -	二つの型で成形し、中央で貼り付ける。外面調整は丁寧であるが、内面に貼り付け痕残る。外面体部下端まで柿釉。	
45	肥前磁器	小瓶	- 2.8 -	外面に梅鉢と笹文を各一カ所描く。	御神酒徳利
46	在地系土器	大黒人形	- 5.9 -	前後二つの型で作り、中央で貼り付ける。貼り付け部には撫で痕残る。	
47	在地系土器	不明	2.0 0.4 2.0	おはじき状を呈する。	
48	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	10.6 3.8 5.4	底部外面から体部回転削り。内面から口縁部外面に鉛釉を施す。口縁部に一カ所粘土紐を貼り付ける。高台はごけ底状。	口縁部全面に油付着。
49	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	10.4 1.9 4.6	外面底部から体部回転削り。錆釉施後、底部外面を拭う。	口縁部油付着。
50	瀬戸・美濃陶器	灯明受け皿	10.7 2.1 4.5	外面底部から体部回転削り。錆釉施後、底部外面を拭う。受け部「U」字型の流入口を一カ所設ける。体部外面重ね焼き痕。	
51	志戸呂陶器	灯明受け皿	9.2 1.7 4.3	底部外面から体部回転削り。内面から口縁部外面に鉄泥を施す。受け部は欠損するが、アーチ状の流入口を一カ所設ける。	外面露体部油により?黒く変色。
52	製作地不詳	灯明皿	10.0 1.8 4.6	体部は広がり、口縁部は外反する。底部右回転糸切り無調整。体部に艶削りは認められない。内面から口縁部鉄泥を施す。釉調は志戸呂に似るが、露胎胎部の色調は錆色を呈するが、胎土は青灰色である。志戸呂に比して持ち重りがする。	
53	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	7.3 1.4 3.7	小型。外面底部から体部回転削り。錆釉施後、底部外面を拭う。体部外面に受け皿との重ね焼き痕。	
54	瀬戸・美濃陶器	手付き水注	5.2 9.8 7.6	長い取っ手と注ぎ口を有する。外面肩部に条線を巡らす。高台外面から口縁部鉛釉。	内部1/3まで鉄片が入る。お歯黒壺として使用。
55	瀬戸・美濃陶器	双耳瓶	- - 6.6	肩は緩く傾斜し、端部は稜を成す。高台は断面方形で直線的な器形。高台脇以下を除き、外面に黄釉を施す。肩部には灰が掛かり、釉が濁る。	
56	瀬戸・美濃陶器	徳利	3.8 22.3 7.8	体部は下部にいくに従い太くなる。肩部には状線を巡らす。鉛釉を施した後、体部下端以下の釉を拭う。頸部から肩部に薬灰釉を流す。	尾呂徳利
57	瀬戸・美濃陶器	徳利	4.0 20.3 6.8	体部は筒型に近い。口縁部は外面に折り返し、端部はほぼ平坦。灰釉を施した後、体部下位以下の釉を拭う。貫入する。	高田徳利
58	瀬戸・美濃陶器	徳利	- - (7.0)	体部径に比して器高は低い。腰部に稜を有する。体部一カ所窪ませる。鉛釉を薄く施し、底部外面の釉を拭う。底部右回転糸切り無調整。	
59	瀬戸・美濃陶器	瓶	- - 13.9	大型の瓶で上半は欠損。外面は体部下端まで光沢のある錆色の鉄釉を施す。	低い方の欠損部を中心に幅3cm程、油が付着。油は低い方の割れ口にも付着する。
60	瀬戸・美濃陶器	片口鉢	14.8 11.0 7.4	体部下位は丸味を持ち、口縁部は直立する。体部下位回転削り。口縁部外面螺旋状沈線。口縁部外面二カ所に銅緑釉を掛ける。見込み目痕三カ所。体部以下を除き灰釉。	

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
61	瀬戸・美濃陶器	すり鉢	(26.2) 9.8 (10.5)	小型のすり鉢。底部右回転糸切り無調整。口縁部丸くおさま、内面は断面「コ」の字型の凹線巡らす。	内面底部と周縁使用により摩滅。見込みのすり目は完全にすり減る。
62	在地系土器	甕	24.2 19.5 16.6	口縁部「コ」の字状。底部外面は焙烙などと同様な痕跡あり。	器壁中央部は焼し、それ以外は酸化している。
63	在地系土器	鍋	(38.0) - -	体部と口縁部直線的に開く。外面煤著しく付着。	
64	石製品	硯	(12.1) 7.1 1.4	海部分欠損。陸の中央は主軸に沿ってやや窪む。蓋の受け部を小さく削り出す。	凝灰質頁岩
65	石製品	石臼(下)	径(28.0) 高さ8.6	扇状の破片、ふくみは浅い。	牛伏砂岩
66	石製品	石臼(下)	径(35.0) 高さ9.5	半分を欠く、ふくみは浅い。	粗粒輝石安山岩
67	石製品	石臼(上)	径 35.7 高さ12.0	ふくみは浅い。挽き手取り付け部が付く。もの配り穴はやや斜めに空く。	粗粒輝石安山岩
68	石製品	石臼(下)	径 39.0 高さ11.2	やや薄手でふくみは大きい。	粗粒輝石安山岩
69	石製品	石臼(上)	径(28.0)高さ 9.5	破片、縁部分は高く、ふくみは浅い。	粗粒輝石安山岩
70	石製品	砥石	16.4 3.1 3.1	両面使用、断面方形で中央部に高まり、両側縁に製作痕、表面に鉄分付着。	流紋岩
71	石製品	砥石	13.5 4.2 1.7	面取りされた定形品、薄手で1面使用、中央が使用によってやや凹む、面は滑らか。	珪質粘板岩
72	石製品	砥石	7.7 2.9 2.1	1面使用、中央が厚く両端部は薄い。側面に製作痕見られる。	砥沢石
73	石製品	砥石	13.3 3.4 3.2	1面使用、中央が厚く両端部は薄い。	砥沢石
74	石製品	石臼(上)	径36.0 高さ11.4	ふくみはやや大きい。挽き手取り付け部が付く。	粗粒輝石安山岩
75	石製品	石臼(上)	径33.0 高さ10.8	半分を欠損、縁部分に磨り痕、挽き手用横打ち込み穴あり。	粗粒輝石安山岩
76	石製品	砥石	(5.5) 2.8 1.8	端部片、斜めに磨り減る。	砥沢石
77	石製品	砥石	6.3 5.6 4.5	断面方形、1面使用。	砥沢石
78	石製品	砥石	(10.4) 3.2 2.1	一端が細くなる、両面使用。両側縁に製作痕残る。	砥沢石
79	石製品	砥石	(8.3) 2.2 3.5	断面方形、1面使用。	流紋岩
80	石製品	砥石	(11.8) 3.4 2.0	両面使用、中央部が厚く両端が薄くなる。	砥沢石
81	石製品	砥石	18.2 12.2 10.2	大型品、不定形。使用面2面、両端面に刃慣らし溝あり。	牛伏砂岩
82	鉄製品	茶釜	13.7 18.0 -	胴中位に稜、口縁部直立、3足。	囲炉裏出土
83	鉄製品	釜	最大径34.8(16.0)	口縁を欠く、底は直線的に突き出る。	囲炉裏出土
84	鉄製品	鍋	径 24.4 13.0	3足で、縁部分は有段。両端に釣手口。	
85	鉄製品	鍋	底径24.0 -	3足で、口縁部欠損。底はやや平坦。	
86	鉄製品	鉞	22.5 4.0 0.4	刃はやや薄手、柄の部分は小振り。	
87	鉄製品	包丁	(18.0) 7.0 0.2	薄手で幅広の刃部。片面に鋒状痕。	
88	鉄製品	包丁	17.7 5.6 0.4	刃部長方形で幅広。	
89	鉄製品	包丁	(14.2) 5.3 0.3	幅広の刃を持つ。	
90	鉄製品	刀子	(17.1) 2.1 0.5	両端がやや細くなる。木質部残る。	
91	鉄製品	小柄	16.5 1.5 0.4	刃は先が細く直線的。	
92	鉄製品	包丁か	(11.4) 3.2 0.3	破損品、柄部分に木質部残る。	
93	鉄製品	刀子	(10.1) 1.9 0.3	刃部欠損品。	
94	鉄製品	刀子	(10.5) 2.5 1.1	刀子の柄部分か。	
95	鉄製品	小柄	(10.1) 1.3 0.5	刃部欠損。細線の毛彫り文様。	
96	鉄製品	鐔	径7.6 0.4 -		
97	鉄製品	錠	9.2 5.4 2.0		
98	銅製品	矢立	(20.2) 1.3 -	墨入れ部欠、筒端部球状に膨らむ。	
99	鉄製品	火打ち金	(8.3) 2.1 0.4	打ち込み部に木質残る。	
100	鉄製品	火打ち金	7.2 3.3 0.5	鏃型、打ち込み部に木質残る。	
101	鉄製品	火打ち金	5.3 2.1 0.5	使用部厚く緩く抉れ、上部は波打つ。	
102	鉄製品	鎌	11.7 10.0 3.7	柄は刃部に対し鈍角、端部鈎状となる。	
103	鉄製品	刀子か	(10.1) 2.1 0.3		
104	銅製品	煙管雁首	6.2 1.0 火皿1.5		
105	銅製品	煙管雁首	4.1 1.0 火皿1.9	火皿部破損、羅宇竹残存。	
106	銅製品	煙管雁首	(3.6)1.1 火皿1.5	肩部分に細線文。	
107	銅製品	煙管雁首	(2.0) - 火皿1.0	火皿部分。	
108	銅製品	十能か	- - 7.1	小振りの十能基部片か。	
109	銅製品	煙管雁首	(6.0) 1.2 -	火皿部欠損。羅宇竹残存。	
110	銅製品	煙管吸い口	6.5 1.2 -	肩部に初殻付着。羅宇竹残る。	
111	銅製品	煙管吸い口	6.2 1.0 -	肩から吸い口に徐々に細くなる、羅宇竹残る。	
112	銅製品	煙管吸い口	5.2 1.1 -	羅宇竹残存。	
113	銅製品	煙管吸い口	6.1 1.1 -	肩部が短く吸い口は細い。	
114	鉄製品	不明	(6.1) 1.6 0.2	稜を持つ。	
115	鉄製品	環状製品	径3.0 1.2 -	刃物の関部分か。	
116	鉄製品	鋸か	(3.6) 2.7 0.2	下辺に刃らしき痕跡残る。	
117	銅銭	寛永通宝			
118	銅銭	寛永通宝			
119	銅銭	寛永通宝			

番号	種 類	器種・器形	計 測 値	特 徴 ・ そ の 他	備 考
120	銅銭	寛永通宝			
121	銅銭	銭名不明			
122	銅銭	寛永通宝			
123	銅銭	銭名不明			
124	銅銭	寛永通宝			
125	銅銭	銭名不明			
126	銅銭	銭名不明			
127	鉄銭				
128	鉄銭				
129	鉄銭				
130	鉄銭				
131	鉄銭				
132	鉄銭				
133	鉄銭				
134	鉄、銅銭	指し銭			

IV区1号建物(第143~146図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	皿	7.5 1.1 4.7	胎土は緻密。体部は広く開き浅い。見込み周縁断面三角形の沈線。底部外面左回転糸切り無調整。	
2	在地系土器	皿	(10.0) 1.5 (6.0)	底部外面右回転糸切り無調整。外面黒変。口縁部内面二カ所灯芯痕のように黒変。	
3	肥前磁器	碗	(10.0) 5.0 (4.1)	外面雪輪梅樹文。	波佐見系。
4	肥前磁器	碗	8.9 4.0 3.7	外面雪輪梅樹文。	波佐見系。
5	肥前磁器	碗	8.6 4.4 3.3	外面2重網目文。	波佐見系。
6	肥前磁器	碗	9.0 4.8 4.0	外面2重網目文。見込み1重網目文、底部はコンニャク判による菊花文。	波佐見系。
7	肥前磁器	碗	10.1 5.7 4.0	体部外面丸文内にコンニャク判による桐文を描く。高台外面と脇に3重の圏線。	波佐見系。
8	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.0) 5.6 4.2	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰鎗碗
9	肥前磁器	丸碗	(9.0) - (3.6)	外面孟宗譚。見込み簡略化した五弁花、周縁は2重圏線。器壁厚い。	
10	肥前磁器	皿	13.1 3.6 8.2	外面簡略化した唐草文。底部外面、1重圏線内に崩れ「渦福」?銘。体部内面不明文様。見込みコンニャク判による五弁花。	波佐見系。
11	京・信楽系陶器?	向付け	7.8 5.4 5.8	腰部に稜を持ち、体部と口縁部は直立する。高台脇以下を除き透明釉。細かい貫入。削り出し高台は幅広くシャープ。外面一カ所に鉄泥で竹、具須で葉を描く。	
12	肥前磁器	筒形碗	7.8 6.4 4.2	外面青磁・内面透明釉の染め付け碗。口縁部内面に四方襷、底部周縁に2重圏線、中央にコンニャク判による五弁花。素地は青灰色を呈し、釉には粗い貫入が入る。	焼成不良。
13	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	9.1 2.2 4.5	内面から底部給釉。口縁部に一カ所粘土紐を貼り付ける。口縁部周縁に油煙付着。外面露体部に油が黒く付着。	
14	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	(11.0) 2.1 (4.2)	錆釉施釉後に底部外面の釉を拭い取る。	
15	製作地不詳陶器	不詳	- - 6.9	器形と成形・調整は彌徳利と同様であるが、残存部上端で外側に屈曲する。内面轆轤目顕著で釉はごく薄く掛かるのみ。見込みには目痕3カ所。底部外面と外面周縁は回転斲削りで無釉。外面灰釉。	京・信楽系? ちろり?
16	肥前磁器	青磁香炉か火入れ	9.5 6.9 6.3	蛇の目凹型高台。側面形は太鼓型を呈し、体部外面に鑿状工具による縦凹線を施す。口縁部上端は内傾し、端部内面は内側に張り出す。青磁釉を施す。内面口縁部以下と蛇の目は無釉。	
17	瀬戸・美濃陶器	練り鉢	33.4 15.1 15.7	口縁部は内湾し、端部は外方に張り出す。高台脇以下を除き灰釉。口縁部から外面に銅緑釉を4カ所に掛け流す。見込みに目痕4カ所。釉には貫入が入る。	
18	瀬戸・美濃陶器	德利	- - 6.9	内面を除く全面に錆釉を施し、底部外面の釉を拭い取る。体部二カ所を窪ませる。体部外面下位まで回転斲削り。斲削りとの境には稜線を有する。	
19	瀬戸・美濃陶器	德利	3.5 - -	高田德利。外面から口縁部灰釉。部分的に粗い貫入。口縁部部の折り返し部欠損したまま施釉して焼成している。体部に融着痕あり。	
20	在地系土器	焙烙	(40.9) 5.0(36.7)	耳1カ所残存。体部外面煤付着。	
21	在地系土器	鉢	42.0 10.8 34.0	基本的な成形は焙烙と同じ。体部はやや内湾し、口縁部は肥厚する。内面から口縁部端丁寧磨く。底部内面器表剥離。	
22	石製品	石臼(下)	径(38.0)高さ13.7	ふくみは大きい、径10cm、深さ2.5cm程の穴が見られる。	粗粒輝石安山岩
23	石製品	凹石	18.1 14.0 6.4	やや扁平で楕円形を呈す。	粗粒輝石安山岩
24	石製品	砥石	14.3 3.1 3.0	2面使用、中央部が厚く両端部が薄くなる。	砥沢石
25	石製品	砥石	12.2 3.1 4.0	4面使用、中央部厚く両端部薄くなる。	砥沢石
26	石製品	砥石	(9.3) 3.0 2.5	2面使用、中央部が厚く両端部が薄くなる。側面に製作痕残る。	砥沢石
27	銅製品	印籠	4.5 2.7 2.2	楕円形で上部口縁に鐮状の張り出し。	
28	銅製品	印籠	3.7 2.2 2.0	楕円形で両端に筒状の部位が付く。	
29	鉄製品	鍋	(29.0) 16.5 -	胴から底部、破損著しい。3本の足が付く。	
30	鉄製品	蓋	径17.4 2.1 -	紐状の摘み有す。端部に低いかえり。	
31	鉄製品	火打ち金	5.3 2.3 0.5	両腕を上折り曲げ結合、一端螺旋状。	
32	鉄製品	火打ち金	5.0 1.9 0.3	下部やや厚くなる。円孔を持つ。	
33	鉄製品	鎌	(12.6) 3.2 0.3	先端部欠損、基部に柄の木質部有り。	
34	鉄製品	鍔か	11.6 3.0 -	端部鍔状に湾曲、端部欠損。	
35	鉄製品	板状製品	9.7 3.9 0.8	包丁か。	
36	鉄製品	鉈	(8.8) 2.3 0.8	先端部および柄を欠損。木質残る。	
37	銅製品	煙管雁首	5.4 0.9 火皿1.6		
38	銅製品	煙管雁首	4.3 1.5 火皿1.5	肩はやや太い。	
39	銅製品	煙管雁首			
40	銅製品	煙管雁首	4.5 0.8 火皿1.1	羅字竹残存。	

番号	種 類	器種・器形	計 測 値	特 徴 ・ そ の 他	備 考
41	銅製品	煙管雁首	3.8 1.1 火皿1.6	首が見られない。	
42	銅製品	煙管吸い口	5.1 0.9 -	羅字竹残る。	
43	銅製品	煙管吸い口	5.6 1.1 -	肩から吸い口にかけて直線的。	
44	銅製品	煙管雁首	3.9 1.1 火皿1.7	火皿および肩部分破損。	
45	銅製品	煙管吸い口	(3.4) 1.0 -		
46	銅製品	煙管吸い口	5.9 1.0 -		
47	銅製品	煙管吸い口	3.9 1.3 -	羅字竹残存。	
48	銅製品	煙管雁首	(2.7) 1.4 -	火皿部分を欠損、やや潰れている。	
49	鉄製品	釘	8.1 0.7 0.4	やや扁平。	
50	鉄製品	釘か	(7.4) 1.0 -	端部は直角に折れ端部丸みを持つ。	
51	鉄製品	釘	7.9 1.9 1.3	一端を環状に折り曲げている。	
52	銅銭	小判型模鑄銭	6.5 3.8 -	小判を模して作られている。祭祀用か。	
53	銅銭				
54	銅銭				
55	銅銭				
56	銅銭				
57	銅銭				
58	銅銭				
59	銅銭				
60	銅銭				
61	銅銭				
62	銅銭	寛永通宝			
63	銅銭				
64	銅銭			銅銭破損品。116と癒着。	
65	銅銭	大観通宝			
66	銅銭				
67	銅銭	寛永通宝			
68	銅銭				
69	銅銭	寛永通宝		破損品。	
70	銅銭				
71	銅銭	寛永通宝			
72	銅銭	寛永通宝			
73	銅銭	寛永通宝			
74	銅銭	寛永通宝			
75	銅銭	寛永通宝			
76	銅銭	寛永通宝			
77	銅銭	寛永通宝			
78	銅銭				
79	銅銭	寛永通宝			
80	銅銭	寛永通宝			
81	銅銭	寛永通宝			
82	銅銭	寛永通宝			
83	銅銭				
84	銅銭	寛永通宝			
85	銅銭	寛永通宝			
86	銅銭			破損品。	
87	銅銭	寛永通宝			
88	銅銭	寛永通宝			
89	銅銭	寛永通宝			
90	銅銭	寛永通宝			
91	銅銭	寛永通宝			
92	銅銭	寛永通宝			
93	銅銭				
94	銅銭	寛永通宝			
95	銅銭	寛永通宝			
96	銅銭	寛永通宝			
97	銅銭	寛永通宝		裏面青海波文。	
98	銅銭	寛永通宝			
99	銅銭	寛永通宝			
100	銅銭				
101	銅銭	寛永通宝			
102	銅銭	寛永通宝			
103	銅銭	寛永通宝			
104	銅銭	寛永通宝			

番号	種類	器種・器形	計測値	特徴・その他	備考
105	銅銭	寛永通宝			
106	銅銭	寛永通宝			
107	銅銭	寛永通宝			
108	銅銭	寛永通宝		2枚が癒着。	
109	銅銭	寛永通宝			
110	銅銭				
111	銅銭	雁首銭		雁首火皿部分を潰して作っている。	
112	銅銭	寛永通宝			
113	銅銭	寛永通宝			
114	銅銭	寛永通宝			
115	銅銭			破損品。	
116	銅銭			銅銭破損品。64と癒着。	
117	銅銭	寛永通宝			
118	鉄銭	寛永通宝		文字の判読可能。	
119	鉄銭				
120	鉄銭				
121	鉄銭				
122	鉄銭				
123	鉄銭				
124	鉄銭				
125	鉄銭				
126	鉄銭				
127	鉄銭				
128	鉄銭				
129	鉄銭				
130	鉄銭				
131	鉄銭				
132	鉄銭				
133	鉄銭				
134	鉄銭				
135	鉄銭				
136	鉄銭				
137	鉄銭				
138	鉄銭				
139	鉄銭			5枚癒着。	
140	鉄銭				
141	鉄銭				
142	鉄銭				
143	鉄銭				
144	鉄銭				
145	鉄銭				
146	鉄銭				
147	鉄銭				
148	鉄銭				
149	鉄銭				
150	鉄銭				
151	鉄銭				
152	鉄銭				
153	鉄銭				
154	鉄銭				
155	鉄銭				
156	鉄銭				
157	鉄銭				
158	鉄銭				
159	鉄銭				
160	鉄銭				
161	鉄銭				
162	鉄銭				
163	鉄銭				
164	鉄銭				
165	鉄銭				
166	鉄銭				
167	鉄銭				
168	鉄銭				

番号	種類	器種・器形	計測値	特徴・その他	備考
169	鉄銭				
170	石製品	石臼(下)	径33.0 高さ14.0	完形品、摺り目はほとんど見られない。	

Ⅵ区2号建物(第147~153図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	皿	(7.9) 1.1 (4.2)	体部から口縁部直線的に開く。底部外面左回転糸切り無調整。底部内面周縁断面三角形に窪む。	
2	在地系土器	皿	(9.3) 2.2 (5.3)	底部左回転糸切り無調整。体部外面は外反し、口縁部は内湾する。内面底部と体部の境は不明瞭。	
3	在地系土器	皿	(9.0) 2.2 (5.2)	底部左回転糸切り無調整。底部内面周縁凹線状に大きく窪む。体部は内湾する。	
4	在地系土器	皿	10.1 2.5 5.8	体部から口縁部緩く内湾する。底部外面左回転糸切り無調整。糸の撚りは見えない。	内面から口縁部外面に油付着。
5	在地系土器	皿	9.9 2.3 5.8	緩く外湾する体部から、やや内湾する口縁に至る。底部外面左回転糸切り無調整。	口縁端部に油付着。
6	瀬戸・美濃陶器	碗	10.2 5.8 4.7	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰鎗碗
7	瀬戸・美濃陶器	碗	(8.9) 5.5 4.4	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰鎗碗
8	瀬戸・美濃陶器	碗	9.5 5.8 4.3	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰鎗碗
9	瀬戸・美濃陶器	碗	9.3 5.7 4.1	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰鎗碗
10	肥前陶器	碗	(11.0) 7.3 (5.1)	口縁部外面に簡略化した四方禪文、体部に山水文を描く。	陶胎染付
11	肥前磁器	碗	(9.6) 4.5 (4.0)	外面植物文と高台外から脇に三重圏線。	波佐見系?
12	肥前陶器	碗	10.5 6.6 4.4	外面に東屋山水を描く。	陶胎染付
13	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.7) 5.7 4.7	高台脇以下を除き灰釉を施す。体部外面に呉須による不明文様。	御室
14	関西系陶器	碗	9.2 5.4 3.0	高台脇以下を除き貫入の入る透明釉を施す。高台は小さく削り出す。口縁部外面に一カ所鉄絵具で簡略化した文様を描く。	36と組。
15	肥前磁器	碗	10.2 5.3 4.4	外面コンニャク判による扇に花?文を4カ所に施文。高台内簡略化した「渦福」字銘。	波佐見系
16	肥前陶器	碗	(9.3) 6.3 4.1	口縁部外面に二重圏線。体部唐草文、高台脇一重圏線。口縁部焼成前の歪み。	陶胎染付
17	瀬戸・美濃陶器	碗	12.7 5.8 4.7	体部から口縁部は内湾気味に開く。外面に一カ所鉄絵具による柳文を描く。	柳茶碗
18	肥前磁器	小碗	(7.8) 4.1 3.2	外面一カ所細線による不明文様。	波佐見系
19	肥前磁器	碗	9.5 5.1 4.0	口縁部外面雨降り文。高台一部には釉が掛からない部分があり、素地も青灰色を呈する。焼成不良。	二次的な被熱あり。
20	肥前磁器	碗	10.0 5.1 4.0	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。	波佐見系
21	肥前磁器	碗	9.5 5.2 3.7	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。	波佐見系
22	肥前磁器	碗	9.3 4.7 3.8	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。	波佐見系
23	肥前磁器	碗	(9.8) 5.5 4.1	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。	波佐見系
24	肥前磁器	碗	9.8 4.3 3.8	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。	波佐見系
25	肥前磁器	碗	(10.0) 5.3 (4.2)	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。	波佐見系
26	肥前磁器	碗	10.0 5.3 4.1	体部外面コンニャク判による桔梗文を散らす。底部外面「渦福」字銘。	波佐見系
27	肥前磁器	碗	9.7 5.2 4.1	外面二重網目、内面網目文。見込み幅の広い菊花状文。高台内一重画内に「渦福」字銘文。	波佐見系
28	肥前陶器	碗	9.8 - -	小型の碗。外面に山水文?を描く。	陶胎染付
29	瀬戸・美濃陶器	小碗	6.9 4.2 3.5	高台脇除き灰釉。貫入入る。やや高めの貼り付け高台。	
30	瀬戸・美濃陶器	小碗	6.8 4.2 3.4	口縁部は少しくびれる。高台脇以下を除き灰釉。粗い貫入入る。貼り付け高台。	
31	肥前磁器	碗	10.0 5.3 4.4	外面コンニャク判による井桁内に桐と桐文を各三カ所に施文。	波佐見系
32	瀬戸・美濃陶器	碗	(8.2) - -	高台脇から内面に鉄釉(天目釉)。高台脇露体部との境には釉が厚く溜まる。	
33	肥前磁器	赤絵碗	8.6 - -	外面の唐草状文を緑、他を赤の上絵で施文。透明釉に細かい貫入が入る。	
34	肥前磁器	小杯	7.0 3.5 2.8	口縁部は外反する。残存部に染め付けはない。	
35	肥前磁器	猪口	(7.8) 5.5 4.3	2/3残る体部と口縁部に染め付けはない。	波佐見系?
36	関西系陶器	碗	9.0 5.4 3.0	高台脇以下を除き貫入の入る透明釉を施す。高台は小さく削り出す。口縁部外面に一カ所鉄絵具で簡略化した文様を描く。	14と組
37	肥前磁器	皿	13.5 3.9 7.7	体部内面に竹、見込みコンニャク判による五弁花。底部外面不明銘。	波佐見系
38	肥前磁器	皿	14.1 3.6 8.4	見込みコンニャク判による五弁花。高台内「渦福」字銘か。	波佐見系
39	肥前磁器	皿	14.4 2.7 7.2	底部蛇の目軸刺ぎ。体部内面梅の折れ枝文を三カ所描く。見込みコンニャク判による五弁花。	波佐見系

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
40	瀬戸・美濃陶器	皿	12.3 3.3 6.2	内面から高台内まで貫入の入る灰釉を施す。	御深井。
41	瀬戸・美濃陶器	皿	— — 5.3	高台端部を除き灰釉。貫入。内面口縁部下に段をつける。見込み型紙による梅文。	御深井。
42	瀬戸・美濃陶器	皿	(12.5) 3.0 6.2	高台端部を除き灰釉。貫入。内面口縁部下に段をつける。見込み型紙による花卉文？。	御深井。文様滲む。
43	瀬戸・美濃陶器	襷皿	(13.2) 3.6 (6.0)	高台端部を除き灰釉。貫入。口縁部は大きく髷をつける。	御深井
44	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	8.2 1.9 4.0	見込みから口縁部外面に灰釉。底部はごけ底状を呈する。	
45	志戸呂陶器	灯明受け皿	(11.1) 2.2 (5.5)	見込みから口縁部外面鉄泥。底部外面から口縁部外面下回転斫削り。受け部にアーチ状流入口を一对あける。内外面に油？が付着し、黒変する。	
46	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	(11.7) 2.7 5.6	見込み目痕3カ所。口縁部に粘土紐貼り付ける。内面から口縁部外面に鉛釉。高台はごけ底状。	口縁部油付着。
47	志戸呂陶器	灯明受け皿	6.5 2.3 5.1	見込みから口縁部外面鉄泥。底部外面から口縁部外面下回転斫削り。受け部にアーチ状流入口を一对あける。	
48	肥前磁器	仏飯器	— — 3.9	口縁部欠損。脚部下の半分は釉が掛からない。脚底部無釉。杯部には、東屋山水の下部が認められる。釉は白濁する。	焼成不良。
49	肥前磁器	香炉・火入れ	9.6 6.4 6.1	蛇の目凹型高台。体部中央は鑿状工具で凹線を引き、鉄泥を施す。その上下は呉須で点を付け、透明釉を施す。内面無釉。	
50	瀬戸・美濃陶器	香炉か火入れ	(12.0) 7.6 7.4	輪高台。口縁部は内側に張り出す。口縁部内面から体部下端に灰釉を施す。灰釉は御深井風。体部外面に鉄絵具による型紙磨り摺りあり。	御深井。
51	肥前磁器	青磁香炉	(10.5) — —	外面から口縁部内面に青磁釉を施す。素地は青灰色。	
52	瀬戸・美濃陶器	香炉	(8.6) 4.3 (7.7)	口縁部から高台脇鉛釉。底部には小さい脚を3カ所貼り付ける。口縁部上面僅かに窪む。	
53	瀬戸・美濃陶器	小香炉	5.5 4.0 3.3	口縁部から高台脇鉛釉。粗い貫入。貼り付け高台。口縁部内面は内側に小さく突き出す。	
54	瀬戸・美濃陶器	小香炉	(5.3) 4.4 (3.5)	口縁部から高台脇鉛釉。粗い貫入。貼り付け高台。口縁部内面は内側に小さく突き出す。	
55	瀬戸・美濃陶器	ひょうそく	6.0 5.0 4.4	杯部に光沢のある柿釉を施す。口縁部には灰が一部掛かる。脚底部外面右回転糸切り無調整で、中央に固定用の孔をあける。	
56	瀬戸・美濃陶器	水注	— — 4.9	肩部に耳が1カ所残る。耳の反対側には注ぎ口が設けられていたようで、割れ口が外方に向かっている。底部はごけ底状。内面から高台脇鉄釉施す。	
57	在地系土器	火消壺	— — 19.7	器形は被せ蓋式の火消壺形。底部外面は板状圧痕あり。轆轤調整。燻し焼成。	えな壺として使用。
58	瀬戸・美濃陶器	瓶	— — 13.0	肩部外面に横線を巡らす。器高に比して体部下位の径が大きく、無花果形を呈する。高台径は大きく、端部は凹線状の窪みが巡る。外面は高台内から外面を除き鉛釉を施す。内面も薄く鉛釉を施す。残存部にうのふ釉は認められない。	徳利
59	瀬戸・美濃陶器	鉢	21.8 5.8 10.5	ごけ状の底部から直線的に開き、口縁部は大きく内湾する。口縁部外面二条の凹線。口縁部四方を内側に押しして四方形にする。見込み四カ所に目痕。高台脇以下を除き灰釉。貫入。	
60	在地系土器	甕	(22.0) — —	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で。体部内外面撫で。	
61	瀬戸・美濃陶器	半胴甕	14.9 15.5 10.4	外面口縁部下に二条の凹線。高台脇以下を除き錆色の鉄釉を掛ける。釉には光沢がある。口縁部上面に目痕3カ所。	口縁部外面周縁釉が剥がれる。使用痕か。
62	製作地不詳	瓶	1.6 15.4 5.8	頸部は細く長い、体部外面右回転で条線を引く。体部下位以下を除き光沢があり、鉄泥を施釉。器表は錆色。頸部は黒味を帯び、頸部と体部の一部に植物条の痕が残る。胎土は緻密でせつ器質。	底部○内に「井」押印。
63	在地系土器	香炉？	— — (8.6)	外面器表剥離著しい。底部に小脚貼り付ける。脚は三カ所と考えられるが、一カ所残存、一カ所剥離、一カ所欠損する。燻し焼成で、器表黒灰色を呈する。	
64	在地系土器	焙烙	(42.6) 5.5(39.0)	耳一カ所残存。外面体部下端斫削り。	内外面一部煤付着。
65	在地系土器	鍋	37.1 11.5 17.8	鉢形を呈する鍋。外面煤付着。外面には紐作り痕残る。口縁部平坦。	
66	在地系土器	鍋	37.1 11.5 17.8	体部から口縁部直線的に開く。口縁部上面平坦。見込「□」内に「上釜屋」押印。	口縁部から体部外面著しく煤付着。底部外面僅かに付着。
67	在地系土器	手あぶり	22.0 7.1 17.4	底部に脚を3カ所貼り付ける。脚欠損。見込み菱形押印。	
68	石製品	砥石	(8.8) 5.4 0.7	薄く剥がれた剥片。	珪質粘板岩
69	石製品	砥石	(4.5) 3.3 1.6	両面使用、1端が薄くなる。	砥沢石
70	石製品	砥石	(7.2) 3.2 2.0	1面使用、端部薄くなる。	粗粒輝石安山岩
71	石製品	砥石	(5.7) 3.0 1.4	端部片、1面使用薄く磨り減る、製作痕残る。	砥沢石
72	石製品	石鉢	高さ(10.7)	縁の上面は平坦で外側にこぶ状の突起を持つ。	二ッ岳石
73	石製品	石臼(下)	径(31.0)高さ15.1	4分の1ほどの破損品。厚みがある。	粗粒輝石安山岩
74	石製品	砥石	21.5 8.0 7.4	大型品、断面方形。使用面は1面中央部が凹む。	点紋頁岩

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
75	石製品	砥石	(10.1) 5.4 4.9	断面方形、1面使用中央が凹む。	変質安山岩
76	石製品	砥石	14.5 (6.6) 6.1	3面使用、残る1面は凹凸が著しい。	テイサイト質凝灰岩
77	石製品	砥石	(10.4) 3.2 2.0	1面使用、中央部厚く両端部薄くなる。	砥沢石
78	石製品	砥石	(11.4) 2.6 2.3	1面使用、使用面やや波打つ。他の面には製作痕残る。	砥沢石
79	石製品	砥石	(10.1) 3.4 2.2	1面使用、一端が薄くなる。破損品。	砥沢石
80	石製品	砥石	(10.3) 2.6 1.7	1面使用、中央部厚く両端部薄くなる。他の面には製作痕残る。	砥沢石
81	石製品	砥石	(7.1) 2.7 1.8	1面使用、製作痕残る。	砥沢石
82	石製品	砥石	(10.7) 3.2 3.2	3面使用、中央部が厚く、両端部薄くなる。	砥沢石
83	石製品	砥石	17.4 3.2 2.0	定形品、断面方形で2面を使用。他の面には製作痕残る。	砥沢石
84	石製品	砥石	11.0 3.1 3.2	1面使用、中央厚く両端が磨り減る。	砥沢石
85	石製品	砥石	(9.3) 2.9 1.7	2面使用、やや扁平で中央が厚くなる。製作痕残る。	砥沢石
86	石製品	砥石	11.4 2.8 3.2	2面使用、中央部厚く両端が磨り減る。	砥沢石
87	石製品	砥石	10.7 2.8 1.6	1面使用、使用面平坦であるが裏面は丸みを持つ。側面に製作痕。	砥沢石
88	石製品	五輪塔(火輪)	23.5 23.8 12.1	全体的に風化、一角が破損。上面に空けられた穴は深い。	二ッ岳石
89	石製品	玉	径1.4 孔径0.3	穴が貫通する。表面は良く磨かれている。	琥珀
90	墨		(4.2) 2.2 0.9	欠損しているが端部に使用面残る。表面に草木及び雀の文様、裏面に文字が見える。	甕底部片の中から筆および繊維状の塊と出土している。
91	石製品	玉状製品	径2.7 孔径0.4	表面は平滑に磨かれ穴が貫通する、紐留め用か。	蛇紋岩
92	銅製品	おろし金	22.3 10.6 0.7	両面に粗さの異なる鋸が見られる。	
93	鉄製品	包丁か	(18.5) 9.5 0.4	刃は三角形、先端を欠損、柄に針金を巻く。	
94	銅製品	飾り鋸	2.7 (2.9) -	傘状の頭を持つ。	
95	銅製品	環状製品	径4.0 0.3		
96	鉄製品	板刃(鉋か)	7.5 2.9 0.5	一端が刃状に薄くなる。	
97	鉄製品	釘か	(8.4) 2.1 -	端部欠損、二本が癒着。	
98	鉄製品	小刀	25.7 7.2 2.1	刀身、柄に木質部、目釘残る。	
99	鉄製品	鉄鍋	35.6 12.8 -	3足、平らな底を持つ。釣り手部分に3孔。	
100	鉄製品	包丁か	(11.1) 5.8 0.2	刃部欠損品。	
101	鉄製品	鋸か	4.3 1.5 -	C字状を呈す。	
102	鉄製品	刀子か	5.9 2.1 0.7	刀子の基部か。	
103	鉄製品	棒状製品	21.5 1.7 -	一端に鉄線が巻かれている。	
104	鉄製品	刀子	(5.3) 1.1 0.4	両端を欠く、やや幅広である。	
105	鉄製品	毛抜きか	7.6 1.2 -	錆化著しい。	
106	銅製品	印籠	(3.3) 1.0 -	両側縁に筒状の紐通し、玉付着。	
107	鉄製品	小柄	(14.8) 1.3 -	金属製の柄を持つ。	
108	鉄製品	小柄	(11.0) 1.0 0.3	両端を欠く。	
109	鉄製品	錠	10.0 5.7 2.0	鉄線が巻かれ銅銭付着。	
110	鉄製品	錠	8.8 4.9 1.6		
111	銅製品	矢立	20.8 4.4 1.0	筆入れの中に筆(長さ15.0cm、径0.6cm、穂先に墨痕)が残る。	
112	銅製品	矢立	15.6 1.3 -	円筒形で斜格子状の透かし作り。	
113	銅製品	煙管	22.8 1.5 -	肩部分太く、羅字部も銅製。	
114	銅製品	煙管吸い口	(5.6) 1.3 -	肩部分やや膨らむ。	
115	銅製品	煙管雁首	(3.3) 0.8 火皿1.7		
116	銅製品	煙管雁首	5.1 1.3 火皿1.7	火皿および肩部一部破損。	
117	銅製品	煙管吸い口	7.3 1.3 -	稜を持つ。	
118	鉄	留め具	4.6 3.7 0.7	U字状で、両上部端に折り返された爪を持つ。	
119	鉄製品	留め具	4.5 4.2 0.6	U字状で、両上部端に折り返された爪を持つ。	
120	銅製品	筒型容器	5.0 2.1 -	筒状で片方に塊状のものが付く。	
121	鉛製品	鉄砲玉	径1.2	白色を帯びる。	
122	鉄製品	鋤	40.2 15.0 1.4	長方形で嵌め込み部広がる。筵痕有り。	
123	鉄製品	錠	23.7 5.4 0.8	刃は厚く、幅広。柄の木質残る。	
124	銅銭	緋し銭	15.0 - -	紐状の繊維痕見られる。95枚。	
125	銅銭	緋し銭	12.4 - -	紐が残る。93枚。	
126	銅銭	緋し銭		23枚。	
127	銭	緋し銭		16枚。	
128	銭	緋し銭		含む紹聖元宝。	
129	銅銭				
130	銅銭				
131	銅銭	雁首銭			
132	銅銭				
133	銅銭	寛永通宝			
134	鉄銭				
135	木製品	板材	24.2 3.7 0.5	片側縁が薄く作られている。表面に黒色の漆が塗られ部分的に金粉が残る。細い釘穴が4カ所認められ銅製の釘が使われていたものと見られる。	

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
136	木製品	板材	24.2 2.6 0.5	片側縁が薄く作られている。表面に黒色の漆が塗られ部分的に金粉が残る。細い釘穴が1カ所認められ銅製の釘が使われていたものと見られる。	
137	木製品	板材	24.4 2.7 0.6	片側縁が薄く作られている。表面に黒色の漆が塗られ部分的に金粉が残る。細い釘穴が2カ所認められ銅製の釘が使われていたものと見られる。	
138	木製品	板材	24.5 2.8 0.6	片側縁が薄く作られている。表面に黒色の漆が塗られ部分的に金粉が残る。細い釘穴が1カ所認められ銅製の釘が使われていたものと見られる。	
139	木製品	板材	24.2 2.8 0.6	片側縁が薄く作られている。表面に黒色の漆が塗られ部分的に金粉が残る。	
140	木製品	板材	23.9 2.4 0.5	両側縁が薄く作られややカーブしている。	
141	木製品	位牌か	11.4 (5.6) 4.1	八角形に加工された材が5枚重なり、上に行くに従い小さくなる。表面には漆が塗られていたものと見られ、最も厚みのある部分の正面には浮き彫りが見られる。	位牌基壇部分か。
142	亀甲製品	小ハゼ状製品	1.8 1.2 0.08	薄い板状の小ハゼ状を呈す。径1mm弱の小穴が1対見られる。縞状の文様。	亀甲か。

VI区3号建物(第154~158図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	在地系土器	皿	(10.2) 2.2 7.0	轆轤右回転。底部回転糸切り無調整。体部から口縁部は内湾して立ち上がる。見込みに明瞭な螺旋状凹線あり。	5と同じ土。
2	在地系土器	皿	(9.4) 2.3 (6.0)	轆轤回転方向不明。底部外面回転糸切り無調整。径に比して器高が高い。底部に明瞭な螺旋状凹線あり。	土は1・5に似る。
3	在地系土器	皿	- - 5.6	底部外面左回転糸切り無調整。底部内面周縁凹線状に窪む。	土は1・5に似る。
4	瀬戸・美濃陶器	灯明皿	8.2 1.7 4.2	全面に錆釉を施した後、底部外面を拭う。外面底部から体部回転篋削り。	口縁部油付着。
5	在地系土器	皿	(9.4) 2.1 (6.2)	轆轤左回転。底部外面糸切り無調整。体部から口縁部は内湾して立ち上がる。見込みに明瞭な螺旋状凹線あり。	1と同じ土。
6	在地系土器	皿	(7.0) 1.4 4.4	底部外面左回転糸切り無調整。底部内面周縁と中央は窪む。体部は外反気味に開く。	底部外面7と同じ不明墨書。7と同じ土。
7	在地系土器	皿	(7.0) 1.3 3.8	底部外面左回転糸切り無調整。底部内面周縁と中央は窪む。体部は外反気味に開く。	底部外面6と同じ不明墨書。6と同じ土。
8	在地系土器	皿	- - 3.6	底部右回転糸切り無調整。胎土緻密。底部内面周縁断面三角形形状に近い沈線を巡らす。	底部外面不明墨書。
9	在地系?土器	蓋	4.7 1.2 -	皿に比して硬質。花を象ったつまみを有する。外面に型離れを良くする光沢のある粉が残る。型作り。内面は篋削り。	天井部は墨が付着しているためか黒い。
10	肥前磁器	碗	9.9 5.1 4.2	外面雪輪梅樹文。高台内不明銘。	波佐見系
11	肥前磁器	碗	(10.6) 4.8 (4.0)	外面雪笹と梅樹文?見込み蛇の目刺し。	波佐見系
12	肥前磁器	碗	(7.8) 3.5 (3.0)	13の小型品。高台と周縁の圏線はない。貫入入る。	波佐見系。やや焼成不良で十分磁化していない。
13	肥前磁器	碗	9.9 5.3 4.2	外面二重網目文。内面網目文、見込み菊花状文。高台内不明銘。高台外と周縁に圏線。	波佐見系
14	瀬戸・美濃陶器	碗	(9.3) 5.7 4.6	内面から口縁部外面に粗い貫入の入る灰釉、高台内から体部外面に鉄釉。釉境に螺旋状凹線。	腰錆碗
15	肥前磁器	碗	(11.2) 7.3 (5.0)	外面東屋山水文。貫入入る。釉厚にムラがあり、ピンホール状に釉が掛からない場所が多数ある。	陶胎染付
16	肥前磁器	碗	- - 4.4	見込みコンニャク判による五弁花。高台脇にも染め付け。	大振りの筒形碗。
17	肥前磁器	皿	(21.0) 4.4 (12.5)	口縁部輪花に作る。内面扇と花卉文。外面唐草文。高台内は圏線内に「大明成化年製」であろう。	
18	瀬戸・美濃陶器	仏飯器	7.6 5.1 4.4	脚柱部から杯部内面鉄釉。脚裾部から脚内面無釉。貫入入る。	灰釉小杯と同じ胎土・釉調。
19	肥前磁器?	水滴	よこ6.5 たて3.5	上面は型による施文後に呉須を施す。残存部の外面は施釉。注ぎ口は大きい。底部内面に布痕残る。	
20	瀬戸・美濃陶器	双耳壺	6.8 10.2 6.2	外面から口縁部内面、やや透明感のある鉄釉。釉には灰が掛かる。口縁部無釉。耳は1カ所残るが、残存部から双耳と判断される。	
21	志戸呂陶器	灯明受け皿	8.2 2.1 4.5	内面から口縁部外面鉄泥を施す。受け部は高く、アーチ状の流入口を1カ所あける。外面底部から体部回転篋削り。	小型品。
22	志戸呂陶器	灯明受け皿	(7.5) 2.5 (4.7)	内面から口縁部外面鉄泥を施す。受け部は高い。流入口は残っていないが大きさから2カ所であろう。外面底部から体部回転篋削り。	
23	瀬戸・美濃陶器	灯明受け皿	8.4 1.6 4.2	全面に錆釉を施した後、底部外面を拭う。流入口は1カ所「U」字型。外面底部から体部回転篋削り。	底部外面同器種の重ね焼き痕。
24	瀬戸・美濃陶器	片口鉢		片口部片。細かい貫入の入る灰釉を施す。	
25	瀬戸・美濃陶器	鬘水入れ	13.3 3.8 12.8	底部外面を除き灰釉。外面2カ所に鉄絵具による型紙刷りで植物文を描く。貫入入る。	御深井。鉄絵は滲む。

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
26	堺・明石陶器	すり鉢	30.2 12.4 15.0	口縁部内面低く突き出す。片口部一カ所。体部外面外面から底部周縁削り。底部外面中央板状痕あり。底部内面から体部内面使用痕。片口部の反対側の口縁端部上面すり減る。	
27	志戸呂陶器	瓶		頸部下位から体部下位のみ残存。体部外面下位回転削り。外面頸部下位鉄軸、体部上位無軸、体部下位以下鉄泥を施す。	
28	在地系土器	鍋	(33.4) 12.0(18.0)	器形は鉢状を呈する。口縁部外方に屈曲し、上面は平坦面を作る。	底部周縁の屈曲部を除き、外面著しく煤付着。
29	在地系土器	焙烙		底部片。内面に菊花状押印。	
30	在地系土器	焙烙	(37.6) 5.5(35.0)	底部外面板状痕あり。体部外面煤付着。耳一カ所残存。	
31	在地系土器	焙烙	(41.2) 5.5 36.0	底部外面型作り痕。耳三カ所貼り付け。体部外面紐作り痕。体部外面下端型作り痕が圧痕状に窪む。	底部補修孔2対。
32	石製品	石臼(上)	径(36.0)高さ10.5	半分に割れている。挽き手取り付け部が付く。	粗粒輝石安山岩
33	石製品	石臼(下)	径35.0 高さ15.6	厚みがあり、ふくみは浅い。	粗粒輝石安山岩
34	石製品	石臼(上)	径36.8 高さ14.2	挽き手取り付け部が作られている。	粗粒輝石安山岩
35	石製品	石臼(下)	径37.8 高さ14.5	厚みがある。	粗粒輝石安山岩
36	石製品	硯	16.9 4.3 2.0	厚みがあり、縦長の形状。陸部分は主軸に沿って深く窪む。深さは海部より深い。	珪質粘板岩
37	石製品	凹石	22.6 20.0 -	扁平な円盤の上面に浅い窪みを穿っている。台石か。	二ッ岳石
38	石製品	凹石	15.4 18.8 -	中央部が大きく窪む。底は平らで柱の礎石として利用か。	粗粒輝石安山岩
39	石製品	砥石	11.4 2.1 2.8	両面使用、中央部が厚く両端が薄くなる。	砥沢石
40	石製品	砥石	(10.1) 2.6 2.9	2面使用、一端を欠く。断面方形で両端がやや薄くなる。	砥沢石
41	石製品	石臼(上)	径36.0 高さ10.2	挽き手取り付け部が大きく作られている。	粗粒輝石安山岩
42	石製品	石臼(下)	径37.0 高さ11.5	ふくみは浅く、軸受け穴はやや曲がっている。	粗粒輝石安山岩
43	石製品	砥石	8.7 3.2 2.9	1面使用、中央部厚く両端が薄くなる。製作痕残る。	砥沢石
44	石製品	砥石	9.0 2.3 1.9	小形品。4面使用、中央部が磨り減って細くなる。	砥沢石
45	銅製品	柄鏡	径18.3 0.2	柄部を欠、富士に三保の松原か、「天工政親」の銘	
46	鉄製品	蓋	径15.0 2.9	一部欠損。紐に取っ手の一部残る。	
47	鉄製品	鉞	25.3 3.6 0.9	刃部わずかに丸み、柄に木質部。	
48	鉄製品	火打ち金	5.0 2.6 0.7	両端を折り曲げて上で繋ぐ。	
49	銅製品	不明	(5.3) 1.8 -	柄の基部片か。	
50	銅製品	円盤状製品	径4.6 0.2	円形、長円形の透かし孔、爪を持つ。	
51	鉄製品	環状製品	5.9 3.2 0.7	8字状を呈す、断面円形。	
52	銅製品	環状製品	径(5.2) 0.1	薄い板状の環状製品。破損している。	
53	銅製品	煙管吸い口	(3.1) 1.3 -	火皿欠損。	
54	銅製品	煙管雁首	4.2 1.1 火皿1.6	首と肩部の境に稜を有す。羅宇竹残存。	
55	銅製品	煙管雁首	4.2 1.1 -	肩の部分は短い。	
56	銅製品	煙管雁首	5.4 1.1 -	小口部分を欠損。	
57	銅製品	煙管雁首	火皿径 2.1	火皿部分のみ、やや大形。	
58	銅製品	煙管雁首	4.2 1.1 火皿1.6	火皿一部欠損、羅宇竹残存。	
59	銅製品	煙管吸い口	(6.4) 1.2 -	断面6角形。	
60	銅製品	煙管吸い口	6.3 1.0 -	肩にわずかな膨らみ有す、羅宇竹残存。	
61	鉄製品	小柄	9.6 1.4 -	鞘部分。	
62	ガラス製品	小玉	径0.6 高さ0.5	白色であり透明感はない。小孔が貫通する。	
63	銅銭	寛永通宝			
64	銅銭				
65	銅銭				
66	銅銭				
67	銅銭	雁首銭			
68	銅銭	寛永通宝			
69	銅銭				
70	銅銭				
71	銅銭				
72	銅銭				
73	銅銭				
74	銅銭				
75	銅銭				
76	銅銭				
77	銅銭				
78	銅銭				
79	銅銭	雁首銭	径約1.9cm	火皿部分を潰す。	
80	銅銭	寛永通宝			
81	銅銭	破損品			
82	銅銭	破損品			
83	銅銭	破損品			

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
84	銅銭	破損品			
85	鉄銭			複数枚。	
86	鉄銭				
87	鉄銭				
88	鉄銭				
89	鉄銭				
90	鉄銭				
91	鉄銭				

VI区4号建物(第159図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	志戸呂陶器	灯明受け皿	11.0 2.6 5.6	口縁部外面から内面鉄泥。アーチ状流入部二カ所。底部外面から体部外面。回転筒削り。	

VI区5号建物(第159図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	肥前磁器	皿	13.9 3.3 7.8	体部内面簡略化した雪輪梅樹文?底部蛇の目軸剥ぎ。見込みコンニャク判による五弁花。	波佐見系。見込み軸の擦れあり。
2	肥前磁器	皿	14.5 3.1 8.0	体部内面簡略化した雪輪梅樹文?底部蛇の目軸剥ぎ。見込みコンニャク判による五弁花。	波佐見系
3	常滑陶器	甕	(44.0) - -	外面施釉。口縁部内外面に張り出す。外面端部は肥厚する。内面端部は欠損。	
4	石製品	砥石	(5.1) (5.6) 1.0	比較的大型品の板状剥離片。	珪質粘板岩

VI区6号建物(第160図)

番号	種類	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴・その他	備考
1	瀬戸・美濃陶器	片口鉢	21.7 12.8 10.8	片口部欠損。口縁部玉縁状をなす。口縁部内面から高台脇に鉛釉を施す。内面口縁部下は無釉薬。底部中央焼成後に丸穴を開ける。	植木鉢として再利用か。
2	在地系土器	火消壺	- - (21.0)	焙烙を反対にしたような器形。天井部外面に焙烙と同様な型作り痕残る。中央に摘みを貼り付ける。口縁部外面に型作り痕残るが殆どは回転撫でにより撫で消している。	
3	製作地不詳陶器	蓋	5.0 2.0 3.2	天井部外面に鉄釉を施す。内面中央はすり鉢状に抉る。	
4	常滑陶器	甕	54.8 64.8 19.0	外面施釉。口縁部内外面に張り出す。外面端部は肥厚する。完形品。	埋甕式の便槽として利用。
5	石製品	基石か	径 2.1 厚さ 0.5	灰黒色を呈し、研磨による整形。	粘板岩
6	在地系土器	焙烙		底部片。内面に「大板上」の押印。	
7	石製品	砥石	(5.7) (6.0) 1.6	1面使用、板状。	流紋岩
8	石製品	砥石	(6.7) 5.2 3.9	1面使用、断面長方形。	流紋岩
9	銅銭	寛永通宝			
10	銅銭	寛永通宝			
11	銅銭				
12	不明	雁首銭か			
13	銅銭				複数枚
14	鉄銭				複数枚
15	鉄銭				

VI区7号建物(第161図)

番号	種類	器種・器形	計測値	特徴・その他	備考
1	石製品	石臼(上)	径(36.0)高さ13.0	破損品、摩耗している。挽き手部破損。臼の形状は引き手部が直線的に付く。	粗粒輝石安山岩
2	石製品	砥石	(4.3) 4.4 2.4	3面使用、風化が著しい。	砥沢石
3	石製品	菰編み石	13.2 5.4 3.1	細長い川原石を利用。	粗粒輝石安山岩
4	石製品	菰編み石	12.5 6.0 3.2	細長い川原石を利用。	粗粒輝石安山岩
5	石製品	菰編み石	13.8 4.6 3.7	細長い川原石を利用。	石英閃緑岩
6	石製品	菰編み石	14.4 4.5 3.9	細長い川原石を利用。	粗粒輝石安山岩
7	石製品	菰編み石	13.6 5.5 3.6	細長い川原石を利用。	粗粒輝石安山岩
8	石製品	菰編み石	13.2 5.8 3.6	細長い川原石を利用。	石英閃緑岩